山元町文化財調査報告書第 22 集

合戦原遺跡

横穴墓 編

－東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅴ－

第１分冊【本文】

令 和 ４ 年 ３ 月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

巻頭図版１　合戦原遺跡 横穴墓群 全景

1. 38 号横穴墓(ST38) 線刻壁画［移設前］ 平成 27（2015）年 7 月撮影

2. 38 号横穴墓(ST38) 線刻壁画［移設後］ 平成 30（2018）年 11 月撮影 ※移設先:山元町歴史民俗資料館

巻頭図版２　合戦原遺跡　38 号横穴墓（ST38）　線刻壁画

巻頭図版3　合戦原遺跡 横穴墓出土 刀・馬具類

巻頭図版4　合戦原遺跡 横穴墓出土 土師器・須恵器

序　　文

平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災から、早１１年の歳月が流れました。この間、山元町内においては道路・鉄道の復旧や新市街地の整備等が着実に進み、被災地はすっかり新しい街に生まれ変わりました。しかし、未曽有の大災害の爪痕はあまりにも深く、真の復興は未だ道半ばであると認識しています。

震災ののち当教育委員会では、復興事業の進展に伴い数多くの発掘調査を手掛けてきました。本書および同時刊行の『山元町文化財調査報告書第 21 集』において成果を報告する合戦原遺跡の発掘調査もまた、震災復興事業のひとつである「宮城病院地区 防災集団移転促進事業・災害公営住宅建設事業」に際し、当教育委員会が実施したものです。本書には主として、古墳時代の横穴墓群についての調査成果を収めました。出土した土器類や金属製品は、地域の歴史を解明する上で極めて貴重な資料です。また、38 号横穴墓で発見した「線刻壁画」は、移設保存に成功したことで全国的にも注目を集めました。

現地調査に先立つ事前協議以来、報告書の刊行に至るまでの長い年月には、数多くの方々から御支援を賜りました。御協力くださいました関係機関ならびに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和４年３月

山元町教育委員会

教育長　菊池　卓郎

例　言

1　本書は、宮城県亘理郡山元町高瀬字合戦原地内に所在する合戦原遺跡(宮城県遺跡登録番号 14014)のうち、横穴墓を検出した「横穴墓地区（A 区)」の発掘調査報告書である。「横穴墓地区」を含む今回の業務全体に係る行政対応の経過と確認調査の詳細については『合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編」に集約した。

2　合戦原遺跡「横穴墓地区（A 区)」の発掘調査報告書については 5 分冊構成とし、本書は A 区の調査経過と A 区西側地区（A-2 区）で検出した横穴墓（1～34 号墓）の遺構・出土遺物の詳細を収録した**「第１分冊（本文１）」**にあたる。

3　今回の発掘調査は、東日本大震災からの復興事業「宮城病院地区 防災集団移転促進事業･災害公営住宅建設事業」（事業面積 93,155.20 ㎡)に伴い、復興交付金を財源として実施した。財源の内訳は、本発掘調査に先立つ確認調査が「復興交付金 A-4 埋蔵文化財発掘調査事業」、本発掘調査等が「復興交付金 D-4 災害公営住宅整備事業」および「復興交付金 D-23 防災集団移転促進事業」、整理・報告書作成が、D-4・D-23 事業から切り分けた上で、改めて「復興交付金事業 A-4 埋蔵文化財発掘調査事業」である。確認調査、本発掘調査、整理･報告書作成業務は、事業主体者である山元町から山元町教育委員会が執行委任を受け、生涯学習課が担当した。

4　当業務において記録保存調査として実施した本発掘調査の総面積は 12,990 ㎡である。調査は平成 26 年度から平成 28 年度にかけて実施した。本書で報告するのは、5 地区からなる発掘区のうち「製鉄地区」4 地区 7,330 ㎡(B 区:3,480 ㎡、C 区:2,510 ㎡、D 区:650 ㎡、E 区:690 ㎡)を除く「横穴墓地区」(A 区:5,660 ㎡)の本発掘調査の成果である。

5　現地調査および整理･報告書作成業務は、宮城県教育庁文化財課(平成 29 年度までは「文化財保護課」)の御協力の下、山元町教育委員会生涯学習課が実施した。事前協議から本書刊行に至る本書収載部分の業務(「横穴墓地区（A 区）のみ」)に携わった宮城県職員、支援職員のお名前と町教育委員会の職員名、ならびに担当部分と担当年度を以下に掲げる(職名は当時)。業務全体の調査体制と調査経過の詳細は本書第 2 章に掲載した。

宮城県教育庁文化財保護課(現「文化財課」)職員

大友 邦彦 主任主査:A 区本発掘調査（平成 26 年度)
髙橋 洋彰 技師:A 区本発掘調査／A 区基礎整理(平成 27～28 年度)
下山(鈴木) 貴生 技師:A 区本発掘調査／遺物実測／本書第 3 分冊執筆(平成 28 年度・令和 2～3 年度)
廣谷 和也 技術主査:遺物実測/本書第 3 分冊執筆（平成 29～令和元年度・令和 3 年度)
山口 貴久 技師:遺物実測(平成 29 年度)
高橋 透 技師:遺物実測(平成 30 年度)
古川 一明 技術主査：遺物実測/本書第 3 分冊執筆(令和元年度・令和 3 年度)
熊谷 亮介 技師:遺物実測(令和元～2 年度)
古田 和誠 技術主査:遺物実測(令和 2 年度)

東北歴史博物館職員

及川 規　上席研究員:線刻壁画移設/金属製品保存処理(平成 27～令和 3 年度)
芳賀 文絵 学芸員: 線刻壁画移設/金属製品保存処理(平成 27～令和元年度)
森谷 朱 学芸員: 金属製品保存処理/文化財収蔵庫環境調査(平成 29～令和 3 年度)

宮城県経由出張派遣職員(他地域から宮城県に派遣され山元町支援を担当)

長橋 至 技術主幹(山形県):A 区本発掘調査／A 区基礎整理（平成 26～28 年度)
東影 悠 技師(奈良県)：A 区本発掘発調査／A 区基礎整理（平成 26 年度)
飯坂 盛泰 主任主査(新潟県): A 区本発掘調査／A 区基礎整理（平成 26～28 年度)

山元町への直接派遣職員

森 秀之 副参事(恵庭市):事前協議･確認調査(平成 25 年度)

草場 啓一 副参事(筑紫野市)： 確認調査(平成 25 年度)
小鹿野 亮 副参事(筑紫野市)：確認調査(平成 25 年度)
日下 和寿 学芸員(白石市)：確認調査支援(平成 25 年度)
中村 昇平 副参事(春日市)：現地説明会支援(平成 26 年度)
木下 晴一 技術副参事(香川県)：線刻壁画保存支援／現地説明会支援(平成 27 年度)
城門 義廣 技術主査(福岡県)：線刻壁画保存対応／現地説明会支援／金属製品整理(平成 27～28 年度)
熊代 昌之 副参事(久留米市)： 線刻壁画保存支援／現地説明会支援(平成 27 年度)
星野 惠美 技術副参事(福岡市)：現地説明会支援／線刻壁画保存支援(平成 28 年度)
瀧本 正志 副参事(神奈川県)：文化財収蔵庫建設(平成 29～令和 3 年度) ／金属製品整理(平成 29 年度)

山元町教育委員会生涯学習課

齋藤 三郎 課長：全体調整(平成 24～28 年度)
佐山 学 課長：全体調整(平成 29～令和 3 年度)
武田 賢一 生涯学習班長：全体調整(平成 24～25 年度)
阿部 正憲 生涯学習班長：全体調整(平成 26～29 年度)
伊藤 和重 生涯学習班長：全体調整(平成 30～令和元年度)
伊藤 孝浩 生涯学習班長：全体調整(令和 2～3 年度)
山田 隆博 主査：確認調査／事前協議・全体調整／A 区本発掘調査／線刻壁画保存対応／遺物整理・実測／本書執筆・編集全般(平成 24～令和 3 年度)
丹野 修太 主事(任期付職員)：事前協議／確認調査・工事立会(平成 24～26 年度)
小淵 忠司 副参事(任期付職員)：本書執筆・編集(平成 28～令和 3 年度)
佐伯 奈弓 補助員(臨時職員/会計年度任用職員)：遺物基礎整理全般／遺物関係データ全般作成／遺構断面図編集／本書編集(平成 26～令和 3 年度)
千尋 美紀 補助員(臨時職員)： A 区本発掘調査補助／A 区基礎整理補助 (平成 27～28 年度)

6 本書の執筆は、現地調査担当者の所見等を基に、整理を担当した職員の協議を経た上で分担した。第 2 分冊第 4 章、第 3 分冊、第 5 分冊の一部の原稿については、外部機関等の方々に原稿執筆を依頼した。山元町教育委員会での内部校正においては、新沼寿恵、皆川清美 (いずれも山元町歴史民俗資料館 会計年度任用職員) の協力を得た。内部校正を経た上での補訂および編集作業は、山田、小淵、佐伯(いずれも山元町教育委員会生涯学習課)が行った。原稿の執筆分担については、各分冊の例言に記した。

本書(第 1 分冊)の執筆分担は以下のとおりである。

【第1分冊　本文1　執筆分担】

第1章　第1・2節　原案山田・小淵／執筆：山田
　　第3節 『山元町文化財調査報告書第21集 合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編』を転載
第2章　第1節1・2、第2節1　原案小淵／執筆：山田
　　第2節2 執筆：山田
第3章　執筆：山田

7 本書に係る各種基準、業務委託の詳細等については第3章第1節および第4章にまとめた。

8 確認調査、本発掘調査、整理・報告書作成業務に際し、上記 5 に記載した支援職員のほか、次の方々や諸機関から御指導・御協力を賜った(敬称略、五十音順、「横穴墓地区」のみ)。なお、線刻壁画の移設に際し御指導・御協力をいただいた方々は第 5 分冊に掲載した。

足立 佳代、荒 淑人、荒木 臣紀、池上 悟、諫早 直人、稲田 健一、岩橋 由季、惠美 昌之、近江 俊秀、大賀 克彦、大竹 憲治、大平 秀一、小川 長導、奥山 誠義、加来 孝代、蟹澤 聰史、川口 亮、川畑 純、菊地 芳朗、黒済 和彦、日下 和寿、坂口 圭太郎、佐々木 理、佐藤 敏幸、佐藤 渉、菅原 祥夫、鈴木 一有、鈴木 朋子、高倉 洋彰、高島 好一、高橋 栄一、辰巳 和弘、辻 秀人、長島 栄一、永井 宏幸、西嶋 剛広、

西村 力、禰宜田 佳男、畠山 未津留、早川 麗司、福田 匡朗、藤沢 敦、藤田 祐、松崎 元樹、水ノ江 和同、宮代 栄一、宮田 将寛、村田 晃一、村田 文夫、柳澤 一男、横須賀 倫達、吉野 高光、和田 理啓
復興庁、復興庁宮城復興局、文化庁、東京国立博物館、独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所、独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、熊本県立装飾古墳館、宮城県教育庁文化財課、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、東北大学総合学術博物館、柴田町教育委員会、南相馬市教育委員会、独立行政法人 国立病院機構 宮城病院、株式会社オオバ、山元町震災復興整備課(現「建設課」)

9 本文中に示した方位は座標北であり、座標値は世界測地系に基づく平面直角座標Ⅹ系による。なお、使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている。

10 本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000地形分類図「角田」をもとに作成した。また、第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。

11 調査記録および出土遺物は、山元町教育委員会が保管している。

12 本書の刊行に先立って調査成果の一部を現地説明会等において公開しているが、それらと本書との間で内容が異なる場合には、すべて本書が優先する。

13 今回の調査における「製鉄地区(B～E区)」および確認調査地区(F～H区)の発掘調査報告書は、『山元町文化財調査報告書第21集 合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編』として刊行した。併せて参照されたい。

14 本文中の註および引用・参考文献については各節または項の末尾に掲載した。

15 報告書抄録は第3分冊（総括）および第5分冊（附編:線刻壁画の保存）の巻末に収録した。

総　目　次

第１分冊　［本文１］　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・本分冊

巻頭図版・序文・例言・総目次・目次・挿図目次・表目次

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と地理的環境　　第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

第３節　合戦原遺跡の過去の調査成果

第２章　調査の概要と経過

第１節　調査に至る経緯　　第２節　調査体制と調査の経過

第３章　合戦原遺跡横穴墓地区（A 区）の調査成果

第１節　調査方法と報告方針　　第２節　A 区の基本層序

第３節　検出した遺構と出土遺物

１ 横穴墓(ST1～34)

第２分冊　［本文２］

例言・総目次・目次・挿図目次・表目次

第３章　合戦原遺跡横穴墓地区（A 区）の調査成果

第３節　検出した遺構と出土遺物

１ 横穴墓(ST35～53・54)　　２ 土坑・性格不明遺構・遺構外出土遺物

第４章　自然科学分析・金属製品保存処理

第１節　業務の概要

第２節　合戦原遺跡 A 区における放射性炭素年代（AMS 測定）

第３節　合戦原遺跡横穴墓から出土した金属製品付属木製品樹種同定

第４節　合戦原遺跡横穴墓出土ガラス玉の分析

第５節　合戦原遺跡横穴墓の３次元計測について

第６節　合戦原遺跡出土金属製品の保存処理について

第３分冊　［総括］

例言・総目次・目次・挿図目次・表目次

第５章　総括

はじめに

第１節　出土遺物-土器類-　　第２節　出土遺物-金属製品-

第３節　出土遺物-その他-　　第４節　遺構

第５節　まとめ

第４分冊　［写真図版］

第５分冊　［附編:線刻壁画の保存］

第１分冊　目次

巻頭図版

序文

例言・総目次・目次・挿図目次・表目次

第１章　遺跡の概要 …… 1

第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 1

第３節　合戦原遺跡の過去の調査成果 …… 10

第２章　調査の概要と経過 …… 13

第１節　調査に至る経緯 …… 13

１　震災復興事業と合戦原遺跡 …… 13

２　事前協議の経過 …… 13

第２節　調査体制と調査の経過 …… 15

１　調査体制 …… 15

２　合戦原遺跡Ａ区 現地調査の経過 …… 16

３　合戦原遺跡Ａ区 整理･報告書作成の経過 …… 21

第３章　合戦原遺跡横穴墓地区（Ａ区）の調査成果 …… 23

第１節　調査方法と報告方針 …… 23

１　現地調査の方法 …… 23

２　出土遺物・調査記録の整理方法 …… 24

３　線刻壁画の移設保存 …… 27

４　調査成果の報告方針 …… 28

第２節　Ａ区の基本層序 …… 38

第３節　検出した遺構と出土遺物 …… 41

１　横穴墓　(ST1～34) …… 52

1 号横穴墓（ST1）… 55～61　2 号横穴墓（ST2）… 62～74　3 号横穴墓（ST3）… 75～80

4 号横穴墓（ST4）… 81～85　5 号横穴墓（ST5）… 86～91　6 号横穴墓（ST6）… 91～111

7 号横穴墓（ST7）…112～126　8 号横穴墓（ST8）…127～134　9 号横穴墓（ST9）…135～149

10 号横穴墓（ST10）…150～163　11 号横穴墓（ST11）…164～173　12 号横穴墓（ST12）…174～200

13 号横穴墓（ST13）…201～216　14 号横穴墓（ST14）…217～224　15 号横穴墓（ST15）…225～226

16 号横穴墓（ST16）…227～235　17 号横穴墓（ST17）…236～250　18 号横穴墓（ST18）…251～269

19 号横穴墓（ST19）…270～281　20 号横穴墓（ST20）…282～287　21 号横穴墓（ST21）…288～298

22 号横穴墓（ST22）…299～300　23 号横穴墓（ST23）…301～303　24 号横穴墓（ST24）…304～305

25 号横穴墓（ST25）…306～316　26 号横穴墓（ST26）…317～321　27 号横穴墓（ST27）…322～337

28 号横穴墓（ST28）…338～342　29 号横穴墓（ST29）…343～350　30 号横穴墓（ST30）…351～368

31 号横穴墓（ST31）…369～385　32 号横穴墓（ST32）…386～394　33 号横穴墓（ST33）…395～396

34 号横穴墓（ST34）…397～409

第１分冊　　挿　図　目　次

第　1　図　山元町と合戦原遺跡の位置 …… 1
第　2　図　山元町内の地形分類…… 2
第　3　図　山元町内の遺跡分布と津波浸水範囲…… 4
第　4　図　遺跡の範囲と発掘区の位置 …… 18
第　5　図　確認調査トレンチ配置図(全体) …… 19
第　6　図　確認調査トレンチ配置図(南西部・南部) …… 19
第　7　図　本書で使用する横穴墓の部位名称と遺構計測基準 29
第　8　図　本書で使用する横穴墓玄室天井形の分類基準 …… 30
第　9　図　土師器・須恵器凡例図 …… 33
第　10　図　金属製品 部位名称図(1) …… 34
第　11　図　金属製品 部位名称図(2) …… 35
第　12　図　金属製品 部位名称図(3) …… 36
第　13　図　合戦原遺跡 A 区の位置と基本層序 …… 39
第　14　図　合戦原遺跡 A 区基本層序参考写真 …… 40
第　15　図　合戦原遺跡 A 区遺構配置図(全体図) …… 43
第　16　図　合戦原遺跡 A 区遺構配置図(1) …… 45
第　17　図　合戦原遺跡 A 区遺構配置図(2) …… 47
第　18　図　合戦原遺跡 A 区遺構配置図(3) …… 49
第　19　図　合戦原遺跡 A 区遺構配置図(4) …… 51
第　20　図　合戦原遺跡 A 区横穴墓分布図 …… 52
第　21　図　ST1 横穴墓 土層断面図 …… 58
第　22　図　ST1 横穴墓 遺物出土状況図 …… 58
第　23　図　ST1 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 59
第　24　図　ST1 横穴墓 出土遺物 …… 61
第　25　図　ST2 横穴墓 遺物出土状況図 …… 67
第　26　図　ST2 横穴墓 土層断面図 …… 68
第　27　図　ST2 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 69
第　28　図　ST2 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 71
第　29　図　ST2 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 72
第　30　図　ST2 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 73
第　31　図　ST2 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 74
第　32　図　ST3 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 77
第　33　図　ST3 横穴墓 土層断面図 …… 78
第　34　図　ST3 横穴墓 出土遺物 …… 79
第　35　図　ST3 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 80
第　36　図　ST4 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 83
第　37　図　ST4 横穴墓 土層断面図 …… 84
第　38　図　ST4 横穴墓 出土遺物 …… 85
第　39　図　ST5 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 89
第　40　図　ST5 横穴墓 土層断面図 …… 90
第　41　図　ST5 横穴墓 遺物出土状況図 …… 90
第　42　図　ST5 横穴墓 出土遺物 …… 91
第　43　図　ST6 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 97
第　44　図　ST6 横穴墓玄室 線刻壁画 …… 99
第　45　図　ST6 横穴墓 土層断面図 …… 101
第　46　図　ST6 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別３層①－ 102
第　47　図　ST6 横穴墓 遺物出土状況図(2) －大別３層②－ 103
第　48　図　ST6 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 104
第　49　図　ST6 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 105
第　50　図　ST6 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 106
第　51　図　ST6 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 107
第　52　図　ST6 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 108
第　53　図　ST6 横穴墓 出土遺物(5) －土器類－ …… 109
第　54　図　ST6 横穴墓 出土遺物(6) －土器類・玉製品－ …… 110
第　55　図　ST6 横穴墓 出土遺物(7) －金属製品－ …… 111
第　56　図　ST7 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 117
第　57　図　ST7 横穴墓 土層断面図 …… 119
第　58　図　ST7 横穴墓 遺物出土状況図 …… 120
第　59　図　ST7 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 121
第　60　図　ST7 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 122
第　61　図　ST7 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 123
第　62　図　ST7 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 124
第　63　図　ST7 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 125
第　64　図　ST7 横穴墓 出土遺物(5) －土器類・金属製品－ 126
第　65　図　ST8 横穴墓 土層断面図 …… 130
第　66　図　ST8 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 131
第　67　図　ST8 横穴墓 遺物出土状況図 …… 133
第　68　図　ST8 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 133
第　69　図　ST8 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 134
第　70　図　ST9 横穴墓 土層断面図 …… 140
第　71　図　ST9 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 141
第　72　図　ST9 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別１層－… 143
第　73　図　ST9 横穴墓 遺物出土状況図(2)
－大別３層・玄室底面－ …… 144
第　74　図　ST9 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 145
第　75　図　ST9 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 146
第　76　図　ST9 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 147
第　77　図　ST9 横穴墓 出土遺物(3) －玉製品－ …… 148
第　78　図　ST9 横穴墓 出土遺物(4) －金属製品－ …… 149
第　79　図　ST10 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 155
第　80　図　ST10 横穴墓 土層断面図 …… 156
第　81　図　ST10 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別１層－ 157
第　82　図　ST10 横穴墓 遺物出土状況図(2)
－大別２層・玄室底面－ …… 158
第　83　図　ST10 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 159
第　84　図　ST10 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 160
第　85　図　ST10 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 161
第　86　図　ST10 横穴墓 出土遺物(3) －土器類・金属製品－ 162
第　87　図　ST10 横穴墓 出土遺物(4) －玉製品－ …… 163
第　88　図　ST11 横穴墓 土層断面図 …… 168
第　89　図　ST11 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 169
第　90　図　ST11 横穴墓 遺物出土状況図 …… 171

第 91 図　ST11 横穴墓 出土遺物 …… 173
第 92 図　ST12 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 181
第 93 図　ST12 横穴墓 土層断面図 …… 183
第 94 図　ST12 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別 1 層－… 185
第 95 図　ST12 横穴墓 遺物出土状況図(2)
－大別 3・5 層－ …… 186
第 96 図　ST12 横穴墓 遺物出土状況図(3)
－大別 5 層・玄室底面－ …… 187
第 97 図　ST12 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図(1) …… 188
第 98 図　ST12 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図(2) …… 189
第 99 図　ST12 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 190
第 100 図　ST12 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 191
第 101 図　ST12 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 192
第 102 図　ST12 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 193
第 103 図　ST12 横穴墓 出土遺物(5) －土器類－ …… 194
第 104 図　ST12 横穴墓 出土遺物(6) －土器類－ …… 195
第 105 図　ST12 横穴墓 出土遺物(7) －土器類－ …… 196
第 106 図　ST12 横穴墓 出土遺物(8) －土器類・玉製品－… 197
第 107 図　ST12 横穴墓 出土遺物(9) －玉製品－ …… 198
第 108 図　ST12 横穴墓 出土遺物(10) －玉製品－ …… 199
第 109 図　ST12 横穴墓 出土遺物(11) －金属製品－ …… 200
第 110 図　ST13 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 207
第 111 図　ST13 横穴墓 土層断面図 …… 209
第 112 図　ST13 横穴墓 玄室壁面の棒状鉄製品状況図 …… 211
第 113 図　ST13 横穴墓 遺物出土状況図 …… 213
第 114 図　ST13 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 214
第 115 図　ST13 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 215
第 116 図　ST13 横穴墓 出土遺物(2)
－土器類・土製品・金属製品－ …… 216
第 117 図　ST14 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 220
第 118 図　ST14 横穴墓 土層断面図 …… 221
第 119 図　ST14 横穴墓 遺物出土状況図 …… 223
第 120 図　ST14 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 223
第 121 図　ST14 横穴墓 出土遺物(2) －玉製品・金属製品－ 224
第 122 図　ST15 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 226
第 123 図　ST15 横穴墓 出土遺物 …… 226
第 124 図　ST16 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 230
第 125 図　ST16 横穴墓 遺物出土状況図 …… 231
第 126 図　ST16 横穴墓 出土遺物(1)
－土器類・玉製品・石製品－ …… 232
第 127 図　ST16 横穴墓 出土遺物(2) －金属製品－ …… 233
第 128 図　ST16 横穴墓 出土遺物(3) －金属製品－ …… 234
第 129 図　ST16 横穴墓 出土遺物(4) －金属製品－ …… 235
第 130 図　ST17 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 240
第 131 図　ST17 横穴墓 土層断面図 …… 241
第 132 図　ST17 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 243
第 133 図　ST17 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別 1 層－… 244
第 134 図　ST17 横穴墓 遺物出土状況図(2)
－大別 2・3 層－ …… 245
第 135 図　ST17 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 246
第 136 図　ST17 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 247
第 137 図　ST17 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 248
第 138 図　ST17 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 249
第 139 図　ST17 横穴墓 出土遺物(5) －土器類－ …… 250
第 140 図　ST18 横穴墓 土層断面図 …… 256
第 141 図　ST18 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 257
第 142 図　ST18 横穴墓 玄室壁面の棒状鉄製品状況図 …… 259
第 143 図　ST18 横穴墓玄室 線刻壁画 …… 260
第 144 図　ST18 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別 2 層－… 262
第 145 図　ST18 横穴墓 遺物出土状況図(2) －大別 4 層－… 263
第 146 図　ST18 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 263
第 147 図　ST18 横穴墓 遺物出土状況図(3) －大別 6 層－… 264
第 148 図　ST18 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 265
第 149 図　ST18 横穴墓 出土遺物(2) －土器類・金属製品－ 266
第 150 図　ST18 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 267
第 151 図　ST18 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 268
第 152 図　ST18 横穴墓 出土遺物(5) －土器類・金属製品－ 269
第 153 図　ST19 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 273
第 154 図　ST19 横穴墓 土層断面図 …… 275
第 155 図　ST19 横穴墓 玄室壁面の棒状鉄製品状況図 …… 276
第 156 図　ST19 横穴墓 遺物出土状況図(1) －玄室底面－… 276
第 157 図　ST19 横穴墓 遺物出土状況図(2) －大別 1 層－… 277
第 158 図　ST19 横穴墓 出土遺物(1) －玉製品・金属製品－· 278
第 159 図　ST19 横穴墓 出土遺物(2) －金属製品－ …… 279
第 160 図　ST19 横穴墓 出土遺物(3) －金属製品－ …… 280
第 161 図　ST19 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 281
第 162 図　ST20 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 285
第 163 図　ST20 横穴墓 遺物出土状況図 …… 286
第 164 図　ST20 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 286
第 165 図　ST20 横穴墓 出土遺物 …… 287
第 166 図　ST21 横穴墓 土層断面図 …… 292
第 167 図　ST21 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 293
第 168 図　ST21 横穴墓 遺物出土状況図 …… 295
第 169 図　ST21 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 297
第 170 図　ST21 横穴墓 出土遺物(2) －玉製品・金属製品－· 298
第 171 図　ST22 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 300
第 172 図　ST23 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 302

第 173 図　ST23 横穴墓 出土遺物 …… 303
第 174 図　ST24 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 305
第 175 図　ST25 横穴墓 土層断面図 …… 310
第 176 図　ST25 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 311
第 177 図　ST25 横穴墓 遺物出土状況図 …… 312
第 178 図　ST25 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 313
第 179 図　ST25 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 314
第 180 図　ST25 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 315
第 181 図　ST25 横穴墓 出土遺物(4) －土器類・金属製品－ 316
第 182 図　ST26 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 319
第 183 図　ST26 横穴墓 土層断面図 …… 320
第 184 図　ST26 横穴墓 出土遺物 …… 321
第 185 図　ST27 横穴墓 土層断面図 …… 326
第 186 図　ST27 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 327
第 187 図　ST27 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別 1 層－… 330
第 188 図　ST27 横穴墓 遺物出土状況図(2) －大別 3 層－… 331
第 189 図　ST27 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 332
第 190 図　ST27 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 333
第 191 図　ST27 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 334
第 192 図　ST27 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 335
第 193 図　ST27 横穴墓 出土遺物(4) －土器類・金属製品－ 336
第 194 図　ST27 横穴墓 出土遺物(5) －金属製品－ …… 337
第 195 図　ST28 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 340
第 196 図　ST28 横穴墓 土層断面図 …… 341
第 197 図　ST28 横穴墓 遺物出土状況図 …… 342
第 198 図　ST28 横穴墓 出土遺物 …… 342
第 199 図　ST29 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 346
第 200 図　ST29 横穴墓 土層断面図 …… 347
第 201 図　ST29 横穴墓 遺物出土状況図 …… 348
第 202 図　ST29 横穴墓 出土遺物(1) －土器類・金属製品－ 349
第 203 図　ST29 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 350
第 204 図　ST30 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 353
第 205 図　ST30 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 357
第 206 図　ST30 横穴墓 土層断面図 …… 359
第 207 図　ST30 横穴墓 遺物出土状況図(1)
－大別 1・2 層－ …… 361
第 208 図　ST30 横穴墓 遺物出土状況図(2)
－大別 3・4 層、玄室底面－ …… 362
第 209 図　ST30 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 363
第 210 図　ST30 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 364
第 211 図　ST30 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 365
第 212 図　ST30 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 366
第 213 図　ST30 横穴墓 出土遺物(5) －土器類・玉製品－ … 367
第 214 図　ST30 横穴墓 出土遺物(6) －金属製品－ …… 368
第 215 図　ST31 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 373
第 216 図　ST31 横穴墓 土層断面図 …… 374
第 217 図　ST31 横穴墓 遺物出土状況図(1) －大別 1 層－… 375
第 218 図　ST31 横穴墓 出土遺物(1) －製鉄関連遺物－ …… 375
第 219 図　ST31 横穴墓 遺物出土状況図(2) －大別 2 層－… 376
第 220 図　ST31 横穴墓 遺物出土状況図(3) －大別 3 層－… 377
第 221 図　ST31 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図(1) …… 378
第 222 図　ST31 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図(2) …… 379
第 223 図　ST31 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 380
第 224 図　ST31 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 381
第 225 図　ST31 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 382
第 226 図　ST31 横穴墓 出土遺物(5) －土器類－ …… 383
第 227 図　ST31 横穴墓 出土遺物(6) －土器類－ …… 384
第 228 図　ST31 横穴墓 出土遺物(7) －金属製品－ …… 385
第 229 図　ST32 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 390
第 230 図　ST32 横穴墓 土層断面図 …… 391
第 231 図　ST32 横穴墓 遺物出土状況図 …… 393
第 232 図　ST32 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 393
第 233 図　ST32 横穴墓 出土遺物 …… 394
第 234 図　ST33 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、
土層断面図 …… 396
第 235 図　ST34 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図 …… 402
第 236 図　ST34 横穴墓 土層断面図 …… 403
第 237 図　ST34 横穴墓 遺物出土状況図 …… 404
第 238 図　ST34 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図 …… 405
第 239 図　ST34 横穴墓 出土遺物(1) －土器類－ …… 405
第 240 図　ST34 横穴墓 出土遺物(2) －土器類－ …… 406
第 241 図　ST34 横穴墓 出土遺物(3) －土器類－ …… 407
第 242 図　ST34 横穴墓 出土遺物(4) －土器類－ …… 408
第 243 図　ST34 横穴墓 出土遺物(5)
－土器類・玉製品・金属製品－ …… 409

第１分冊　　表　目　次

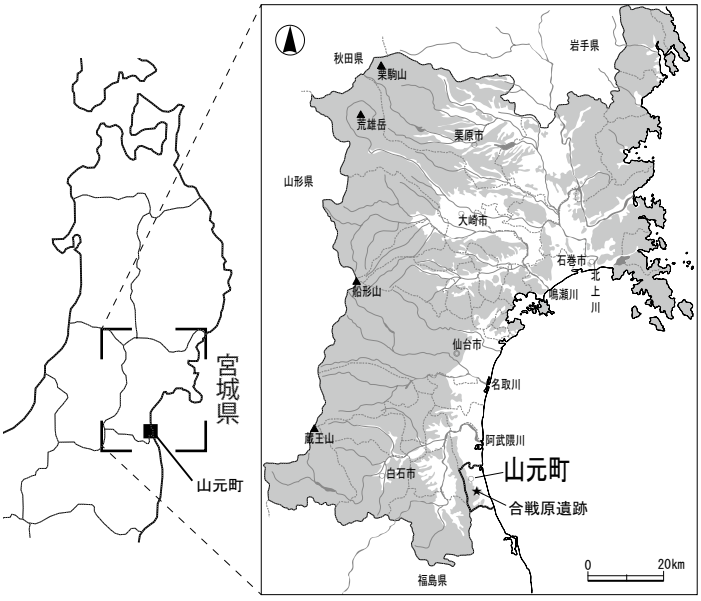
第　1　表　山元町遺跡一覧…… 5
第　2　表　山元町内遺跡の主な発掘調査成果 …… 9
第　3　表　山元町を支援した埋蔵文化財専門職員 …… 15
第　4　表　合戦原遺跡の調査体制(平成24～28年度) …… 16
第　5　表　合戦原遺跡の調査体制(平成29～令和３年度) …… 17
第　6　表　合戦原遺跡平成25～28年度確認調査一覧 …… 17
第　7　表　合戦原遺跡Ａ区の本発掘調査の体制と作業分担内容 22
第　8　表　合戦原遺跡横穴墓地区(Ａ区)出土遺物一覧(1) …… 41
第　9　表　合戦原遺跡横穴墓地区(Ａ区)出土遺物一覧(2) …… 42
第１０表　合戦原遺跡Ａ区 横穴墓(ST)一覧 …… 53
第１１表　ST1 横穴墓 出土遺物一覧 …… 57
第１２表　ST2 横穴墓 出土遺物一覧 …… 66
第１３表　ST3 横穴墓 出土遺物一覧 …… 78
第１４表　ST4 横穴墓 出土遺物一覧 …… 85
第１５表　ST5 横穴墓 出土遺物一覧 …… 91
第１６表　ST6 横穴墓 出土遺物一覧 …… 96
第１７表　ST7 横穴墓 出土遺物一覧 …… 116
第１８表　ST8 横穴墓 出土遺物一覧 …… 129
第１９表　ST9 横穴墓 出土遺物一覧 …… 139
第２０表　ST10 横穴墓 出土遺物一覧 …… 154
第２１表　ST11 横穴墓 出土遺物一覧 …… 172
第２２表　ST12 横穴墓 出土遺物一覧(1) …… 178
第２３表　ST12 横穴墓 出土遺物一覧(2) …… 179
第２４表　ST13 横穴墓 出土遺物一覧 …… 206
第２５表　ST14 横穴墓 出土遺物一覧 …… 222
第２６表　ST16 横穴墓 出土遺物一覧 …… 232
第２７表　ST17 横穴墓 出土遺物一覧 …… 242
第２８表　ST18 横穴墓 出土遺物一覧 …… 261
第２９表　ST19 横穴墓 出土遺物一覧 …… 272
第３０表　ST20 横穴墓 出土遺物一覧 …… 284
第３１表　ST21 横穴墓 出土遺物一覧 …… 296
第３２表　ST22 横穴墓 出土遺物一覧 …… 300
第３３表　ST23 横穴墓 出土遺物一覧 …… 302
第３４表　ST25 横穴墓 出土遺物一覧 …… 309
第３５表　ST26 横穴墓 出土遺物一覧 …… 320
第３６表　ST27 横穴墓 出土遺物一覧 …… 329
第３７表　ST28 横穴墓 出土遺物一覧 …… 339
第３８表　ST29 横穴墓 出土遺物一覧 …… 345
第３９表　ST30 横穴墓 出土遺物一覧 …… 356
第４０表　ST31 横穴墓 出土遺物一覧 …… 374
第４１表　ST32 横穴墓 出土遺物一覧 …… 392
第４２表　ST34 横穴墓 出土遺物一覧 …… 401

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東端に位置し、地理的には仙台平野の南端に当たる(第 1 図)。町域は南北約 10km、東西約 5km の長方形を呈する。町の西辺には、宮城･福島県境で二つに枝分かれした阿武隈山地の東支脈が南北に連なり、東辺は太平洋に面している。町域西半は、阿武隈山地に源を発する山麓丘陵地ならびに小河川により開析された櫛状の谷地形となり、谷中平野が形成されている。その東方に広がる沖積地を挟んで、沿岸部には 4 列の浜堤(第Ⅱ浜堤列･第Ⅲa～c 浜堤列)が海岸線に平行する(伊藤 2006、藤本･松本 2012)。

合戦原遺跡(宮城県遺跡登録番号 14014)は、町域のほぼ中央に位置し、海岸線からは約 2.5km 西方の山麓丘陵地に立地する(第 2 図)。遺跡の範囲は東西約 400m､南北約 800m に及ぶ。調査前の時点では大部分が国立病院機構 宮城病院の敷地内で､その南側には県立山元支援学校や山元町体育文化センター等が立ち並び､平坦に造成されている。さらに南側は谷地形で､水田として利用されている。一方､遺跡範囲の北部から西端部にかけては山林で､丘陵地形が残存するが､その東端は南北に走る国道 6 号線によって切土されている。遺跡範囲の標高は､南端で約 11m､西端中央の丘陵頂部で約 53m を測る。



第１図　山元町と合戦原遺跡の位置

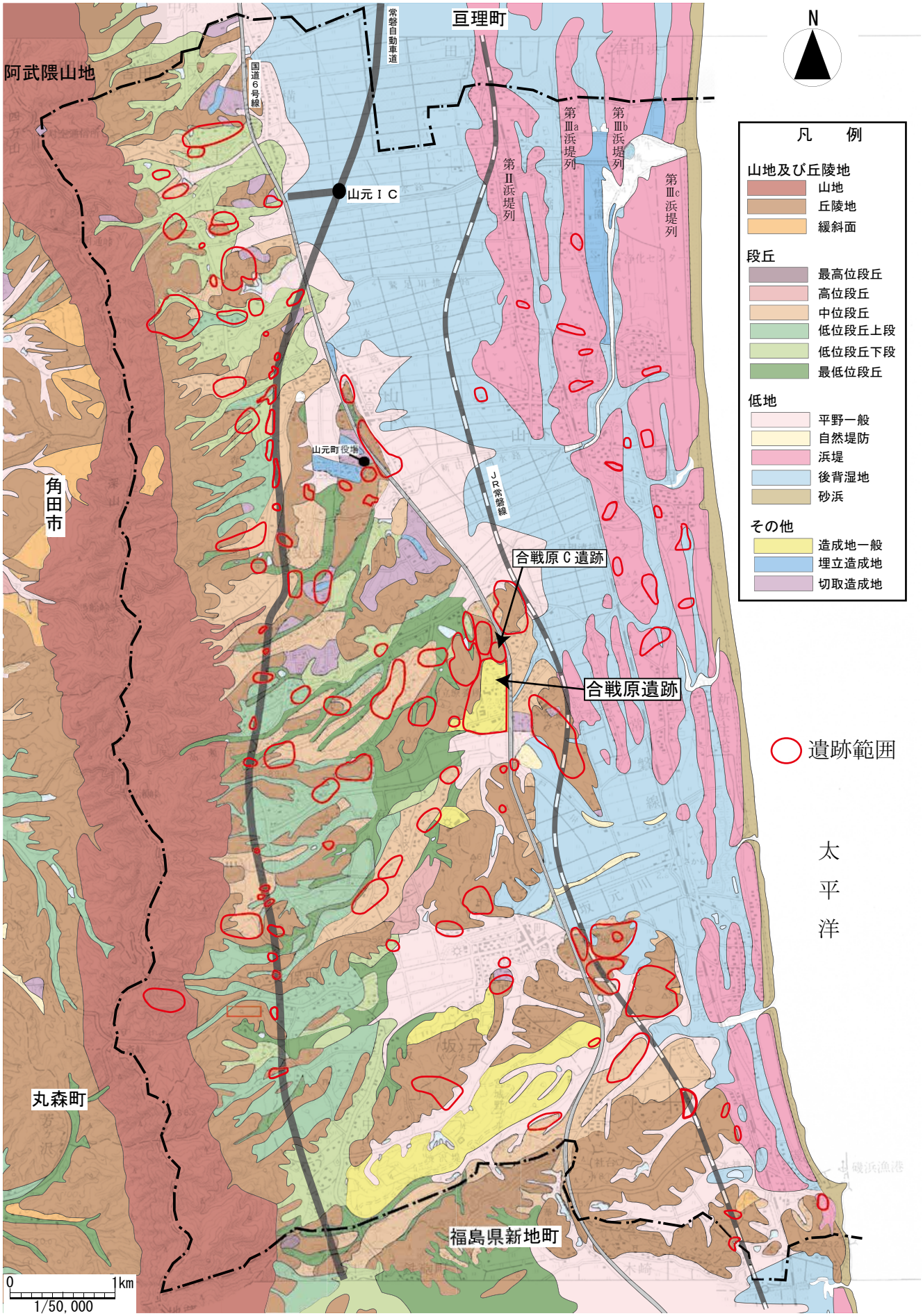
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

山元町では現在までに 100 余りの遺跡が登録されている(第 3 図、第 1 表)。その分布は、立地面からは阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく 3 つに分けることができる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がみられる。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体を占めるのは古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見した遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が多い。近年、町内では、常磐自動車道(県境－山元間)建設工事、それに伴い実施された周辺地区の開発事業、そして、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の復興事業等に伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった町の歴史が飛躍的に明らかとなってきている。

以下、代表的な遺跡の調査成果を時代ごとに記述するとともに、第 2 表にまとめた。なお、合戦原遺跡の既往の発掘調査における成果については、第 3 節で改めて記述する。

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡(10)、上宮前北遺跡(109)、川内遺跡(55)、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期後半の南山神 B 遺跡(89)､中期末～後期前葉の谷原遺跡(67)､中期～晩期の中島貝塚(4)､後･晩期の涌沢遺跡(107)、



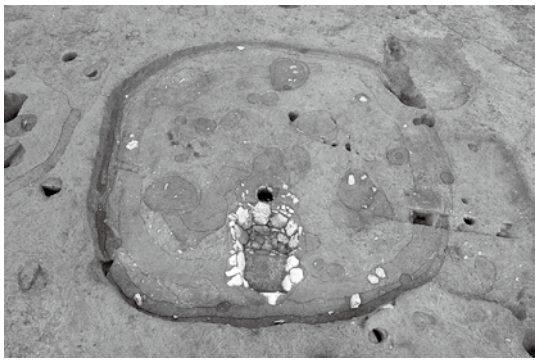
第２図　山元町内の地形分類

晩期の中筋遺跡(80)などがある。

北経塚遺跡では、平成 15･21･23 年度に山元町教育委員会(以下、「町教委」)が調査を行い、前期初頭の竪穴建物跡･土坑･遺物包含層･ピット群などが検出され、前期初頭の上川名Ⅱ式の古い段階の土器群や石器が出土した(町教委 2004、2010、2013)。**上宮前北遺跡**では、平成 24 年度に宮城県教育庁文化財保護課(以下、「県教委」)が実施した調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層･竪穴状遺構･集石遺構が検出され、主として前期前葉の上川名Ⅱ式の土器群が出土した(県教委 2015)。**川内遺跡**では、平成 28 年度調査において前期の玦状耳飾が出土した(町教委 2018a)。**西石山原遺跡**では、平成 22･23 年度に県教委による調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴建物跡などが検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式、後期後葉～末葉の大木 10 式の土器群が出土している(県教委 2012)。

南山神Ｂ遺跡では、平成 23･24 年度調査で中期後半の遺物包含層･柱穴･土坑が検出され、中期後半の大木 9 式の土器群が出土した(県教委 2015)。

谷原遺跡では、平成 22･24 年度調査で中期末～後期前葉の掘立柱建物で構成される南北 40m･東西 35m の環状集落、その周囲で同時期の土坑･土器埋設遺構･遺物包含層などを検出し、中期末の大木 10 式、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ･Ⅱ式の土器群が出土した(町教委 2016a･ｂ)。



西石山原遺跡　縄文時代中期末の竪穴建物跡

昭和 53 年に調査を実施した**中島貝塚**では、後期～晩期の縄文土器･石器とともに貝殻･魚骨･獣骨が数多く出土した(山元町誌編纂委員会 1986)。**涌沢遺跡**では、平成 24 年度調査で後･晩期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器、晩期前葉の大洞 B～BC 式の土器群が出土した(県教委 2015)。**中筋遺跡**では、平成 24 年度調査で晩期の遺物包含層を検出し、晩期前葉～末の大洞 BC 式･大洞 C2 式･大洞 A～A´式の土器群や後期前葉～後葉の土器も出土している(町教委 2015b)。

谷原遺跡　縄文時代中～後期の環状集落

【弥生時代の遺跡】

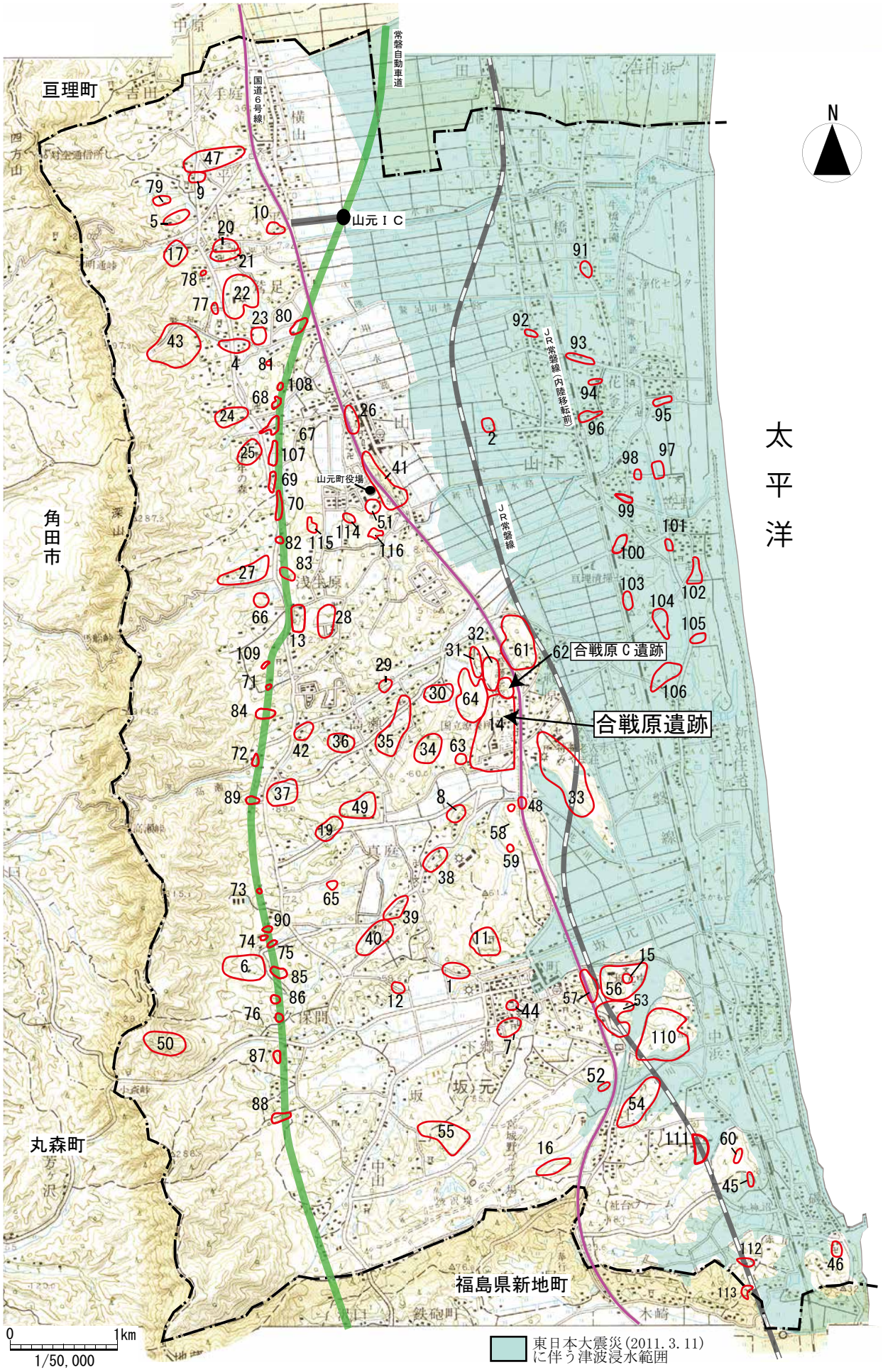
中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、川内遺跡(55)、北経塚遺跡(10)、館の内遺跡(9)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度調査で水田跡や遺物包含層などを検出し、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の枡形囲式を中心とする土器群や石包丁･板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認している(町教委 2015b、山田 2015a)。

中筋遺跡　弥生時代中期中葉の水田跡

狐塚遺跡では、平成 5 年度調査で溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土したほか、平成 25 年度調査では遺物包含層から同時期の土器･石包丁などが出土している(町教委 1995、県教委 2016 ほか)。

このほか、**川内遺跡**では平成 28 年度調査において遺物



第３図　山元町内の遺跡分布と津波浸水範囲

第1表　山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
2	新田遺跡	散布地	古墳後、古代
3	欠番	—	—
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩
5	味曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
7	蓑首城跡	城館	中世、近世
8	上台遺跡	散布地	弥生、平安
9	館の内遺跡	集落	弥生、古代
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前、弥生中、古墳前・中、中世
11	愛宕山館跡	城館	中世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世
14	**合戦原遺跡**	**集落・横穴墓・須恵器窯・製鉄**	**弥生、古墳中・後、古代**
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後
16	一の沢遺跡	散布地	弥生
17	清水遺跡	散布地	弥生
18	欠番	—	—
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前、古代、中世
21	舘横穴墓群	横穴墓	古墳後
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
23	中道遺跡	散布地	縄文、古墳後
24	石堂遺跡	散布地	古代
25	山寺館跡	城館	中世
26	作田山館跡	集落・城館	古墳、中世
27	入山遺跡	散布地	縄文、古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前
29	宮後遺跡	散布地	古代
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
31	舘下窯跡	須恵器窯	古代
32	中島館跡	城館	中世
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・製鉄・散布地	縄文、古墳、古代
34	北名生東窯跡	須恵器窯	古代
35	室原遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
38	原遺跡	散布地	古墳
39	浅生遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前、古墳
41	山下館跡	城館	中世
42	石山原遺跡	散布地	縄文
43	鷲足館跡	城館	中世
44	館下遺跡	散布地	弥生
45	大壇小壇十三壇	塚	近世
46	唐船番所跡	番所	近世
47	大平館跡	集落・城館	平安、中世
48	貝吹城跡	城館	中世
49	真庭館跡	城館	中世
50	新城山古館跡	城館	中世
51	日向窯跡	窯跡	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後
53	熊の作遺跡	集落	古墳後、古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代
55	川内遺跡	製鉄・散布地	縄文、弥生、古代
56	狐塚遺跡	集落・生産	弥生、古墳中～古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳、古代
58	卯月崎塚	塚	中世、近世
59	北越塚	塚	中世、近世
60	東作経塚	経塚	中世
61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
62	**合戦原C遺跡**	**古墳**	**古墳中・後**
63	北名生東B窯跡	窯跡	古代
64	大久保B遺跡	散布地	古代
65	北権現遺跡	製鉄	古代
66	山王遺跡	製鉄	古代？
67	谷原遺跡	集落	縄文中・後、弥生～中世
68	日向遺跡	集落	縄文後、弥生中、古墳後～中世
69	石垣遺跡	集落	縄文、古墳前、平安、近世
70	的場遺跡	集落	縄文前、古墳前、平安、近世
71	上宮前遺跡	散布地	平安、中世
72	北山神遺跡	散布地	縄文
73	新田B遺跡	散布地	古代
74	影倉B遺跡	散布地	縄文
75	影倉C遺跡	散布地	古代
76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
77	北遺跡	散布地	古代
78	北ノ入遺跡	散布地	古代
79	味噌野遺跡	散布地	古代
80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域？	縄文晩、弥生中、古墳前
81	赤坂遺跡	散布地	縄文、弥生
82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文、近世
83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
85	影倉D遺跡	製鉄	古代
86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
87	上小山遺跡	散布地	古代、中世
88	法羅遺跡	散布地	縄文
89	南山神B遺跡	散布地	縄文、古代
90	影倉E遺跡	散布地	縄文、古代、中世
91	北泥沼遺跡	散布地	古代
92	泥沼遺跡	散布地	古代
93	畑合遺跡	散布地	古代
94	北頭無遺跡	散布地	古代
95	浜遺跡	散布地	古代
96	頭無遺跡	散布地	古代
97	花笠遺跡	散布地	古代
98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
100	西須賀遺跡	散布地	古代
101	笠野A遺跡	散布地	古代
102	笠野B遺跡	散布地	古代
103	北中須賀遺跡	散布地	古代
104	狐須賀遺跡	散布地	古代
105	笠浜遺跡	散布地	古代
106	新浜遺跡	散布地	古代
107	涌沢遺跡	集落	縄文、古代～近世
108	日向北遺跡	集落	古墳後、中世～近世
109	上宮前北遺跡	集落	縄文、古代
110	犬塚遺跡	製鉄	古墳、古代
111	新中永窪遺跡	集落・須恵器窯・製鉄	古代
112	雷神遺跡	集落・生産	古代
113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
114	作田山遺跡	製鉄	古代
115	内手B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代
116	作田山B遺跡	生産	古代

集積遺構を検出した(町教委 2018a)。北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡などでは、遺構は確認されていないものの、弥生時代の遺物が出土している。**北経塚遺跡**では、平成 21・23 年度調査で中期後半の十三塚式、後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した(町教委 2010、2013)。**館の内遺跡**では、平成 13 年度調査で中期後半の十三塚式の土器が出土した(県教委 2002)。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度調査で中期前半～中期中葉の土器が出土した(町教委 2016a・b)。**日向遺跡**では、平成 23 年度調査で中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した(町教委 2015a)。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、犬塚遺跡(110)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)および合戦原 C 遺跡(62)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)、日向北遺跡(108)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、熊の作遺跡(53)、井戸沢横穴墓群(1)などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度調査で前期の土坑墓群を検出した(町教委 2015b)。**石垣遺跡**では、平成 23 年度調査で前期の竪穴建物跡を検出した(町教委 2014b)。**的場遺跡**では、平成 23 年度調査で前期の竪穴建物跡・土坑・溝跡を検出した(町教委 2014a)。**犬塚遺跡**では、平成 27 年度調査で前期の方形周溝を伴う墳丘を確認している(宮城県考古学会 2015)。**北経塚遺跡**では、平成 21・23 年度調査で前期の竪穴建物跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡を検出した(町教委 2010、2013)。

合戦原遺跡では、平成 2 年度調査において中期末頃の大型の竪穴建物跡が検出された(県教委 1991)。**合戦原 C 遺跡**では、平成 8・9 年の測量調査で、前方後円墳を含む古墳群が確認されている(青山ほか 2000)。**狐塚遺跡**では、平成 4・5 年度調査で後期の竪穴建物跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された(県教委 1993、町教委 1995)。**日向北遺跡**では、平成 24 年度調査で終末期前後の竪穴建物跡を検出した(町教委 2014c)。**日向遺跡**では、平成 23・28 年度調査で後期の竪穴建物跡、終末期の遺物包含層を検出した(町教委 2015a、2017b)。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度調査で終末期頃の竪穴建物跡を検出した(町教委 2016b)。**熊の作遺跡**では、平成 25・26 年度調査で後期～終末期の竪穴建物跡・掘立柱建物跡が検出された(県教委 2016)。昭和 44 年に調査が行われた**井戸沢横穴墓群**は、確認された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、それらとの関連性が指摘されている(山元町誌編纂委員会 1971)。

中筋遺跡　古墳時代前期の土坑墓

北経塚遺跡　古墳時代中期の円墳周溝跡

合戦原遺跡　平成 2 年度調査の大型竪穴建物跡

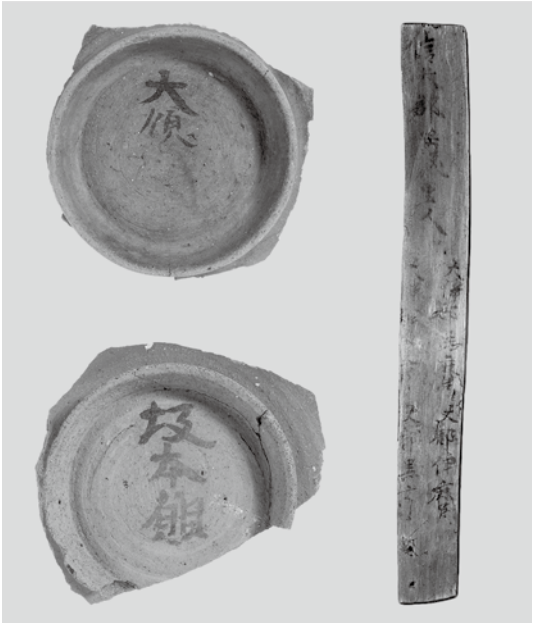
現存する井戸沢横穴墓群 （昭和 44 年調査）

【奈良･平安時代の遺跡】

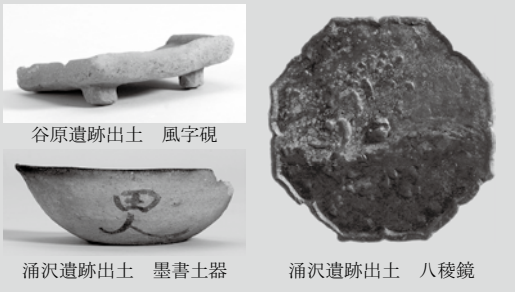
合戦原遺跡のほか、熊の作遺跡(53)、谷原遺跡(67)、涌沢遺跡(107)、館の内遺跡(9)、日向遺跡(68)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、雷神遺跡(112)、犬塚遺跡(110)、新中永窪遺跡(111)、北名生東窯跡(34)、狐塚遺跡(56)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、影倉Ｄ遺跡(85)、川内遺跡(55)、向山遺跡(57)、内手Ｂ遺跡(115)、作田山遺跡(114)、戸花山遺跡(33)などがある。

熊の作遺跡では、平成 25･26 年度調査で奈良～平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」「大領」「子弟」などの墨書土器や風字硯･石帯･木簡･木製品が出土するなど大きな成果を得ており、陸奥国亘理郡に関連する役所跡と推定されている(県教委 2016)。**谷原遺跡**では、平成 22･24･25･26 年度調査で奈良～平安時代の竪穴建物跡･掘立柱建物跡などを検出し、風字硯･円面硯･墨書土器などが出土した(町教委 2016a･b、2022c)。**涌沢遺跡**では、平成 24 年度調査で 8 世紀末～10 世紀後半の竪穴建物跡･竪穴状遺構･土器廃棄土坑や 8 世紀末～9 世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」「十万」「千万」の墨書土器や 10 世紀後半の八稜鏡などが出土した(宮城県考古学会 2012、県教委 2015)。**館の内遺跡**では、平成 13 年度調査で規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴建物跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している(県教委 2002)。**日向遺跡**では、平成 23･28 年度調査で 8 世紀後半～10 世紀前半の集落跡を検出した(町教委 2015a、2017b)。**石垣遺跡**では、平成 23 年度調査で 9 世紀後半の竪穴建物跡･竪穴状遺構･土器廃棄土坑を検出し、土器廃棄土坑からは墨書土器(「田」「人」)が出土した(町教委 2014b)。**的場遺跡**では、平成 23･25 年度調査で 9 世紀後半の竪穴建物跡･掘立柱建物跡･土坑･焼成遺構を検出した(町教委 2014a)。**雷神遺跡**では、平成 25 年度調査で奈良時代頃の竪穴建物跡などが検出されている(県教委 2016)。

犬塚遺跡では、平成 25 年度から 27 年度にかけて県教委と町教委が実施した調査において、奈良時代前半を中心とする竪穴建物跡･木炭窯跡･横口付木炭窯跡･製鉄炉跡が検出された(宮城県考古学会 2015、県教委 2016)。**新中永窪遺跡**では、平成 25･26 年度調査で奈良～平安時代初期の竪穴建物跡･製鉄炉跡･須恵器窯跡･木炭窯跡･横口付木炭窯跡が検出された(県教委 2016)。**北名生東窯跡**では、昭



熊の作遺跡出土　墨書土器･木簡


谷原遺跡出土　風字硯
涌沢遺跡出土　墨書土器
涌沢遺跡出土　八稜鏡
谷原遺跡･涌沢遺跡　出土遺物

犬塚遺跡　平成 27 年度調査の横口付木炭窯跡

新中永窪遺跡　木炭窯跡(左)と須恵器窯跡(右)

和 38 年度と 52 年度に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した(山元町誌編纂委員会 1971)。**狐塚遺跡**では、平成 4･5 年度調査で平安時代の竪穴建物跡･木炭窯跡などが検出された(県教委 1993、町教委 1995)。**内手遺跡**では、平成 23 年度調査で 9 世紀代の地下式木炭窯跡 7 基･横口付木炭窯跡 1 基が検出されている(県教委 2015)。**上宮前北遺跡**では、平成 24 年度調査で 9 世紀の製鉄炉跡 4 基が検出されている(県教委 2015)。**影倉 D 遺跡**では、平成 24 年度調査で 9 世紀代の製鉄炉跡 1 基、木炭窯跡 1 基が検出されている(県教委 2015)。**川内遺跡**では、平成 28 年度調査で平安時代の製鉄炉跡 4 基、木炭窯跡 5 基を検出した(町教委 2018a)。**向山遺跡**では、平成 25 年度調査で平安時代の鍛冶工房などが検出されている(県教委 2016)。**内手 B 遺跡**では、平成 26 年度試掘調査で奈良時代の須恵器窯跡を、**作田山遺跡**では、平成 25 年度試掘調査で古代の製鉄関連遺構を検出している。**戸花山遺跡**では、令和元～2 年度調査で製鉄･鍛冶遺構や木炭窯跡などを検出した(町教委 2022a)。

新中永窪遺跡　古代の製鉄炉跡（竪形炉）

川内遺跡　古代の製鉄炉跡（箱形炉）

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡(41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21･23･27 年度調査で 13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡･井戸跡･土坑を検出した(町教委 2010、2013、2017a)。**小平館跡**は、天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で(紫桃 1974)、平成 24･25･27 年度に調査を実施し、掘立柱建物跡･溝跡等を確認した(町教委 2015c、2022c)。**日向遺跡**では、平成 23 年度調査で 13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡･井戸跡を検出した(町教委 2015a)。**谷原遺跡**では、平成 22･24 年度調査で多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡･土坑･溝跡などを検出し、中世の大規模な屋敷跡の存在を確認した(町教委 2016b)。**山下館跡**では、平成 26 年度調査において良好な状態の平場･土塁･堀を確認した(宮城県考古学会 2014、町教委 2022d)。**鷲足館跡**では、平成 24～28 年度に断続的に調査を実施し、腰郭と柱穴列で区画された曲輪を確認し掘立柱建物跡群を検出した(町教委 2018b)。

山下館跡　平場･土塁･堀

蓑首城跡　二ノ丸跡の調査

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年度調査において掘立柱建物・柱穴列・土坑・井戸で構成される屋敷跡を検出した(町教委 2014b)。**的場遺跡**では、平成 23・25 年度調査において 17～19 世紀の掘立柱建物・土坑・溝・井戸で構成される屋敷跡を検出した(町教委 2014a)。**山王 B 遺跡**では、平成 22 年度調査で掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された(県教委 2012)。**蓑首城跡**は、戦国時代末期に築城され、元和 2(1616)年以降、大條氏が居城とした城で、平成 25 年度に二ノ丸跡の調査を実施し、掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡などを検出した(町教委 2019)。

第2表　山元町内遺跡の主な発掘調査成果

番号	遺跡名	主な時代	発掘年度	報告書・町誌	その他文献
1	井戸沢横穴墓群	古墳	S44	山元町誌(1971)	
4	中島貝塚	縄文	S53	山元町誌(1986)	
7	蓑首城跡	近世	H25	町第19集 (2019)	
9	館の内遺跡	弥生・古代	H13	県第188集(2002)	
10	北経塚遺跡	縄文・弥生・古墳・中世	H15・21・23・27	町第3・4・5・14集(2004・2010・2013・2017)	
14	合戦原遺跡 (62 合戦原C遺跡を含む)	古墳・古代	S37	山元町誌(1971)	
			S38	県第8集(1965)	佐藤1968・志間1968
			H2	県第140集・町第1集(1991)	
			H26～28	町第21・22集(2022)	
			H30～		東北学院大学2020
20	小平館跡	中世	H24・25・27	町第11・23集(2015・2022)	
26	作田山館跡	古墳・中世	H31(R1)		宮城県考古学会2019
33	戸花山遺跡	古代	S38	山元町誌(1971)	
			H25	県第243集(2016)	
			R1・2	町第20集(2022)	宮城県考古学会2020
34	北名生東窯跡	古代	S38・52	山元町誌(1971)・県第140集(1991)	
41	山下館跡	中世	H26	町第24集(2022)	宮城県考古学会2014
43	鷲足舘跡	中世	H24～28	町第17集(2018)	
53	熊の作遺跡	古墳・古代	H25・26	県第243集(2016)	
			H27・28	町第18集(2018)	
55	川内遺跡	古代	H28	町第16集(2018)	
56	狐塚遺跡	弥生・古代	H4	県第157集(1993)	
			H5	町第2集(1995)	
			H25	県第243集(2016)	
57	向山遺跡	古代	H25	県第243集(2016)	
67	谷原遺跡	縄文～中世	H22・24・25・26	町第12・13・23集(2016・2022)	
68	日向遺跡	弥生～中世	H23・28	町第9・15集(2015・2017)	
69	石垣遺跡	古墳・古代・近世	H23	町第7集(2014)	
70	的場遺跡	古墳・古代・近世	H23・25	町第6集(2014)	
80	中筋遺跡	縄文・弥生・古墳	H24	町第10集(2015)	
82	山王B遺跡	近世	H22	県第230集(2012)	
83	内手遺跡	古代	H23	県第239集(2015)	
84	西石山原遺跡	縄文	H22・23	県第230集(2012)	
85	影倉D遺跡	古代	H24	県第239集(2015)	
89	南山神B遺跡	縄文	H23・24	県第239集(2015)	
107	涌沢遺跡	縄文・古代	H24	県第239集(2015)	
108	日向北遺跡	古墳	H24	町第8集(2014)	
109	上宮前北遺跡	縄文・古代	H24	県第239集(2015)	
110	犬塚遺跡	古墳・古代	H25・27	県第243集(2016)	
			H27		宮城県考古学会2015
111	新中永窪遺跡	古代	H25・26	県第243集(2016)	
112	雷神遺跡	古代	H25	県第243集(2016)	
114	作田山遺跡	古代	H25試掘		
115	内手B遺跡	古代	H26試掘		

第 3 節　合戦原遺跡の過去の調査成果

合戦原の地に古墳･横穴が存在することは古くから知られていた。18 世紀後半に仙台藩の命によって編纂された『封内風土記』(1772 年完成)には、「亘理郡　眞庭邑」の項に、「古塚凡二。在號合戰原地」とある(仙台叢書出版協会 1893 pp. 431-432)(註 1)。真庭村は明治 22(1889)年に坂元村の一部となるが、合戦原の地は後に山下村の高瀬地区に編入される。

昭和 11(1936)年の『山下村誌』には「合戰原は村の南端にありて、坂元村に接し中央に國道貫通し、明治三十五六年頃までは茫々たる原野なりしが、元高瀬村住民に分割したり。(中略)西部の小高き所に蝦夷穴と称して、入口小さく内部圓形にて、直徑十尺餘、高さ六尺程の土穴多數あり」としている(山下村役場 1936 pp. 373-374)。また、「明治二十五六年頃本村笠野濱菊地要吉が、此の穴内より劍其他の器物を發掘し、宮城縣師範學校に寄附」とのことだが、現存は確認されていない。

昭和 15(1940)年の『宮城縣史蹟名勝天然紀(ママ)念物調査報告 第十三輯』には、清水東四郎により「山下村高瀬字合戰原(コウセンバラ)、鳴瀬今朝之助氏所有山林内西斜面地に一個所横穴あり、東傾斜地にも口部埋没したるもの三個所あり、其の他此の丘陵地全般に渉り多數あるべしと認めらる西に開口せるは羨道の一部を殘して切取られ入口僅かに二尺四五寸はあるべし奥行十尺、横八尺八寸、高さ四尺一寸あり」と報告され、地元の青年たちがこの入口の玉石を取り除いて横穴を発見したこと、丘陵が浅い谷によっていくつかに分かれ多数の横穴の存在が想定されることなどが記述されている(国書刊行会 1982 p. 73)。この報告の前年にあたる昭和 14(1939)年には傷痍軍人宮城療養所が開設され、戦後に国立宮城療養所と改称された。

昭和 31(1956)年の志間泰治「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」では、「合戦原古墳群」について「円墳が八基ほど群をなして見られる」とし、「合戦原横穴」について「高塚古墳とすぐ隣してカマボコ型が七穴あり」と報告している(志間 1956)。昭和 38(1963)年 3 月には古墳 4 基の発掘調査が行われ、このうち「一号墳」と「二号墳」は国道 6 号線の改修工事に伴って消滅したとされる(宮城県教委 1965･志間 1968)(註 2)。また、同年 4 月には横穴 1 基の発掘調査が行なわれ､床面礫敷きで､天井が崩落した玄室の図が報告されている(佐藤 1968)。

昭和 37(1962)年 12 月には、鍛冶一郎が「宮城療養所構内において土器が散乱している須恵器窯址を発見」し、「宮城療養所古窯址」として調査した。また、周辺に存在する「戸花山古窯址群」「北名生東古窯址」も合わせて「合戦原古窯址群」として報告しており、合戦原地区に古代の窯跡が多数分布することが明らかになった(鍛冶 1966 および鍛冶 1971)。「宮城療養所古窯址」については「療養所敷地の北部、国道から西二〇〇メートル、標高一五メートルの東向き丘陵斜面に南北の小通路を開さくする際、大部分破壊された」としている。今回の発掘区でいうと、B 区から A 区西側にかけての東斜面と推定されるが、今回の調査では該当する窯跡は確認できず、その後の地形改変により完全に消滅した可能性もある。なお、「戸花山窯址群」は現在も一部の窯跡が崖面に露出しており(第 4 図)、戸花山遺跡として登録されている。「北名生東古窯址」は現在の北名生東窯跡に該当する。

このほかに､昭和 30 年代に､現在の宮城病院の南側にある体育文化センターのグラウンドを造成した際に、「弥生式(大泉?)から古式土師にかけての遺物」が出土したという(註 3)。

これらの調査成果を受けて、昭和 41(1966)年の『宮城県遺跡地名表』に「合戦原古墳」が登録された。また、昭和 51(1976)年に地名表とともに刊行された『宮城県遺跡地図』では、現在の合戦原遺跡とほぼ同じ範囲が「合戦原古墳」として示された。昭和 56(1981)年刊行の遺跡地図と地名表では、「合戦原古墳群」に名称が改められた。

平成 2(1990)年には、遺跡の南西部にある県立山元支援学校のグラウンド造成に伴って発掘調査が行われ、古墳時代中期末頃の大型の竪穴建物跡や 8 世紀末頃の須恵器窯跡が検出されている。この成果を受けて、報

告書では「合戦原遺跡」という遺跡名で報告された(宮城県教委 1991)。

平成 8･9(1996･1997)年には岩見和泰、藤沢敦ら有志による古墳群の測量調査が行われた。その結果、前方後円墳 1 基と円墳 7 基の合計 8 基が存在し、1 号墳から 8 号墳と命名され、各古墳の形状や規模、詳細な分布図が作成された(青山ほか 2000)。また、昭和 38 年の調査後に消滅した古墳 2 基と、現存する古墳 8 基との位置を整理し、古墳群は本来 10 基で構成されていたと推定した。

平成 10(1998)年に刊行された『宮城県遺跡地図』では、合戦原遺跡の北側丘陵にある古代の散布地が「合戦原 C 遺跡」(遺跡番号 14062)として登録された。また、国道 6 号線を挟んで北東側の丘陵に鉄滓等の散布が確認され、「合戦原 B 遺跡」(遺跡番号 14061)として登録された。その後、古墳の測量調査の詳細(青山ほか 2000)が報告されると、多くの古墳が合戦原 C 遺跡の範囲内に該当することが明らかになった。

以上、これまでの調査から、合戦原遺跡は弥生時代～古代の複合遺跡で、古墳･横穴･窯跡･集落跡など多彩な内容をもつ遺跡であることが明らかになっていた。遺跡の名称･範囲設定の経緯はやや複雑であるが、本報告書では、特に区別すべき場合は除いて、合戦原 C 遺跡の範囲にある遺構も含めて「合戦原遺跡」の名称に統一して報告する。

第 1 章 註

1) 山元町文化財保護指導員を務めていた渡辺常吉氏が平成元年頃に残した記録(山元町教育委員会保管)によると､「古塚は､原の南方、町の文化体育館の南の丘上にあったものではなかろうか。この塚は、2 基並んであったもので、共に 3m は高い、小山のような塚。(中略)昭和の始め頃なくなったものである」としており、年代･性格等は不明としている。

2) このとき調査された残り 2 基のうち､「四号墳」は現在の 8 号墳に対応し､「三号墳」は古墳と認定されていないわずかな高まりと推定される(青山ほか 2000)。

3) 宮城県埋蔵文化財包蔵地調査カードによる。なお、平成 2 年の同カードによると、平成元～2 年初め頃に宮城病院の貯水タンク建設工事のため、横穴の一部が破壊されたとの記録も残されている。

第 1 章 引用・参考文献

青山博樹･岩見和泰･鈴木朋子･田原由男･藤沢敦 2000 「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第2号

伊藤晶文 2006 「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57

鍛冶一郎 1966 「宮城県亘理郡合戦原古窯址群」『仙台郷土研究』26の1

鍛冶一郎 1971 「合戦原古窯址群」『山元町誌』第1巻 山元町誌編纂委員会

佐藤宏一 1968 「宮城県亘理郡高瀬合戦原横穴」『日本考古学協会年報16(昭和38年度)』

紫桃正隆 1974 『史料 仙台領内古城･館』第四巻

志間泰治 1956 「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『地域社会研究』7･8(1982年合巻復刻『宮城県の地理と歴史』Ⅱ)

志間泰治 1968 「宮城県亘理郡高瀬合戦原古墳群」『日本考古学協会年報16(昭和38年度)』

清水東四郎 1940 「井戸沢及山下村合戦原の横穴」『宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第13輯(国書刊行会 1982復刻『宮城県史蹟名勝天然記念物5』所収)

仙台叢書出版協会 1893 『仙台叢書 封内風土記』第二巻(1975年復刻版)

東北学院大学 2020 「宮城県亘理郡山元町合戦原古墳群第2、3次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第61号

初鹿野博之 2013 「宮城県山元町内手遺跡･上宮前北遺跡」『第39回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

初鹿野博之 2014 「宮城県山元町熊の作遺跡」『第40回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

初鹿野博之 2015a 「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

初鹿野博之 2015b 「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成27年度宮城県考古学会総会･研究発表会資料

藤本展子･松本秀明 2012 「阿武隈川付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第17巻

宮城県教育委員会 1965 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第8集

宮城県教育委員会 1966 『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第9集

宮城県教育委員会 1973 『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第28集

宮城県教育委員会 1976a 『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第46集

宮城県教育委員会 1976b 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第47集

宮城県教育委員会 1981a 『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第73集

宮城県教育委員会 1981b 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第74集

宮城県教育委員会 1988 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第125集

宮城県教育委員会 1991 『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集
宮城県教育委員会 1993 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第152集
宮城県教育委員会 1993 『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第157集
宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集
宮城県教育委員会 2002 『名生館遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第188集
宮城県教育委員会 2012 『西石山原遺跡ほか−常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ−』宮城県文化財調査報告書第230集
宮城県教育委員会 2015 『涌沢遺跡ほか−常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ−』宮城県文化財調査報告書第239集
宮城県教育委員会 2016 『熊の作遺跡ほか−常磐線復旧関連遺跡調査報告書−』宮城県文化財調査報告書第243集
宮城県考古学会編 2011 『平成23年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2012 『平成24年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2013 『平成25年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2014 『平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2015 『平成27年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2016 『平成28年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2017 『平成29年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2018 『平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2019 『令和元年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2020 『令和2年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
山下村役場 1936 『宮城縣亙理郡山下村誌』
山田隆博 2012 「東日本大震災に伴う山元町内の文化財等の被災状況等について」『宮城考古学』第14号
山田隆博 2015a 「山元町中筋遺跡の津波痕跡」『宮城考古学』第17号
山田隆博 2015b 「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会−山元町の調査から−』平成27年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
山田隆博 2016 「山元町合戦原遺跡の調査成果」『東日本大震災復興事業に伴う発掘調査の成果報告会「宮城県における復興調査の成果」資料』一般社団法人日本考古学協会
山田隆博 2017a 「宮城県山元町合戦原遺跡の調査−横穴墓群の調査を中心に−」『日本考古学協会2017年度大会 研究発表要旨』
山田隆博 2017b 「宮城県山元町合戦原遺跡の調査−横穴墓群の調査を中心に−」『日本考古学協会2017年度宮崎大会 研究発表資料集』
山田隆博 2018a 「東日本大震災と合戦原遺跡の保存と活用」『日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念国際シンポジウム《2016エクアドル地震》による被災文化財支援を考える』プログラム・抄録集
山田隆博 2018b 「東日本大震災と合戦原遺跡の保存と活用−線刻壁画の移設保存−」『東海大学文明研究所 文明』
山田隆博 2019 「山元町歴史民俗資料館の紹介−展示室リニューアルと合戦原遺跡線刻壁画の移設・公開について−」『宮城考古学』第21号
山元町教育委員会 1991 『合戦原遺跡』宮城県文化財調査報告書第140号抜刷 山元町文化財調査報告書第1号(第1集)
山元町教育委員会 1995 『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書(第2集)
山元町教育委員会 2004 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第3集
山元町教育委員会 2010 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第4集
山元町教育委員会 2013 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第5集
山元町教育委員会 2014a 『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第6集
山元町教育委員会 2014b 『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第7集
山元町教育委員会 2014c 『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第8集
山元町教育委員会 2015a 『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第9集
山元町教育委員会 2015b 『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第10集
山元町教育委員会 2015c 『小平館跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第11集
山元町教育委員会 2016a 『谷原遺跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第12集
山元町教育委員会 2016b 『谷原遺跡Ⅱ』山元町文化財調査報告書第13集
山元町教育委員会 2017a 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第14集
山元町教育委員会 2017b 『日向遺跡 第2次発掘調査』山元町文化財調査報告書第15集
山元町教育委員会 2018a 『川内遺跡』山元町文化財調査報告書第16集
山元町教育委員会 2018b 『鷲足館跡 第1〜5次発掘調査』山元町文化財調査報告書第17集
山元町教育委員会 2018c 『熊の作遺跡 第2次発掘調査−東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅰ−』山元町文化財調査報告書第18集
山元町教育委員会 2019 『蓑首城跡 二の丸跡の発掘調査−東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅱ−』山元町文化財調査報告書第19集
山元町教育委員会 2022a 『戸花山遺跡−東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅲ−』山元町文化財調査報告書第20集
山元町教育委員会 2022b 『合戦原遺跡 横穴墓編−東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅴ−』山元町文化財調査報告書第22集
山元町教育委員会 2022c 『小平館跡・谷原遺跡ほか−東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅵ−』山元町文化財調査報告書第23集
山元町教育委員会 2022d 『山下館跡−東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅶ−』山元町文化財調査報告書第24集
山元町誌編纂委員会 1971 『山元町誌』
山元町誌編纂委員会 1986 『山元町誌 二巻』

第２章　調査の概要と経過

第１節　調査に至る経緯

東日本大震災発災後の復興過程において、合戦原遺跡の取扱いをめぐる一連の動向は極めて複雑な様相を呈する。その詳細な行政対応および調査経過については『合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編（以下、『製鉄遺構・行政対応編)』(註 1)に収録した。

本書では、調査に至る経過概要と、本書の対象である「横穴墓地区（A 区)」の調査経過のみを『製鉄遺構・行政対応編』から抜粋する形で報告する。

１　震災復興事業と合戦原遺跡

平成 23（2011）年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生した。山元町では震度 6 強の揺れを観測し、地震発生の約 1 時間後、15 時 50 分頃には大津波が襲来した。津波は海岸線から最大で約 3.5km 内陸まで達し、浸水面積は町の総面積の 37.2%に当たる約 24 ㎢に及んだ。人的被害は、死者 637 人、負傷者 90 人。4,400 棟を超える家屋が被害を受けた (註 2)。

山元町では、平成 23（2011）年 12 月に「山元町震災復興計画 基本構想」を策定した(註 3)。この復興計画に基づき、平成 24 年度以降、町内の住宅･交通網の整備、防潮堤ほか防災施設の再整備といった公共事業が本格化し、併せて、復旧･復興工事に伴う土砂採取事業等も町内各地で始まることとなる。

今回、発掘調査を実施し、本書ならびに『製鉄遺構・行政対応編』において調査成果を報告する合戦原遺跡の発掘区は、独立行政法人国立病院機構 宮城病院の敷地内に位置していた。宮城病院は、日中戦争のさなかの昭和 14（1939）年 2 月 28 日に傷痍軍人宮城療養所として創設され、以来、昭和 20（1945）年に「国立宮城療養所」、昭和 45（1970）年に「国立療養所宮城病院」に改称されたのち、平成 16（2004）年に独立行政法人国立病院機構となり、現在も当地域の医療･福祉の中核を担う存在である(註 4)。

平成 23（2011）年 9 月、被災した JR 常磐線の内陸移転による復旧が決まり、町内の山下駅･坂元駅が約 1 ㎞内陸側に移設されることとなる。これに伴い町では新駅･医療施設周辺に新市街地を集約するコンパクト･シティ構想の下、「新山下駅周辺地区」「新坂元駅周辺地区」に加え医療･福祉等一体的サービス拠点に新市街を整備する方針を固め、その用地として宮城病院敷地の北側一帯を選んだ。今回の発掘調査は、以上の経緯を経て実現の運びとなった「宮城病院地区 防災集団移転促進事業･災害公営住宅建設事業」に先立ち実施したものである。なお、今回の事業に伴う確認調査および本発掘調査（現地調査・整理作業・報告書作成）に係る費用は「東日本大震災復興交付金」を活用した(註 5)。

２　事前協議の経過

平成24（2012）年5月25日、 山元町震災復興企画課（以下、町関係課）から山元町教育委員会生涯学習課（以下、町文化財担当課）に対し、事業予定地（宮城病院敷地内）の土壌調査を実施するに当たり、埋蔵文化財の取扱いについての照会がなされた。町文化財担当課では、平成23（2011）年の震災復興計画策定の段階から、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「合戦原遺跡」の範囲内に該当していることを把握していたため、町関係課に対し文化財保護法に基づく手続きが必要となる旨を周知していた。以後、本事業に関する関係機関との調整が本格化する。以下、法的手続きの経過のみを時系列に沿って報告する。

（合戦原遺跡の現地発掘調査に係る主な事務手続きの経過）

平成24（2012）年

8月13日　事業主である町関係課から協議書(山元発第2594号)提出［町長⇒町教育長］。

8月14日　工事着手前に埋蔵文化財(合戦原遺跡、宮城県遺跡登録番号14014)の確認調査を要する旨の意見書を添え、上記協議書を宮城県教育庁文化財保護課（以下、県文化財課）に進達(山教委発第840号)［町教育長⇒県教育長］。

8月22日　合戦原遺跡の確認調査について現地協議(県文化財課、町関係課、町文化財担当課)。

8月29日　協議書への回答(文第1547号)［県教育長⇒町長･町教育長］。「確認調査実施を要する。文化財保護法第94条に基づく発掘通知を提出の上、調査時期について町教委と協議せよ」との内容。「復興事業の取扱い」に該当することも決まる。

平成25（2013）年

4月 9日　確認調査開始（以後、数度にわたる調査中断がある。詳細は『製鉄遺構・行政対応編参照』。）

平成26（2014）年

8月 1日　本発掘調査着手

平成27（2015）年

6月22日　事業計画がほぼ固まったため、事業主である町関係課から文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」(山元発第2020号)が提出される［町長⇒町教育長］。

6月23日　同通知を県文化財課に進達(山教委発第488号)［町教育長⇒県教育長］。

8月 5日　法94条の回答(文第1238号)［県教育長⇒町長･町教育長］。

8月20日　宮城病院周辺地区の新市街地整備工事、着工(註6)。

平成28（2016）年

5月31日　本発掘調査完了。現地引き渡し。同日付で遺失物法第4条第1項および宮城県埋蔵文化財事務取扱要領の規定に基づき「埋蔵物発見届」(山教委発第355号)を提出［町教委⇒亘理警察署長］。

6月 1日　「埋蔵文化財保管証」(山教委発第360号)ほか出土遺物の文化財認定に係る書類を県文化財課に提出［町教育長⇒県教育長］。

第２章第１節　註

1) 山元町文化財調査報告書第 21 集として本書と共に令和 3 年度に刊行。

2) 山元町の被災状況については、山元町ホームページに掲載された情報を基に記載した(令和元年 10 月 25 日時点)。

3) 「山元町震災復興計画 基本構想」は、山元町危機管理室 2013『山元町 東日本大震災記録誌 希望と笑顔が輝くまち』へ収録されている。なお、同書に記載された被災者数･被災家屋数はその後も更新されているため、上記の通り、本文では令和元年 10 月時点で把握している数値を挙げた。

4) 宮城病院の沿革については、宮城病院 2019 『独立行政法人国立病院機構 宮城病院 創立 80 周年記念誌』に詳しい。

5) 本事業に係る確認調査および整理・報告書作成の経費は基幹事業「埋蔵文化財発掘調査事業（事業番号 A4-1）」、本発掘調査（現地調査）の経費は「災害公営住宅駐車場整備事業（宮城病院地区）防災集団（事業番号 D4-2-1）」「防災集団移転促進事業（事業番号 D23-2）」にて交付決定を受けた。

6) 山元町震災復興企画課 2018『山元町震災復興記念誌 復興の歩み』 p. 4。

第２節　調査体制と調査の経過

合戦原遺跡では、遺跡内容と本発掘調査規模を把握するための確認調査を平成 25（2013）年 4 月から開始した。その結果を受け、本発掘調査を平成 26（2014）年 8 月から着手し、現地調査は平成 28（2016）年 5 月に完了した。その後、多くの他業務と併行して 6 か年度にわたり整理・報告書作成作業を進め、令和 4(2022)年春、2 集からなる報告書の刊行に至った。本節では、合せて 9 か年度にわたった業務全体の経過の概要について報告する。

１　調査体制

合戦原遺跡発掘調査に係る一連の業務は、山元町教育委員会が主体となり、町の文化財担当部署である生涯学習課（以下、町文化財担当課）が担当した。震災復興に伴う業務量増嵩に対応するには町の職員配置では不十分であり、大幅な体制強化を要するのは明らかであった。町では任期付職員と臨時職員を雇用して対応するとともに、他自治体から専門職員の派遣による人的支援(町への直接派遣)を受け、さらに復興調査の本格化に伴い、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県文化財課）からも人的支援を受けるに至った。県文化財課ではすでに平成 24 年度に、県職員に加えて他自治体から受け入れた埋蔵文化財専門職員を被災市町に出張派遣する方式での支援(県経由出張派遣)に踏み切っており、山元町でも、平成 26 年度からそうした支援を受けて体制強化を図った（第 3～5 表)。

第3表　山元町を支援した埋蔵文化財専門職員

1.　町への直接派遣職員

年度	氏名	派遣元	派遣期間	担当業務
平成25年度	森　秀之	北海道恵庭市	H25.4.1～H26.3.31	文化財業務全般(埋蔵文化財事前協議･確認調査対応ほか)、**合戦原遺跡確認調査**
	草場　啓一	福岡県筑紫野市	H25.12.1～12.31	**合戦原遺跡確認調査**
	小鹿野　亮	福岡県筑紫野市	H26.1.1～2.28	**合戦原遺跡確認調査**
	日下　和寿	宮城県白石市	H25.12.1～H26.3.31	原則として週1日の出張支援、中筋･谷原遺跡出土遺物等整理、**合戦原遺跡確認調査支援**
平成26年度	小南　裕一	福岡県北九州市	H27.1.1～2.28	大塚遺跡(民間土砂採取事業)本発掘調査
	中村　昇平	福岡県春日市	H27.3.1～3.31	大塚遺跡(民間土砂採取事業)本発掘調査、**合戦原遺跡現地説明会支援**
平成27年度	木下　晴一	香川県	H27.4.1～H28.3.31	文化財業務全般(埋蔵文化財事前協議･確認調査対応ほか)、**合戦原遺跡確認調査･線刻壁画移設支援･現地説明会支援**
	城門　義廣	福岡県	H27.4.1～H28.3.31	文化財業務全般、大塚遺跡(民間土砂採取事業)本発掘調査、**合戦原遺跡現地説明会支援･線刻壁画移設支援･金属製品整理**
	熊代　昌之	福岡県久留米市	H27.6.1～7.31	大塚遺跡(民間土砂採取事業)本発掘調査、**合戦原遺跡現地説明会支援･線刻壁画移設支援**
	川口　陽子	福岡県筑紫野市	H27.8.1～10.9	北経塚遺跡(民間店舗開発)本発掘調査
平成28年度	城門　義廣	福岡県	(任期延長) H28.4.1～9.30	大塚遺跡(民間土砂採取事業)報告書作成、**合戦原遺跡現地説明会支援･線刻壁画移設支援･金属製品整理･玉類整理**
	星野　惠美	福岡県福岡市	H28.4.1～9.30	日向遺跡(民間土砂採取事業)本発掘調査、**合戦原遺跡現地説明会支援**
	板倉　有大	福岡県福岡市	H28.10.1～H29.3.31	川内遺跡(民間土砂採取事業)本発掘調査
平成29～ 令和3年度	瀧本　正志	神奈川県	H29.4.1～R4.3.31	文化財業務業務全般(文化財収蔵庫建設ほか)、**合戦原遺跡金属製品整理**

2. 宮城県職員/宮城県経由出張派遣職員

年度	人数	氏名(派遣元)	備考
平成26年度	8名	**大友邦彦**、佐藤則之(宮城県教育庁文化財保護課) / **長橋至**(山形県)、**小淵忠司**(岐阜県)、**石川智紀**(新潟県)、守岡正司(島根県)、**御嶽貞義**(福井県)、**東影悠**(奈良県)	宮城県職員は、担当業務に町内他事業に伴う調査支援等を含む。
平成27年度	9名	**佐藤則之**、**高橋洋彰**、**長内祐輔**、**下山貴生**(宮城県教育庁文化財課) / **伊藤智樹**(千葉県)、**小淵忠司**(岐阜県)、**杉山一雄**(岡山県)、 **飯坂盛泰**(新潟県)、**長橋至**(山形県)	
平成28年度	8名	佐藤則之、**高橋洋彰**、熊谷宏規、**下山貴生**(宮城県教育庁文化財課)；三好秀樹、白崎恵介(宮城県多賀城跡調査研究所からの復興調査協力) / **飯坂盛泰**(新潟県)、**長橋至**(山形県)	
平成29年度	3名	**廣谷和也**(宮城県多賀城跡調査研究所からの復興調査協力)；**下山貴生**、**山口貴久**(宮城県教育庁文化財保護課)	担当業務に町内他事業に伴う調査支援を含むほか、県施設での遺物実測･原稿執筆等を含む。
平成30年度	4名	**廣谷和也**、**鈴木啓司**、**下山貴生**(宮城県教育庁文化財課)；**高橋透**(宮城県多賀城跡調査研究所からの復興調査協力)	
平成31(令和元)年度	4名	**初鹿野博之**、**廣谷和也**、**古川一明**、**熊谷亮介**(宮城県教育庁文化財課)	
令和2年度	8名	佐藤憲幸、伊東博昭、**古田和誠**、傳田惠隆、佐藤渉、風間啓太、**熊谷亮介**(宮城県教育庁文化財課)；**下山(鈴木)貴生**(宮城県多賀城跡調査研究所からの復興調査協力)	
令和3年度	6名	佐藤憲幸、**廣谷和也**、**古川一明**、**高橋透**、熊谷亮介(宮城県教育庁文化財課)；**鈴木貴生**(宮城県多賀城跡調査研究所)	

※太字表記=担当業務に合戦原遺跡支援を含む

第4表　合戦原遺跡の調査体制（平成24～28年度）

年度 （　）=業務内容	教育長	山元町生涯学習課		宮城県職員 県経由出張派遣職員 （　）＝派遣元 ［　］＝合戦原用務を含む 町への出張派遣期間	埋蔵文化財 指揮監督補助員 （町臨時職員）	埋蔵文化財 発掘調査作業員 （町臨時職員）	埋蔵文化財 出土品整理作業員 （町臨時職員）
		課長 生涯学習班長	合戦原遺跡担当				
平成24年度 （事前協議）	森憲一	課長　齋藤三郎 班長　武田賢一	主事　山田隆博 主事　丹野修太 （任期付職員）	－	佐伯奈弓 藤田祐 渡邊理伊知	－	－
平成25年度 （事前協議） （確認調査）	森憲一	課長　齋藤三郎 班長　武田賢一	主事　山田隆博 副参事　草場啓一 （筑紫野市派遣） 副参事　森秀之 （恵庭市派遣） 副参事　小鹿野亮 （筑紫野市派遣） 主事　丹野修太 （任期付職員）	－	佐伯奈弓 杉原範美 ［4.9～4.24］ 藤田祐	相原一智 天野幸枝 飯川幸男 石井進 伊藤弋之 伊藤清 伊藤成夫 梅原政幸 梅村眞智子 太田千佳子 小野和喜子 加藤勇馬 菅野淳 木村一行 後藤征郎 齋藤健二 齋藤由樹 佐藤明 佐藤和男 佐藤豊美 佐藤光義 佐藤美由紀 白鳥浩二 鈴木節子 関馥 髙橋美知雄 立谷重晴 玉田眞智子 千葉國雄 千葉美恵子 南條義博 西山ゆり子 橋元和子 平田みよの 福山すみ子 増川悠記 松田正雄 松本昭彦 三浦長 三坂順子 三坂春雄 三島常康 水本惠子 三次幸子 桃井諒人 森忠男 門間眞紀子 門馬祐作 大和正子 遊佐豊美 湯村春彦 横山幸 横山眞 渡部修	－
平成26年度 （確認調査） （本発掘調査） （基礎整理）	森憲一	課長　齋藤三郎 班長　阿部正憲	主事　山田隆博	主任主査　大友邦彦(宮城県) [H26.7.22～H27.3.31] 技術主幹　長橋至(山形県) [H26.7.22～H27.3.31] 技術主幹　小淵忠司(岐阜県) [H26.7.22～H27.3.31] 技術主幹　石川智紀(新潟県) [H26.7.22～H27.3.31] 主任主査　御嶽貞義(福井県) [H27.1.13～3.31] 技師　東影悠(奈良県) [H26.10.9～H27.3.31]	佐伯奈弓 藤田祐		－
平成27年度 （本発掘調査） （確認調査） （基礎整理）	森憲一	課長　齋藤三郎 班長　阿部正憲	主事　山田隆博 技術副参事　木下晴一 （香川県派遣） 技術主査　城門義廣 （福岡県派遣）	技術主査　佐藤則之(宮城県) [H27.7.6～11.5] 技師　髙橋洋彰(宮城県) [H27.4.8～H28.3.31] 技師　長内祐輔(宮城県) [H27.7.6～10.29] 技師　下山貴生(宮城県) [H27.4.13～H28.3.31] 技術補佐　伊藤智樹(千葉県) [H27.7.6～12.25、H28.2.22～3.31] 技術主幹　小淵忠司(岐阜県) [H27.4.7～H28.3.31] 技術主幹　杉山一雄(岡山県) [H27.4.13～H28.3.31] 主任主査　飯坂盛泰(新潟県) [H27.4.13～H28.3.31] 技術主査　長橋至(山形県) [H27.4.7～H28.3.31]	佐伯奈弓 千尋美紀		梅村眞智子 斉藤則彦 高橋みゆき 萩本厚子 橋元和子 矢吹共子 渡邊洋子
平成28年度 （本発掘調査） （整理･報告書作成）	森憲一 ［～9.30］ 菊池卓郎 ［10.1～］	課長　齋藤三郎 班長　阿部正憲	主事　山田隆博 技術主査　城門義廣 （福岡県派遣） 副参事　小淵忠司 （任期付職員）	技師　髙橋洋彰(宮城県) [H28.4.6～H29.3.31] 技師　下山貴生(宮城県) [H28.4.6～H29.3.31] ※県職員は他業務を兼務 主任主査　飯坂盛泰(新潟県) [H28.4.6～H28.10.21] 技術主査　長橋至(山形県) [H28.4.6～H29.3.31]	佐伯奈弓 千尋美紀 ［～9.30］		－

２　合戦原遺跡Ａ区　現地調査の経過

（１）確認調査

遺跡内容と本発掘調査規模を把握するための確認調査は平成 25(2013)年 4 月 9 日から着手した。しかし、用地未買収の状態であったことから、調査にあたっては、地権者との様々な調整が必要となった。加えて、補償調査の兼ね合いから、用地内の立木が伐採できない状態での調査にもなった。こうした様々な制約がある中、調査着手後間もなく、調査区域内において医療系埋設廃棄物が発見される（同年 5 月 13 日発見）。以後、その処理等の協議・調整のため、数度にわたる調査中断を余儀なくされ、概ねの本発掘調査対象範囲を

第5表　合戦原遺跡の調査体制（平成29～令和3年度）

年度 （　）=業務内容	教育長	山元町生涯学習課		宮城県職員 県経由出張派遣職員 （　）＝派遣元 ［　］＝合戦原用務を含む 町への出張派遣期間	埋蔵文化財 指揮監督補助員 （町臨時職員） ※R2年度からは会計年度任用職員	埋蔵文化財 発掘調査作業員 （町臨時職員）	埋蔵文化財 出土品整理作業員 （町臨時職員） ※R2年度からは 人材派遣業務委託
		課長 生涯学習班長	合戦原遺跡担当				
平成29年度 （整理・報告書作成）	菊池卓郎	課長 佐山学 班長 阿部正憲	主査 山田隆博 副参事 瀧本正志 （神奈川県派遣） 副参事 小淵忠司 （任期付職員）	技師 廣谷和也（宮城県） 技師 下山貴生（宮城県） ［H29.4.10～H30.3.31］ 技師 山口貴久（宮城県） ※いずれも他業務を兼務	佐伯奈弓	－	梅村眞智子 斉藤則彦 玉田眞智子 西山ゆり子 橋元和子 藤澤久民枝 矢吹共子 渡邊洋子
平成30年度 （整理・報告書作成）	菊池卓郎	課長 佐山学 班長 伊藤和重	主査 山田隆博 副参事 小淵忠司 （任期付職員）	技術主査 廣谷和也（宮城県） 技師 鈴木啓司（宮城県） 技師 高橋透（宮城県） 技師 下山貴生（宮城県） ※いずれも他業務を兼務	佐伯奈弓	－	
平成31（令和元）年度 （整理・報告書作成）	菊池卓郎	課長 佐山学 班長 伊藤和重	主査 山田隆博 副参事 小淵忠司 （任期付職員）	技術主査 初鹿野博之（宮城県） ［R1.5.7～6.27、8.5～12.25、 R2.1.20、1.30、2.14、3.17、3.24］ 技術主査 廣谷和也（宮城県） 技術主査 古川一明（宮城県） ［H31.4.8～R1.6.27、8.19～R2.3.30］ 技師 熊谷亮介（宮城県） ［H31.4.9～R1.6.27、8.5～12.26］ ※いずれも他業務を兼務	佐伯奈弓	－	
令和2年度 （整理・報告書作成）	菊池卓郎	課長 佐山学 班長 伊藤孝浩	主査 山田隆博 副参事 小淵忠司 （任期付職員）	技術主査 古田和誠（宮城県） 技師 下山（鈴木）貴生（宮城県） 技師 熊谷亮介（宮城県） ※県施設において合戦原遺跡 横穴墓地区出土金属製品の 整理を担当	佐伯奈弓	－	梅村眞智子 稲葉麻衣 斉藤則彦 玉田眞智子 堤清美 西山ゆり子 橋元和子 〈以上㈱シン技術コンサル〉
令和3年度 （整理・報告書作成）	菊池卓郎	課長 佐山学 班長 伊藤孝浩	主査 山田隆博 副参事 小淵忠司 （任期付職員）	技術主査 廣谷和也（宮城県） 技術主査 古川一明（宮城県） 技師 高橋透（宮城県） 技師 鈴木貴生（宮城県） ※県施設において合戦原遺跡 横穴墓地区出土金属製品の 整理を担当	佐伯奈弓	－	－

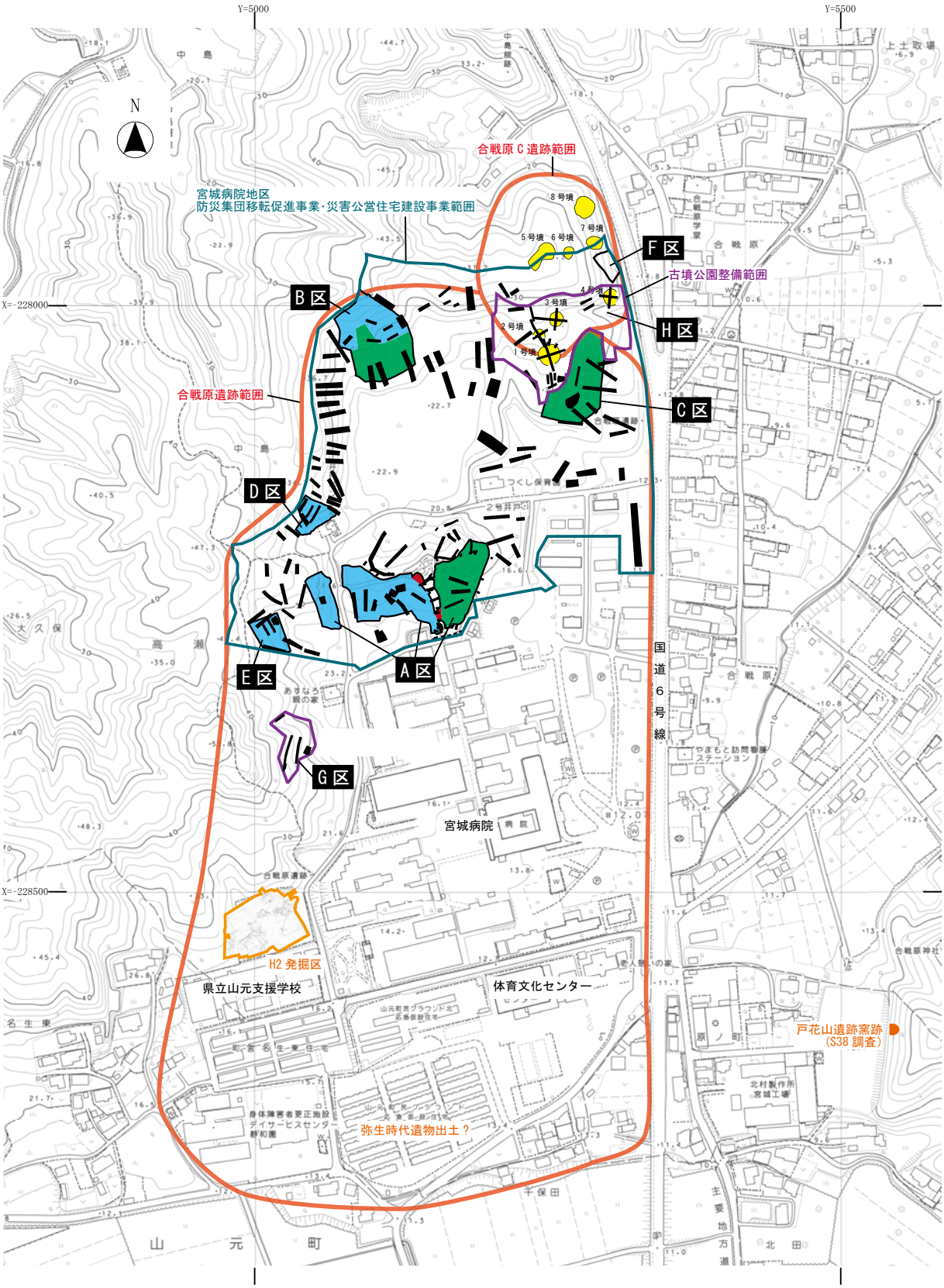
把握することができたのは平成 26 年（2014 年）3 月末のことであった（確認調査の位置・調査年度・調査期間等は第 6 表・第 5 図、本書の対象となるＡ区の確認調査トレンチ配置は第 6 図を参照）。なお、この時点で用地買収範囲は確定していたものの、建物配置等の事業計画は未確定だったため、以後、町関係課との再調整・確認調査箇所追加が予想される情勢にあった。

こうした状況を踏まえ、町文化財担当課では、「復興の迅速化」と「適正な発掘調査期間の確保」両立のためには、用地買収・確認調査の完了を待たずに本発掘調査に着手し、調査着手後は必要に応じて確認調査を併用しながら調査を進めることが最善と判断。以後、地権者・町関係課との調整を図り、平成 26 年度からの本調査着手に至ったのである。

第6表　合戦原遺跡平成25～28年度確認調査一覧

年度	期間	担当	調査内容
H25	H25.4.9～6.3	丹野 杉原	主に**本発掘調査A区・B区・C区**の確認調査
	H25.11.6～11.25	丹野	
	H25.12.16～12.26	草場	
	H26.1.7～2.26	小鹿野	
	H26.3.4～3.28	森 丹野	
H26	H26.7.22～7.30	山田 大友 長橋 小淵 石川	病院配水管位置把握を兼ねた**本発掘調査A区**の確認調査
	H26.8.1～8.6	小淵	本発掘調査**D区**の確認調査
	H26.8.7～8.8	小淵	本発掘調査**E区**の確認調査
H27	H27.9.16～10.1	長内 伊藤 長橋	病院貯水タンク移設に伴う確認調査 **（G区）**
	H27.10.9～10.21	髙橋洋 伊藤	緑地帯の斜度調整に伴う確認調査 **（F区）**
	H27.7.2～11.30	木下 長内 佐藤則 伊藤	古墳公園整備に伴う確認調査 **（H区）**
H28	H28.5.13～5.16	下山	公園内の休憩施設設置予定地の確認調査 **（H区）**

※確認調査の詳細については『合戦原遺跡　製鉄遺構・行政対応編』参照



：確認調査トレンチ（H25 ～ 28 年度実施）

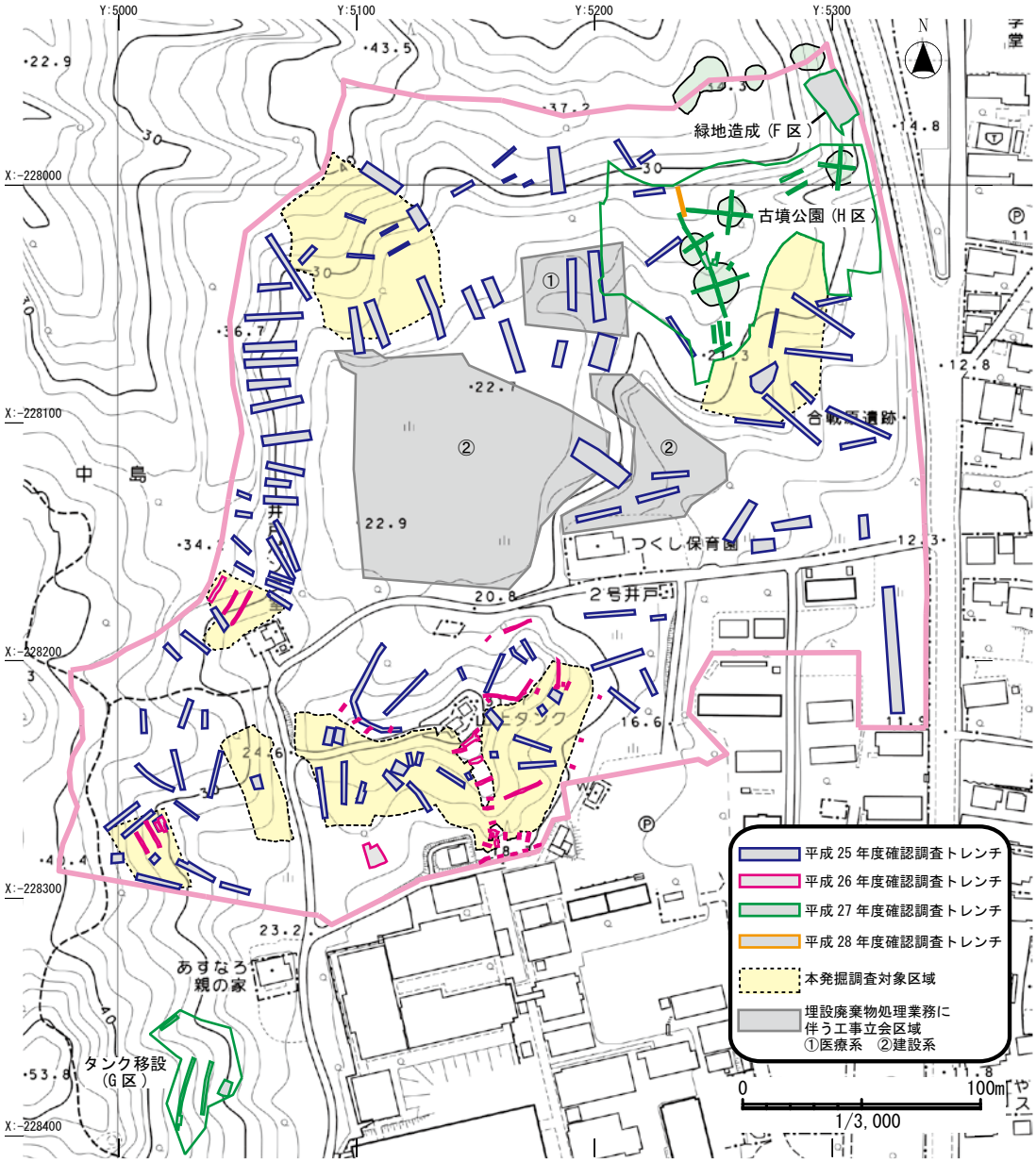
：H26 年度本発掘調査範囲（A 区西半 /B 区北半 /D 区 /E 区）

：H27 年度本発掘調査範囲（A 区東半 /B 区南半 /C 区）

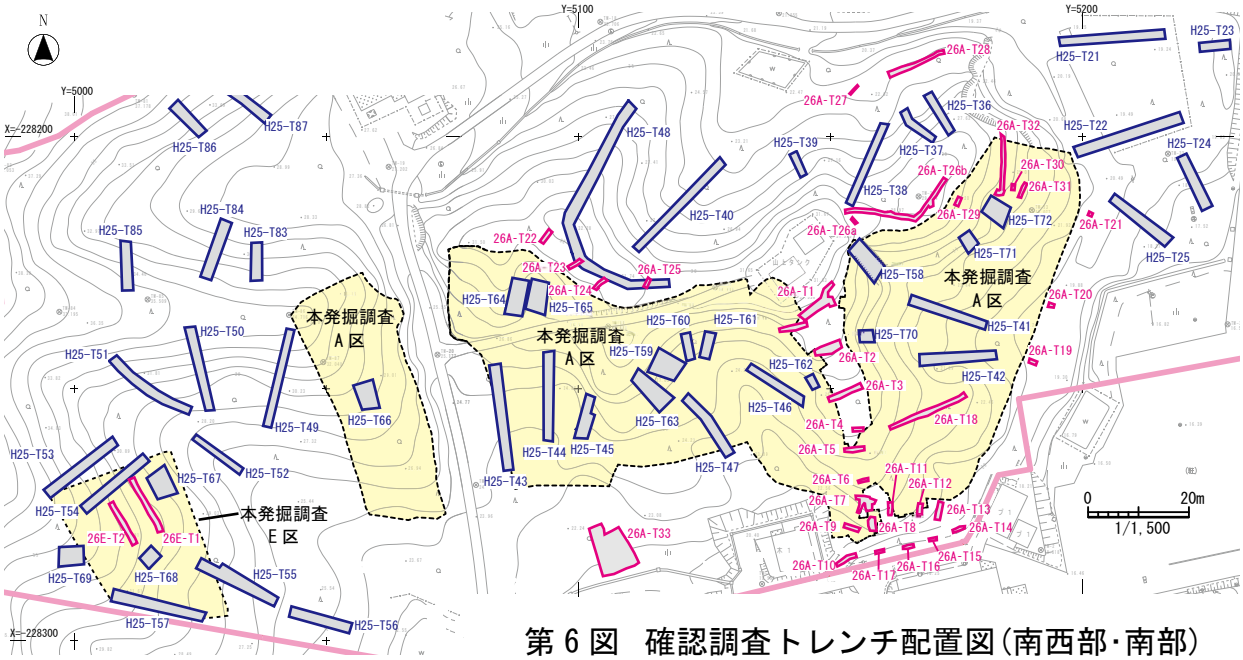
：H28 年度本発掘調査範囲（A 区中央）

国土地理院 2011「災害復興計画基図（迅速図）」をもとに作成

第 4 図　遺跡の範囲と発掘区の位置



第 5 図　確認調査トレンチ配置図（全体）



第 6 図　確認調査トレンチ配置図（南西部・南部）

（２）本発掘調査

本発掘調査は、**横穴墓を主体とする区域(A 区、以下「横穴墓地区」)**ならびに**製鉄炉跡･木炭窯跡等の製鉄関連遺構を主体とする区域(B 区･C 区･D 区･E 区、以下「製鉄地区」)**を対象とした（ 第 4 図)。

本書の対象となる A 区の調査は平成 26 年 8 月 1 日から平成 28 年 5 月 31 日の期間に実施した。以下、A 区「横穴墓地区」の本発掘調査の主な経過を『合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編』から抜粋・要約する形で報告する。

（平成 26 年度　A 区本発掘調査の経過）

平成26（2014）年

6月17日　地権者（宮城病院）から発掘調査実施の承諾および立木伐採の承諾を得る。

7月22日　県から山元町支援チームが合流。

7月24日　発掘区の 除草作業開始。

8月 1日　A区本発掘調査開始（現地測量から開始)。平成26年度はA区西半部（ST1～34）の調査を実施。

8月25日　A区立木伐採(～9月3日)。

9月 5日　A区表土掘削開始。以後、A区担当を山田、大友、長橋の3名体制とする。

10月9日　支援職員増員。A区担当を山田、大友、長橋、東影の4名体制とする。

平成27（2015）年

3月 8日　第1回現地説明会を開催。A区(西半部)･B区(北半部)･D区･E区を公開。230名が参加。

（平成27年度　A区本発掘調査の経過）

平成27（2015）年

4月 2日　平成27年度の調査（A区）開始。平成27年度はA区東半部（ST35～54）の調査を実施。

4月10日　金属製品の取扱い等について東北歴史博物館に協力を依頼(山教委発第68号)[町教育長⇒東北歴史博物館長]。

4月13日　新年度の調査体制固まる。A区(横穴墓地区)は山田、千尋、髙橋、飯坂、長橋が担当となる。

5月26日　A区38号横穴墓で線刻壁画を発見(以後の線刻壁画移設保存に関する詳細は第5分冊参照)

7月25日　午後、第2回現地説明会を開催。参加者454名。

8月 4日　A区を対象として空中写真撮影を実施。

8月19日　A区出土金属製品の一部を保存処理検討のため東北歴史博物館へ移送。

8月20日　宮城病院周辺地区の新市街地整備工事、着工。

9月16日　A区の平成27年度分の調査が完了（A区内の病院貯水タンク解体・移設まで調査中断)。

9月30日　A区、委託成果品デジタル遺構図の現地照合作業等に着手。以後、年度末まで作業継続。

10月30日　A区西端区域とB区･D区･E区を施工側に引き渡す。

11月26日　整理作業場所を町埋蔵文化財整理室に移す。

12月14日　東北大学 蟹澤聰史名誉教授、出土石器類等の石材について御指導。

12月15日　熊本県立装飾古墳館 坂口圭太郎学芸課長、福田匡朗主任学芸員来跡。

平成28（2016）年

2月19日　A区内病院貯水タンク解体工事について協議（町関係課、町文化財担当課、施工業者)。

3月 9日　A区内病院貯水タンク解体工事に伴う調査について協議(町関係課､町文化財担当課､施工業者)。

（平成28年度　A区本発掘調査の経過）

平成28（2016）年

4月 6日 平成28年度分の調査開始。A区(横穴墓地区)現地調査担当:山田、小淵(4月15日～5月2日)髙橋、下山(4月15日～5月2日)、飯坂、長橋。調査対象は、A区内の病院貯水タンク跡地の13号横穴墓、貯水タンクからの配水管通り道に位置した54号横穴墓。加えて、38号横穴墓を含むA区主要部の再精査を実施。

4月11日 発掘区A区の施工側への引き渡し日程について協議(町関係課、町文化財担当課、施工業者)。以後、A区の残り部分を、精査完了後に順次引き渡す(4月12日、4月19日、5月16日、5月23日、5月31日、西→東の順)。

4月29日 第3回現地説明会を開催(～5月1日)。38号横穴墓を含むA区の大部分の区域を公開。午前中の報道機関向け説明会には3社が参加。午後の研究者向け説明会には50名が参加。

5月 1日 一般向け現地説明会を開催。122名が参加。

5月 9日 A区38号墓横穴墓線刻壁画取り出し作業開始。

5月30日 線刻壁画の取り出し作業が完了。現場事務所撤収作業完了。

5月31日 全区域の本発掘調査完了。A区東端部(38号横穴墓周辺区域)を施工側に引き渡し、全発掘区の引き渡し完了。

３　合戦原遺跡Ａ区　整理・報告書作成作業の経過

合戦原遺跡A区（横穴墓地区）で出土した遺物、現地記録類の整理・報告書作成作業は、平成26年度から現地調査と平行して実施し、令和4年春に完了した。以下、A区（横穴墓地区）の整理経過概要を示す。

今回の合戦原遺跡の本発掘調査は「町職員と県職員および自治法派遣職員の混成体制」による調査となったが、特に派遣職員については、任期の関係から、現地調査担当者が報告書の刊行まで携われないことは明白であった。そこで、A 区の整理作業については、現地調査が完了する平成 28 年度までは「各種遺構記録類の基礎整理」を重点的に行い、以後町職員に引き継ぐ方針で作業を進めた。具体的には、現地調査を担当した派遣職員は、派遣期間満了までに、各種記録図面の照合作業、土層記録の整理・データ入力、記録写真の整理および報告書使用写真の抽出、遺物への注記準備作業、遺構解釈をまとめた仮原稿の作成を行うこととした。他地域自治体から宮城県への職員派遣は平成 28 年度末に終了することとなったが、それまでに A 区調査遺構の基礎的整理は概ね完了していた。以後の町正規職員よる本格的な報告書作成作業は、その 2 年後（令和元年度）となったが、こうした方針で作業を進めたこともあり、比較的スムーズに作業を再開することができた。なお、平成 29 年度から令和 3 年度にかけての 5 年間については、県職員による人的支援が途切れることなく続いた。出土遺物の整理作業は、町埋蔵文化財指揮監督補助員を中心に平成 27 年度から開始した。他業務との兼ね合いから一時的な中断等があり、本格的な作業は平成 29 年度以降となった。横穴墓出土金属製品の仮保管とその処理については、町単独での対応が不可能であったことから、平成 27 年度から処理が完了する令和 3 年度の長期間にわたり、東北歴史博物館の保存処理担当者の全面的協力を得た。この他、整理作業の迅速化を図るため、一部の金属製品処理や出土遺物の図化作業・写真撮影など、可能な限り業務委託による外注も積極的に導入し、各種整理作業を進めた。

以上の経過を経て、令和4年春、本書の刊行に至り、本発掘調査終了から数えて6年間にわたる一連の業務は完結した。A区の本発掘調査から報告書刊行に至るまでの職員体制と作業分担は第7表のとおりである。

第7表　合戦原遺跡A区の本発掘調査の体制と作業分担内容

年度	担当者名※1 ( )所属先※2	現地調査 担当遺構	室内整理担当業務	その他の業務※3
H26 年度 (2014)	●山田(山元町)	ST1～5・9～12 ST20・21・34 SK47	担当遺構図面類基礎整理 **※別報告書作成(山教委9～11集: 日向遺跡/中筋遺跡/小平館跡)**	【業務委託】 横穴墓遺構計測:㈱シン技術コンサル (3次元)
	■大友(宮城県)	ST6～8 ST25～27/SX1	担当遺構写真・図面類基礎整理 仮原稿執筆/遺物注記準備	
	★長橋(山形県)	ST28～33		
	★東影(奈良県)	ST13～19・22～24 SX2・3/SK46		
	◎佐伯(山元町)	－	出土遺物基礎整理（一部の洗浄・接合）	
H27 年度 (2015)	●山田(山元町)	ST37～43 ST52～54 SK48・49	担当遺構図面類基礎整理 **※別報告書作成(山教委13集:谷原遺跡)**	【金属製品保存処理】 **■及川・芳賀(東北歴博)** 【業務委託】 横穴墓遺構計測:㈱シン技術コンサル (3次元)
	■高橋(宮城県)		担当遺構写真・図面類基礎整理 仮原稿執筆/遺物注記準備	
	★長橋(山形県)	ST44～48・51		
	★飯坂(新潟県)	ST35・36・49・50		
	▲城門(福岡県)	－	金属製品保存処理協議・基礎整理	
	◎佐伯(山元町)	－	出土遺物基礎整理 指揮監督 (洗浄・接合・注記・復元)	
	◎千尋(山元町)	山田・髙橋補助	－	
H28 年度 (2016)	●山田(山元町)	ST38 (壁画移設対応) 遺構現地計測	全体調整・各種業務発注/壁画移設対応 **※別報告書作成(山教委12集:谷原遺跡) (山教委14集:北経塚遺跡)**	【金属製品保存処理】 **■及川・芳賀(東北歴博)** 【業務委託】 横穴墓遺構計測:㈱シン技術コンサル (3次元)
	○小淵(山元町)	ST38 (壁画移設対応)	－	
	▲城門(福岡県)	ST38 (壁画移設対応)	金属製品保存処理協議・基礎整理 遺物実測(金属製品・玉製品・石製品・土製品)	
	■高橋(宮城県)	ST54/現地計測	担当遺構の基礎整理 写真データ整理/遺物出土状況図基礎整理	
	■下山(宮城県)	ST54[H28.4]	担当遺構の基礎整理	
	★長橋(山形県)	現地計測	担当遺構の基礎整理 全横穴墓の統一的な整理・基礎データ作成	
	★飯坂(新潟県)	ST13/現地計測	担当遺構の基礎整理	
	◎佐伯(山元町)	－	遺構(ST)断面図トレース 遺物実測図トレース（玉・石・土製品）	
	◎千尋(山元町)	－	遺物出土状況図基礎整理	

年度	担当者名※1 ( )所属先※2	室内整理担当業務	その他の業務※3
H29 年度 (2017)	●山田(山元町)	須恵器類の抽出作業/壁画移設対応 **※別報告書作成(山教委15集:日向遺跡)**	【金属製品保存処理】 **■及川・芳賀・森谷(東北歴博)/◎藤澤(山元町)** 【業務委託】 遺構図編集・加工：㈱シン技術コンサル
	▲瀧本(神奈川県)	金属製品整理（委託遺物の選別作業）・遺物実測（金属製品）	
	■廣谷(宮城県)	遺物実測（須恵器・金属製品）	
	■山口(宮城県)	遺物実測（金属製品）	
	◎佐伯(山元町)	出土遺物基礎整理 指揮監督（洗浄・接合・注記・復元）	
H30 年度 (2018)	●山田(山元町)	土師器類の抽出作業/壁画移設対応 **※別遺跡報告書作成(山教委17･18集:鷲足館跡･熊の作遺跡)**	【金属製品保存処理】 **■及川・芳賀・森谷(東北歴博)/◎藤澤(山元町)** 【業務委託】 金属保存処理:㈱東都文化財保存研究所 ガラス玉分析:東北大学
	■廣谷(宮城県)	遺物実測（金属製品）	
	■高橋(宮城県)	遺物実測（土師器・須恵器・金属製品）	
	◎佐伯(山元町)	遺構基礎データのとりまとめ 遺構断面図トレース、遺物実測図（須恵器・金属）トレース 出土遺物基礎整理 指揮監督（洗浄・接合・注記・復元）	
H31 (R1) 年度 (2019)	●山田(山元町)	全体調整・業務発注/遺構関係事実記載・図面類基礎整理 **※別遺跡報告書作成(山教委19集:蒜首城跡)**	【金属製品保存処理】 **■及川・芳賀・森谷(東北歴博)/◎藤澤(山元町)** 【業務委託】 金属保存処理:㈱東都文化財保存研究所 遺構図編集・加工：㈱シン技術コンサル
	■古川(宮城県)	遺物実測（須恵器・土師器）/土器分類＋総括用基礎原稿作成	
	■熊谷(宮城県)	遺物実測（土師器）	
	◎佐伯(山元町)	出土遺物基礎整理 指揮監督（洗浄・接合・注記・復元） 遺物実測図（須恵器・土師器）トレース/報告書仮遺物図版作成	
R2 年度 (2020)	●山田(山元町)	全体調整・業務発注/遺構関係基礎整理/遺物実測（須恵器） 報告書図版（遺構図ほか）・事実記載作成	【金属製品保存処理】 **■及川・森谷(東北歴博)/藤澤(シン技術コンサル)** 【業務委託】 金属保存処理:㈱東都文化財保存研究所 遺物実測・トレース・写真撮影: ㈱シン技術コンサル
	■鈴木(宮城県) ※旧姓 下山	遺物実測・トレース（金属製品）/遺物実測図修正（金属製品） 原稿執筆（第3分冊総括仮原稿：鉄鏃を除く金属製品全般）	
	■古田(宮城県)	遺物実測図修正作業（金属製品）	
	■熊谷(宮城県)		
	◎佐伯(山元町)	出土遺物基礎整理 指揮監督（遺物復元作業）/須恵器3D図作成 遺構断面図（ST）トレース/遺物実測図（土師器）トレース	
R3 年度 (2021)	●山田(山元町)	全体調整・業務発注/報告書図版（遺構図ほか）作成 報告書原稿執筆（第1～3・5分冊）/写真図版（第4分冊）作成	【金属製品保存処理】 **■及川・森谷(東北歴博)/藤澤(シン技術コンサル)** 【業務委託】 金属保存処理:㈱東都文化財保存研究所 遺物実測・トレース・写真撮影: ㈱シン技術コンサル
	○小淵(山元町)	原稿執筆（第3分冊総括原稿:金属製品）	
	■古川(宮城県)	原稿執筆（第3分冊総括原稿:土師器・須恵器）	
	■廣谷(宮城県)	遺物基礎整理（鉄鏃）/遺物実測・実測図修正作業（鉄鏃・馬具類） 原稿執筆（第3分冊総括原稿:鉄鏃）/写真図版作成（X線写真のみ）	
	■高橋(宮城県)	遺物実測図修正作業（金属製品）	
	■鈴木(宮城県)	原稿執筆（第3分冊総括仮原稿：鉄鏃を除く金属製品全般）	
	◎佐伯(山元町)	遺構断面図（SK・SX）トレース/遺物実測図（須恵器）トレース/須恵器3D図作成/出土遺物整理収納作業/原稿執筆（第3分冊総括原稿:その他の遺物）/報告書図版（遺物・出土状況図・遺構間接合遺物図）/報告書編集	

※1　担当者名の表記について、本業務に主体的に携わった担当者をゴシック体表記、短期的･補助的に関わった担当者を明朝体表記とした。

※2　担当者の区分に関する表記については以下のとおりとした。
●町正規職員/○町任期付職員/◎町臨時･会計年度任用職員/■宮城県職員/★派遣職員(宮城県経由)/▲派遣職員(町への直接派遣)。
なお、「■宮城県職員･★派遣職員(宮城県経由)」のうち、町に常駐して整理･報告書作成を行った職員については「　塗り」表記としている。

第３章　合戦原遺跡横穴墓地区（A 区）の調査成果

第１節　調査方法と報告方針

１　現地調査の方法

前述のとおり、今回の本発掘調査を実施した発掘区は横穴墓地区（A 区）と製鉄地区（B～E 区）に分かれる。全地区に共通する調査方針については『合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編（以下、製鉄遺構・行政対応編)』で示した通りである。ここでは横穴墓地区（A 区）における調査基本方針・調査方法について記す。

（１）発掘区の設定

合戦原遺跡横穴墓地区（A 区）は発掘区西側から東に向かって舌状に延びた標高 20～34m の丘陵南斜面に位置する。この西から東に延びる丘陵尾根は、A 区中央付近の標高 30m 付近で東と南に枝分かれし、丘陵裾部に至る。横穴墓はこの枝分かれした丘陵尾根の南・東・西斜面に分布する。

本書では、A 区中央から南北に延びる尾根を境に、その東側を「A-3 区」、西側を「A-1・2 区」とした。そして、A-1 区と A-2 区の区域分けについては、A 区西側の丘陵を南北に分断する形で造られている既存通路を境に、その西側を「A-1 区」、東側を「A-2 区」とした（第 13 図)。

（２）表土除去・遺構精査

表土除去作業は原則としてバックホウ（0.45 ㎥）による掘削とした。表土掘削により発生した排土は、重機または人力により発掘区外の A-2 区南脇と A-3 区北脇に集積した。遺構検出以降の遺構精査は人力により行った。なお、A 区の事業計画範囲については、全て切土工法による事業計画となっていたことから、検出した全ての遺構について記録作成の対象とした（註 1)。

（３）遺構番号

A 区では、現地調査の段階で遺構種別ごとに１から通し番号を振り各種記録類を作成した。A 区で検出した遺構は、**横穴墓（遺構略号 ST)、土坑（遺構略号 SK)、性格不明遺構（遺構略号 SX）**である。遺構の分類体系と遺構記号･呼称については、文化庁が『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』において新たに示した指針(文化庁 2010a)に従っている。

本書の報告にあたり、現地で付した遺構番号は原則そのまま使用したが、今回本発掘調査を実施した全地区（A～E 区）を通して遺構番号が重複せぬよう、土坑（SK）については本書編集の過程で新たな報告番号に振り替えることとした。

参考：合戦原遺跡 A 区で使用した遺構番号

遺構種別（略号）	使用番号	備考
横穴墓（ST）	ST1～54	SKはB～E区使用番号末番から付した。 SK1～18（C 区） SK19～23（E 区） SK24～45（B 区）
土坑（SK）	SK46～49	
性格不明遺構（SX）	SX1～3	

（４）遺構測量

A 区の遺構の平面・立面測量については、確認調査の段階で本地区に多数の横穴墓が存在することが予想されていたことから、遺構図作成の迅速化を図ることを目的に「業務委託による三次元計測による図化」を導入した（註 2)。加えて、日常的な遺構計測・遺物位置計測を同時並行で進めるため、「SOKKIA トータルステーション SRX5X（自動追尾型)」および「遺構実測支援システム(電子平板）遺構くん cubic_B･C タイプ 2014」、接続するパソコンとして「Panasonic TOUGHBOOK」も使用した。土層断面図は、原則として手測りで対応することとした。水準線の設定は防水型自動レベル(SOKKIA B20）とスタッフ(箱尺)を使用する標準的手法を基本とした。

遺構測量にあたっては、調査対象範囲に設置した基準杭を利用した。測量原点の座標値は世界測地系に基づく平面直角座標Ｘ系による値（東日本大震災後）である。測量基準杭の位置は第 16～18 図内に示したとおりである。

（５）土層の記録作成

土層番号は、遺構内堆積層は上層から順にアラビア数字（算用数字）「1,2,3…」、基本層序はローマ数字「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…」を用いて表記した。土層の観察は『標準土色帖』(小山・竹原 1967) に従い「色相　明度/彩度」を数値と記号で示し、日本語表記を併記した。土性については、粒径の大きなものから順に「礫＞砂＞砂質シルト＞シルト＞粘土質シルト＞粘土＞」に分け、土層の混入物は多い方の順から「多量（多く）＞含む＞少量含む＞微量含む」と表記し、その他必要な事項は備考等に記録することとした。さらに、判別可能であれば「人為堆積層」「自然堆積層」の別を記録し、必要に応じて混入物や成因等についての所見を詳述することとした。

なお、派遣元を異にする多くの職員が担当した今次の調査において、土色・土性等の観察ならびに記録は、とりわけ担当者間での個人差が生じた部分であった。本書で報告する土層記述は、整理・報告書作成の段階で、担当者所見や写真を基に可能な範囲で記述の統一を図ったことを付記しておく。

（６）遺物の取り上げ

遺物が出土した際には、「遺物カード」に出土位置・層位・遺構、取り上げ日、特記事項などを記入した上で取り上げることとした。原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

遺物の取り上げに当たっては、出土位置座標の計測や写真測量による出土状況記録作成も併用した。

金属製品等の脆弱遺物の取り上げに関しては、東北歴史博物館の協力を得て実施した。

（７）写真撮影

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ（NIKON D5300・NIKON D7000/レンズ SIGUMA 18-200mm/画質モード FINE)を使用した。遺構の遠景写真については、俯瞰システム（CUBIC）による撮影も随時実施した。発掘区全景・遺跡全景については、業務委託による航空写真撮影を実施した（註2)。

（８）その他の事項

以上のほか、さらに用語や調査手法全般において統一が必要となった場合や、調査員間で見解の相違が生じた際には、近年、文化庁が『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』『発掘調査のてびき-整理・報告書編-』『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』において示した指針(文化庁 2010a・b、2013)に従った。

２　出土遺物・調査記録の整理方法

合戦原遺跡横穴墓地区（A区）の整理・報告書作成作業は、その大部分を山元町文化財整理室（山元町役場敷地内）で実施した。宮城県経由による自治法派遣職員（以下、派遣職員）の支援が終了した平成29年度以降については、町職員は引き続き町文化財整理室での作業を基本としたが、その支援にあたった宮城県職員（以下、県職員）については、町への出張支援ではなく、宮城県の埋蔵文化財整理施設である文化財課分室(仙台市宮城野区榴ヶ岡)で作業を主とした（第2章第2節 第7表参照)。この他、金属製品の整理・処理作業については、宮城県の保存処理施設である東北歴史博物館（多賀城市高崎）を拠点にし、東北歴史博物館職員の全面的な協力を得て実施した。

（１）出土遺物と調査記録全般の整理

①遺物洗浄・注記・接合・復元・補強

合戦原遺跡横穴墓地区（A 区）で出土した遺物のうち、金属製品を除く遺物の洗浄は、町埋蔵文化財整理室において手作業での水洗により実施した。比較的脆い遺物(弥生土器・土師器)については、土器強化剤(使用薬剤：バインダー17)による強化処理を施した。

出土遺物のうち、土器等には遺跡名の略号・調査年・出土遺構・層位・取り上げ No を注記した。同作業は

ジェットマーカー(第一合成)をリースして実施した。注記する遺構番号は現地調査時の仮番号のままである。

接合作業は、同一遺構内出土遺物について実施したのち、必要に応じて遺構間接合等を行う手順で進めた。破片の接着に当たっては、接着剤としてセメダインCを用いた。なお、合戦原遺跡横穴墓地区（A区）で出土した須恵器について遺構間で接合するものが多数確認されたため、今回の接合作業では、原則、土師器を含む全ての土器類について、遺構間接合の有無を確認している。

復元･補強作業は、原則として実測図作成が可能なものを対象とし、石膏を用いて実施した。作業の迅速化を図るため、本作業については業務委託も併用し作業を進めた（註2)。

以上は町担当職員（山田）と文化財調査指揮監督補助員（佐伯）の指示のもと、整理作業員が実施した。

②遺物分類･登録作業

出土遺物すべてを対象とし、種別ごとに分類した上で、金属製品を除く遺物については報告書に掲載する「抽出遺物」と、それら以外の「非抽出遺物」に二分し、それぞれに番号を与えた。

分類にあたり、町で使用した遺物略号は以下の通りである（**ゴシック体**:A区で実際に使用した略号)。A=「縄文土器」、**B=「弥生土器」**、**C=「土師器･**土師質土器」、D=「埴輪」、**E=「須恵器」**、**F=「土製品」**、G=「瓦」、H=「瓦質土器」、I=「陶器」、J=「磁器」、**K=「石器･石製品」**、L=「木器･木製品」、M=「骨製品」、**N=「金属製品」**、**O=「製鉄関連遺物」**、P=「貝製品」、**Q=「硝子製品」**、**R=「動物依存体」**、V=「縄文土器または弥生土器または土師器」、W=「縄文土器または弥生土器」、X=「その他」、Z=「不明品」。

「抽出遺物」には、種別略号に種別ごとの通し番号を付す方式により、「E-1(=須恵器 抽出 1)」のように登録番号を与えた。この番号は、今回の調査における確認調査地区（F～H区)、横穴墓地区（A区)、製鉄地区（B～E 区）の全体で通し番号としてある。本書では掲載図･遺物観察表等にも付記し、今後の資料閲覧等における便宜を図った。「非抽出遺物」についても、非抽出を意味する略号「Y」を頭に付した上で「Y･E-1(=須恵器 非抽出 1)」のように登録番号を与え、すべて保管している。

金属製品については、保存処理の都合上、土・錆落とし等の器種不明の段階で管理番号を付す必要があったことから、他の遺物とは異なり、全て抽出遺物と同等の扱いの登録番号（N-1～）を付すこととした。したがって、金属製品の登録番号は非抽出遺物と抽出遺物を区別したものでない。

③遺物総量把握作業

出土遺物全体を対象として、総点数･総重量把握作業を実施した。A区(横穴墓地区)での遺構単位の出土遺物の集計は本章第3節において示す。

遺物点数は接合作業後の点数である。ただし、土器類については「接合後の個体数」と「接合しなかった破片の破片数」を分けて示すこととした。これは横穴墓で使用された土器類の個体数をできる限り示すためである。遺物重量については、総量提示のための集計表では接合･復元後の石膏部分を除外した。なお、金属製品については錆落とし前、錆落とし後、樹脂含浸後で重量が変化することから、本表には掲載せず、点数のみを示すこととした。重量把握方法は、土器類 5g 単位、石製品・土製品・玉製品 0.1g 単位、硝子製品 0.001g 単位、製鉄関連遺物 10g 単位での計測とした。したがって、集計表の合計欄には便宜的に 1g の桁まで記してあるものの、有効数字の最小桁はg(グラム)単位での10の位となる。

④遺物抽出作業

本書に掲載する遺物の抽出作業は、町職員、派遣職員、県職員が分担して行った。土器類・製鉄関連遺物については町職員（山田)、玉製品類・土製品・石製品については派遣職員（城門)、金属製品については派遣職員（城門・瀧本）による基礎整理後に県職員（廣谷・高橋・鈴木）が担当した。

⑤遺物実測

遺物の実測（遺物観察表の作成含む）は、町職員・派遣職員・県職員が実施した。実測図は原則として

手実測により作成したが、金属製品については必要に応じてX線写真の観察結果に基づく作図も併用した。土器類は町職員（山田）・県職員（**高橋**・**廣谷**・古川・熊谷）、玉製品類・土製品・石製品は派遣職員（**城門**）、金属製品（註3）は県職員（**廣谷**・**高橋**・**鈴木**・**山口**・古田・熊谷）が担当した（ゴシック体で示した職員が主体的作業実施者）。玉製品のうちガラス玉については、原寸大の写真を掲載する方針とした。図に添える拓本図作成は整理作業員が作業を担当した。このほか、土器類・金属製品の実測図作成および土器類の拓本の一部に関しては、作業の迅速化のため業務委託による図化も併用した（註2）

⑥遺物実測図のトレース･加工、写真撮影

手実測による遺物実測図をスキャナーで取り込み、PC上でデジタルトレースを実施した。併せて、拓本図についてもスキャナーで取り込み、報告書掲載用に加工した。以上の作業は、主に町文化財調査指揮監督補助員（佐伯）が担当したが、一部の金属製品については県職員（鈴木・廣谷）が実施した。町の既刊報告書の掲載方針と表現の統一を図るため、編集段階で町担当者による補訂を加えたケースがある。

遺物の写真撮影については、一部の遺物（部分カットなど）を除き、業務委託により実施した（註2）。

⑦遺物展開図の作成

遺構間接合遺物の情報掲載のため、「3Dモデル編集のための回転撮影システム(CUBIC)」を導入し、遺物展開図を作成した。その作業は、主に町文化財調査指揮監督補助員（佐伯）が担当した。具体的には、「3D回転撮影システムSR900(CUBIC)により対象遺物の写真撮影」→「撮影データの加工（デジタル画像の写真測量処理と3D空間データ生成ソフトMetashape Standard1.5.0で3Dモデルを作成)」→「トレースくん2021タイプCによる6面展開図のデータ作成」→「Adobe Illustrator CS5による加工」の手順で作業にあたった。

⑧遺構図等の整理

遺構図の整理作業は、原則として現地調査担当者が行うこととした。しかし、任期が限られる派遣職員や県職員が全ての作業をこなすのは至難の業であり、最終的に整理･報告書作成担当者の手で一元的に校正を加えることは避けられなかった。したがって、平面図･断面図間での整合性確認、同種の遺構間での表現方法の統一、報告書全体としての線種等の統一、土層注記の表現や文言の統一等は、整理･報告書作成担当者の手で行った。遺構図に手を加える場合には、現地でその遺構を実見している町職員（山田）が行った。

報告書に掲載する横穴墓の遺構平面図・立面図の作成は業務委託（註2）により実施したが、その基礎的な作業及び受注業者への指示は平成28年度に派遣職員（長橋）が担当し、その後の作業は町職員（山田）が引き継いだ。遺構断面図のトレースは文化財調査指揮監督補助員（佐伯）が担当した。

⑨発掘調査報告書の編集、調査記録の収納･保管

報告書の執筆･編集は町職員が主体となり、部分的に県職員の協力を得て実施した。

デジタル遺物図･遺構図の調整･編集、写真画像の調整･図版作成、報告書版組み等には、現地調査で使用した「遺構くんcubic_B･Cタイプ 2014」(年度ごとに最新バージョンに更新)に加え「トレースくんcubic_Aタイプ 2014」(年度ごとに最新バージョンに更新)、「Adobe Illustrator CS5」、「Adobe Photoshop CS6」、「Adobe InDesign CS6」を使用した。表データ･報告書原稿の作成には「Microsoft Office Word･Excel」を使用した。本書に掲載したすべてのデータは、調査記録原本や出土遺物等とともに、復興交付金効果促進事業として新たに建設した町文化財収蔵庫(令和2年10月竣工)において収納･保管している。

（２）金属製品の保存処理

今回の調査で出土した金属製品の保存処理については、東北歴史博物館の全面的な協力を得ながら作業を進めた（詳細については第2分冊 第4章に記載)。当初は東北歴史博物館の保存処理室での作業を中心に対

応を進めたが、出土破片点数1,000点を超える金属製品の処理を事業期限内に完了させることは困難と判断したことから、その処理の一部を業務委託により外注し、作業を二分する方針とした（註2）。

東北歴史博物館内での保存処理は東北歴史博物館職員（及川、芳賀、森谷）が担当し、資料保管スペース確保だけでなく、日常管理についても全面的な協力を賜った。町は保存処理に係る資材提供や保存処理技術を有する整理作業員（藤澤）の雇用・派遣などを行った。

（3）自然科学分析・資料調査

今回の調査で出土した遺物の自然科学分析および資料調査等については、以下の機関への業務委託または協力により実施した（◎:業務委託　○:協力）。

◎放射性炭素年代測定　　㈱加速器分析研究所
◎鉄刀残存木製品樹種同定　古代の森研究舎
◎出土ガラス玉の分析　　東北大学 学術資源研究公開センター 総合学術博物館
○出土金属製品材質分析　　独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
　　奈良県立橿原考古学研究所、東北歴史博物館
○出土金属製品X線画像撮影　東北歴史博物館
○出土金属製品X線CT画像撮影　東京国立博物館、東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館

3　線刻壁画の移設保存

合戦原遺跡横穴墓地区（A区）で発見された線刻壁画のうち、38号横穴墓（ST38）の玄室奥壁及び左側壁の壁面について移設保存した。移設先は山元町歴史民俗資料館である。移設作業にあたっては、文化庁文化財部古墳壁画室、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、東北歴史博物館、㈱スタジオ三十三などの関係機関より全面的な協力をいただいた。その詳細については第5分冊にまとめた。

第3章第1節1～3 註

1)平成23年6月3日付け宮城県教育委員会教育長通知(文第268号)「東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」は、発掘調査等の届出･通知の取扱い、試掘･確認調査の実施範囲、本発掘調査の実施範囲等を網羅した内容となっており、「本発掘調査は、工事による掘削が遺構を破壊する場合に限って行うものとする」ことなどが明記された。

2)今回の発掘調査においては、復興事業の迅速化を目的に、可能な限り業務委託の導入を図った。現地調査及び整理報告書作成の実施にあたり導入した委託業務とその受託機関は以下のとおりである〔(　) 内は受託機関の作業担当者〕。

〔現地調査〕
○遺構三次元計測：㈱シン技術コンサル(小池 雄利亜・志村 将直)
○遺構空中写真撮影：㈱シン技術コンサル(小池 雄利亜・志村 将直)/日本特殊撮影㈱(大西 正倫・芹澤 智憲)

〔整理作業〕
○遺構平面・立面図作成：㈱シン技術コンサル(小池 雄利亜・志村 将直)
○出土遺物実測図作成(拓本作成含む)・遺物復元業務：㈱シン技術コンサル(竹越 亜希子)
○遺物写真撮影　ガラス玉：東北大学　学術資源研究公開センター 総合学術博物館(藤沢 敦)
　金属製品：㈱東都文化財保存研究所(菅野 真広)/㈱シン技術コンサル(小林 朋恵)
　㈱アートプロフィール(小村 仁)/㈱シン技術コンサル(竹越 亜希子)
　上記以外の遺物：　㈱アートプロフィール(小村 仁)/㈱シン技術コンサル〔竹越 亜希子〕
○金属製品保存処理・実測図作成：㈱東都文化財保存研究所(菅野 真広)/㈱シン技術コンサル(小林 朋恵)

3)金属製品の実測図作成については、平成28・29年度に派遣職員（城門・瀧本）も一部の作業に携わったが、その後の実測図作成と派遣職員作成の既存図面の再点検・修正は県職員が担当したことから、本書においては最終的な図面決定を判断した県職員のみを担当者として明記することとした。業務委託により作成した金属製品の実測図も同様である。

４　調査成果の報告方針

今回の業務における本発掘調査対象地区（A～E 区）のうち、本章において報告するのは横穴墓地区(A 区)のみであり、その調査面積は 5,660 ㎡である(第 13・15～19 図)。横穴墓地区以外の B～E 区の 4 地区（調査面積 7,330 ㎡）については既刊の『製鉄遺跡・行政対応編』を参照していただきたい。

遺構の配置、各遺構の性格と属性、遺構単位の出土遺物点数･重量等、現地調査および整理作業を通して得た所見の詳細を第 2 節以降に掲載する。

ここでは、本書で報告する調査成果掲載に当たり、注意を要する点を改めてまとめておく。

（１）遺構の報告について

各種遺構の記載を行う前に、本書の報告の主となる「横穴墓」について、各部位名称と遺構の計測基準、玄室の天井形態は以下の基準で報告することとした。

１）横穴墓各部位の名称と計測基準

①各部位の名称（第 7 図）

本書で報告する横穴墓の部位名称については、まず横穴墓を閉塞施設の内と外に分け、外側を一括して「墓前域」、内側を入口から奥に向かって「羨門」→「羨道」→「玄門」→「玄室」と呼ぶことにした(註 1)。また、基本部位と付属施設等の各名称の定義は以下のとおりとした。

【基本部位の名称】

玄　室：玄門から奥に位置する埋葬施設。玄門側の壁を「前壁」、奥側の壁を「奥壁」、玄門を背にし、右側にある壁を「右側壁」、左側にある壁を「左側壁」とした。

玄　門：玄室と羨道の境界に位置する入口部。

羨　道：「墓前域」から「玄室」に至る通路。本書では玄門と羨門の間の範囲を羨道とした。

羨　門：羨道と墓前域の境界に位置する入口部。

墓前域：羨門より外の空間（閉塞施設外）を一括して「墓前域」とした。

【付属施設等の名称】

溝　跡：墓前域、墓前域と羨門の境界、羨道、玄室内などで確認された溝状の遺構。他の報告でみられる「閉塞溝」もこの範疇に含まれる。

小　穴：墓前域、玄室などで確認されたピット、柱穴。

小横穴：横穴墓の付属施設と判断される横方向に掘り込まれた小穴。

台　床：玄室底面に造り出された段状の高まりを「台床」とした。他の報告でみられる屍床と同義である。

閉塞石：羨門と墓前域の境で出土した礫。出土位置からみて、横穴墓の入り口を閉塞するために使用されたと推定されることから、「閉塞石」とした(註 2)。

敷　石：主に玄室底面に敷かれた川原石。

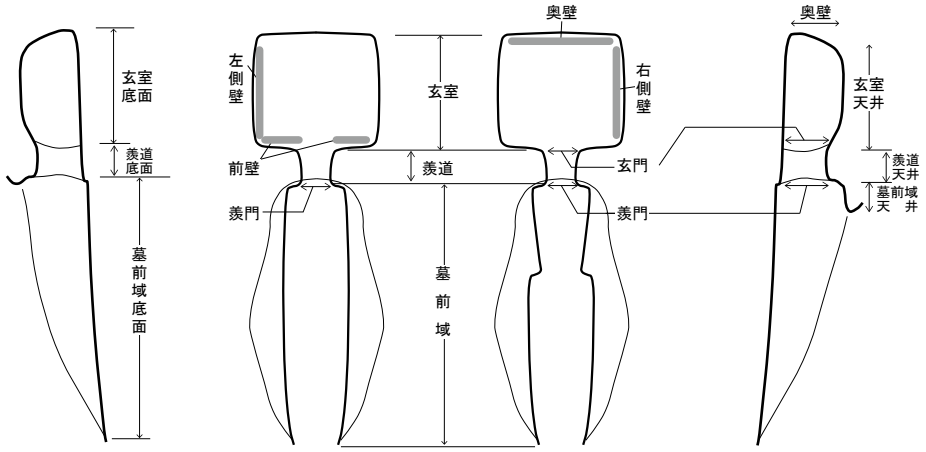
工具痕：横穴墓掘削の際の工具痕跡。

②遺構の計測基準（第 7 図）

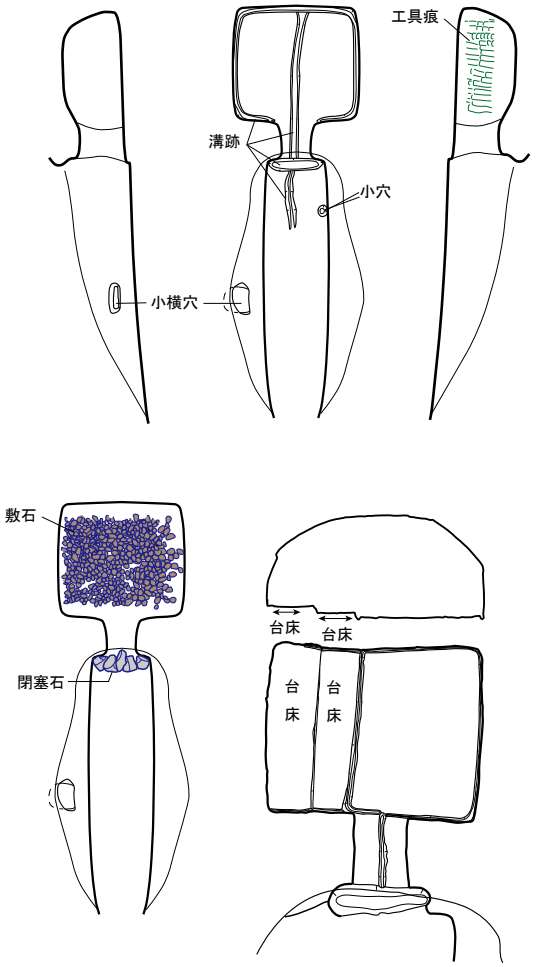
遺構の計測基準については、文化庁の『発掘調査のてびき-各種遺跡調査編-』に示された指針に従った(文化庁 2013､p.39 ほか)。本書で示す遺構計測値の大半は現地調査の段階で調査担当者が手測りにより計測した値であるが、整理作業の段階に図面上で計測した値も含まれる。

計測値を示す単位は m（メートル）を用い、現地での手測りによる計測値は「0.45m」のように小数点第二位まで、現地調査終了後の図面上での計測値は「0.4m」のように小数点第一位までを示すのを基本とした。断面図中の水準測量値は、便宜的に「17.5m」のように小数第一位までの表示としたが、実際の

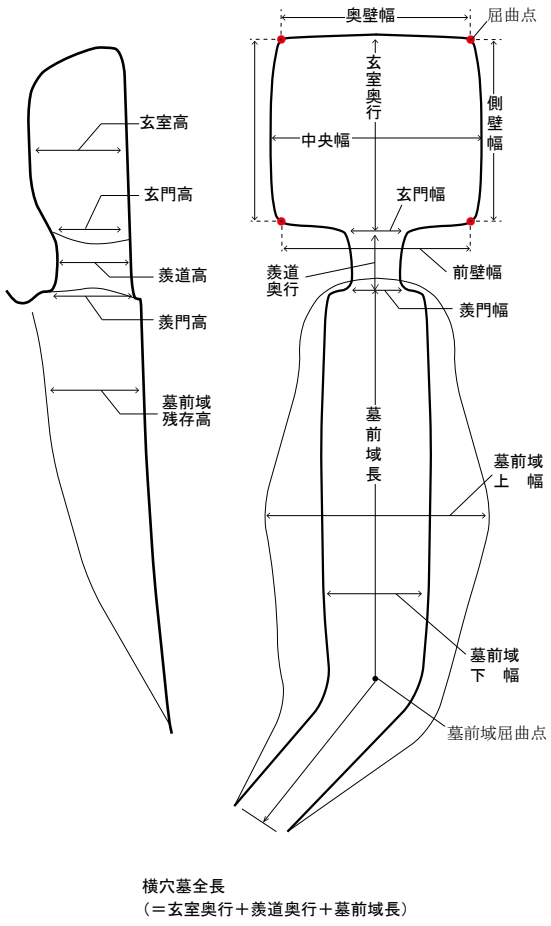
横穴墓
基本部位名称



付属施設等名称



横穴墓 遺構計測基準



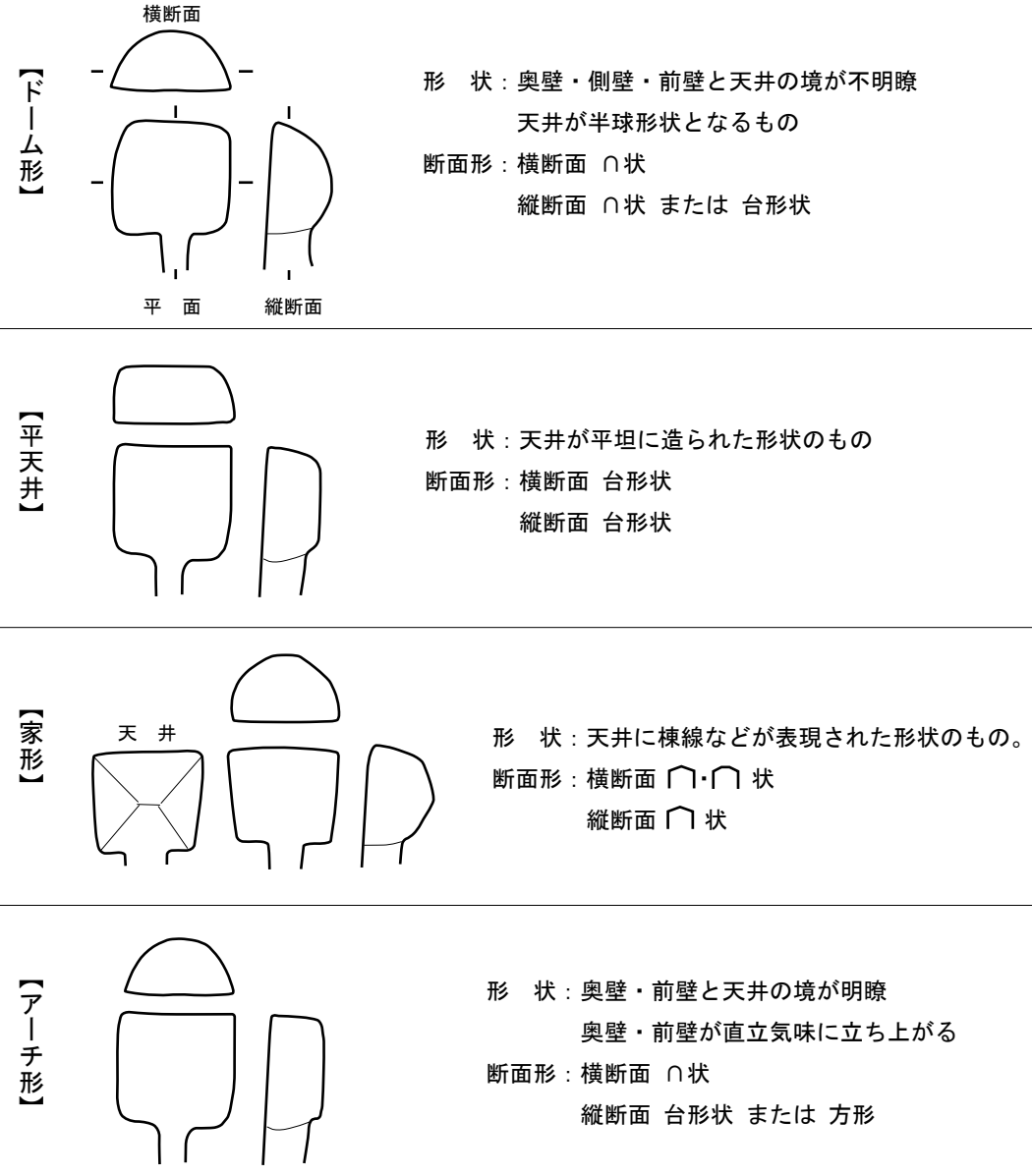
第７図　本書で使用する横穴墓の部位名称と遺構計測基準

有効数字の最小桁は小数第二位、すなわち1cmの位である。

玄室底面の面積については、完成した平面図をスキャナーで取り込み、「遺構実測支援システム(電子平板)遺構くんcubic_B･Cタイプ 」を用いて求積した値（㎡）を掲載した。

２）横穴墓玄室の形態分類（第８図）

横穴墓の玄室形態のうち、天井形については第８図の基準により分類し報告することとした。玄室の平面形については、「方形」「台形」「長方形」など客観的かつ明確な分類基準を提示することは困難と判断し、本書においては積極的な分類はせず、四隅の一部などが若干崩れた形態のものや、一見台形状に見える形態であっても、俯瞰的にみて概ね方形を呈しているものは「隅丸方形を基調とする」等と報告することとした。



第８図　本書で使用する横穴墓玄室天井形の分類基準

（2）遺物の報告について

1）遺物実測図の掲載方法

①実測図の表記方法

遺物実測図は、遺構ごとに掲載し、同図版内に遺物の計測値・特徴等にまとめた「遺物観察表」を添える形とした。このうち、「ガラス玉」については実寸の俯瞰写真のみ掲載、「製鉄関連遺物（羽口）」については断面図に俯瞰写真を添えるという「簡略化」措置を採った。土器類体部破片等の実測図において、器面内外面両方の拓本を図示する際には、完形品実測や反転復元実測の場合と同様に、左から順に外面→内面→断面とした。内面を図示不要と判断した場合には、上記の並びから内面を抜いて、外面→断面とした。外面を抜いて内面のみ図示するケースはない。底部外面の拓本は、図の下に配置した。

なお、今回の掲載した土師器の実測図のうち、遺物断面が図面左側となっているものについては、実測図作成後に器種を変更した遺物（具体的には当初は坏・鉢としていたものを後の分類で蓋に変更したもの）である。本来であれば遺物再実測の対応が望ましいところではあったが、報告書作成に係る時間的制約との兼ね合いから、遺物実測図を180°回転させ掲載する対応としている。

②各遺物の部位・調整技法等の名称

本書で扱う遺物のうち、土器類の調整技法については第9図、金属製品の各遺物の部位名称については第10～12図に掲載した（註3）。

③掲載縮尺

各遺物の掲載縮尺については、土器類1/3・1/4・1/6、石製品1/2・1/3、土製品1/2、玉製品1/1または1/2、鉄刀・刀子類1/3、鉄鏃1/2、両頭金具・帯金具・耳環1/1、その他の金属製品1/2を基本とした。また、掲載図版内にスケールを付した。

④その他

漆や金などの付着物等を確認した遺物については、実測図内にその範囲を明示するとともに、その都度遺物掲載図版内で凡例等を付すこととした。

2）遺物観察表の掲載内容

①遺物番号・器種名

遺物番号は、遺物抽出時に付した番号を「登録欄」に掲載した。そのうち、接合関係はないが同一個体と判断した遺物については遺物番号を「E-100a」「E-100b」と表記した。また、鉄鏃束等のように別個体の遺物が癒着してしまっているものについては、原則1つの遺物番号を付し、その中で把握できる個体ごとに「①」「②」・・・の番号を付し、それぞれの遺物を図上で識別できるようにした。遺物実測図に添えた表に掲載した各遺物の器種名は、第5章において分類したものを用いている。

②出土位置・層位

横穴墓で出土した遺物の出土位置については、同一層であってもその位置が異なる場合があることから、観察表に「出土位置欄」を設け、その出土位置を玄室・羨道・墓前域に分けて表記することとした。

出土層位については、原則、出土した細別層名で表記することとしたが、実測図は遺物種別・大別層ごとにまとめて掲載する方針とした。

③各遺物の特徴

各遺物の各特徴等については、種別ごとに作成した項目内に掲載した（註4）。このうち、遺物寸法については、推定復元値は（ ）を付して表示し、残存値には数値の前に「残存」を付した。その単位はcm(センチメートル)を用い、「1.1 cm」のように小数第一位まで記すのを基本としたが、ガラス玉については単位をmm(ミリメートル)とした。なお、遺物の計測値は、原則として実測図上での計測を基本としてい

る。また、鉄鏃などの複数遺物が癒着している金属製品のうち、遺物の全容を図示できない箇所に位置する遺物は、手計等により計測できた値を掲載することとした。したがって、その計測値を図上で確認できないものがあることを申し添えておく。遺物の寸法を記載するに当たり使用した計測基準については、文化庁が『発掘調査のてびき-整理･報告書編-』で示した指針を基本としている(文化庁 2010b)。

④遺物写真

遺物写真は「第４分冊 写真図版編」に掲載した。遺物の写真番号は「写真図版欄」に明記した。

３）遺構間接合遺物

①遺構間接合遺物の整理方法

横穴墓地区(A区)の出土遺物には､「別々の遺構出土の破片が接合する遺物(以下､遺構間接合遺物)」が多く含まれていた。その総数は図示できたもので須恵器 55 個体を数える。その他の遺物で遺構間接合遺物は確認されていない (註 5)。

遺構間接合遺物の整理は､①各遺構内での接合作業　→　②遺構間での接合関係の確認･調書作成　→　③遺物へのマーク添付　→　④6 面展開図の作成　→⑤接合遺物の図上表記　の手順で作業を進めた。具体的には、各遺構内の接合作業終了後、ST1 と ST2 の接合関係の確認、次に ST1 と ST3 の接合関係の確認といった流れで作業を実施したわけであるが、その確認作業の対象となる横穴墓は 50 基（遺物が出土していない横穴墓は除外）あり、結果として 1,225 通りの組み合わせの確認が必要となった。遺構間接合遺物が確認された場合は、別に接合破片の情報・点数を記録した調書を作成し、接合後もその破片が把握できるようマスキングテープ等で遺物にマークを付した。この作業により、遺構間接合遺物の構成破片数の把握が可能となった（例：須恵器甕１は 40 点の破片により構成され、その内訳は ST1 出土破片 5 点と ST2 破片 35 点)。その後、遺構間接合状況の情報を提示するため、「3D モデル編集のための回転撮影システム(CUBIC)」により遺構間接合遺物の６面展開図（模式図）を作成し、その模式図に接合関係の情報を記載した。本書で掲載した「遺構間接合遺物展開模式図」がこれにあたる。

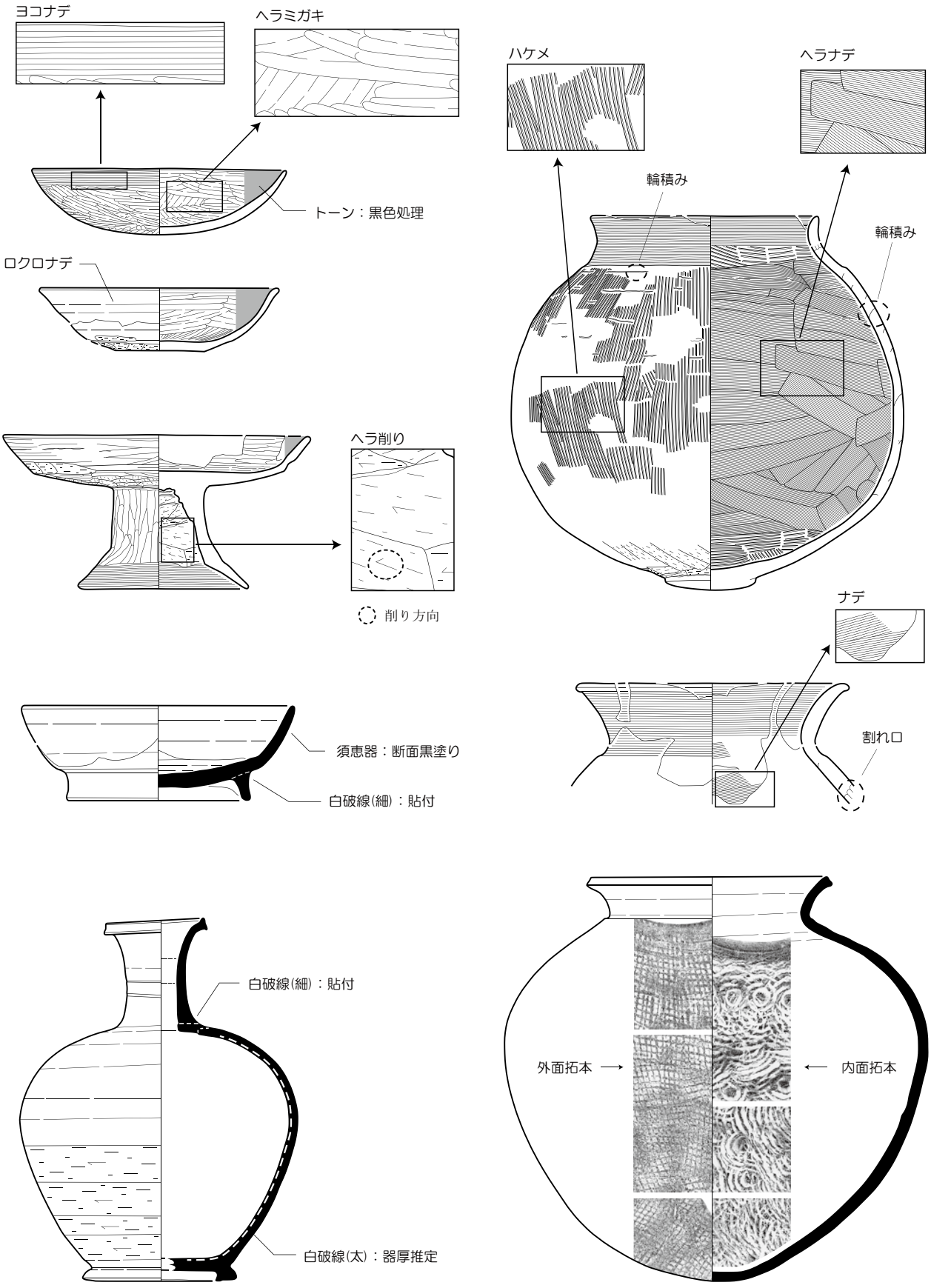
②遺構間接合遺物「主体遺構」の推定方法

今回の調査で出土した遺構間接合遺物については､「構成する遺物破片数が特定の遺構に偏っているもの」が大半であった（具体例：須恵器甕 E-135 の破片内訳は ST7 出土破片 1 点、ST9 出土破片 137 点、ST11 出土破片 1 点、ST12 出土破片 1 点)。これらの遺物の中には、数十ｍ離れた地点の遺構出土の破片と接合する例も多くある。このような須恵器の遺構間接合の事例は他地域の横穴墓でも報告されており、横穴墓で実施された葬送儀礼に関連するものと考えられている (池上 2015)。

こうした他地域の事例と本横穴墓群内での出土状況を踏まえ、今回の調査で確認した遺構間接合遺物については､「ある特定の遺構での祭祀時に破砕され、その破片の一部が別の横穴墓に意図的に散布された」可能性の高い遺物と判断した (註 6)。そして、本書では須恵器の破砕行為を行った「ある特定の遺構」を「主体遺構」と呼ぶこととし､「遺物を構成する破片が最も多く出土した遺構」を遺構間接合遺物の「主体遺構」と推定した（上記の例に挙げて具体的に説明するのであれば、須恵器甕 E-135 を使用した主体遺構はその構成破片が最も多く出土した ST9 であり、そこで破砕された須恵器の破片が ST7・11・12 の 3 基の横穴墓に散布されたと推定)。

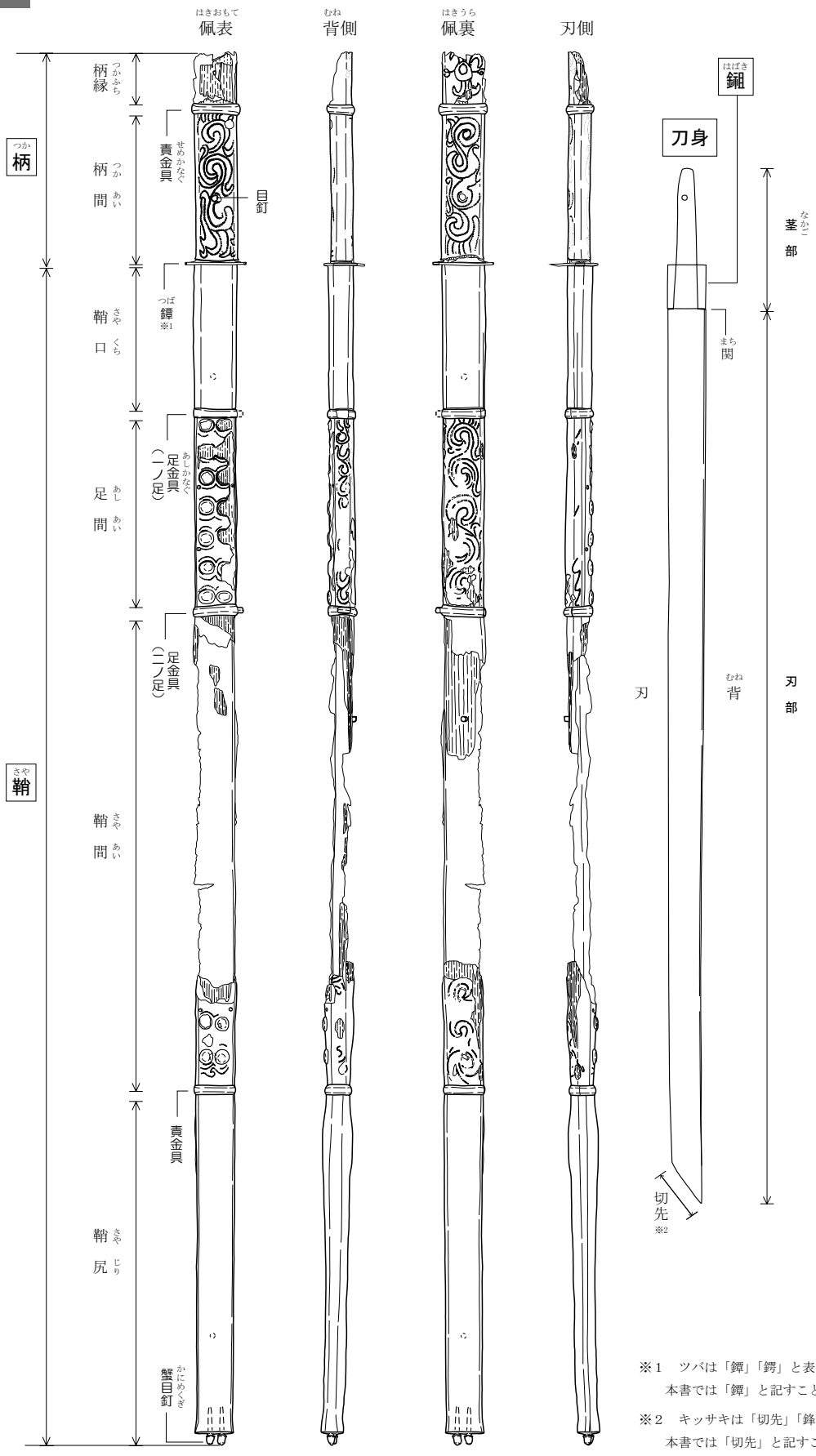
③遺構間接合遺物の報告方法

遺構間接合遺物の報告については、遺物実測図は「主体遺構」と推定される遺構図版内に掲載することとし、その主体遺構の記載内に「遺構間接合遺物一覧表」と「遺構間接合遺物展開模式図」を添える形とした。また、遺構間接合遺物の中で「構成破片数が少なく主体遺構の判別が困難な遺物」については､原則として遺構番号の若い遺構に掲載することとした(ST3 と ST4 の遺構間接合遺物は ST3 に掲載)。



第9図　土師器・須恵器凡例図

装飾付大刀

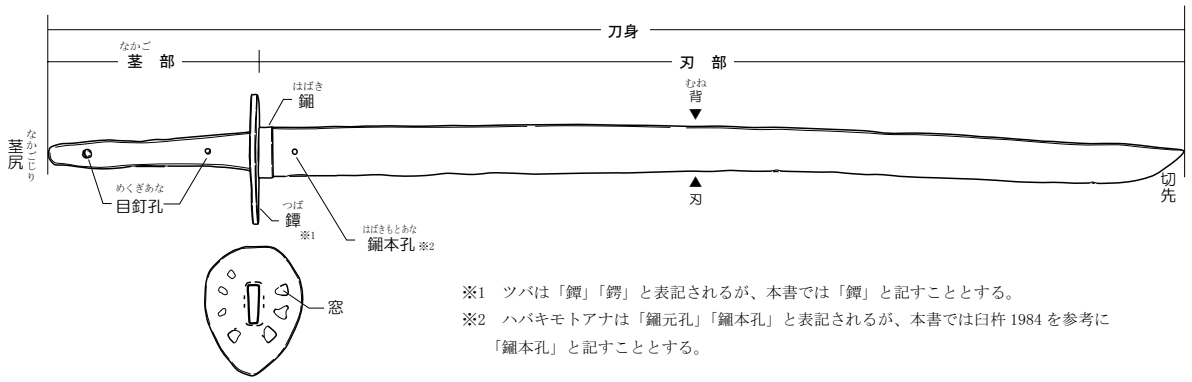


※１　ツバは「鐔」「鍔」と表記されるが、
　　本書では「鐔」と記すこととする。

※２　キッサキは「切先」「鋒」と表記されるが、
　　本書では「切先」と記すこととする。

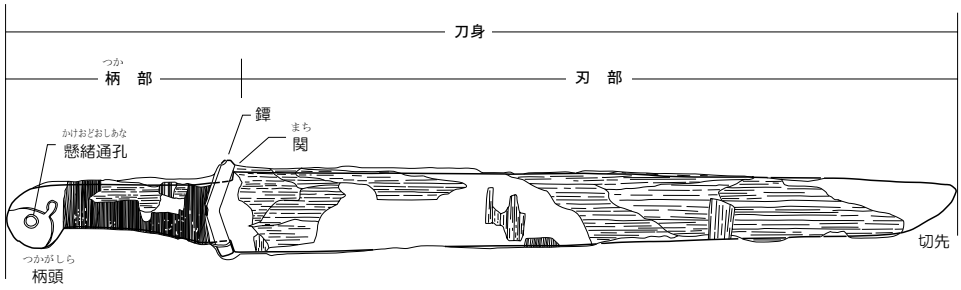
第10図　金属製品 部位名称図（1）

鉄刀・刀装具

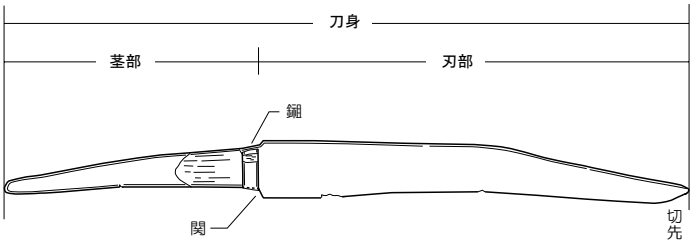


※1　ツバは「鍔」「鍔」と表記されるが、本書では「鐔」と記すこととする。
※2　ハバキモトアナは「鎬元孔」「鎬本孔」と表記されるが、本書では臼杵 1984 を参考に「鎬本孔」と記すこととする。

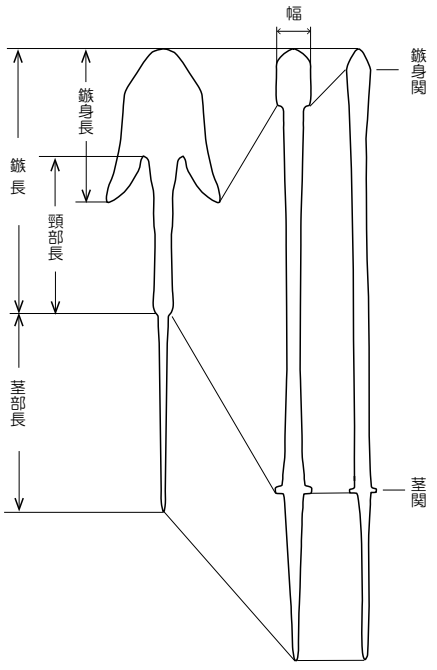
蕨手刀



刀 子

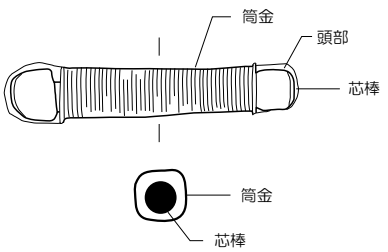


鉄鏃



両頭金具 ※

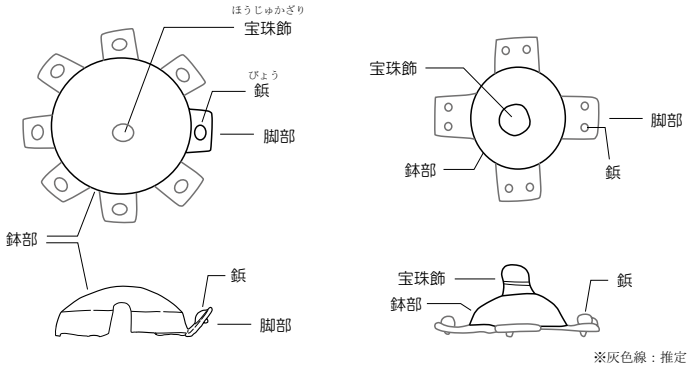
※　「弓金具」と記す事例があるが、木更津市教育委員会 2020 を参考に本書では「両頭金具」と記すこととする。



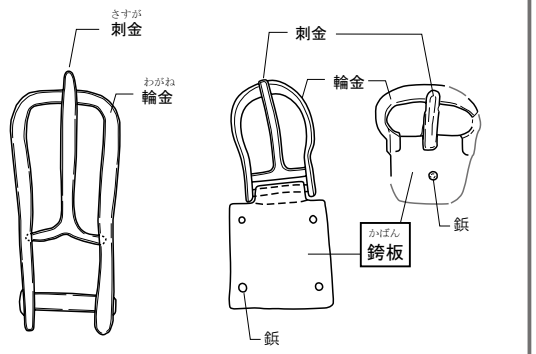
第11図　金属製品 部位名称図 (2)

雲珠・辻金具

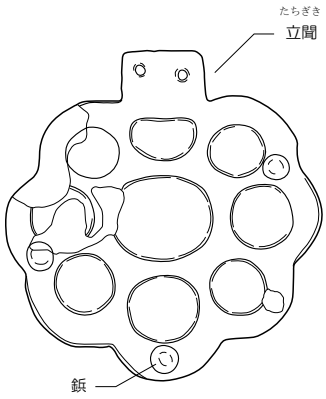
雲珠：5 脚以上
辻金具：3 ～ 4 脚



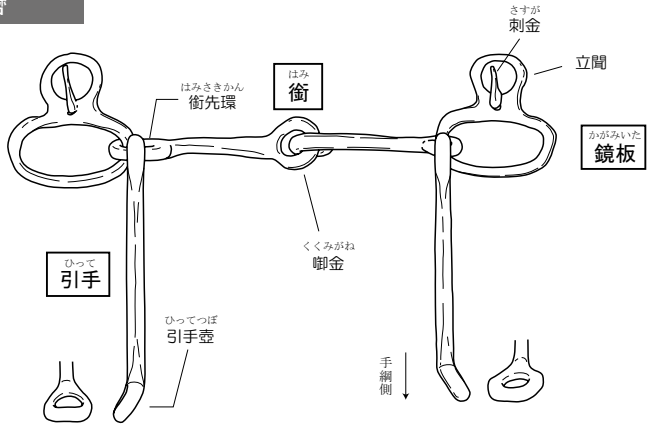
鋲具



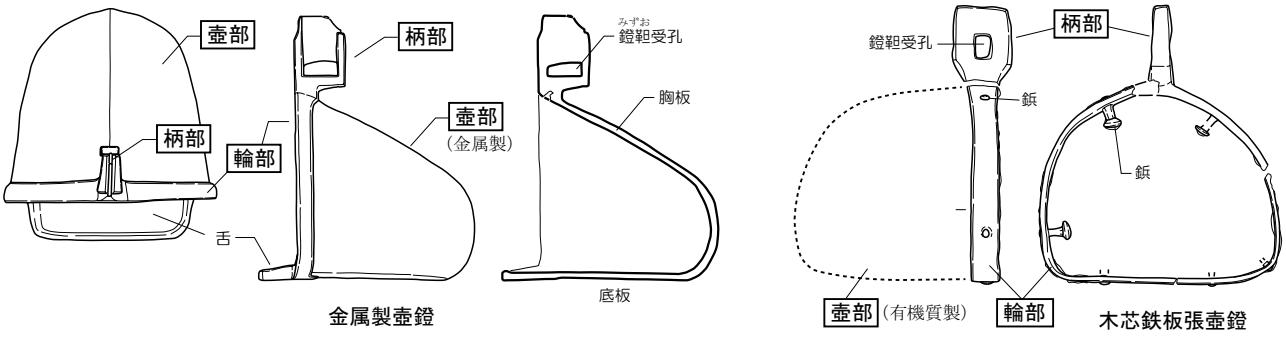
花形杏葉



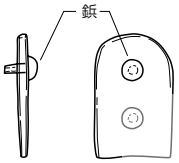
轡

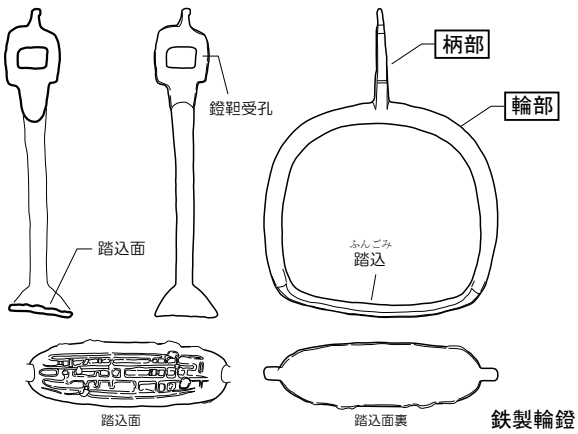


壺鐙・輪鐙



帯金具





第12図　金属製品 部位名称図 (3)

第 3 章第 1 節 4　註

1)　本報告における横穴墓部位名称の提示に関し、特に問題となったのが「玄門」「羨道」の扱いである。当地域（主に宮城県・福島県）では、横穴墓の閉塞箇所から玄室入口に至るまでの範囲を「玄門」、閉塞施設外の空間を「羨道・前庭部」と呼称し、さらには閉塞施設外の空間について平面・底面の形状変化等を根拠に「羨道」と「前庭部」を区別することが一般的である（氏家 1988）。一方、他地域においては、本地域でいう「玄門」の範囲を「羨道」と呼称している地域も多い（文化庁 2013）。こうした現状を理解しつつ、今回の横穴墓の現地調査記録作成に当たっては、当地域の一般的な部位名称を採用する方針で調査を進めることとした。しかし、その過程で、実際に検出される横穴墓の閉塞施設外の区域について、「羨道」と「前庭部」を明確に区別できないケースが多発した。こうした状況を踏まえ、合戦原遺跡 A 区で検出された横穴墓の部位名称については、当地域の一般的な部位名称を使用せず、形態的特徴が類似する九州地方の部位名称を用いることとした（文化庁 2013）。なお、閉塞施設より外の空間の名称については、池上悟が提唱する「墓前域」の名称（特定の形状を意識したものでなく、“墓の入り口の前方域に意識的に形成された部分”であり墓前祭が執行された場所）を採用した（池上 2004）。

2)　閉塞石の石材については蟹澤聰史氏（東北大学）から御教示を賜った。

3)　第 10～12 図の部位名称等については以下の文献を参考にし、金属製品の整理を担当した県職員の指導のもと、町職員が作成した。装飾付大刀・鉄刀：臼杵 1984、島根県埋蔵文化財センターほか 2001、高崎市観音塚考古資料館 2006、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008、菊地 2010、埼玉県立歴史と民俗の博物館 2014、兵庫県立考古博物館 2018／蕨手刀：黒済 2016・2018／鉄鏃：平林 2013、川畑 2015／両頭金具：木更津市教育委員会 2020／馬具類：坂本 1985、末崎 1990、島根県立八雲立つ風土記の丘 1996、埼玉県立さきたま資料館 1997、高崎市観音塚考古資料館 2006、群馬県立歴史博物館 2020。

4)　遺物の特徴のうち、玉製品の材質について、ガラス製品は藤沢敦氏(東北大学総合学術博物館)、石製品は大賀克彦氏(奈良女子大学)からご教示を賜った。その他、写真のみ掲載した動物遺存体の同定は西村力氏(宮城県教育庁文化財課)にご指導をいただいた。

5)　今回の整理作業で本格的な遺構間接合の有無を確認した遺物は、土師器と須恵器である。その他の玉製品や土製品・石製品については、その多くが完形での出土であり、実際に遺構間で接合する遺物は確認されていない。金属製品については、その保存処理を含む一連の整理作業を東北歴史博物館と民間業者（業務委託）の 2 ヵ所に分けて実施し、かつ、全ての遺物処理完了が令和 3 年度末となった関係から、遺構間接合の確認を十分に行えていない。金属製品に関しては、今後の再整理等で改めて遺構間接合の有無を確認する必要がある。

6)　今回報告する遺構間接合遺物の中には、隣接遺構から自然流入したと判断される遺物も含まれる。したがって、本書で報告する遺構間接合遺物の全てが「祭祀により破砕・散布された遺物」と指すわけでない。各遺構から出土した遺構間接合遺物の解釈については、第 3 章 3 節以降の各記載を参照されたい。

第 3 章第 1 節　引用・参考文献

池上悟 2004「横穴墓前側の名称」『日本横穴墓の形成と展開』p39-41 雄山閣
池上悟 2015「横穴墓の大甕祭祀」『横穴墓論攷』p45-54 六一書房
氏家和典 1988「東北横穴の問題」『東北古代史の基礎的研究』東北プリント
臼杵勲1984「鑢本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』第31巻第2号
小山正忠･竹原秀雄編 1967『新版標準土色帖』(2010年版)
川畑純 2015『武具が語る古代史-古墳時代社会の構造転換-』京都大学学術出版会
菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』
木更津市教育委員会 2020「第 6 節　弓具」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書　第 1 分冊　本文編』
群馬県立歴史博物館 2020『国宝決定記念　第 101 回企画展　綿貫観音山古墳のすべて』
黒済和彦 2016「茨城県出土の蕨手刀について」『十五郎穴横穴墓群-東日本最大級の横穴墓群の調査-』(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第 42 集
黒済和彦 2018『蕨手刀の考古学』ものが語る歴史シリーズ 39　同成社
埼玉県立さきたま資料館 1997『古墳時代の馬の装いーさきたまに馬がやってきた』
埼玉県立歴史と民俗の博物館 2014『特別展　甦る鉄剣』
坂本美夫 1985『考古学ライブラリー34　馬具』　ニュー・サイエンス社
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 184 集
島根県立八雲立つ風土記の丘 1996『特別展　黄金に魅せられた倭人たち』
島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 10
末崎真澄 1990『日本馬具大鑑』第一巻古代上　日本中央競馬会
高崎市観音塚考古資料館 2006『観音塚古墳の世界ーきらめく大刀、馬具、装身具ー』
兵庫県立考古博物館 2018『特別展　装飾付大刀と日本刀』
平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の変遷」『物質文化』93 号
文化庁 2010a『発掘調査のてびき　集落遺跡発掘編』　同成社
文化庁 2010b『発掘調査のてびき　整理・報告書編』　同成社
文化庁 2013『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』p39-40　同成社

第２節　A区の基本層序

合戦原遺跡横穴墓地区(A区)は発掘区西側から東に向かって舌状に延びた標高20～34mの丘陵南斜面に位置する。この西から東に延びる丘陵の尾根は、A区中央付近の標高30m付近で東と南に枝分かれし、丘陵裾部に至る。A区では、この丘陵の東・南・西向きの斜面で横穴墓・土坑・性格不明遺構を検出した。

A区発掘区内の基本層序は表土から3層(Ⅰ～Ⅲ層)に大別した(第13・14図)。この他、A区おいては横穴墓造成時に発生したとみられる掘削廃土も確認した。各層の特徴は以下のとおりである。大部分の遺構はⅢ層上部で検出したが、標高の低い斜面部の一部ではⅡ層上面およびⅠ層とⅡ・Ⅲ層の間に部分的に堆積する「横穴墓掘削廃土」の上面が掘り込み面となっている遺構もある。

【Ⅰ層】

表土・盛土・旧表土。地点により以下の3層(Ⅰa～Ⅰc層)に細別され、Ⅰc層→Ⅰb層→Ⅰa層の順で堆積する。

Ⅰa層　:現代の表土。土色は黒褐色(10YR3/2)、土性はシルトである。厚さは最大で0.30mで、A区のほぼ全域を覆う。

Ⅰb層　:盛土。土色は灰黄色(2.5Y6/2)・にぶい黄色(2.5Y6/3)、土性はシルトである。厚さは最大で0.75mで、黒色・地山ブロックを斑状に含み、現代の遺物が混入する。A-2区北側、A-3区北西、A-2区とA-3区の間の丘陵尾根頂部の平坦面(標高26～31m付近)に分布する。尾根上に埋設された現代の水道管及び水タンク設置に伴う整地・埋戻土とみられる。

Ⅰc層　:旧表土。土色はにぶい黄褐色(10YR5/3～4/3)を主とし、場所により暗褐色・黒褐色が認められる。土性はシルトで、厚さは最大で0.40mである。A区のほぼ全域に分布し、丘陵の斜面側に厚く堆積する。横穴墓造営以後～現代に堆積した自然堆積層である。

【Ⅱ層】

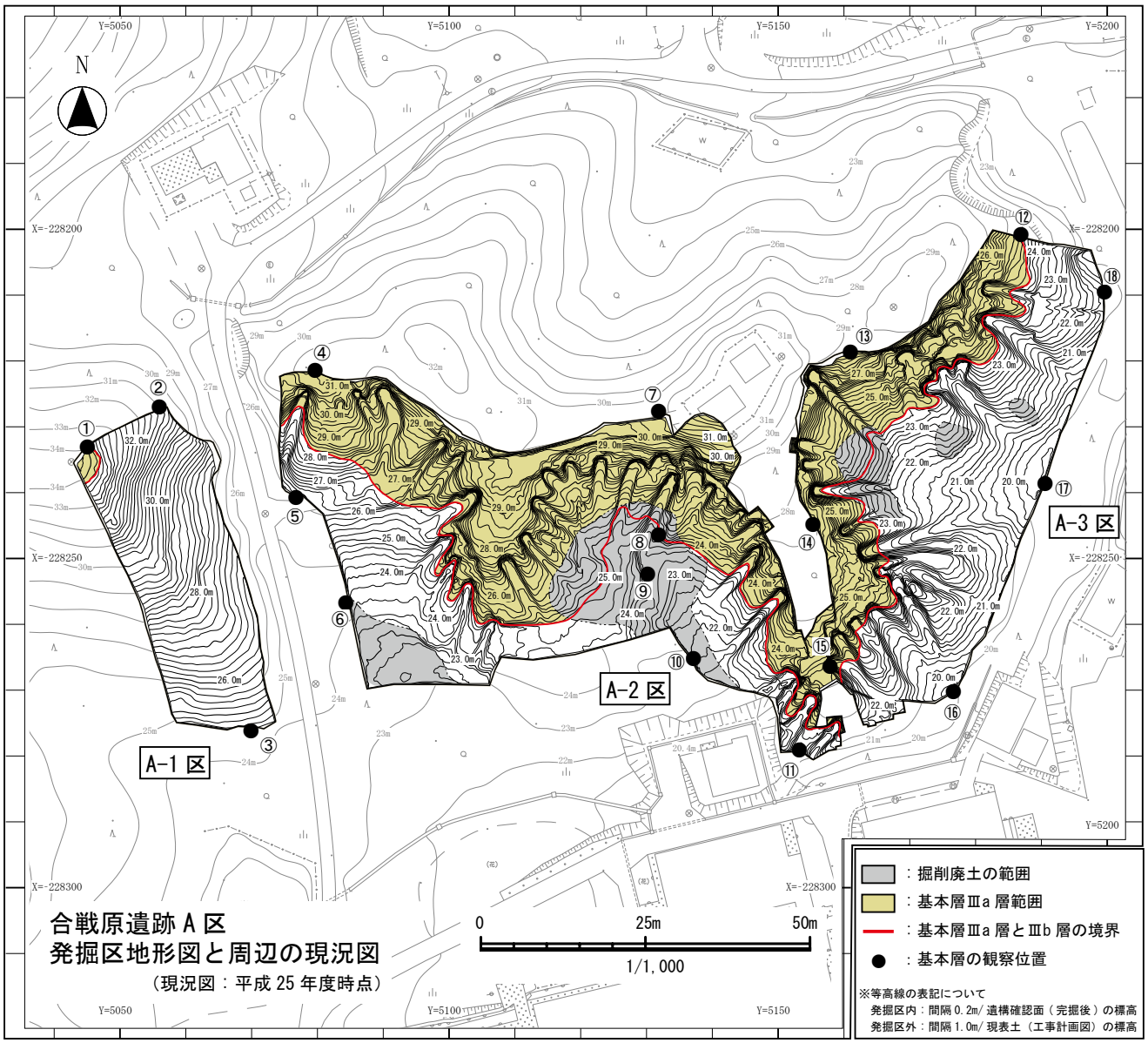
旧表土～地山漸移層。土色は褐灰色(10YR4/1)・灰黄褐色(10YR4/2)、土性はシルト～砂質シルトである。厚さは最大で0.15mで、丘陵の斜面側に分布する。遺物は確認されていない。以下で説明する横穴墓の掘削廃土に覆われていることから、横穴墓造営以前に堆積した自然堆積層とみられる。

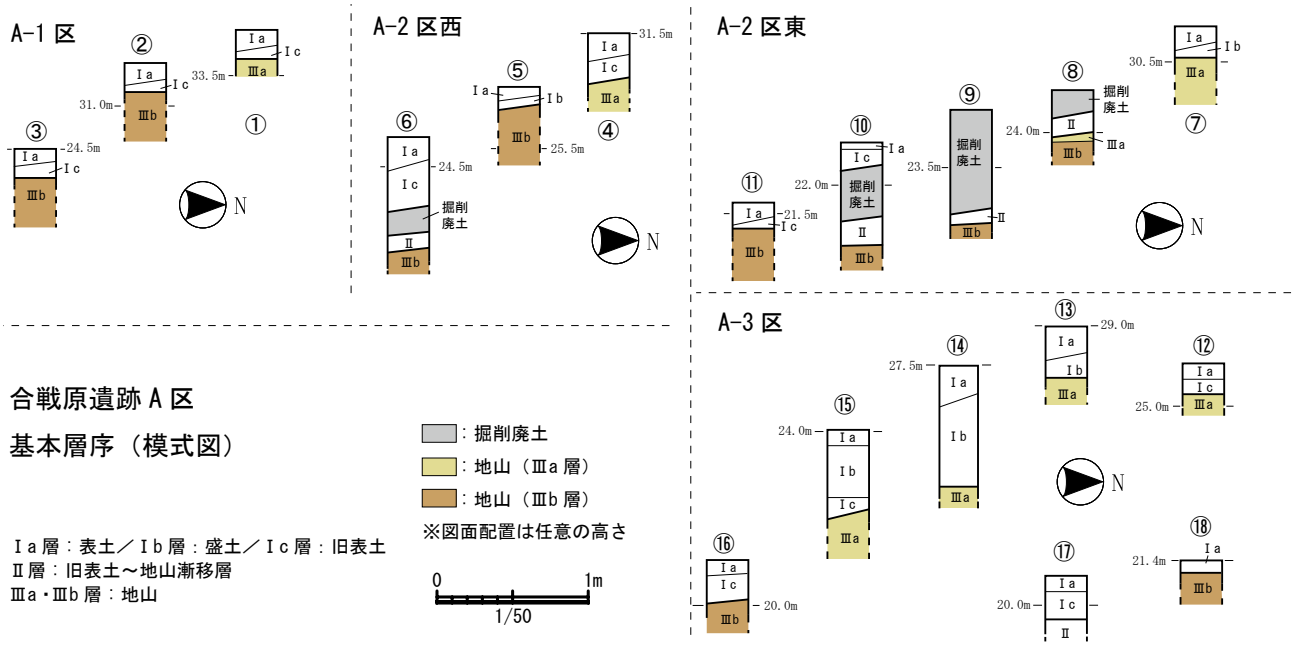
【Ⅲ層】

地山。自然堆積による無遺物層。Ⅲ層は、本地域を南北に走る割山隆起帯の東側(太平洋岸地帯)に分布する新第三系の久保間層～山下層に属する地層とみられる(註1)。地点により以下の2層(Ⅲa・Ⅲb)に細別される。Ⅲb層→Ⅲa層の順に堆積しているが、Ⅲa層はA-1区の標高33.4m以西、A-2・3区の標高22.0～28.5m以北のみに分布する。

Ⅲa層　:泥岩・シルト岩・凝灰質砂岩などで構成される岩盤層である。土色は灰白色(2.5Y8/2)・淡黄色(2.5Y8/3～8/4)・浅黄色(2.5Y7/3～7/4)・明黄褐色(2.5Y6/6)で、部分的に亜炭や軽石を含む。横穴墓の玄室が掘り込まれた地層にあたるが、今回の発掘調査全範囲(A～E区)でⅢa層が確認されたのはA区のみである。

Ⅲb層　:砂岩～シルト岩層。土色は黄褐色(10YR5/8)を主とし、地点により明黄褐色(10YR6/6・7/6)やにぶい黄橙色(10YR6/3・6/4・7/4)も認められる。土性は砂質シルトが主体であるが、地点により、しまりの弱い砂に近い地点とシルト質が強い地点がある。Ⅲb層は、A区以外の各発掘区(B～E区)で確認されている地山(Ⅲ層)に対応する地層とみられる。





第１３図　合戦原遺跡A区の位置と基本層序

【その他：横穴墓掘削廃土】

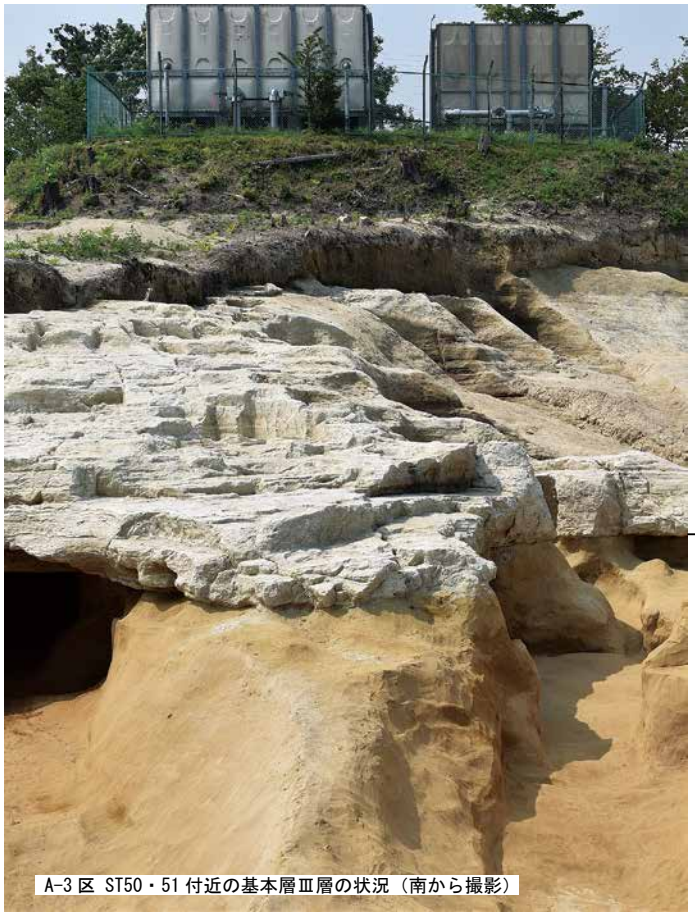
横穴墓が造墓された A-1 区および A-2 区の斜面側のみで確認した。土色はにぶい黄褐色（10YR4/3）を主とし、土性はシルト～砂質シルトである。厚さは最大で 0.80m で、基本層Ⅲa 層起源とみられる径 0.01～0.15m の岩盤ブロックを多量に含む。遺物は出土していない。基本層Ⅲ層または基本層Ⅱ層上部に堆積しており、一部の横穴墓の墓前域はこの上面から掘り込まれている。状況からみて、横穴墓造墓時の掘削廃土と判断した。A-2 区で確認した掘削廃土層内にはシルト土（自然堆積層）の間層が入る箇所もあることから、本層は、数時期にわたる造墓の結果形成された廃土層と考えられる。

第３章第２節　註

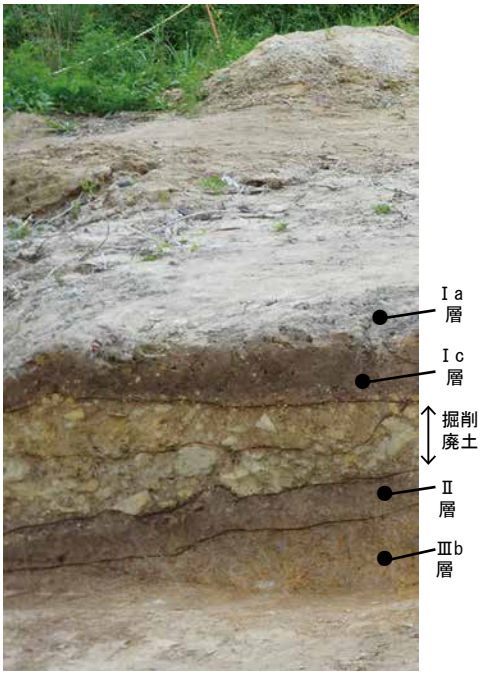
1)　A 区基本層Ⅲ層の地層については、平成 27（2015）年 12 月 14 日に蟹澤聰史氏から現地指導・助言をいただいた。

第３章第２節　参考文献

藤田至則・加納博・滝沢文教・八島隆一 1998「角田地域の地質」『地域地質研究報告』地質調査所



A-3 区 ST50・51 付近の基本層Ⅲ層の状況（南から撮影）



A-2 区横穴墓掘削廃土の状況【基本層⑩付近】
（東から撮影）

第１４図　合戦原遺跡A区
基本層序参考写真

第３節　検出した遺構と出土遺物

今回の本発掘調査を実施した合戦原遺跡 A 区では、横穴墓 54 基(ST1～54) 、土坑 4 基(SK46～49) 、性格不明遺構 3 基(SX1～3)を検出した(第 15 図)。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、玉製品、土製品、石製品、金属製品、動物遺存体、製鉄関連遺物、石器であり、その出土点数・重量等は第８・９表に示した通りである。

以下、遺構の種別ごとにその詳細について報告する。

第8表　合戦原遺跡横穴墓地区(A区)出土遺物一覧(1)

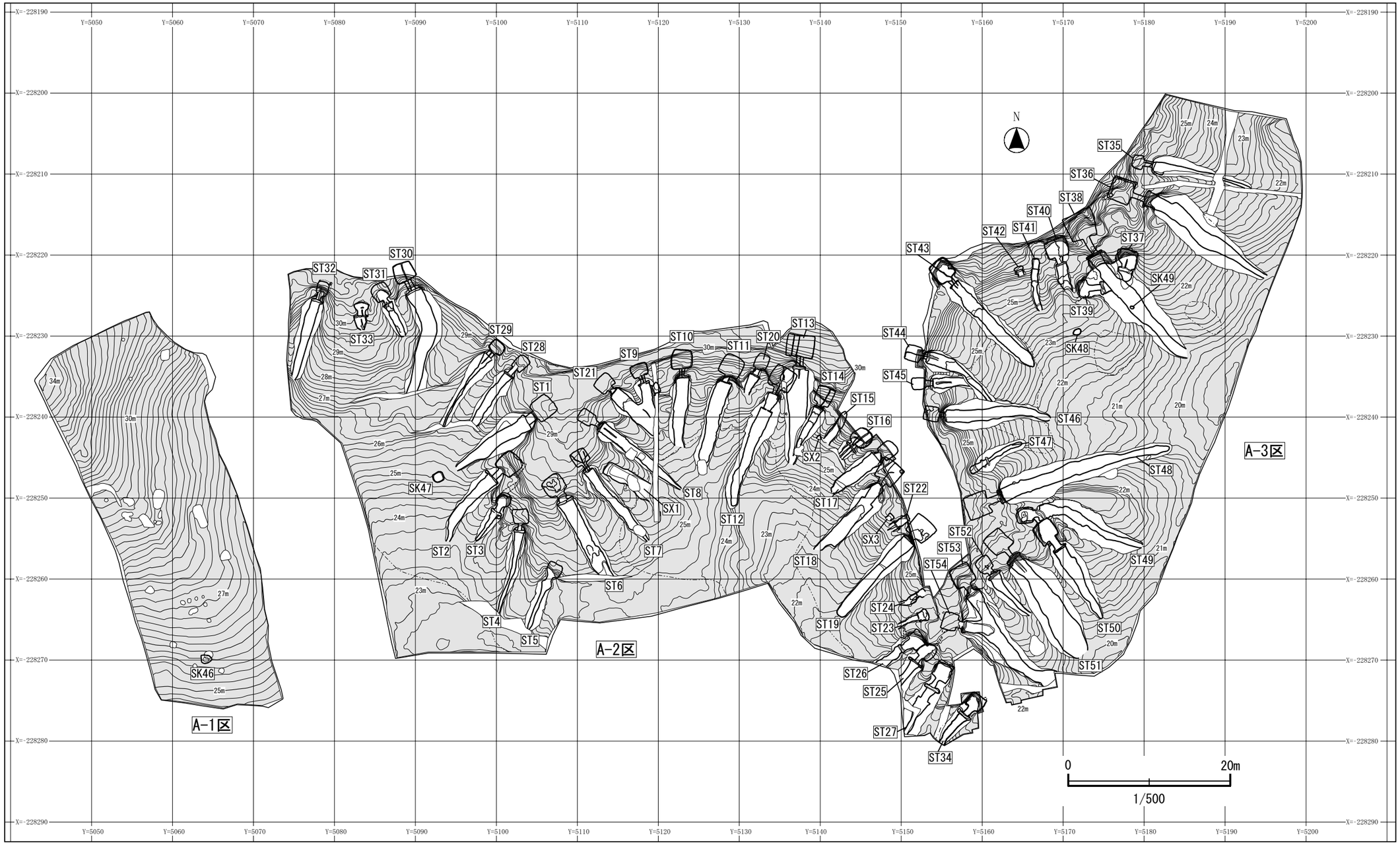
遺構名＼出土遺物		弥生土器	土師器			須恵器					玉製品		土製品	石製品	金属製品			動物遺存体	製鉄関連遺物	石器
			計	内訳		計	内訳				石製土製	ガラス製			計	内訳				
				個体数	破片数		遺構単独出土		遺構間接合遺物							掲載	非掲			
							個体数	破片数	個体数	破片数										
横穴墓	ST1		4 (540)	3 (525)	1 (15)										21	2	19			
	ST2		28 (2,010)	9 (1,855)	19 (155)	29 (13,635)	4 (12,345)	22 (1,290)		3					1		1			
	ST3		2 (215)	1 (195)	1 (20)	7 (1,730)	1 (50)	2 (230)	2 (1,450)	2										
	ST4					10 (280)	1 (100)	5 (180)		4										
	ST5		3 (45)	2 (35)	1 (10)	6 (1,130)	3 (1,130)			3										
	ST6		75 (3,770)	30 (3,415)	45 (355)	32 (10,245)	3 (1,110)	24 (595)	2 (8,540)	3	9 (90.4)	1 (2.468)			15	4	11			
	ST7		50 (1,690)	10 (1,175)	40 (515)	63 (16,520)	3 (4,870)	51 (1,915)	4 (9,735)	5					1	1				1 (1.4)
	ST8	2 (30)	38 (1,710)	4 (1,390)	34 (320)	76 (4,595)	2 (3,840)	74 (755)							13		13			
	ST9	2 (35)	24 (450)	2 (255)	22 (195)	21 (21,420)	2 (755)	8 (50)	3 (20,615)	8	12 (140.0)	4 (5.328)			4	3	1			
	ST10	2 (10)	8 (980)	5 (950)	3 (30)	12 (8,735)	3 (450)	5 (85)	4 (8,200)		9 (74.4)	4 (0.364)			12	3	9			
	ST11		12 (1,015)	5 (920)	7 (95)	11 (225)	1 (30)	4 (195)		6	3 (28.1)				2	1	1			
	ST12		88 (2,420)	11 (1,765)	77 (655)	93 (49,395)	11 (12,910)	67 (2,880)	6 (33,605)	9	3 (9.0)	77 (3.984)			18	9	9			
	ST13		30 (270)	3 (85)	27 (185)	44 (2,290)	2 (95)	7 (45)	4 (2,150)	31			1 (40.1)		27	4	23			
	ST14		22 (245)	2 (40)	20 (205)	46 (505)		5 (505)		41	6 (29.9)	14 (1.474)			16	1	15			
	ST15														3	3				
	ST16					2 (45)	1 (45)			1	3 (2.0)			1 (40.4)	56	27	29			
	ST17		6 (205)	1 (55)	5 (150)	146 (22,210)	11 (8,185)	131 (4,625)	3 (9,400)	1 －					1		1			
	ST18	2 (5)	121 (3,725)	27 (2,865)	94 (860)	105 (4,735)	5 (2,985)	85 (610)	1 (1,140)	14 －					27	8	19			
	ST19		4 (100)		4 (100)	9 (1,895)	3 (1,640)	6 (255)			6 (53.4)	2 (1.393)			140	32	108			
	ST20		1 (25)		1 (25)	37 (1,115)	4 (505)	6 (285)	1 (325)	26					4	1	3			
	ST21		43 (1,410)	6 (1185)	37 (225)	9 (970)	3 (965)	1 (5)		5	3 (12.0)	6 (0.813)			7	4	3			1 (1.0)
	ST22					1				1										
	ST23		1 (105)	1 (105)											3	1	2			
	ST25		14 (1,935)	8 (1,870)	6 (65)	4 (17,725)	2 (17,720)	1 (5)		1					6	2	4			
	ST26		2 (215)	2 (215)							11 (6.6)									
	ST27		56 (1,340)	9 (965)	47 (375)	31 (18,780)	12 (3,175)	17 (260)	1 (15,345)	1					54	8	46	6 (89.1)		

※各表中の上段の数値が「出土点数」、下段の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
　金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※土師器の「内訳」欄、須恵器内訳の「遺構単独出土遺物」欄
　「個体数」:図示した遺物の個体数/「破片数」欄:非図化の遺物破片総数を示す。
※須恵器の「遺構間接合遺物」欄
　「個体数」:図示した遺構間接合遺物の個体数。主体遺構(最も多くの破片が出土した遺構)に個体数を掲載。
　　遺物の重量は遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、主体遺構出土の破片のみの重量ではない。
　「破片数」:他の遺構から散布・流入したと判断される破片数を示す。
※金属製品の「内訳」欄
　「掲載」欄:図示した遺物点数/「非掲載」欄:非図化の遺物点数を示す。

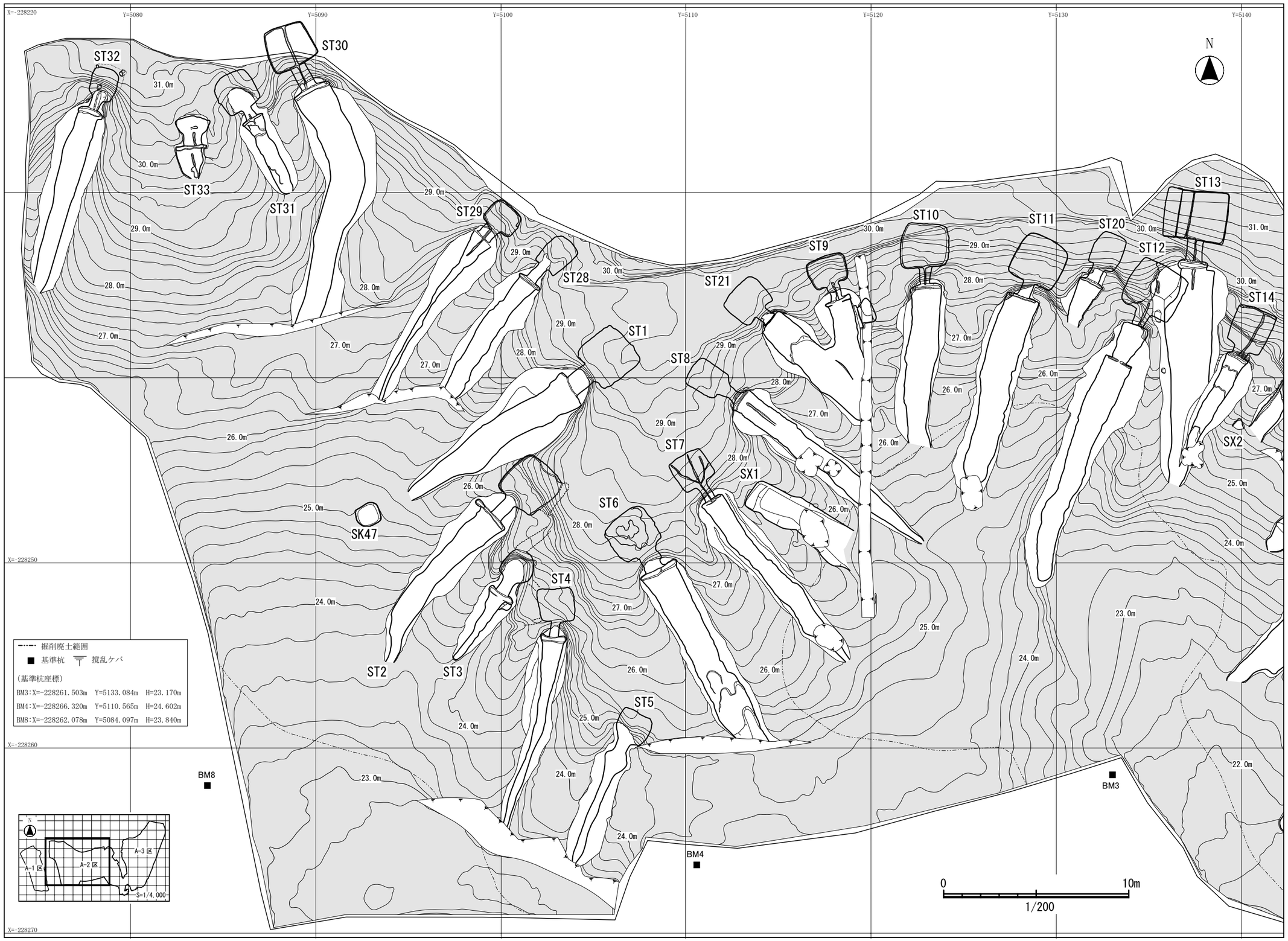
第9表　合戦原遺跡横穴墓地区（A区）出土遺物一覧（2）

遺構名＼出土遺物		弥生土器	土師器			須恵器					玉製品		土製品	石製品	金属製品			動物遺存体	製鉄関連遺物	石器
			計	内訳		計	内訳				石製土製	ガラス製			計	内訳				
				個体数	破片数		遺構単独出土		遺構間接合遺物							掲載	非掲			
							個体数	破片数	個体数	破片数										
横穴墓	ST28		2 (520)	1 (515)	1 (5)						1 (8.7)						小片多数			
	ST29		37 (1,805)	9 (1,665)	28 (140)	3 (4,720)	1 (4,710)	2 (10)							1	1				
	ST30	12 (190)	63 (1,710)	8 (1,230)	55 (480)	176 (23,575)	4 (7,875)	148 (1,865)	1 (13,835)	23		2 (1.048)			7	1	6			
	ST31	7 (20)	102 (3,265)	20 (2,640)	82 (625)	163 (18,040)	3 (1,195)	155 (1,660)	5 (15,185)						13	5	8		1 (520)	
	ST32	10 (45)	3 (640)	2 (635)	1 (5)	29 (14,945)		26 (2,965)	1 (11,980)	2					2		2			
	ST34		17 (530)	5 (420)	12 (110)	39 (22,170)	6 (12,655)	31 (1,955)	1 (7,560)	1	1 (5.2)				7	2	5			
	ST35	4 (25)				1 (775)	1 (775)								1		1			
	ST36		55 (5,715)	13 (5,360)	42 (355)	18 (3,900)	3 (2,460)	3 (1,150)	1 (290)	11	6 (48.2)	82 (6.761)			124	75	49			
	ST37														2	1	1			
	ST38	1 (5)	66 (2,755)	10 (2,335)	56 (420)	25 (21,535)	1 (1,010)	21 (1,425)	3 (19,100)		5 (39.6)				114	48	66			
	ST40					1 (15)	1 (15)								4	1	3			
	ST43		16 (355)	1 (60)	15 (295)										4		4			
	ST44		22 (2,815)	5 (2,640)	17 (175)	2 (2,895)	1 (1,055)		1 (1,840)											
	ST45											1 (0.052)								
	ST46		7 (275)	2 (225)	5 (50)	5				5		6 (0.308)			6	4	2			
	ST47					5 (1,190)	3 (1,090)	1 (100)		1					11	3	8			
	ST48		14 (1,430)	8 (1,395)	6 (35)	12 (2,780)	3 (2,475)	7 (305)		2		39 (1.601)		1 (62.3)	21	12	9			
	ST49		18 (3,420)	8 (3,385)	10 (35)	764 (22,575)	4 (12,355)	746 (5,470)	1 (4,750)	13					152	101	51			
	ST50		61 (2,150)	14 (1,760)	47 (390)	132 (14,835)	3 (345)	97 (995)	2 (13,495)	30					140	67	73			
	ST51		202 (9,440)	34 (8,230)	168 (1,210)	117 (50,990)	8 (25,775)	88 (1,620)	4 (23,595)	17	1 (9.4)				57	15	42			
	ST52		2 (30)	1 (25)	1 (5)	29 (320)	1 (285)	2 (35)		26					25		25		2 (760)	
	ST53 ST54		231 (12,805)	54 (11,315)	177 (1,490)	340 (98,830)	22 (40,370)	313 (4,595)	4 (53,865)	1	6 (19.0)				288	72	216			
小計①		42 (365)	1,550 (74,080)	336 (63,700)	1,214 (10,380)	2,655 (502,270)	142 (187,350)	2,161 (38,920)	55 (276,000)	297	85 (575.9)	238 (25.594)	1 (40.1)	2 (102.7)	1,410	522	888	6 (89.1)	3 (1,280)	2 (2.4)
土坑・性格不明遺構	SK46					3 (130)		3 (130)												
	SK47					11 (380)	1 (320)	3 (60)		7										
	SK49		2 (15)		2 (15)	16				16										
	SX1	10 (45)																		
小計②		10 (45)	2 (15)		2 (15)	30 (510)	1 (320)	6 (190)		23										
遺構外	確認調査トレンチ					1 (20)		1 (20)												
	撹乱					1 (25)		1 (25)							1		1			
	検出面		4 (590)	1 (460)	3 (130)	21 (840)		21 (840)							3		3			
	排土		43 (685)		43 (685)	34 (2,285)		34 (2,285)							1		1			
小計③			47 (1,275)	1 (460)	46 (815)	57 (3170)		57 (3170)							5		5			
合計 (①+②+③)		52 (410)	1,599 (75,370)	337 (64,160)	1,262 (11,210)	2,742 (505,950)	143 (187,670)	2,224 (42,280)	55 (276,000)	320	85 (575.9)	238 (25.594)	1 (40.1)	2 (102.7)	1,415	522	893	6 (89.1)	3 (1,280)	2 (2.4)

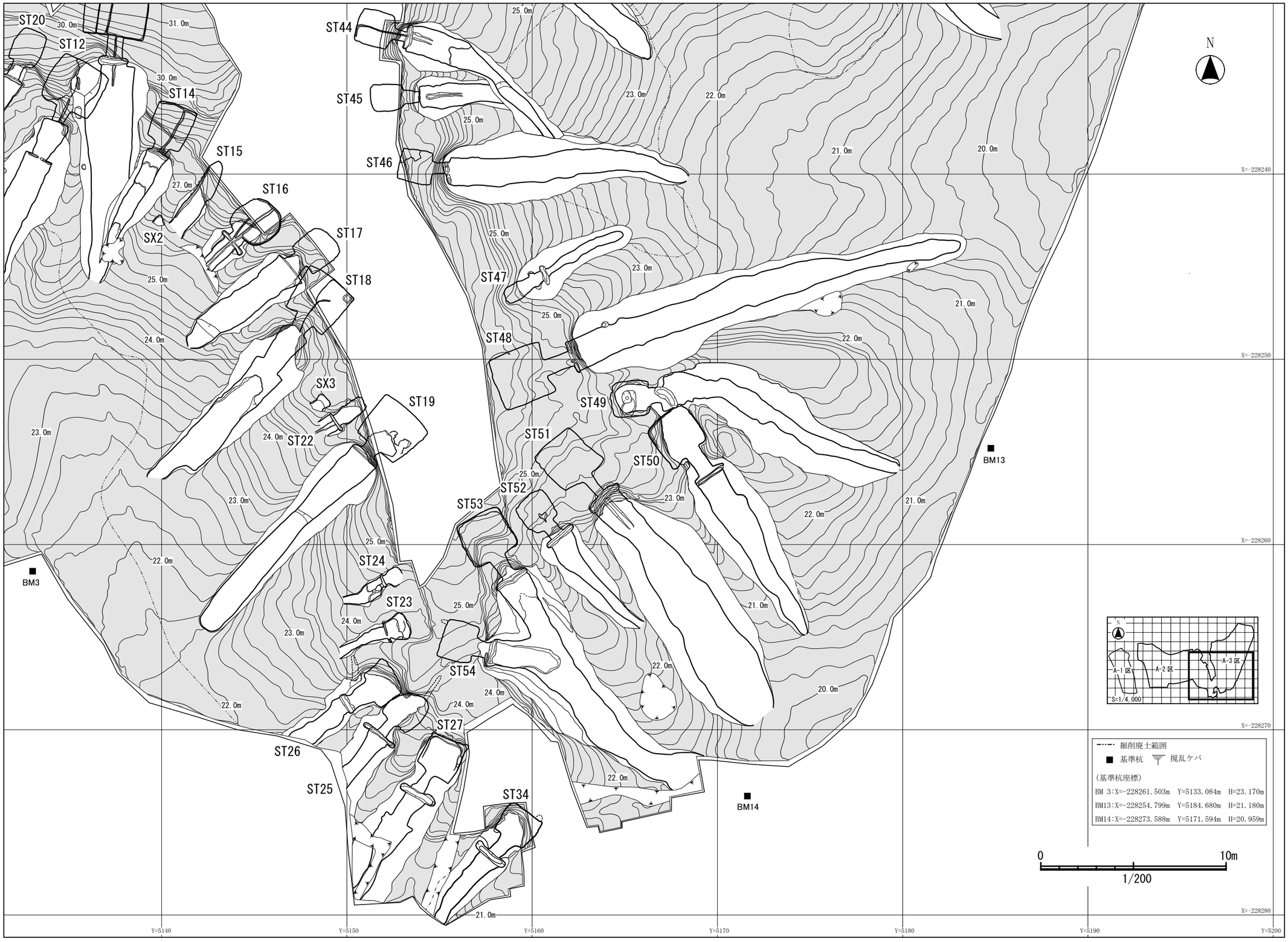
※各表中の上段の数値が「出土点数」、下段の（）内の数値が「出土遺物の総重量（g）」を示す。重量は乾燥重量。
　金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※土師器の「内訳」欄、須恵器内訳の「遺構単独出土遺物」欄
　「個体数」：図示した遺物の個体数/「破片数」欄：非図化の遺物破片総数を示す。
※須恵器の「遺構間接合遺物」欄
　「個体数」：図示した遺構間接合遺物の個体数。主体遺構（最も多くの破片が出土した遺構）に個体数を掲載。
　　遺物の重量は遺構間接合後の個体総重量（g／乾燥重量）であり、主体遺構出土の破片のみの重量ではない。
　「破片数」：他の遺構から散布・流入したと判断される破片数を示す。
※金属製品の「内訳」欄
　「掲載」欄：図示した遺物点数/「非掲載」欄：非図化の遺物点数を示す。



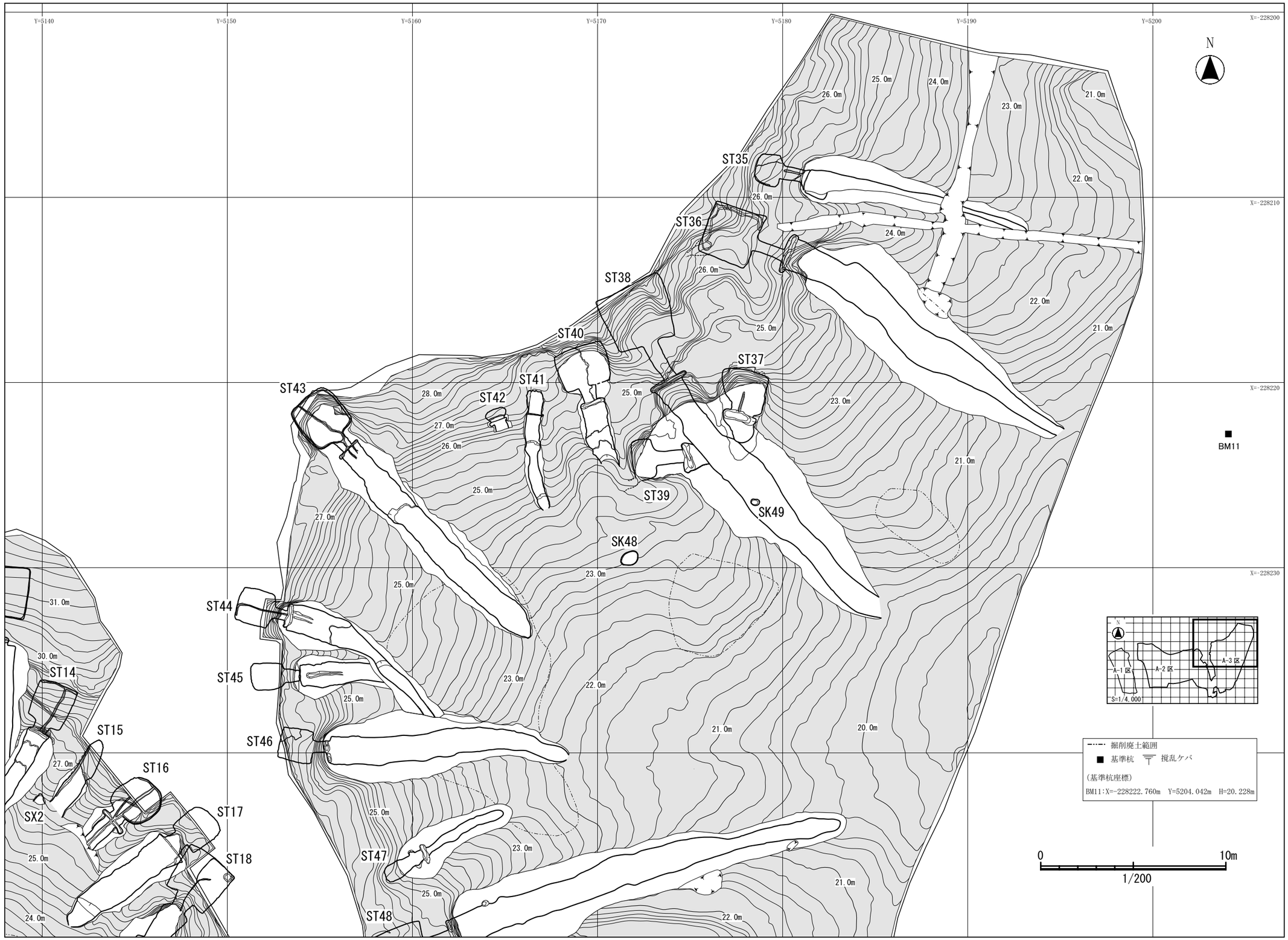
第１５図　合戦原遺跡A区遺構配置図(全体図)



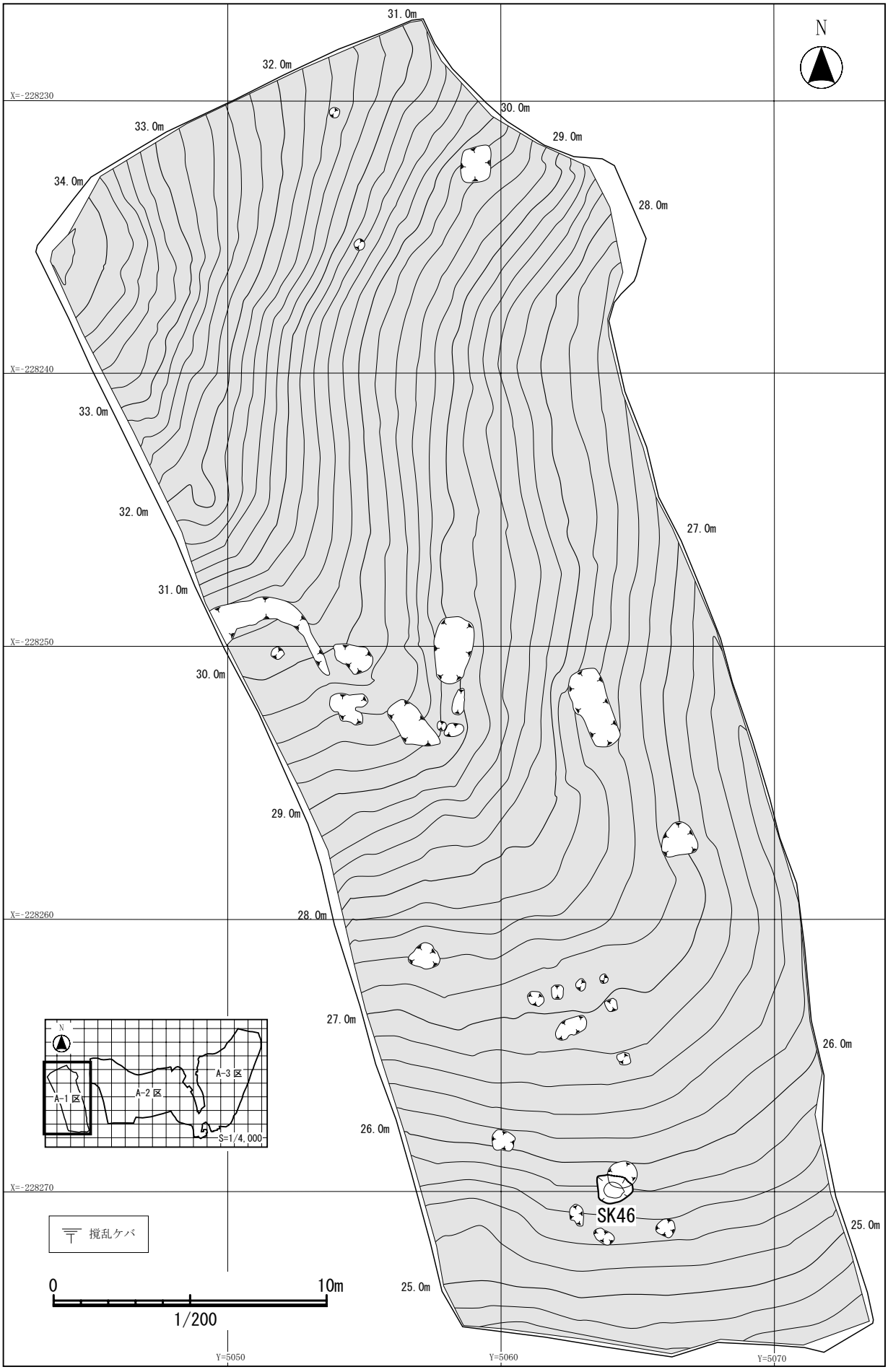
第１６図　合戦原遺跡A区遺構配置図(1)



第１７図　合戦原遺跡A区遺構配置図(2)



第１８図　合戦原遺跡A区遺構配置図(3)



第１９図　合戦原遺跡A区遺構配置図(4)

１　横穴墓

A区の発掘区では、横穴墓54基（ST1～54）を検出した（第15～18・20図・第10表）。横穴墓はA-2区・A-3区の標高22～30mの丘陵南・東・西斜面に分布する。丘陵北斜面に横穴墓は造られていない（本発掘調査前の確認調査結果による）。今回の調査範囲は、横穴墓の分布域すべてを網羅する形となっており、その支群構成や各横穴墓の関連性などを把握することができる調査となった。

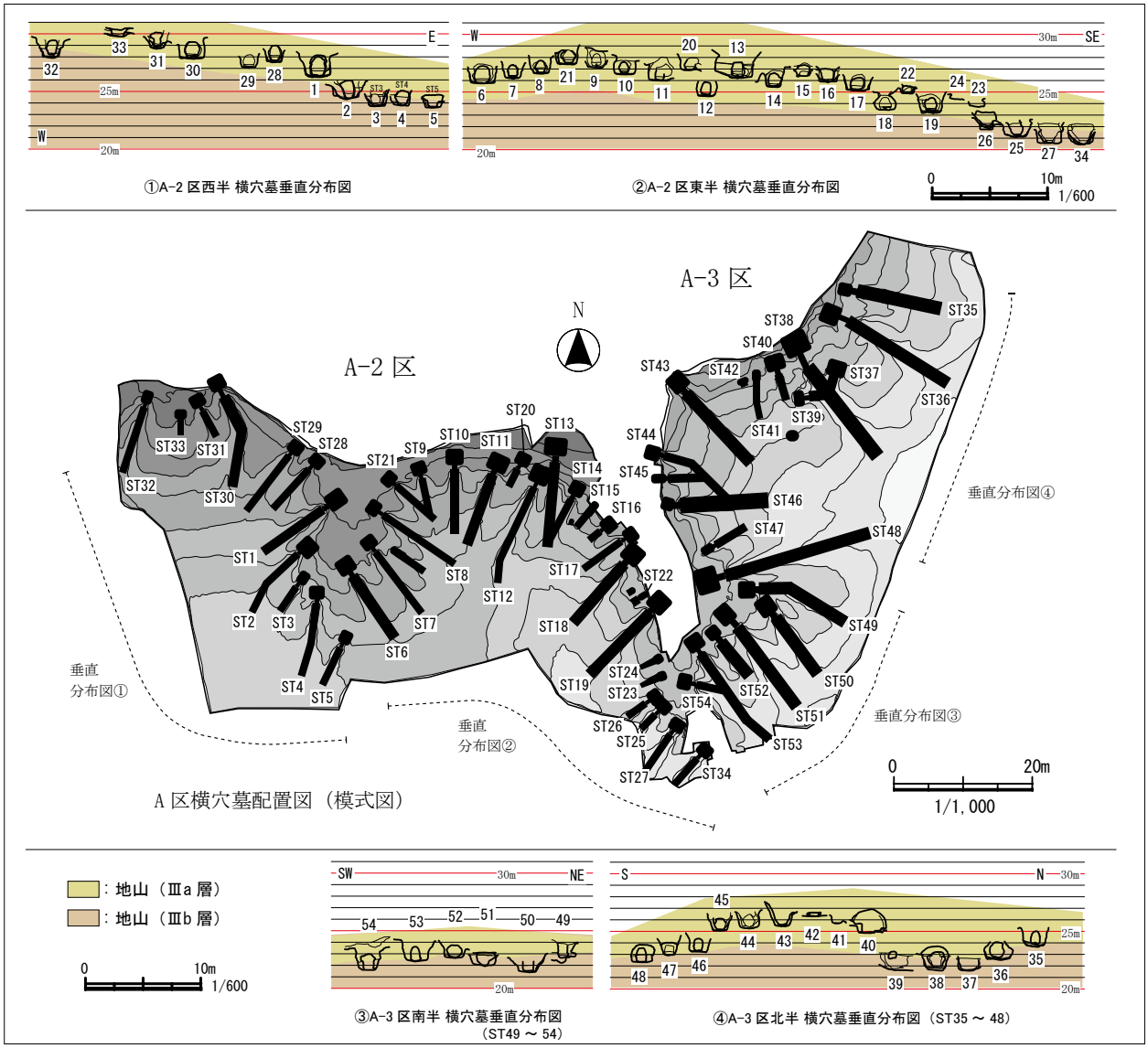
以下、本横穴墓群の概要をまとめた後、各横穴墓の詳細について報告することとする。

〔発見された横穴墓の概要〕

-横穴墓の立地と配置-

横穴墓の玄室が掘り込まれた基盤層は泥岩・シルト岩・凝灰質砂岩などで構成される岩盤層（基本層Ⅲa層）である。今回の事業対象全範囲において、この基本層Ⅲa層が確認されたのはA区のみである。こうした周辺の地質的環境が背景にあり、この地（A区）が墓域として選定されたと考えられる。

横穴墓は、比較的緩やかな丘陵斜面に横方向に配置されている。その分布は丘陵の小さな尾根筋を境に、大きく4つの支群に分けることができる（第20図）。



第２０図　合戦原遺跡A区横穴墓分布図

第10表　合戦原遺跡A区　横穴墓（ST）一覧

遺構番号	全長 (m)	玄室						羨道			墓前域		閉塞施設			主な出土遺物	備考
		天井形	平面形（基本形）	奥行 (m)	中央幅 (m)	高さ (m)	面積 (㎡)	奥行 (m)	幅 (m)	高さ (m)	長さ (m)	下幅 (m)	溝	閉塞石	段差 (m)		
ST1	14.41	ドーム	隅丸方形	2.57	2.65	1.65	6.6	1.32	1.06	1.50	10.52	1.68	－	－	0.12	土師器、鉄刀・鉄鏃・鉄釘	
ST2	13.97	ドーム	隅丸方形	2.78	2.66	1.31	6.5	1.12	0.74	－	10.07	1.53	○	○	－	土師器、須恵器、不明鉄製品	
ST3	6.92	－	不整形	1.70	1.69	－	2.4	0.86	0.92	－	4.36	1.42	○	○	－	土師器、須恵器	
ST4	(12.97)	ドーム	隅丸方形	1.74	1.93	1.18	3.3	0.84	0.52	－	(10.39)	1.24	○	○	－	須恵器	
ST5	(8.84)	－	隅丸方形	1.74	1.84	0.99	2.8	0.54	0.74	－	(6.56)	1.25	－	○	－	土師器、須恵器	
ST6	(14.49)	ドーム	隅丸方形	2.34	2.64	1.54	5.7	1.10	1.32	－	(11.05)	1.95	○	○	－	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製）、鉄刀・刀子・鉄鏃	玄室/線刻
ST7	14.17	ドーム	隅丸方形	1.75	2.00	1.35	3.5	0.96	0.72	1.02	11.46	1.20	○	○	0.12	土師器、須恵器、刀子	
ST8	15.60	ドーム	隅丸方形	1.96	1.65	1.15	3.1	1.13	1.02	1.08	12.51	1.30	○	○	－	土師器、須恵器、鉄刀・刀子	
ST9	(6.22)	ドーム	隅丸方形	1.60	2.13	1.06	3.0	0.77	0.77	0.97	(3.85)	1.20	○	○	0.07	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製）、鉄刀	ST21と墓前域共有
ST10	12.10	ドーム	隅丸方形	2.34	2.60	1.33	5.7	0.92	0.75	0.94	8.84	1.73	○	○	0.10	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製）、刀子・鉄鏃・鉄斧	
ST11	14.46	ドーム	隅丸方形	2.56	2.72	1.55	6.3	0.85	0.70	－	11.05	1.80	○	○	－	土師器、須恵器、玉製品（石製）、刀子	
ST12	18.72	ドーム	隅丸方形	2.70	3.02	1.42	7.6	0.78	0.88	1.12	15.24	1.56	－	○	0.12	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製）、鐔・刀子・鉄鏃	玄室/底面敷石
ST13	15.80	家形	隅丸方形	2.68	3.44	1.60	9.0	1.07	0.88	1.23	12.05	2.60	○	○	0.06	土師器、須恵器、土製品（紡錘車） 鉄刀・鉄鏃・棒状鉄製品	玄室/台床・底面敷石 玄室壁面/棒状鉄製品 ST14と重複 (ST13→ST14)
ST14	10.38	ドーム	隅丸方形	2.30	2.12	1.24	4.6	0.42	0.88	1.11	7.66	0.95	○	－	－	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製） 鉄刀・刀子・鉄鏃	ST13と重複 (ST13→ST14)
ST15	4.66	平坦	不整形	2.16	0.95	0.52	1.6	－	－	－	2.50	0.92	－	－	－	刀子・耳環	
ST16	(4.81)	ドーム	楕円形	2.42	2.40	0.91	4.8	0.36	0.84	－	(2.03)	0.88	○	－	－	須恵器、玉製品、石製品（提砥） 鉄刀・刀子・鉄鏃・棒状鉄製品・鑷子	玄室壁面/棒状鉄製品 玄室/底面敷石
ST17	9.72	ドーム	隅丸方形	2.00	1.98	1.15	3.8	0.70	1.22	－	7.02	1.58	－	○	0.18	土師器、須恵器	
ST18	14.60	家形	隅丸方形	2.66	2.85	1.86	7.5	0.74	1.10	1.01	11.20	1.85	－	○	－	土師器、須恵器、刀子・鉄鏃・帯金具・棒状鉄製品	玄室/線刻 玄室壁面/棒状鉄製品
ST19	15.91	ドーム	隅丸方形	2.66	2.98	1.52	7.7	0.42	0.92	1.12	12.83	1.56	○	－	－	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製） 鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄釘・棒状鉄製品	玄室壁面/棒状鉄製品
ST20	5.38	ドーム	隅丸方形	1.90	1.66	1.02	2.8	0.85	0.76	－	2.63	1.32	○	○	－	土師器、須恵器、鉄鏃	
ST21	(9.75)	ドーム	隅丸方形	1.85	2.25	1.22	3.8	0.70	0.80	1.00	(7.20)	1.83	－	○	0.13	土師器、須恵器、玉製品（石製・ガラス製）、鉄刀・刀子	ST9と墓前域共有
ST22	3.13	－	隅丸方形	1.77	0.85	0.58	1.3	－	－	－	1.36	0.92	○	○	－	須恵器	
ST23	4.16	－	逆台形	1.18	1.20	－	1.4	－	－	－	2.98	0.66	○	－	－	土師器、鉄刀	
ST24	3.51	－	隅丸方形?	0.83	0.90	－	0.7	0.18	0.56	－	2.50	0.66	○	－	－	出土遺物なし	
ST25	(6.42)	－	不整形	2.15	1.93	－	3.3	0.75	0.60	－	(3.52)	1.20	○	○	－	土師器、須恵器、刀子・鉄鏃	ST26と重複 (ST26→ST25)
ST26	(6.54)	－	隅丸方形	1.58	2.01	－	3.1	1.26	1.20	－	(3.70)	1.05	○	－	－	土師器、玉製品（石製・土製）	ST25と重複 (ST26→ST25)
ST27	(10.02)	－	隅丸方形	2.16	2.12	－	4.3	1.15	0.80	－	(6.71)	1.72	○	○	－	土師器、須恵器、鉄刀・刀子・鉄鏃、人歯・馬顎骨	
ST28	(10.46)	ドーム	隅丸方形	1.95	1.56	1.01	2.8	1.00	0.70	－	(7.51)	1.10	○	○	0.18	土師器、玉製品、不明鉄製品	
ST29	(12.65)	ドーム	隅丸方形	1.52	1.88	0.99	2.4	0.73	0.96	－	(10.40)	1.27	－	○	0.07	土師器、須恵器、刀子	
ST30	(16.94)	ドーム	隅丸方形	2.36	2.53	1.59	5.2	1.30	0.90	1.28	(13.28)	2.00	○	○	0.12	土師器、須恵器、玉製品（ガラス製）、鉄刀・蕨手刀・刀子	
ST31	7.25	ドーム	隅丸方形	2.13	2.09	1.02	3.9	0.57	0.66	－	4.55	1.15	○	○	0.10	土師器、須恵器、鉄刀、羽口	
ST32	12.49	ドーム	隅丸方形	1.60	1.44	1.11	2.2	0.60	0.63	－	10.29	1.30	○	○	0.16	土師器、須恵器、鉄刀	
ST33	3.46	－	不整形	1.02	1.85	－	1.5	0.61	1.01	－	1.83	1.63	○	－	－	出土遺物なし	
ST34	(7.60)	－	隅丸方形	1.86	2.10	－	3.6	1.04	0.98	－	(4.70)	0.95	○	○	－	土師器、須恵器、玉製品（石製）、蕨手刀・刀子	
ST35	14.98	ドーム	隅丸方形	1.38	1.67	0.87	2.2	1.40	1.12	1.02	12.20	1.16	－	○	0.20	須恵器、刀子	
ST36	22.13	平天井	隅丸方形	2.78	2.95	1.65	8.2	1.62	0.70	1.33	17.73	1.96	○	○	0.10	土師器、須恵器、玉製品（石製・土製・ガラス製） 鉄刀・刀子・両頭金具・鉄鏃・轡・杏葉・雲珠・辻金具 鉸具・棒状鉄製品	玄室壁面/棒状鉄製品
ST37	4.88	－	隅丸方形	2.14	2.28	－	3.8	0.22	1.40	－	2.52	1.68	○	○	0.15	鉄刀	ST38と重複 (ST38→ST37)
ST38	22.65	平天井	隅丸方形	3.25	3.64	1.73	11.3	2.16	0.86	1.37	17.24	2.06	○	○	－	土師器、須恵器、玉製品（石製・土製） 装飾付大刀・鉄刀・刀子・鉄鏃・不明鉄製品	ST37と重複 (ST38→ST37) ST39と墓前域共有 玄室/線刻
ST39	4.15	－	隅丸方形	1.27	2.20	－	2.6	1.56	0.81	－	1.32	1.85	○	○	0.20	出土遺物なし	ST38と墓前域共有
ST40	6.97	－	隅丸方形	2.20	2.80	－	6.0	0.84	0.90	－	3.93	1.38	○	－	－	須恵器、鉄刀	
ST41	6.58	－	隅丸方形	1.24	0.90	－	1.1	－	－	－	5.34	0.78	○	－	－	出土遺物なし	
ST42	1.25	平坦	不整形	0.60	1.14	0.24	0.6	－	－	－	0.65	0.65	－	－	0.03	出土遺物なし	
ST43	17.61	－	隅丸方形	2.75	2.69	－	6.5	0.76	0.80	－	14.10	1.65	○	－	0.12	土師器、鉄刀	玄室/底面敷石
ST44	(12.74)	ドーム	隅丸方形	2.01	1.94	1.15	3.7	0.73	0.68	1.03	(10.00)	1.55	○	－	0.17	土師器、須恵器	ST45・46と重複 (ST45・46→ST44)
ST45	(7.21)	ドーム	隅丸方形	1.78	1.47	0.93	2.5	0.81	0.76	0.93	(4.62)	1.15	－	－	0.11	玉製品（ガラス製）	ST44と重複 (ST45→ST44)
ST46	15.68	ドーム	隅丸方形	1.80	1.76	1.18	2.9	0.61	0.70	1.10	13.27	1.50	○	○	－	土師器、須恵器、玉製品（ガラス製）、鉄鏃・鉸具	ST44と重複 (ST46→ST44)
ST47	7.70	－	隅丸方形	1.22	0.90	0.88	1.1	1.13	0.74	－	5.35	0.66	○	－	－	須恵器、刀子・鉄鏃・鉄鎌	
ST48	26.55	ドーム	隅丸方形	2.82	2.95	1.59	8.6	1.49	0.88	1.16	22.24	1.70	○	○	－	土師器、須恵器、石製品（紡錘車）、玉製品（ガラス製） 鉄刀・刀子・耳環・棒状鉄製品	玄室壁面/棒状鉄製品
ST49	16.54	－	隅丸方形	2.12	1.94	－	3.9	0.55	0.95	－	13.87	1.35	○	○	－	土師器、須恵器、鉄鏃・鉄釘・鏡・轡・鉸具・帯金具	ST50と重複
ST50	14.04	－	隅丸方形	2.50	2.55	－	6.1	1.26	0.92	－	10.28	1.88	○	○	－	土師器、須恵器、蕨手刀・鉄鏃	ST49と重複
ST51	18.85	平天井	隅丸方形	2.75	2.66	1.37	7.2	1.15	0.75	1.08	14.95	3.37	○	○	－	土師器、須恵器、鉄刀・刀子・鉄鏃・鉸具	玄室/線刻
ST52	9.36	ドーム	隅丸方形	1.94	1.83	1.10	3.2	0.70	0.82	0.98	6.72	1.36	○	○	－	土師器、須恵器、鉄刀・鉄鏃、鉄滓	
ST53	(18.60)	ドーム	隅丸方形	2.53	2.70	1.57	6.5	1.22	0.95	1.16	(14.85)	1.90	○	○	－	土師器、須恵器、玉製品（土製・石製） 鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄釘・鏡・轡・鉸具・帯金具	ST53・54墓前域共有
ST54	6.50	ドーム	隅丸方形	1.79	2.18	1.30	3.8	0.79	0.99	1.12	3.92	1.20	○	○	－		

※「全長」欄および「墓前域長さ」欄の（）内数値は残存値を示す。
※「羨道」欄の「幅」は玄門側・羨門側の計測値のうち、値の大きい数値を掲載した。
※「墓前域」欄の下幅は、最大値を掲載した。
※「閉塞施設」欄の「溝」「閉塞石」の表記方法について、溝・閉塞石が認めれた場合は「○」、認めれない場合は「－」とした。段差は羨道と墓前域の境界の高低差を示し、羨道底面の方が高い。

-横穴墓の構造上の特徴-

今回確認した横穴墓は、玄室・羨道・墓前域で構成される（部位名称の基準は第3章第1節4を参照）。

〈玄室の構造〉

平面形は「隅丸方形」を基調とするものが主体で、その規模は奥行・幅1～3m、高さ1～1.7mほどである。天井形は「ドーム形」が大半を占めるが、「家形」のもの（ST13・18）や「平天井」のもの（ST36・38・51）もみられる。玄室底面に明確な台床が認められたものは1基（ST13）のみで、このほか底面に敷石が認められるものが4基（ST12・13・16・43）確認されている。

〈羨道～墓前域の構造〉

羨道の規模は奥行0.2～2.1m、幅0.5～1.4mを測る。羨道と墓前域の境界（閉塞部位）の底面は「0.1m程度の段差があるもの」と「段差のないもの」に分けられ、羨門入口付近には「閉塞石」が残存するものが多く、溝が伴うものと伴わないものがある。墓前域は長さ3～10m前後・幅1～2m前後の溝状の形状を呈するものが多く、中には長さ20m以上のものもある。このような溝状の細長い墓前域を持つ構造が本横穴墓群の大きな特徴といえる。

-その他の特徴-

〈線刻を伴う横穴墓〉

玄室壁面に線刻が認められた横穴墓は4基（ST6・18・38・51）ある。いずれも調査段階で開口していない状況であったことから、近現代の追刻の可能性は極めて低いと判断している。彩色による装飾は確認されていない。このうち、最も多くの図文が認められたのはST38奥壁の線刻壁画である。このST38で発見された線刻壁画の一部（奥壁・左側壁）については、関係機関との協議・調整の結果、町の歴史民俗資料館に移設保存している（移設の経過等については第5分冊参照）。

〈棒状の鉄製品が玄室壁面に打ち込まれた横穴墓〉

6基（ST13・16・18・19・36・48）の横穴墓で鉄釘または鉄鏃とみられる棒状鉄製品が「玄室壁面上方に打ち込まれた状態」で発見されている。当時の葬送儀礼を考える上で貴重な事例といえる。

-横穴墓出土遺物-

〈出土遺物の概要〉

横穴墓に関連する遺物としては、土師器（坏・小型坏・埦・鉢・高台坏・高台埦・高台皿・高坏・短頸壺・蓋・甕）・須恵器（坏・埦・高台坏・高台埦・高台皿・盤・蓋・瓶・短頸壺・長頸壺・フラスコ形瓶・提瓶・平瓶・横瓶・甕）の土器類、玉製品（勾玉・切子玉・管玉・丸玉・臼玉・棗玉・ガラス玉）、土製品（紡錘車）、石製品（紡錘車・提砥）、金属製品（装飾付大刀・鉄刀・蕨手刀・刀子・鉄鏃・両頭金具・鉄釘・鉄斧・鉄鎌・鑷子・耳環・轡・鐙・杏葉・雲珠・辻金具・鋲具・帯金具）、動物遺存体(人骨･馬骨）、製鉄関連遺物（羽口・鉄滓）が出土した。人骨はST27で歯が1点発見されたのみである。装飾付大刀は線刻壁画が発見されたST38で1点のみ出土した。鐙や轡といった馬具はST36・49・53・54といった特定の横穴墓のみで出土している。ST31で祭祀遺物と共に「鞴の羽口」が出土している点も注目される。

〈遺構間接合遺物〉

横穴墓出土遺物のうち、須恵器には「別々の遺構出土の破片が接合する遺物（遺構間接合遺物)」が多く含まれていた。その総数は図示できたもので55個体ある。遺構間接合遺物の主体は須恵器甕（29個体）であるが、長頸壺、短頸壺、瓶などの器種も一定量含まれていた。この遺構間で接合する須恵器の破片は、54基中37の横穴墓（ST2～7・9～14・16～18・20～22・25・27・30～32・34～36・38・44・46～54）の墓前域で確認されている。これらの多くは、墓前域における須恵器の破砕散布行為が実施された事例と判断される。当時の葬送儀礼を考える上で貴重な成果といえる。

１号横穴墓（ST1）（第 21～24 図、第 11 表、第 4 分冊 写真図版 17～19）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 25～29m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北側には ST28、南側には ST2 が隣接している。

【重複関係】 なし。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。羨道の一部と玄室の天井が残存し、玄室入口は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室から墓前域上部の底面付近までの範囲はシルト・泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲は砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 23 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 14.41m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.57m、玄室の中央幅 2.65m、奥壁幅 2.51m、前壁幅 2.23m、左側壁幅 2.35m、右側壁幅 2.48m、玄室底面から天井の高さ 1.65m を測る。床面積は約 6.6 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆 U 字形を呈する。幅 1.06m、高 1.50m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.08～0.10m 前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁が縦・横方向、天井部が放射状である。

そ の 他：玄室壁面に線刻による現代の落書き（苗字など）が確認された（写真図版 17-3）。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の玄門から墓前域の境までの奥行 1.32m、玄門側の幅 1.06m、羨門側の幅 1.05m、玄門側の高さ 1.50m を測る。

立 面 形：逆 U 字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.12m の段差があり、段差下の墓前域に横穴墓の閉塞に関連すると考えられる 5 個の礫が残存していた(写真図版 18-1／石材観察・軽量等は未実施)。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 10.52m、上幅 1.0～3.9m、下幅 0.50～1.68m を測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.9m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.0m 程度である。

【堆積層】　ST1 横穴墓を覆う堆積層は細別 6 層・大別 3 層に分けた（第 21 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～3 層）は ST1 玄室～羨道に堆積する人為堆積層である。近代の陶器破片や現代ゴミ（プラスチック容器類）が含まれていることから、現代の埋戻し土と考えられる（写真図版 17-2）。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 4・5 層）は ST1 玄室～羨道に堆積する自然堆積層である。大別 1 層のような近現代の遺物が含まれない。玄室底面直上に堆積する比較的均一な堆積層であり、細別 5 層上面においてロクロ成形の土師器坏が出土している。玄室使用後～平安時代以前に堆積した層と考えられる。

〔大別 3 層〕

大別 3 層（細別 6 層）は ST1 墓前域に堆積する人為堆積層である。地山ブロックを多量含む堆積層で造墓直後の整地層とみられる。墓前域の末端部のみで確認した。遺物は出土していない。

【出土遺物】　土師器 4 点（3 個体、破片 1 点）、金属製品 21 点（計測不能の小破片含む）が出土した（第 11 表）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域羨門付近である（第 22 図）。土師器坏 2 個体・埦 1 個体、鉄鏃 1 点、鉄釘 1 点の合計 5 点を図示した（第 24 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 2 層上面（細別 5 層上面）出土遺物**と**B：底面出土遺物**の 2 群に分かれる。その新旧関係は B が古く、A が新しい。以下、出土層位毎に記載する。

〔大別 2 層上面（細別 5 層上面）出土遺物〕

玄室内で土師器が出土したのみである。坏 2 個体（第 24 図 1・2）が出土した。いずれも内面黒色処理を施したロクロ成形の坏である。玄室中央付近の細別 5 層上面（大別 2 層）に正位に据えられた状態で出土した。出土状況からみて、玄室外からの流れ込みでなく、大別 2 層堆積後の玄室内で使用されたものとみられる。

〔底面出土遺物〕

玄室底面で金属製品、墓前域底面で土師器が出土した。両者が同時期ものかは判断できなかった。

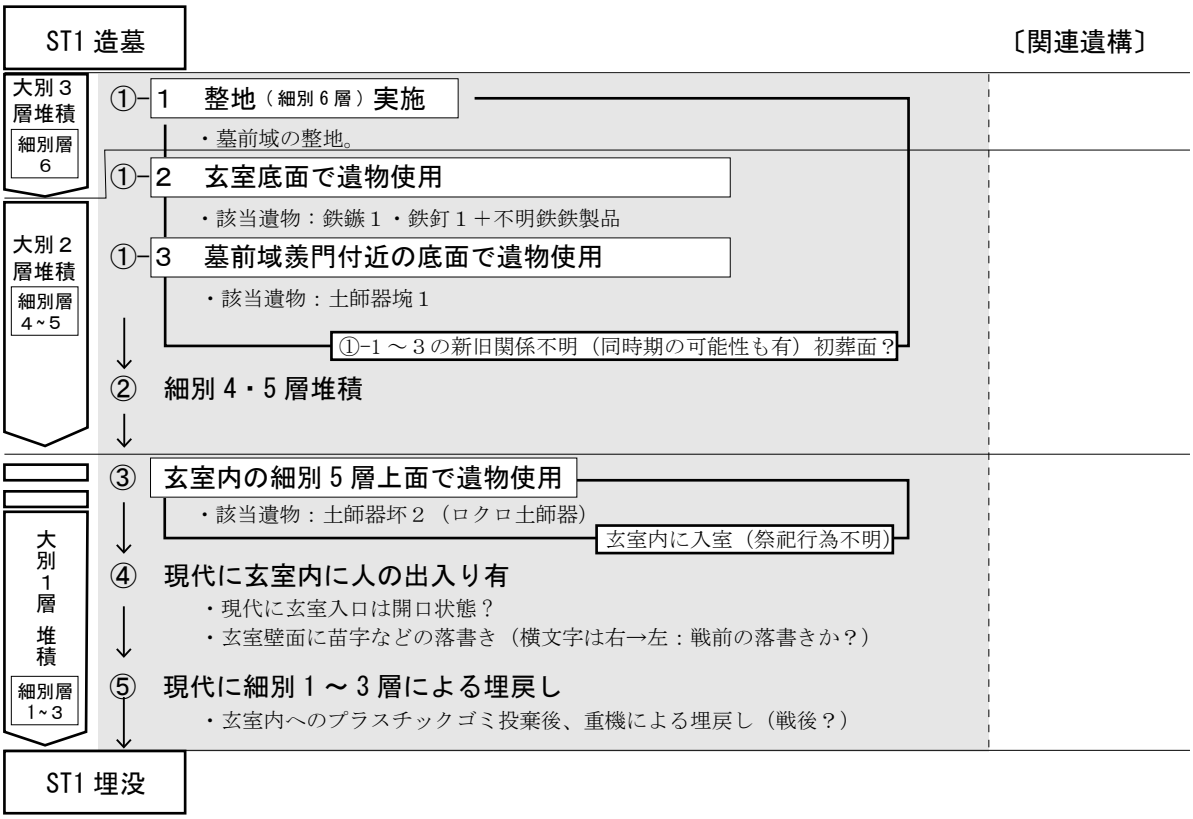
金属製品は鉄鏃 1 点（第 24 図 4）、鉄釘 1 点（第 24 図 5）のほか、不明鉄製品の破片が多数出土した。不明鉄製品については棒状の形状を呈するものが多く、鉄鏃や鉄釘の一部である可能性が高い。これらは大別 2 層堆積以前に玄室内で使用された遺物と考えられる。

土師器は埦 1 個体（第 24 図 3）と坏破片 1 点が出土した。図示できなかった坏破片は、非ロクロ成形の内面黒色処理を施したものである。埦は墓前域羨門付近の底面に正位の状態で出土しており、墓前域で使用された遺物とみられる(第 22 図)。

【まとめ】

ST1 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST1 造墓・使用・埋没の経過〕



第11表　ST1横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類

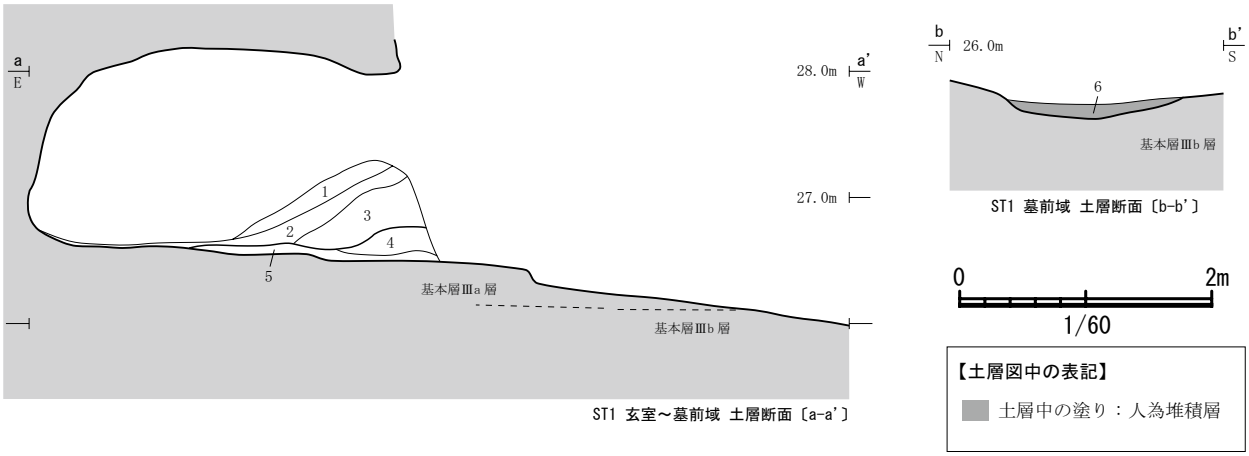
種別				土師器		
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	埦	小計
玄室	－	5層上面	個	2 (205)		2 (205)
			破			
墓前域	－	底面	個		1 (320)	1 (320)
			破	1 (15)		1 (15)
総合計			個体数(重量)	2 (205)	1 (320)	3 (525)
			破片数(重量)	1 (15)		1 (15)
			総重量	(220)	(320)	4 (540)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 金属製品

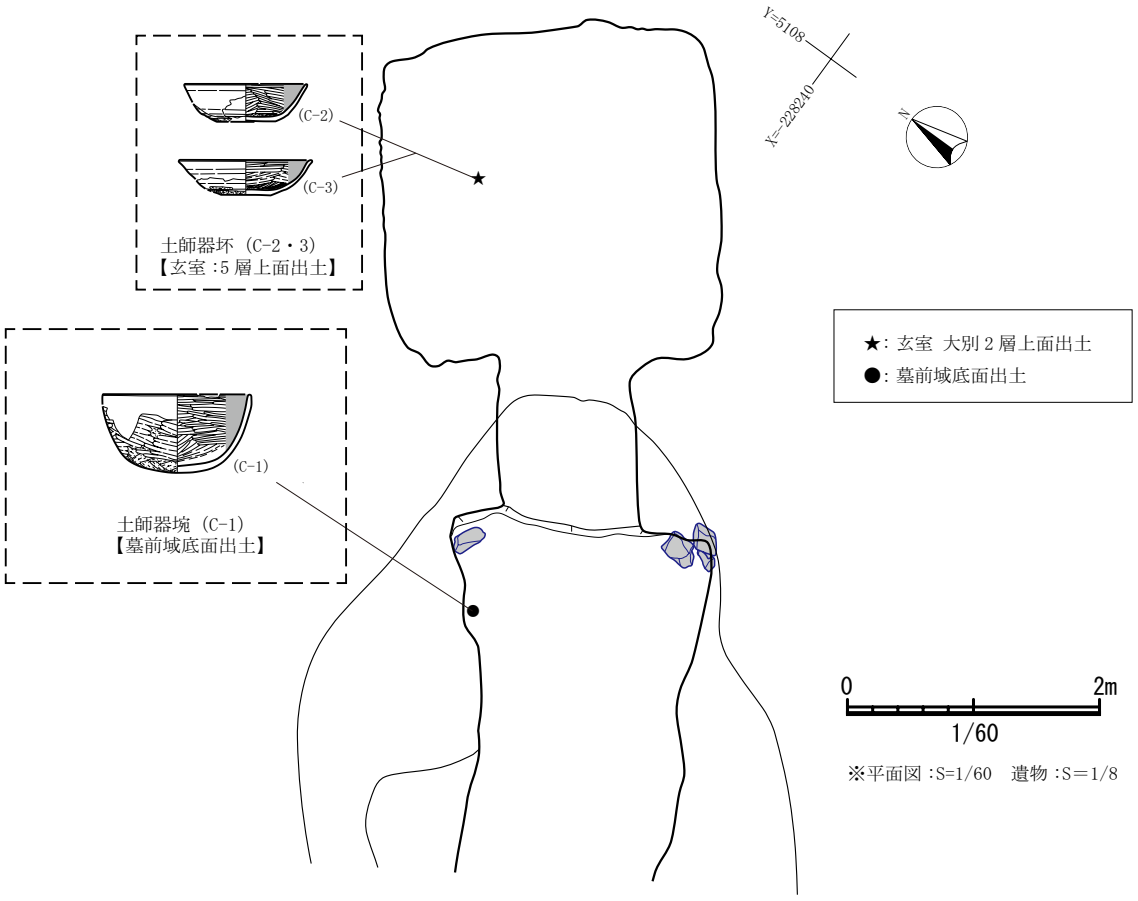
種別				金属製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	鉄刀（刃部）	鉄鏃	鉄釘	不明鉄製品	小計
玄室	－	底面	掲		1	1		2
			非掲	1		4	14+破片多数	19 +破片多数
器種別総合計			掲載遺物点数		1	1		2
			非掲載遺物点数	1		4	14+破片多数	19 +破片多数
			総点数	1	1	5	14+破片多数	21 +破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST1出土の不明小片の重量は680.0g)

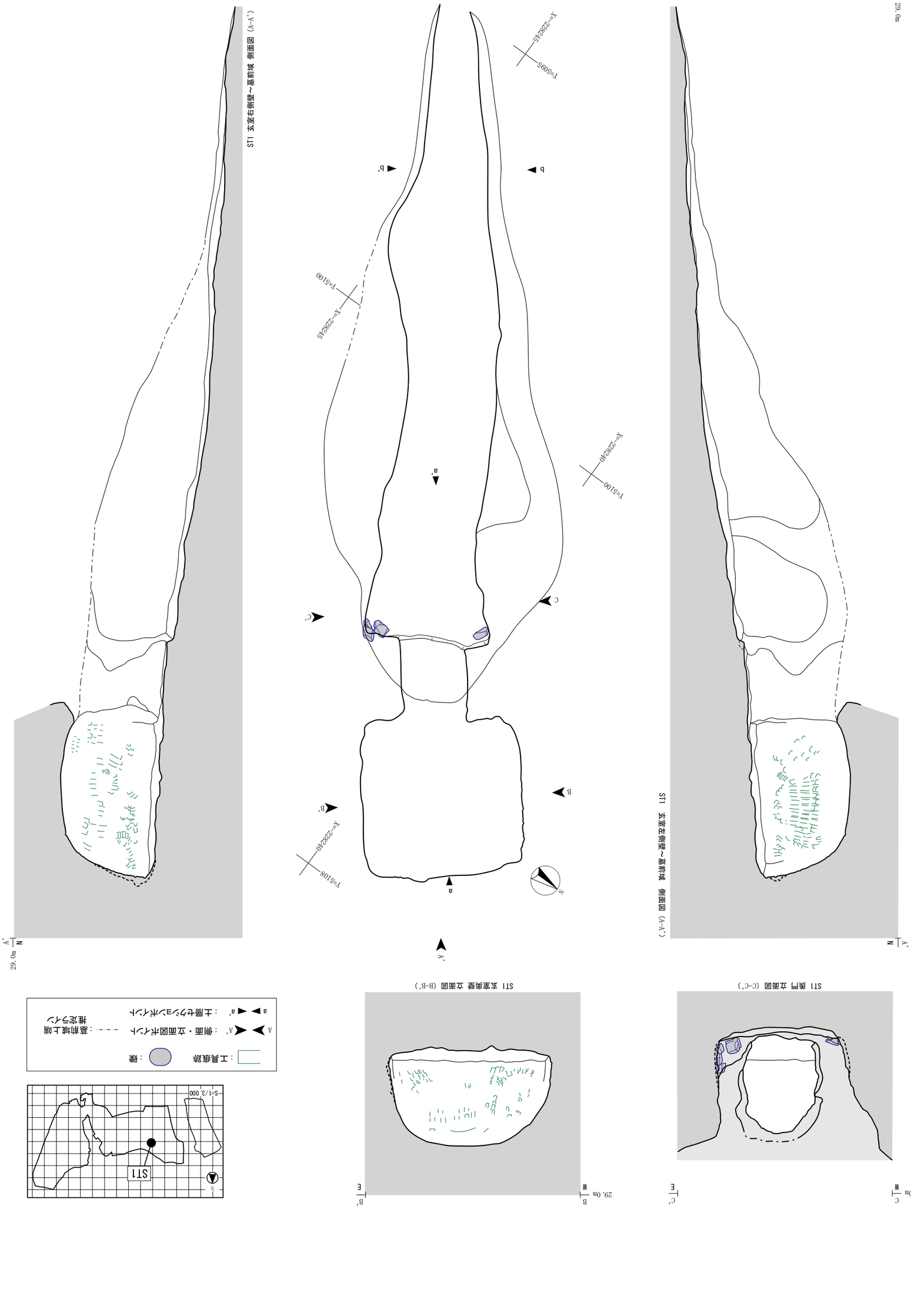


細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック多く含む。現代の皿(プラスチック)含む。	1	現代の埋土
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片、焼土粒子含む。		
3	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック含む。現代の陶器片含む。		
4	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック(小)、地山粒子含む。黒色土粒子少量含む。	2	自然堆積層
5	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック(小)、地山粒子少量含む。		
6	黄灰色(2.5Y6/1)	シルト	地山ブロック(大)、地山ブロック(小)多く含む。	3	人為堆積層（整地層）

第21図　ST1 横穴墓 土層断面図

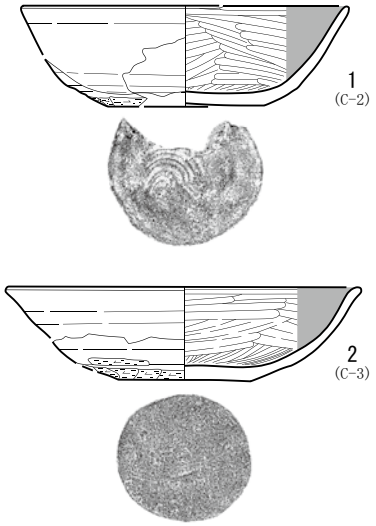


第22図　ST1 横穴墓 遺物出土状況図

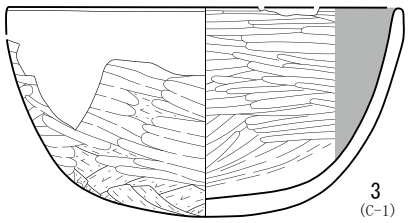


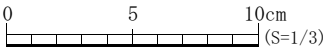
第23図　ST1 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

玄室　大別２層上面



墓前域 底面

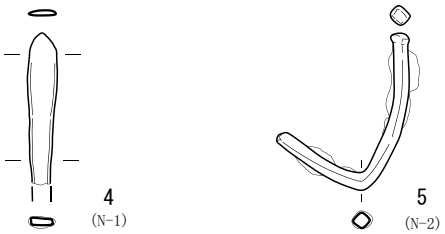


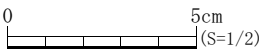


※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室 中央部	5層上面	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・体部下端手持ちヘラ削り・底部回転糸切り→ 手持ちヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.8)cm・器高4.0cm・底径6.1cm・器厚0.3～0.5cm	C-2	193-2
2	玄室 中央部	5層上面	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・体部下端手持ちヘラ削り・底部切り離し技法不明→ 手持ちヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(13.8)cm・器高3.6cm・底径3.7cm・器厚0.3～0.6cm	C-3	193-3
3	墓前域 (羨門付近)	底面	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.4cm・器高8.35cm・器厚0.5～0.8cm 【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-1	193-1

玄室 底面





※鉄鏃観察表　［全長］=A+B+C／［鏃長］=A+B

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
4	玄室	底面	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 4.0	0.8	残存 4.0	0.5	残存 3.5	—		N-1	315-1

No.	出土位置	細別層	種別	器種	法量・特記事項	登録	写真図版
5	玄室	底面	金属製品	鉄釘	【法量】全長7.0cm・幅0.4cm・厚さ0.4cm　［頭部］長さ0.5cm・幅0.4cm	N-2	336-7

第24図　ST1 横穴墓 出土遺物

2号横穴墓（ST2）（第25～31図、第12表、第4分冊 写真図版20～23）

【検出位置】　A-2区西側の標高24～27mの丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北側にはST1、南側にはST3が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の前壁付近までの天井が残存し、玄門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室の底面付近から上部の範囲はシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）、それより下部の範囲は砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）である。

【個別部位の特徴】（第27図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は13.97mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行2.78m、玄室の中央幅2.66m、奥壁幅2.39m、前壁幅2.36m、左側壁幅2.36m、右側壁幅2.33m、玄室底面から天井の高さ1.31mを測る。床面積は約6.5㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.2m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。幅0.74mを測る。天井は残存していない。残存状況からみて、立面形は逆U字形または逆凵字形を呈していたと考えられる。

工 具 痕：各壁に幅0.05～0.07m前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁が縦･横･斜め方向、天井部が放射状である。

付属施設：奥壁･両側壁･前壁の壁際を巡る溝跡1を確認した。その規模は幅0.06～0.32m、深さ0.05mである。

そ の 他:右側壁下部の砂質の壁面(基本層Ⅲb層)でトンネル状の掘り込みを確認した(写真図版23-6)。この掘り込みはST3玄室奥壁まで至っている。遺物は出土しておらず、規模からみて、人為的なものでなく、小動物等によって掘り込まれた痕跡と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行1.12m、玄室側の幅0.74m、墓前域側の幅0.70mを測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.2m程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ2.20m、幅0.18～0.25m、深さ0.05m

の溝跡２を確認した。溝跡２の上部には、0.24×0.10×0.10m（2.9 kg）～0.40×0.40×0.20m（38.2 kg）の角礫 17 個（総重量 291.4 kg）が残存しており、溝上面から高さ 0.3～0.6m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は花崗閃緑岩９個、圧砕花崗岩６個、片状花崗岩１個、頁岩１個である（第 12 表 4)。溝跡２と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 10.07m、上幅 0.7～2.4m、下幅 0.40～1.53m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.5m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。羨門から約 6.5m 下方の地点で南方向に屈曲して端部に至る。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.7m 程度である。

【堆積層】　ST2 横穴墓を覆う堆積層は細別 13 層・大別４層に分けた（第 26 図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別１層〕

大別１層（細別 1～6 層）は ST2 玄室～墓前域上半に堆積する自然堆積層である。本層の堆積後、ST2 の大部分は埋没したと考えられる。本大別層の下層（細別 5･6 層）で遺物が少量出土している。

〔大別２・３層〕

大別２層（細別 7～11 層）は ST2 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別３層（細別 12 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別３層は、墓前域に堆積する大別４層直上に敷き詰められた整地層とみられ、大別２層と大別３層の層理面（大別３層上面）で須恵器が面的に一定量出土した。遺物の出土状況からみて、この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、大別３層中でも一定量遺物（土師器）が出土している。これらの遺物は大別３層上面での祭祀以前に墓前域で使用された遺物と考えられる。

〔大別４層〕

大別４層（細別 13 層）は ST2 の羨道～墓前域に堆積する自然堆積層で、遺物は含まれない。造墓直後の堆積層とみられる。

【出土遺物】土師器 28 点（9 個体、破片 19 点)、須恵器 29 点（4 個体、破片 25 点※うち破片３点は遺構間接合遺物)、金属製品１点が出土した（第 12 表 1～3)。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、玄室出土遺物は須恵器甕破片３点のみであり、大部分は墓前域の出土である。土師器坏１個体・小型坏３個体・埦１個体・高坏４個体、須恵器甕４個体の合計 13 点を図示した（第 28～31 図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別１層（細別６層底面）出土遺物**、**B：大別２層（細別８層底面）出土遺物**、**C:大別３層（細別 12 層底面）出土遺物**の３群に分かれる。加えて、ST2 では、別の横穴墓（ST27・30・31）で破砕された須恵器破片の一部が ST2 に混入したと考えられる遺物３点（第 12 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**D：墓前域大別１層（細別５・６層及び検出面）の堆積途中**に混入したものと、**E:玄室大別２層（細別 11 層）の堆積途中**に混入したものがある。以上をまとめると、ST2 関連遺物は、古い順から C→B→E→A→D の５段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別３層（細別 12 層底面）出土遺物〕（第 31 図）

墓前域の整地層にあたる細別 12 層の底面付近から出土した遺物である（前頁 C に相当)。土師器小型

坏1個体(第31図1)・坏1個体(第31図2)・埦1個体（第31図3)、高坏4個体（第31図4～7）と、これらと同個体とみられる破片10点が出土した（第12表1)。

これらは墓前域の羨門付近と中央付近に位置し、正位または逆位の状態で出土している（第25図/写真図版23-2)。出土位置や接合破片のまとまりからみて、大別4層（細別13層）堆積後に墓前域で使用された遺物と考えられ、ある程度原位置を保った状態で埋没したものと推定される。この段階の玄室では遺物が出土していないが、初葬に関連する墓前祭祀で使用された遺物とみておきたい。

〔大別2層（細別8層底面）出土遺物〕（第28～30図）

大別2層（細別8～11層）のうち、墓前域に分布する細別8層の底面付近〔＝大別3層（細別12層）上面：整地層上面〕で出土した遺物である（前頁Bに相当)。須恵器甕4個体（第28図3、第29図1、第30図1・2）とこれらと同一個体とみられる破片17点が出土した（第12表1)。

図示した甕4個体は、墓前域の整地（大別3層）直後に使用された遺物で、墓前域の羨門付近と中央付近に位置し、いずれも破片で同一面上（細別8層底面）に密集した状態で出土した（第25図/写真図版 22・23-1)。出土状況からみて、これらは墓前域において破砕されたものと考えられ、原位置を保った状態のまま埋没したものとみられる。堆積土の状況から、この段階のST2については、玄室への入室が可能な状態だったと推定され、追葬時の墓前祭祀で使用された遺物の可能性が高い。

〔大別2層（細別11層）出土遺物〕

大別2層（細別7～11層）のうち、玄室に分布する細別11層の堆積土中から出土した遺物である（前頁Eに相当)。須恵器甕破片3点が出土した（第12表1・2)。

このうち、須恵器甕破片の1点（第12表2）は別遺構で破砕された後、ST2の玄室堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST30由来のものである(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST2では**ST30由来の須恵器甕(E-165／第211図1)**と接合する破片が1点（体部破片）出土した。ST2からST30は直線距離で約20m北の地点に位置する。単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別2層堆積途中の段階に「ST30からST2玄室内への須恵器甕破片の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。この段階のST2玄室入口は、開口もしくは入室できる状態であった可能性が高い。なお、遺構間接合しない甕破片2点についても他の遺構から散布された遺物の可能性がある。

〔大別1層（細別6層底面）出土遺物〕　（第28図）

大別1層（細別1～6層）のうち、墓前域に分布する細別6層の底面付近で出土した遺物である（前頁Aに相当)。土師器小型坏2個体（第28図1・2）と坏類破片9点、不明鉄製品破片1点が出土した（第12表1・3)。

これらは墓前域大別1層の細別6層底面付近で使用されたものとみられる。ただし、この段階では、ST2の墓前域は半分以上埋もれた状態であったと推定され、羨道を含む玄室入口についてもある程度埋没した状態だったと考えられる。このことから、追葬とは関連のない墓前祭祀に伴う遺物と想定しておきたい。

〔大別1層（細別5・6層及び検出面）出土遺物〕

大別1層（細別1～6層）のうち、墓前域に分布する細別5・6層の堆積土中と検出面から出土した遺物である（前頁Dに相当)。須恵器瓶類破片2点・甕破片3点が出土した（第12表1・2)。

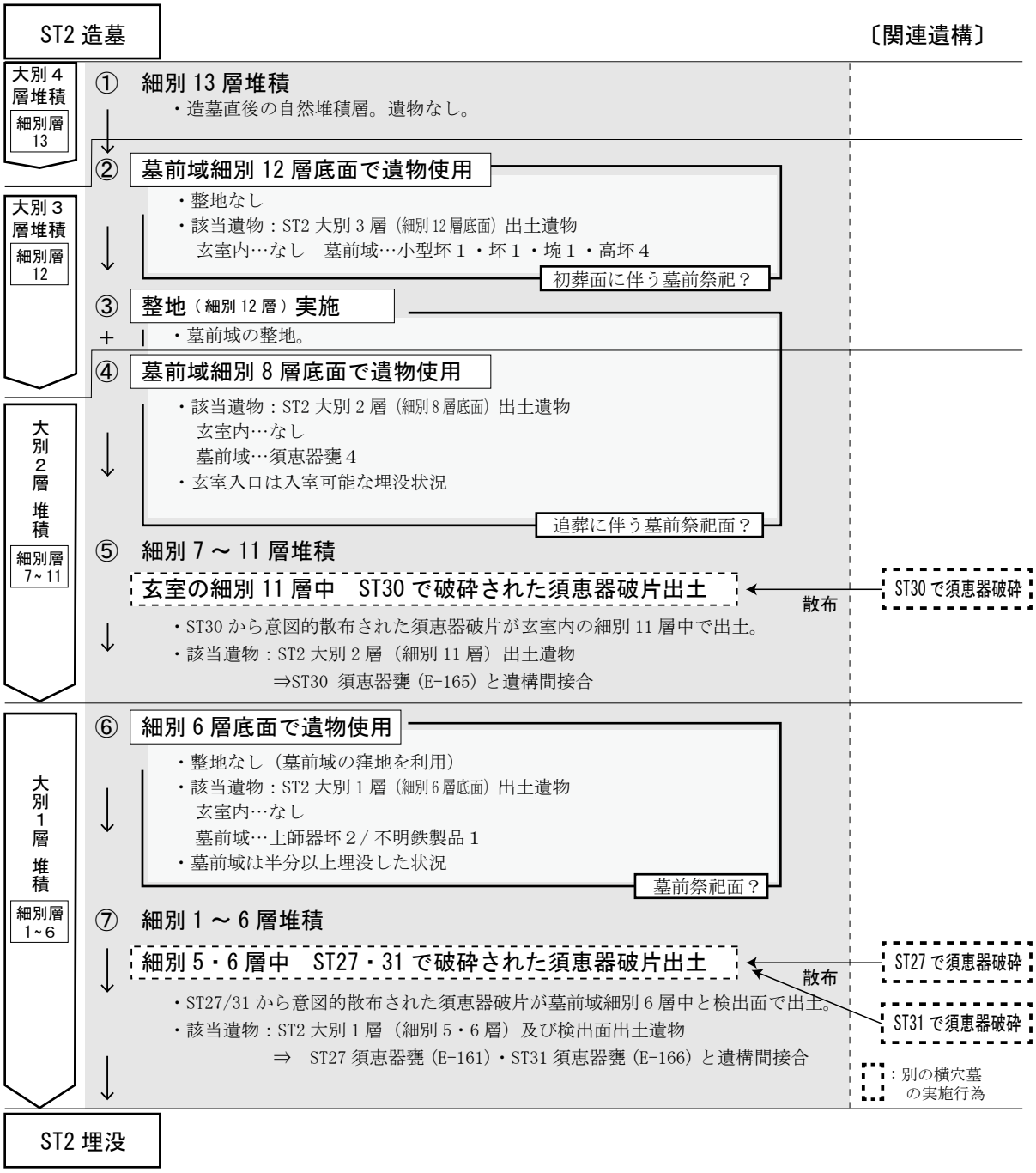
このうち、須恵器甕破片の2点（第12表2）は別遺構で破砕された後、ST2の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST27由来とST31由来の2者に分けられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST2では、**ST27由来の須恵器甕(E-161／第192図1)**と接合する破片が1点（体部破片)、**ST31由来の須恵器甕(E-166／第223図2)**と接合する破片が1点（体部破片）出土した。ST2からST27は直線

距離で約 60m 南東、ST31 は約 20m 北の地点に位置する。両者ともに、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別 1 層堆積途中の段階に「ST27・31 から ST2 墓前域への須恵器甕破片の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。ST27 と ST31 それぞれからの ST2 への甕散布時期の前後関係については把握できなかった。なお、遺構間接合しない瓶類破片 2 点、甕破片 1 点についても他の遺構から散布された遺物の可能性がある。

【まとめ】

ST2 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST2 造墓・使用・埋没の経過〕



第12表　ST2横穴墓　出土遺物一覧

1．土器類－遺構単独出土－

種別				土師器				須恵器		
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏 小型坏	埦	高坏	小計	瓶類	甕	小計
玄室	2	11層	個							
			破						2 (35)	2 (35)
墓前域	1	5層	個							
			破					1 (25)		1 (25)
		6層	個	2 (120)			2 (120)			
			破	9 (60)			9 (60)	1 (5)	1 (105)	2 (110)
	2	8層	個						1 (3,700)	1 (3,700)
			破						2 (30)	2 (30)
		8層、12層上面	個						1 (4,700)	1 (4,700)
			破							
		12層上面	個						2 (3,945)	2 (3,945)
			破						15 (1,090)	15 (1,090)
	3	12層	個	2 (340)	1 (365)	4 (1,030)	7 (1,735)			
			破	8 (40)		2 (55)	10 (95)			
総合計	個体数(重量)			4 (460)	1 (365)	4 (1,030)	9 (1,855)		4 (12,345)	4 (12,345)
	破片数(重量)			17 (100)		2 (55)	19 (155)	2 (30)	20 (1,260)	22 (1,290)
	総重量			(560)	(365)	(1,085)	28 (2,010)	(30)	(13,605)	26 (13,635)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (10,300)	◆ST2　検出面 ◆ST30　8層(墓前域) ◆ST31　2層(墓前域) ◆A区SK47　1層	ST31	◆ST2:1点 ◆ST30:3点 ★ST31:53点 ◆SK47:4点	E 166	第223図2
須恵器	甕	1 (15,345)	◆ST2　6層(墓前域) ◆ST18　検出面(墓前域) ◆ST25　検出面(墓前域) ◆ST27　4･6･7･9･10層、13層上面 (玄室･墓前域)	ST27	◆ST2:1点 ◆ST18:1点 ◆ST25:1点 ★ST27:139点	E 161	第192図1
須恵器	甕	1 (13,745)	◆ST2　11層(玄室) ◆ST30　14層(墓前域)	ST30	◆ST2:1点 ★ST30:95点	E 165	第211図1

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1　検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

※ST2出土須恵器の総数
(表12-1)遺構単独出土　4個体＋破片22点
＋
(表12-2)遺構間接合遺物　破片3点　＝ 29 点

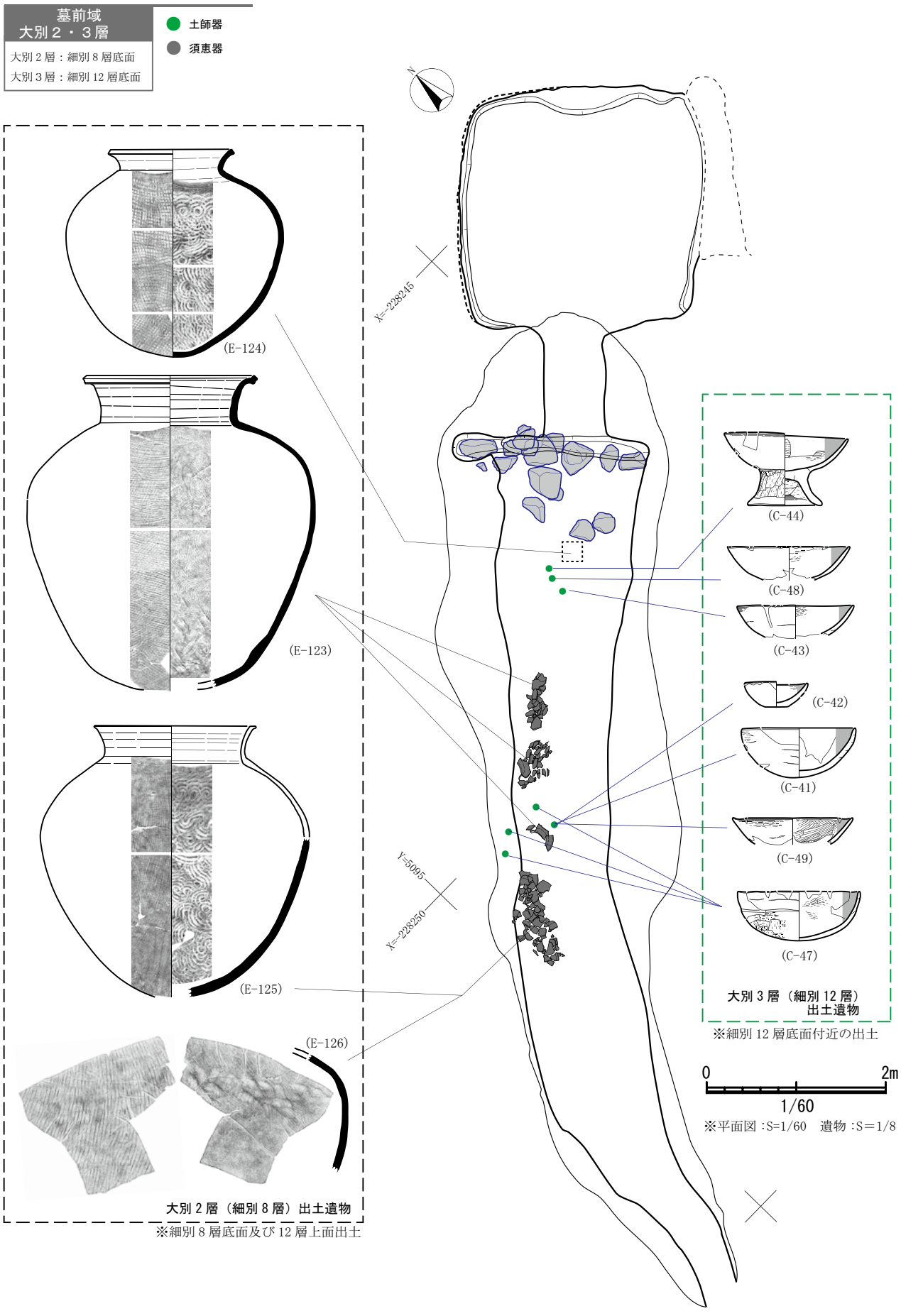
3．金属製品

種別			金属製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	不明鉄製品	小計
墓前域	－	6層	掲		
			非掲	1	
器種別総合計		掲載遺物点数			
		非掲載遺物点数		1	1
		総点数		1	1

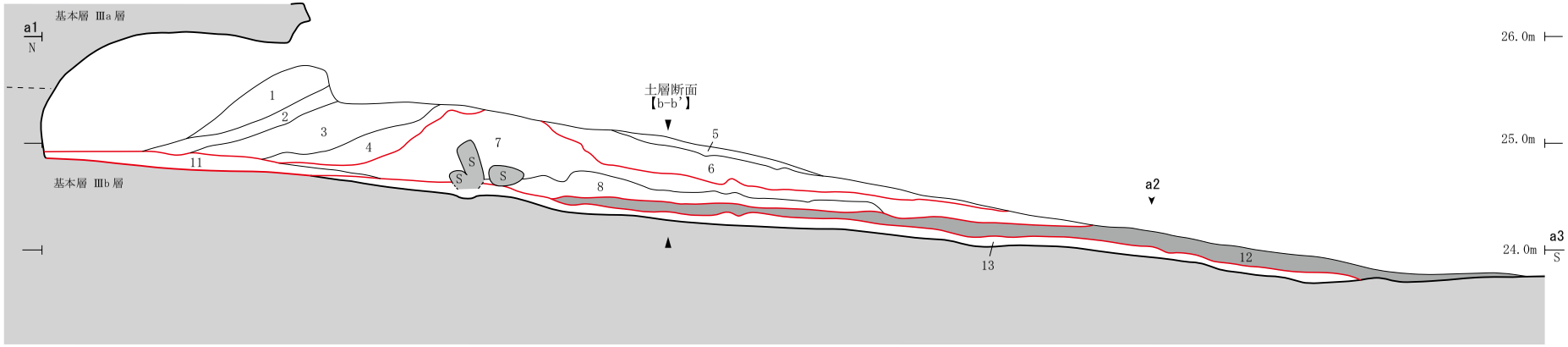
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

4．閉塞石観察表

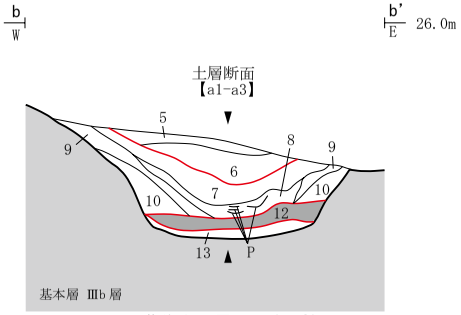
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	24	20	8	5.6
花崗閃緑岩	角礫	24	15	10	10.2
花崗閃緑岩	角礫	34	17	14	11.3
花崗閃緑岩	角礫	25	20	13	13.4
花崗閃緑岩	角礫	30	20	16	13.6
花崗閃緑岩	角礫	30	18	15	14.2
花崗閃緑岩	角礫	40	20	18	15.4
花崗閃緑岩	角礫	34	28	23	33.8
花崗閃緑岩	角礫	40	30	20	38.2
圧砕花崗岩	角礫	24	10	10	2.9
圧砕花崗岩	角礫	32	17	13	8.2
圧砕花崗岩	角礫	32	17	17	11.1
圧砕花崗岩	角礫	33	18	15	12.0
圧砕花崗岩	角礫	33	30	17	36.3
圧砕花崗岩	角礫	40	30	15	42.5
頁岩	角礫	30	24	14	21.0
片状花崗岩	角礫	23	16	5	2.1
合計:17点／重量(kg)＝					291.8



第25図　ST2 横穴墓 遺物出土状況図



ST2 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕



ST2 墓前域 土層断面〔b-b'〕

【土層図中の表記】

土層中の塗り：人為堆積層

分層線の赤線：祭祀想定面

S ：礫　　P ：土器

：土層断面の屈曲点

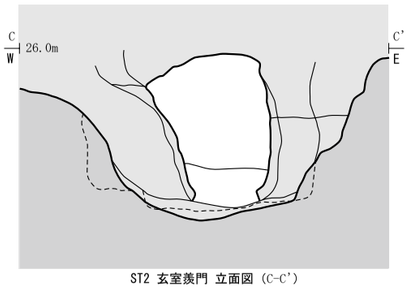
：各土層断面の交点

0　2m

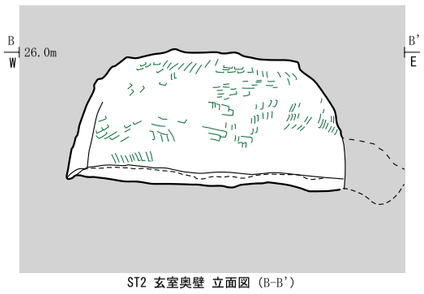
1/60

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山ブロック(大)、(小)含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。		
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	地山ブロック(小)、地山粒子多く含む。		
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山ブロック、炭化物片含む。		
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。		
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。		
7	黄褐色(2.5Y5/3) にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山塊、地山ブロック多く含む。 地山粒子、炭化物片、地山ブロック(小)含む。	2	自然堆積層
8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片、地山粒子微量含む。		
9	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質シルト	黒色土粒子、炭化物片少量含む。		
10	黄褐色(2.5Y5/6)	砂質シルト	地山粒子多量。		
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック(小)多く含む。		
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック(小)含む。 堆積層中及び層上面に遺物多量含む。	3	人為堆積層
13	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック(大)、(小)多く含む。	4	自然堆積層

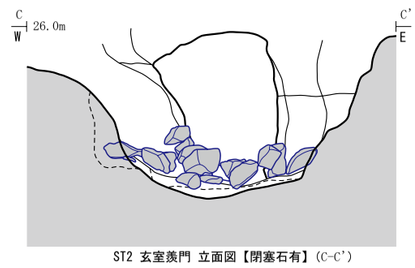
第 26 図　ST2 横穴墓 土層断面図



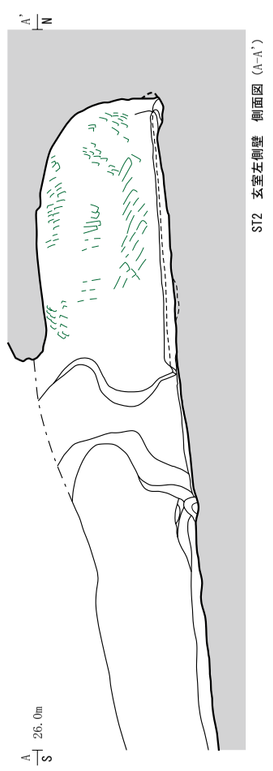
ST2 玄室羨門 立面図（C-C'）



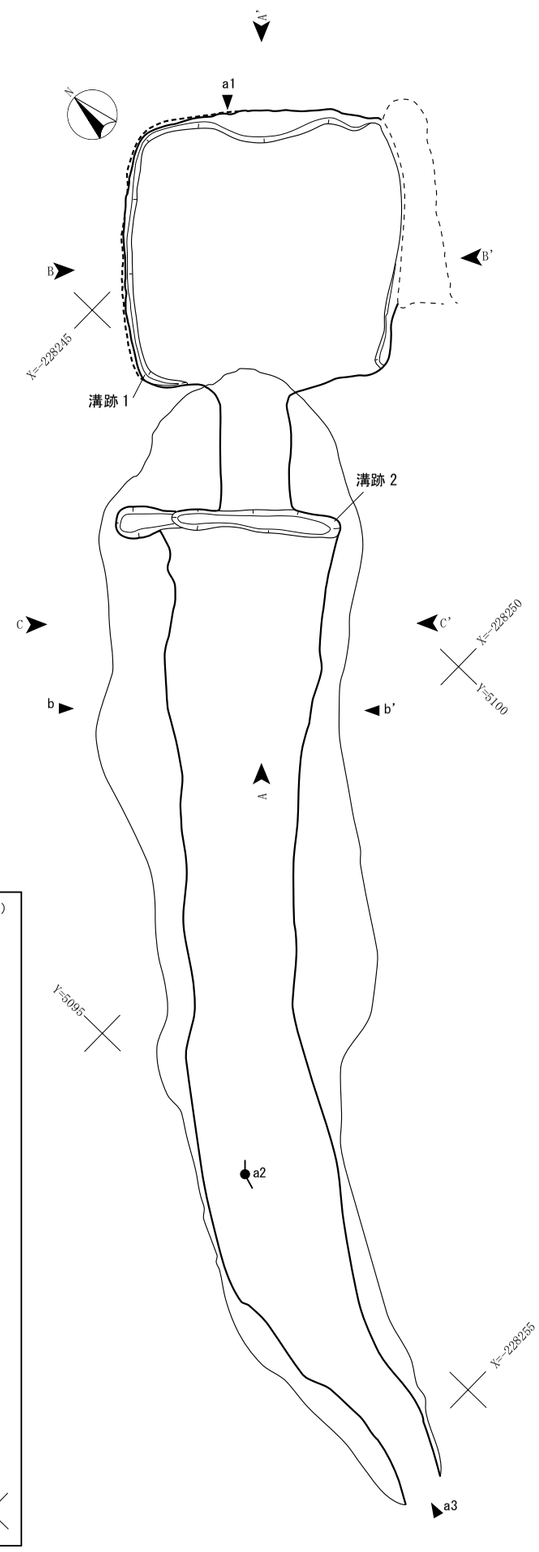
ST2 玄室奥壁 立面図（B-B'）

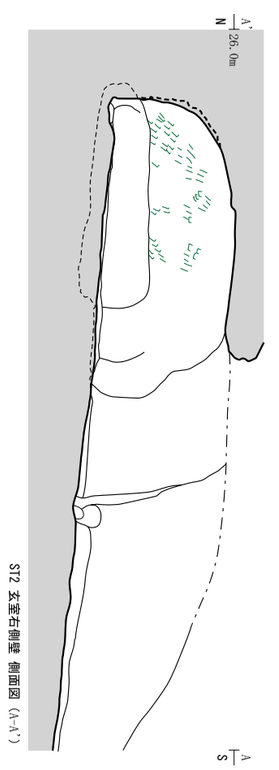


ST2 玄室羨門 立面図【閉塞石有】（C-C'）

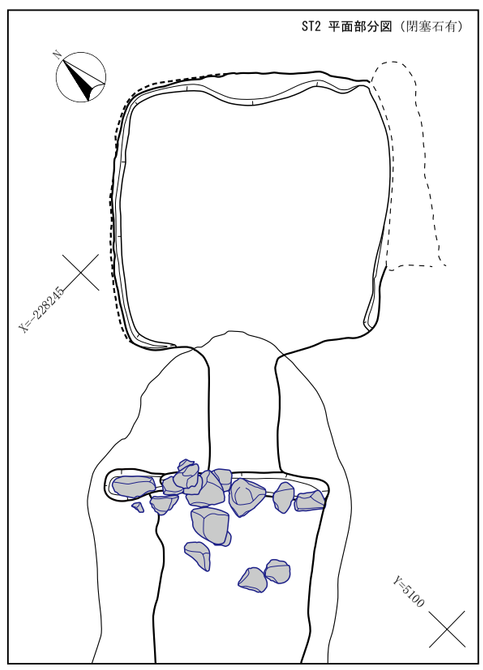


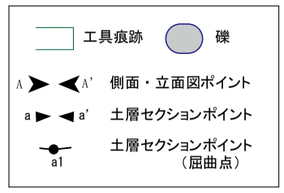
ST2 玄室左側壁 側面図（A-A'）

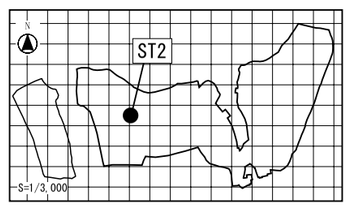


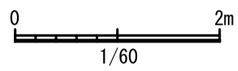


ST2 玄室右側壁 側面図（A-A'）



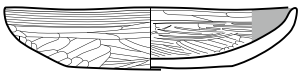


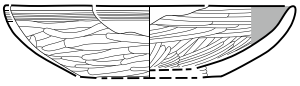




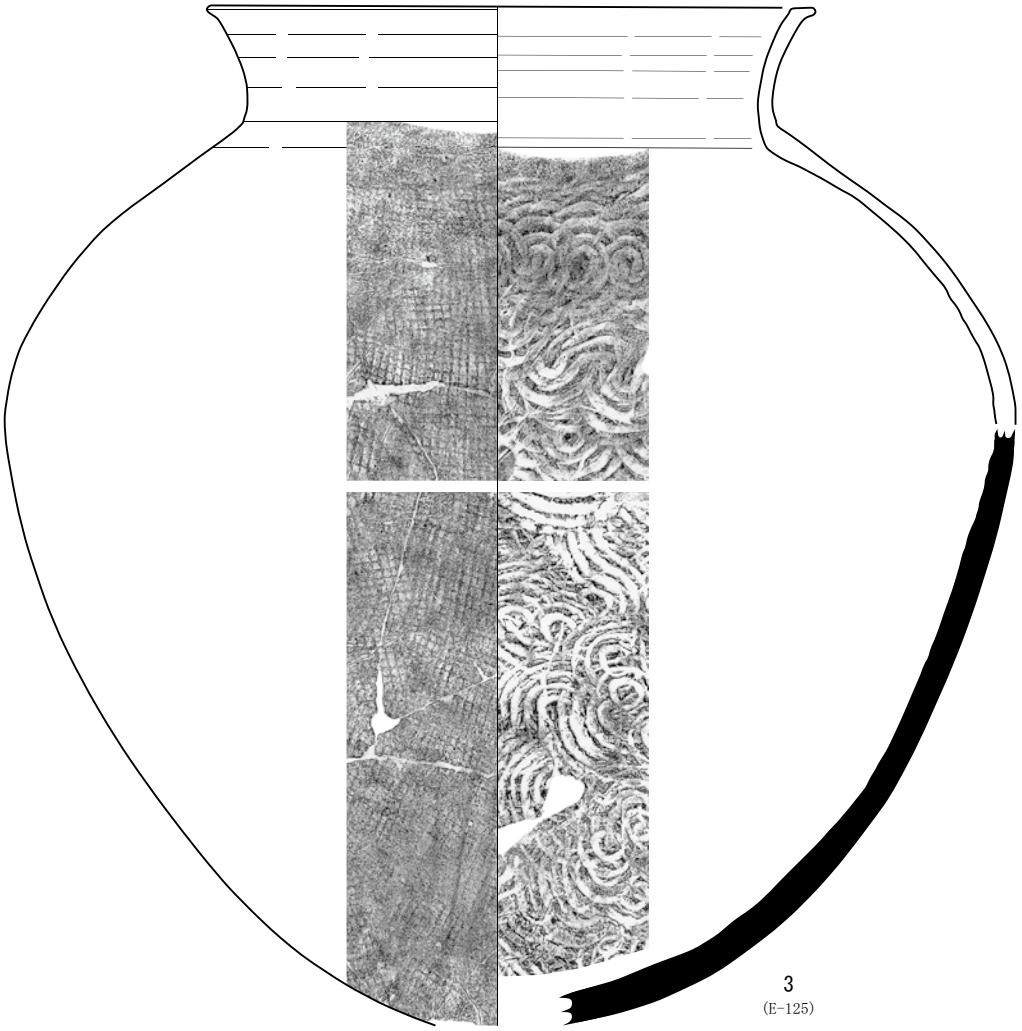
第27図　ST2 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

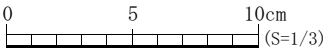
墓前域　大別１層





墓前域　大別２層



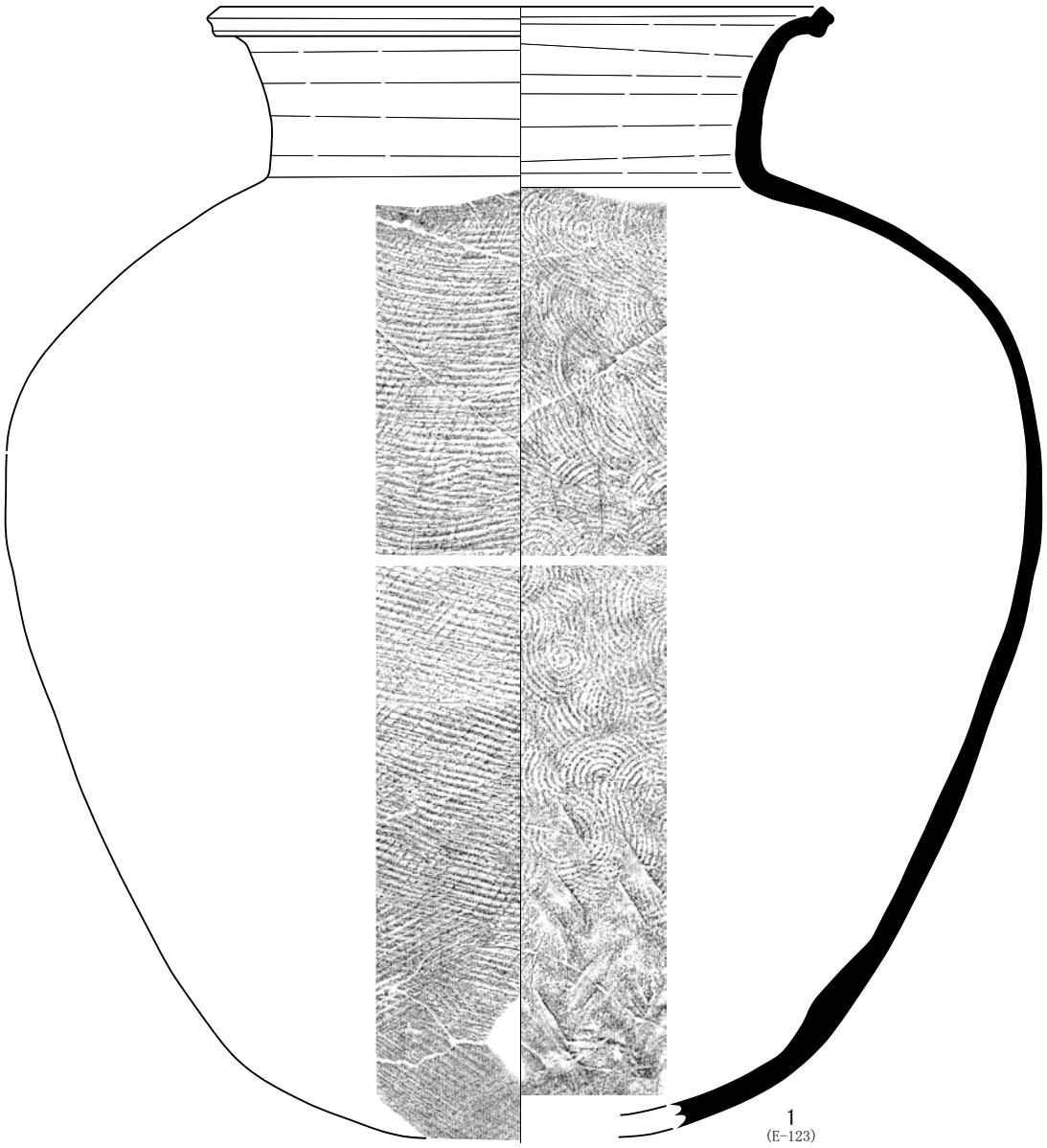


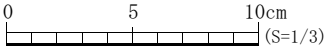
※( )内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	6層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(11.4)cm・器高2.5cm・底径6.4cm・器厚0.4～0.5cm 【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-45	193-4
2	墓前域	6層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(11.7)cm・器高2.9cm・底径(5.6)cm・器厚0.4～0.6cm	C-46	193-9
3	墓前域	12層上面	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部格子状タタキ？ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径(24.0)cm・器高(40.7)cm・器厚0.5～1.1cm	E-125	237-2 268-6 268-7

第28図　ST2 横穴墓 出土遺物 (1) －土器類－

墓前域　大別２層

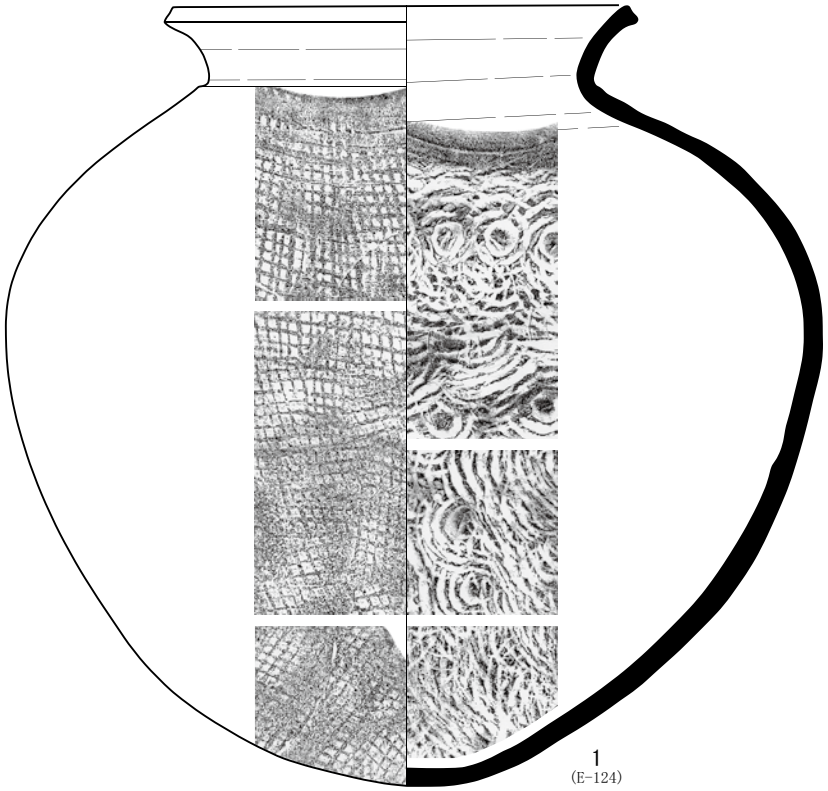


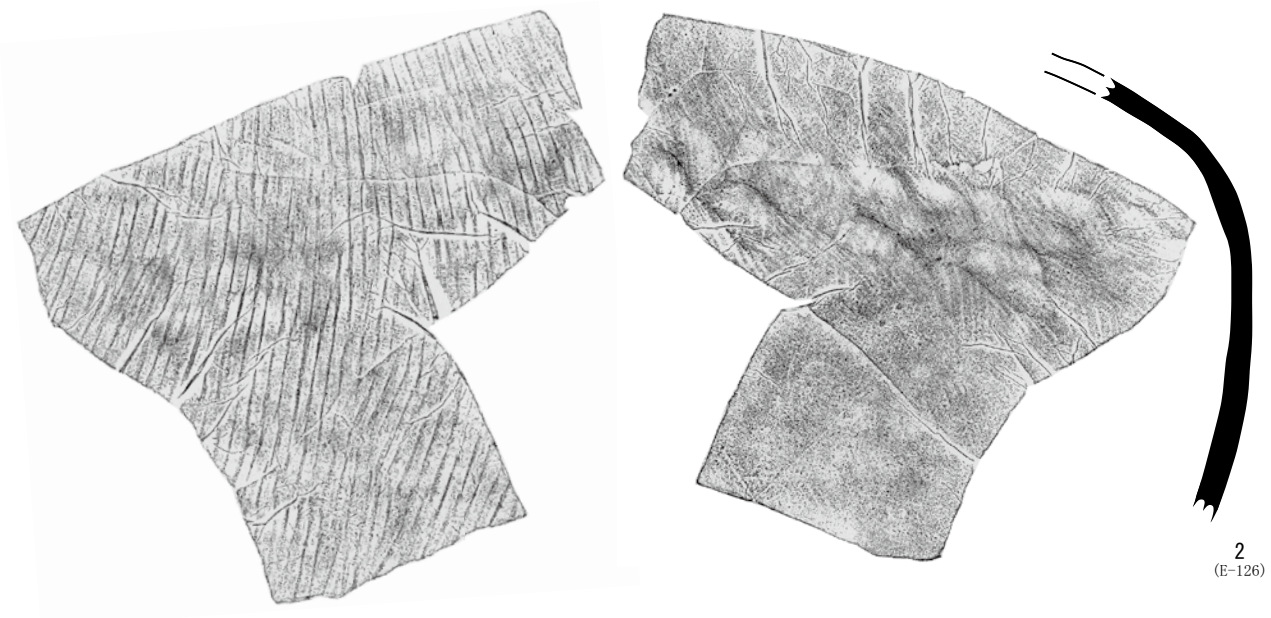


No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	8層 12層上面	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部～底部格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円)・底部ハケメ 【法量】口径24.9cm・残存高47.0cm・器厚0.5～1.4cm	E-123	237-1 268-1 268-2 268-3

第29図　ST2 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層



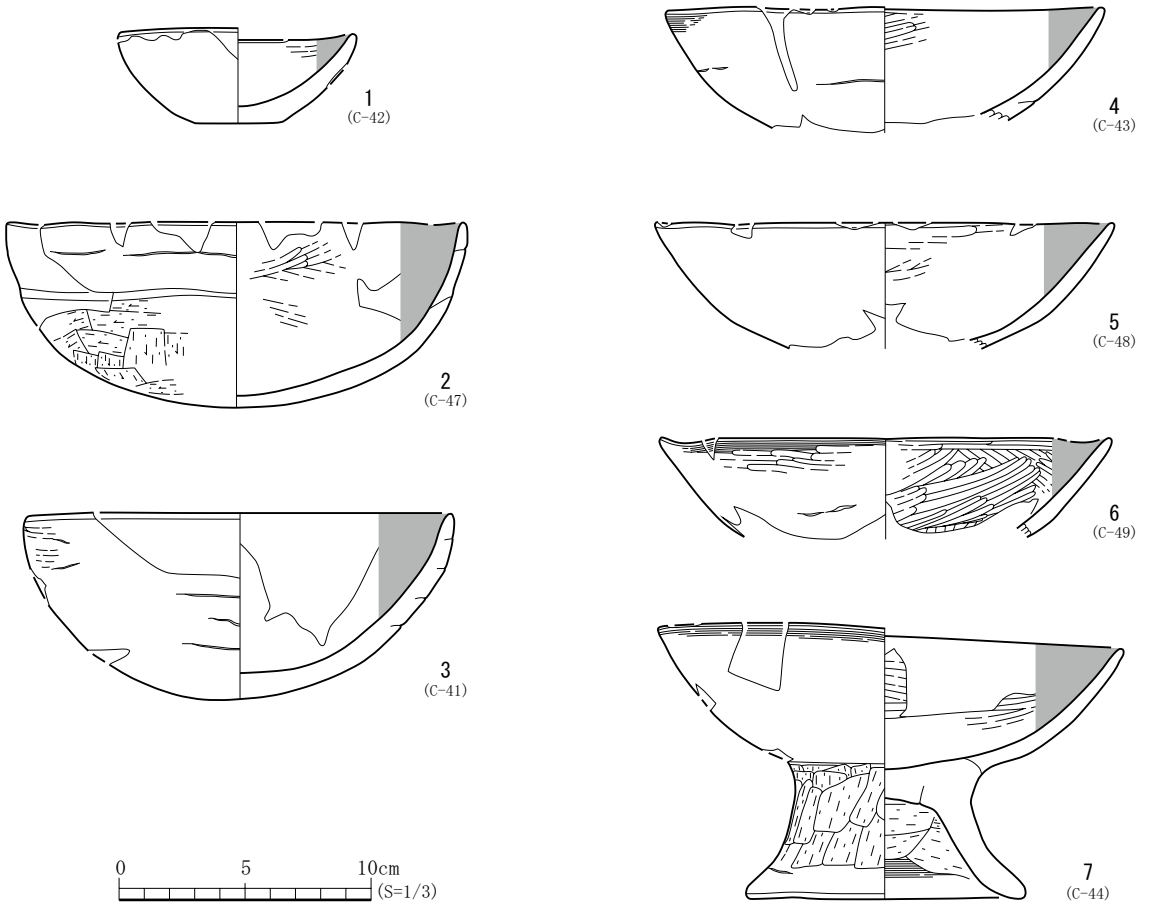


0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	8層	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部～底部格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部～底部当て具痕(同心円) 【法量】口径18.1cm・器高31.2cm・器厚0.6～0.9cm	E-124	238-1 268-4 268-5
2	墓前域	12層上面	須恵器 甕	【技法】外面：平行タタキ、内面：当て具痕→ナデ 【法量】器厚0.7～1.0cm	E-126	238-2

第30図　ST2 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別３層



※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	12層	土師器 小型坏	【技法】外面：磨滅のため調整不明、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(9.3)cm・器高3.8cm・底径3.5cm・器厚0.4～0.9cm	C-42	193-5
2	墓前域	12層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部磨滅のため調整不明・体部～底部ヘラ削り・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(18.2)cm・器高7.4cm・器厚0.4～0.8cm 【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-47	193-6
3	墓前域	12層	土師器 埦	【技法】外面：体部磨滅のため調整不明(ヘラミガキ？) 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(16.8)cm・器高7.5cm・器厚0.5～1.0cm	C-41	193-7
4	墓前域	12層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】坏部口径(17.2)cm・残存高5.0cm・器厚0.4～0.6cm	C-43	211-1
5	墓前域	12層	土師器 高坏	【技法】外面：磨滅のため調整不明、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】坏部口径(18.0)cm・残存高5.0cm・器厚0.4～0.6cm	C-48	211-4
6	墓前域	12層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】坏部口径(17.8)cm・残存高4.1cm・器厚0.4～0.6cm	C-49	211-5
7	墓前域	12層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 [脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部磨滅のため調整不明 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ・磨滅 【法量】坏部口径(18.3)cm・器高11.0cm・脚裾部径11.1cm・器厚0.3～1.2cm	C-44	211-2

第31図　ST2 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

３号横穴墓（ST3）（第 32～35 図、第 13 表、第 4 分冊 写真図版 24）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 24～25m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北側には ST2、南側には ST4 が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の奥壁付近のみ天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室の奥壁天井付近から上部の範囲はシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲は砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 32 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 6.92m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.70m、玄室の中央幅 1.69m、前壁幅 1.30m を測る。床面積は約 2.4 ㎡である。

平 面 形：不整形である。前壁と左側壁のコーナー以外の境が曲線となる形状である。

天　　井：残存していないため不明である。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置し、幅 0.92m を測る。天井が残存していないため立面形は不明である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明瞭な工具痕後は確認できなかった。

そ の 他：奥壁左半分と右側壁中央付近の砂質の壁面(基本層Ⅲb 層)でトンネル状の掘り込みを確認した。奥壁の掘り込みは ST2 玄室右側壁、右側壁の掘り込みは ST4 玄室奥壁まで至っている。遺物は出土しておらず、規模からみて、人為的なものでなく、小動物等によって掘り込まれた痕跡と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.86m、玄室側の幅 0.92m、墓前域側の幅 0.78m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.52m、幅 0.26～0.35m、深さ 0.08m の溝跡 1 を確認した。溝跡 1 中央の上部には、角礫 1 個（石材観察・軽量等は未実施）が残存していた。閉塞石として利用された礫の可能性がある。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 4.36m、上幅 0.5～1.9m、下幅 0.35～1.42m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.3m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：ほぼ平坦である。

【堆積層】　ST3 横穴墓を覆う堆積層は 12 層に分けた（第 33 図)。いずれも自然堆積層である。2・3・5 層には基本層Ⅲa・b 起源の地山ブロックが多く含まれる。玄室及び羨道の天井崩落土とみられる。ST3 では整地層のような人為的な堆積層は認められなかった。

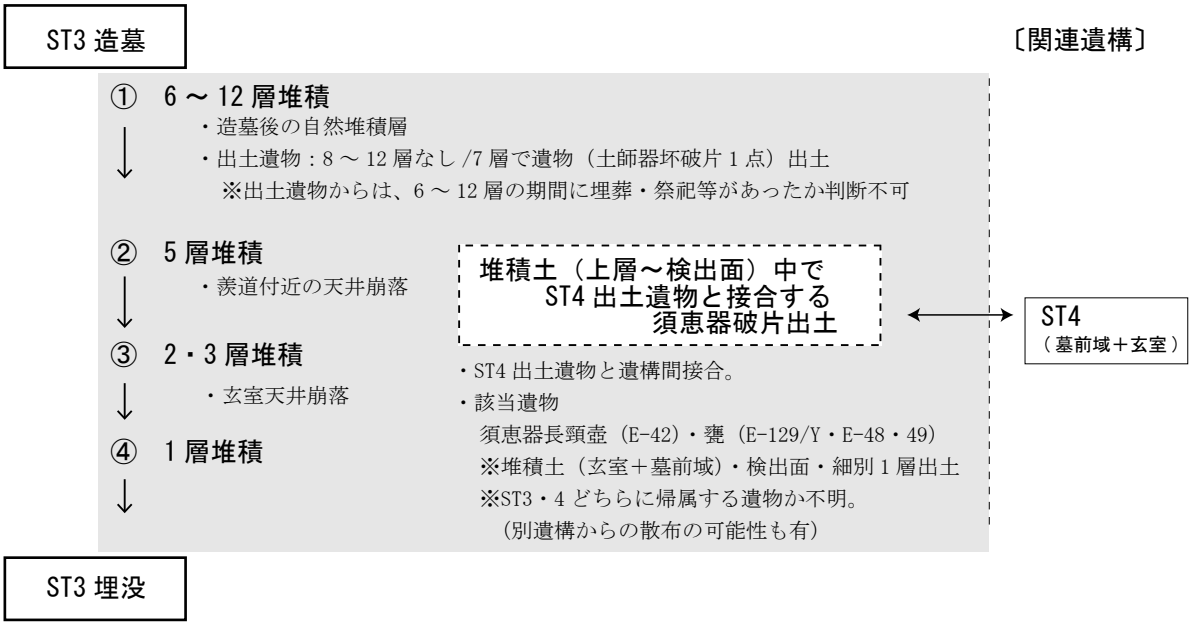
【出土遺物】土師器 2 点（1 個体、破片 1 点)、須恵器 7 点（3 個体、破片 4 点※うち 2 個体、破片 2 点は遺構間接合遺物）が出土した（第 13 表 1・2)。人骨等は残存していない。土師器高坏 1 個体（第 34 図 2)、須恵器長頸壺 1 個体（第 34 図 3)・甕破片 2 点（第 34 図 1・4）の合計 4 点を図示した。このうち、須恵器長頸壺（第 34 図 3）と甕体部破片（第 34 図 4）については、隣接する ST4 出土遺物と遺構間で接合する破片であり、堆積土上層で出土した。両者ともに破片資料のため、どの横穴墓で主体的に使用されたものか判別できなかった（第 35 図/第 13 表 2)。ST3 では横穴墓が半分以上埋没した堆積土上層（細別 7 層より上層）で遺物が少量出土する程度で、その出土位置もまとまりがない。このことから、これらの遺構間接合遺物については、ST3 で主体的に使用されたものではなく、他の横穴墓から流入または散布された遺物とみておきたい。

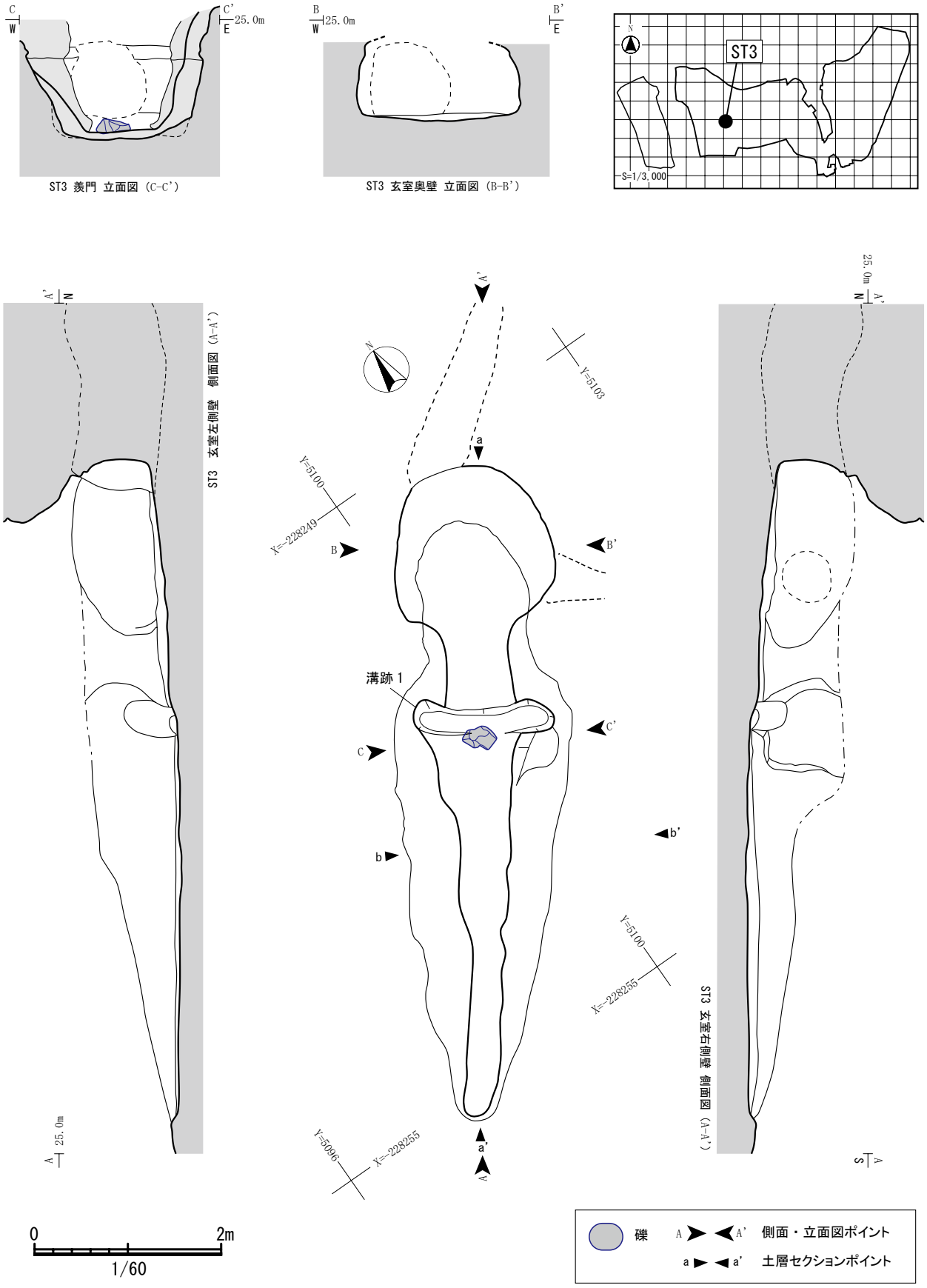
なお、ST3 については、横穴墓掘方底面付近での遺物が皆無であるため、造墓後のいつの段階で初葬等が実施されたかも判断が難しい状況である。可能性を挙げるのであれば、「使用遺物が土器等以外の有機質ものであった」「そもそも埋葬時に副葬品は使用しなかった」「盗掘等により遺物なし」「造墓したが使用されなかった」などが考えられるが、今回の調査ではその特定には至らなかった。

【まとめ】

ST3 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST3 造墓・使用・埋没の経過〕





第32図　ST3 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

第13表　ST3横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器			須恵器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	高坏	小計	甕	小計
玄室	－	堆積土	個				1 (50)	1 (50)
			破				2 (230)	2 (230)
墓前域	－	検出面	個		1 (195)	1 (195)		
			破					
		7層	個					
			破	1 (20)		1 (20)		
総合計		個体数(重量)			1 (195)	1 (195)	1 (50)	1 (50)
		破片数(重量)		1 (20)		1 (20)	2 (230)	2 (230)
		総重量		(20)	(195)	2 (215)	(280)	3 (280)

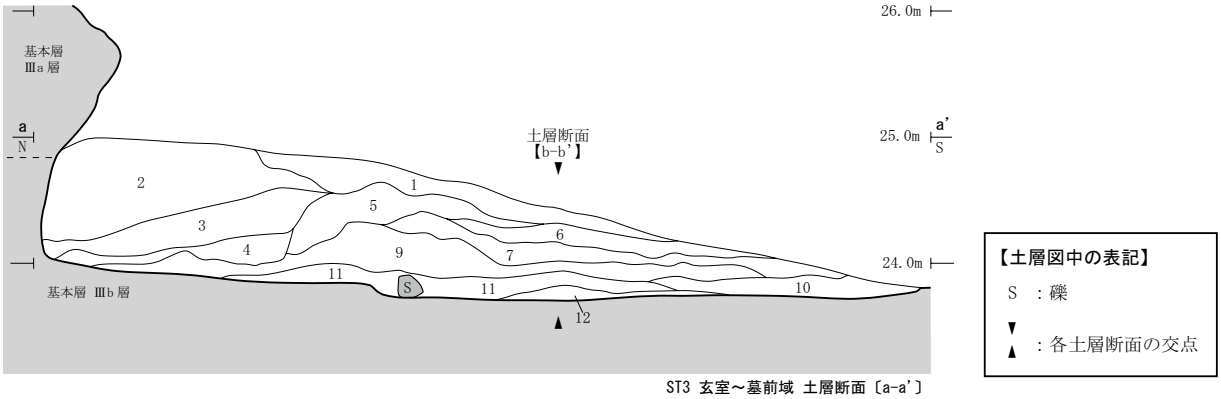
※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	長頸壺	1 (280)	◆ST3　1層(墓前域) ◆ST4　検出面(墓前域)	ST3or4	★ST3:2点(口縁部～頸部破片) ◆ST4:1点(口縁部小破片)	E 42	第34図3
須恵器	甕	1 (685)	◆ST3　堆積土(玄室＋墓前域) ◆ST4　堆積土(墓前域)	ST3or4	★ST3:7点 ◆ST4:1点	E 129	第34図4
須恵器	甕	1 (280)	◆ST3　1層(墓前域) ◆ST4　検出面(墓前域)	ST3or4	◆ST3:1点 ◆ST4:1点 ※体部破片 E-129と胎土・焼成が類似	Y・E 48	－
須恵器	甕	1 (205)	◆ST3　堆積土(玄室) ◆ST4　2層(玄室)	ST3or4	◆ST3:1点 ◆ST4:1点 ※体部破片 E-129と胎土・焼成類似	Y・E 49	－

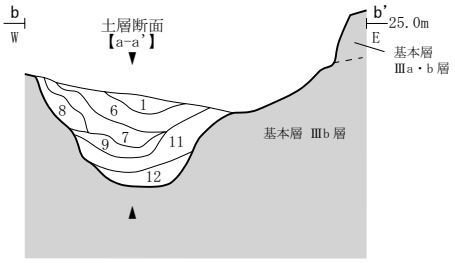
※アンダーラインがあるもの【 例:ST1　検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST3出土須恵器の総数
(表13-1)遺構単独出土　1個体＋破片2点
＋
(表13-2)遺構間接合遺物　2個体＋破片2点　＝ 7 点



ST3 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕

【土層図中の表記】
S　：礫
▼
▲　：各土層断面の交点

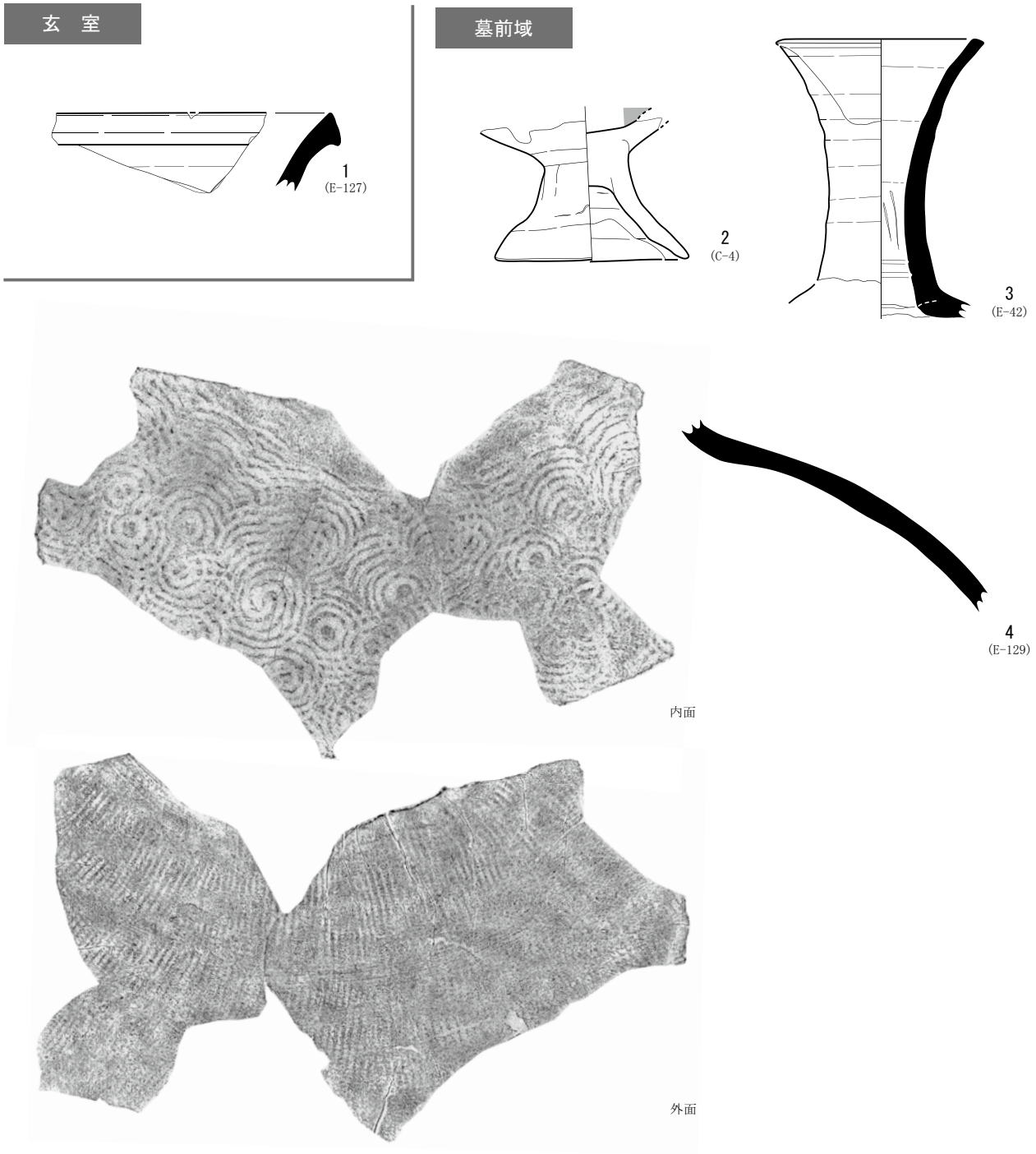


ST3 墓前域 土層断面〔b-b'〕

0　2m
1/60

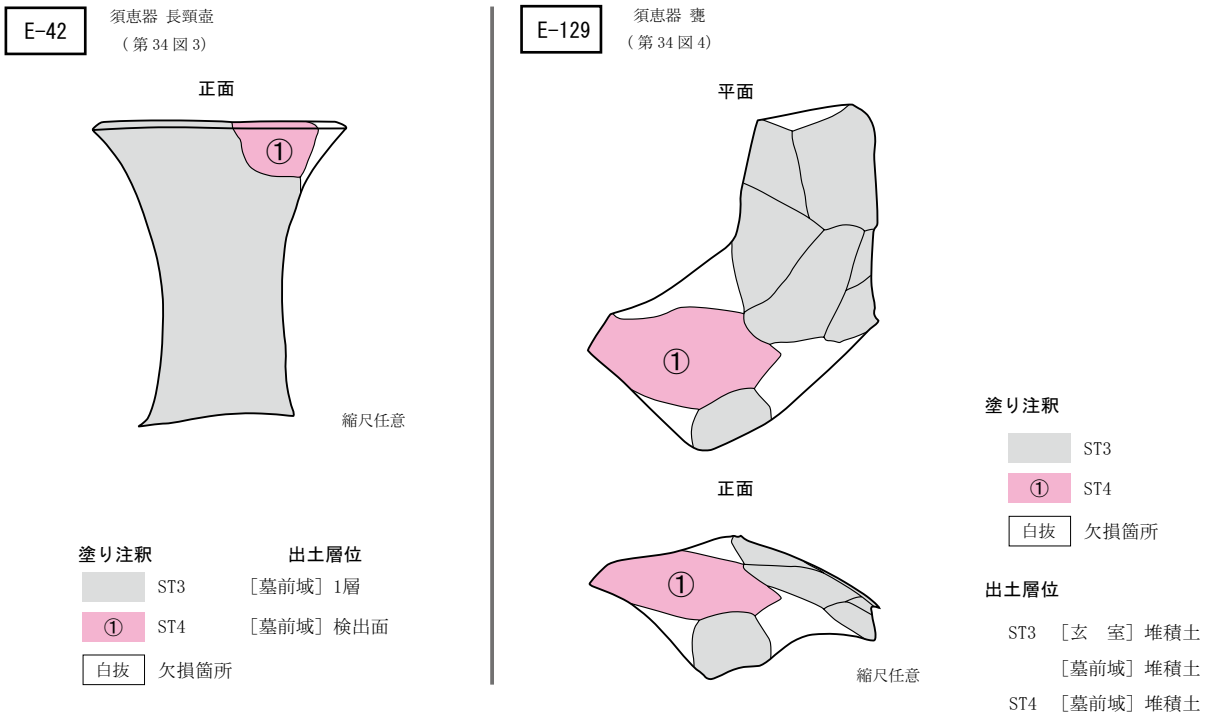
層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子含む。
2	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック(大)、(小)多く含む。
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	地山ブロック(大)多く含む。
4	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	砂質シルト	地山粒子多量含む。
5	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山ブロック(大)・(小)多く含む。
6	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック(大)・(小)、炭化物片少量含む。
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山ブロック(小)、炭化物片含む。
8	黄褐色(2.5Y5/3)	砂質シルト	地山粒子少量含む。
9	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山ブロック(小)含む。
10	灰黄色(2.5Y6/2)	砂質シルト	地山ブロック(小)含む。
11	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質シルト	地山ブロック(小)含む。
12	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山粒子少量、地山ブロック(小)微量含む。

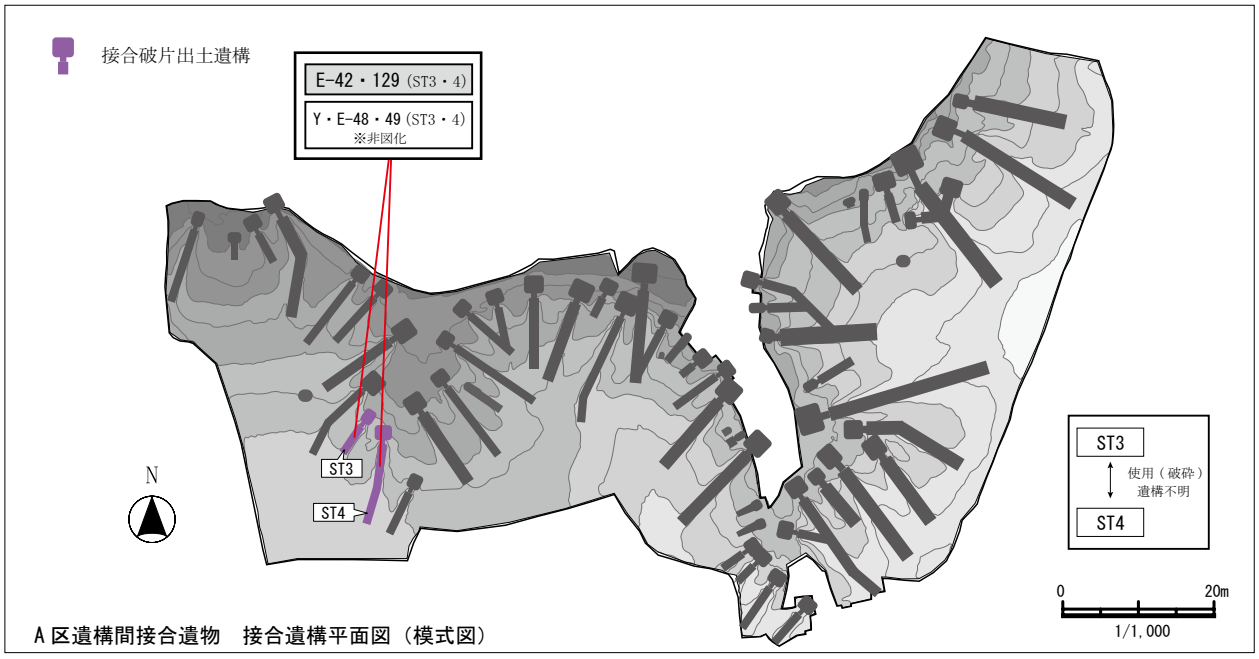
第 33 図　ST3 横穴墓　土層断面図



No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室	堆積土	須恵器 甕	【技法】内外面：ロクロナデ 【法量】器厚0.8～1.5cm	E-127	238-4
2	墓前域	検出面	土師器 高坏	【技法】外面：磨滅のため調整不明 内面：[坏部]磨滅のため調整不明(ヘラミガキ？)・黒色処理　[脚部]ヘラ削り・磨滅 【法量】脚裾部径9.2cm・残存高6.9cm・器厚0.4～1.0cm	C-4	211-3
3	墓前域	◆ST3　1層 ◆ST4　検出面	須恵器 長頸壺	◎遺構間接合　ST3＋ST4(主体不明) 【技法】外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ・絞り目 【法量】口径9.0cm・残存高13.5cm・器厚0.5～0.8cm	E-42	222-8
4	[ST3] 玄室・墓前域 ＋ [ST4] 墓前域	◆ST3　堆積土 ◆ST4　堆積土	須恵器 甕	◎遺構間接合　ST3＋ST4(主体不明) 【技法】外面：平行タタキ→カキメ？、内面：当て具痕(同心円) 【法量】器厚0.8～1.1cm 【特記事項】遺構間接合の類似破片有り[非図化／ST3＋ST4(主体不明)]	E-129	238-3

第34図　ST3 横穴墓 出土遺物





第35図　ST3 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

４号横穴墓（ST4）（第 36～38 図、第 14 表、第４分冊 写真図版 25・26）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 23～25m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST3、南西には ST5 が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端が現代の造成により削平を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室奥壁上部の範囲はシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲は砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 36 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 12.97m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.74m、玄室の中央幅 1.93m、奥壁幅 1.78m、前壁幅 1.62m、左側壁幅 1.64m、右側壁幅 1.72m、玄室底面から天井の高さ 1.18m を測る。床面積は約 3.3 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かってわずかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。幅 0.52m を測る。残存状況からみて、立面形は逆 U 字形を呈していたと考えられる。

工 具 痕：各壁に幅 0.09m 前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は斜め方向である。

そ の 他:奥壁左隅コーナーと左側壁の砂質の壁面(基本層Ⅲb 層)でトンネル状の掘り込みを確認した。奥壁の掘り込みは ST3 玄室右側壁まで至っている。遺物は出土しておらず、規模からみて、人為的なものでなく、小動物等によって掘り込まれた痕跡と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.84m、玄室側の幅 0.52m、墓前域側の幅 0.51m を測る。

立 面 形：残存状況からみて、立面形は逆 U 字形を呈していたと考えられる。

天　　井：一部残存しており、残存部分については平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、ほぼ平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.38m、幅 0.25～0.38m、深さ 0.03m の溝跡 1 を確認した。溝跡 1 の上部には、0.35×0.18×0.17m（24.5 kg）～0.40×0.35×0.20m（64.7 kg）の円礫 5 個（総重量 229.2 kg）が残存していた。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材はすべて花崗閃緑岩である（第 14 表 3)。溝跡 1 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　模：羨門から墓前域の末端までの残存長 10.39m、上幅 0.6～1.7m、下幅 0.26～1.24m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.3m 前後残存している。

形　状：細長い溝状の形状を呈する。羨門から約 5.6m 下方の地点で南西方向に屈曲して端部に至る。

底　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.8m 程度である。

【堆積層】　ST4 横穴墓を覆う堆積層は 13 層に分けた（第 37 図)。すべて自然堆積層で、整地層のような人為的な堆積層は認められなかった。閉塞石は 10 層上面に据えられている。

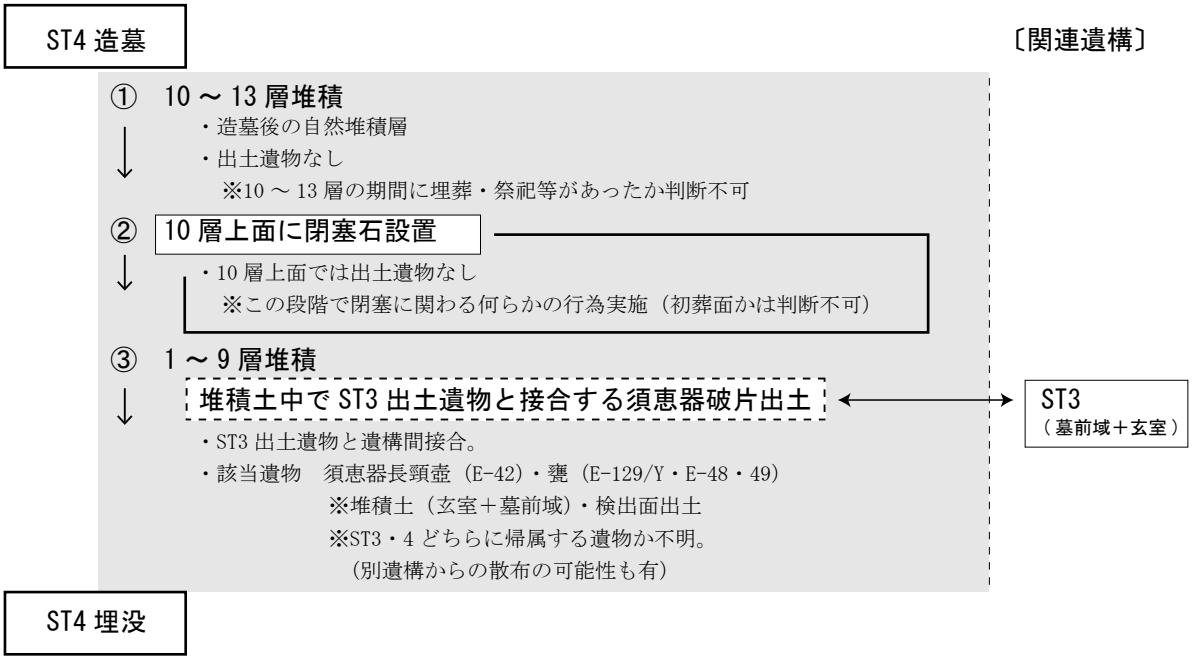
【出土遺物】　須恵器 10 点（うち破片 4 点は遺構間接合遺物）が出土した（第 14 表 1・2)。ほとんどが遺構検出面などの堆積土上層からの出土である。須恵器の内訳は長頸壺破片 1 点・甕破片 9 点で、ST4 単独出土の甕破片 1 点 (第 38 図 1)、ST3 と遺構間接合する長頸壺 1 個体 (第 34 図 3)・甕破片 1 点 (第 34 図 4) の合計 3 点を図示した（遺構間接合遺物は ST3 に掲載)。遺構間で接合する遺物（第 14 表 2）については、いずれも破片資料のため、どの横穴墓で主体的に使用されたものか判別できなかった。ST3・4 以外の横穴墓から散布された遺物の可能性も想定される。ST4 出土遺物は、ST3 と同様の理由から、ST4 で主体的に使用されたものではなく、他の遺構から流入または散布されたものである可能性が高い。

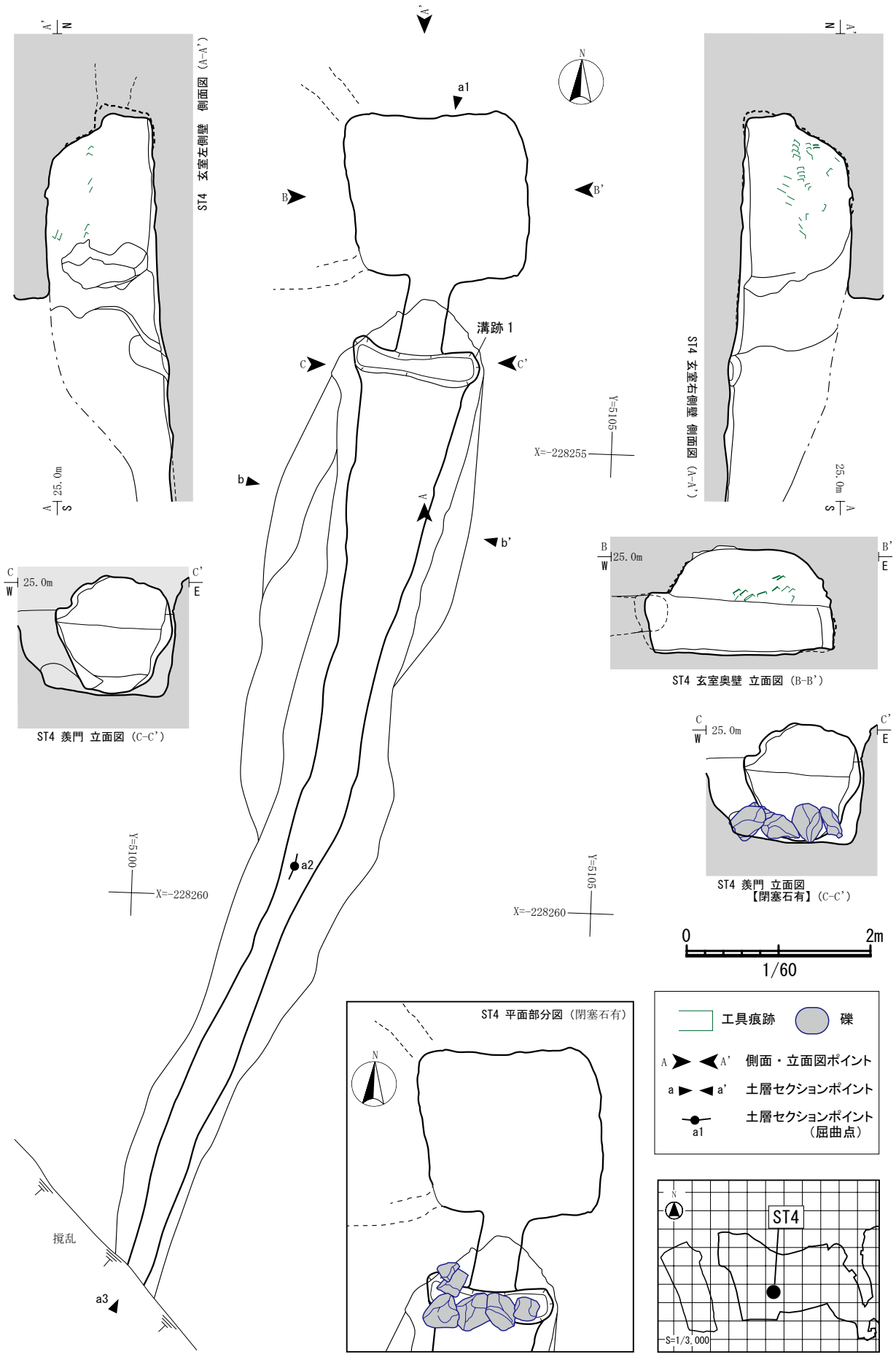
なお、10 層上面に閉塞石が据えられている状況からみて、この段階の ST4 では閉塞行為に関わる何らかの行為が実施されたと考えられる。ただし、同一層で遺物が出土していないため、その詳細は不明である。

【まとめ】

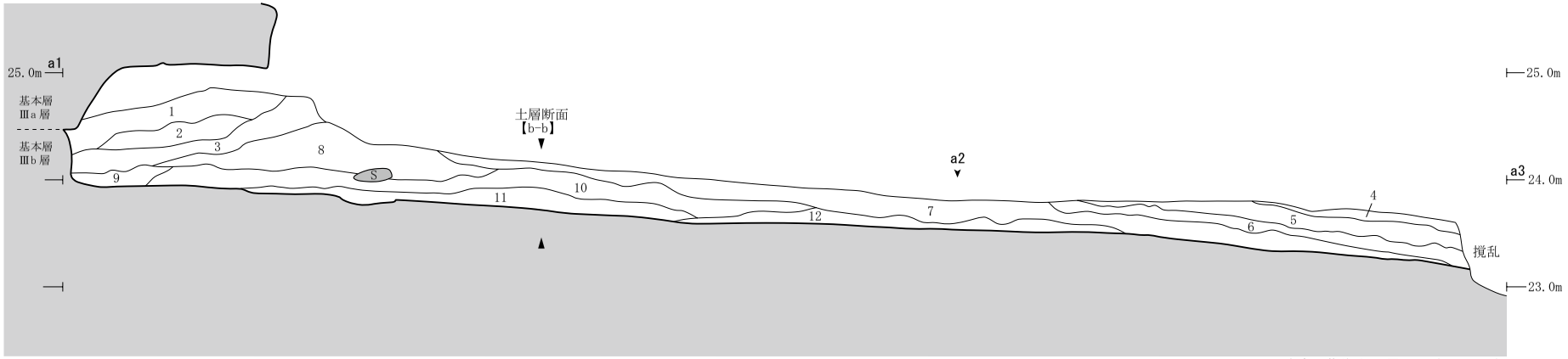
ST4 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST4 造墓・使用・埋没の経過〕

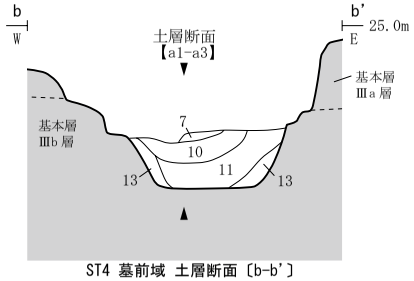




第36図　ST4 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



ST4 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕



ST4 墓前域 土層断面〔b-b'〕

【土層図中の表記】

S ：礫

▼：土層断面の屈曲点

▼▲：各土層断面の交点

0　2m

1/60

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。
2	黄褐色(2.5Y5/3)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。
3	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック少量、黒褐色土粒子含む。
4	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。
5	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。
6	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。
7	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック、地山粒子、炭化物片少量含む。
8	にぶい黄色(2.5Y6/4)	砂質シルト	地山ブロック、地山粒子含む。
9	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質シルト	地山粒子少量含む。
10	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	地山ブロック(小)、炭化物片少量含む。
11	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質シルト	地山ブロック(小)多く含む。
12	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質シルト	地山粒子微量含む。
13	黄褐色(2.5Y5/3)	砂質シルト	地山粒子少量含む。

第 37 図　ST4 横穴墓 土層断面図

第14表　ST4横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				須恵器	
出土位置	出土層位		器種 / 個体/破片	甕	小計
	大別層	細別層			
玄室	－	2層	個	1 (100)	1 (100)
			破	4 (165)	4 (165)
墓前域	－	検出面	個		
			破	1 (15)	1 (15)
総合計		個体数(重量)		1 (100)	1 (100)
		破片数(重量)		5 (180)	5 (180)
		総重量		(280)	6 (280)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

3. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	円礫	35	18	17	24.5
花崗閃緑岩	円礫	43	20	20	25.1
花崗閃緑岩	円礫	40	30	20	57.1
花崗閃緑岩	円礫	40	30	28	57.8
花崗閃緑岩	円礫	40	35	20	64.7
合計:5点／重量(kg)＝					229.2

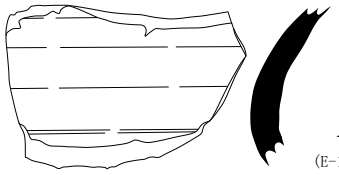
2. 土器類－遺構間接合遺物－

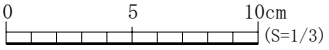
種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	長頸壺	1 (280)	◆ST3　1層(墓前域) ◆ST4　検出面(墓前域)	ST3or4	★ST3:2点(口縁部～頸部破片) ◆ST4:1点(口縁部小破片)	E 42	第34図3
須恵器	甕	1 (685)	◆ST3　堆積土(玄室＋墓前域) ◆ST4　堆積土(墓前域)	ST3or4	★ST3:7点 ◆ST4:1点	E 129	第34図4
須恵器	甕	1 (280)	◆ST3　1層(墓前域) ◆ST4　検出面(墓前域)	ST3or4	◆ST3:1点 ◆ST4:1点 ※体部破片 E-129と胎土・焼成が類似	Y・E 48	－
須恵器	甕	1 (205)	◆ST3　堆積土(玄室) ◆ST4　2層(玄室)	ST3or4	◆ST3:1点 ◆ST4:1点 ※体部破片 E-129と胎土・焼成が類似	Y・E 49	－

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST4出土須恵器の総数
(表14-1)遺構単独出土　1個体＋破片5点
＋
(表14-2)遺構間接合遺物　破片4点　＝ 10 点

玄　室





No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室	2層	須恵器 甕	【技法】内外面：ロクロナデ 【法量】器厚0.6～1.0cm	E-128	238-5

第38図　ST4 横穴墓 出土遺物

5号横穴墓（ST5）（第39～42図、第15表、第4分冊 写真図版27・28）

【検出位置】　A-2区西側の標高23～25mの丘陵南斜面に位置する。同斜面の北西側にはST4、北東にはST6が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端が現代の造成により削平を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の一部の天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室天井上部の範囲はシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）、それより下部の範囲は砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）である。

【個別部位の特徴】（第39図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は8.84mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行1.74m、玄室の中央幅1.84m、奥壁幅1.46m、前壁幅1.28m、左側壁幅1.55m、右側壁幅1.52m、玄室底面から天井の高さ0.99mを測る。床面積は約2.8㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とするが、コーナーのつくりなどやや崩れた方形を呈する。

天　　井：前壁の天井が崩落しているため不明である。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かってわずかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.1m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。幅0.74mを測る。残存状況からみて、立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.54m、玄室側の幅0.74m、墓前域側の幅0.68mを測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、ほぼ平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側に横穴墓の閉塞に関連すると考えられる9個の礫が残存していた。0.18×0.12×0.06m（2.4kg）～0.42×0.15×0.15m（32.5kg）の円礫6個と角礫3個である（総重量124.0kg）。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩5点、砂岩2点、安山岩1点、花崗閃緑岩1点である（第15表3）。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長6.56m、上幅1.4～2.0m、下幅0.37～1.25mを測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で0.2m前後、羨門付近で0.7m前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.5m 程度である。

【堆積層】　ST5 横穴墓を覆う堆積層は細別 11 層・大別 2 層に分けた（第 40 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～6 層）は ST5 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本層の堆積後、ST5 の大部分は埋没したと考えられる。本大別層の墓前域下層（細別 5・6 層）で遺物が出土している。遺物の出土状況からみて、この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 7～11 層）は ST5 玄室の一部と墓前域に堆積する自然堆積層である。羨門の墓前域側 10 層上面に閉塞石が据えられている。遺物は 7 層中から遺物が少量（須恵器 3 点）出土したが、7 層以下～底面では皆無である。閉塞石の設置位置からみて、造墓後、10・11 層が堆積したのち、その上面に閉塞石が設置されたことは確実である。遺物は出土していないが、その上面（10 層上面）で、羨門の閉塞行為等が行われた可能性が高い。ただし、その閉塞行為が ST5 における初葬に伴うものかは出土遺物がないため判断ができなかった。

【出土遺物】　土師器 3 点（2 個体、破片 1 点）、須恵器 6 点（3 個体、破片 3 点※うち破片 3 点は遺構間接合遺物）が出土した（第 15 表 1・2）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は全て墓前域である。土師器坏類 2 個体、須恵器高台埦 1 個体・蓋 1 個体・瓶類 1 個体の合計 5 点を図示した（第 42 図）。

出土遺物は、出土層位から **A：大別 1 層（細別 5・6 層）出土遺物**、**B：大別 2 層（細別 7 層）出土遺物**に分かれる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

なお、ST5 においては、前述のとおり**「C:大別 2 層の細別 10 層上面で閉塞石の設置行為」**が確認されている。細別 10 層上面での出土遺物はないが、ST5 は少なくとも古い順から C→B→A の 3 段階の経過があったと考えられる。

〔大別 2 層（細別 7 層）出土遺物〕

大別 2 層（細別 7～11 層）のうち、墓前域に分布する細別 7 層の堆積土中から出土した遺物である（前項 B に相当）。須恵器甕破片 3 点が出土した（第 15 表 2）。これらは、別遺構出土の須恵器甕と遺構間接合する遺物であり、ST6 由来のもの**(E-130／第 52 図 1 および Y・E-50)**と考えられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST6 は、ST5 北東側の斜面上部に隣接している横穴墓である。位置的にみて、ST6 破砕破片の流れ込みの可能性もあるが、ST5 と遺構間接合する E-130 の須恵器甕破片は ST16 でも出土しており、ST6 の墓前域内での甕の破砕・散布が実施された遺物であることが確認されている。このことから、ST5 で出土した同甕の破片についても「ST6 から ST5 に意図的に散布されたもの」とみておきたい。

〔大別 1 層（細別 5・6 層）出土遺物〕（第 42 図）

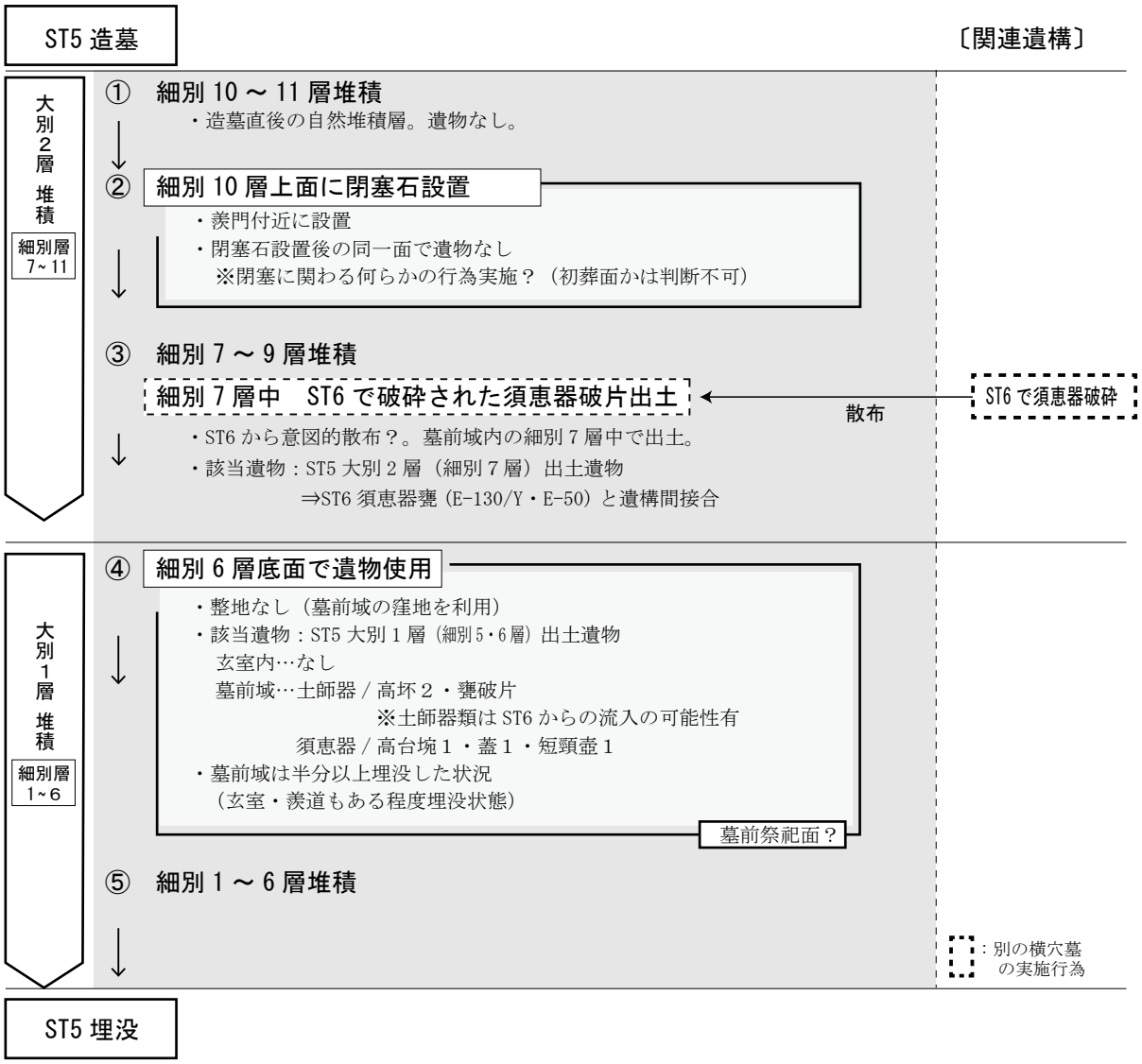
大別 1 層（細別 1～6 層）のうち、墓前域に分布する細別 6 層の底面を中心に出土した遺物である（前項 A に相当）。土師器高坏 2 個体（第 42 図 1・2）・甕破片 1 点、須恵器高台埦（第 42 図 4）・蓋（第 42 図 3）・短頸壺 1 個体（第 42 図 5）が出土した（第 15 表 1・2）。土師器高坏については、ST5 では図示した破片 2 点のみの出土であり、隣接する ST6 で高坏が多く出土していることから、ST6 から流入した遺物である可能性が高い。

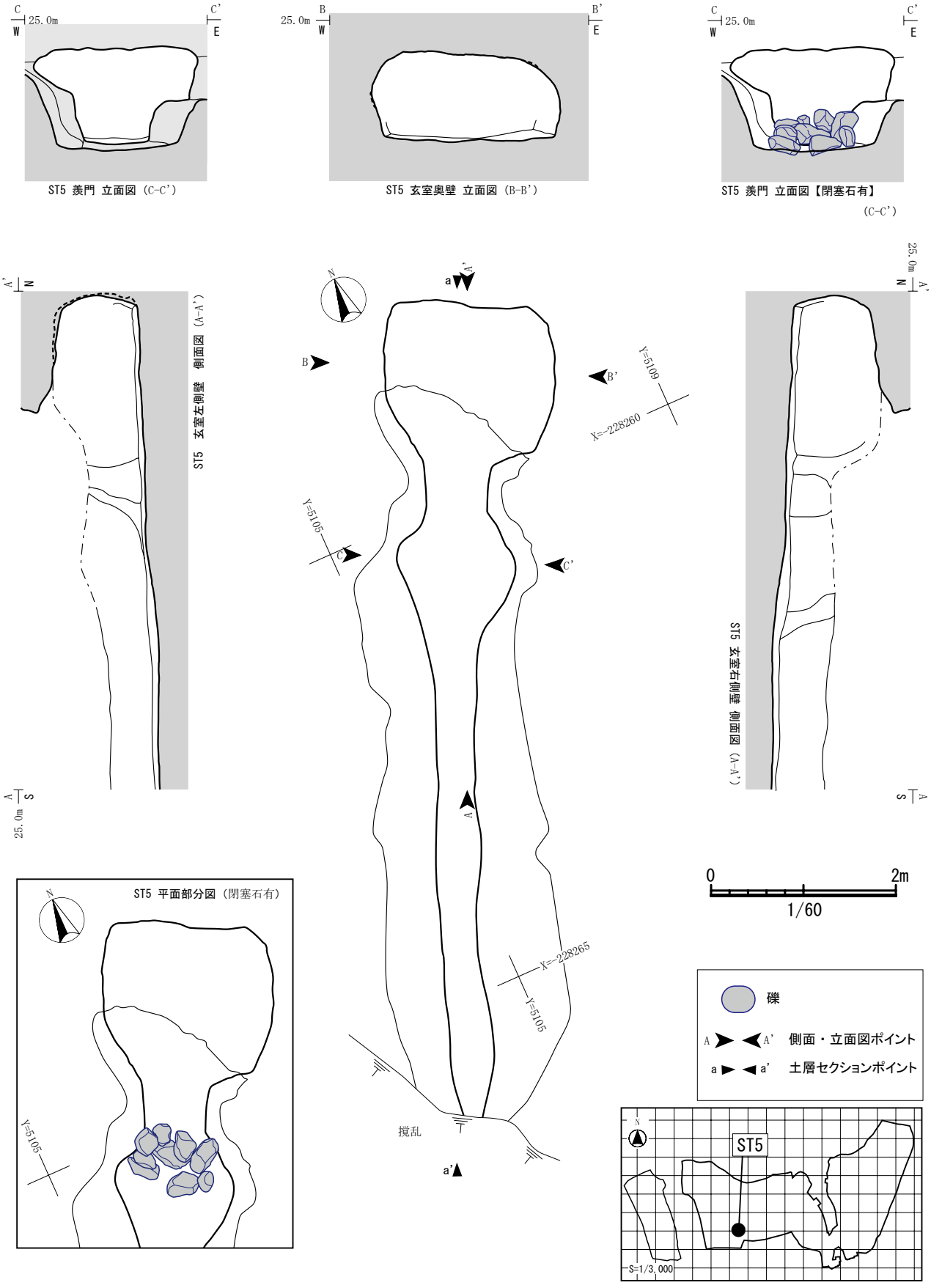
大別１層出土遺物のうち、須恵器については出土状況からみて、墓前域大別１層の細別６層底面付近で使用されたものとみられる（第 41 図）。この段階では、ST5 の墓前域は半分以上埋もれた状態であったと想定され、羨道を含む玄室入口についてもある程度埋没した状態だったと考えられる。このことから、大別１層出土の須恵器は追葬とは関連しない墓前祭祀で使用された遺物であるとみておきたい。

【まとめ】

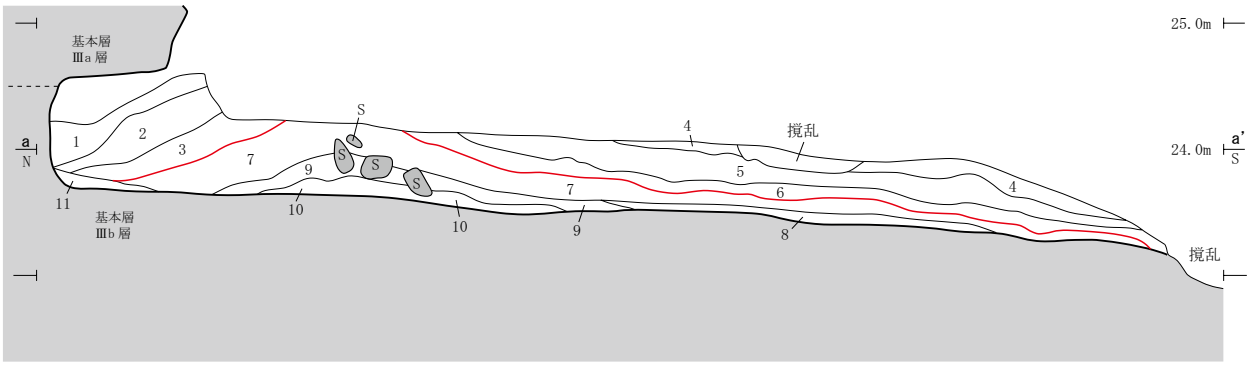
ST5 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST5 造墓・使用・埋没の経過〕





第39図　ST5 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



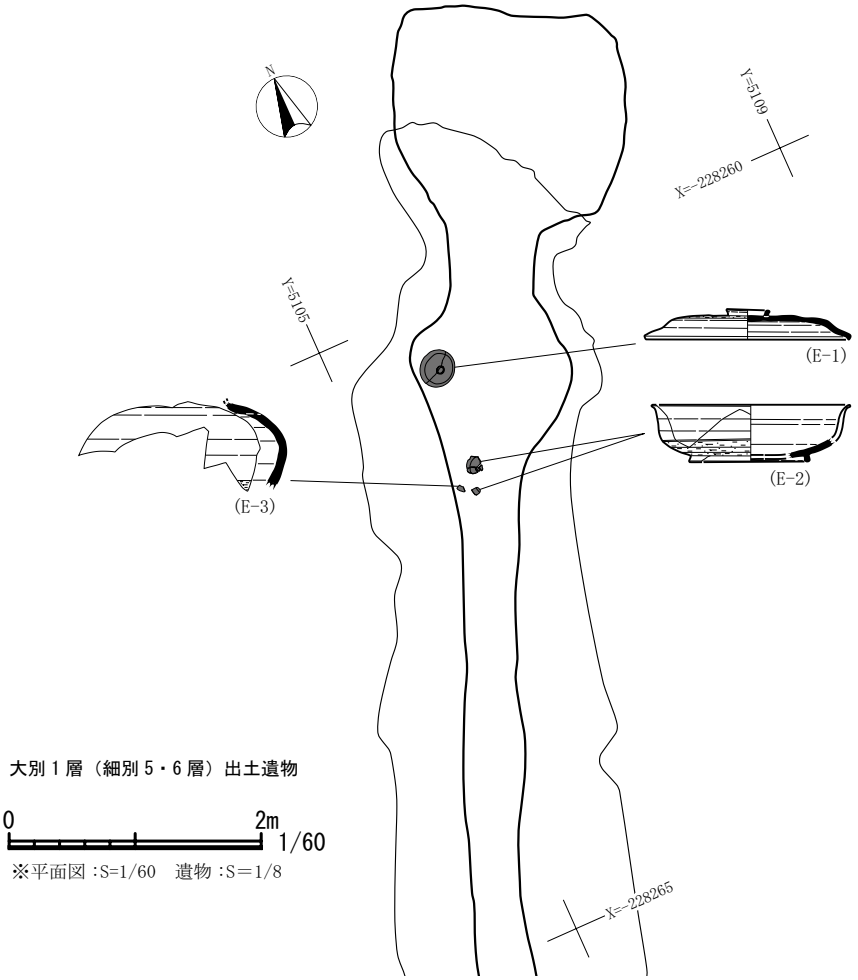
ST5 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山(岩盤)、地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック(大)多く含む。		
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、炭化物片含む。		
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック(小)多く含む。		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。		
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。		
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山ブロック(大)、(小)含む。	2	自然堆積層
8	黄褐色(2.5Y5/3)	砂質シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
9	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
10	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
11	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山粒子少量含む。		

0　2m
1/60

【土層図中の表記】
— 分層線の赤線：祭祀想定面
S　：礫

第 40 図　ST5 横穴墓　土層断面図



大別 1 層（細別 5・6 層）出土遺物

0　2m
1/60

※平面図：S=1/60　遺物：S＝1/8

第41図　ST5 横穴墓　遺物出土状況図

第15表　ST5横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	土師器 高坏	土師器 甕	土師器 小計	須恵器 高台埦	須恵器 蓋	須恵器 短頸壺	須恵器 小計
墓前域	1	5層	個	1 (20)		1 (20)				
			破							
		6層	個	1 (15)		1 (15)				
			破							
		5･6層	個				1 (445)			1 (445)
			破							
		5･6層、7層上面	個						1 (250)	1 (250)
			破							
		7層上面	個					1 (435)		1 (435)
			破		1 (10)	1 (10)				
総合計		個体数(重量)		2 (35)		2 (35)	1 (445)	1 (435)	1 (250)	3 (1,130)
		破片数(重量)			1 (10)	1 (10)				
		総重量		(35)	(10)	3 (45)	(445)	(435)	(250)	3 (1,130)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

3. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	角礫	18	12	6	2.4
頁岩	円礫	24	24	8	5.6
頁岩	円礫	30	28	20	10.4
頁岩	円礫	30	25	10	12.5
頁岩	円礫	30	28	17	27.0
砂岩	円礫	37	15	12	8.9
砂岩	円礫	27	20	12	14.5
安山岩	角礫	32	19	13	10.2
花崗閃緑岩	角礫	42	15	15	32.5
合計:9点／重量(kg)＝					124.0

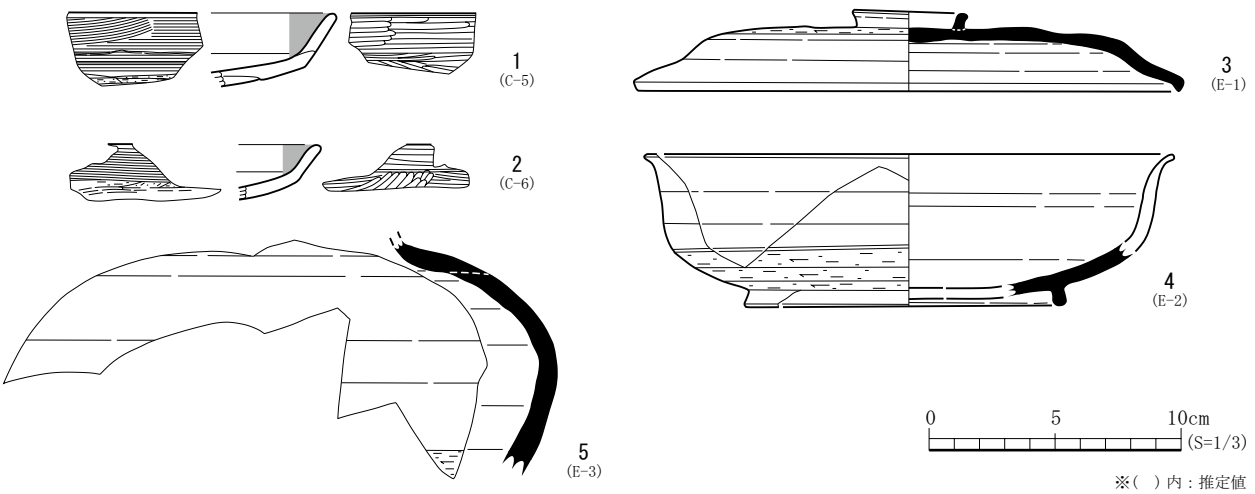
2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構･層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (2,880)	◆ST5　7層 (墓前域) ◆ST6　18・19・21～23層 (墓前域) 、26層上面 (墓前域) ◆ST16　4層 (墓前域) ◆A区検出面 (ST4・5付近)	ST6	◆ST5：2点 ★ST6：68点 ◆ST16：1点 ◆A区検出面：1点	E 130	第52図1
		(20)	◆ST5　7層 (墓前域) ◆ST6　26層上面 (墓前域)	ST6?	◆ST5：1点 ◆ST6：2点　※E-130と同一個体	Y・E 50	－

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1 検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST5出土須恵器の総数
(表15-1)遺構単独出土　3個体
＋
(表15-2)遺構間接合遺物　破片3点　＝ 6 点

墓前域　大別１層



※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	5層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.5～0.6cm	C-5	211-6
2	墓前域	6層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.5cm	C-6	211-7
3	墓前域	7層上面	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ・天井部回転ヘラ削り・摘み貼付(リング状)、内面：ロクロナデ 【法量】口径21.4cm・器高3.3cm・器厚0.4～0.5cm・摘径4.4cm	E-1	219-1
4	墓前域	5層 6層	須恵器 高台埦	【技法】外面：ロクロナデ・沈線・体部下半回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付、内面：ロクロナデ 【法量】口径(20.8)cm・器高6.1cm・底径12.7cm・器厚0.3～0.5cm	E-2	219-2
5	墓前域	5・6層 7層上面	須恵器 短頸壺	【技法】外面：体部上半ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り、内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.7～1.0cm	E-3	222-9

第42図　ST5 横穴墓 出土遺物

6号横穴墓（ST6）（第43～55図、第16表、第4分冊 写真図版29～32）

【検出位置】　A-2区西側の標高25～27mの丘陵南東斜面に位置する。同斜面の南西にはST5、東側にはST7が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南東側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）である。

【個別部位の特徴】（第43図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は14.49mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行2.34m、玄室の中央幅2.64m、奥壁幅2.27m、前壁幅2.22m、左側壁幅2.06m、右側壁幅2.05m、玄室底面から天井の高さ1.54mを測る。床面積は約5.7㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：基本的に平坦であるが、底面中央付近が凹む。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.2m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆U字形を呈する。幅1.32m、高さ1.37mを測る。

工 具 痕：天井以外の各壁に幅0.06～0.07m前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁が縦･斜め方向である。

線刻壁画：奥壁・両側壁・天井で線刻を確認した（第44図、写真図版32）。線刻は、線幅1～2㎜ほどの尖頭状工具により、壁面上段の岩盤面（基本層Ⅲa・b層）に描かれている。奥壁は中央、右側壁は右上、左側壁は右上と左上、天井は中央部で確認した。確認した線刻は、直線の組み合わせにより描画されており、その意匠の多くは不明と言わざるを得えない。線刻自体の時期は不明であるが、玄室内での後世の遺物が皆無であること、後世に人が入り込んだ痕跡が認められないこと、遺構確認時に玄室入口が完全に埋没していたこと、横穴墓全体の土砂堆積状況、風化の状況などからみて、これらの線刻は本横穴墓に伴うものと判断した。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行1.10m、玄室側の幅1.32m、墓前域側の幅0.96mを測る。天井は一部が残存している。

立 面 形：逆U字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 2.20m、幅 0.27～0.33m、深さ 0.06m の溝跡 1 を確認した。溝跡 1 の上部には、0.12×0.10×0.04m（1.1 kg）～0.45×0.33×0.19m（76.7 kg）の角礫 20 個（総重量 570.1 kg）が残存しており、溝上面から高さ 0.5m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は花崗閃緑岩 18 個、頁岩 2 個である（第 16 表 5)。溝跡 1 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長 11.05m、上幅 2.1～2.5m、下幅 1.44～1.95m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.2m 前後、羨門付近で 1.3m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.9m 程度である。

【堆積層】　ST6 横穴墓を覆う堆積層は細別 29 層・大別 4 層に分けた（第 45 図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1・2 層〕

大別 1 層（細別 1～6 層）は ST6 玄室～墓前域上半に堆積する自然堆積層、大別 2 層（細別 7・8 層）は ST6 の墓前域上半に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層は整地層とみられ、その上面にあたる大別 1 層（細別 4～6 層）で遺物が少量出土した。整地層（大別 2 層）の上面で何らかの行為が行われた可能性がある。

大別 1 層の堆積後、ST6 の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 3・4 層〕

大別 3 層（細別 9～23 層）は ST6 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 4 層（細別 24～29 層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 4 層は、横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられ、大別 3 層と大別 4 層の層理面（大別 4 層上面）で遺物が面的に一定量出土した。遺物の出土状況からみて、この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

【出土遺物】土師器 75 点（30 個体、破片 45 点)、須恵器 32 点（5 個体、破片 27 点※うち 2 個体、破片 3 点は遺構間接合遺物)、玉製品 10 点、金属製品 15 点（その他不明小破片多数含む）が出土した（第 16 表 1～4)。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、玄室出土遺物は金属製品のみである（第 46・47 図)。土師器小型坏 2 個体・坏 10 個体・鉢 2 個体・高坏 16 個体、須恵器長頸壺 3 個体・甕 2 個体、勾玉 1 点・切子玉 8 点・硝子製小玉 1 点、鉄刀 2 点、刀子 1 点、鉄鏃 1 点の合計 49 点を図示した（第 49～55 図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層出土遺物**、**B：大別 3 層出土遺物**の 2 群に分かれる。加えて、ST6 では、別の横穴墓（ST7・18）で破砕された須恵器破片の一部が ST6 に混入したと考えられる遺物 3 点（第 16 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C：墓前域大別 3 層の堆積途中（細別 13 層）**に混入したものと、**D:大別 4 層（細別 25 層）の整地層内**に混入したものがある。以上をまとめると、ST6 関連遺物は、古い順から D→B→C→A の 4 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 4 層（細別 25 層）出土遺物〕

墓前域の整地層にあたる細別 25 層から出土した遺物である（前頁 D に相当)。須恵器長頸壺破片 1 点

が出土した（第 16 表 2)。この破片は別遺構で破砕された後、ST6 墓前域の整地層内に混入した遺構間接合遺物であり、ST18 由来のもの**(E-55／第 150 図 4)**である(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST6 で出土した破片は長頸壺の肩部破片である。ST6 から ST18 は直線距離で約 30m 東地点に位置する。単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。ST6 造墓後～整地の間に「ST18 から ST6 玄室内への須恵器長頸壺の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

〔大別 3 層（細別 19・21～23 層）・細別 25・26 層上面出土遺物〕（第 49～55 図）

大別 3 層（細別 9～23 層）のうち、整地層である大別 4 層（細別 24～29 層）上面から出土した遺物である。具体的には、玄室内は細別 26 層上面、墓前域は細別 19・21～23 層の底面および細別 25・26 層上面で出土した遺物がこれにあたる（前頁 B に相当)。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれるが、同時期ものと考えられる。

玄室では金属製品（鉄刀・刀子・鉄鏃）が出土した（第 16 表 4)。出土位置は玄室右側壁と前壁のコーナー付近である（第 47 図)。刀子 1 点（第 55 図 1）を図示した。鉄刀・鉄鏃は遺存状態が悪く、細片の状態で出土したため図示できなかった。破片数からみて、ST6 の玄室内には刀子 1 点の他に、鉄刀 1 点、鉄鏃 1 点が埋納されていたと考えられる。玄室の掘方底面で遺物が出土していないことから、これらは初葬に伴う遺物の可能性がある。

墓前域では土師器・須恵器・玉製品・金属製品が出土した。その内訳は土師器小型坏 2 個体（第 51 図 1・2)・坏 8 個体（第 51 図 3～10)・鉢 2 個体（第 50 図 11・12)・高坏 15 個体（第 49 図 4～8、第 50 図 1～10)、須恵器長頸壺 3 個体（第 54 図 1～3)・甕 2 個体（第 52 図 1、第 53 図 1)、勾玉 1 点（第 54 図 5)、切子玉 8 点（第 54 図 6～13)、ガラス製小玉 1 点（第 54 図 4)、鉄刀 2 点（第 55 図 2・3)、鉄鏃 1 点（第 55 図 4）とこれらと同一個体とみられる破片多数である（第 16 表 1～4)。墓前域出土の遺物の多くは、羨門付近から墓前域上半の範囲の同一面上に破片で散在した状態で出土した（第 46・47 図)。このうち、図示した須恵器甕 2 個体（第 52 図 1、第 53 図 1）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓から出土している。具体的には第 52 図 1 の甕（E-130）は ST5・16・遺構外（ST4・5 付近）出土遺物、第 53 図 1 の甕（E-131）は ST7 出土遺物と接合する（第 16 表 2/第 48 図)。これらは墓前域における甕破砕散布行為の痕跡と考えられる。墓前域で破砕した須恵器破片は、ST6 から少なくとも 3 か所（ST5・7・16）の横穴墓に散布されたと推定される。甕を含む同一面出土の遺物群は、破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。これらの遺物は破片分布に一定のまとまりが認められることから、ある程度の原位置を保った状態のまま埋没したものとみられる。

〔大別 3 層（細別 13 層）出土遺物〕

大別 3 層（細別 9～23 層）のうち、玄室に分布する細別 13 層の堆積土中から出土した遺物である（前頁 C に相当)。土師器坏破片 1 点、須恵器短頸壺の体部下半破片 1 点、須恵器長頸壺の口縁～頸部破片 1 点が出土した（第 16 表 1・2)。

このうち須恵器の破片 2 点の破片は別遺構で破砕された後、ST6 墓前域の整地層内に混入した遺構間接合遺物であり、2 点ともに ST7 由来のもの**(E-43・44／第 63 図 1・第 64 図 1)**である(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST7 は、ST6 東側 5m の同斜面上に隣接している横穴墓である。ST7 破砕破片の流れ込みの可能性もあるが、ST7 ではこの他の須恵器の破砕散布行為も行われていることから、この段階に「ST7 から ST6 への須恵器壺類の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

〔大別 1 層（細別 6 層）出土遺物〕（第 49 図）

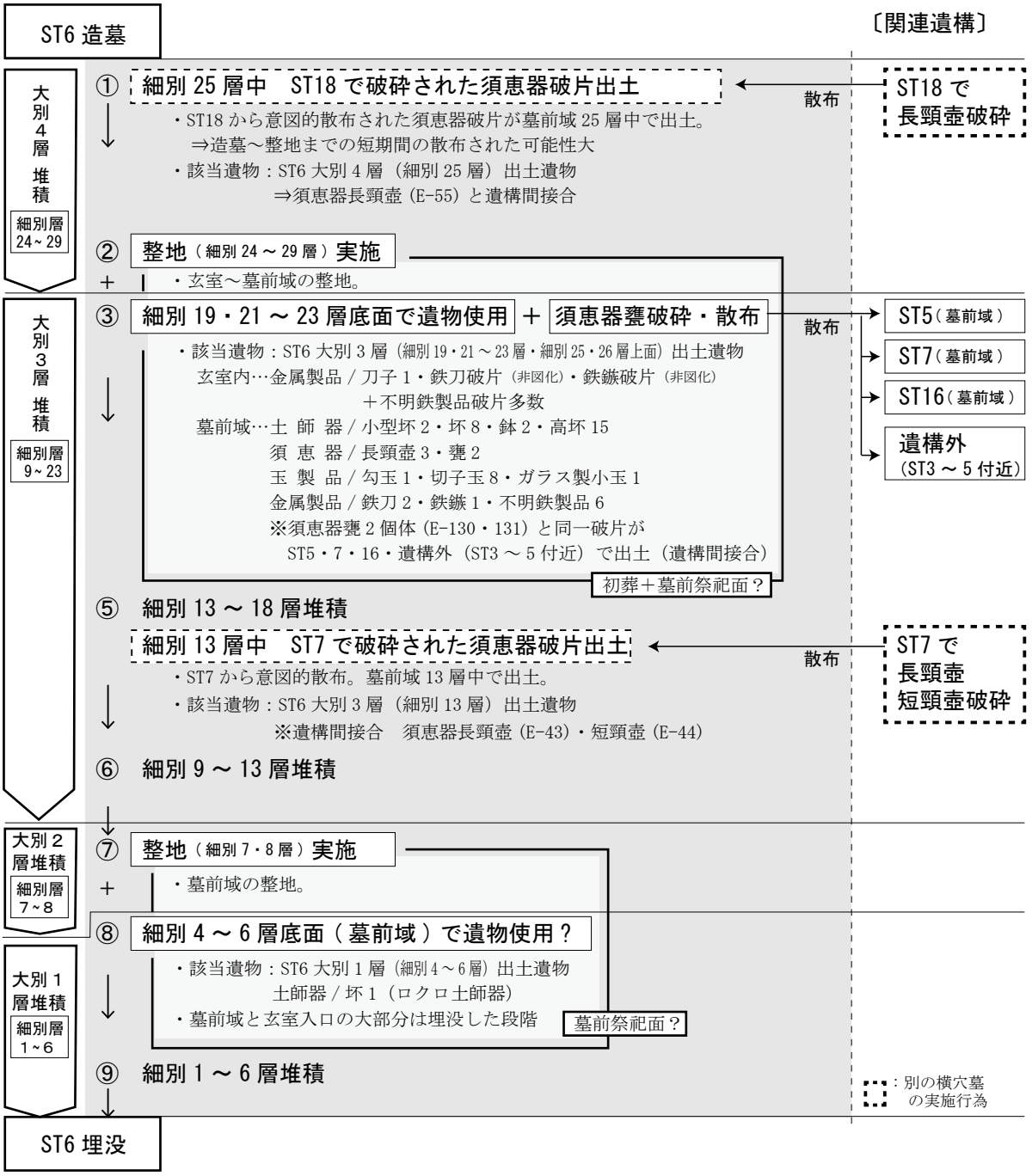
大別 1 層（細別 1～6 層）のうち、墓前域に分布する細別 4～6 層で出土した遺物である（前頁 A に相当)。土師器坏 10 点・高坏 4 点・甕 1 点、須恵器瓶類 1 点・甕 3 点が出土した（第 16 表 1)。土師器坏 2

個体（第 49 図 1・2）・高坏 1 個体（第 49 図 3）を図示した。このうち、第 49 図 2 の土師器坏と第 49 図 3 の高坏は墓前域大別 3 層由来のものと考えられる。本層に伴う遺物は第 49 図 1 のロクロ土師器坏とみられる。大別 1 層に伴う遺物はわずかではあるが、整地層上面（大別 2 層）にあたる細別 4～6 層底面付近で出土していることから、この段階で使用された遺物と想定しておきたい。なお、遺物使用時の ST6 の墓前域と玄室入口については大部分が埋もれた状態だったと考えられる。

【まとめ】

ST6 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST6 造墓・使用・埋没の経過〕



第16表　ST6横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	土師器 坏 小型坏	土師器 鉢	土師器 高坏	土師器 甕	土師器 小計	須恵器 長頸壺	須恵器 瓶類	須恵器 甕	須恵器 小計
墓前域	1	4層	個	1 (50)				1 (50)				
			破	7 (60)		3 (20)	1 (5)	11 (85)		1 (5)		1 (5)
		5層	個									
			破	1 (5)				1 (5)				
		6層	個	1 (130)		1 (160)		2 (290)				
			破								3 (15)	3 (15)
	3	13層	個									
			破	1 (10)				1 (10)				
		19層	個	1 (15)				1 (15)				
			破	1 (5)				1 (5)				
		21層	個	3 (380)	2 (295)	4 (350)		9 (1,025)				
			破	12 (85)		2 (55)		14 (140)		4 (95)	11 (340)	15 (435)
		22層	個	1 (35)		2 (100)		3 (135)				
			破	2 (5)				2 (5)			1 (25)	1 (25)
		23層	個	1 (40)		1 (30)		2 (70)				
			破	5 (50)				5 (50)			2 (35)	2 (35)
		21･22層	個	1 (30)				1 (30)				
			破									
		21～23層	個	1 (150)		2 (115)		3 (265)				
			破									
		13･21～23層	個			1 (145)		1 (145)	1 (405)			1 (405)
			破									
		19･21･23層	個						1 (490)			1 (490)
			破									
		19･21･22層、25層上面	個	2 (350)		2 (595)		4 (945)				
			破									
		21･23層、26層上面	個			2 (420)		2 (420)	1 (215)			1 (215)
			破									
		25層上面	個									
			破	2 (10)				2 (10)				
		26層上面	個			1 (25)		1 (25)				
			破	5 (30)		3 (15)		8 (45)			2 (80)	2 (80)
総合計		個体数(重量)		12 (1,180)	2 (295)	16 (1,940)		30 (3,415)	3 (1,110)			3 (1,110)
		破片数(重量)		36 (260)		8 (90)	1 (5)	45 (355)		5 (100)	19 (495)	24 (595)
		総重量		(1,440)	(295)	(2,030)	(5)	75 (3,770)	(1,110)	(100)	(495)	27 (1,705)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	短頸壺	1 (950)	◆ST6 13層(墓前域) ◆ST7 2･7層(墓前域)	ST7	◆ST6:1点 ★ST7:11点	E 44	第64図1
須恵器	長頸壺	1 (285)	◆ST6 13層(墓前域) ◆ST7 6･7層(墓前域)	ST7	◆ST6:1点 ★ST7:9点	E 43	第63図1
須恵器	甕	1 (2,880)	◆ST5 7層(墓前域) ◆ST6 18･19･21～23層(墓前域)、26層上面(墓前域) ◆ST16 4層(墓前域) ◆A区検出面(ST4･5付近)	ST6	◆ST5:2点 ★ST6:68点 ◆ST16:1点 ◆A区検出面:1点	E 130	第52図1
		(20)	◆ST5 7層(墓前域) ◆ST6 26層上面(墓前域)	ST6？	◆ST5:1点 ◆ST6:2点 ※E-130同一個体	Y･E 50	－
須恵器	甕	1 (5,640)	◆ST6 13･18･19･21～23層、24･26層上面(墓前域) ◆ST7 8層(墓前域) ◆A区検出面(ST3西側付近)	ST6	★ST6:77点 ◆ST7:3点 ◆検出面:1点	E 131	第53図1
須恵器	長頸壺	1 (1,140)	◆ST6 25層(墓前域) ◆ST18 8層(墓前域)	ST18	◆ST6:1点 ★ST18:18点	E 55	第150図4

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1 検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST6出土須恵器の総数
(表16-1)遺構単独出土　3個体＋破片24点
＋
(表16-2)遺構間接合遺物　2個体＋破片3点　＝ 32 点

3. 玉製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	玉製品 石製 勾玉	石製 切子玉	石製 小計	ガラス製 小玉	小計
墓前域	3	21層	個		7 (70.5)	7 (70.5)	1 (2.468)	1 (2.468)
			破					
		23層	個	1 (13.9)	1 (6.0)	2 (19.9)		
			破					
総合計		個体数(重量)		1 (13.9)	8 (76.5)	9 (90.4)	1 (2.468)	1 (2.468)
		破片数(重量)						
		総重量		(13.9)	(76.5)	9 (90.4)	(2.468)	1 (2.468)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

4. 金属製品

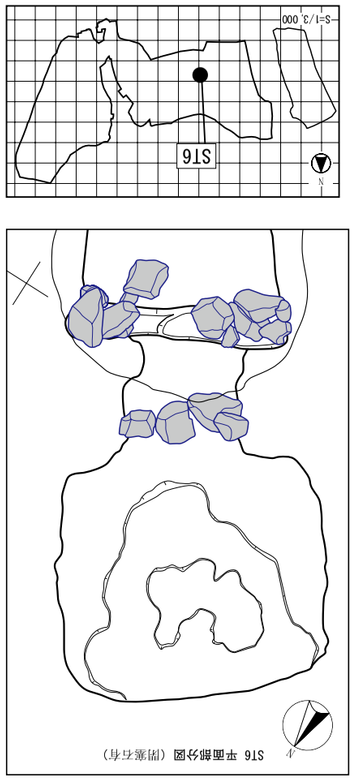
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載/非掲載	金属製品 鉄刀	刀子	鉄鏃	不明鉄製品	小計
玄室	3	26層上面	掲		1			1
			非掲	3		1	1+破片多数	5 +破片多数
墓前域	3	19層	掲					
			非掲				1	1
		21層	掲			1		1
			非掲				4	4
		25層上面	掲	2				2
			非掲				1	1
器種別総合計			掲載遺物点数	2	1	1		4
			非掲載遺物点数	3		1	7+破片多数	11 +破片多数
			総点数	5	1	2	7+破片多数	15 +破片多数

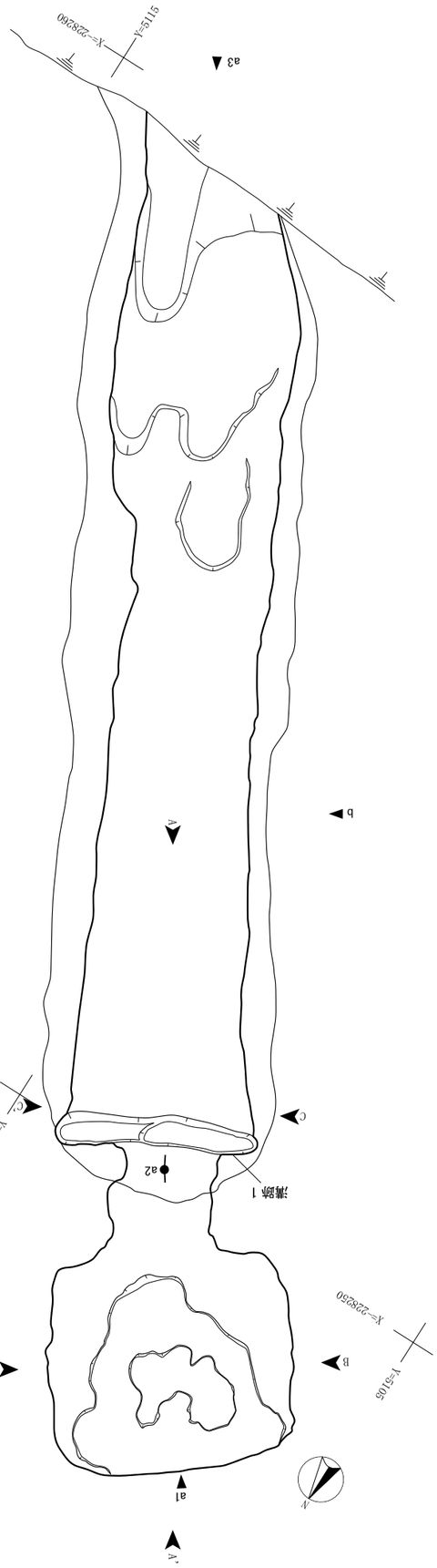
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST6出土の不明小片の重量は440.0g)

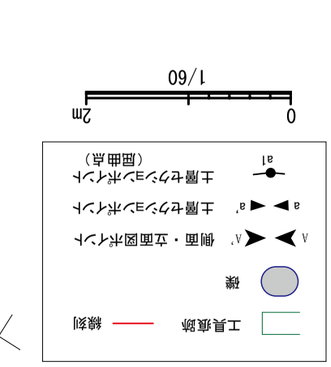
5. 閉塞石観察表

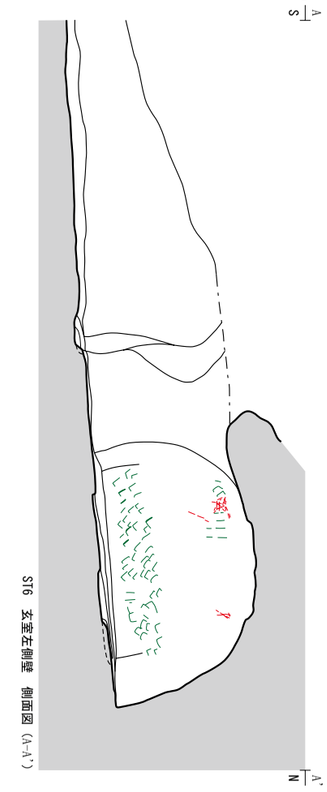
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	12	10	4	1.1
花崗閃緑岩	角礫	14	8	4	1.5
花崗閃緑岩	角礫	20	12	6	2.1
花崗閃緑岩	角礫	22	14	8	3.9
花崗閃緑岩	角礫	28	12	7	4.4
花崗閃緑岩	角礫	22	17	10	4.9
花崗閃緑岩	角礫	37	20	10	11.9
花崗閃緑岩	角礫	29	20	10	12.2
花崗閃緑岩	角礫	35	33	8	13.5
花崗閃緑岩	角礫	25	19	15	15.2
花崗閃緑岩	角礫	35	23	20	36.9
花崗閃緑岩	角礫	44	27	23	37.6
花崗閃緑岩	角礫	45	25	18	41.0
花崗閃緑岩	角礫	48	36	17	46.8
花崗閃緑岩	角礫	50	30	30	53.2
花崗閃緑岩	角礫	36	30	30	54.6
花崗閃緑岩	角礫	55	35	16	64.1
花崗閃緑岩	角礫	45	33	19	76.7
頁岩	角礫	48	22	18	41.6
頁岩	角礫	40	35	16	46.9
合計:20点／重量(kg)＝					570.1

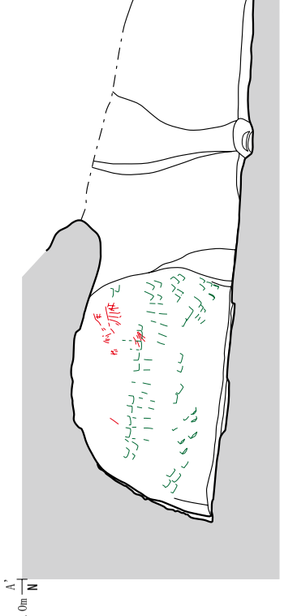
第43図　ST6 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

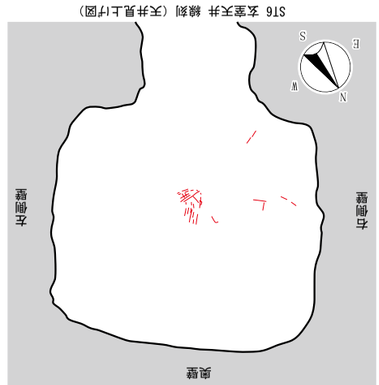


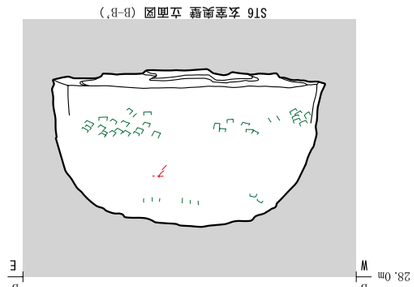


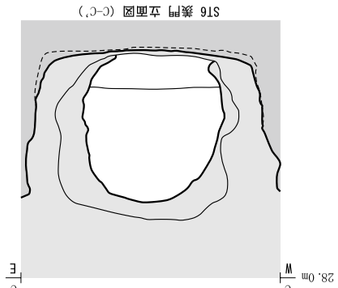


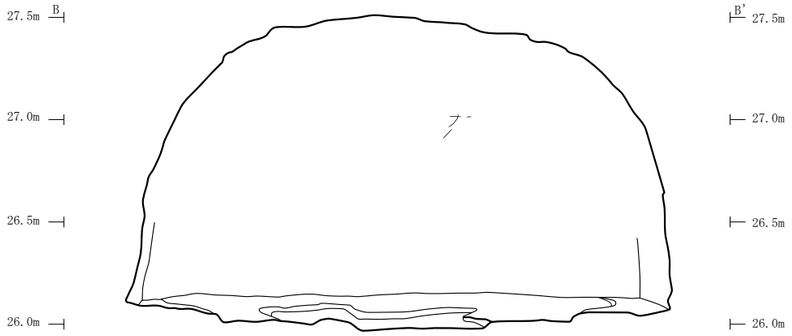




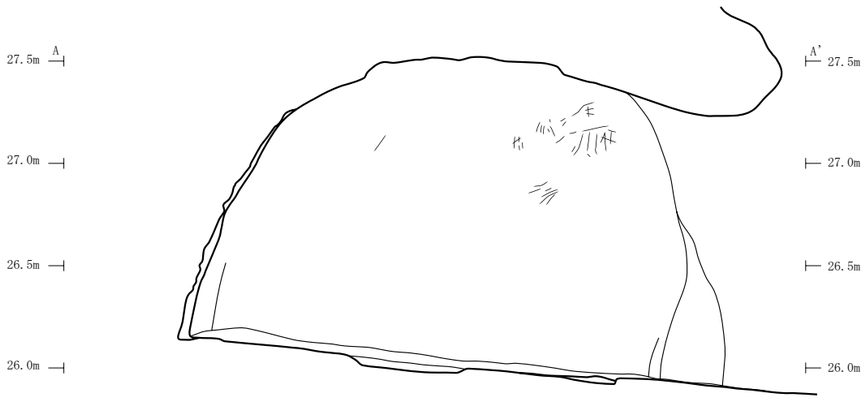




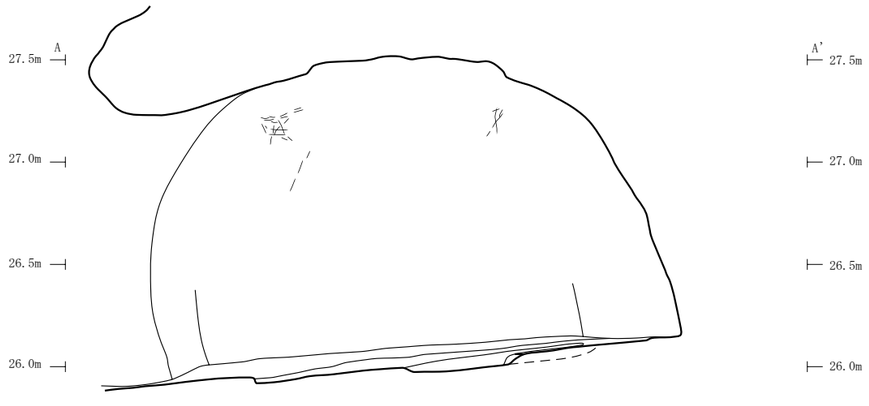




【ST6 玄室奥壁 線刻壁画】

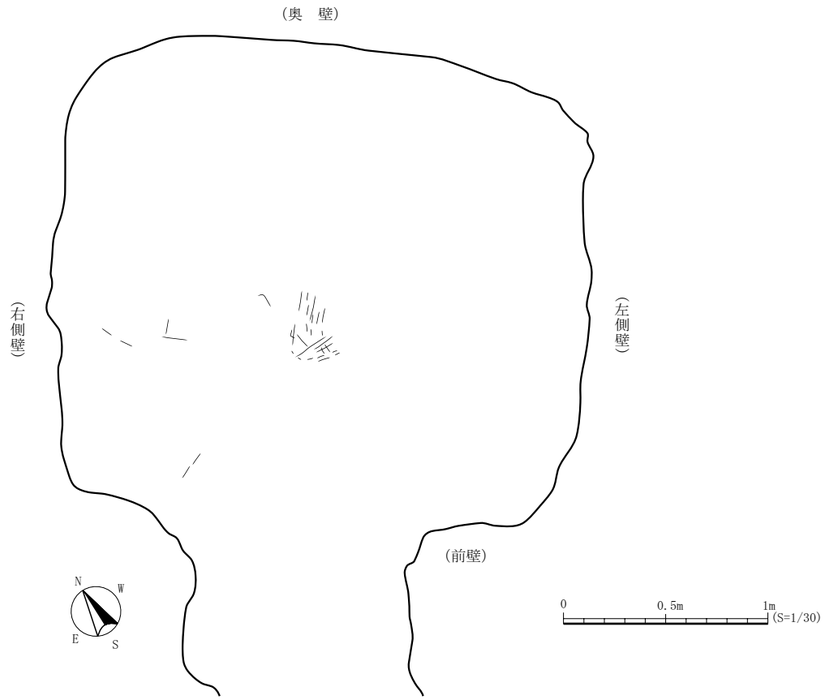


【ST6 玄室右側壁 線刻壁画】

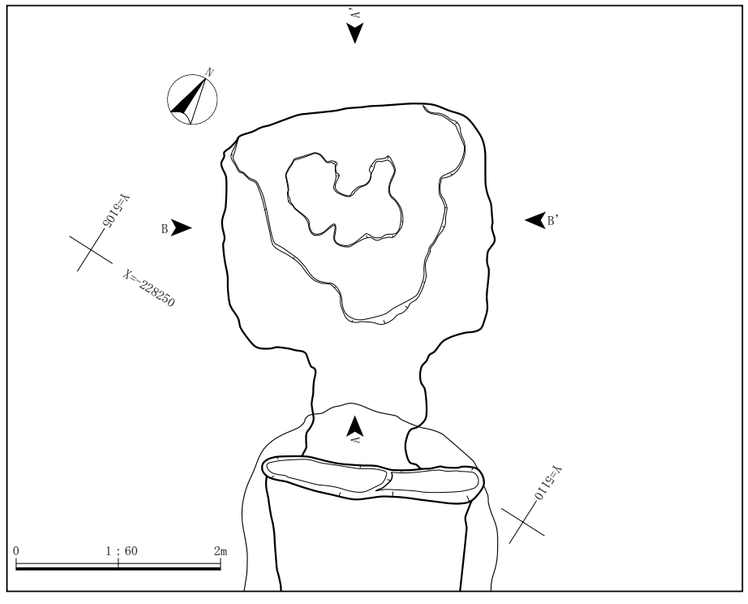


【ST6 玄室左側壁 線刻壁画】

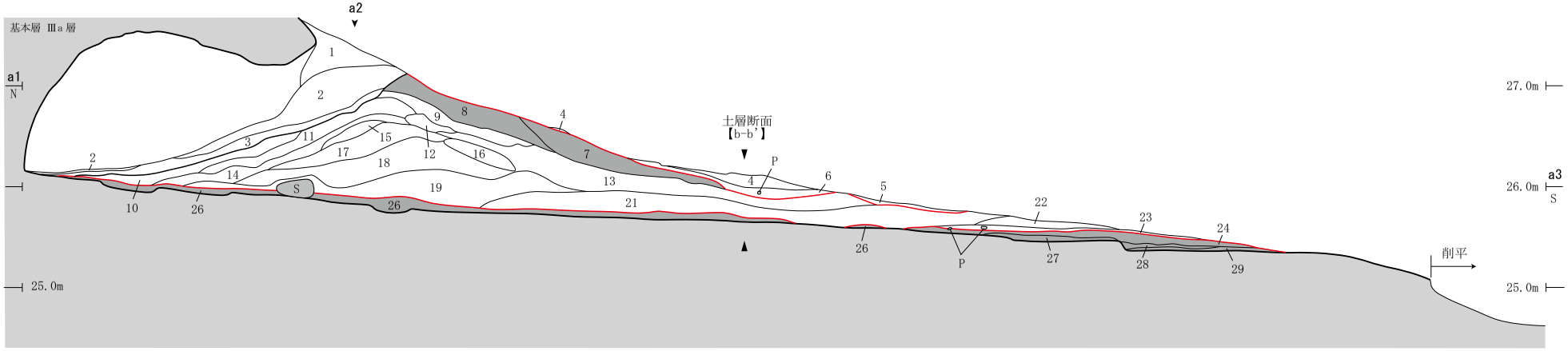
0　0.5m　1m (S=1/30)



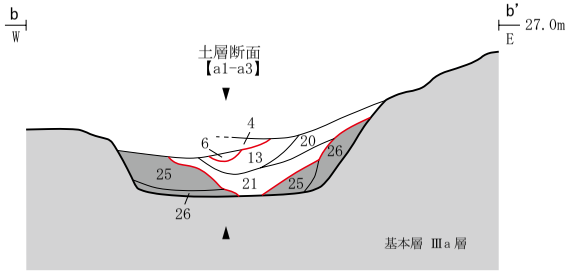
【ST6 玄室天井 線刻壁画】（天井見上図）



第 44 図　ST6 横穴墓玄室 線刻壁画



ST6 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕



ST6 墓前域 土層断面〔b-b'〕

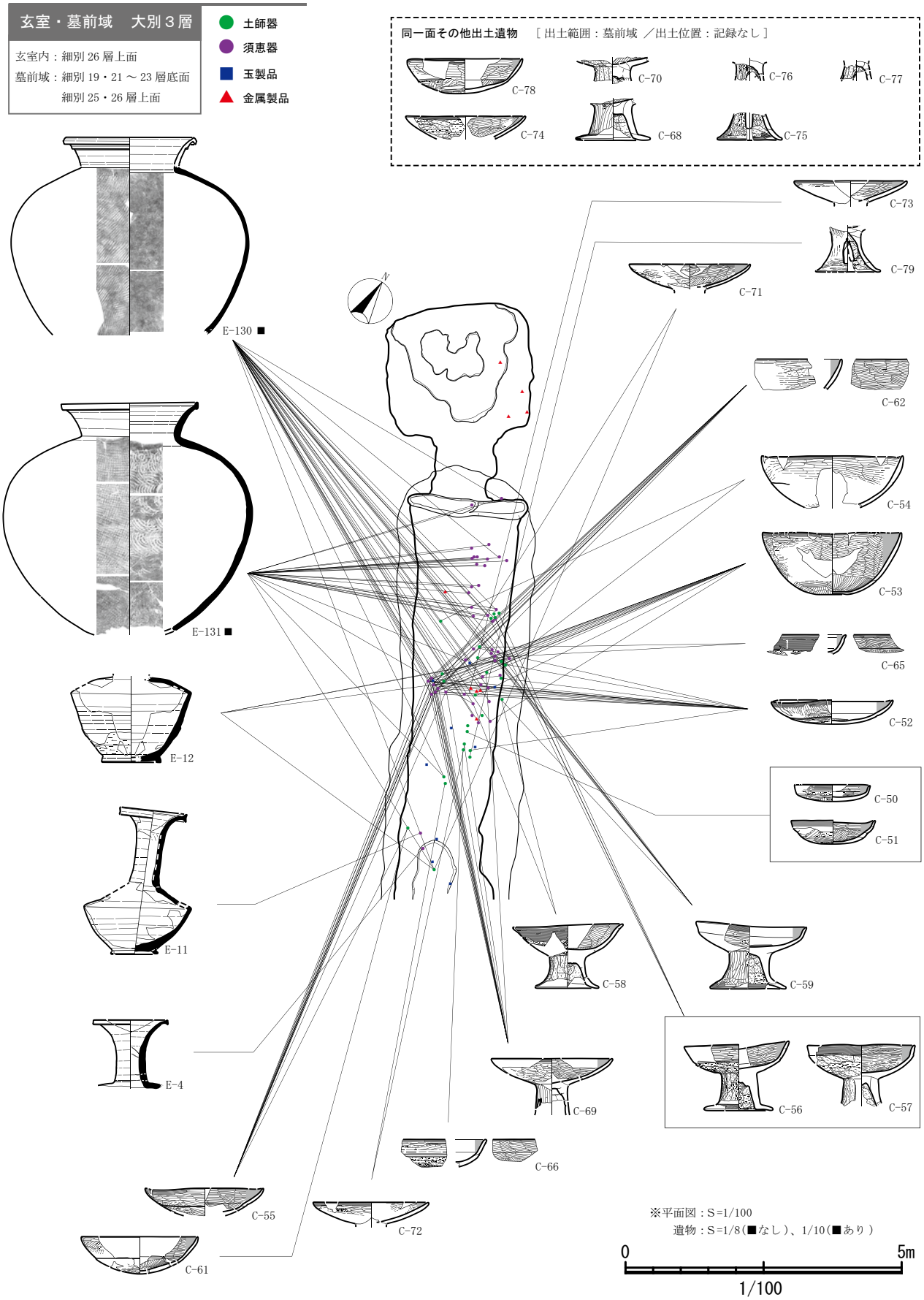
0 2m
1/60

【土層図中の表記】
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫　　P ：土器
- ▼：土層断面の屈曲点　▼▲：各土層断面の交点

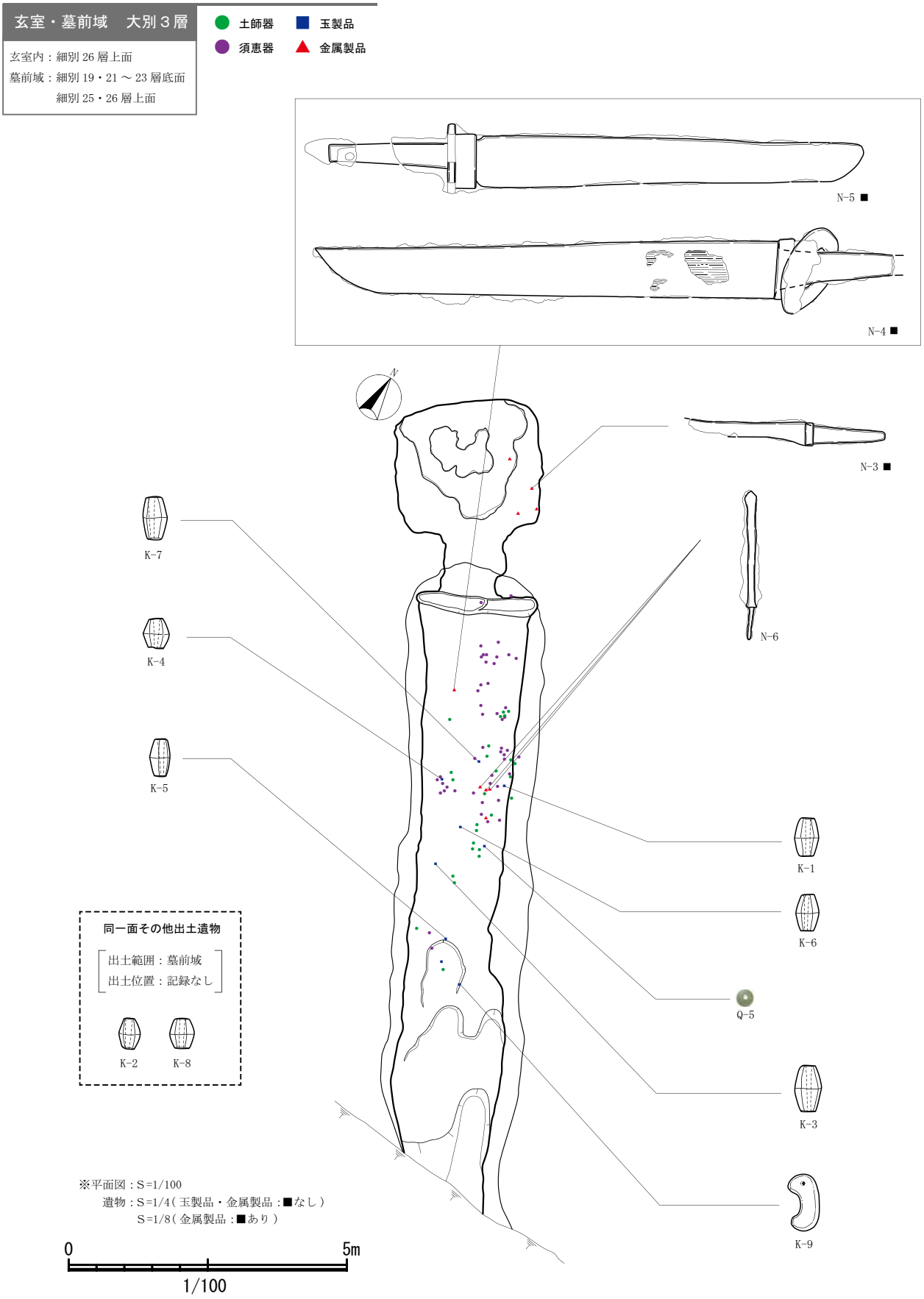
細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト	地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
3	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	地山粒子含む。		
4	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロック少量含む。		
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片少量含む。		
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック少量含む。		
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック多量含む。	2	人為堆積層(整地層)
8	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック(大)多量含む。		
9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片少量含む	3	自然堆積層
10	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	黒色土少量含む。		
11	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト	地山ブロック多く含む。		
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片少量含む。		
13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック少量含む		
14	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物片・黒色土を含む		
15	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シルト	炭化物片少量 地山ブロック多く含む。		

細別層	土色	土性	備考	大別層	
16	浅黄色(2.5Y7/4)	シルト	地山粒子含む。	3	自然堆積層
17	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シルト	地山ブロック多く含む。		
18	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シルト	炭化物片含む。		
19	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片・地山ブロック含む。		
20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック含む。		
21	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片を含む。		
22	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック含む。		
23	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片・小礫・地山ブロック含む。		
24	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック多量含む。	4	人為堆積層(整地層)
25	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック少量含む		
26	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。炭化物片多く含む。		
27	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック多量含む。		
28	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック含む。炭化物片多く含む。		
29	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。		

第 45 図　ST6 横穴墓 土層断面図

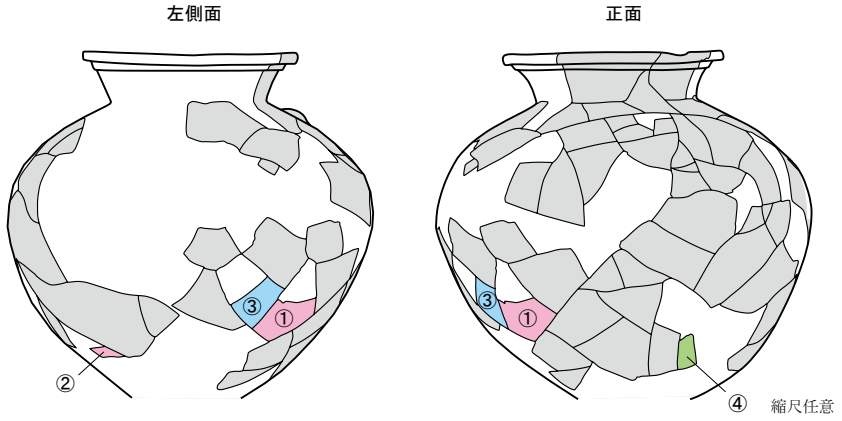


第46図　ST6 横穴墓 遺物出土状況図 (1) ― 大別３層 ①―



第47図　ST6 横穴墓 遺物出土状況図 (2) － 大別３層② －

E-130　須恵器 甕（第 52 図 1）



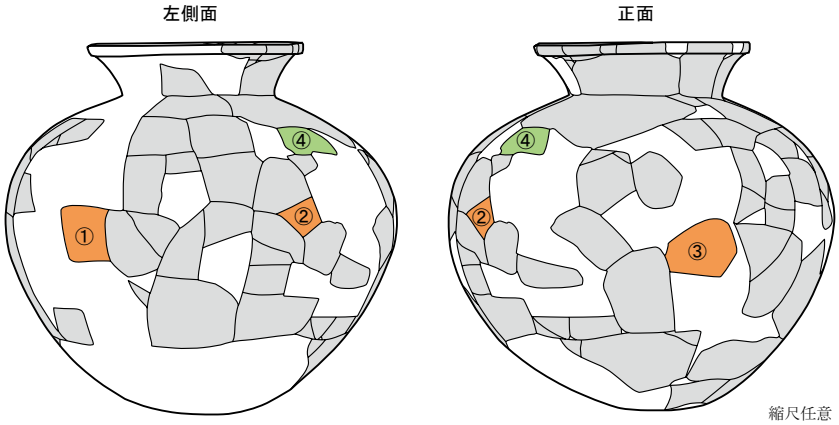
塗り注釈

	ST6
①②	ST5
③	ST16
④	検出面（A区 ST4・5付近）
白抜	欠損箇所

出土層位

ST6	［墓前域］18・19・21～23層 26層上面
ST5	［墓前域］7層
ST16	［墓前域］4層
	検出面（A区 ST4・5付近）

E-131　須恵器 甕（第 53 図 1）

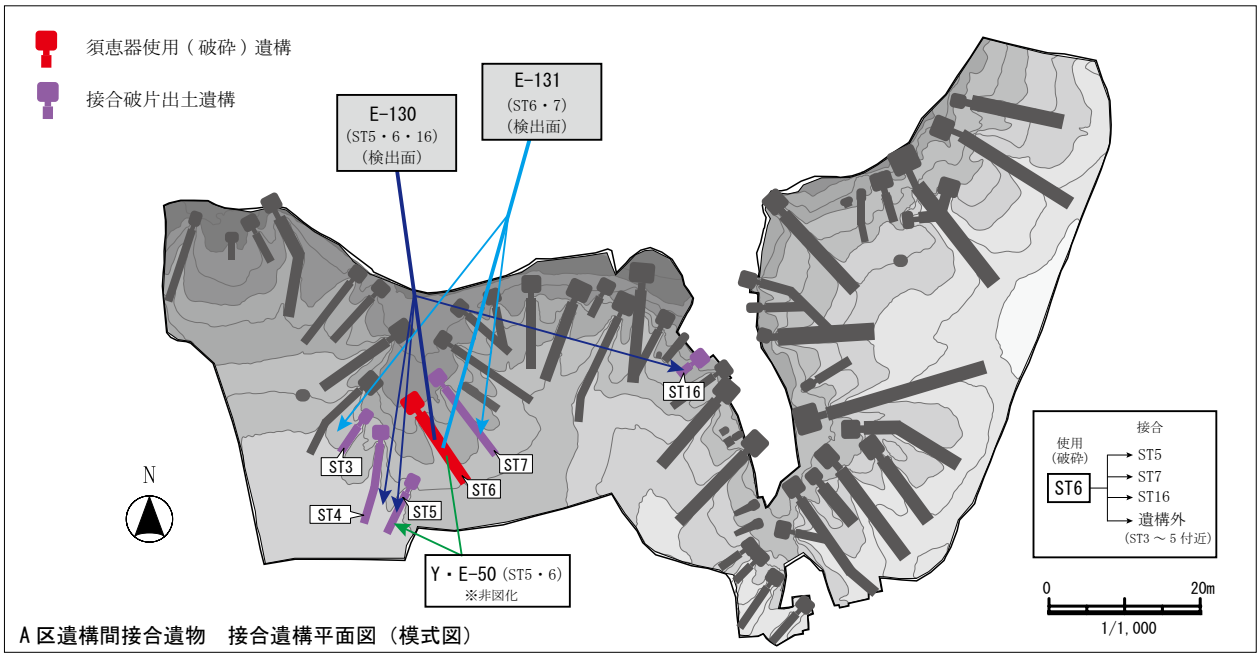


塗り注釈

	ST6
①～③	ST7
④	検出面（A区 ST3西側付近）
白抜	欠損箇所

出土層位

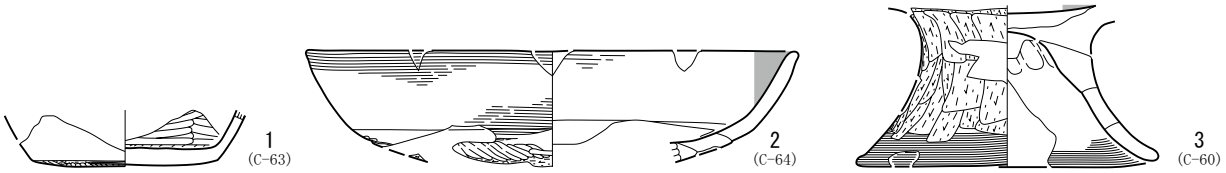
ST6	［墓前域］13・18・19・21～23層 24・26層上面
ST7	［墓前域］8層
	検出面（A区 ST3西側付近）



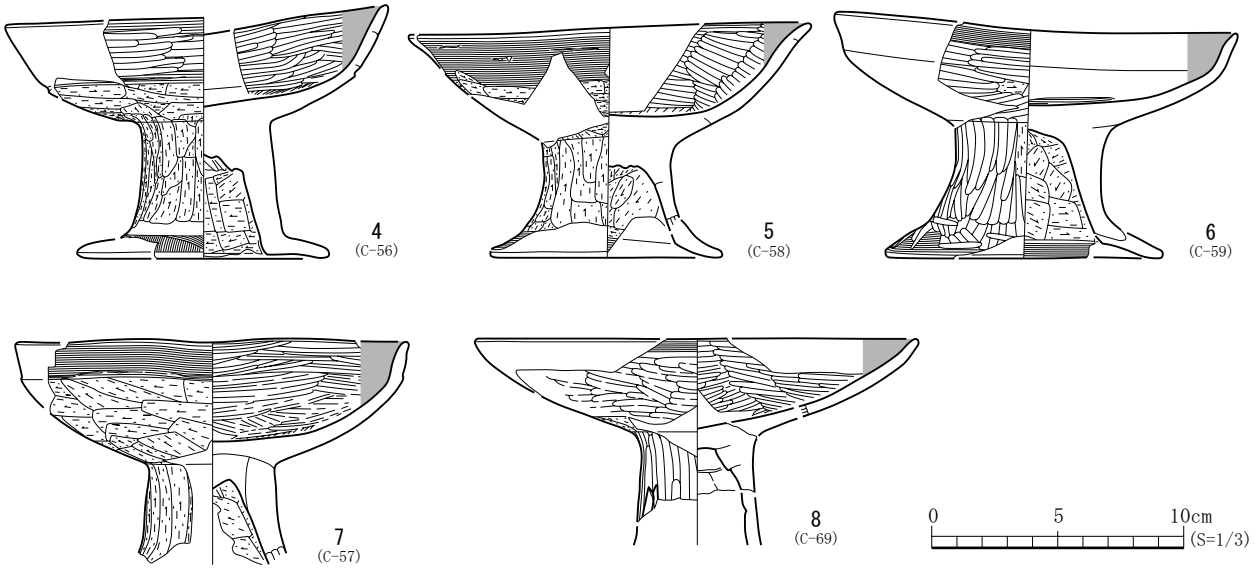
A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第48図　ST6 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

墓前域　大別１層



墓前域　大別３層

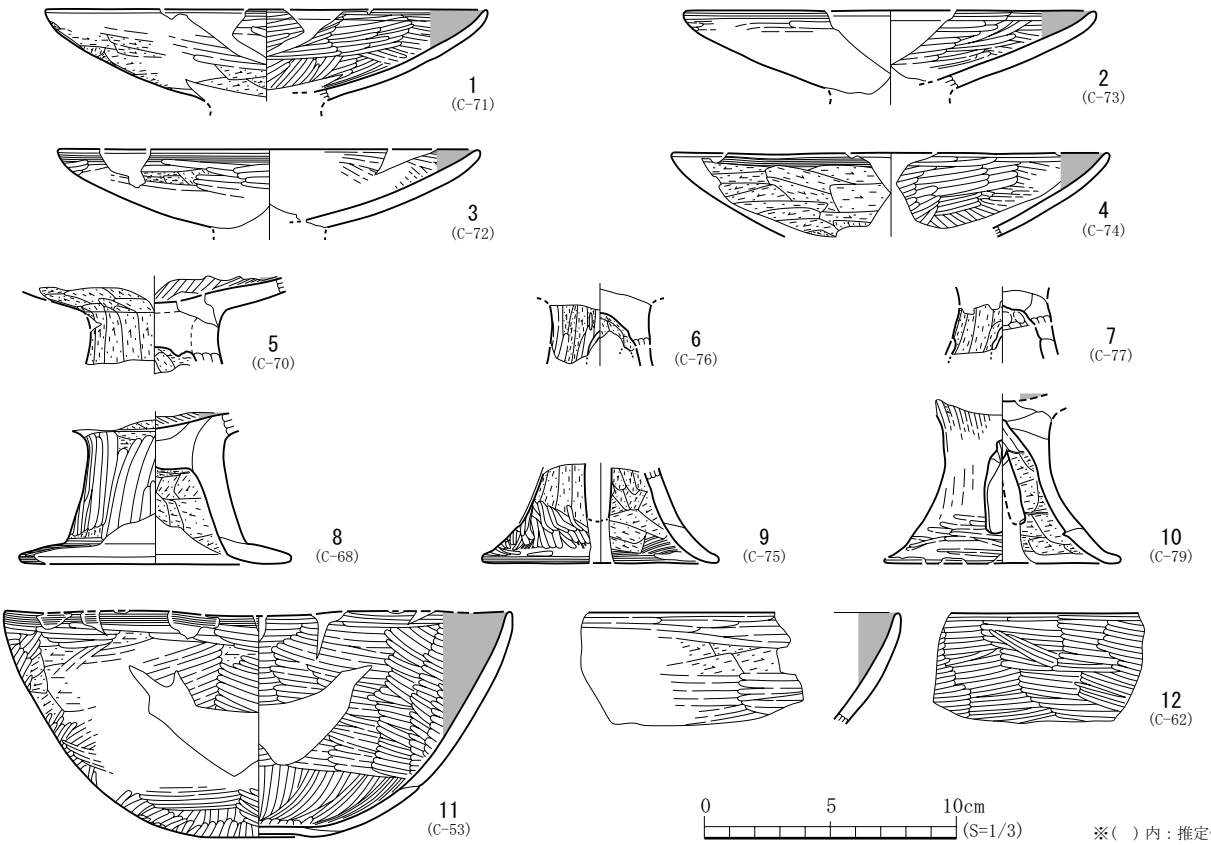


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：体部磨滅のため調整不明・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整 ヘラミガキ、内面：ロクロナデ→ヘラミガキ(底部横位) 【法量】底径(7.4)cm・残存高2.2cm・器厚0.4～0.7cm	C-63	193-8
2	墓前域	6層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(19.2)cm・残存高4.6cm・器厚0.6～0.7cm	C-64	194-5
3	墓前域	6層	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 内面：[坏部]磨滅のため調整不明・黒色処理　[脚部]ヨコナデ・オサエ・磨滅 【法量】脚裾部径(12.0)cm・残存高6.4cm・器厚0.6～1.3cm	C-60	212-5
4	墓前域	21層 26層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ナデ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部磨滅のため調整不明 【法量】坏部口径(15.0)cm・器高10.1cm・脚裾部径(10.0)cm・器厚0.3～1.2cm	C-56	212-1
5	墓前域	21層 22層 25層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】坏部口径(16.0)cm・器高9.3cm・脚裾部径(9.2)cm・器厚0.3～2.0cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-58	212-3
6	墓前域	21層 25層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ [脚部]柱部ハケメ→ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】坏部口径(15.8)cm・器高9.4cm・脚裾部径(10.8)cm・器厚0.4～1.7cm	C-59	212-4
7	墓前域	21層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り　[脚部]ヘラ削り 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]ヘラ削り 【法量】坏部口径(15.4)cm・残存高9.0cm・器厚0.5～1.5cm	C-57	212-2
8	墓前域	13層 21層 23層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ [脚部]ヘラ削り→ヘラミガキ・4方透孔 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]ナデ・ヘラ削り 【法量】坏部口径(17.4)cm・残存高8.5cm・器厚0.4～1.5cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-69	211-13

第49図　ST6 横穴墓 出土遺物 (1) －土器類－

墓前域　大別３層

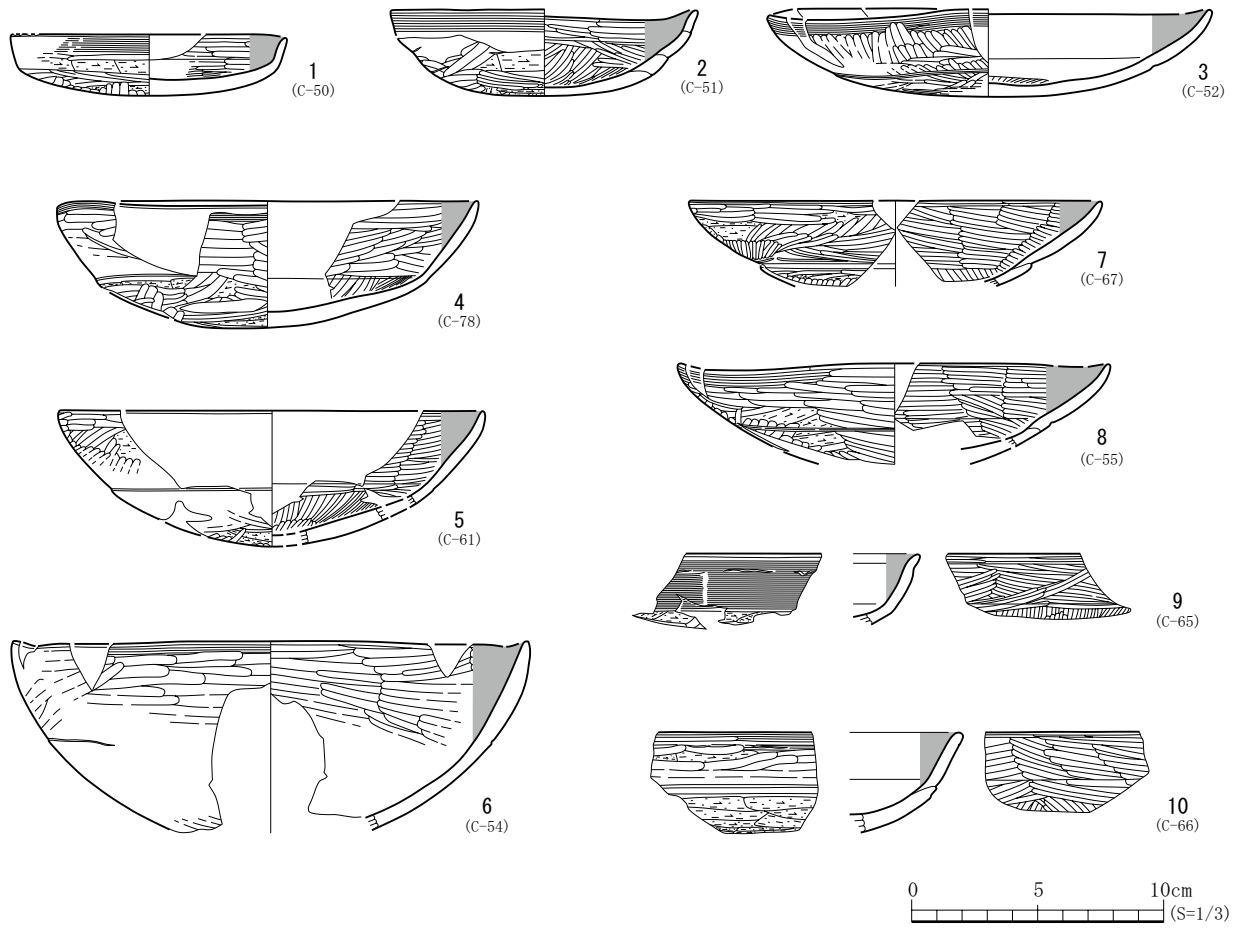


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	21層 22層 23層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】坏部口径(17.4)cm・残存高3.6cm・器厚0.3～0.4cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-71	211-8
2	墓前域	21層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ハケメ・ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】坏部口径(16.2)cm・残存高3.1cm・器厚0.4～0.6cm	C-73	211-10
3	墓前域	21層 23層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】坏部口径(16.6)cm・残存高3.1cm・器厚0.4～0.5cm	C-72	211-9
4	墓前域	26層上面	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】坏部口径(17.2)cm・残存高3.3cm・器厚0.3～0.4cm　【特記事項】赤彩残存	C-74	211-11
5	墓前域	22層	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]ヘラ削り、内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]ヘラ削り 【法量】残存高3.4cm・器厚0.6～1.0cm	C-70	211-14
6	墓前域	21層	土師器 高坏	【技法】外面：ハケメ→ヘラ削り→ヘラミガキ・3方透孔、内面：ヘラ削り 【法量】残存高3.0cm・器厚0.7cm	C-76	212-7
7	墓前域	23層	土師器 高坏	【技法】外面：ヘラ削り・4方透孔、内面：ナデ・オサエ 【法量】残存高2.8cm・器厚0.6～1.0cm	C-77	212-8
8	墓前域	21層	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】底径(10.8)cm・残存高6.0cm・器厚0.5～1.5cm	C-68	211-12
9	墓前域	22層	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ハケメ→ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ・4方透孔 内面：[脚部]柱部ハケメ→ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】脚裾部径(9.4)cm・残存高3.9cm・器厚0.4～0.6cm	C-75	212-6
10	墓前域	21層 26層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ナデ→ヘラミガキ・4方透孔・磨滅 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ナデ／ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】脚裾部径(9.4)cm・残存高6.5cm・器厚0.4～1.8cm	C-79	212-9
11	墓前域	21層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(20.0)cm・器高9.0cm・底径(4.6)cm・器厚0.2～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-53	194-7
12	墓前域	21層	土師器 鉢	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.3～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-62	193-11

第50図　ST6 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別３層

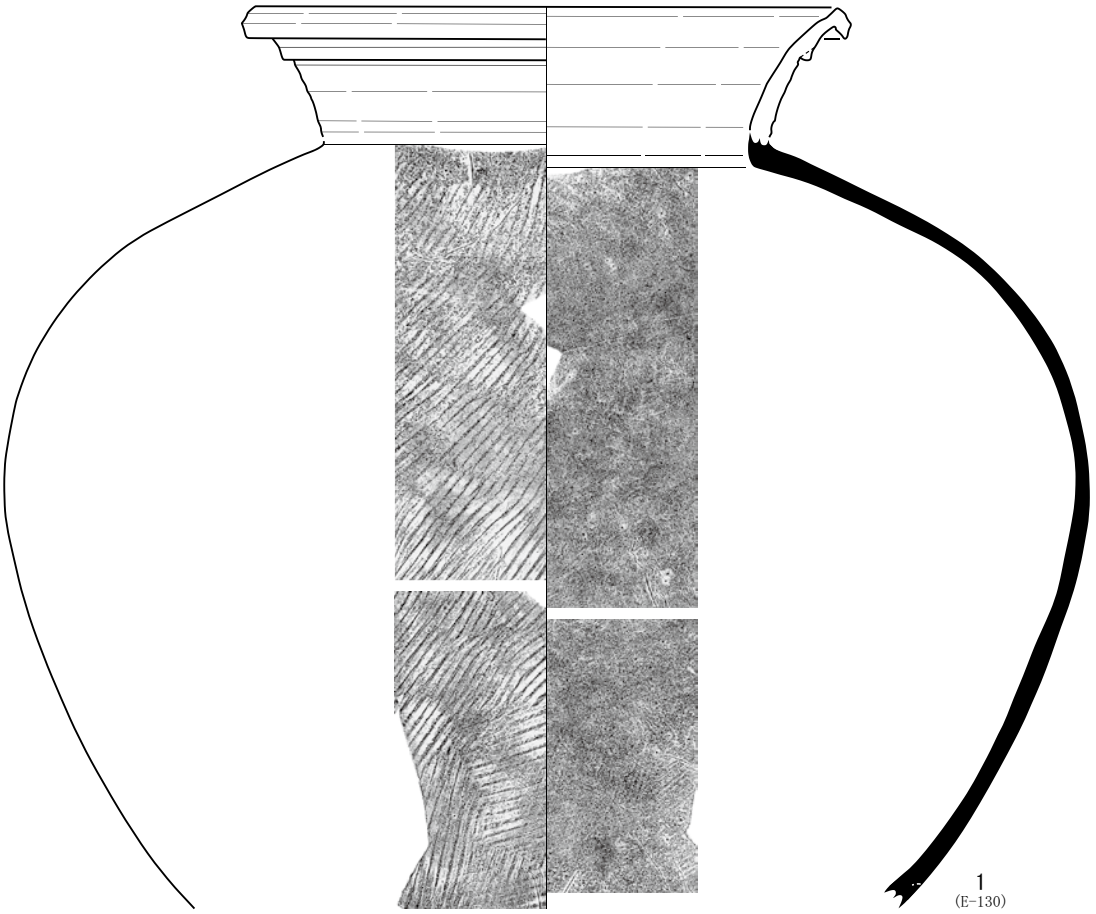


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	21層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径10.8cm・器高2.5cm・器厚0.3～0.7cm	C-50	194-1
2	墓前域	21層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.0)cm・器高3.4cm・器厚0.3～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-51	194-2
3	墓前域	19層 21層 25層上面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(17.4)cm・器高3.5cm・器厚0.4～0.5cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-52	194-3
4	墓前域	21層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ／ヘラ削り→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.6)cm・器高5.1cm・器厚0.3～0.6cm	C-78	194-6
5	墓前域	23層	土師器 坏	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.8)cm・器高5.4cm・器厚0.3～0.6cm	C-61	193-10
6	墓前域	21層 22層 25層上面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(20.5)cm・残存高7.5cm・器厚0.5～0.7cm	C-54	193-13
7	墓前域	22層	土師器 坏	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.2)cm・残存高3.4cm・器厚0.3～0.4cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-67	193-12
8	墓前域	21層 23層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→沈線→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(19.0)cm・残存高4.0cm・器厚0.3～0.5cm	C-55	194-4
9	墓前域	19層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.3～0.5cm	C-65	193-15
10	墓前域	21層 22層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部ヘラ削り 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.7cm	C-66	193-14

第51図　ST6 横穴墓 出土遺物 (3) －土器類－

墓前域　大別３層



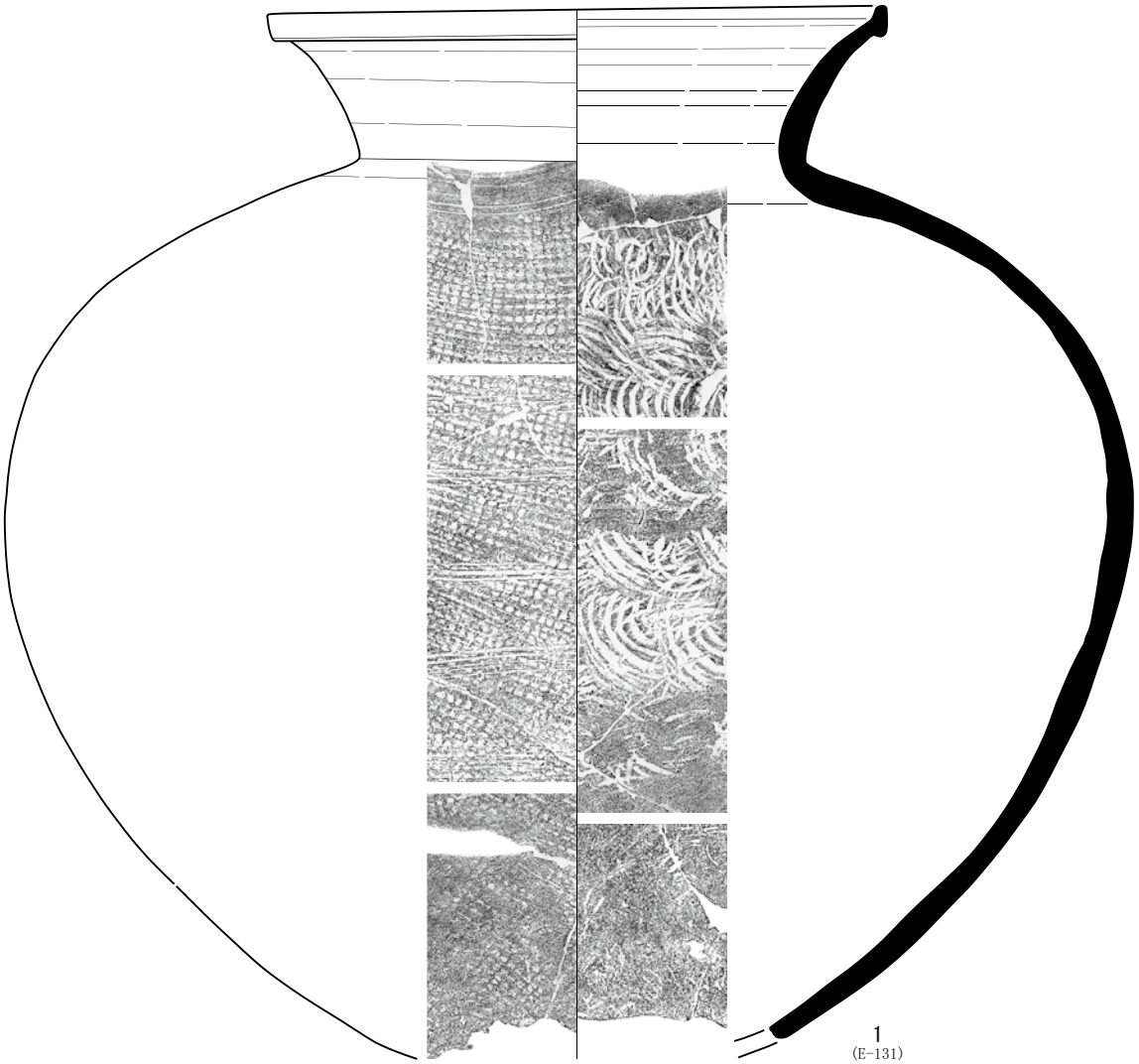
0　5　10cm
(S=1/3)

※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST5　7層 ◆ST6　18・19層 21～23層 26層上面 ◆ST16　4層 ◆検出面 (ST4・ST5付近)	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST6(主体)**＋ST5＋ST16 【技法】外面：口頸部突帯貼付→ロクロナデ・体部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕→ナデ 【法量】口径(23.0)㎝・残存高35.9㎝・器厚0.3～0.9㎝ 【特記事項】歪みあり、遺構間接合の同一個体破片有り[非図化／ST6(主体)＋ST5]	E-130	239-1 268-8

第52図　ST6 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

墓前域　大別３層

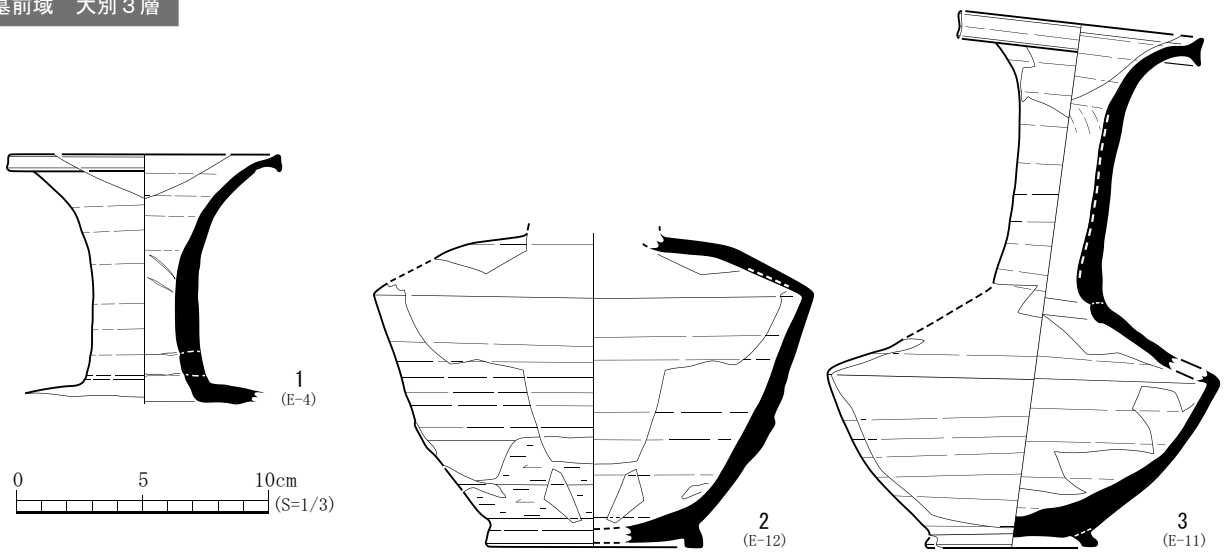


0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST6 13・18・19層 21～23層 24・26層上面 ◆ST7　8層 ◆検出面 (ST3西側付近)	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST6(主体)**＋ST7＋A区検出面(ST3西側付近) 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部上半格子状タタキ→カキメ・体部下半格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円)→ナデ 【法量】口径24.6cm・残存高42.1cm・器厚0.7～1.2cm 【特記事項】底部穿孔	E-131	239-2 268-9 268-10

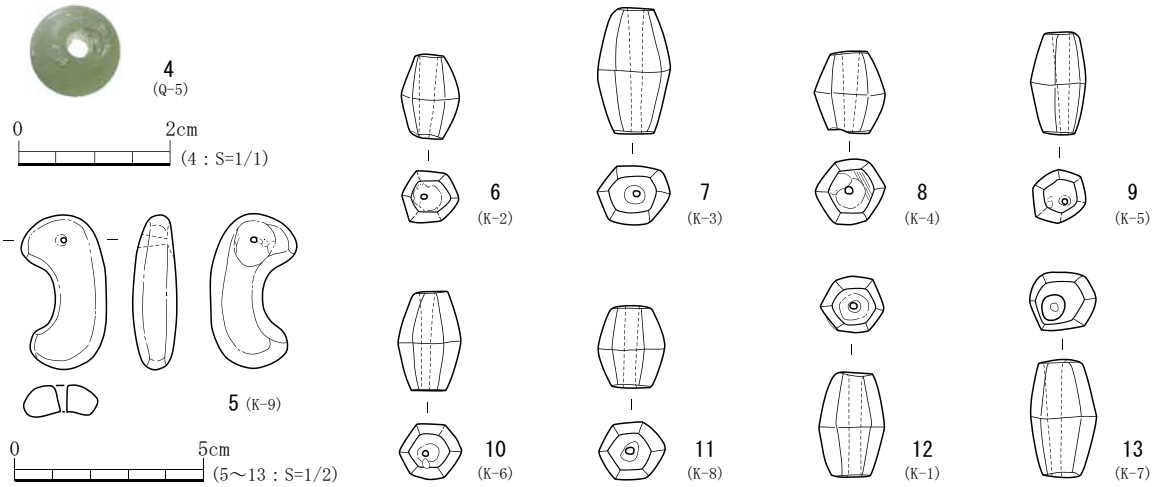
第53図　ST6 横穴墓 出土遺物 (5) －土器類－

墓前域　大別３層



※( ) 内：推定値

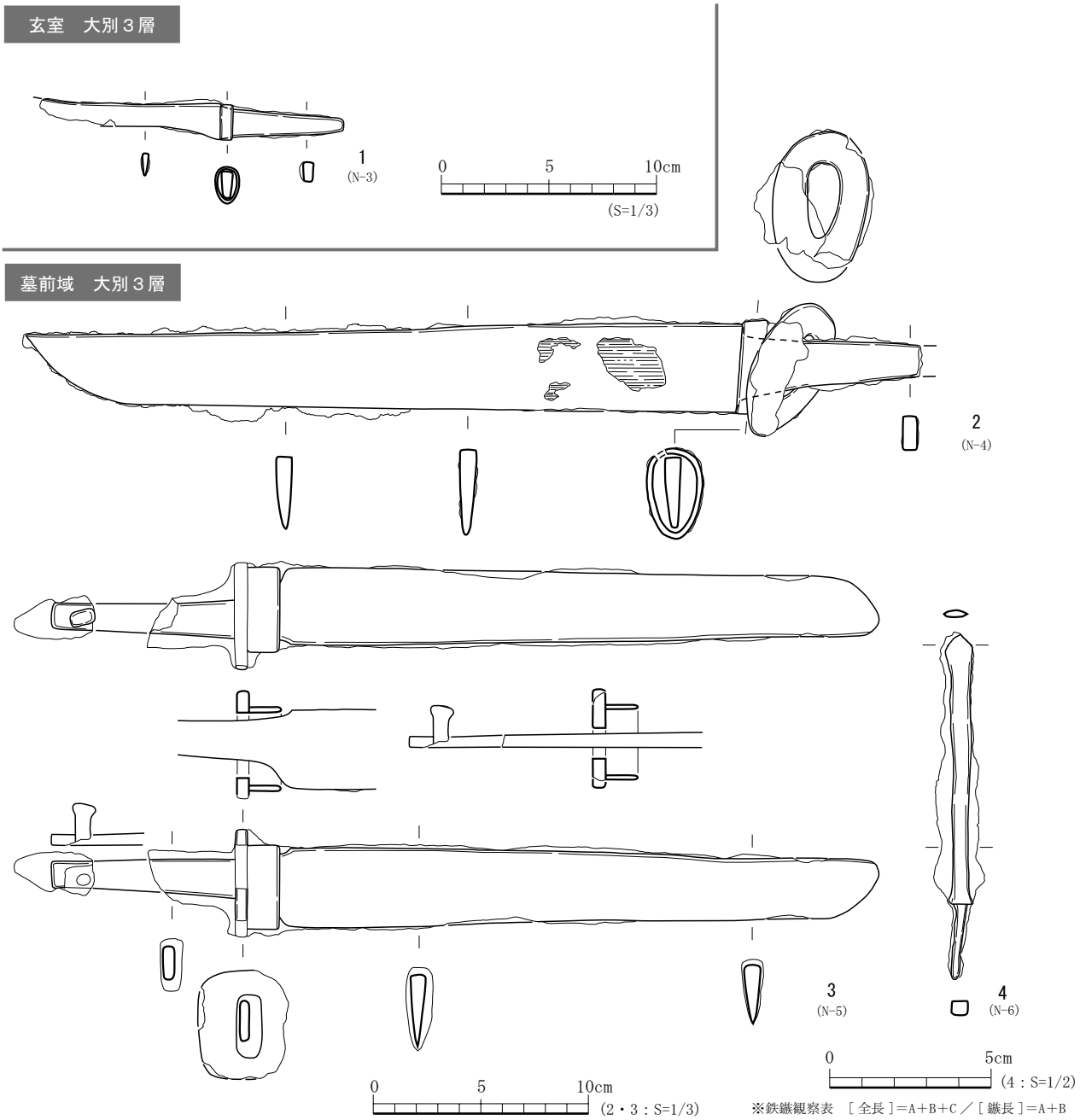
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	21・23層 26層上面	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ・絞り目 【法量】口径(10.7)cm・残存高9.9cm・器厚0.3～0.9cm	E-4	222-10
2	墓前域	13層 21～23層	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り 再調整・高台貼付→ロクロナデ、内面：ロクロナデ 【法量】底径(8.4)cm・残存高12.6cm・器厚0.3～0.7cm	E-12	222-11
3	墓前域	19層 21層 23層	須恵器 長頸壺	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部ロクロナデ→回転ヘラ削り 底部切り離し技法不明→ナデ再調整・高台貼付 内面：口頸部ロクロナデ／絞り目・体部～底部ロクロナデ 【法量】口径9.6cm・器高21.3cm・底径6.6cm・器厚0.3～1.2cm・口縁部最大径9.7cm 体部最大径15.6cm・頸部高10.7cm	E-11	222-12



No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径	長	質量	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他		(mm)	(mm)	(g)		
4	墓前域	21層	ガラス製品丸玉	巻付	ソーダ	－	渦巻き状	－	緑	12.9	1.1	2.468	Q-5	278-1

No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
5	墓前域	23層	石製品	勾玉	瑪瑙	4.10	2.20	1.30	1.20	0.70	0.15～0.30	13.9	K-9	274-1
6	墓前域	23層	石製品	切子玉	水晶	2.25	1.50	0.80	1.40	－	0.25～0.50	6.0	K-2	276-2
7	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	3.40	1.95	1.00	1.60	－	0.25～0.45	14.2	K-3	276-8
8	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	2.20	1.90	1.00	1.75	－	0.20～0.50	9.4	K-4	276-3
9	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	2.70	1.45	0.80	－	－	0.25～0.45	7.7	K-5	276-5
10	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	2.70	1.70	0.90	1.50	－	0.20～0.40	8.8	K-6	276-6
11	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	2.20	1.80	1.05	1.55	－	0.30～0.40	8.0	K-8	276-1
12	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	2.80	1.75	1.10	－	－	0.30～0.40	10.0	K-1	276-4
13	墓前域	21層	石製品	切子玉	水晶	3.15	1.75	1.10	1.50	－	0.25～0.50	12.4	K-7	276-7

第54図　ST6 横穴墓 出土遺物 (6)　－ 土器類・玉製品－



※鉄鏃観察表　［全長］=A+B+C／［鏃長］=A+B

No.	出土位置	細別層	種別	器種	法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室	26層上面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長14.1cm　[刃部]残存長8.4cm・幅1.7cm　[茎部]長さ5.7cm [鏨]長径1.7cm・短径1.1cm・幅0.6cm 【特記事項】不均等両関？・鉄製　【残存部位】刀身・鏨	N-3	312-1
2	墓前域	25層上面	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長41.6cm　[刃部]残存長33.0cm・幅4.1cm　[茎部]残存長8.6cm [鏨]長径4.2cm・短径2.6cm・残存幅1.1cm [鐔]残存長径6.4cm・短径4.5cm・厚さ0.5cm 【特記事項】フクラ切先・均等両関(斜角)？・板鐔(無窓鐔)・木質残存(鞘) 【残存部位】刀身・鏨・鐔・鞘木	N-4	305-1 338-1
3	墓前域	25層上面	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長38.4cm　[刃部]長さ29.8cm・幅3.6cm　[茎部]残存長8.6cm [鏨]長径3.9cm・短径3.5cm・幅1.5cm [鐔]残存長径5.0cm・残存短径4.1cm・厚さ0.6cm [目釘]残存長1.8cm・頭部長1.1cm・頭部幅0.7cm 【特記事項】フクラ切先・不均等両関(斜角)・板鐔(無窓鐔)・目釘孔1か所(目釘残存) 【残存部位】刀身・鏨・鐔・目釘	N-5	305-2

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
4	墓前域	21層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D3	10.7	0.8	8.3	0.4	7.9	2.4	[茎関]台形関a1	N-6	315-2

第55図　ST6 横穴墓 出土遺物 (7) －金属製品－

7号横穴墓（ST7）（第56～64図、第17表、第4分冊 写真図版33～35）

【検出位置】　A-2区西側の標高25～27mの丘陵南東斜面に位置する。同斜面の西側にはST6、東側にはSX1とST8が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南東側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）であるが、墓前域下半から末端の範囲については横穴墓の掘削廃土上面が掘り込み面となる。

【個別部位の特徴】（第56図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は14.17mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.75m、玄室の中央幅 2.00m、奥壁幅 1.90m、前壁幅1.82m、左側壁幅1.75m、右側壁幅1.53m、玄室底面から天井の高さ1.35mを測る。床面積は約3.5㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.1m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆U字形を呈する。幅0.72m、高さ1.02mを測る。

工 具 痕：各壁に幅0.09～0.10m前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁が縦・斜め方向、天井部が放射状である。

付属施設：溝跡1を確認した。奥壁壁際から玄室の中心を通って羨道に至り、羨門墓前域側に位置する溝跡 2 と接続する。玄門付近で奥壁側に向かって三叉に分かれる。その規模は幅 0.05～0.10m・深さ0.04mである。溝の底面は玄室底面の傾斜と同様に玄門が低いことから、排水溝の可能性が高い。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.96m、玄室側の幅0.72m、墓前域側の幅0.58m、玄門側の高さ1.02mを測る。

立 面 形：逆U字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に0.12mの段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ0.90m、幅0.12～0.20m、深さ0.09mの溝跡2を確認した。溝跡2は玄室・羨道から延びる溝跡2と接続する。溝跡2の上部と羨門から1.5m離れた地点で円礫6個・角礫2個が残存していた。礫は0.15×0.09×0.03m(0.5kg)～0.36×0.25

×0.10m（24.7 kg）、総重量 112.8 kgを測り、石材は頁岩 3 個、ひん岩 2 個、砂岩 2 個、安山岩 1 個である（第 17 表 5)。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。溝跡 2 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さが 11.46m、上幅 1.4～2.5m、下幅 0.80～1.20m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.3m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.8m 程度である。

【堆積層】 ST7 横穴墓を覆う堆積層は細別 17 層・大別 3 層に分けた（第 57 図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～7 層）は ST7 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。大別 1 層の細別 7 層と大別 2 層の層理面（大別 2 層上面）で遺物が面的に一定量出土した。この上面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。なお、大別 2 層の上面にあたる細別 8 層には地山小ブロックを部分的に多く含む範囲（羨門付近）があり、祭祀の際に若干の整地層が行われた可能性がある。

大別 1 層の堆積後、ST7 の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 2・3 層〕

大別 2 層（細別 8～16 層）は ST6 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 3 層（細別 17 層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層のうち、細別 9～12・14 層には地山ブロックが多く含まれる。羨道天井の崩落土と考えられる。大別 3 層は、横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられ、この上面で遺物が少量出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、細別 17 層以下～底面では遺物は出土していない。

【出土遺物】土師器 50 点（10 個体、破片 40 点)、須恵器 63 点（7 個体、破片 56 点※うち 4 個体、破片 5 点は遺構間接合遺物)、金属製品 1 点（その他不明小破片多数)、石鏃 1 点が出土した（第 17 表 1～4)。人骨等は残存していない。このうち、石鏃（写真図版 297-6）は周辺から流入したものと考えられる。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、大部分は墓前域の出土である（第 58 図)。土師器小型坏 3 個体・坏 3 個体・埦 3 個体・鉢 1 個体、須恵器提瓶 1 個体・長頸壺 2 個体・短頸壺 2 個体・甕 2 個体、刀子 1 点の合計 18 点を図示した（第 60～64 図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層出土遺物（細別 7 層底面)、B：大別 2 層（細別 8 層底面）出土遺物**の 2 群に分かれる。加えて、ST7 では、別の横穴墓（ST6・12・13）で破砕された須恵器破片の一部が ST7 に混入したと考えられる遺物 5 点（第 17 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C：墓前域大別 2 層の堆積途中（細別 8 層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST7 関連遺物は、古い順から B→C→A の 3 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 2 層（細別 8 層底面）出土遺物〕（第 64 図 3・4)

大別 2 層（細別 8～16 層）のうち、墓前域に分布する細別 8 層の底面付近で出土した遺物である（前項 B に相当)。土師器坏破片 2 点・鉢 1 個体、須恵器提瓶 1 個体が出土した（第 17 表 1)。このうち、土師器鉢 1 個体（第 64 図 4)、須恵器提瓶 1 個体（第 64 図 3）を図示した。

本層に伴う遺物はわずかではあるが、整地層（大別 3 層）の上面で出土していること、遺物の出土位置が墓前域の上半部にまとまること（第 58 図）から、これらの遺物は大別 3 層による整地後に祭祀等の

目的で使用された遺物と考えられる。玄室底面で出土している金属製品小破片（器種不明）についてもこれらと同時期の可能性がある。大別３層以下の底面での遺物が皆無であることを踏まえ、本段階が ST7 における初葬・墓前祭祀の面と想定しておきたい。

〔大別２層（細別８層）出土遺物〕

墓前域に分布する大別２層（細別８層）の堆積土中から出土した遺物である（前項 C に相当）。須恵器甕破片５点が出土した（第 17 表 2）。

これらの須恵器甕破片５点（第 17 表 2）は別遺構で破砕された後、ST7 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST6・9・12 由来の３者に分けられる（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST7 では、**ST6 由来の須恵器甕（E-131／第 53 図 1）**と接合する破片が３点（体部破片）、**ST9 由来の須恵器甕（E-135／第 76 図 1）**と接合する破片が１点（体部破片）、**ST12 由来の須恵器甕（E-140／第 103 図 1）**と接合する破片が１点（底部破片）出土した。ST7 から ST6 は直線距離で約 5m 南西、ST9 は約 10m 北東、ST12 は約 10m 北東の地点に位置する。いずれも ST7 に隣接もしくは同斜面上に位置する横穴墓であるが、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別２層堆積途中の段階に「ST6・9・12 から ST7 墓前域への須恵器甕の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

こうした三者の横穴墓からの甕散布行為は、ST7 の大別２層底面での祭祀から後述する大別１層底面での祭祀直前までの短期間に実施されたと想定される。ST6・9・12 それぞれからの ST7 への甕散布時期の前後関係については把握できなかった。

〔大別１層（細別７層底面）出土遺物〕（第 60～64 図）

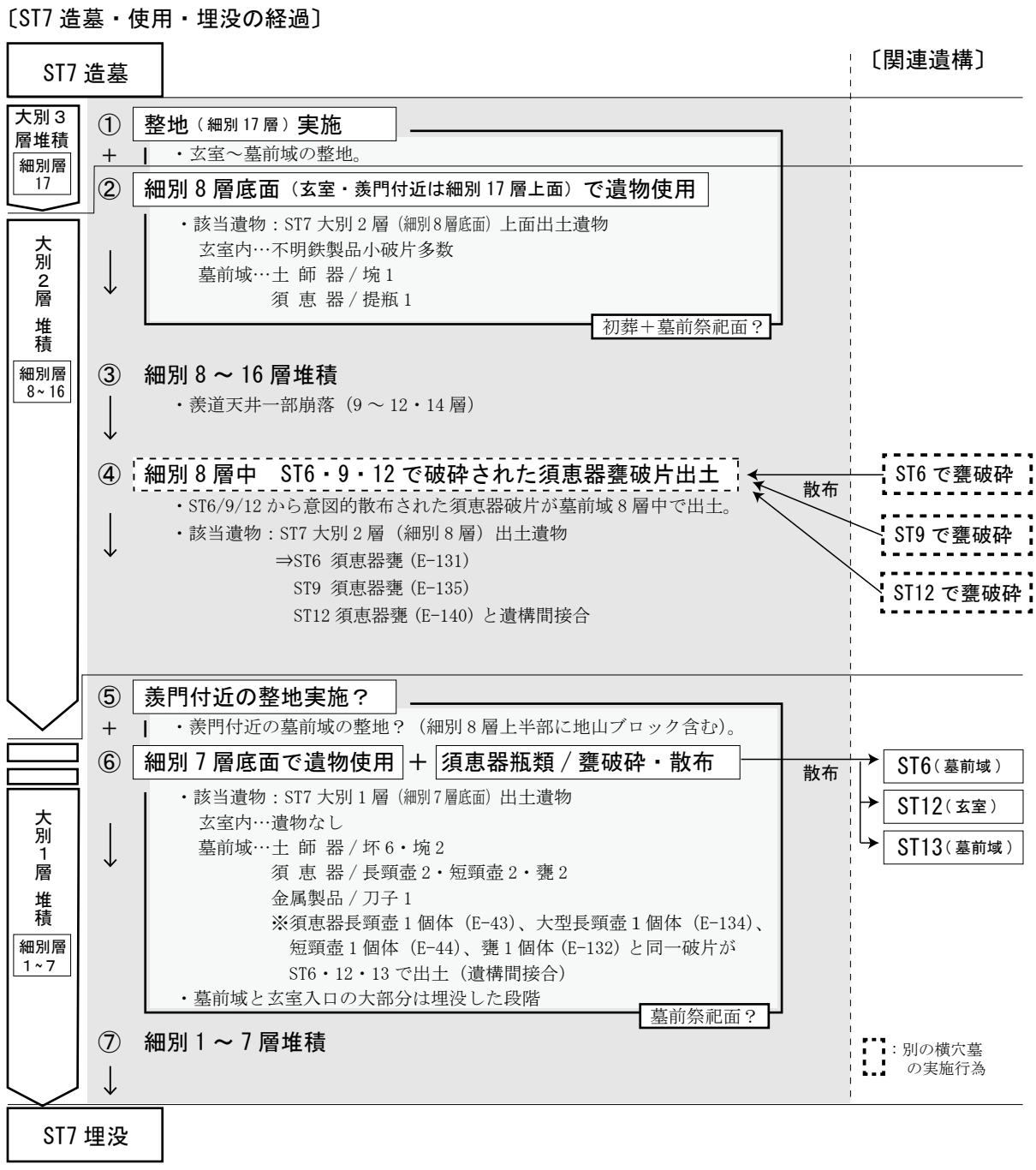
大別１層（細別１～７層）のうち、墓前域に分布する細別７層の底面付近〔＝大別２層（細別８層）上面〕で出土した遺物である（前項 A に相当）。土師器・須恵器・金属製品が出土した。その内訳は土師器小型坏３個体（第 60 図 2～4）・坏３個体（第 60 図 5～7）・埦２個体（第 60 図 8・9）、須恵器長頸壺１個体（第 63 図 1）・大型長頸壺１個体（第 63 図 2）・短頸壺２個体（第 64 図 1・2）・甕２個体（第 61 図 1、第 62 図 1）、刀子１点（第 64 図 5）とこれらと同一個体とみられる破片多数である（第 17 表 1～4）。この他、検出面出土の土師器埦１個体（第 60 図 1）も本段階に帰属する遺物と考えられる。

金属製品を除く多くの遺物は破片の状態で墓前域の全域に分布する。その分布は羨門付近と墓前域中～下半に分かれる。特に須恵器甕類の破片は墓前域のほぼ全域に散在した状態で出土している（第 58 図）。このうち、図示した須恵器長頸壺１個体（第 63 図 1）・大型長頸壺１個体（第 63 図 2）・短頸壺１個体（第 64 図 1）・甕１個体（第 62 図 1）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓から出土している。具体的には第 63 図 1 の長頸壺（E-43）は ST6 出土遺物、第 63 図 2 の大型長頸壺（E-134）は ST12・13 出土遺物、第 64 図 1 の短頸壺（E-44）は ST6 出土遺物、第 62 図 1 の甕（E-132）は ST13 出土遺物と接合する（第 17 表 2、第 59 図）。これらは墓前域における須恵器瓶類・甕の破砕散布行為の痕跡と考えられる。墓前域で破砕された須恵器の破片は、ST7 から少なくとも３か所（ST6・12・13）の横穴墓に散布されたと推定される。この他、第 60 図 3 の土師器小型坏（C-99）では底部穿孔とみられる痕跡も確認している。出土土師器のうち、完形品は坏１点のみ（C-7）で、その大部分は破片で墓前域内に散在する出土状況を示す。土師器類についても須恵器同様に破砕行為が行われていたと考えられる。

これらの遺物群は、土器類の底部穿孔・破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。遺物は同一面上で出土していることから、ある程度の原位置を保った状態のまま埋没したものとみられる。なお、大別１層における祭祀実施当時、ST7 の墓前域と玄室入口については大部分が埋もれた状態だったと考えられる。以上の状況から、本段階の墓前祭祀については、ST7 の追葬に関連しないものとみておきたい。

【まとめ】

ST7 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。



第17表　ST7横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体・破片	土師器 坏 小型坏	土師器 埦	土師器 鉢	土師器 甕	土師器 小計	須恵器 提瓶	須恵器 短頸壺	須恵器 瓶類 or 高台坏	須恵器 瓶類	須恵器 甕	須恵器 小計
玄室	－	堆積土	個											
			破	2 (5)				2 (5)			1 (5)			1 (5)
	－	底面直上	個											
			破										1 (5)	1 (5)
墓前域	－	撹乱	個											
			破	2 (20)				2 (20)					1 (5)	1 (5)
		検出面	個		1 (85)			1 (85)						
			破	4 (40)			1 (5)	5 (45)				1 (5)	27 (1,060)	28 (1,065)
		堆積土	個											
			破	2 (25)				2 (25)					3 (105)	3 (105)
	1	2層	個											
			破	6 (40)				6 (40)				1 (5)	1 (15)	2 (20)
		3層	個											
			破	5 (130)				5 (130)					1 (20)	1 (20)
		4層	個											
			破										5 (505)	5 (505)
		撹乱、検出面、6層	個							1 (95)				1 (95)
			破											
		6層	個											
			破	7 (85)				7 (85)						
		7層	個	2 (245)	1 (95)			3 (340)						
			破	7 (90)				7 (90)			1 (5)		3 (70)	4 (75)
		2・3・7層	個		1 (185)			1 (185)						
			破											
		3・4・7層	個	1 (75)				1 (75)						
			破											
		4・7層	個	1 (40)				1 (40)						
			破											
		6・7層	個	1 (90)				1 (90)						
			破											
		8層上面	個											
			破	2 (25)				2 (25)					5 (110)	5 (110)
		3・4・7層、8層上面	個	1 (150)				1 (150)						
			破											
		撹乱、1～3・7層、8層上面	個										1 (4,025)	1 (4,025)
			破											
	2	8層 (17層上面)	個			1 (210)		1 (210)	1 (750)					1 (750)
			破	2 (50)				2 (50)						
総合計		個体数(重量)		6 (600)	3 (365)	1 (210)		10 (1,175)	1 (750)	1 (95)			1 (4,025)	3 (4,870)
		破片数(重量)		39 (510)			1 (5)	40 (515)			2 (10)	2 (10)	47 (1,895)	51 (1,915)
		総重量		(1,110)	(365)	(210)	(5)	50 (1,690)	(750)	(95)		(10)	(5,920)	54 (6,785)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	短頸壺	1 (950)	◆ST6　13層(墓前域) ◆ST7　2・7層(墓前域)	ST7	◆ST6:1点 ★ST7:11点	E 44	第64図1
須恵器	長頸壺	1 (285)	◆ST6　13層(墓前域) ◆ST7　6・7層(墓前域)	ST7	◆ST6:1点 ★ST7:9点	E 43	第63図1
須恵器	大型長頸壺	1 (4,575)	◆ST7　4・6・7層・8層上面(墓前域)、堆積土(玄室) ◆ST12　堆積土(玄室) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST7	★ST7:92点 ◆ST12:2点 ◆ST13:1点	E 134	第63図2
須恵器	甕	1 (3,925)	◆ST7　4・6・7層・8層上面(墓前域) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST7	★ST7:98点 ◆ST13:2点	E 132	第62図1
須恵器	甕	1 (5,640)	◆ST6　13・18・19・21～23層、24・26層上面(墓前域) ◆ST7　8層(墓前域) ◆A区検出面(ST3西側付近)	ST6	★ST6:77点 ◆ST7:3点 ◆検出面:1点	E 131	第53図1
須恵器	甕	1 (19,875)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST9　2～5層(墓前域・羨門付近) ◆ST11　3層(玄室) ◆ST12　16層上半部(墓前域)	ST9	◆ST7:1点 ★ST9:137点 ◆ST11:1点 ◆ST12:1点	E 135	第76図1
須恵器	甕	1 (4,400)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　堆積土(玄室)、8～11層(墓前域) ◆ST20　3層・検出面(墓前域)	ST12	◆ST7:1点 ◆ST11:2点 ★ST12:25点 ◆ST20:2点	E 140c	第103図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

※ST7出土須恵器の総数
(表17-1)遺構単独出土　3個体＋破片51点
＋
(表17-2)遺構間接合遺物　4個体＋破片5点　＝ 63 点

3. 金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載・非掲載	金属製品 刀子	金属製品 不明鉄製品	金属製品 小計
玄室	－	底面	掲			
			非掲		破片多数	破片多数
墓前域	1	8層上面	掲	1		1
			非掲			
器種別総合計		掲載遺物点数		1		1
		非掲載遺物点数			破片多数	
		総点数		1		1 ＋破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST7出土の不明小片の重量は1.4g)

4. その他の遺物

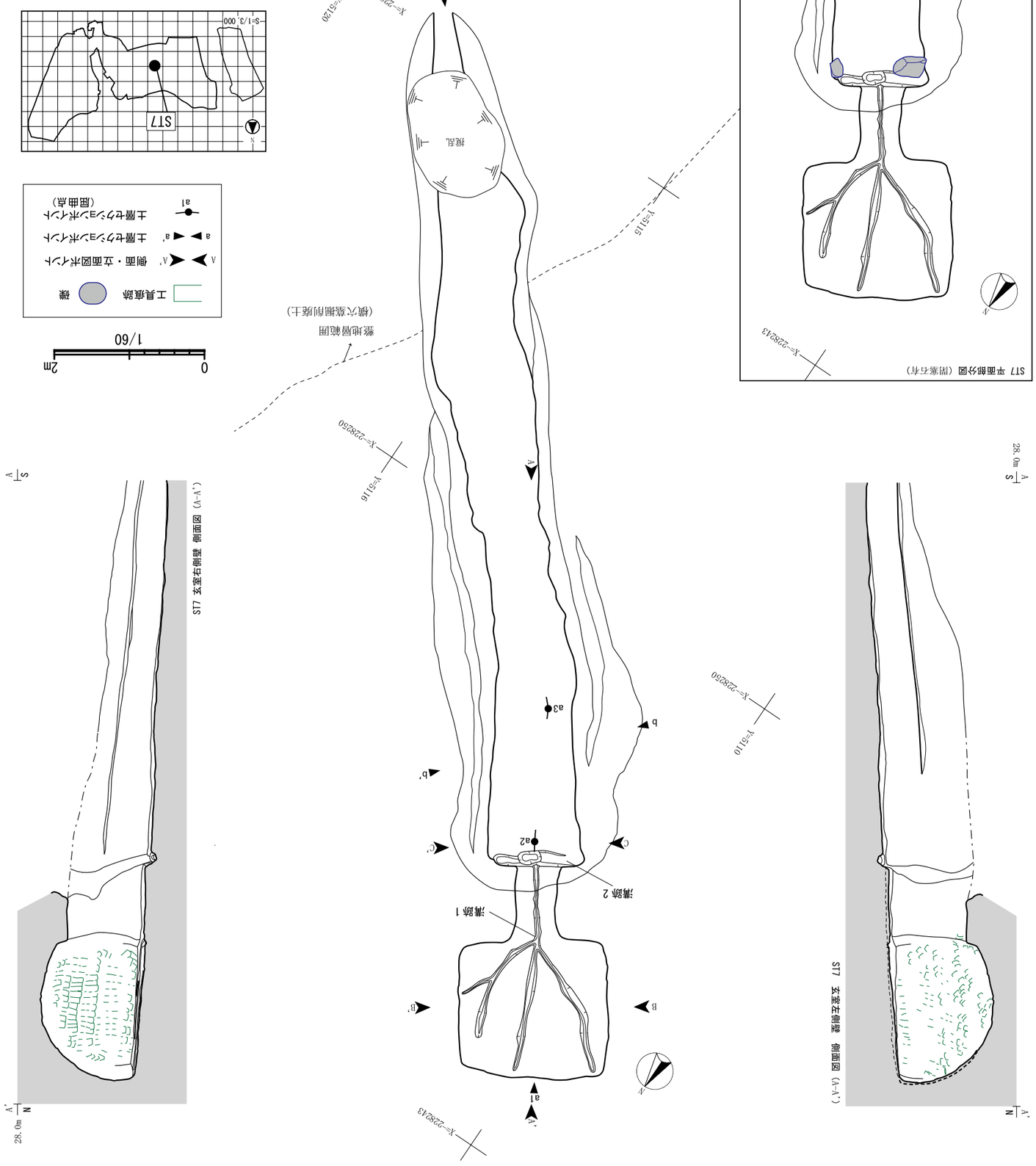
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体・破片	石器 石鏃	石器 小計
墓前域	1	6層	個	1 (1.4)	1 (1.4)
			破		
総合計		個体数(重量)		1 (1.4)	1 (1.4)
		破片数(重量)			
		総重量		(1.4)	(1.4)

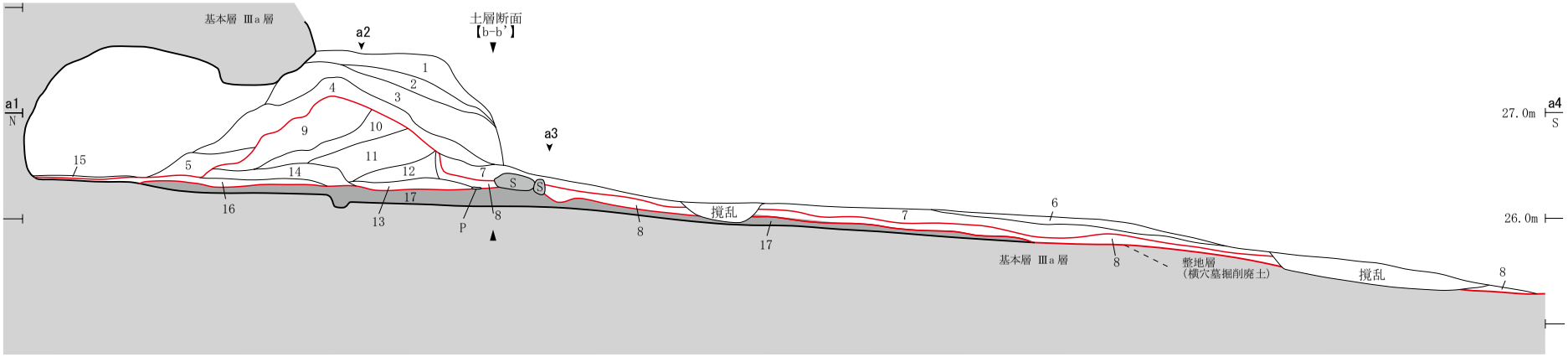
※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

5. 閉塞石観察表

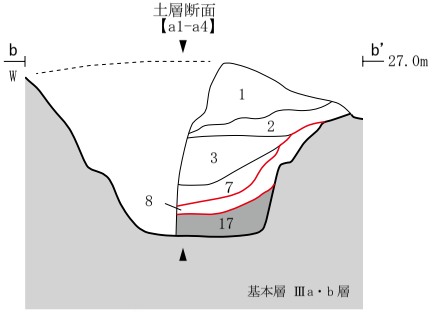
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	円礫	24	16	5	4.8
頁岩	円礫	25	15	10	7.9
頁岩	角礫	35	17	16	16.6
ひん岩	円礫	15	9	3	0.5
ひん岩	円礫	25	20	18	22.0
砂岩	円礫	23	23	10	12.3
砂岩	円礫	36	25	10	24.7
安山岩	角礫	35	20	13	24.0
合計:8点／重量(kg)＝					112.8

第56図　ST7 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

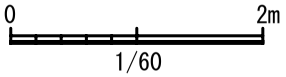




ST7 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3-a4〕



ST7 墓前域 土層断面〔b-b'〕

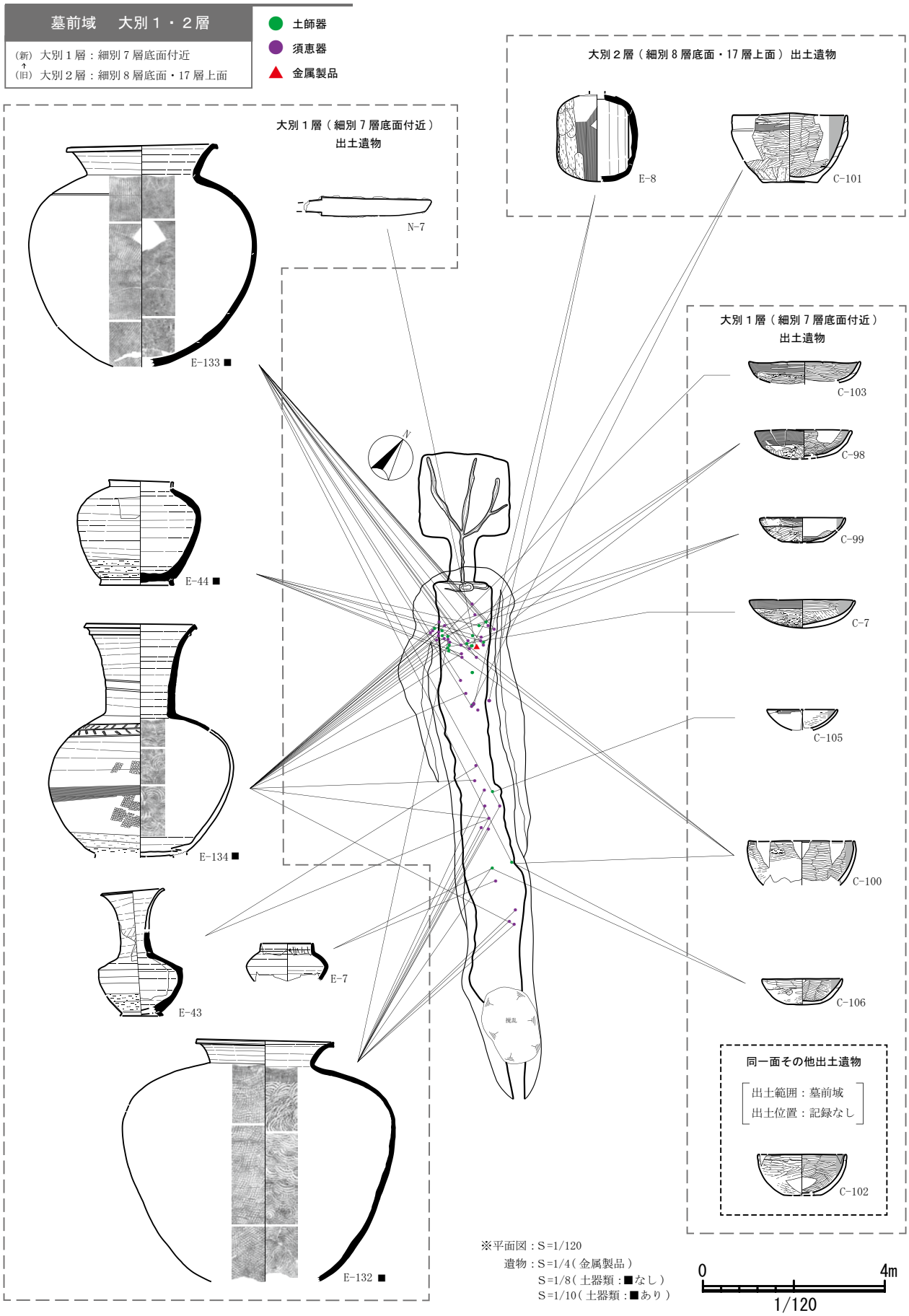


【土層図中の表記】

- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫　　P ：土器
- ▼：土層断面の屈曲点
- ▼▲：各土層断面の交点

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック（天井崩落土）多量に含む。	1	自然堆積層
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片微量含む。		
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒子少量含む		
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片微量、地山ブロック（小）含む。		
5	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山ブロック（天井崩落土）多く含む。		
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	小礫少量含む。		
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。遺物を多く含む層。		
8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	羨門付近の8層上半部に地山ブロック多量に含む（整地層）。炭化物片少量含む。	2	自然堆積層
9	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ブロック（大）多く含む。		
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
11	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（大）多く含む。		
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（小）多く含む。		
13	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック含む。炭化物片少量含む。		
14	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック（大）多く含む。		
15	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘土質シルト	泥化している。		
16	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。遺物を多く含む層。		
17	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック（小）多く含む。炭化物粒少量含む。	3	人為堆積層（整地層）

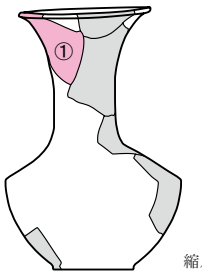
第 57 図　ST7 横穴墓 土層断面図



第58図　ST7 横穴墓 遺物出土状況図

E-43　須恵器 長頸壺（第 63 図 1）

正面

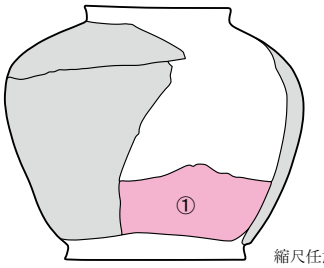


縮尺任意

塗り注釈		出土層位
	ST7	［墓前域］6・7層
①	ST6	［墓前域］13層
白抜	欠損箇所	

E-44　須恵器 短頸壺（第 64 図 1）

正面

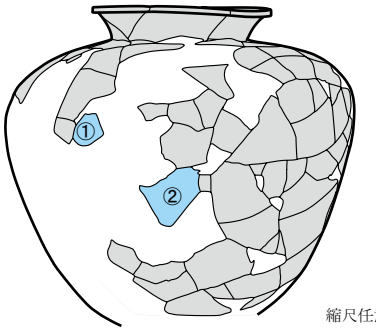


縮尺任意

塗り注釈		出土層位
	ST7	［墓前域］2・7層
①	ST6	［墓前域］13層
白抜	欠損箇所	

E-132　須恵器 甕（第 62 図 1）

正面

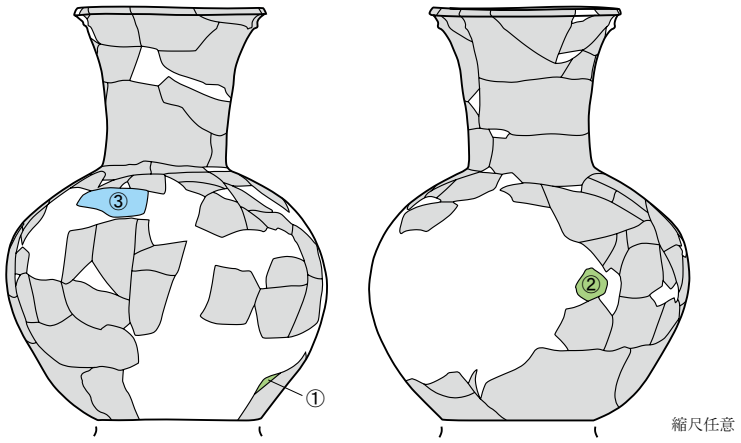


縮尺任意

塗り注釈		出土層位
	ST7	［墓前域］4・6・7層、8層上面
①②	ST13	［墓前域］検出面
白抜	欠損箇所	

E-134　須恵器 大型長頸壺（第 63 図 2）

正面　　背面



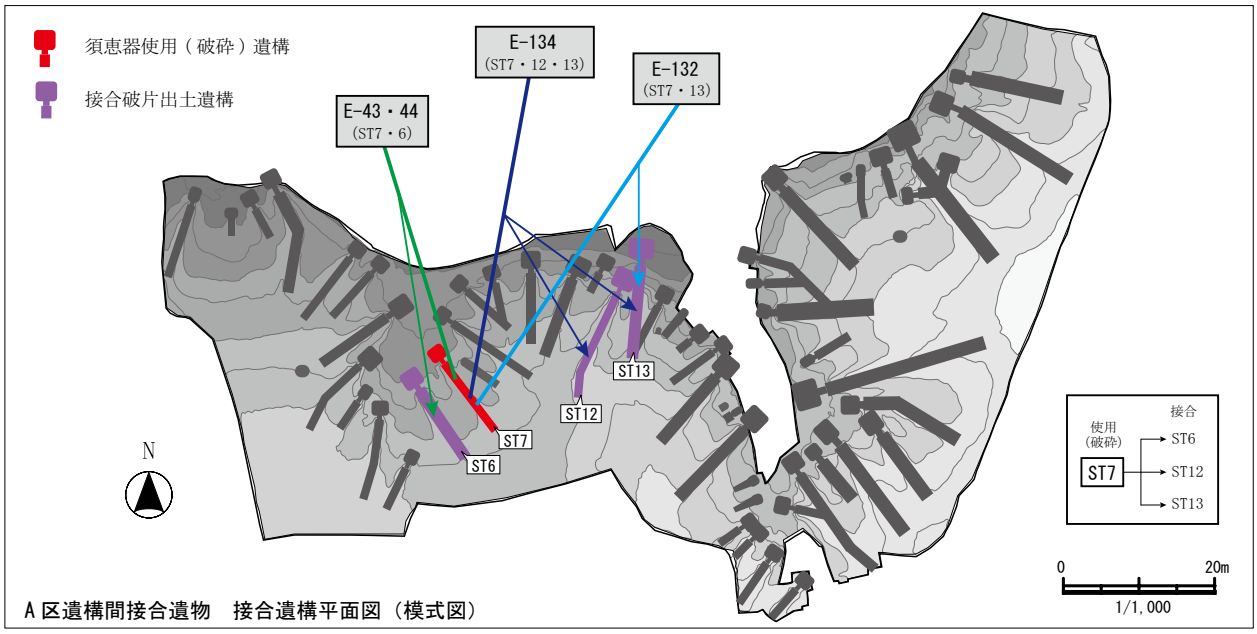
縮尺任意

塗り注釈

	ST7
①②	ST12
③	ST13
白抜	欠損箇所

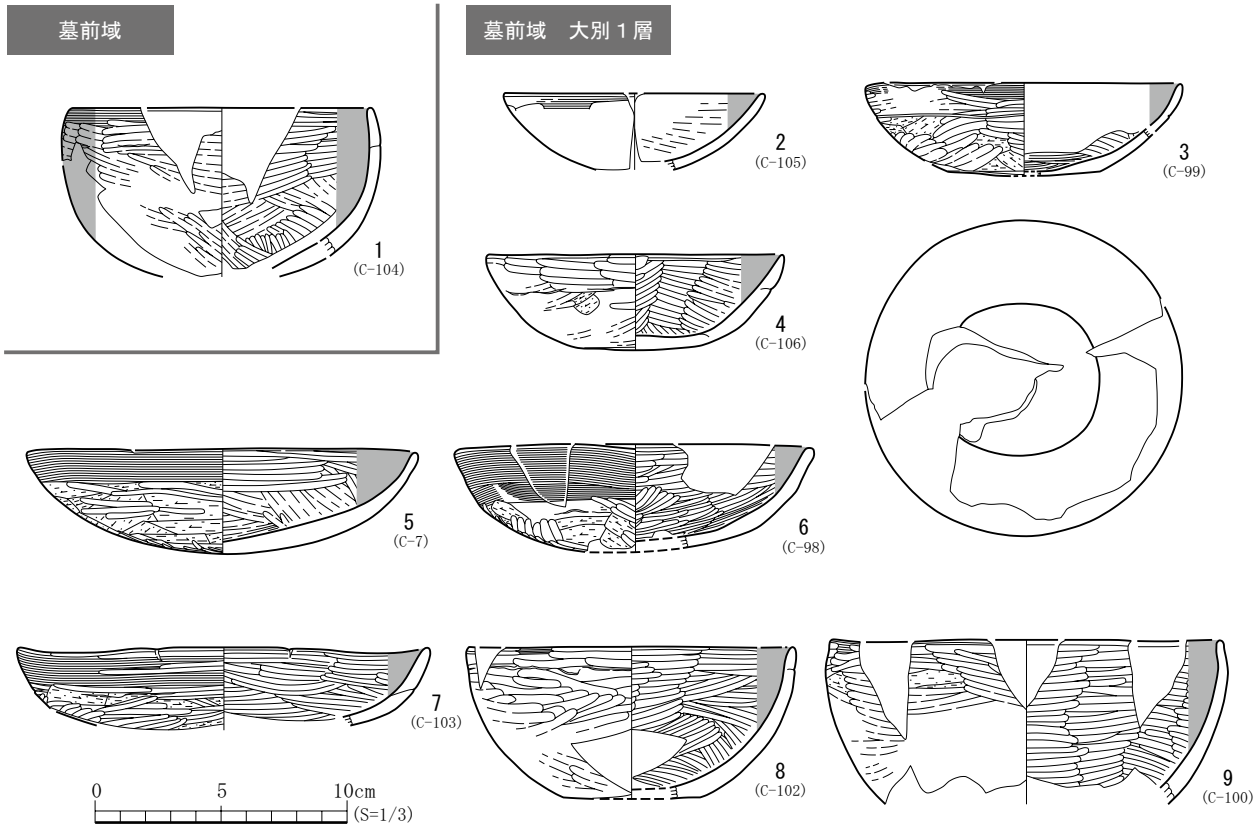
出土層位

ST7	［玄　室］堆積土
	［墓前域］4・6・7層、8層上面
ST12	［玄　室］堆積土
ST13	［墓前域］検出面



A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第59図　ST7 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

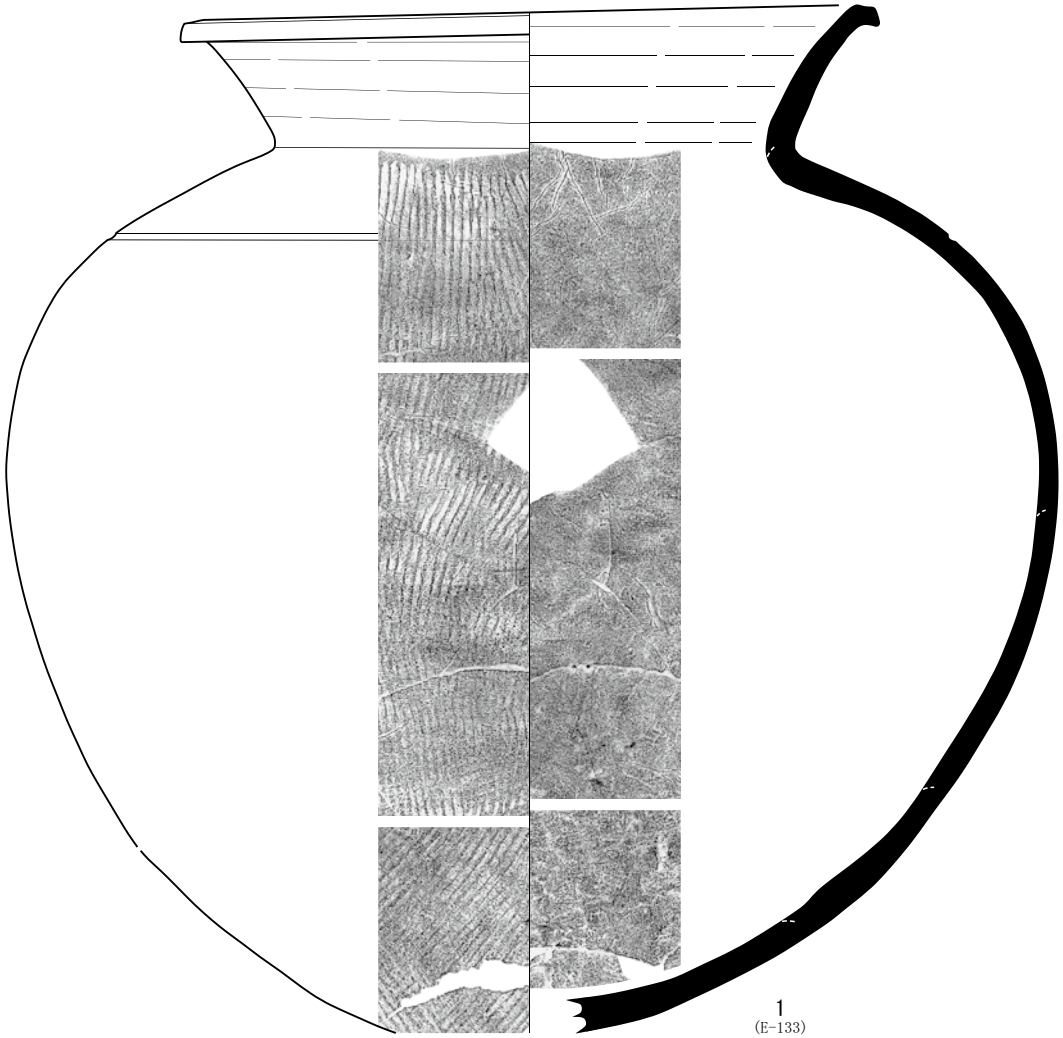


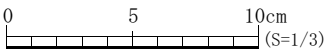
※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	検出面	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(11.8)cm・残存高6.7cm・器厚0.4～0.7cm	C-104	195-2
2	墓前域	7層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(10.2)cm・残存高3.0cm・器厚0.3～0.4cm	C-105	195-11
3	墓前域	3層 4層 7層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.4)cm・器高3.7cm・底径6.0cm・器厚0.1～0.5cm 【特記事項】底部穿孔？・部分的に赤彩残存	C-99	194-8 265-2
4	墓前域	6層 7層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(11.6)cm・器高3.8cm・底径(5.2)cm・器厚0.3～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-106	194-9
5	墓前域	7層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.4cm・器高4.2cm・器厚0.3～0.8cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-7	194-10
6	墓前域	3・4・7層 8層上面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.0cm・器高(4.3)cm・器厚0.4～0.6cm	C-98	194-11 265-1
7	墓前域	4層 7層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.2)cm・残存高3.3cm・器厚0.4～0.5cm	C-103	195-12
8	墓前域	7層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.8)cm・器高6.1cm・底径(5.4)cm・器厚0.4～0.7cm	C-102	195-1
9	墓前域	2層 3層 7層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.4)cm・残存高6.5cm・器厚0.3～0.7cm	C-100	194-12

第60図　ST7 横穴墓 出土遺物 (1) － 土器類 －

墓前域　大別１層

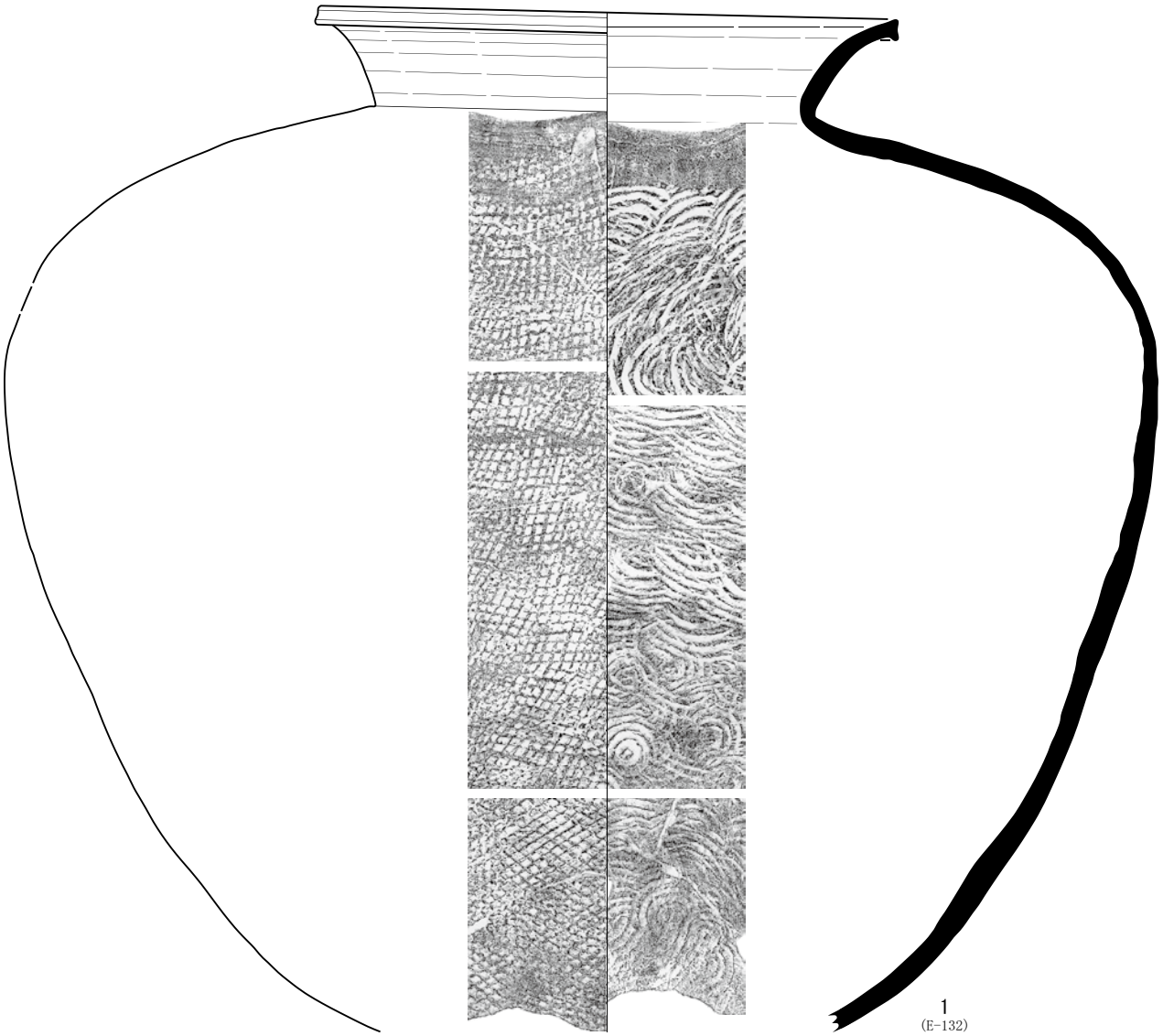


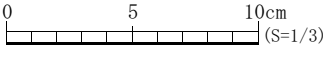


No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	1～3・7層 8層上面 撹乱	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部上位平行タタキ→沈線・体部中～下位平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円)→ナデ 【法量】口径27.8cm・残存高40.9cm・器厚0.7～1.4cm	E-133	240-2 268-13

第61図　ST7 横穴墓 出土遺物 (2) －土器類－

墓前域　大別１層

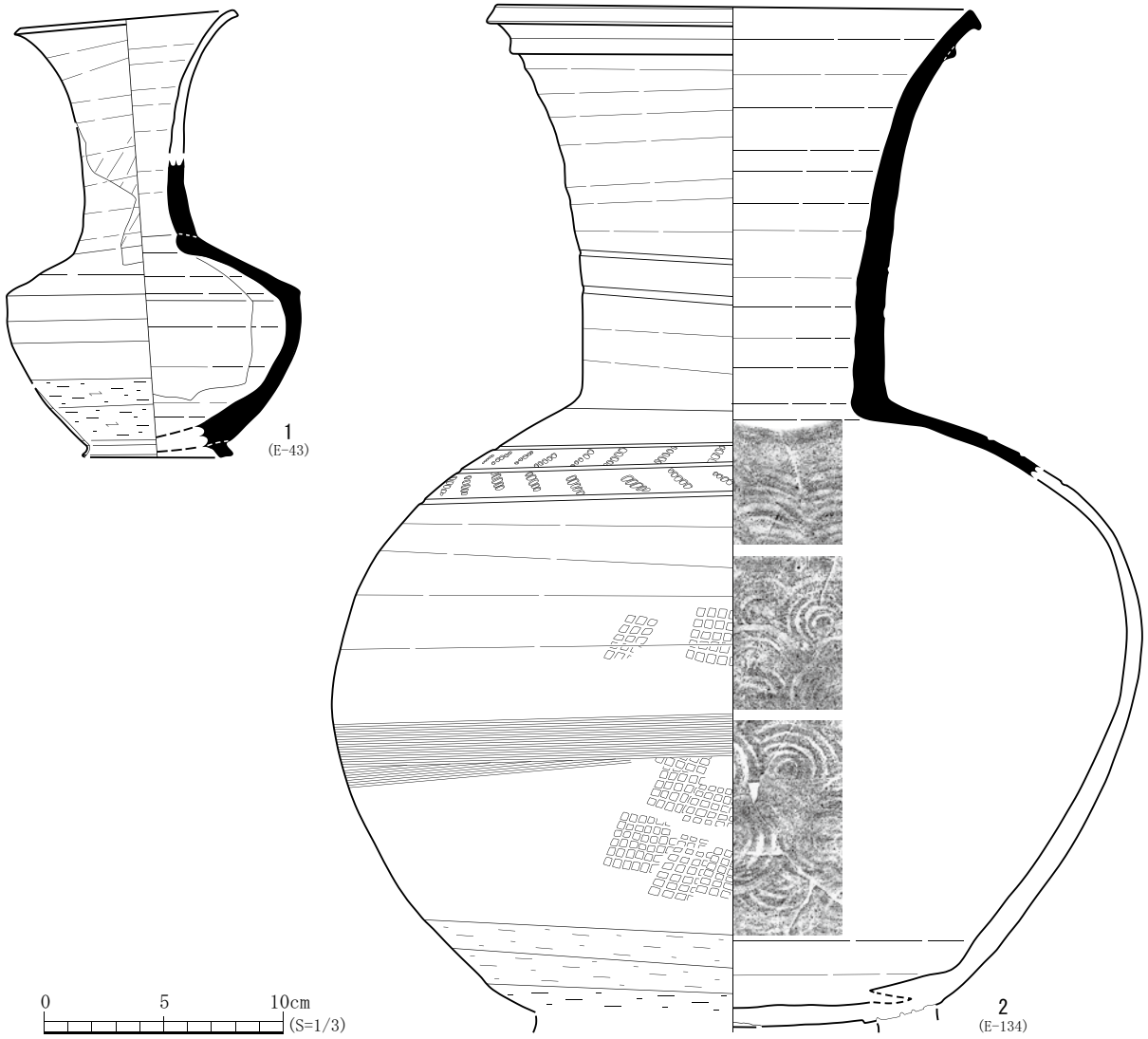




No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST7　4・6・7層 8層上面 ◆ST13　検出面	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST7(主体)**＋ST13 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径25.0㎝・残存高44.6㎝・器厚0.4～1.1㎝	E-132	240-1 268-11 268-12

第62図　ST7 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

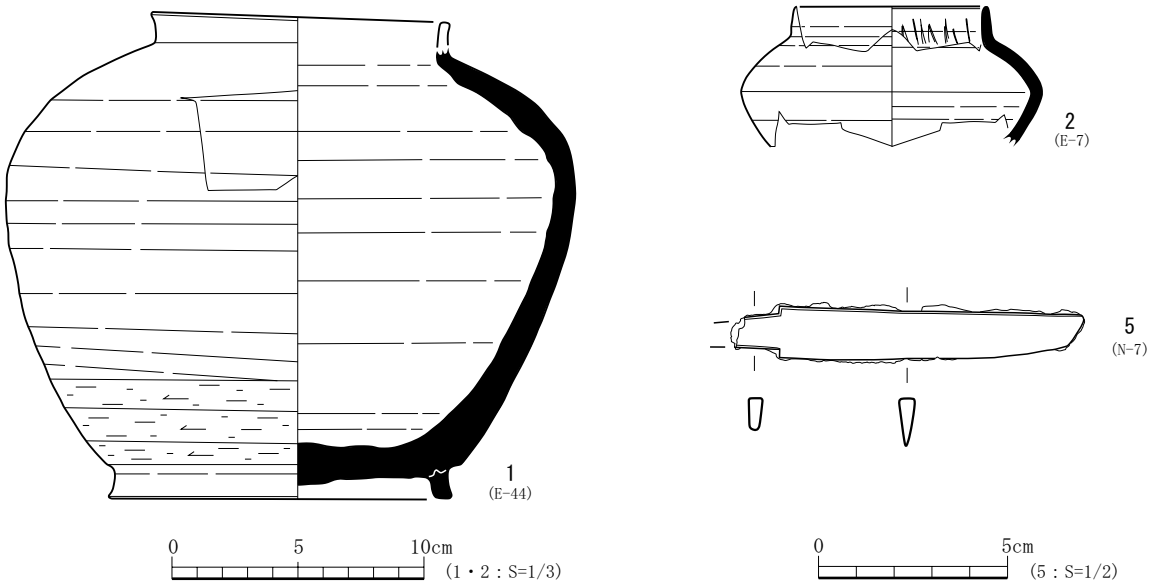


※(　)内：推定値

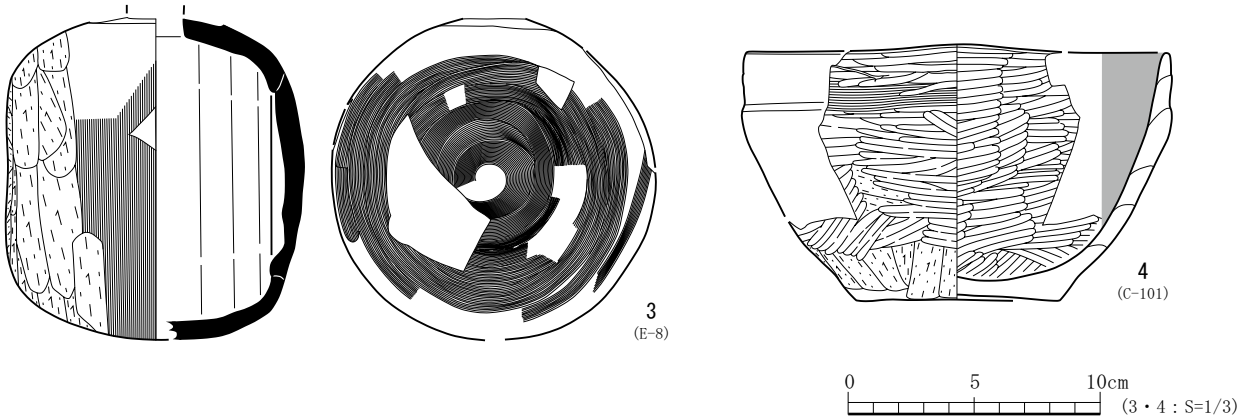
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST6　13層 ◆ST7　6層 7層	須恵器 長頸壺	◎遺構間接合　**ST7(主体)**＋ST6 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・絞り目・口縁端部面取り 体部ロクロナデ→回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明→ナデ再調整 高台貼付・高台板状圧痕 内面：口頸部ロクロナデ／絞り目・体部ロクロナデ 【法量】口径(9.0)cm・器高18.8cm・底径6.3cm・器厚0.3～1.1cm・口縁部最大径(9.4)cm 体部最大径(12.2)cm	E-43	223-3
2	[ST7] 玄室・墓前域 ＋ [ST12] 玄室 ＋ [ST13] 墓前域	◆ST7 4・6・7層(墓前域) 8層上面(墓前域) 堆積土(玄室) ◆ST12　堆積土 ◆ST13　検出面	須恵器 大型長頸壺	◎遺構間接合　**ST7(主体)**＋ST12＋ST13 【技法】外面：口頸部突帯貼付→ロクロナデ・体部上位沈線(3条)→櫛歯状工具による列点文 体部中位格子状タタキ→カキメ・体部下位格子状タタキ→回転ヘラ削り 底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整 高台位置に沈線→高台貼付(高台欠損)・ロクロナデ・剥離 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円)→ロクロナデ・底部ロクロナデ 【法量】口径19.8cm・残存高42.9cm・器厚0.3～1.5cm 【特記事項】歪みあり	E-134	223-4

第63図　ST7 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層



墓前域　大別２層



※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST6　13層 ◆ST7　2層 7層	須恵器 短頸壺	◎遺構間接合　**ST7(主体)**＋ST6 【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り 再調整・高台貼付、内面：ロクロナデ 【法量】口径(11.7)cm・器高19.4cm・底径(13.5)cm・器厚0.5～1.5cm	E-44	223-1 265-8
2	墓前域	6層 検出面・撹乱	須恵器 短頸壺	【技法】外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ・絞り目 【法量】口径(7.6)cm・残存高5.6cm・器厚0.2～0.5cm	E-7	223-2
3	墓前域	8層 (17層上面)	須恵器 提瓶	【技法】外面：カキメ→片側手持ちヘラ削り・円盤閉塞 内面：ロクロナデ 【法量】残存高12.8cm・器厚0.5～0.7cm	E-8	223-5
4	墓前域	8層 (17層上面)	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・底部ヘラ削り 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.6)cm・器高10.2cm・底径8.2cm・器厚0.5～0.9cm	C-101	195-3

No.	出土位置	細別層	種別・器種	法量・特記事項	登録	写真図版
5	墓前域	8層上面	金属製品 刀子	【法量】[刀身]残存長9.4cm　[刃部]長さ8.1cm・幅1.4cm　[茎部]残存長1.3cm 【特記事項】均等両関(直角)・鉄製	N-7	312-2

第64図　ST7 横穴墓 出土遺物 (5) ― 土器類・金属製品 ―

8号横穴墓（ST8）（第65～69図、第18表、第4分冊 写真図版36～38）

【検出位置】　A-2区西側の標高25～28mの丘陵南東斜面に位置する。同斜面の南西にはSX1・ST7、北西にはST21が隣接している。

【重複関係】　墓前域下半の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南東側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）であるが、墓前域下半から末端の範囲については横穴墓の掘削廃土上面が掘り込み面となる。

【個別部位の特徴】（第66図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は15.60mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行1.96m、玄室の中央幅1.65m、奥壁幅1.66m、前壁幅1.43m、左側壁幅1.64m、右側壁幅1.63m、玄室底面から天井の高さ1.15mを測る。床面積は約3.1㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とするが、中央幅に対しやや奥行が長く、一部コーナーのつくりがやや崩れた方形を呈する。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.3m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。両側壁が崩落している。立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。幅1.02m、高さ1.08mを測る。

工 具 痕：各壁に幅0.08～0.10m前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁が縦・横方向、天井部が放射状である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行1.13m、玄室側の幅1.02m、墓前域側の幅0.75m、玄門側の高さ1.08mを測る。羨門付近の天井は崩落している。

立 面 形：両側壁が崩落している。逆U字形を呈していたと考えられる。

天　　井：平坦である。玄室側がやや高い。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：天井に幅0.06m前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁と平行方向である。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ1.40m、幅0.14～0.30m、深さ0.06mの溝跡1を確認した。溝跡1の上部には、0.13×0.10×0.04m（0.8kg）～0.35×0.25×0.20m（65.6kg）の円礫・角礫28個（総重量216.6kg）が残存しており、溝上面から高さ0.3mまで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩 12

個、ひん岩 5 個、花崗閃緑岩 5 個、砂岩 5 個、礫岩 1 個である（第 18 表 3）。溝跡 1 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 12.51m、上幅 2.1～2.5m、下幅 1.00～1.30m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.4m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.8m 程度である。

付属施設：羨門付近の底面で長さ 1.25m、幅 0.12～0.18m、深さ 0.05m の溝跡 2 を確認した。この溝は、底面は羨門側が高く、墓前域側に向かって傾斜する。位置的にみて排水溝と考えられる。

【堆積層】　ST8 横穴墓を覆う堆積層は細別 16 層・大別 3 層に分けた（第 65 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1・2 層〕

大別 1 層（細別 1～12 層）は ST8 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 2 層（細別 13～15 層）は ST8 の玄室の下半～墓前域全面に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層は整地層とみられ、その上面にあたる大別 1 層（細別 11・12 層）で遺物が出土した。整地層（大別 2 層）の上面で何らかの行為が行われた可能性がある。大別 1 層の堆積後、玄室入口はほぼ埋没したと考えられる。

〔大別 3 層〕

大別 3 層（細別 16 層）は ST8 の墓前域に堆積する自然堆積層である。溝状の形状を呈する墓前域の壁際や羨門前の溝跡 1 などに堆積する均一層である。ST8 造墓直後の堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

【出土遺物】土師器 38 点（4 個体、破片 34 点）、須恵器 76 点（2 個体、破片 74 点）、金属製品 13 点、弥生土器 2 点が出土した（第 18 表 1・2）。人骨等は残存していない。このうち、弥生土器と検出面出土遺物は周辺から流入したものと考えられる。土師器小型坏 1 個体・坏 2 個体・甕 1 個体、須恵器長頸壺 2 個体の合計 6 点を図示した（第 68・69 図）。

ST8 では、整地層である大別 2 層と大別 1 層の層理面（細別 14・15 層上面および細別 11・12 層）でまとまって遺物が出土した。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる（第 67 図）。以下、出土地点ごとに詳細を記載する。

玄室では金属製品のみが出土した（第 18 表 2）。その内訳は鉄刀・鞘金具・刀子と不明鉄製品の破片 12 点である。いずれも細片の状態で出土したため図示できなかった。破片数からみて、ST8 の玄室内には少なくとも鉄刀 1 点、刀子 1 点が埋納されていたと考えられる。これらの遺物は玄室下半に敷き詰められた整地層上面で出土している。初葬に伴う遺物の可能性がある。

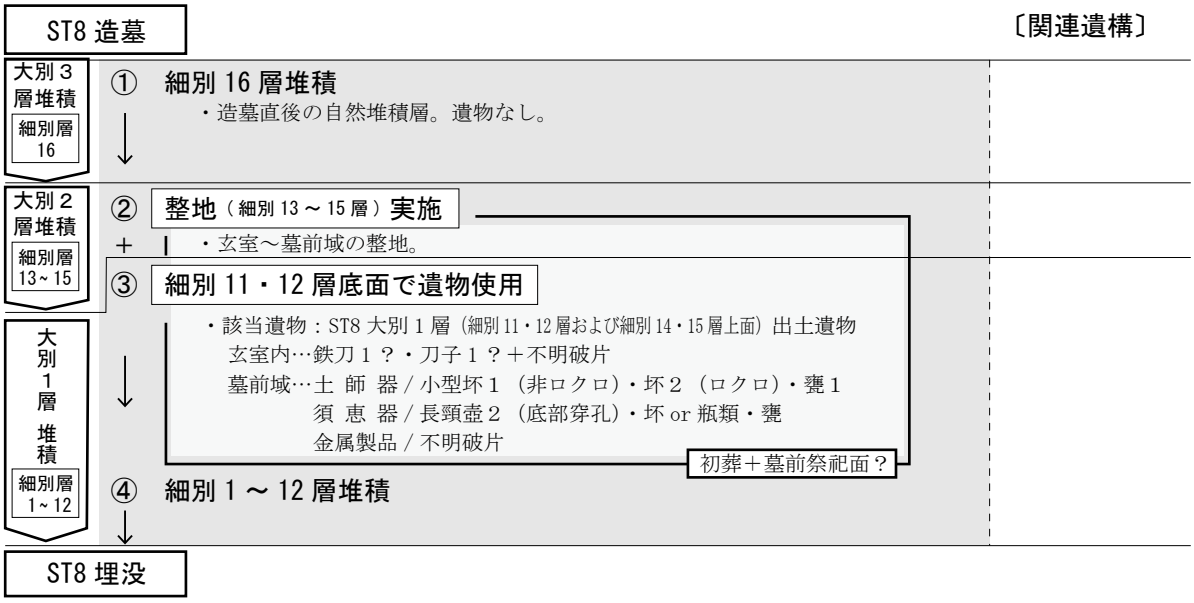
墓前域では土師器・須恵器・金属製品が出土した。その内訳は土師器小型坏 1 個体（第 68 図 1）・坏 2 個体（第 68 図 2・3）・甕 1 個体（第 69 図 1）、須恵器長頸壺 2 個体（第 69 図 2・3）・坏または瓶類破片 1 点・甕破片 73 点、不明鉄製品の破片 1 点である（第 18 表 1・2）。土師器坏 2 個体はロクロ土師器である。遺物は、羨門付近から墓前域下半の範囲の同一面上で出土した。長頸壺は横位の状態（写真図版 37-6～8）、その他は破片散布状態で出土しており、このうち、土師器小型坏 1 個体（第 68 図 1）と須恵器長頸壺 2 個体（第 69 図 2・3）の底部に焼成後の穿孔が認められた（写真図版 265-9・266-1）。これらの遺物は墓前祭祀に伴う遺物と推定される。玄室出土遺物と一連の整地層上面で出土していることから、これと同時期の可能性が高い。

ST8 では、この整地層上面での祭祀以後、遺物はほとんど出土しない。以後、祭祀等は行われず、徐々に埋没したと考えられる。

【まとめ】

ST8 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST8 造墓・使用・埋没の経過〕



第18表　ST8横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	土師器 坏（非ロクロ）	土師器 坏（ロクロ）	土師器 甕	土師器 小計	須恵器 坏・瓶類	須恵器 長頸壺	須恵器 甕	須恵器 小計	弥生土器 甕	弥生土器 小計
墓前域	–	検出面	個										
			破	1 (20)			1 (20)					1 (15)	1 (15)
		撹乱	個										
			破	1 (20)		10 (60)	11 (80)						
	1	11層	個	1 (185)		1 (895)	2 (1,080)						
			破	13 (80)		8 (130)	21 (210)	1 (5)		30 (330)	31 (335)	1 (15)	1 (15)
		14層上面	個		1 (130)		1 (130)		2 (3,840)		2 (3,840)		
			破			1 (10)	1 (10)			43 (420)	43 (420)		
		10層・15層上面	個		1 (180)		1 (180)						
			破										
総合計	個体数(重量)			1 (185)	2 (310)	1 (895)	4 (1,390)		2 (3,840)		2 (3,840)		
	破片数(重量)			15 (120)		19 (200)	34 (320)	1 (5)		73 (750)	74 (755)	2 (30)	2 (30)
	総重量			(305)	(310)	(1,095)	38 (1,710)	(5)	(3,840)	(750)	76 (4,595)	(30)	2 (30)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

ST8では遺構間接合遺物なし

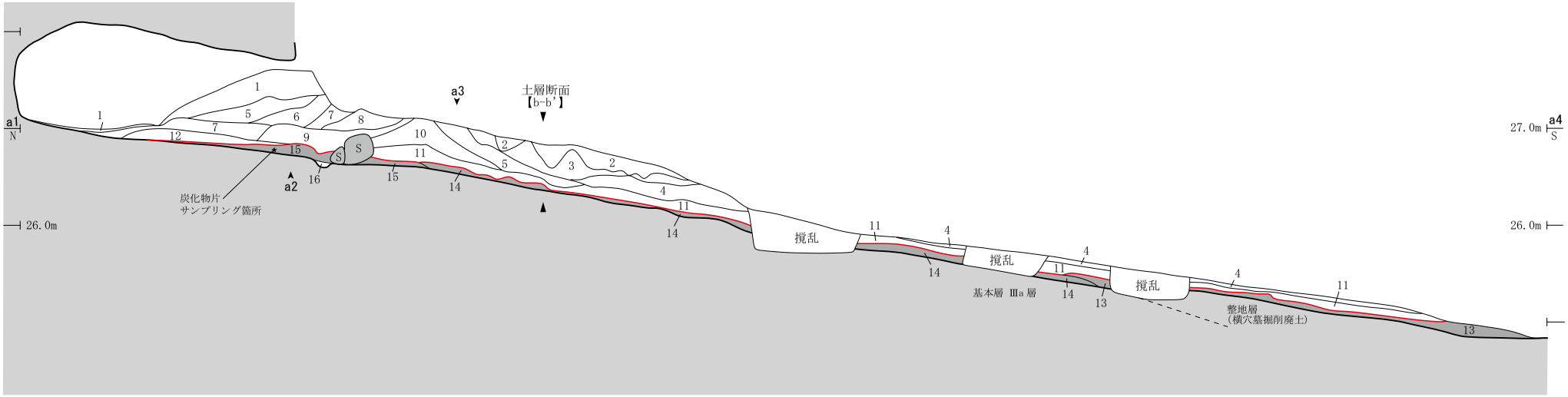
2. 金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載/非掲載	金属製品 鉄刀	鞘金具	刀子	不明鉄製品	小計
玄室	1	12層（15層上面）	掲					
			非掲	1	1	2	7	11
		15層上面	掲					
			非掲	1				1
墓前域	1	14層上面	掲					
			非掲				1	1
器種別総合計	掲載遺物点数							
	非掲載遺物点数			2	1	2	8	13
	総点数			2	1	2	8	13

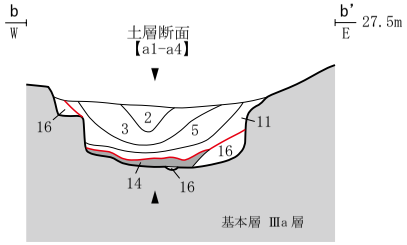
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

3. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	備考	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	備考
頁岩	円礫	13	10	4	0.8		ひん岩	角礫	20	15	12	9.3	
頁岩	円礫	10	8	5	1.4		ひん岩	角礫	25	20	13	10.1	
頁岩	円礫	16	8	8	1.5		ひん岩	角礫	26	20	17	17.3	被熱
頁岩	円礫	10	10	6	1.7	被熱	花崗閃緑岩	角礫	24	10	10	4.4	
頁岩	角礫	13	13	8	1.9		花崗閃緑岩	角礫	25	14	7	4.8	
頁岩	円礫	17	11	7	2.3		花崗閃緑岩	角礫	32	16	10	6.5	
頁岩	角礫	22	14	7	2.5		花崗閃緑岩	角礫	27	13	12	7.3	
頁岩	円礫	14	10	8	2.6		花崗閃緑岩	角礫	25	20	18	19.8	
頁岩	角礫	12	11	10	2.9		砂岩	角礫	14	10	8	2.2	被熱
頁岩	角礫	13	11	8	2.9	被熱	砂岩	角礫	17	12	12	4.2	
頁岩	角礫	17	12	10	4.3		砂岩	角礫	15	10	10	5.3	
頁岩	角礫	20	16	10	7.2		砂岩	角礫	28	14	5	6.7	被熱
ひん岩	角礫	15	14	8	2.8	被熱	砂岩	角礫	35	25	20	65.6	
ひん岩	円礫	17	11	10	2.9		礫岩	角礫	26	16	15	15.4	
							合計:28点／重量(kg)＝					216.6	



ST8 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3-a4〕



ST8 墓前域 土層断面〔b-b'〕

【土層図中の表記】

土層中の塗り：人為堆積層

分層線の赤線：祭祀想定面

S ：礫

：土層断面の屈曲点

：各土層断面の交点

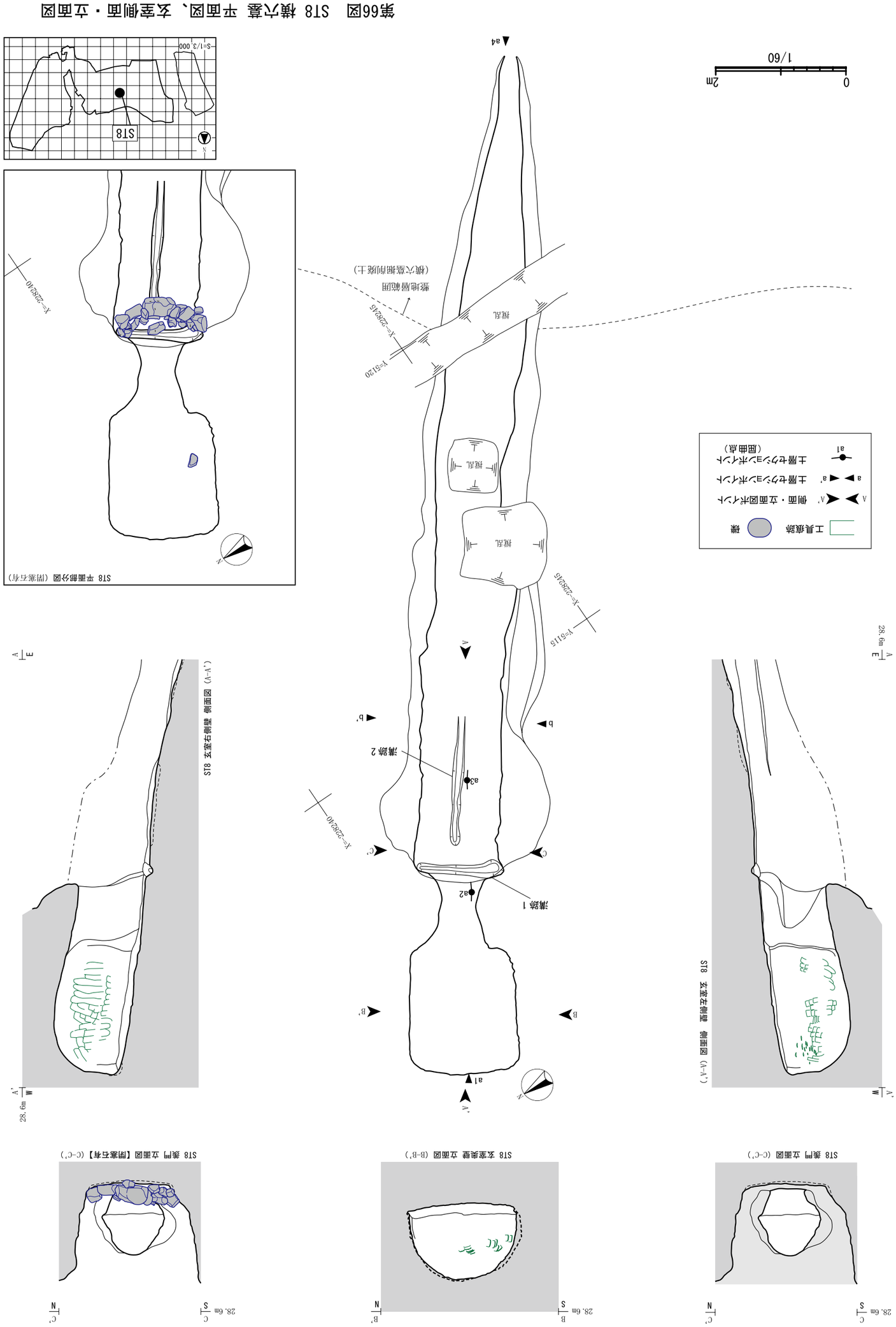
0　2m

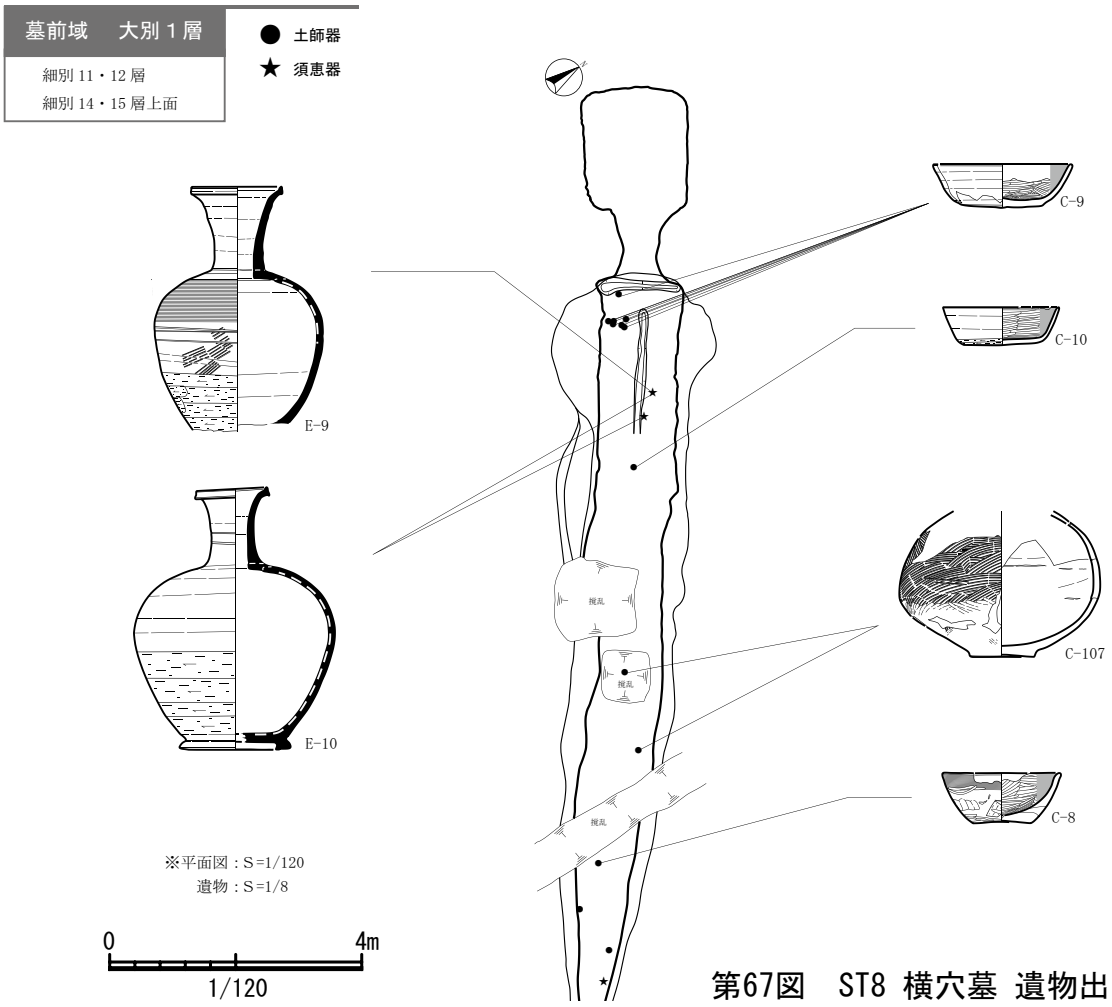
1/60

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片微量含む。	1	自然堆積層
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロック多く含む。		
3	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロック微量含む。		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック・炭化物片微量含む。		
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック（小）少量含む。		
6	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多く含む。		
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック多く含む。		
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック多く含む。　地山ブロック塊含む。		
9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック含む。		
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック含む。		
11	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック含む。		
12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片微量・地山ブロック含む。		
13	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック（大・小）多量含む。	2	人為堆積層（整地層）
14	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。炭化物片微量含む。		
15	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック含む。炭化物片含む。		
16	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片含む。	3	自然堆積層

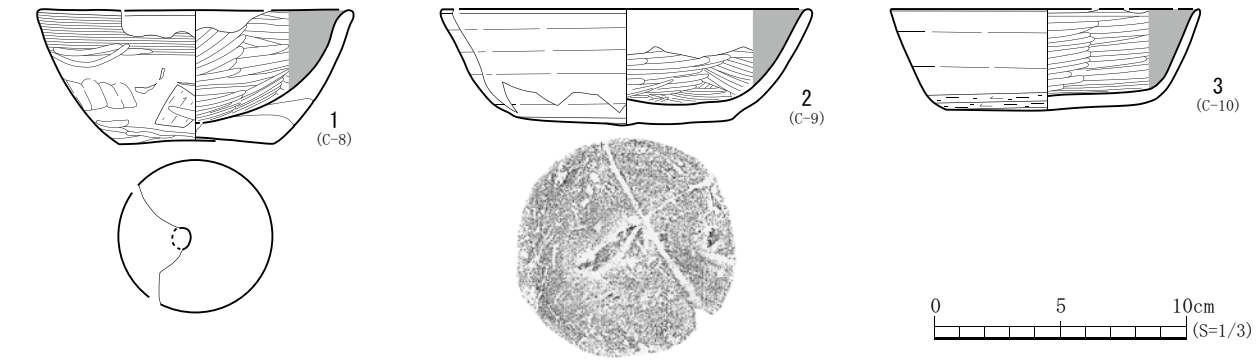
第 65 図　ST8 横穴墓 土層断面図

第66図　ST8 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図





第67図　ST8 横穴墓 遺物出土状況図

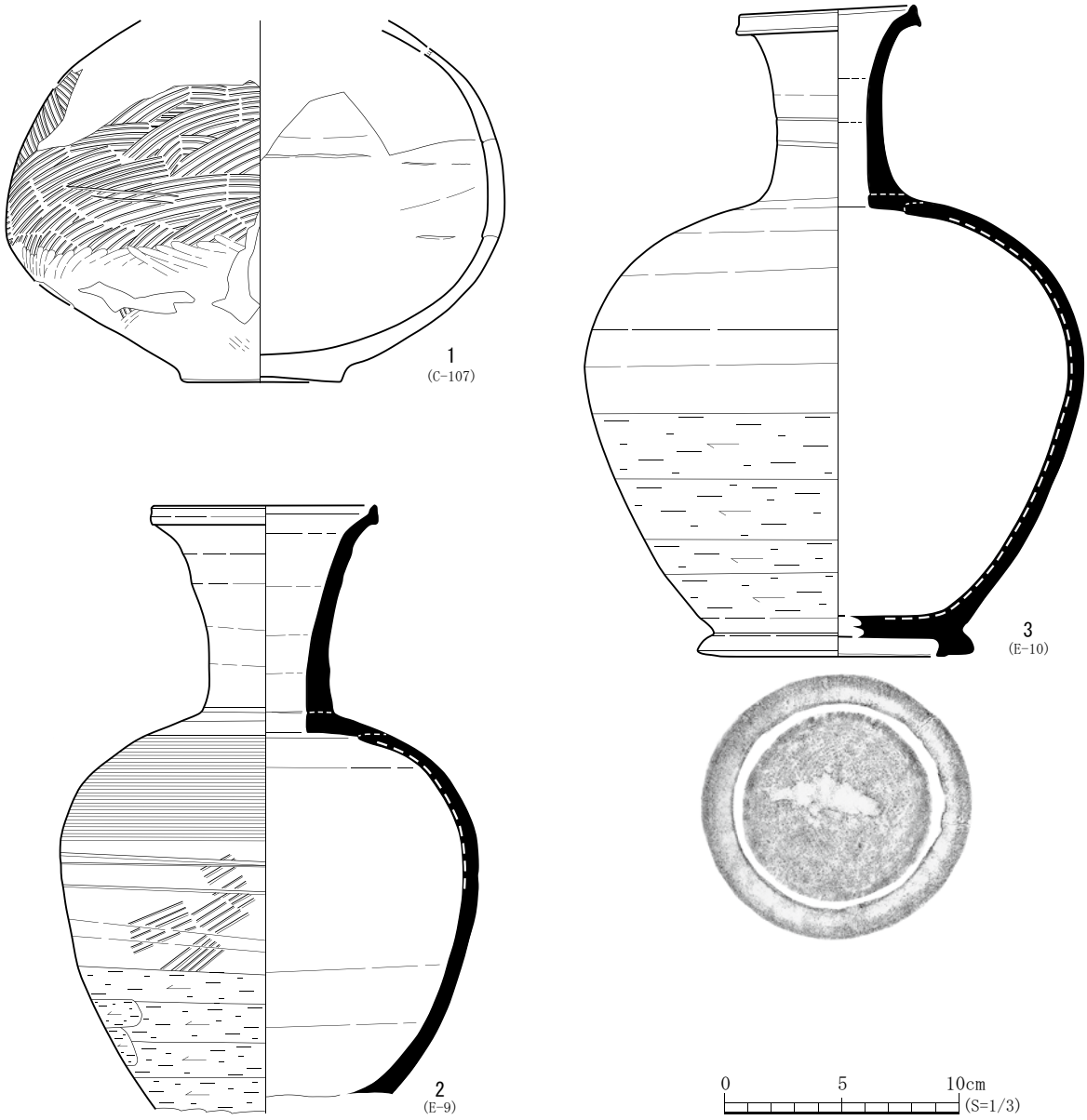


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	11層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ(一部ヘラミガキ)・体部無調整(一部ナデ・ヘラ削り)→ ヘラミガキ・底部ヘラ削り 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.2)cm・器高5.3cm・底径6.0cm・器厚0.6～1.6cm 【特記事項】底部穿孔(焼成後・中央に直径約0.8cm)	C-8	195-4
2	墓前域 (羨門付近)	10層 15層上面	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.5)cm・器高4.6cm・底径8.6cm・器厚0.4～1.0cm	C-9	195-5
3	墓前域	14層上面	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・体部下端～底部回転ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.1)cm・器高4.0cm・底径7.8cm・器厚0.4～0.5cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-10	195-6

第68図　ST8 横穴墓 出土遺物 (1) － 土器類 －

墓前域　大別１層



No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	11層	土師器 甕	【技法】外面：体部上半ハケメ・体部下半ハケメ→ヘラ削り→ヘラミガキ・底部ヘラ削り 内面：磨滅のため調整不明(ヘラナデ？) 【法量】底径6.8cm・残存高15.5cm・器厚0.3～1.4cm・体部最大径21.2cm 【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-107	218-1
2	墓前域	14層上面	須恵器 長頸壺	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部平行タタキ→ロクロナデ→回転ヘラ削り 体部上半カキメ、内面：ロクロナデ 【法量】口径9.4cm・残存高26.0cm・器厚0.4～0.6cm 【特記事項】底部穿孔(焼成後)	E-9	224-1 265-9
3	墓前域	14層上面	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り・円盤閉塞・底部回転糸切り無調整 高台貼付、内面：ロクロナデ 【法量】口径7.4cm・器高27.9cm・底径11.6cm・器厚0.5～0.8cm 【特記事項】底部穿孔(焼成後)	E-10	224-2 266-1

第69図　ST8 横穴墓 出土遺物 (2) ― 土器類 ―

９号横穴墓（ST9）（第 70～78 図、第 19 表、第 4 分冊 写真図版 39～41）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 26～28m の丘陵南斜面に位置する。同斜面の西側には ST21、東側には ST10 が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。ST9 は隣接する ST21 と墓前域が重複する。両横穴墓の位置関係・堆積層・出土遺物等の観察から、その前後関係については、①「ST9 造墓」→②「ST9 の墓前域に接続する形で ST21 を造墓」→③「ST9・21 の両者で墓前域を共有」の大きく 3 段階に分けられる（ST9→ST21→ST9・21）。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 71 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 6.22m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.60m、玄室の中央幅 2.13m、奥壁幅 1.96m、前壁幅 1.68m、左側壁幅 1.49m、右側壁幅 1.40m、玄室底面から天井の高さ 1.06m を測る。床面積は約 3.0 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥行に対し、やや横長である。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆 U 字形を呈する。幅 0.65m、高さ 0.97m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.10m 前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁が縦方向、天井部が放射状である。

付属施設：奥壁・両側壁・前壁の壁際を巡る溝跡 1 を確認した。その規模は幅 0.06～0.10m・深さ 0.03～0.06m であり、玄門付近で途切れる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.77m、玄室側の幅 0.77m、墓前域側の幅 0.70m、玄門側の高さ 0.97m を測る。

立 面 形：逆 U 字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：溝跡 2 を確認した。その規模は幅 0.08～0.16m・深さ 0.03～0.07m であり、玄門付近から羨道の中心を通り、羨門墓前域側に位置する溝跡 3 と接続する。位置的にみて排水溝と考えられる。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に0.07mの段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ1.45m、幅0.16～0.43m、深さ0.04～0.13mの溝跡3を確認した。溝跡3は羨道から延びる溝跡2と接続する。溝跡3の上部で円礫7個・角礫23個が残存していた。礫は0.10×0.06×0.05m（0.5kg）～0.45×0.31×0.25m（67.6kg）、総重量390.4kgを測り、石材は頁岩20個、砂岩7個、アプライト花崗岩1個、花崗閃緑岩1個、花崗斑岩1個である（第19表5)。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。

溝跡3と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長3.85m、上幅1.3～2.5m、下幅1.20mを測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で1.6m前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は0.5m程度である。

付属施設：羨門付近右側（東側）壁面で小横穴1を確認した。小横穴1は、墓前域底面から0.25m上部の壁面に掘り込まれており、天井の一部が残存している。その規模は奥行1.00m、奥壁幅1.35m、入口幅1.00m、高さ0.40mを測る。底面は平坦であるが、奥壁から0.8m西の地点に0.04mの段差があり、この段差を境に底面幅が凸状に広がる。この地点で入口を閉塞していたとみられる。

【堆積層】　ST9横穴墓を覆う堆積層は細別12層・大別5層に分けた（第70図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別1・2層〕

大別1層（細別1～5層）はST9玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別2層（細別6層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別1層の細別5層と大別2層の層理面で遺物が面的に一定量出土した。この上面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。

大別1層の堆積後、ST9の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別3・4層〕

大別3層（細別7～9層）はST9の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別4層（細別10・11層）は羨道～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別4層は、横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面と玄室底面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別5層〕

大別5層（細別12層）はST9の墓前域に堆積する自然堆積層である。溝状の形状を呈する墓前域の壁際に堆積する均一層である。ST9造墓直後の堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

【出土遺物】土師器24点（2個体、破片22点)、須恵器21点（5個体、破片16点※うち3個体、破片8点は遺構間接合遺物)、玉製品16点、金属製品4点（その他不明小破片多数)、弥生土器破片2点が出土した（第19表1～4)。人骨等は残存していない。このうち、弥生土器は周辺から流入したものと考えられる。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる（第72・73図)。土師器小型坏1個体・鉢1個体、須恵器高台坏1個体・𤭯1個体・長頸壺2個体・甕1個体、勾玉4点・切子玉4点・管玉4点、ガラス製小玉1点・とんぼ玉1点・丸玉2点、鉄刀3点の合計26点を図示した（第75～78図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別1層（細別5層底面）出土遺物**、**B：大別3層・玄室底面出土遺物**の

2 群に分かれる。加えて、ST9 では、別の横穴墓（ST10・12）で破砕された須恵器破片の一部が ST9 に混入したと考えられる遺物 8 点（第 19 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C：墓前域大別 1 層の堆積途中（細別 2～5 層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST9 関連遺物は、古い順から B→A→C の 3 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層・玄室底面出土遺物〕（第 73・77・78 図）

大別 3 層（細別 8・9 層）のうち、羨道～墓前域に分布する細別 8・9 層の底面〔＝大別 4 層（細別 10・11 層）上面〕と玄室底面で出土した遺物である（前項 B に相当）。玉製品・金属製品が出土した。その内訳は、勾玉 4 点（第 77 図 9～11・13）・切子玉 4 点（第 77 図 1～4）・管玉 4 点（第 77 図 5～8）、ガラス製小玉 1 点（第 77 図 12）・丸玉 2 点（第 77 図 14・15）・とんぼ玉 1 点（第 77 図 16）、鉄刀 3 点（第 78 図 1～3）とこれらと同一個体とみられる破片多数である（第 19 表 1～4）。

遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれるが、勾玉 1 点とガラス製丸玉 2 点・とんぼ玉 1 点以外はすべて玄室内出土である（第 73 図）。墓前域出土の玉製品についても、本来は玄室内で使用されたものである可能性が高い。鉄刀は 3 点とも玄室左前壁コーナー付近にまとめられた形で出土した（写真図版 40-8）。これらの遺物は ST9 における初葬時に使用された遺物と推定される。

〔大別 1 層（細別 5 層底面）出土遺物〕（第 72・75・76 図）

大別 1 層（細別 1～5 層）のうち、墓前域に分布する細別 5 層の底面付近〔＝大別 2 層（細別 6 層）上面〕で出土した遺物である（前項 A に相当）。土師器・須恵器が出土した。その内訳は土師器小型坏 1 個体（第 75 図 1）・鉢 1 個体（第 75 図 2）、須恵器高台坏 1 個体（第 75 図 3）・瑞1 個体（第 75 図 6）・長頸壺 2 個体（第 75 図 4・5）・甕 1 個体（第 76 図 1）とこれらと同一個体とみられる破片である（第 19 表 1・2）。

多くの遺物は、破片の状態で羨門付近にまとまって出土した（第 72 図/写真図版 40-6）。このうち、図示した須恵器高台坏 1 個体（第 75 図 3）・瑞 1 個体（第 75 図 6）・甕 1 個体（第 76 図 1）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓から出土している。具体的には第 75 図 3 の高台坏（E-45）は ST21 出土遺物、第 75 図 6 の瑞（E-46）は ST32 出土遺物、第 76 図 1 の甕（E-135）は ST7・11・12 出土遺物と接合する（第 19 表 2、第 74 図）。ST21 と接合する高台坏(E-45)については「隣接遺構からの流入」「破砕遺物の散布」の両者の可能性が想定されるが、その他については遺構の位置関係からみて墓前域における須恵器の破砕散布行為の痕跡と考えられる。墓前域で破砕した須恵器破片は、ST9 から少なくとも 4 か所（ST7・11・12・32）の横穴墓に散布されたとみておきたい。

これらの遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。遺物は同一面上で出土していることから、ある程度の原位置を保った状態のまま埋没したものとみられる。この段階の ST9 については、堆積土の状況から玄室への入室が可能な状態だったと考えられる。玄室内では第 75 図 4 の長頸壺（E-6）と接合する破片 1 点が出土したのみであるが、この墓前祭祀は ST9 の追葬に関連するものとみておきたい。

なお、本段階は出土遺物の内容・年代からみて、ST21 と墓前域を共有していた段階と推定される。

〔大別 1 層（細別 2～5 層）出土遺物〕

墓前域に分布する大別 1 層(細別 2～5 層)の堆積土中と小横穴 1 の堆積土から出土した遺物である(前項 C に相当)。須恵器フラスコ形瓶・壺・長頸壺・甕の破片が出土した（第 19 表 2)。

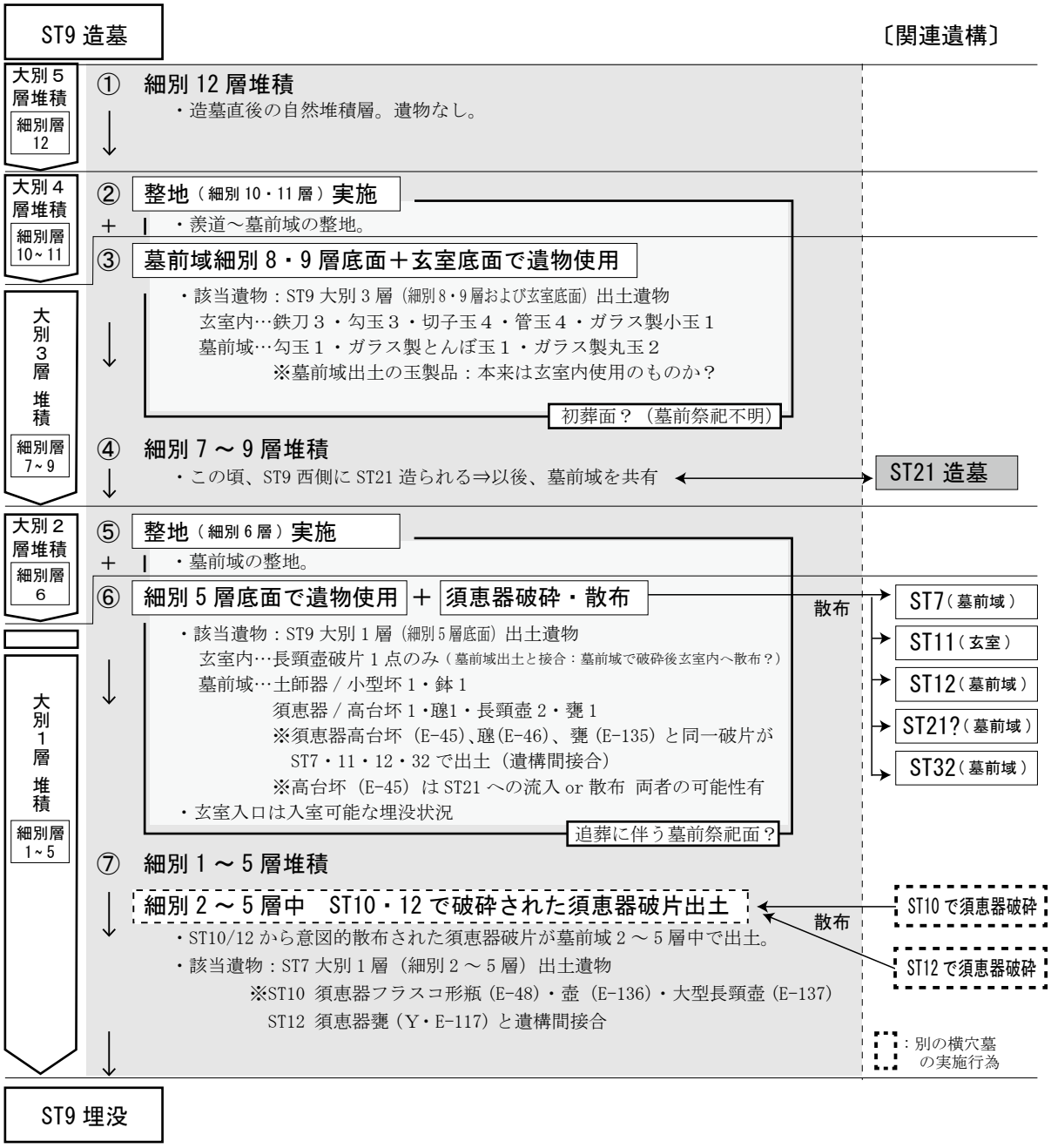
これらの須恵器破片は別遺構で破砕された後、ST9 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST10・12 由来の 2 者に分けられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST9 では、**ST10 由来の須恵器フラスコ形瓶(E-48／第 84 図 6)**と接合する破片が 1 点（体部破片)、**須恵器壺（E-136／第 84**

図 7) と接合する破片が 1 点 (体部破片)、**須恵器大型長頸瓶 (E-137／第 85 図 1)** と接合する破片が 5 点 (体部破片)、**ST12 由来の須恵器甕 (Y・E-117／非図化)** と接合する破片が 1 点 (体部破片) 出土した。ST9 から ST10 は直線距離で約 5m 東、ST12 は約 15m 東の地点に位置する。いずれも ST9 に隣接もしくは同斜面上に位置する横穴墓である。位置的にみて、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別 1 層堆積途中の段階に「ST10・12 から ST9 墓前域への須恵器の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

【まとめ】

ST9 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST9 造墓・使用・埋没の経過〕



第19表　ST9横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	土師器 坏 小型坏	土師器 鉢	土師器 小計	須恵器 長頸壺	須恵器 瓶類	須恵器 甕	須恵器 小計	弥生土器 甕	弥生土器 小計
墓前域	－	検出面	個									
			破	12 (85)		12 (85)		2 (5)		2 (5)	1 (20)	1 (20)
	1	2層	個									
			破								1 (15)	1 (15)
		3層	個									
			破	3 (40)		3 (40)			4 (20)	4 (20)		
		5層	個	1 (55)	1 (200)	2 (255)	1 (655)			1 (655)		
			破	7 (70)		7 (70)			1 (20)	1 (20)		
		5層 8層上面(玄室)	個				1 (100)			1 (100)		
			破									
	2	6層	個									
			破					1 (5)		1 (5)		
総合計	個体数(重量)			1 (55)	1 (200)	2 (255)	2 (755)			2 (755)		
	破片数(重量)			22 (195)		22 (195)		3 (10)	5 (40)	8 (50)	2 (35)	2 (35)
	総重量			(250)	(200)	24 (450)	(755)	(10)	(40)	10 (805)	(35)	2 (35)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	高台坏	1 (375)	◆ST9　5層(墓前域・羨門付近) ◆ST21　4層(墓前域)	ST9	★ST9:3点(破片大) ◆ST21:2点	E 45	第75図3
須恵器	瓶	1 (365)	◆ST9　5層(墓前域・羨門付近) ◆ST32　14・15層(墓前域)	ST9	★ST9:7点 ◆ST32:1点	E 46a・b	第75図6
須恵器	甕	1 (19,875)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST9　2～5層(墓前域・羨門付近) ◆ST11　3層(玄室) ◆ST12　16層上半部(墓前域)	ST9	◆ST7:1点 ★ST9:137点 ◆ST11:1点 ◆ST12:1点	E 135	第76図1
須恵器	フラスコ形瓶	1 (490)	◆ST9　4・5層・検出面(墓前域) ◆ST10　7層(墓前域) ◆ST21　4層(墓前域)	ST10	◆ST9:1点(破片小) ★ST10:2点(破片大) ◆ST21:1点(破片小)	E 48	第84図6
須恵器	壺	1 (2,260)	◆ST9　検出面(墓前域) ◆ST10　7・8層(墓前域)	ST10	◆ST9:1点 ★ST10:47点	E 136	第84図7
須恵器	大型長頸壺	1 (3,795)	◆ST9　検出面(墓前域) ◆ST10　6・7・8層(墓前域)	ST10	◆ST9:5点 ★ST10:57点	E 137a	第85図1
須恵器	甕	1 (540)	◆ST9　小横穴1　堆積土 ◆ST12　8層・検出面(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST12	◆ST9:1点 ★ST12:4点 ◆ST20:1点　※E-139甕(ST12主体)と類似	Y・E 117	－

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST9出土須恵器の総数
(表19-1)遺構単独出土　2個体＋破片8点
＋
(表19-2)遺構間接合遺物　3個体＋破片8点　＝ 21 点

3. 玉製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	玉製品 石製 勾玉	石製 切子玉	石製 管玉	石製 小計	ガラス製 とんぼ玉	ガラス製 丸玉	ガラス製 小玉	ガラス製 小計
玄室	－	底面	個	3 (22.9)	4 (52.2)	4 (54.8)	11 (129.9)			1 (0.035)	1 (0.035)
			破								
墓前域	3	11層上面	個	1 (10.1)			1 (10.1)	1 (3.458)	2 (1.835)		3 (5.293)
			破								
総合計	個体数(重量)			4 (33.0)	4 (52.2)	4 (54.8)	12 (140.0)	1 (3.458)	2 (1.835)	1 (0.035)	4 (5.328)
	破片数(重量)										
	総重量			(33.0)	(52.2)	(54.8)	12 (140.0)	(3.458)	(1.835)	(0.035)	4 (5.328)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

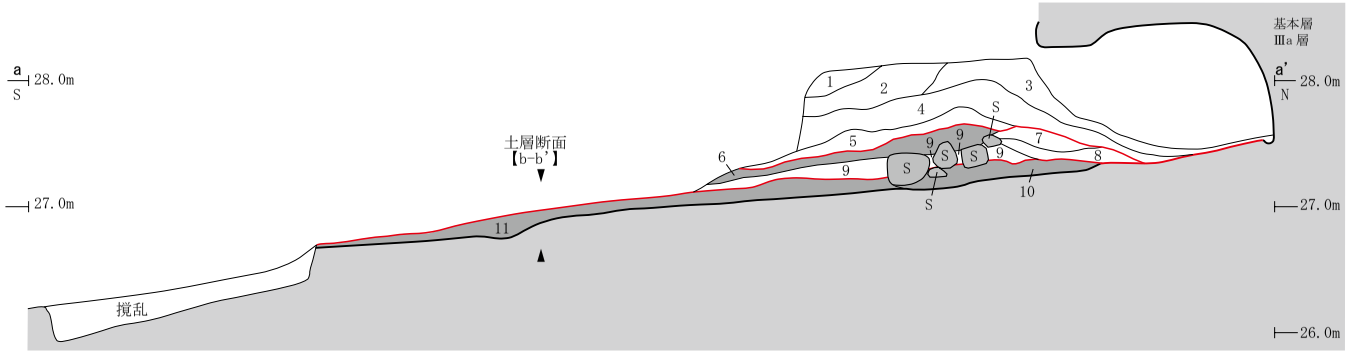
4. 金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載/非掲載	金属製品 鉄刀	不明鉄製品	小計
玄室	－	底面	掲	3		3
			非掲		1+破片多数	1 破片多数
器種別総合計	掲載遺物点数			3		3
	非掲載遺物点数				1＋破片多数	1 ＋破片多数
	総点数			3	1＋破片多数	4 ＋破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。
(ST9出土の不明小片の重量は21.0g)

5. 閉塞石観察表

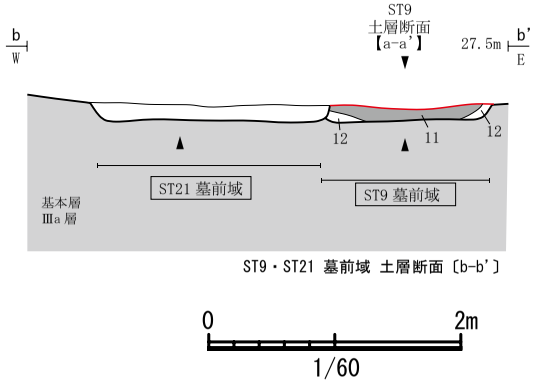
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	角礫	10	6	5	0.5	頁岩	円礫	20	15	13	11.2
頁岩	円礫	12	7	4	0.7	頁岩	円礫	27	22	15	13.0
頁岩	角礫	18	10	6	1.0	頁岩	角礫	20	20	15	13.6
頁岩	角礫	20	10	7	1.4	頁岩	角礫	35	27	10	16.1
頁岩	角礫	13	12	7	1.6	頁岩	角礫	50	30	20	60.7
頁岩	角礫	12	10	8	1.7	砂岩	円礫	28	17	5	4.8
頁岩	角礫	12	10	6	1.9	砂岩	円礫	25	17	6	5.6
頁岩	角礫	23	10	6	2.5	砂岩	角礫	24	14	10	5.8
頁岩	角礫	15	15	14	5.7	砂岩	角礫	20	17	10	6.7
頁岩	角礫	18	18	8	5.7	砂岩	角礫	22	16	12	7.3
頁岩	角礫	20	18	15	7.4	砂岩	円礫	36	35	21	61.7
頁岩	角礫	24	18	10	7.9	砂岩	角礫	45	31	25	67.6
頁岩	角礫	25	16	14	10.1	アプライト花崗岩	円礫	30	23	20	28.7
頁岩	角礫	20	20	13	10.8	花崗閃緑岩	角礫	16	8	5	1.1
頁岩	角礫	25	20	15	11.2	花崗斑岩	角礫	30	26	16	16.4
						合計:30点／重量(kg)＝					390.4



ST9 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕

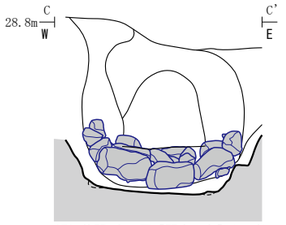
【土層図中の表記】
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S　：礫
- ：各土層断面の交点

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子含む。地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。		
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒子含む。玄室内堆積土は泥化。		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。		
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子少量含む。遺物多く出土。		
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子・地山ブロック多く含む。	2	人為堆積層（整地層）
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック(小)含む。	3	自然堆積層
8	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック(小)含む。		
9	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック(小)、地山粒子微量含む。		
10	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック(小)含む。11層と類似。	4	人為堆積層（整地層）
11	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山ブロック(大)・(小)、炭化物片含む。		
12	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	地山ブロック少量含む。	5	自然堆積層

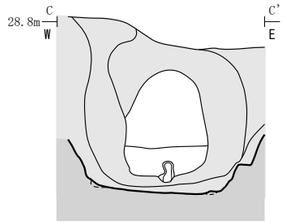


ST9・ST21 墓前域 土層断面〔b-b'〕

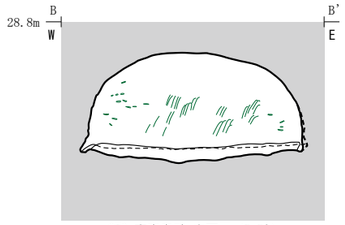
第 70 図　ST9 横穴墓 土層断面図



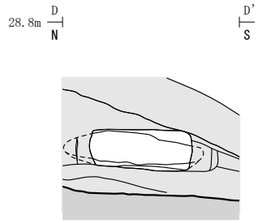
ST9 羨門 立面図【閉塞石有】(C-C')



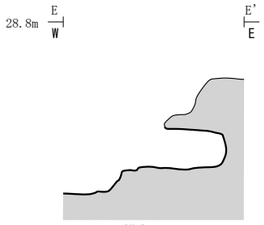
ST9 羨門 立面図 (C-C')



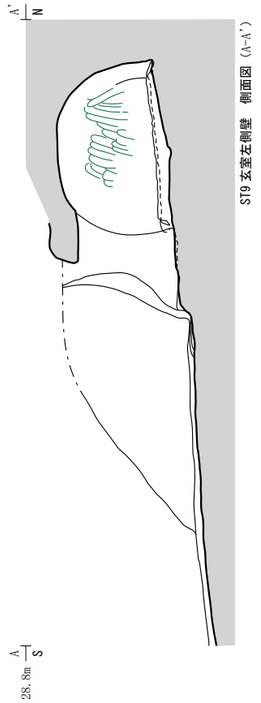
ST9 玄室奥壁 立面図 (B-B')

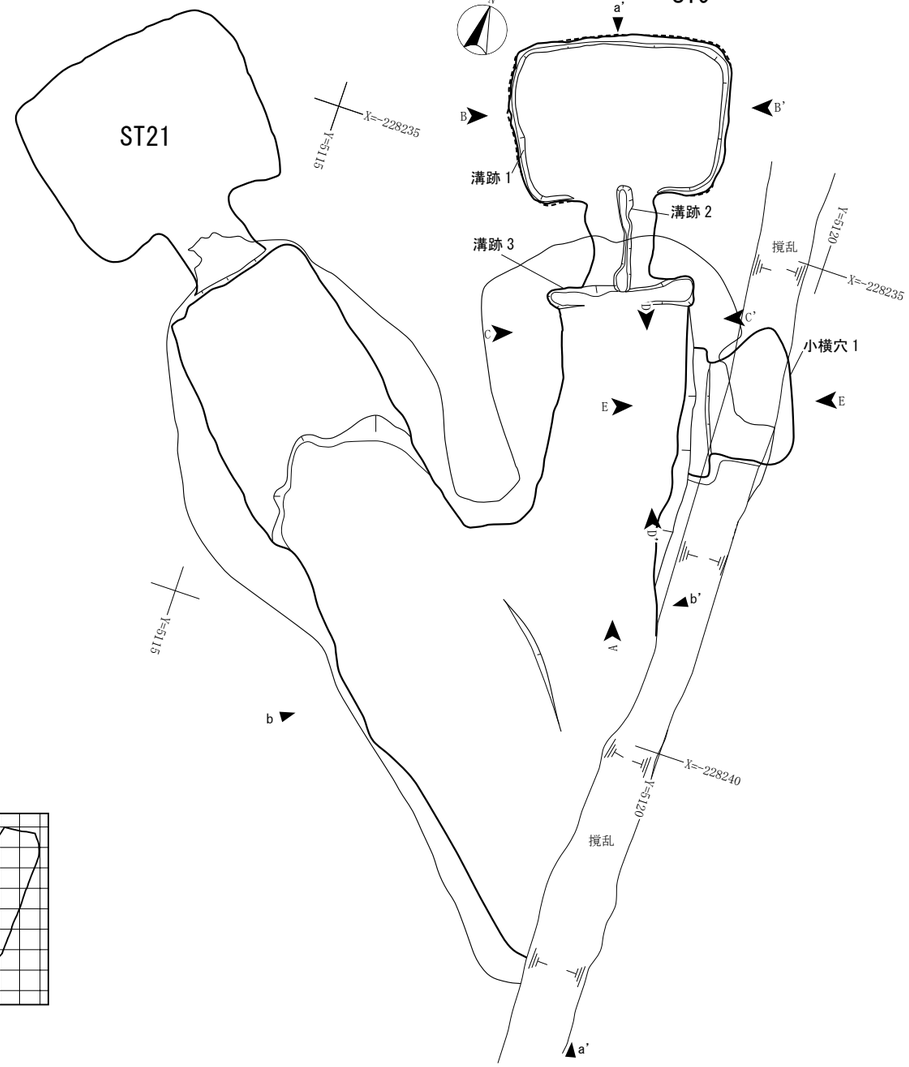


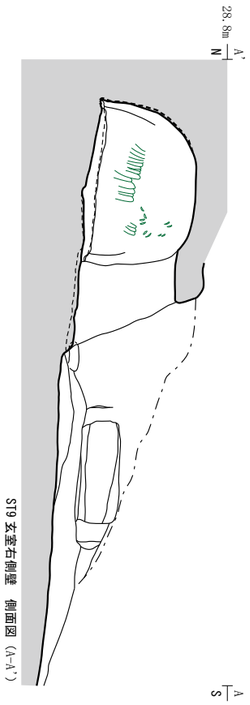
ST9 小横穴 1 立面図 (D-D')

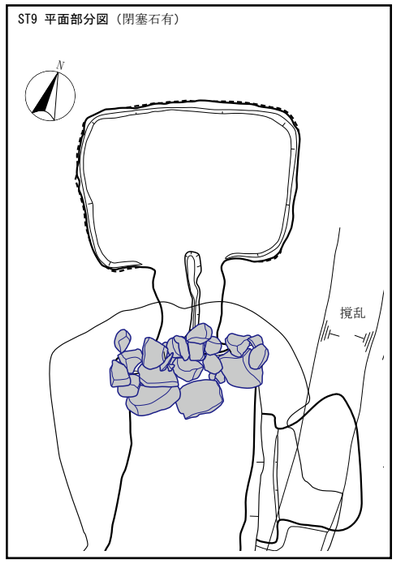


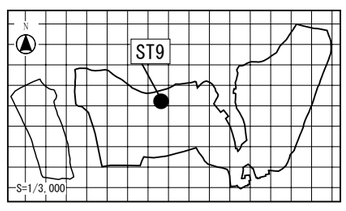
ST9 小横穴 1
エレベーション図 (E-E')

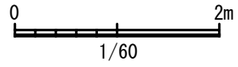


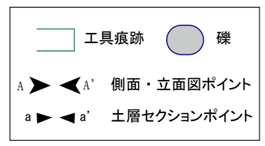




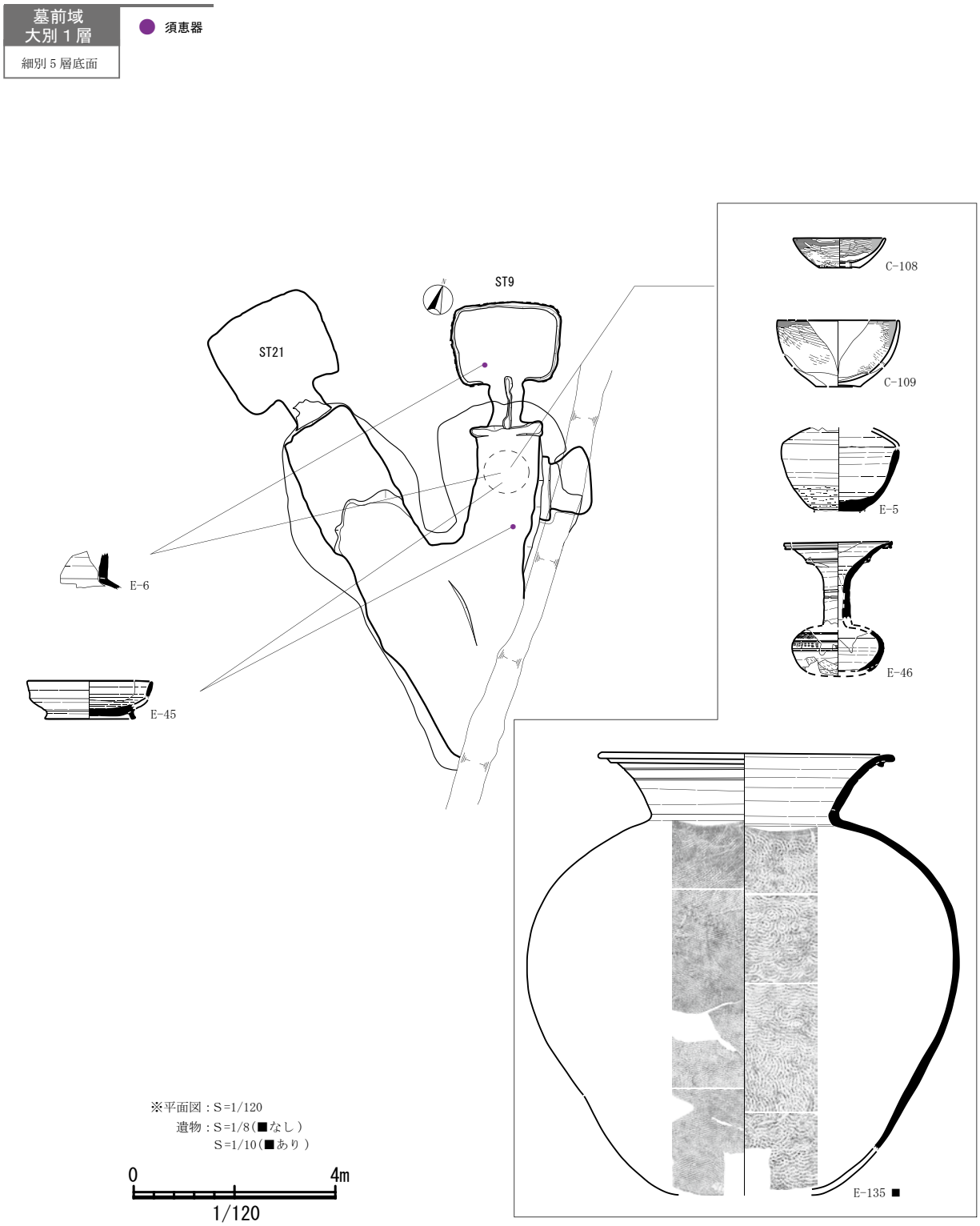




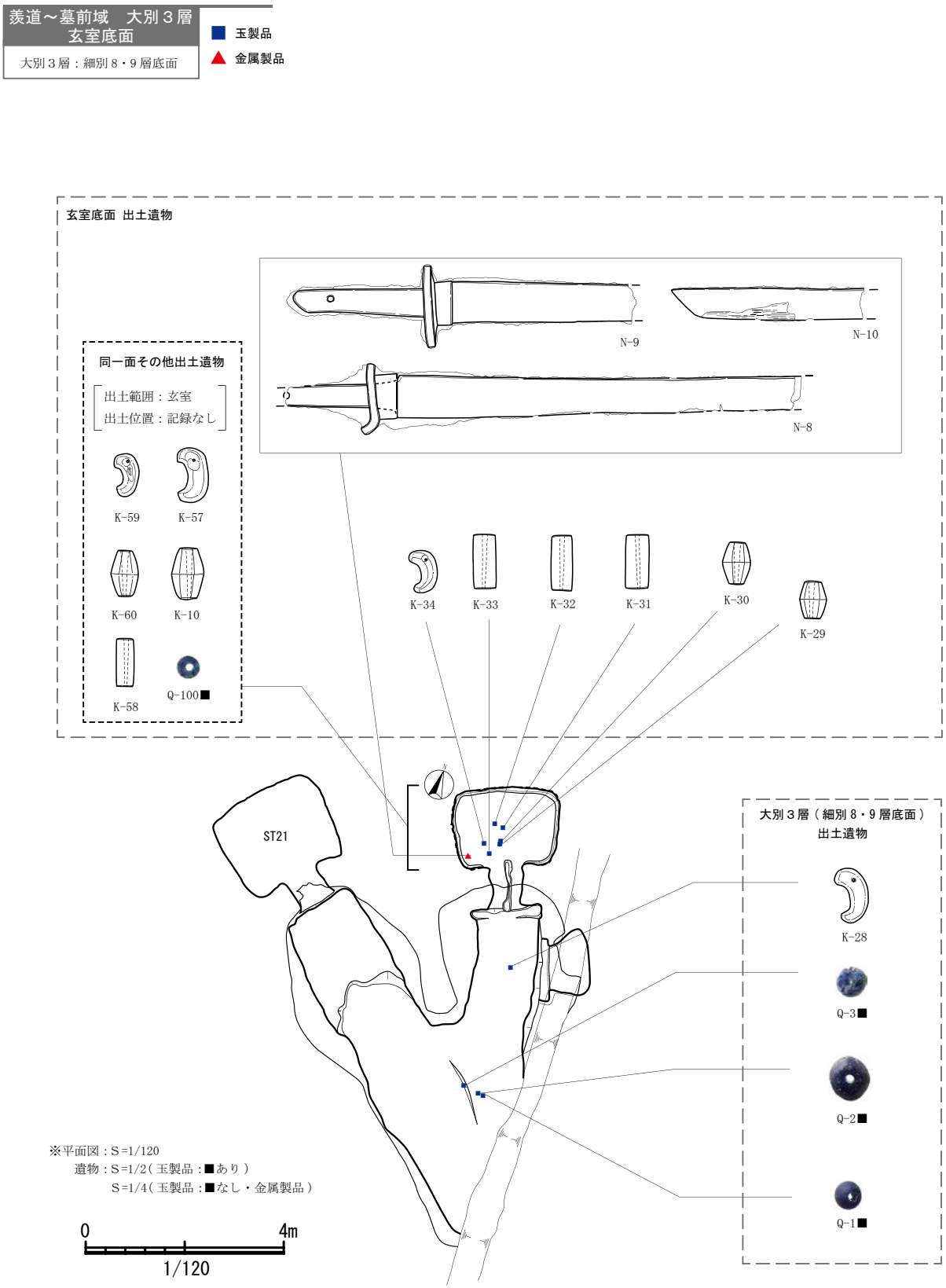




第71図　ST9 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

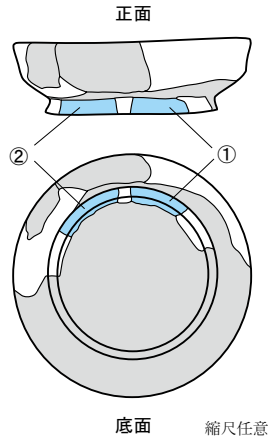


第72図　ST9 横穴墓 遺物出土状況図（1）－大別１層－



第73図　ST9 横穴墓 遺物出土状況図 (2) ― 大別３層・玄室底面―

E-45　須恵器 高台坏（第 75 図 3）

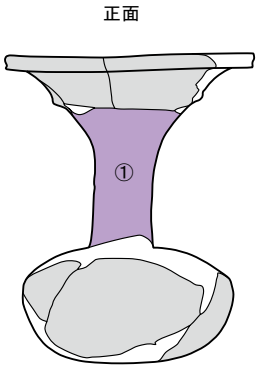


縮尺任意

塗り注釈
- ST9
- ①② ST21
- 白抜 欠損箇所

出土層位
- ST9　［墓前域(羨門付近)］5層
- ST21　［墓前域］4層

E-46(a・b)　須恵器 壺（第 75 図 6）

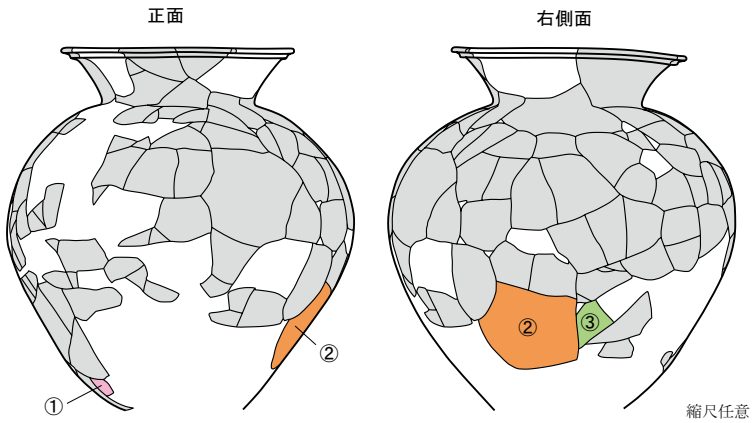


縮尺任意

塗り注釈
- ST9
- ① ST32
- 白抜 欠損箇所

出土層位
- ST9　［墓前域(羨門付近)］5層
- ST32　［墓前域］14・15層

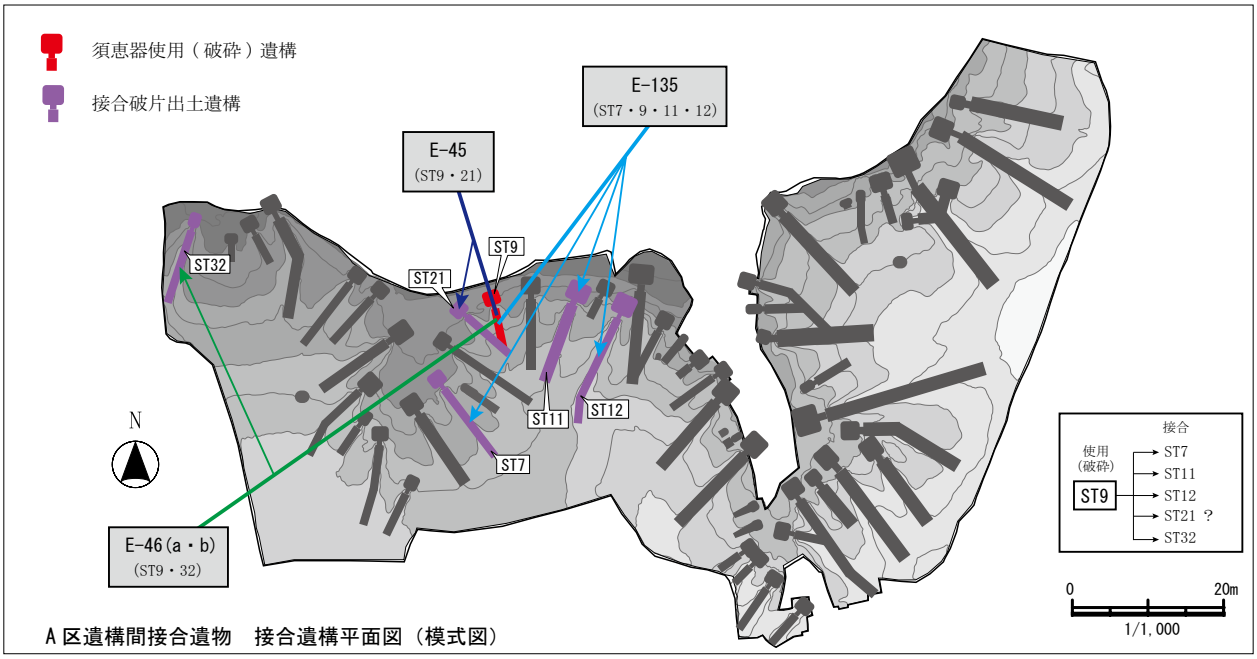
E-135　須恵器 甕（第 76 図 1）



縮尺任意

塗り注釈
- ST9
- ① ST7
- ② ST11
- ③ ST12
- 白抜 欠損箇所

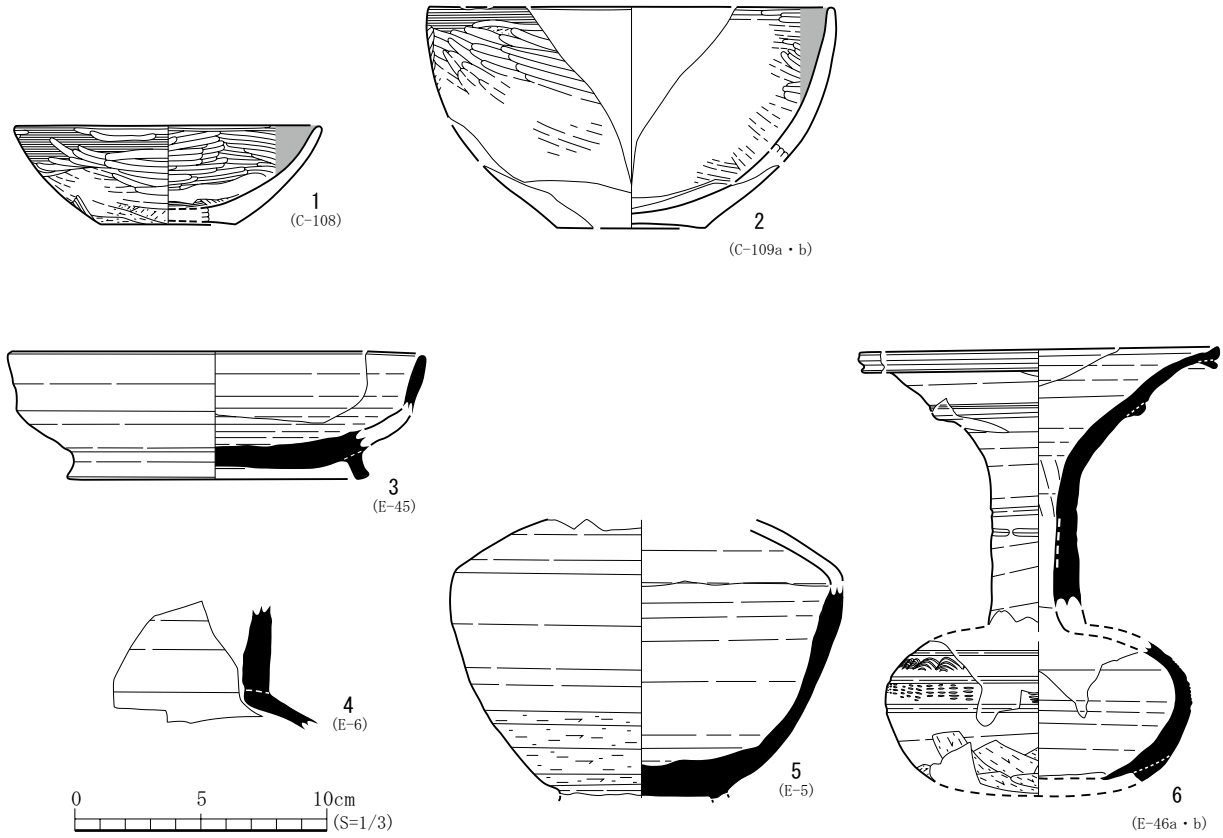
出土層位
- ST9　［墓前域(羨門付近)］2～5層
- ST7　［墓前域］8層
- ST11　［玄　室］3層
- ST12　［墓前域］16層上半部



A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第74図　ST9 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

墓前域　大別１層

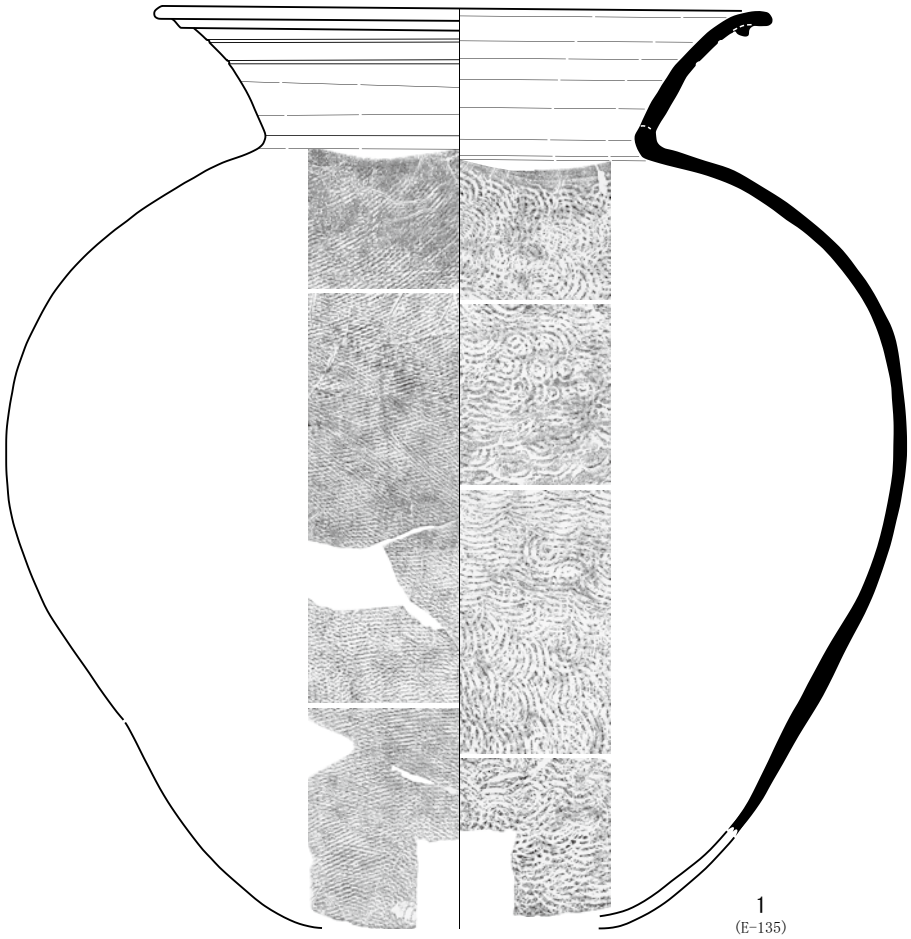


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	5層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.0)cm・器高3.9cm・底径(10.3)cm・器厚0.4～0.9cm	C-108	195-7
2	墓前域	5層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 底部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(16.0)cm・器高(8.8)cm・底径6.0cm・器厚0.4～1.2cm 【特記事項】部分的に赤彩残存・C-109a(口縁部～体部)・C-109b(体部～底部)	C-109 a・b	195-13 195-14
3	[ST9] 墓前域 (羨門付近) ＋ [ST21]墓前域	◆ST9　5層 ◆ST21　4層	須恵器 高台坏	◎遺構間接合　**ST9(主体)**＋ST21 【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】口径16.3cm・器高5.1cm・底径11.8cm・器厚0.4～0.7cm	E-45	219-3
4	玄室 ＋ 墓前域	5層(墓前域) 8層上面(玄室)	須恵器 長頸壺	【技法】内外面：ロクロナデ 【法量】器厚0.5～0.9cm	E-6	224-3
5	墓前域	5層	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り 底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付(高台欠損) 内面：ロクロナデ 【法量】残存高11.1cm・器厚0.5～0.9cm	E-5	224-4
6	[ST9] 墓前域 (羨門付近) ＋ [ST32]墓前域	◆ST9　5層 ◆ST32　14層 15層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST9(主体)**＋ST32 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・突帯貼付・沈線(2条)・口縁端部つまみ上げ 体部ロクロナデ→手持ちヘラ削り・沈線・櫛描波状文・櫛描列点文 内面：口頸部ロクロナデ／絞り目・体部ロクロナデ／ナデ 【法量】口径14.2cm・器高(17.7)cm・器厚0.3～1.0cm・体部最大径(12.2)cm 【特記事項】E-46a(口頸部)・E-46b(体部)	E-46 a・b	224-5 224-6

第75図　ST9 横穴墓 出土遺物 (1) －土器類－

墓前域　大別１層

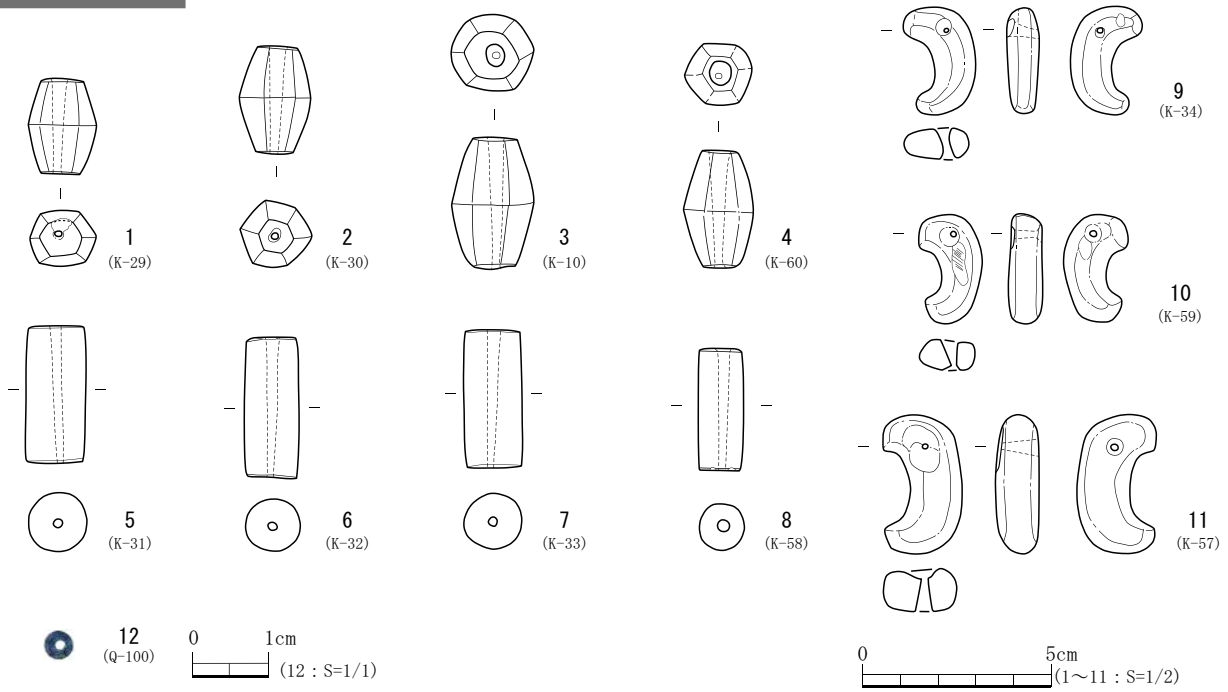


0　10cm
(S=1/6)

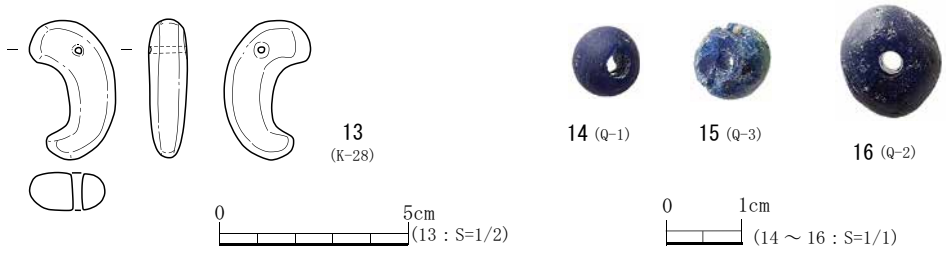
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	[ST7]墓前域 ＋ [ST9] 墓前域 (羨門付近) ＋ [ST11] 玄室 ＋ [ST12]墓前域	◆ST7　8層 ◆ST9　2～5層 ◆ST11　3層 ◆ST12　16層上半部	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST9(主体)**＋ST7＋ST11＋ST12 【技法】外面：口頸部ロクロナデ→沈線・体部上位＋下位平行タタキ 体部中位平行タタキ→ハケメ 内面：口頸部ロクロナデ・体部上位＋下位当て具痕(同心円) 体部中位当て具痕(同心円)→ナデ 【法量】口径47.9㎝・残存高73.0㎝・器厚0.7～1.6㎝ 【特記事項】体部下位2か所に坏？付着	E-135	241-1 268-14 268-15

第76図　ST9 横穴墓 出土遺物 (2) －土器類－

玄室底面



墓前域　大別３層

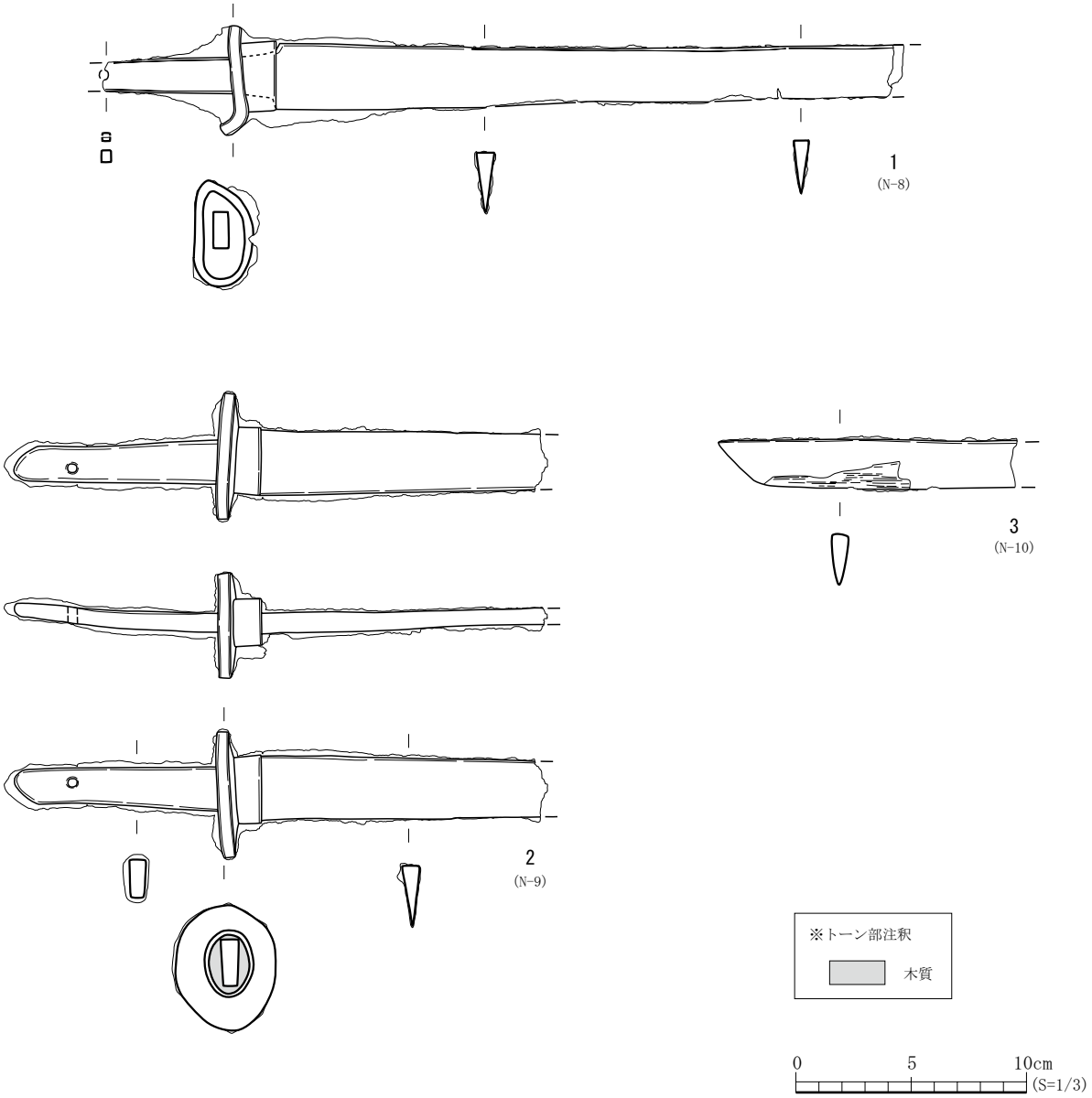


No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
1	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	2.50	1.80	1.00	1.50	－	0.15～0.40	9.8	K-29	276-10
2	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	2.90	1.90	1.00	1.80	－	0.20～0.40	11.8	K-30	276-11
3	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	3.40	2.20	1.15	1.90	－	0.20～0.40	18.3	K-10	276-9
4	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	3.10	1.80	0.85	1.65	－	0.20～0.50	12.3	K-60	276-12
5	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.65	1.60	－	－	－	0.15～0.30	16.9	K-31	275-1
6	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.80	1.50	－	－	－	0.15～0.30	13.3	K-32	275-2
7	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.70	1.50	－	－	－	0.15～0.35	15.9	K-33	275-3
8	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.20	1.20	－	－	－	0.15～0.35	8.7	K-58	275-4
9	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	2.85	1.90	1.05	0.85	－	0.20～0.45	5.6	K-34	274-3
10	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	2.90	1.70	1.05	0.90	－	0.15～0.45	5.3	K-59	274-4
11	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	3.70	2.10	1.40	1.15	－	0.15～0.45	12.0	K-57	274-5
13	墓前域	11層上面	石製品	勾玉	緑色片岩	3.70	2.30	1.20	1.05	－	0.20	10.1	K-28	274-2

No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (mm)	長 (mm)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
12	玄室	底面	ガラス製品 小玉	鋳型	－	－	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	3.7	1.9	0.035	Q-100	278-5
14	墓前域	11層上面	ガラス製品 丸玉	巻付	ソーダ	－	同心円方向巻き付け	－	紺	9.3	7.7	0.779	Q-1	278-3
15	墓前域	11層上面	ガラス製品 丸玉	引伸	ソーダ	－	孔平行	－	紺	10.0	7.7	1.056	Q-3	278-4
16	墓前域	11層上面	ガラス製品 とんぼ玉	融着	ソーダ	－	－	－	紺	14.2 16.1	11.6	3.458	Q-2	278-2

第77図　ST9 横穴墓 出土遺物 (3) －玉製品－

玄室底面



No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	玄室	底面	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長34.6cm　[刃部]残存長27.0cm・幅2.8cm　[茎部]残存長7.6cm [鎺]長径3.0cm・幅1.6cm　[鐔]長径4.6cm・短径2.6cm・厚さ0.6cm 【特記事項】均等両関(斜角)？・喰出鐔・目釘孔1か所 【残存部位】刀身・鎺・鐔	N-8	305-3
2	玄室	底面	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長23.0cm　[刃部]残存長12.4cm・幅2.8cm　[茎部]長さ10.6cm [鎺]長径3.0cm・短径2.0cm・幅1.2cm [鐔]長径5.4cm・短径4.3cm・厚さ0.6cm 【特記事項】両関？・板鐔(無窓鐔)・目釘孔1か所・木質残存(柄) 柄木は鎺内部に至る 【残存部位】刀身・鎺・鐔・柄木	N-9	305-4
3	玄室	底面	金属製品	鉄刀	【法量】残存長13.0cm・幅2.1cm 【特記事項】カマス切先・木質残存(鞘)　【残存部位】刃部・鞘木	N-10	305-5

第78図　ST9 横穴墓 出土遺物 (4) －金属製品－

10 号横穴墓（ST10）（第 79～87 図、第 20 表、第 4 分冊 写真図版 42～44）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 26～28m の丘陵南斜面に位置する。同斜面の西側には ST9、東側には ST11 が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。羨門から玄室までの天井が残存し、羨門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト・泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 79 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 12.10m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.34m、玄室の中央幅 2.60m、奥壁幅 2.02m、前壁幅 2.20m、左側壁幅 2.36m、右側壁幅 2.02m、玄室底面から天井の高さ 1.33m を測る。床面積は約 5.7 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆 U 字形を呈する。幅 0.75m、高さ 0.94m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.08～0.09m 前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁が縦方向、天井部が放射状である。

付属施設：奥壁・両側壁・前壁の壁際を巡る溝跡 1 を確認した。その規模は幅 0.08～0.17m・深さ 0.02～0.04m であり、羨道まで延びる。位置的にみて排水溝と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の玄門から墓前域の境までの奥行 0.92m、玄門側の幅 0.75m、羨門側の幅 0.50m、玄門側の高さ 0.94m、羨門側の高さ 0.93m を測る。

立 面 形：逆 U 字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：右壁に幅 0.08m 前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は縦方向である。

付属施設：羨道底面中央で玄門から続く溝跡 1 を確認した。羨道範囲内での規模は幅 0.10～0.12m、深さ 0.02～0.04m、長さ 0.85m を測り、底面は玄門側が高く、墓前域側に向かって傾斜する。溝跡 1 は墓前域側で溝跡 2 と接続する。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.10m の段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ 1.60m、幅 0.25～0.30m、深さ 0.02～0.04m の溝跡 2 を確認した。その溝上と墓前域に、0.16×0.12×0.10m（3.4kg）～0.45×0.30

×0.20m（44.4kg）の角礫３個・円礫14個の合計17個の礫（総重量331.4kg）が残存しており、溝上面から高さ0.2～0.4mまで積み上げられた状態で確認した。石材は頁岩10個、砂岩６個、ひん岩１個である（第20表5)。これらは位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　模：羨門から墓前域の末端までの長さ8.84m、上幅1.3～2.5m、下幅0.95～1.73mを測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で0.1m前後、羨門付近で1.2m前後残存している。

形　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は0.8m程度である。

【堆積層】　ST10横穴墓を覆う堆積層は細別15層・大別４層に分けた（第80図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別１層〕

大別１層（細別1～8層）はST10玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層の下層（細別7・8層）を中心に一定量の遺物が面的に出土した。この上面で何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。大別１層底面以下には整地層が認められないことから、大別２層堆積後の窪地上面を利用した可能性が高い。

大別１層の堆積後、ST10の玄室入口の大部分が埋没したと考えられる。

〔大別２・３層〕

大別２層（細別9～11層）はST10の羨道～墓前域に堆積する自然堆積層、大別３層（細別12～14層）は羨道～墓前域を中心に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別３層は、大別４層の上面及び墓前域掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で遺物が一定量出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別４層〕

大別４層（細別15層）はST10墓前域に堆積する自然堆積層で、造墓直後の堆積層とみられる。遺物は出土していない。

【出土遺物】土師器８点（5個体、破片３点)、須恵器12点（7個体、破片５点※うち４個体は遺構間接合遺物)、玉製品13点、金属製品12点、弥生土器２点が出土した。このうち、弥生土器は周辺から流入したものと考えられる。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる（第81・82図)。土師器坏５個体、須恵器蓋２個体・短頸壺１個体・フラスコ形瓶２個体・大型長頸壺１個体・壺１個体、勾玉４点・切子玉３点・棗玉２点・ガラス製小玉４点、刀子１点・鉄鏃１点・鉄斧１点の合計28点を図示した（第84～87図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別１層（細別８層底面）出土遺物**、**B：大別２層・玄室底面出土遺物**の２群に分かれる。その新旧関係はBが古く、Aが新しい。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別２層・玄室底面出土遺物〕（第82・86・87図）

大別２層（細別9～11層）のうち、墓前域に分布する細別9～11層の底面〔＝大別３層（細別12・13層）上面〕と玄室底面で出土した遺物である（前項Bに相当)。土師器・須恵器・玉製品・金属製品が出土した。その内訳は、土師器坏１個体（第86図1)、須恵器蓋２個体（第86図2・3)・短頸壺１個体（第86図4)、勾玉４点（第87図8～11)・切子玉３点（第87図7・12・13)・棗玉２点（第87図5・6)・ガラス製小玉３点（第87図2～4)、鉄鏃１点（第86図7）と鉄鏃破片１点・不明鉄製品７点である（第20表1～4)。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれる（第82図)。

玄室では玉製品のみが出土した。勾玉4点・切子玉1点・棗玉2点・ガラス製小玉3点である。玉製品は玄室中央左側の地点で出土しているが、その分布にまとまりがなく、原位置を保っていないと考えられる。墓前域で出土した切子玉2点についても、本来は玄室内で使用されたものの可能性が高い。後述する大別1層の墓前域出土遺物に玉製品が含まれないことから、これらの玉製品は初葬時に使用された遺物と想定しておきたい。

墓前域では羨門付近で土師器・須恵器・鉄製品が出土した。土師器坏1個体、須恵器蓋2個体・短頸壺1個体、切子玉2点、鉄鏃1点と不明鉄製品である。このうち、土師器・須恵器はほぼ完形の状態で出土しており、坏は逆位、須恵器短頸壺と蓋が正位の状態で出土した（第82図、写真図版43-7)。須恵器蓋は短頸壺の蓋と考えられる。鉄製品についても土師器・須恵器付近で出土している。切子玉については前述のとおりである。墓前域出土の土師器・須恵器・金属製品は、出土状況からみて、原位置を保った状態での出土と考えられ、墓前祭祀に伴う遺物と判断される。これらの遺物は、ST10の初葬に伴う墓前祭祀で使用した遺物と推定される。

〔大別１層（細別８層底面）出土遺物〕（第81・83～87図）

大別1層（細別1～8層）のうち、墓前域に分布する細別8層の底面付近で出土した遺物である（前項Aに相当)。土師器・須恵器・玉製品・鉄製品が出土した。その内訳は土師器坏4個体（第84図1～4)、須恵器フラスコ形瓶2個体（第84図5・6)・壺1個体（第84図7)・大型長頸壺1個体（第85図1)、ガラス製小玉1点（第87図1)、刀子1点（第86図5)・鉄斧1点（第86図6）と図示できなかった須恵器瓶類・甕の破片である（第20表1・2)。このうち、ガラス製小玉1点については、下層の大別2層の段階に玄室内で使用されたものが本層に流入した可能性がある。

遺物の出土状況としては、土師器坏4個体については正位の状態でまとめられた形で出土したが、須恵器類は破片で散在していた状態で出土している（第81図・写真図版43-4～6)。このうち、図示した須恵器フラスコ型瓶2個体・壺1個体・長頸壺1個体については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓から出土している。具体的には第84図5のフラスコ形瓶（E-47）はST11出土遺物、は第84図6のフラスコ形瓶（E-48）はST9・21出土遺物、第84図7の壺（E-136）はST9出土遺物、第85図1の大型長頸壺（E-137）はST9出土遺物と接合する（第20表2、第83図)。これらは墓前域における須恵器瓶類の破砕散布行為の痕跡と考えられる。墓前域で破砕した須恵器破片は、ST10から少なくとも3か所(ST9・11・21）の横穴墓に散布されたと推定される。

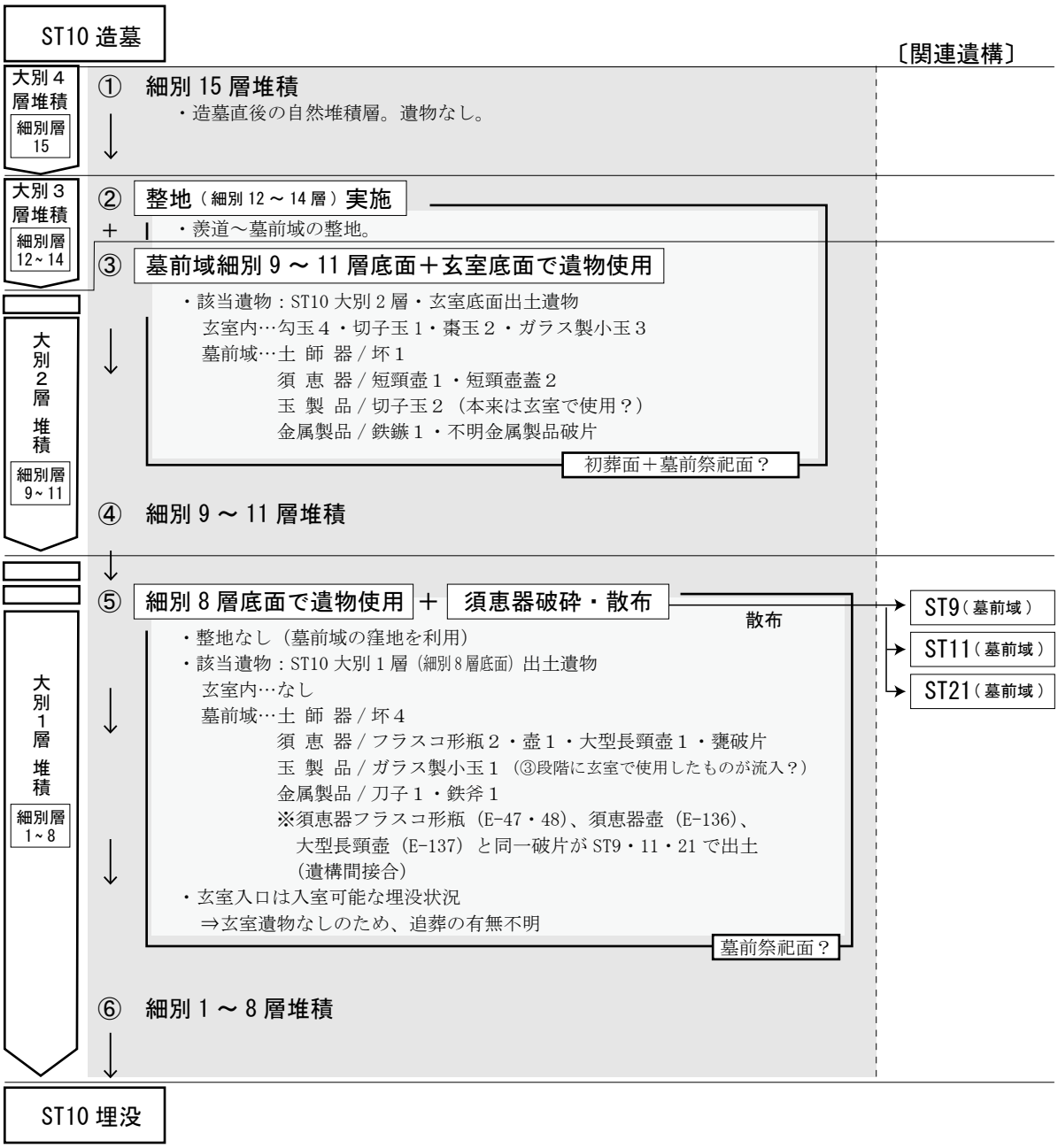
本層出土の遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。遺物は同一面上で出土しており、ある程度の原位置を保った状態のまま埋没したものとみられる。遺物出土状況から、本段階のST10においては、土師器類は破砕せず、須恵器のみを破砕する祭祀を行っていたと考えられる。

堆積土の状況から、この段階のST10については、玄室への入室が可能な状態だったとみられる。ただし、玄室内では同時期の遺物が出土していないため、この墓前祭祀が追葬に伴うものかは判断が難しい。一方で、大別1層底面以下には整地層が認められないことから、大別2層堆積後の窪地上面をそのまま利用して祭祀行為が実施されたことは確実である。このように、祭祀時の玄室内や墓域の清掃等に伴う土砂の掻き出し・整地などの痕跡が認められない点から、本面で実施された祭祀は追葬と関連しないものだった可能性も十分想定できる。いずれにせよ、両者を判別する根拠が不足しており、現段階では、本面で実施された墓前祭祀については「追葬に伴うもの」「追葬に関連しないもの」の両者の可能性を想定しておきたい。

【まとめ】

ST10 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST10 造墓・使用・埋没の経過〕



第20表　ST10横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器		須恵器					弥生土器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 個体/破片	坏	小計	蓋	短頸壺	瓶類	甕	小計	甕	小計
玄室	－	3層	個									
			破	1 (5)	1 (5)							
墓前域	－	検出面	個									
			破	2 (25)	2 (25)							
	1	7層	個									
			破						2 (10)	2 (10)	2 (10)	2 (10)
		7･8層	個									
			破					1 (5)		1 (5)		
		8層	個	4 (610)	4 (610)							
			破					1 (35)	1 (35)	2 (70)		
	2	13層上面	個	1 (340)	1 (340)	2 (145)	1 (305)			3 (450)		
			破									
総合計		個体数(重量)		5 (950)	5 (950)	2 (145)	1 (305)			3 (450)		
		破片数(重量)		3 (30)	3 (30)			2 (40)	3 (45)	5 (85)	2 (10)	2 (10)
		総重量		(980)	8 (980)	(145)	(305)	(40)	(45)	8 (535)	(10)	2 (10)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構･層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	フラスコ形瓶	1 (535)	◆ST10 7･8層(墓前域) ◆ST11 5層上面(墓前域)	ST10	★ST10:12点 ◆ST11:1点	E 47	第84図5
須恵器	フラスコ形瓶	1 (490)	◆ST9 4･5層･検出面(墓前域) ◆ST10 7層(墓前域) ◆ST21 4層(墓前域)	ST10	◆ST9:1点(小破片) ★ST10:2点(大破片) ◆ST21:1点(小破片)	E 48	第84図6
須恵器	壺	1 (2,260)	◆ST9 検出面(墓前域) ◆ST10 7･8層(墓前域)	ST10	◆ST9:1点 ★ST10:47点	E 136	第84図7
須恵器	大型長頸壺	1 (4,915)	◆ST9 検出面(墓前域) ◆ST10 6･7･8層(墓前域)	ST10	◆ST9:5点 ★ST10:57点	E 137a･b	第85図1

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1 検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

※ST10出土須恵器の総数
(表20-1)遺構単独出土 3個体＋破片5点
＋
(表20-2)遺構間接合遺物 4個体 = 12 点

3. 玉製品

種別				玉製品					
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 個体/破片	石製 勾玉	石製 切子玉	石製 棗玉	小計	ガラス製 小玉	小計
玄室	－	底面	個	4 (33.9)	1 (17.3)	2 (2.8)	7 (54.0)	3 (0.102)	3 (0.102)
			破						
墓前域	1	7層	個					1 (0.262)	1 (0.262)
			破						
	2	13層上面	個		2 (20.4)		2 (20.4)		
			破						
合計		個体数(重量)		4 (33.9)	3 (37.7)	2 (2.8)	9 (74.4)	4 (0.364)	4 (0.364)
		破片数(重量)							
		総重量		(33.9)	(37.7)	(2.8)	9 (74.4)	(0.364)	4 (0.364)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

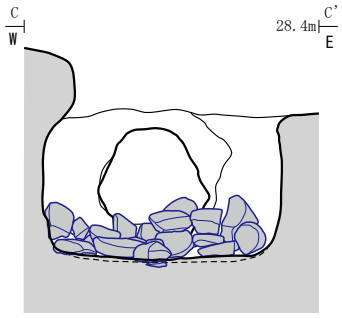
4. 金属製品

種別				金属製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 掲載/非掲載	刀子	袋状鉄斧	鉄鏃	不明鉄製品	小計
墓前域	1	8層	掲	1	1			2
			非掲				1	1
	2	9層	掲			1		1
			非掲			1	7	8
器種別総合計		掲載遺物点数		1	1	1		3
		非掲載遺物点数				1	8	9
		総点数		1	1	2	8	12

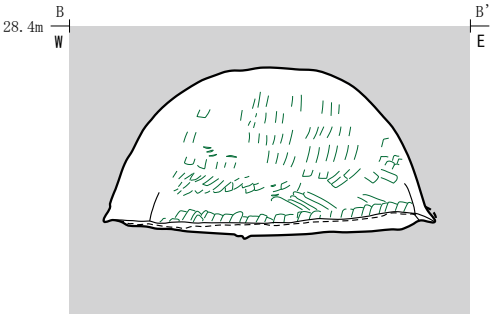
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

5. 閉塞石観察表

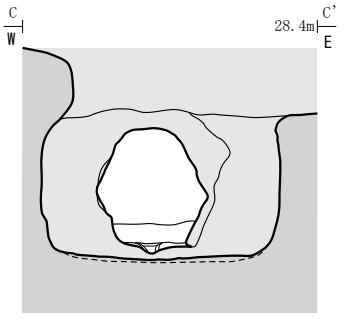
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	角礫	24	10	10	5.6	砂岩	角礫	16	12	10	3.4
頁岩	円礫	27	20	15	7.5	砂岩	円礫	29	25	15	11.0
頁岩	円礫	26	18	7	9.1	砂岩	円礫	30	18	14	14.5
頁岩	円礫	28	20	10	13.6	砂岩	円礫	37	25	10	18.8
頁岩	円礫	27	17	13	16.4	砂岩	円礫	34	24	11	18.9
頁岩	円礫	30	20	20	21.0	砂岩	円礫	40	25	15	26.5
頁岩	角礫	32	23	14	23.5	ひん岩	円礫	32	30	16	38.9
頁岩	円礫	33	21	20	26.8	合計:17点／重量(kg)＝					331.4
頁岩	円礫	28	20	20	31.5						
頁岩	円礫	45	30	20	44.4						



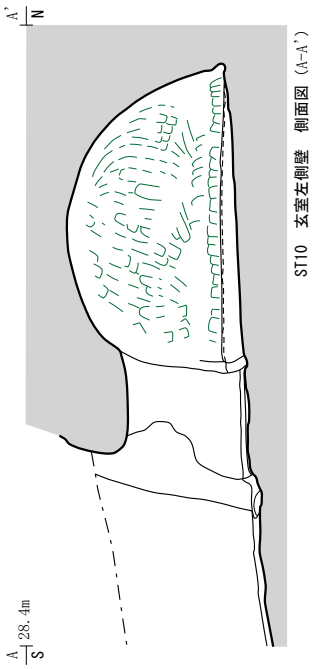
ST10 羨門 立面図【閉塞石有】(C-C')



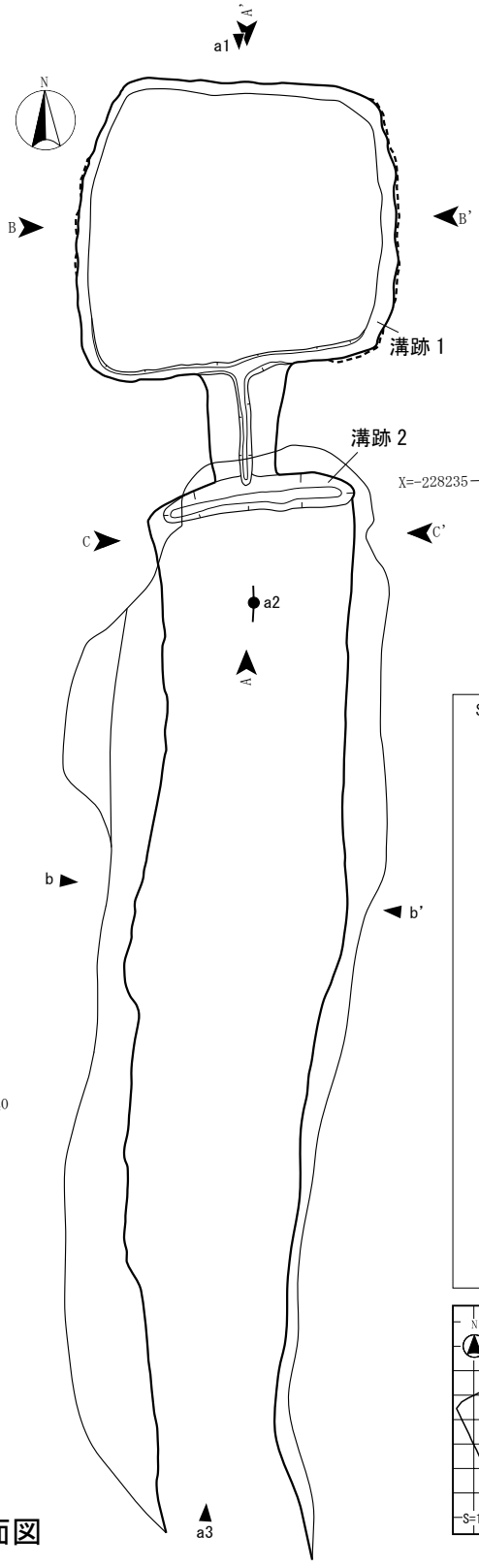
ST10 玄室奥壁 立面図 (B-B')

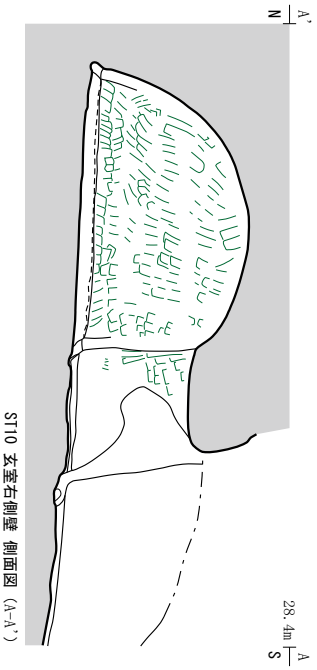


ST10 羨門 立面図 (C-C')

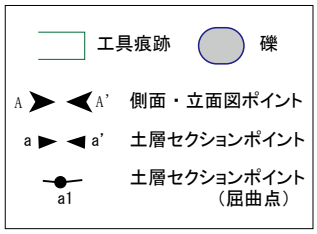


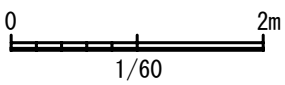
ST10 玄室左側壁 側面図 (A-A')

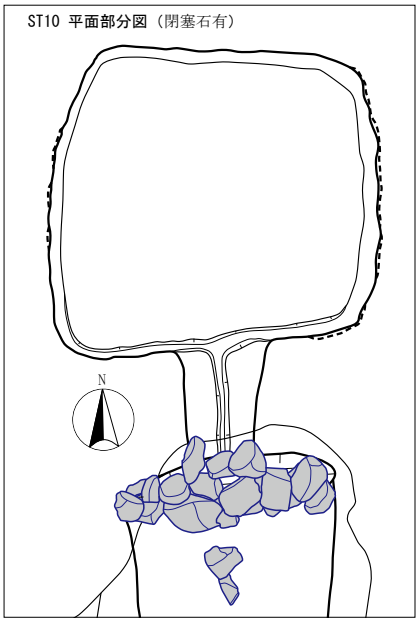


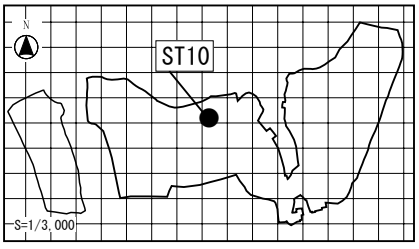


ST10 玄室右側壁 側面図 (A-A')

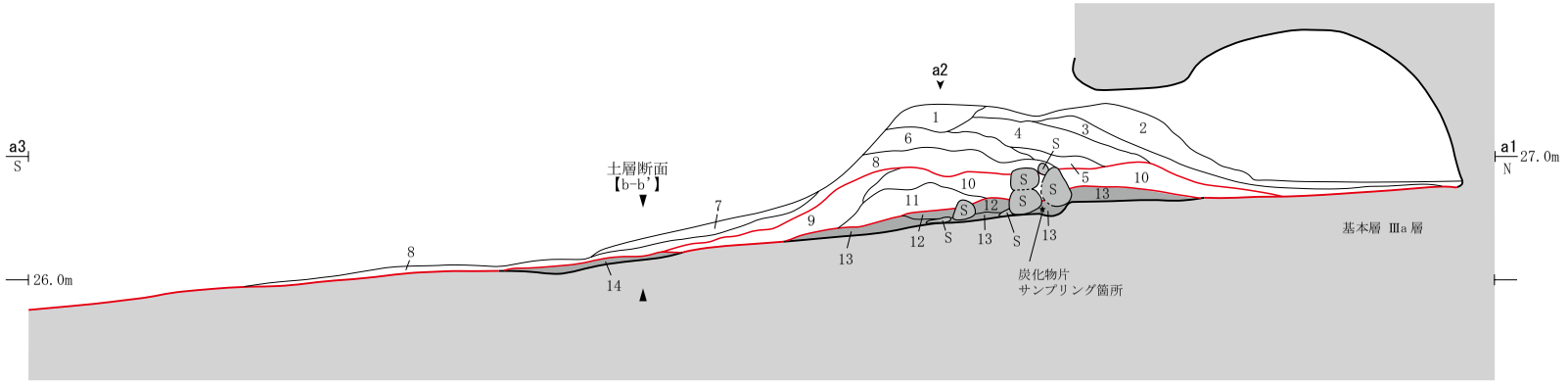




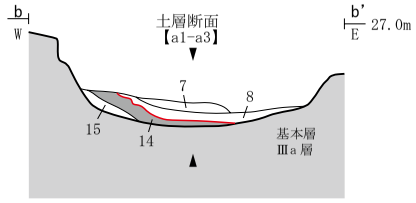




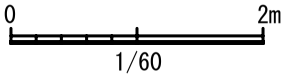
第79図
ST10 横穴墓
平面図、玄室側面・立面図



ST10 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕



ST10 墓前域 土層断面〔b-b'〕

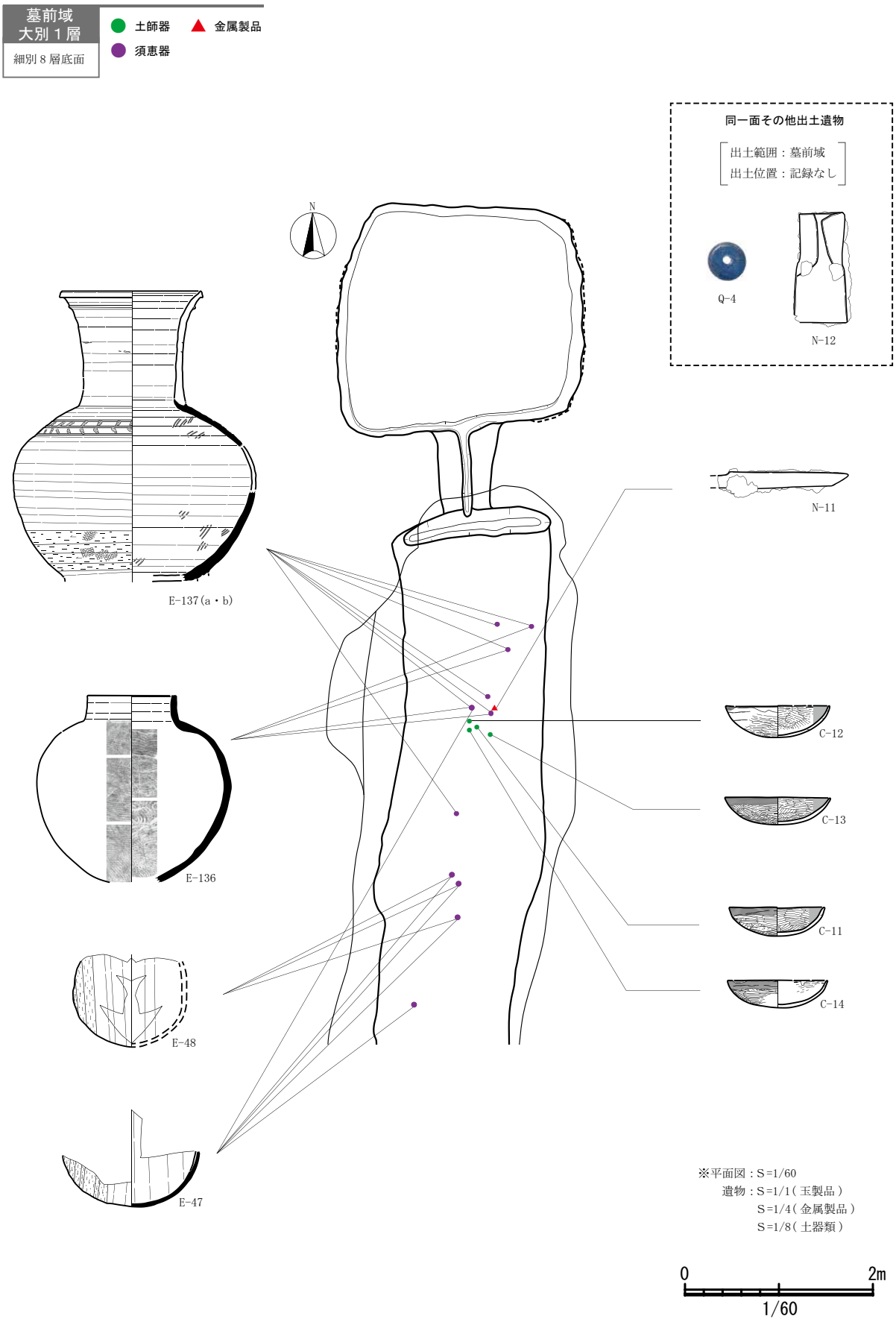


【土層図中の表記】

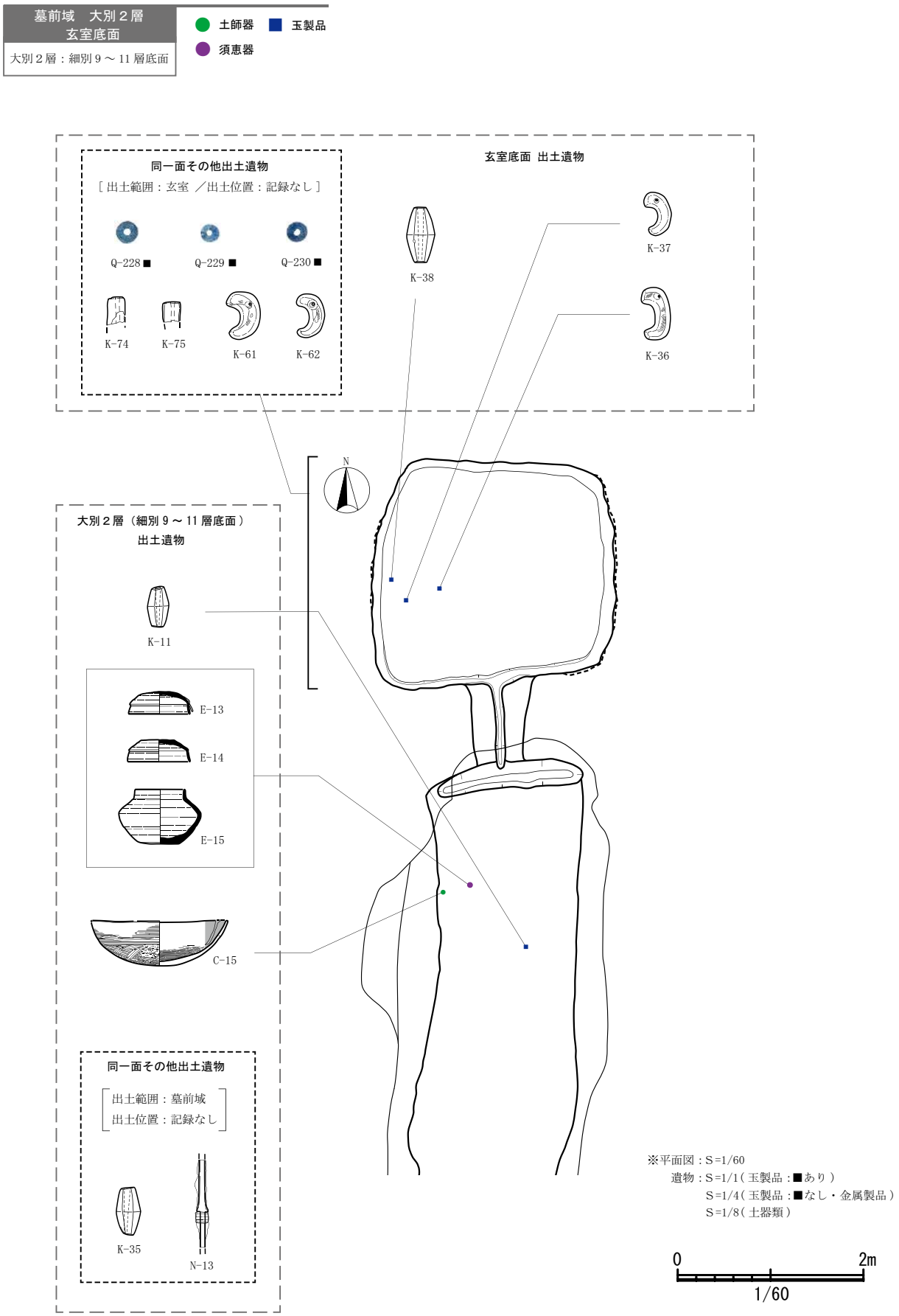
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S　：礫
- P　：土器類
- ：土層断面の屈曲点
- ：各土層断面の交点

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子少量含む。	1	自然堆積層
2	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	地山粒子多く含む。		
3	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒子少量含む。		
4	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒子少量含む。		
5	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	地山粒子少量含む。		
6	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	地山粒子少量、炭化物片含む。		
7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土粒子微量、炭化物片・地山粒子少量含む。		
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック、地山粒子含む。		
9	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック(小)含む。	2	自然堆積層
10	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	地山ブロック（天井崩落土）多く含む。		
11	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック（天井崩落土）多く、炭化物片含む。		
12	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック（小）多く含む。	3	人為堆積層（整地層）
13	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山ブロック（小）多く、地山粒子少量含む。		
14	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック多量含む。		
15	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山粒子微量含む。	4	自然堆積層

第 80 図　ST10 横穴墓 土層断面図



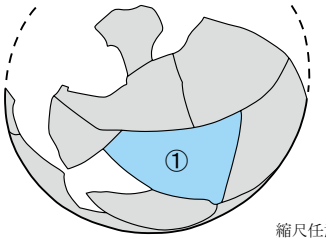
第81図　ST10 横穴墓 遺物出土状況図 (1)　－ 大別１層 －



第82図　ST10 横穴墓 遺物出土状況図 (2)　― 大別２層・玄室底面 ―

E-47　須恵器　フラスコ形瓶（第 84 図 5）

正面



縮尺任意

塗り注釈　出土層位

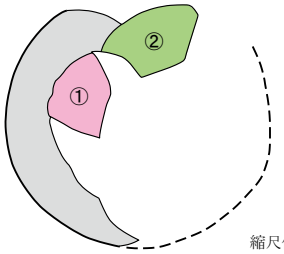
ST10　［墓前域］7・8層

①　ST11　［墓前域］5層上面

白抜　欠損箇所

E-48　須恵器　フラスコ形瓶（第 84 図 6）

正面



縮尺任意

塗り注釈　出土層位

ST10　［墓前域］7層

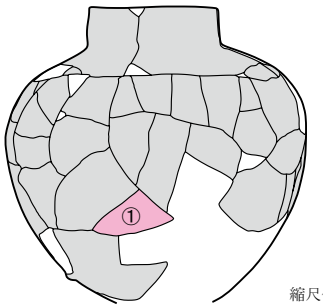
①　ST9　［墓前域］4・5層、検出面

②　ST21　［墓前域］4層

白抜　欠損箇所

E-136　須恵器　壺（第 84 図 7）

正面



縮尺任意

塗り注釈　出土層位

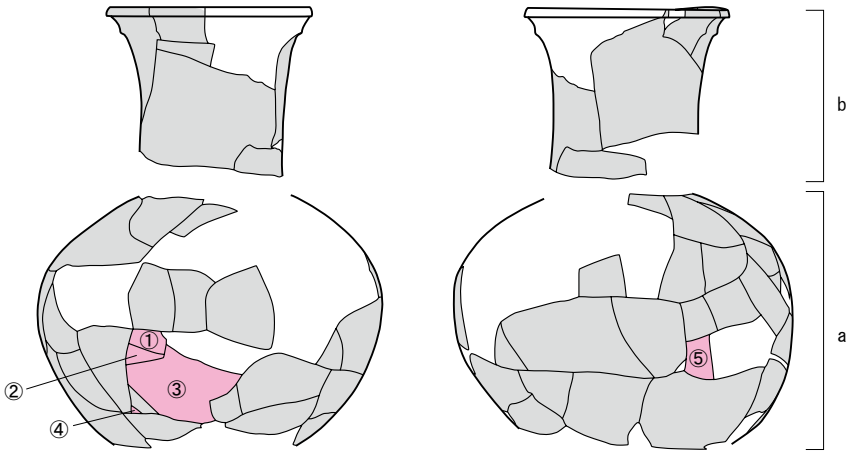
ST10　［墓前域］7・8層

①　ST9　［墓前域］検出面

白抜　欠損箇所

E-137(a・b)　須恵器　大型長頸壺（第 85 図 1）

正面　右側面



縮尺任意

塗り注釈

ST10

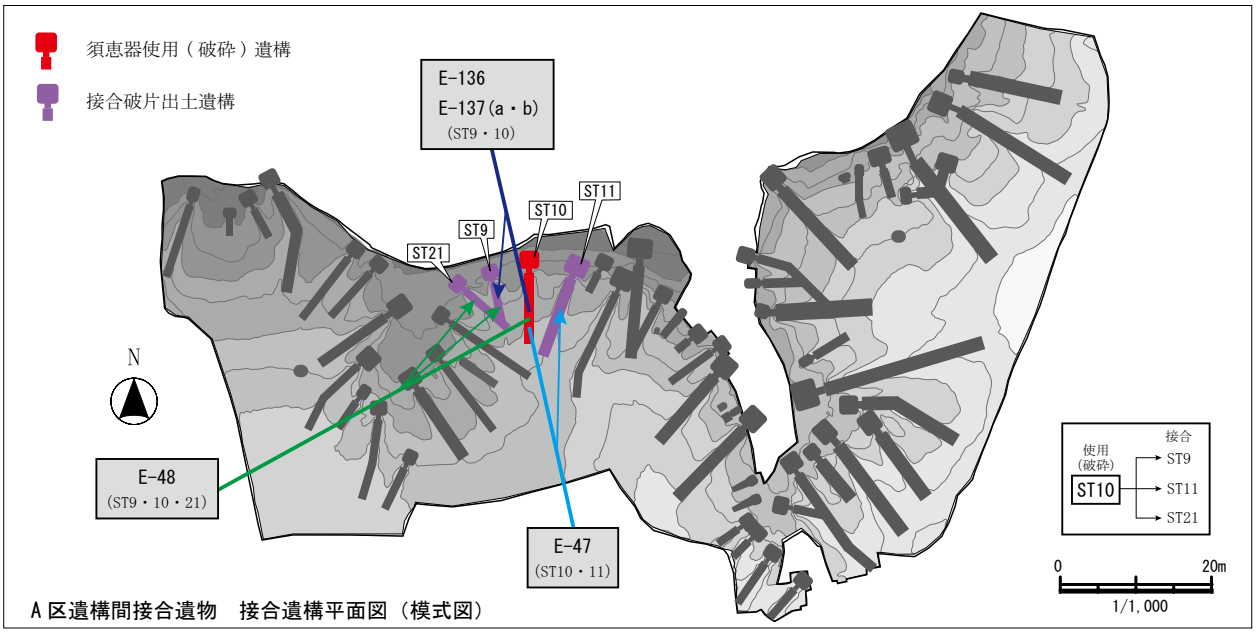
①～⑤　ST9

白抜　欠損箇所

出土層位

ST10　［墓前域］6・7・8層

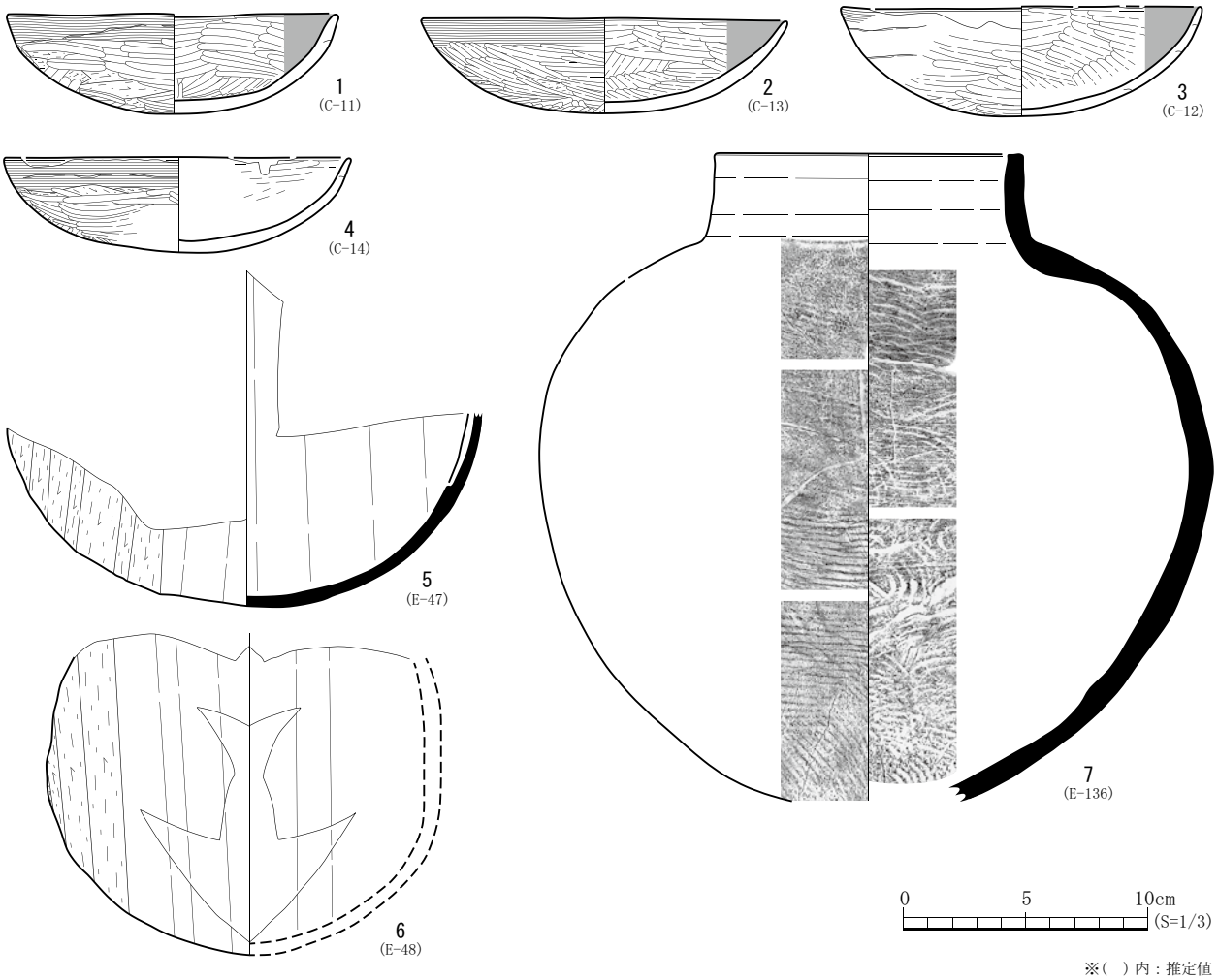
ST9　［墓前域］検出面



A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第83図　ST10 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

墓前域　大別１層

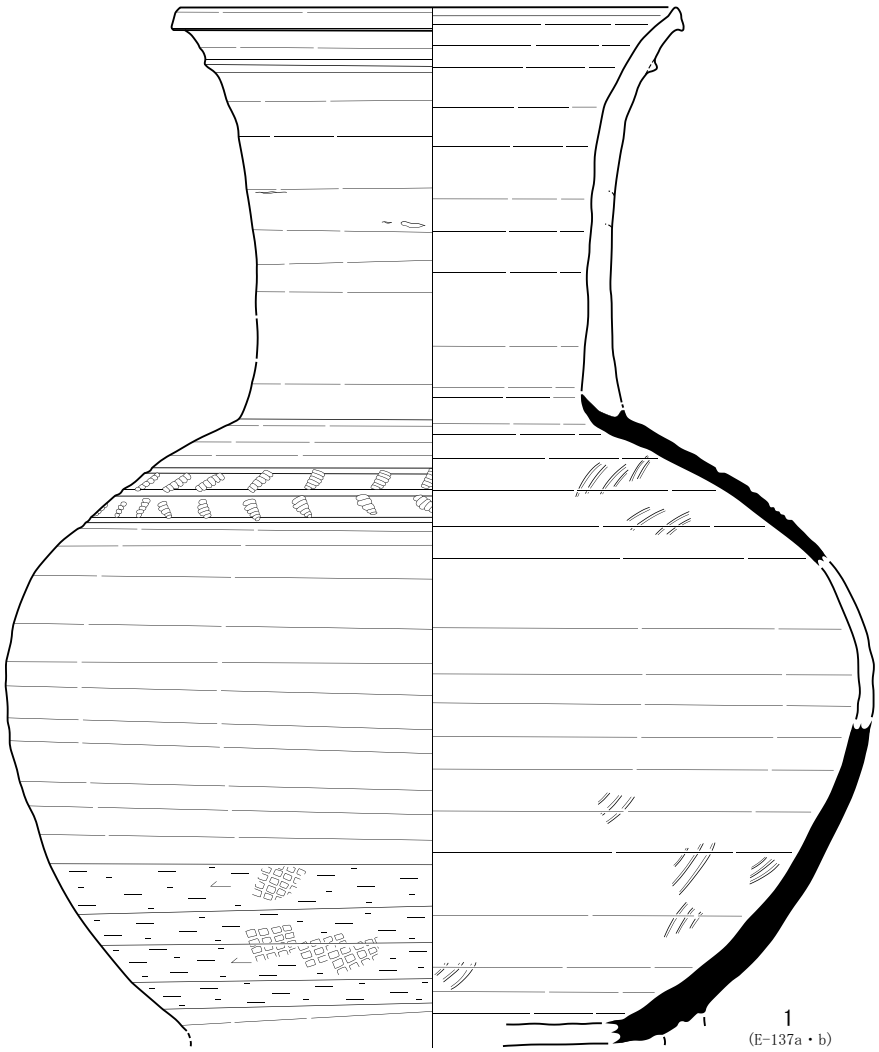


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径13.4cm・器高4.1cm・器厚0.3～0.5cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-11	195-9
2	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.8cm・器高3.9cm・器厚0.3～0.6cm	C-13	196-1
3	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.6cm・器高4.5cm・器厚0.3～0.4cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-12	195-10
4	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・磨滅 【法量】口径(14.0)cm・器高3.9cm・器厚0.3～0.6cm　【特記事項】内面：黒色処理？	C-14	196-2
5	墓前域	◆ST10　7・8層 ◆ST11　5層上面	須恵器 フラスコ形瓶	◎遺構間接合　**ST10(主体)**＋ST11 【技法】外面：ロクロナデ・体部回転ヘラ削り・円盤閉塞、内面：ロクロナデ 【法量】残存高13.9cm・器厚0.4～0.5cm	E-47	224-7
6	墓前域	◆ST9　4・5層 検出面 ◆ST10　7層 ◆ST21　4層	須恵器 フラスコ形瓶	◎遺構間接合　**ST10(主体)**＋ST9＋ST21 【技法】外面：ロクロナデ・回転ヘラ削り・円盤閉塞、内面：ロクロナデ 【法量】残存高13.2cm・器厚0.5～0.6cm	E-48	224-8
7	墓前域	◆ST9　検出面 ◆ST10　7層 8層	須恵器 壺	◎遺構間接合　**ST10(主体)**＋ST9 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部上半平行タタキ→ロクロナデ・体部下半平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部上半当て具痕(同心円)→カキメ 体部下半当て具痕(同心円) 【法量】口径(12.4)cm・残存高26.6cm・器厚0.5～1.1cm	E-136	225-5

第84図　ST10 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

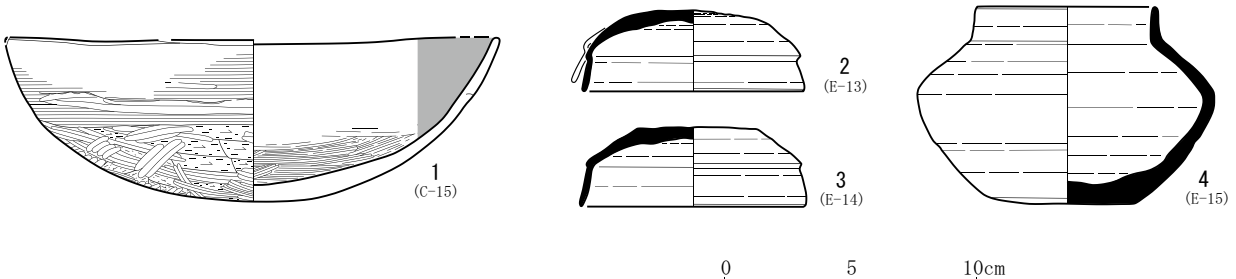


0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST9　検出面 ◆ST10　6層 7層 8層	須恵器 大型長頸壺	◎遺構間接合　**ST10(主体)**＋ST9 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部上位ロクロナデ→沈線→櫛歯状工具による列点文 体部下位格子状タタキ→回転ヘラ削り 底部切り離し技法不明・格子状タタキ→高台貼付(高台欠損)・ロクロナデ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕→ロクロナデ・底部ナデ 【法量】口径19.7cm・残存高41.4cm・器厚0.4～1.5cm 【特記事項】E-137b(口縁部)・E-137a(頸部～底部)	E-137 a・b	225-1 225-2 225-3

第85図　ST10 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層

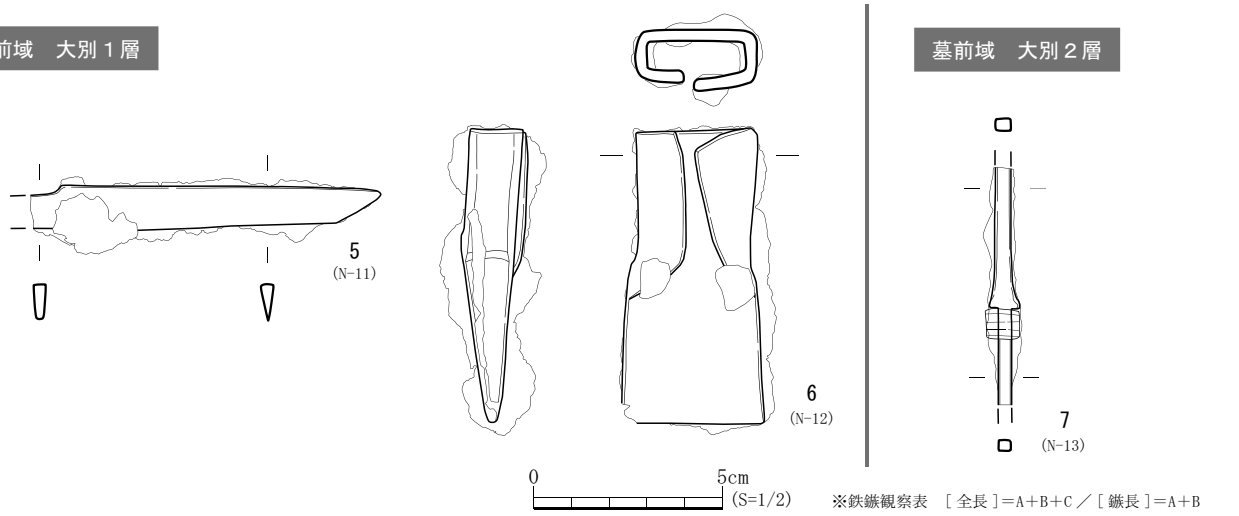


※（ ）内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法（外面・内面）・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	13層上面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ（一部ヘラミガキ・磨滅）・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径（19.6）cm・器高6.6cm・器厚0.3～0.8cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-15	195-8
2	墓前域	13層上面	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ・天井部ヘラ切り（無調整？） 内面：ロクロナデ 【法量】口径8.6cm・器高3.2cm・器厚0.1～0.5cm	E-13	219-4
3	墓前域	13層上面	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ・天井部ヘラ切り（無調整？） 内面：ロクロナデ 【法量】口径8.8cm・器高3.1cm・天井径4.8cm・器厚0.2～0.4cm	E-14	219-5
4	墓前域	13層上面	須恵器 短頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整 内面：ロクロナデ 【法量】口径7.0cm・器高7.9cm・底径5.8cm・器厚0.3～0.6cm	E-15	225-4

墓前域　大別１層

墓前域　大別２層

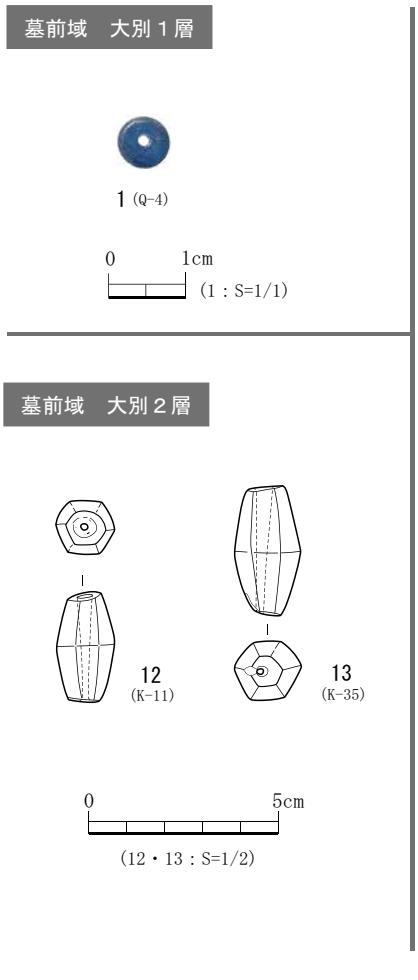


※鉄鏃観察表　［全長］＝A＋B＋C／［鏃長］＝A＋B

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
5	墓前域	8層	金属製品	刀子	【法量】［刀身］残存長9.3cm　［刃部］長さ8.5cm・幅1.1cm　［茎部］残存長0.8cm 【特記事項】片関？・鉄製	N-11	312-3
6	墓前域	8層	金属製品	鉄斧	【法量】全長7.7cm　［基部］幅3.3cm　［刃部］残存幅3.4cm　［袋部］側面幅1.6cm 【特記事項】無肩袋状鉄斧	N-12	336-1

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長（cm）	最大幅（cm）	鏃長（cm）	A 鏃身部 長さ（cm）	B 頸部 長さ（cm）	C 茎部 長さ（cm）	備考	登録	写真図版
7	墓前域	9層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃？	残存 6.3	0.8	残存 3.8	—	残存 3.8	残存 2.5	［茎関］台形関a1 口巻残存	N-13	315-3

第86図　ST10 横穴墓 出土遺物（3）　－土器類・金属製品－



No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (mm)	長 (mm)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
1	墓前域	7層	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	－	孔平行	－	紺	6.7	3.7	0.262	Q-4	278-9
2	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	小突起	散在	不純物	紺・青	3.8	2.0	0.042	Q-228	278-6
3	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	小突起	散在	不純物	紺・青／モザイク状	3.3	1.9	0.027	Q-229	278-7
4	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	小突起	散在	不純物	紺・青／モザイク状	3.6	1.9	0.033	Q-230	278-8

No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
5	玄室	底面	石製品	棗玉	琥珀	2.10	1.30	－	1.25	－	0.30	1.6	K-74	277-10
6	玄室	底面	石製品	棗玉	琥珀	1.50	1.30	－	1.20	－	0.20	1.2	K-75	277-11
7	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	4.00	2.10	0.90	1.80	－	0.25～1.40	17.3	K-38	276-13
8	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	3.45	2.45	1.40	1.10	－	0.15～0.90	10.8	K-61	274-9
9	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	3.15	2.00	1.10	1.00	－	0.15～0.90	7.1	K-62	274-8
10	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	3.80	1.60	1.10	1.05	－	0.20～0.40	9.6	K-36	274-6
11	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	3.15	2.00	1.00	0.95	－	0.20	6.4	K-37	274-7
12	墓前域	13層上面	石製品	切子玉	水晶	2.90	1.55	0.80	1.45	－	0.15～0.40	8.3	K-11	276-15
13	墓前域	13層上面	石製品	切子玉	水晶	3.45	1.80	0.65	1.60	－	0.20～0.40	12.1	K-35	276-14

第87図　ST10 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 玉製品 －

11号横穴墓（ST11）（第88～91図、第21表、第4分冊 写真図版45～47）

【検出位置】 A-2区西側の標高25～27mの丘陵南斜面に位置する。同斜面の西側にはST10、東側にはST12・20が隣接している。

【重複関係】 墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室の全ての天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）であるが、墓前域下半から末端の範囲については砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）と横穴墓の掘削廃土上面が掘り込み面となる。

【個別部位の特徴】（第89図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は14.46mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.56m、玄室の中央幅 2.72m、奥壁幅 2.30m、前壁幅2.35m、左側壁幅2.34m、右側壁幅2.19m、玄室底面から天井の高さ1.55mを測る。床面積は約6.3㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.1m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。幅 0.62m、高さ 1.03mを測る。天井の一部は削平を受け残存していない。残存状況からみて、立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。

工 具 痕：各壁に幅0.06～0.10m前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦方向、天井部が放射状である。

付属施設：奥壁・両側壁・前壁の壁際を巡る溝跡1を確認した。その規模は幅0.03～0.07m・深さ0.03mであり、玄門付近で途切れる。位置的にみて排水溝と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.85m、玄室側の幅0.62m、墓前域側の幅0.70mを測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ1.50m、幅0.15m、深さ0.06mの溝跡2を確認した。溝跡2の上部には、0.15×0.06×0.06m（0.8kg）～0.40×0.35×0.25m（45.4kg）の角礫・円礫32個（総重量240.2kg）が残存しており、溝上面から高さ0.2～0.4mまで積み上げられた状態で確認

した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩 18 個、砂岩 6 個、花崗閃緑岩 6 個、斑岩 2 個である（第 21 表 5)。溝跡 2 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 11.05m、上幅 2.0～2.6m、下幅 1.35～1.80m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.3m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.3m 程度である。

【堆積層】　ST11 横穴墓を覆う堆積層は細別 12 層・大別 5 層に分けた（第 88 図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1 層）は ST11 玄室～羨道に堆積する自然堆積層である。玄室の入口部分に重機による掘削痕跡（バックホウの爪跡）が認められ、1 層内には木片やプラスチック片が含まれる。現代の埋戻し土と考えられる。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 2～4 層）は ST11 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別 3 層の層理面（細別 5 層上面）で少量遺物が出土した。遺物の状況からこの上面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別 1 層底面以下には整地層が認められないことから、大別 2 層堆積後の窪地上面を利用した可能性が高い。

〔大別 3・4 層〕

大別 3 層（細別 5～9 層）は ST11 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 4 層（細別 10 層）は羨道～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 4 層は、大別 5 層及び墓前域掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 5 層〕

大別 5 層（細別 11・12 層）は ST11 の墓前域に堆積する自然堆積層で、遺物は含まれない。造墓直後の堆積層とみられる。

【出土遺物】土師器 12 点（5 個体、破片 7 点)、須恵器 11 点（1 個体、破片 10 点※うち破片 6 点は遺構間接合遺物)、玉製品 3 点、金属製品 2 点が出土した（第 21 表 1～4)。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれ、玄室出土遺物は玉製品・金属製品、墓前域は土師器・須恵器が主体である（第 90 図)。土師器坏 5 個体、須恵器甕 1 個体、玉製品 3 点、刀子 1 点の合計 10 点を図示した（第 91 図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 2 層（細別 4 層底面）出土遺物**、**B：大別 3 層（細別 9 層底面）出土遺物**の 2 群に分かれる。加えて、ST11 では、別の横穴墓（ST9・12）で破砕された須恵器破片の一部が ST11 に混入したと考えられる遺物 6 点（第 21 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C：墓前域大別 2 層の堆積途中（細別 2～4 層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST11 関連遺物は、古い順から B→A→C の 3 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層（細別 9 層底面）出土遺物〕（第 90・91 図）

大別 3 層（細別 5～9 層）のうち、墓前域に分布する細別 9 層の底面〔＝大別 4 層（細別 10 層）上面〕で出土した遺物である（前項 B に相当）。玄室底面出土遺物もこの段階に含まれると考えられる。土師器・玉製品・金属製品が出土した。その内訳は、土師器坏 3 個体、勾玉 1 点・切子玉 1 点、刀子 1 点と不明鉄製品 1 点である（第 21 表 1～4）。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれる。

玄室では玉製品と鉄製品のみが出土した（第 90 図）。勾玉 1 点（第 91 図 9）、切子玉 1 点（第 91 図 8）、刀子 1 点（第 91 図 10）、不明鉄製品 1 点である。玉製品と刀子については、玄室底面に堆積する泥化した土壌内から出土したため位置は特定できていない。少量ではあるが、これらは ST11 の初葬時に使用された遺物と考えられる。

墓前域では羨門付近で土師器坏 3 個体（第 91 図 4～6）が出土した。坏は正位の状態で 3 個体重ねられた形で出土しており、原位置を保った状態で埋没したものと考えられる（第 90 図、写真図版 46-6）。出土状況からみて、墓前祭祀に伴う遺物と判断され、ST11 の初葬に伴い使用した遺物の可能性が高い。

〔大別 2 層（細別 4 層底面）出土遺物〕（第 90・91 図）

大別 2 層（細別 2～4 層）のうち、墓前域に分布する細別 4 層の底面〔＝大別 3 層（細別 5 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 A に相当）。土師器坏 2 個体（第 91 図 1・2）、須恵器甕 1 点（第 91 図 3）、臼玉 1 点（第 91 図 7）と図示できなかった土師器坏・甕破片、須恵器甕破片が出土した（第 21 表 1）。

これらの遺物は、墓前域下半の同一面上で、いずれも破片の状態で出土した（写真図版 46-7）。土師器坏の接合破片のまとまりからみて、原位置を保った状態のまま埋没したものと判断される。出土遺物は少量ではあるが、本段階に土師器坏の破砕行為を伴う墓前祭祀が実施されたと考えられる。

なお、堆積土の状況から、この段階の ST11 については、玄室への入室が可能な状態だったと考えられる。ただし、玄室内でこの段階に伴うとみられる遺物が 1 点も出土していない。祭祀位置が墓前域下半部であることや遺物出土量が少ないことも踏まえ、本段階の墓前祭祀については、ST11 の追葬に関連しないものとみておきたい。

〔大別 2 層（細別 2～4 層）出土遺物〕

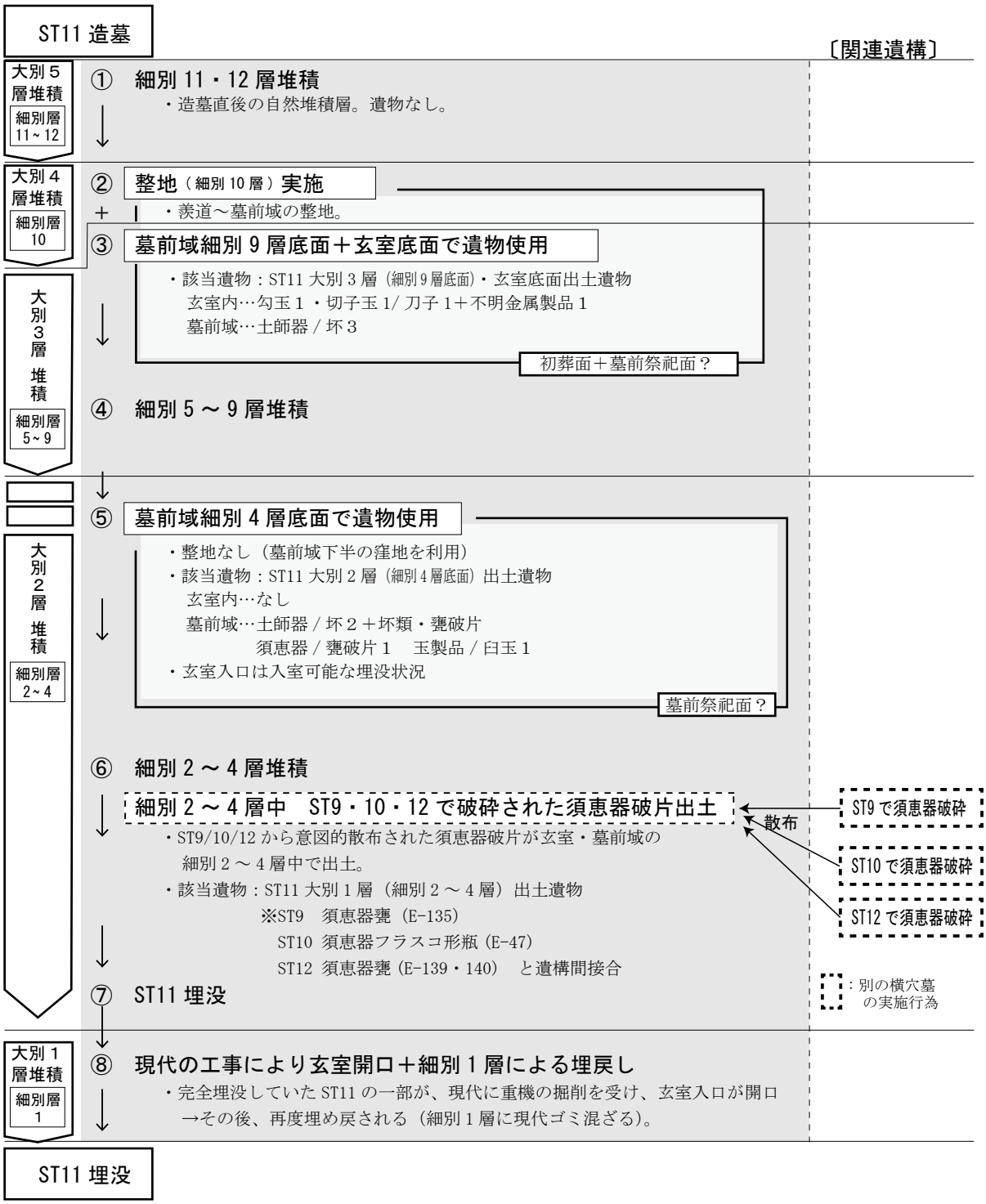
大別 2 層（細別 2～4 層）の堆積土中から出土した遺物である（前頁 C に相当）。須恵器フラスコ形瓶破片 1 点・甕破片 5 点が出土した（第 21 表 2）。

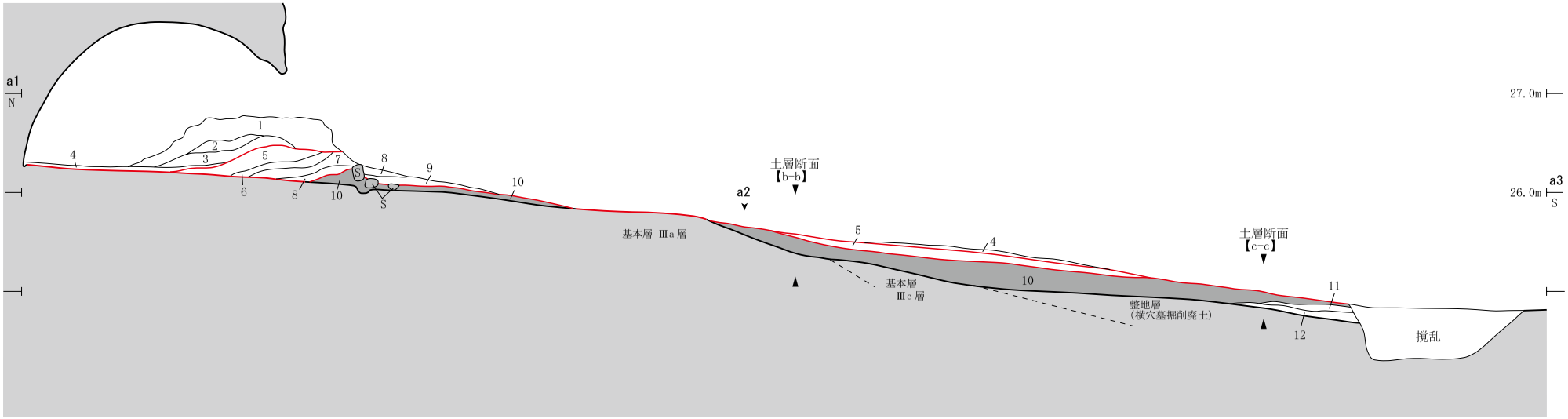
これらの須恵器破片は別遺構で破砕された後、ST11 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST9・10・12 由来の 3 者に分けられる（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST11 では、**ST9 由来の須恵器甕（E-135／第 76 図 1）**と接合する破片が 1 点（体部破片）、**ST10 由来の須恵器フラスコ形瓶（E-47／第 84 図 5）**と接合する破片が 1 点（体部破片）、**ST12 由来の須恵器甕 1 個体（E-139・140／第 102 図 2・第 103 図 1）**と接合する破片が 4 点（E-139:頸部破片/E-140:底部～体部破片）出土した。その出土位置は、ST9 由来の須恵器甕（E-135）の破片が玄室内、その他が墓前域である。ST11 から ST9 は直線距離で約 9m 西、ST10 は約 5m 東、ST12 は約 6m 東の地点に位置する。いずれも ST11 に隣接もしくは同斜面上に位置する横穴墓であり、位置的には周辺遺構からの遺物流入の可能性も十分想定される。しかし、ST9 由来の甕は ST11 の玄室内で出土しており、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。また、ST10・12 については、それぞれの横穴墓で須恵器破砕・散布が実施されたと判断される遺構であることから、単なる遺物の流れ込みでなく、ST10・12 からの意図的に散布されたものである可能性が高い。以上のように、ST11 では、大別 1 層堆積途中の段階に「ST9・10・12 から ST11 墓前域・玄室内への須恵器の意図的な散布行為」が行われたと想定される。なお、ST9・10・12 それぞれからの ST11 への須恵器散布時期の前後関係については把握できなかった。

【まとめ】

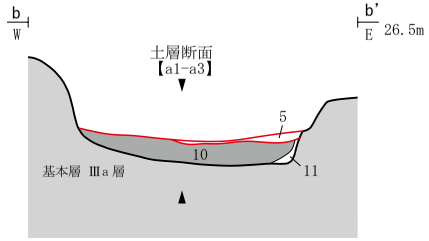
ST11 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST11 造墓・使用・埋没の経過〕

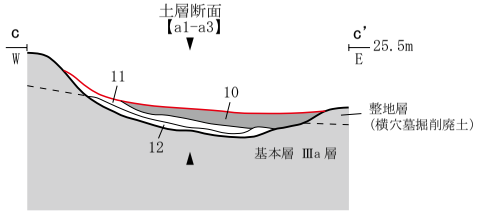




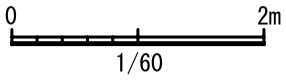
ST11 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕



ST11 墓前域 土層断面〔b-b'〕



ST11 墓前域 土層断面〔c-c'〕



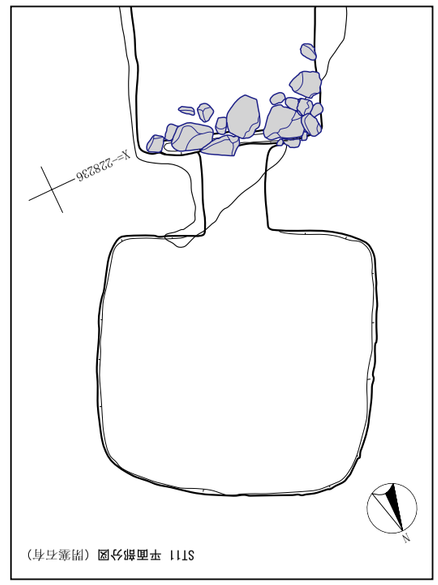
【土層図中の表記】

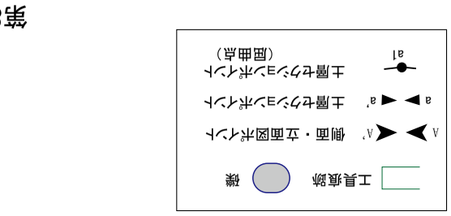
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S　：礫
- ▼：土層断面の屈曲点
- ▼▲：各土層断面の交点

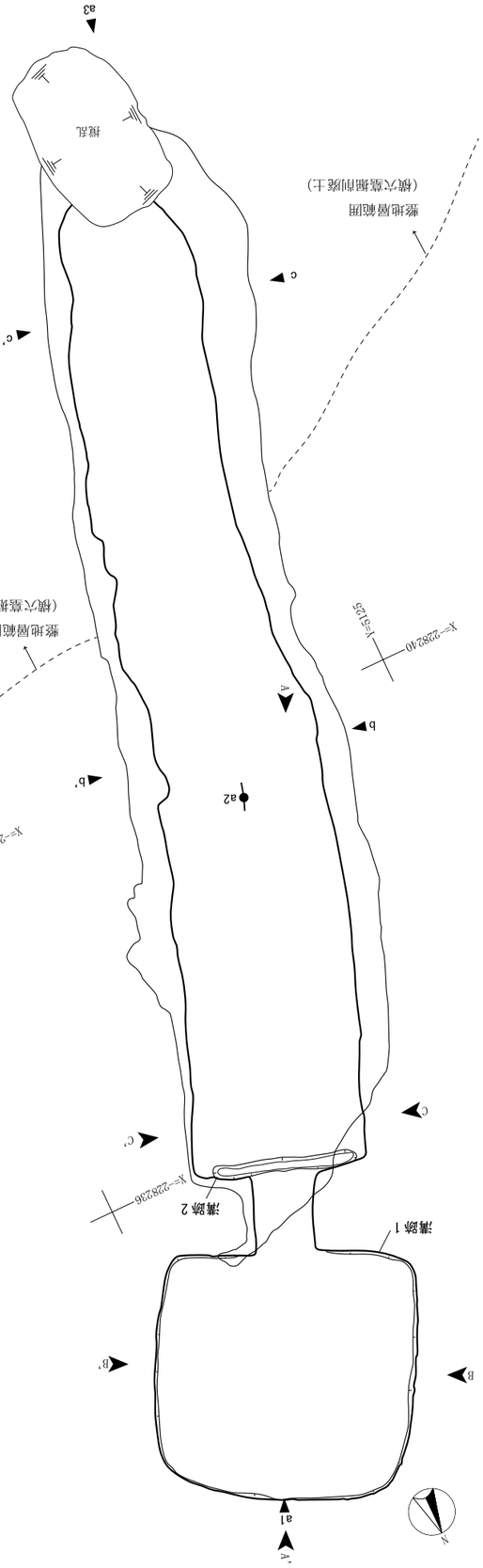
細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	木片、プラスチック片含む。現代の撹乱層。	1	自然堆積層
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック大、小含む。	2	自然堆積層
3	褐灰色(10YR5/1)	シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
4	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘土質シルト	地山ブロック少量含む。		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック(小)含む。	3	自然堆積層
6	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
7	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
8	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック(小)少量含む。		
9	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。		
10	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック多量含む。	4	人為堆積層（整地層）
11	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片、地山粒子少量含む。	5	自然堆積層
12	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒子少量含む。		

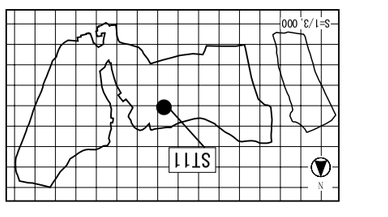
第 88 図　ST11 横穴墓 土層断面図

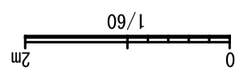
第89図　ST11 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

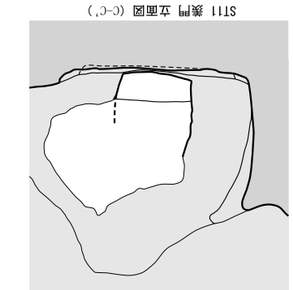


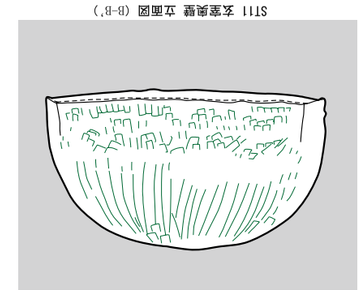


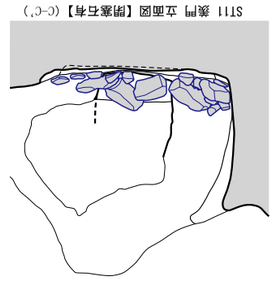


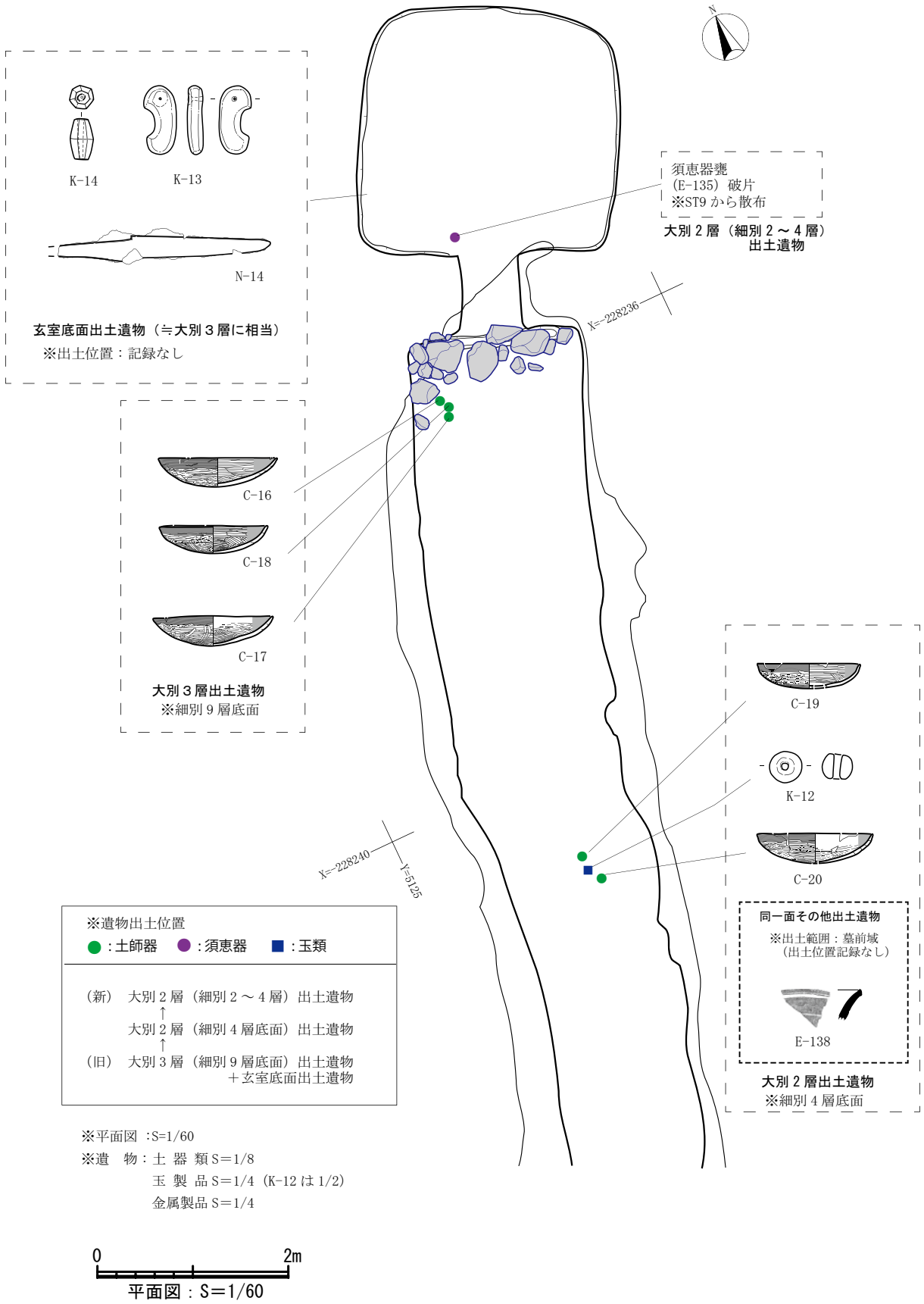












第90図　ST11 横穴墓 遺物出土状況図

第21表　ST11横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器			須恵器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	甕	小計	甕	小計
墓前域	2	4層 (5層上面)	個	2 (260)		2 (260)	1 (30)	1 (30)
			破	5 (70)	2 (25)	7 (95)	4 (195)	4 (195)
	3	9層 (10層上面)	個	3 (660)		3 (660)		
			破					
総合計		個体数(重量)		5 (920)		5 (920)	1 (30)	1 (30)
		破片数(重量)		5 (70)	2 (25)	7 (95)	4 (195)	4 (195)
		総重量		(990)	(25)	12 (1,015)	(225)	5 (225)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	フラスコ形瓶	1 (535)	◆ST10　7･8層(墓前域) ◆ST11　5層上面(墓前域)	ST10	★ST10:12点 ◆ST11:1点	E 47	第84図5
須恵器	甕	1 (19,875)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST9　2～5層(墓前域･羨門付近) ◆ST11　3層(玄室) ◆ST12　16層上半部(墓前域)	ST9	◆ST7:1点 ★ST9:137点 ◆ST11:1点 ◆ST12:1点	E 135	第76図1
須恵器	甕	1 (11,290)	◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　2･8～11層(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST12	◆ST11:1点 ★ST12:42点 ◆ST14:10点	E 139	第102図2
須恵器	甕	1 (6,200)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　堆積土(玄室)、8～11層(墓前域) ◆ST20　3層･検出面(墓前域)	ST12	◆ST7:(c)1点 ◆ST11:(a)1点＋(c)2点 ★ST12:(a)2点＋(c)25点 ◆ST20:(a)6点＋(c)2点	E 140a･c	第103図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

※ST11出土須恵器の総数
(表21-1)遺構単独出土　1個体＋破片4点
＋
(表21-2)遺構間接合遺物　破片6点　＝ 11 点

3. 玉製品

種別				玉製品			
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	石製 勾玉	石製 切子玉	石製 臼玉	小計
玄室	－	底面	個	1 (16.8)	1 (1.7)		2 (18.5)
			破				
墓前域	2	4層 (5層上面)	個			1 (9.6)	1 (9.6)
			破				
総合計		個体数(重量)		1 (16.8)	1 (1.7)	1 (9.6)	3 (28.1)
		破片数(重量)					
		総重量		(16.8)	(1.7)	(9.6)	(28.1)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

4. 金属製品

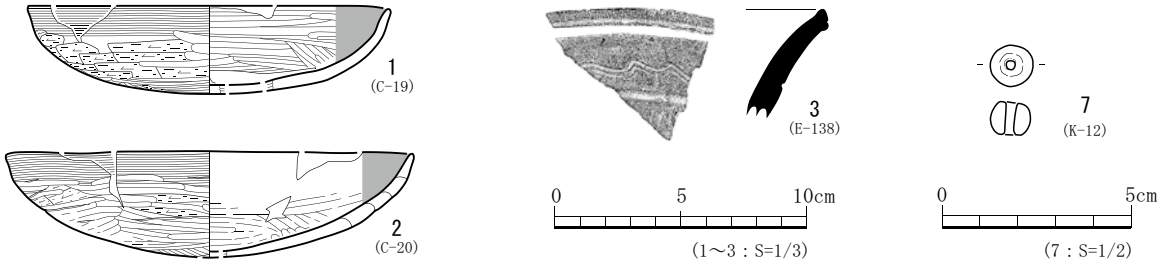
種別				金属製品		
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	刀子	不明鉄製品	小計
玄室	－	底面	掲	1		1
			非掲		1	1
器種別総合計		掲載遺物点数		1		1
		非掲載遺物点数			1	1
		総点数		1	1	2

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

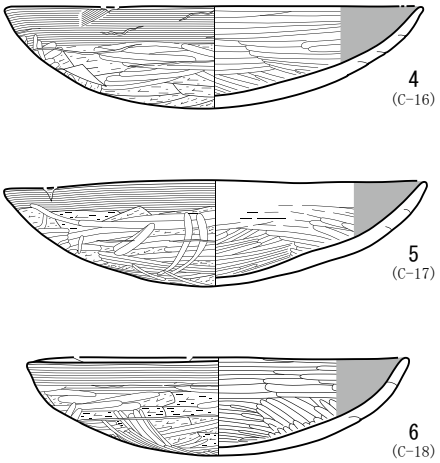
5. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	角礫	15	6	6	0.8	頁岩	角礫	17	14	12	2.7	砂岩	角礫	17	14	6	3.3
頁岩	角礫	12	10	7	1.0	頁岩	円礫	20	17	5	3.0	砂岩	角礫	25	15	8	4.4
頁岩	角礫	17	10	7	1.6	頁岩	角礫	15	13	7	3.1	花崗閃緑岩	角礫	20	14	10	4.0
頁岩	角礫	15	10	8	1.6	頁岩	角礫	15	14	7	3.4	花崗閃緑岩	角礫	44	27	10	13.6
頁岩	円礫	20	15	5	2.1	頁岩	円礫	18	12	5	7.8	花崗閃緑岩	角礫	27	23	10	18.1
頁岩	角礫	20	10	6	2.2	頁岩	角礫	35	25	10	9.3	花崗閃緑岩	角礫	46	20	15	21.9
頁岩	角礫	17	10	9	2.2	頁岩	角礫	40	35	25	45.4	花崗閃緑岩	角礫	40	20	15	24.8
頁岩	角礫	20	12	7	2.4	砂岩	角礫	14	10	6	1.4	花崗閃緑岩	角礫	40	30	20	40.3
頁岩	角礫	20	9	6	2.5	砂岩	円礫	13	12	6	1.7	斑岩	円礫	18	15	6	2.1
頁岩	角礫	16	10	8	2.6	砂岩	角礫	15	12	4	1.7	斑岩	角礫	15	12	7	3.4
頁岩	円礫	18	10	8	2.7	砂岩	角礫	16	9	9	3.1	合計:32点／重量(kg)＝					240.2

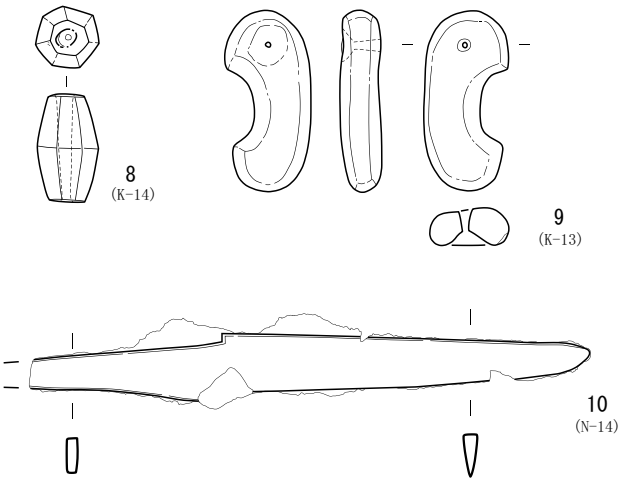
墓前域　大別２層



墓前域　大別３層



玄室底面



※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層 (5層上面)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.2)cm・器高3.5cm・器厚0.3～0.5cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-19	196-6
2	墓前域	4層 (5層上面)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部手持ちヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(16.0)cm・器高4.2cm・器厚0.2～0.4cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-20	196-7
3	墓前域	4層 (5層上面)	須恵器 甕	【技法】外面：口唇部沈線・頸部波状文／沈線、内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.6～0.9cm	E-138	242-1
4	墓前域 (羨門付近)	9層 (10層上面)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径16.4cm・器高4.1cm・器厚0.3～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-16	196-3
5	墓前域 (羨門付近)	9層 (10層上面)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径16.6cm・器高4.2cm・器厚0.3～0.6cm	C-17	196-4
6	墓前域 (羨門付近)	9層 (10層上面)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.0cm・器高3.9cm・器厚0.3～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-18	196-5

No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
7	墓前域	4層	石製品	臼玉	滑石	1.10	1.10	―	0.90	―	0.25	1.7	K-12	275-28
8	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	2.90	1.65	0.90	1.60	―	0.25～0.40	9.6	K-14	276-16
9	玄室	底面	石製品	勾玉	瑪瑙	4.80	2.30	1.45	1.10	0.60	0.15～0.35	16.8	K-13	274-10

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
10	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長14.8cm　[刀部]長さ9.8cm・幅1.5cm　[茎部]残存長5.0cm 【特記事項】片関(背側：直角)・鉄製　【残存部位】刀身	N-14	312-4

第91図　ST11 横穴墓 出土遺物

12号横穴墓（ST12）（第92～109図、第22・23表、第4分冊 写真図版48～50）

【検出位置】　A-2区西側の標高23～26mの丘陵南斜面に位置する。同斜面の西側にはST11・20、東側にはST13・14が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室と羨道の全ての天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）であるが、墓前域下半から末端の範囲については砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）と横穴墓の掘削廃土上面が掘り込み面となる。

【個別部位の特徴】（第92図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は18.72mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行2.70m、玄室の中央幅3.02m、奥壁幅2.72m、前壁幅2.72m、左側壁幅2.60m、右側壁幅2.32m、玄室底面から天井の高さ1.42mを測る。床面積は約7.6㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：やや扁平なドーム形を呈する。

底　　面：平坦であるが、玄室中央に0.02mほどの段差があり、底面左半が低い。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.1m程度である。玄室の底面には直径0.05～0.10mの河原石が敷き詰められていた。その総数は1,453個（総重量304.3kg）である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆U字形を呈する。幅0.88m、高さ1.12mを測る。

工 具 痕：各壁に幅0.07～0.08m前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦方向、天井部が放射状である。

付属施設：溝跡1を確認した。その規模は幅0.10～0.17m・深さ0.05mであり、玄門付近から羨道の中心を通り羨門に至る。位置的にみて排水溝と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.78m、玄室側の幅0.88m、墓前域側の幅0.64m、玄門側の高さ1.12mを測る。

立 面 形：逆U字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：玄室玄門付近から羨道の中心を通り羨門に至る溝跡1を確認した。その詳細は前述のとおりである。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.08～0.12m の段差があり、段差下の墓前域に円礫・角礫 38 個が残存していた。礫は 0.10×0.08×0.05m（0.7 kg）～0.30×0.23×0.17m（34.1 kg）、総重量 316.1 kgを測り、石材は砂岩 21 個、頁岩 15 個、アプライト花崗岩 1 個、ひん岩 1 個である（第 23 表 4）。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 15.24m、上幅 1.2～3.6m、下幅 0.80～1.56m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.１m 前後、羨門付近で 1.7m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。羨門から 2.1m 下方の地点で外方向に屈曲し、底面幅が広がる。堆積土の観察から、この屈曲部～羨門までの空間には天井が存在した可能性が高い。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.3m 程度である。羨門から屈曲部の間の底面には直径 0.05～0.10m の河原石が敷き詰められていた。その総数は川原石 457 個（総重量 93.7kg）である。

付属施設：羨門付近の屈曲部で溝跡 2・3 を確認した。溝跡 2 は長さ 0.60m、幅 0.14m、深さ 0.03m、溝跡 3 は長さ 0.73m、幅 0.14m、深さ 0.04m を測る。位置的にみて、両者は一連の遺構と考えられる。他の横穴墓の羨門部にみられる溝跡と類似するが、溝跡 2・3 の周辺では閉塞石が 1 点も残存していないため、閉塞に関わる遺構であるかは不明である。

【堆積層】　ST12 横穴墓を覆う堆積層は細別 22 層・大別 6 層に分けた（第 93 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1・2 層〕

大別 1 層（細別 1～13 層）は ST12 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 2 層（細別 14・15 層）は羨道～墓前域上半に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 1 層のうち、墓前域の羨門～屈曲部に堆積する細別 13 層には地山ブロックや粒子が多量に含まれる。その上部に天井が存在した可能性がある。大別 2 層は整地層とみられ、この整地層上面で多くの遺物が面的に出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

墓前域大別 1 層の堆積後、ST12 の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 3・4 層〕

大別 3 層（細別 16 層）は ST12 の墓前域に堆積する自然堆積層、大別 4 層（細別 17 層）は墓前域下半に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 4 層は整地層とみられ、大別 3 層と 4 層の層理面で一定量の遺物が面的に出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 5・6 層〕

大別 5 層（細別 18～21 層）は ST12 の墓前域に堆積する自然堆積層、大別 6 層（細別 22 層）は墓前域下半に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 6 層は造墓直後に横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられる。大別 5 層と大別 6 層の層理面と横穴墓の掘方底面で遺物が面的に一定量出土しており、この面が ST12 における初葬の面と考えられる。

【出土遺物】土師器 88 点（11 個体、破片 77 点）、須恵器 93 点（17 個体、破片 76 点※うち 6 個体、破片 9 点は遺構間接合遺物）、玉製品 80 点、金属製品 18 点（その他不明小破片多数）が出土した（第 22・23 表）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれ、玄室は玉製品・鉄製品、墓前域は土師器・須恵器が主体である（第 94～96 図）。土師器 11 個体、須恵器 17 個体、管玉 2 点・棗玉 1 点・ガラス製小玉 77 点、鐔 1 点・刀子 2 点・鉄鏃 5 点・不明鉄製品 1 点の合計 117 点を図示した（第 99～109 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別１層（細別8～11層底面）出土遺物**、**B：大別３層（細別16層底面）出土遺物**、**C：大別５層（細別19～21層底面）・玄室底面出土遺物**の３群に分かれる。加えて、ST12では、別の横穴墓（ST7・9・13・20）で破砕された須恵器破片の一部がST12に混入したと考えられる遺物９点（第23表1）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**D：大別１層上半部（検出面～細別８層）**に混入したものと、**E:大別３層の堆積途中（細別16層上半部）**に混入したものがある。以上をまとめると、ST12関連遺物は、古い順からC→B→E→A→Dの５段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別５層（細別19～21層底面）・玄室底面出土遺物〕（第105～109図）

大別５層（細別18～21層）のうち、墓前域に分布する細別19～21層の底面〔＝墓前域底面直上〕と玄室底面で出土した遺物である（前項Cに相当）。土師器・須恵器・玉製品・金属製品が出土した。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれる。

玄室では土師器、須恵器、玉製品、鉄製品が出土した。土器類は、土師器坏小破片と須恵器フラスコ形瓶の小破片が出土したのみである。坏とフラスコ形瓶の破片には、墓前域出土の破片と接合するものがある。玉製品は棗玉１点（第106図7）・ガラス製小玉77点（第107図1～40・第108図1～37）、金属製品は鐔１点（第109図5）・刀子１点（第109図4）・不明金属製品破片が出土した。いずれも玄室底面に堆積する泥化した土壌内から出土したため位置は特定できていないが、ST12の初葬時に使用された遺物と考えられる（第96図）。

墓前域では土師器、須恵器、玉製品、金属製品が出土した。内訳は土師器坏５個体（第105図3～7）・高坏２個体（第106図1・2）、須恵器フラスコ形瓶２個体（第106図3・4）、管玉２点（第106図5・6）、鉄鏃４点（第109図3）と図示できなかった土師器坏・甕破片である（第22・23表）。墓前域の羨門～屈曲部内で鉄鏃・管玉、墓前域屈曲部付近で土師器坏・高坏・管玉、墓前域下半で土師器坏・須恵器フラスコ瓶が出土した（第95図）。土器類はいずれも破片の状態での出土であり、完形出土のものはない。墓前域出土の第105図5の土師器坏（C-116）と第106図4のフラスコ形瓶（E-20）については接合する破片が玄室で出土している。以上の出土状況からみて、ST12の墓前域では土器類の破砕行為や玄室内の破片散布が行われていたと想定される。これらは墓前祭祀に伴う遺物と判断され、ST12の初葬に伴い使用した遺物の可能性が高い。

〔大別３層（細別16層底面）出土遺物〕（第105・109図）

大別３層（細別16層）の墓前域に堆積する細別16層の底面で出土した遺物である（前頁Bに相当）。須恵器蓋１個体（第105図2）・瑞1個体（第105図1）、刀子１点（第109図1）・鉄鏃１点（第109図2）と図示できなかった須恵器瓶類・甕破片が出土した（第22・23表）。

これらの遺物は、墓前域上半の同一面上でいずれも破片の状態で出土した（第95図）。玄室内では墓前域出土の瑞（第105図1）と接合する破片のみが出土している。墓前域内で破砕された瑞の破片が玄室内に散布されたと考えられる。出土遺物は少量ではあるが、本段階に須恵器の破砕行為を伴う墓前祭祀が実施されたと考えられる。堆積土の状況から、この段階のST12については、玄室への入室が可能な状態だったとみられる。須恵器瑞破片の出土状況から、少なくとも玄室への行き来はあったと考えられるが、追葬に伴うものかは判断ができない。

〔大別３層（細別16層上半部）出土遺物〕

大別３層の堆積土中（細別16層の上半部）から出土した遺物である（前頁Eに相当）。須恵器甕破片1点が墓前域で出土した（第23表1）。この須恵器甕破片はST9で破砕された後、ST12の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、**ST9由来の須恵器甕（E-135／第76図1)**と接合する。大別３層堆

積途中の段階に「ST9 から ST12 墓前域への須恵器の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

〔大別１層（細別 8～11 層底面）出土遺物〕（第 99～104 図）

大別１層（細別 1～13 層）のうち、墓前域に堆積する細別 8～11 層の底面〔＝大別 4 層（細別 15 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 A に相当）。土師器鉢 1 個体（第 99 図 4）・甕 3 個体（第 99 図 1～3）、須恵器短頸壺 1 個体（第 99 図 5）・長頸壺 1 個体（第 99 図 6）・広口長頸壺 2 個体（第 99 図 7・8）・横瓶 2 個体（第 100 図 1・2）・甕 7 個体（第 101 図～第 104 図）と図示できなかった土師器坏・甕破片、須恵器甕破片が出土した（第 22・23 表）。その他の非図示の遺物については、本段階（前項 A）もしくは次段階（前項 D）のいずれかに帰属する遺物と考えられる。

遺物の出土状況としては、ほぼすべての土器類が破片で散在した状態で出土している（第 94 図）。その分布は墓前域のほぼ全域にわたる。このうち、図示した須恵器短頸壺 1 個体・広口長頸壺 1 個体・甕 4 個体については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓から出土している。具体的には第 99 図 5 の短頸壺(E-50)は ST21 出土遺物、第 99 図 8 の広口長頸壺(E-51)は ST34 出土遺物、第 102 図 2 の甕(E-139)は ST11・14 出土遺物、第 103 図 1 の甕（E-140）は ST7・11・20 出土遺物、第 104 図 1・2 の甕（E-143・144）は ST13 出土遺物と接合する（第 97・98 図）。この他、非図化の須恵器甕の破片ついても ST9・20・21 出土遺物と接合関係にある（第 23 表 1）。これらは墓前域における須恵器瓶・甕類の破砕散布行為の痕跡と考えられる。ST12 の墓前域で破砕された須恵器破片は、ST12 から少なくとも 8 か所（ST7・9・11・13・14・20・21・34）の横穴墓に散布されたと推定される。

本層の同一面出土の遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。遺物は同一面上で出土しており、破片の状態で原位置を保ったまま埋没したものとみられる。

堆積土の状況から、この段階の ST12 については、墓前域が半分以上埋没しているものの、玄室への入室は可能だったとみられる。玄室内では同時期の遺物が出土していないが、羨道から墓前域にかけて整地層が認められることから、本面での墓前祭祀は追葬に伴うものである可能性が高いと考えられる。

〔大別１層上半部出土遺物〕

大別１層（細別 1～13 層）のうち、堆積層上半部にあたる検出面～細別 8 層の堆積土中から出土した遺物である（前頁 D に相当）。須恵器盤破片 2 点・長頸壺破片 2 点・甕破片 4 点の合計 8 点が出土した（第 23 表 1）。大別１層では、この他に土師器坏・甕、須恵器瓶類・甕の破片も出土しているが、これらの遺物の帰属については前述のとおりである。

出土した須恵器破片 8 点は別遺構で破砕された後、ST12 の墓前域と玄室内に混入した遺構間接合遺物であり、ST7・13・20 由来の 3 者に分けられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST12 では、**ST7 由来の大型長頸壺(E-134／第 63 図 2)**と接合する破片が 2 点(体部破片)、**ST13 由来の須恵器甕(E-147／第 115 図 5)**と接合する破片が 4 点（体部破片）、**ST20 由来の須恵器盤(E-41／第 165 図 5)**と接合する破片が 2 点（口縁部破片）出土した。ST12 から ST7 は直線距離で約 20m 南西、ST13 は約 3m 東、ST20 は約 3m 西の地点に位置する。ST7 については接合する破片が ST12 の玄室内から出土しており、両者の位置関係からみても、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。この段階に「ST7 から ST12 の玄室内への須恵器長頸壺の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。ST13 と 20 については、ST12 と隣接する横穴墓であるため、「単なる遺物流入」「意図的な散布」の両者の可能性がある。ST13・20 は標高的に ST12 より高い地点に位置する。雨水等による遺物流入の想定が十分可能である。しかしながら、ST13・20 は、遺物の出土状況から、祭祀時に須恵器の破砕行為を行っていた可能性のある遺構でもあるため、破砕した須恵器の意図的散布も否定できない。以上のことから、ST12 と遺構間接合する ST13・20 の須恵器破片については、各遺構から「単なる遺物流入」「意図的な散布」両者の可能性を想定しておきたい。

第22表　ST12横穴墓　出土遺物一覧(1)

1．土器類－遺構単独出土－

種別				土師器					須恵器								
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／個体／破片	坏	鉢	高坏	甕	小計	蓋	瑞	長頸壺	広口長頸壺	フラスコ形瓶	横瓶	瓶類	甕	小計
玄室	－	底面	個														
			破	3 (10)				3 (10)									
墓前域	－	検出面	個				1 (70)	1 (70)									
			破	6 (30)			3 (55)	9 (85)								2 (250)	2 (250)
	1	6層	個														
			破	2 (25)				2 (25)									
		6･8層	個				1 (225)	1 (225)									
			破														
		8層	個				1 (130)	1 (130)				1 (255)		1 (1,690)		1 (415)	3 (2,360)
			破	1 (5)			5 (30)	6 (35)								32 (1,100)	32 (1,100)
		9層	個		1 (130)			1 (130)									
			破	2 (5)			1 (25)	3 (30)									
		10層	個														
			破													1 (5)	1 (5)
		11層	個														
			破													2 (15)	2 (15)
		7･8･11層	個													1 (5,525)	1 (5,525)
			破														
		8～11層	個								1 (495)			1 (2,090)		1 (520)	3 (3,105)
			破												1 (5)	15 (1,205)	16 (1,210)
	3	16層	個						1 (65)	1 (370)							2 (435)
			破												1 (5)	13 (295)	14 (300)
	5	18層	個														
			破				1 (5)	1 (5)									
		19層	個										1 (235)				1 (235)
			破	12 (50)			13 (210)	25 (260)									
		20層	個	1 (170)				1 (170)									
			破														
		底面直上	個	2 (255)		1 (50)		3 (305)									
			破	25 (180)				25 (180)									
		底面	個	1 (150)				1 (150)									
			破	3 (25)				3 (25)									
		19層＋底面(墓前)	個			1 (500)		1 (500)									
			破														
		19層＋底面(玄室)	個	1 (85)				1 (85)									
			破														
		底面(墓前＋玄室)	個										1 (1,250)				1 (1,250)
			破														
総合計	個体数(重量)			5 (660)	1 (130)	2 (550)	3 (425)	11 (1,765)	1 (65)	1 (370)	1 (495)	1 (255)	2 (1,485)	2 (3,780)		3 (6,460)	11 (12,910)
	破片数(重量)			54 (330)			23 (325)	77 (655)							2 (10)	65 (2,870)	67 (2,880)
	総重量			(990)	(130)	(550)	(750)	88 (2,420)	(65)	(370)	(495)	(255)	(1,485)	(3,780)	(10)	(9,330)	78 (15,790)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

第23表　ST12横穴墓　出土遺物一覧(2)

1. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	短頸壺	1 (265)	◆ST12　9層(墓前域) ◆ST21　4層(墓前域)	ST12	★ST12:4点 ◆ST21:1点	E 50	第99図5
須恵器	広口 長頸壺	1 (185)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST34　5層上半部(墓前域)	ST12	★ST12:3点 ◆ST34:1点	E 51	第99図8
須恵器	甕	1 (11,290)	◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　2･8～11層(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST12	◆ST11:1点 ★ST12:42点 ◆ST14:10点	E 139	第102図2
		(985)	◆ST12　8～11層・検出面(墓前域) ◆ST20　検出面(墓前域)	ST12	★ST12:6点 ◆ST20:2点　※E-139甕と類似	Y･E 115	－
		(320)	◆ST12　8～11層(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST12	◆ST12:1点 ◆ST20:3点　※E-139甕と類似	Y･E 116	－
		(530)	◆ST9　小横穴1　堆積土 ◆ST12　8層・検出面(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST12	◆ST9:1点 ★ST12:4点　※E-139甕と類似 ◆ST20:1点	Y･E 117	－
		(150)	◆ST12　検出面(墓前域) ◆ST20　検出面(墓前域)	ST12	◆ST12:1点 ◆ST20:1点　※E-139甕と類似	Y･E 118	－
		(240)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST12	◆ST12:1点 ◆ST20:1点　※E-139甕と類似	Y･E 119	－
		(390)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST21　2層(墓前域)	ST12	◆ST12:5点 ◆ST21:1点　※E-139甕と類似	Y･E 120	－
須恵器	甕	1 (7,330)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　堆積土(玄室)、8～11層(墓前域) ◆ST20　3層・検出面(墓前域)	ST12	◆ST7:(c)1点 ◆ST11:(a)1点＋(c)2点 ★ST12:(a)2点＋(b)1点＋(c)25点 ◆ST20:(a)6点＋(b)10点＋(c)2点	E 140 abc	第103図1
須恵器	甕	1 (6,210)	◆ST12　8～11層(墓前域) ◆ST13　12層(墓前域)	ST12	★ST12:101点 ◆ST13:1点	E 143	第104図1
須恵器	甕	1 (5,710)	◆ST12　2･8～11層(墓前域) ◆ST13　12層、検出面(墓前域)	ST12	★ST12:87点 ◆ST13:27点	E 144 Y･E 121	第104図2
須恵器	盤	1 (325)	◆ST12　検出面(墓前域) ◆ST20　7層上面(墓前域)	ST20	◆ST12:2点(小破片) ★ST20:3点(大破片)	E 41	第165図5
須恵器	大型 長頸壺	1 (4,575)	◆ST7　4･6･7層,8層上面(墓前域)、堆積土(玄室) ◆ST12　堆積土(玄室) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST7	★ST7:92点 ◆ST12:2点 ◆ST13:1点	E 134	第63図2
須恵器	甕	1 (1,730)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST13	◆ST12:4点 ★ST13:34点	E 147	第115図5
須恵器	甕	1 (19,875)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST9　2～5層(墓前域･羨門付近) ◆ST11　3層(墓前域) ◆ST12　16層上半部(墓前域)	ST9	◆ST7:1点 ★ST9:137点 ◆ST11:1点 ◆ST12:1点	E 135	第76図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST12出土須恵器の総数
(表22-1)遺構単独出土　11個体＋破片67点
＋
(表23-1)遺構間接合遺物　6個体＋破片9点　＝ 93 点

2. 玉製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	玉製品 石製 管玉	玉製品 石製 棗玉	玉製品 小計	玉製品 ガラス製 小玉	玉製品 小計
玄室	5	底面	個		1 (0.5)	1 (0.5)	77 (3.984)	77 (3.984)
			破					
墓前域	5	19層	個	1 (4.3)		1 (4.3)		
			破					
		21層	個	1 (4.2)		1 (4.2)		
			破					
総合計		個体数(重量)		2 (8.5)	1 (0.5)	3 (9.0)	77 (3.984)	77 (3.984)
		破片数(重量)						
		総重量		(8.5)	(0.5)	3 (9.0)	(3.984)	77 (3.984)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

3. 金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載/非掲載	金属製品 鐔	刀子	鉄鏃	不明鉄製品	小計
玄室	－	堆積土	掲					
			非掲				破片多数	破片多数
	1	4層	掲					
			非掲				3	3
	－	底面	掲	1	1		1	3
			非掲					
墓前域	－	検出面	掲					
			非掲				4	4
	3	16層	掲		1	1		2
			非掲				2	2
	5	19層	掲			4		4
			非掲					
器種別総合計	掲載遺物点数			1	2	5	1	9
	非掲載遺物点数						9＋破片多数	9 ＋破片多数
	総点数			1	2	5	9＋破片多数	18 ＋破片多数

※重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列:「掲」は図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数。
※器種不明小片の数量は「破片多数」とした。(ST12出土不明小片の重量:42.7g)

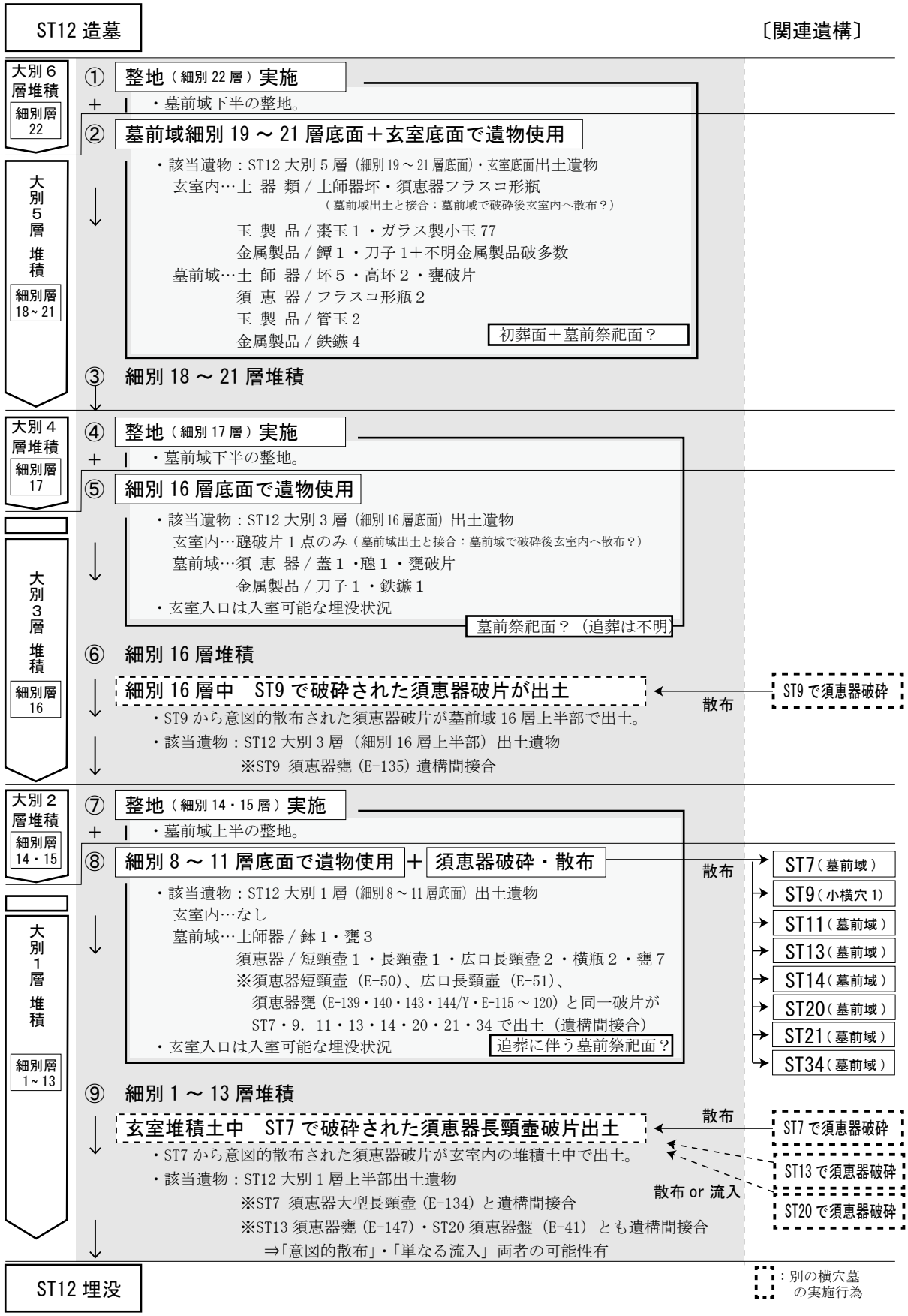
4. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
砂岩	円礫	16	10	5	1.3	砂岩	円礫	25	10	10	6.0	砂岩	角礫	23	14	14	9.6	頁岩	円礫	17	10	7	1.8	頁岩	円礫	30	17	10	9.7
砂岩	円礫	14	10	5	1.9	砂岩	円礫	25	15	9	7.0	砂岩	角礫	25	15	13	10.4	頁岩	角礫	16	13	10	3.0	頁岩	角礫	22	20	17	14.3
砂岩	円礫	18	15	5	2.3	砂岩	円礫	28	20	7	7.3	砂岩	円礫	30	20	17	15.7	頁岩	角礫	18	14	6	3.6	頁岩	円礫	30	20	16	19.9
砂岩	円礫	22	10	10	4.1	砂岩	円礫	20	18	13	7.6	砂岩	角礫	28	25	13	19.4	頁岩	角礫	20	15	10	3.6	頁岩	円礫	23	15	15	27.0
砂岩	円礫	20	13	8	4.4	砂岩	円礫	16	12	10	7.9	砂岩	円礫	30	23	17	34.1	頁岩	円礫	20	14	8	4.4	アプライト花崗岩	角礫	20	20	15	15.3
砂岩	円礫	20	12	12	4.7	砂岩	角礫	18	13	13	8.2	頁岩	円礫	10	8	5	0.7	頁岩	角礫	22	13	10	5.0	ひん岩	角礫	26	19	10	13.3
砂岩	角礫	25	19	10	4.7	砂岩	円礫	24	14	10	8.5	頁岩	角礫	20	8	5	1.5	頁岩	円礫	23	10	10	5.2	合計:38点／重量(kg)＝					316.1
砂岩	角礫	20	13	13	5.1	砂岩	円礫	19	14	10	9.1	頁岩	円礫	15	12	8	1.8	頁岩	円礫	25	15	10	6.7						

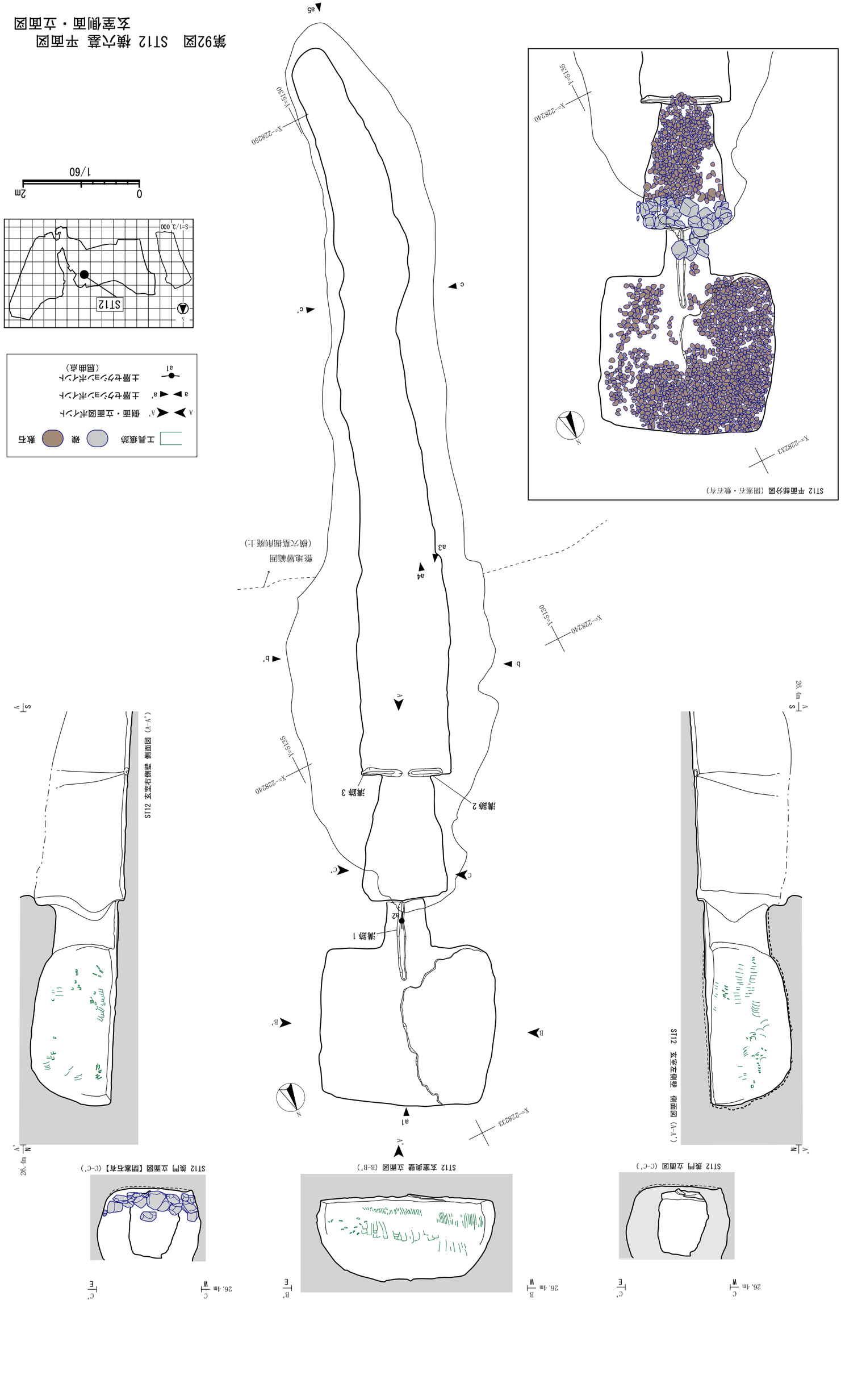
【まとめ】

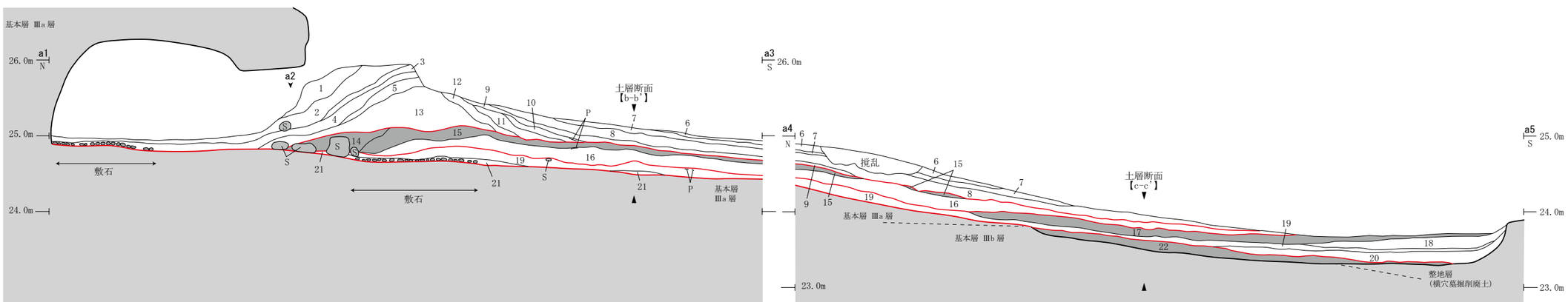
ST12 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST12 造墓・使用・埋没の経過〕



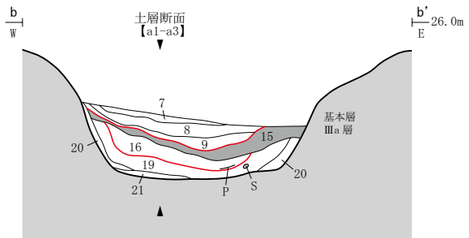
第92図　ST12 横穴墓 平面図 玄室側面・立面図



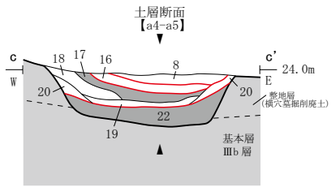


ST12 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕

ST12 墓前域 土層断面〔a4-a5〕



ST12 墓前域 土層断面〔b-b'〕



ST12 墓前域 土層断面〔c-c'〕

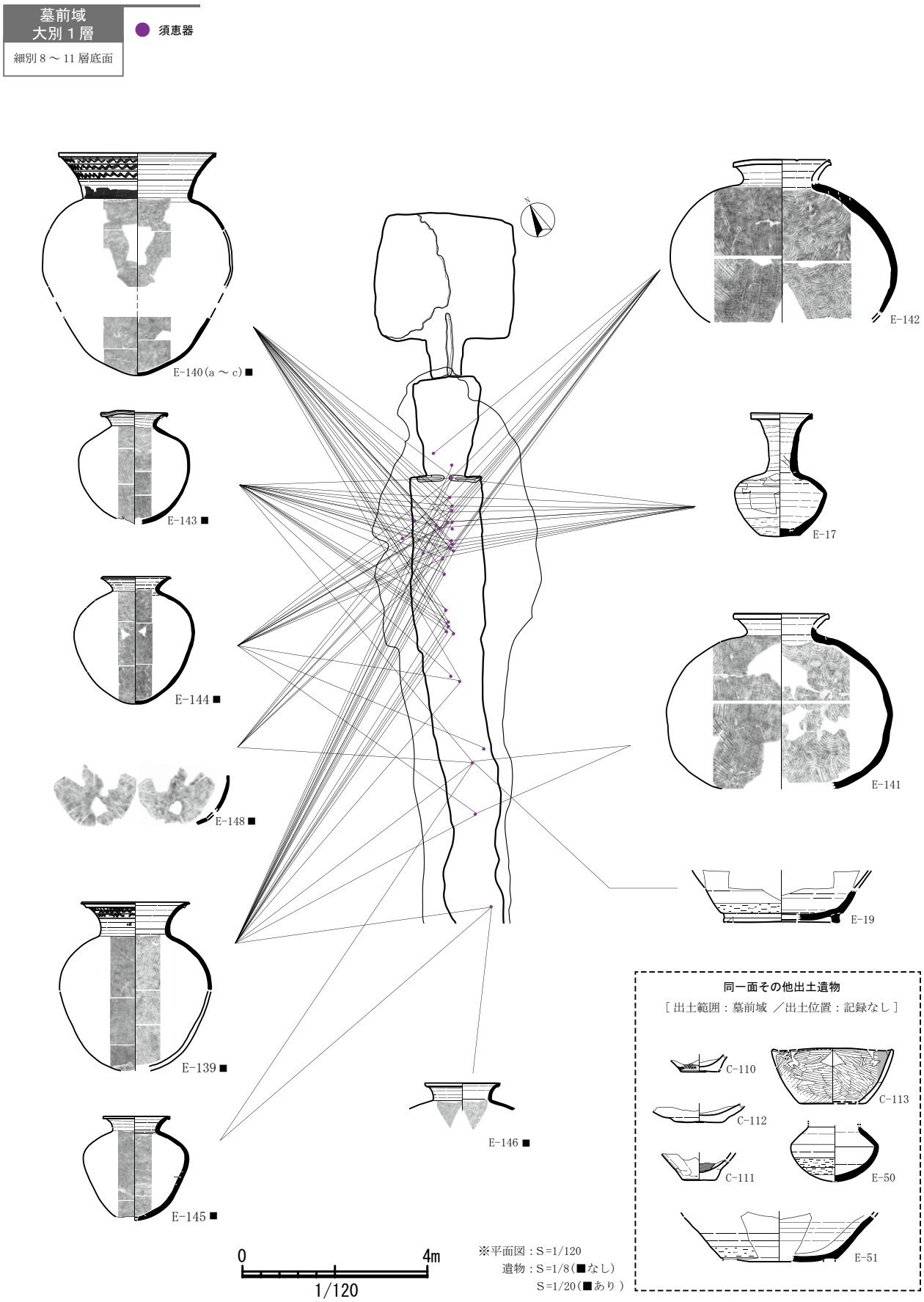
【土層図中の表記】

- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S　：礫
- P　：土器類
- ▼　：土層断面の屈曲点
- ▼▲　：各土層断面の交点

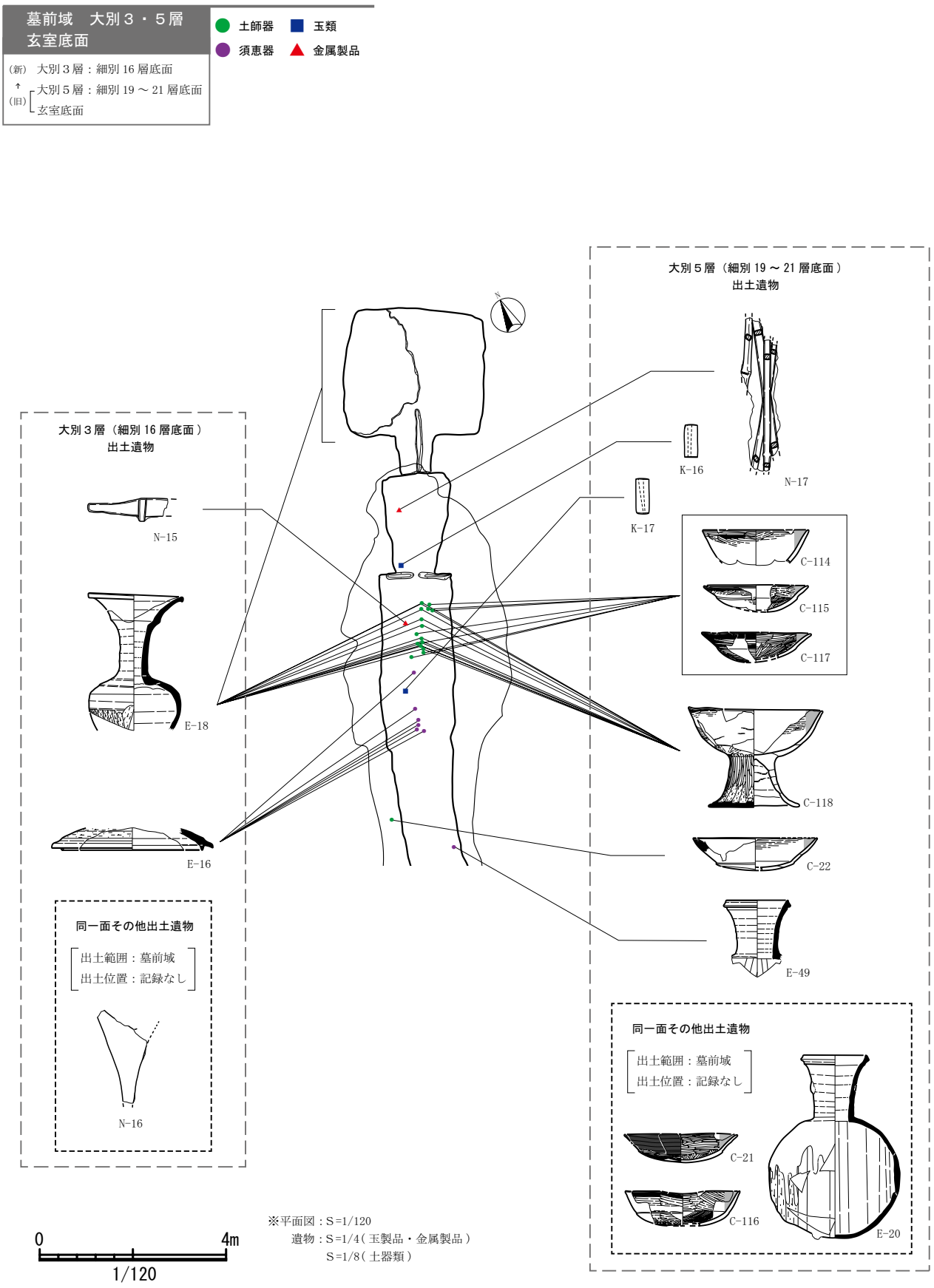
0　2m
1/60

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山粒子多量、地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック多量含む。		
3	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	地山ブロック多量、地山粒子微量。		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。		
5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック(小)多く含む。		
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子多く含む。炭化物片少量含む。		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物片(小)、地山粒子少量。		
8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片(小)、焼土粒子・地山粒子少量含む。		
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	黒褐色土粒子、地山粒子少量含む。		
10	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子少量含む。		
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック(小)・地山粒子少量、炭化物片含む。		
12	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒子少量含む。		
13	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山粒子多量、地山ブロック含む。		
14	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロック多量含む。しまり強。	2	人為堆積層(整地層)
15	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック多量、地山粒子少量含む。しまり強。		
16	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片(小)・地山粒子少量含む。	3	自然堆積層
17	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック(大)多量含む。	4	人為堆積層(整地層)
18	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒子・地山ブロック微量、炭化物片少量含む。	5	自然堆積層
19	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片(小)・地山粒子少量含む。		
20	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子少量含む。		
21	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロック(小)、地山粒子少量含む。		
22	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック多く含む。	6	人為堆積層(整地層)

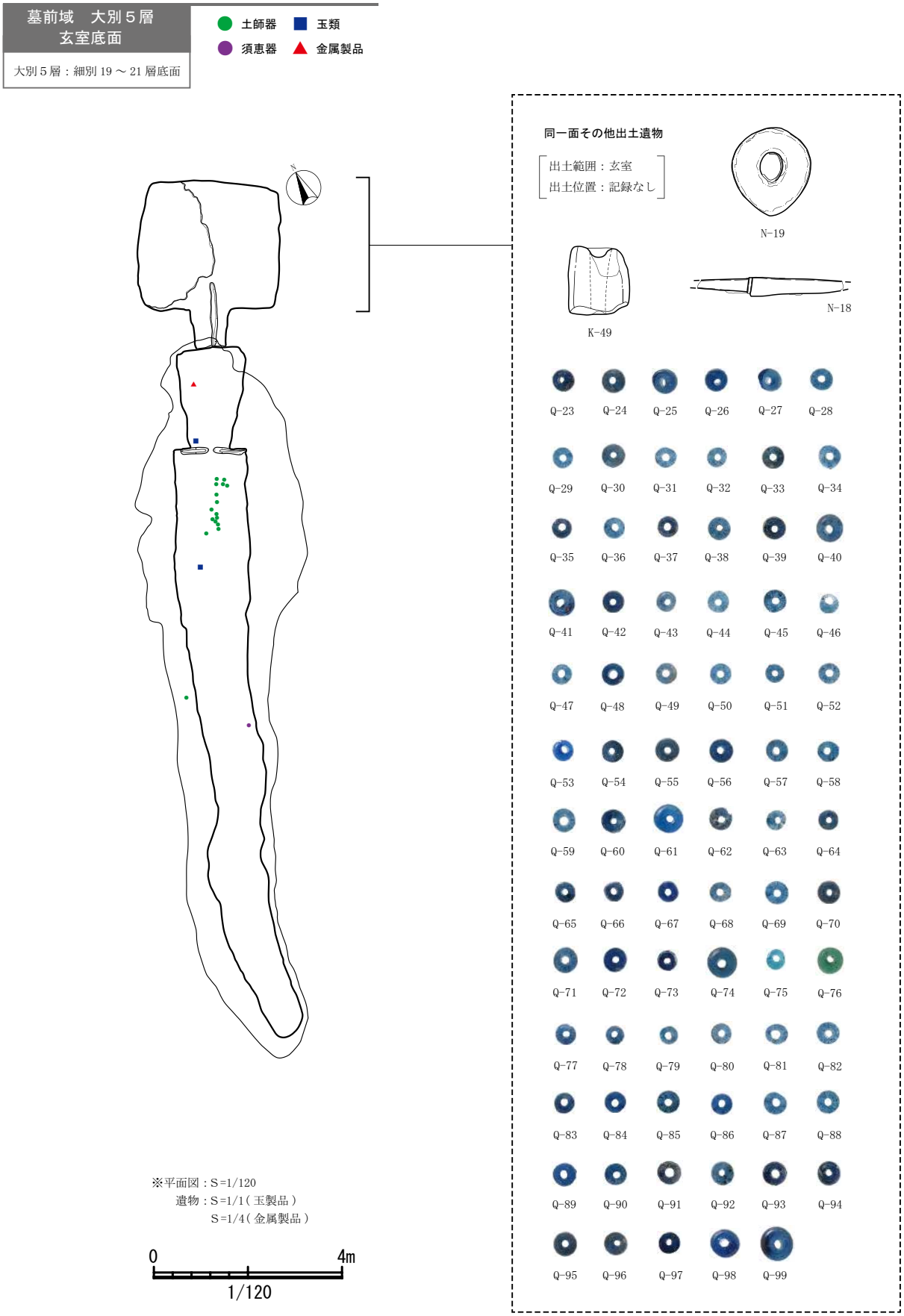
第 93 図　ST12 横穴墓 土層断面図



第94図　ST12 横穴墓 遺物出土状況図（1） －大別１層－



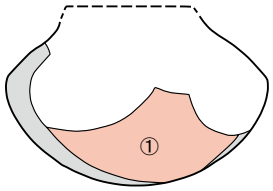
第95図　ST12 横穴墓 遺物出土状況図 (2)　－ 大別３・５層 －



第96図　ST12 横穴墓 遺物出土状況図 (3)　― 大別５層・玄室底面 ―

E-50　須恵器 短頸壺（第 99 図 5）

正面



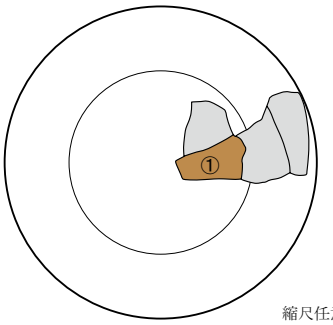
縮尺任意

塗り注釈
- ST12
- ① ST21
- 白抜 欠損箇所

出土層位
ST12 ［墓前域］9層
ST21 ［墓前域］4層

E-51　須恵器 広口長頸壺（第 99 図 8）

底面



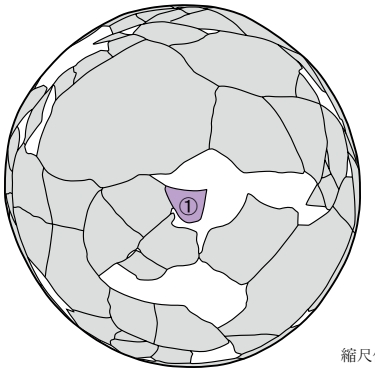
縮尺任意

塗り注釈
- ST12
- ① ST34
- 白抜 欠損箇所

出土層位
ST12 ［墓前域］8層
ST34 ［墓前域］5層上半部

E-143　須恵器 甕（第 104 図 1）

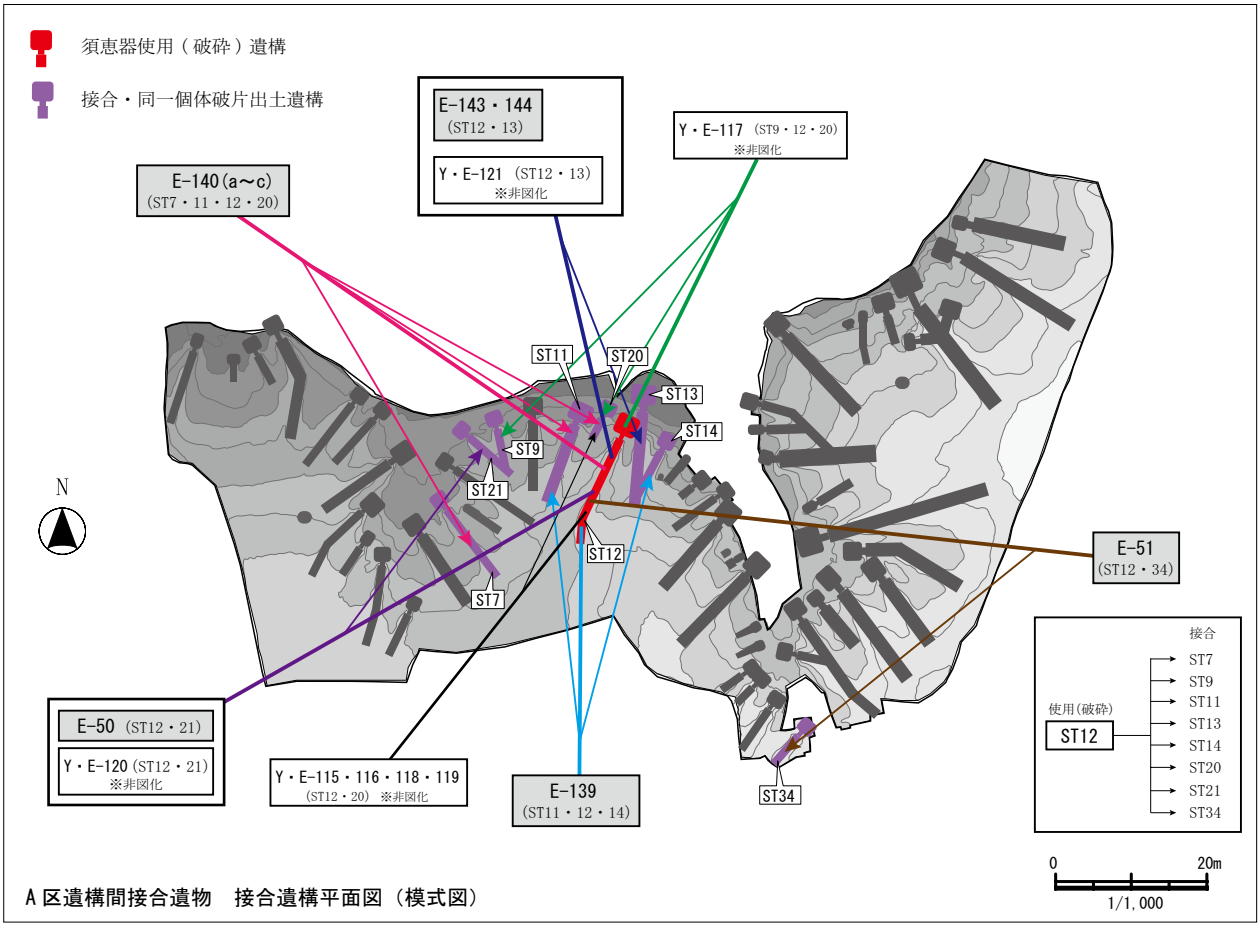
底面



縮尺任意

塗り注釈
- ST12
- ① ST13
- 白抜 欠損箇所

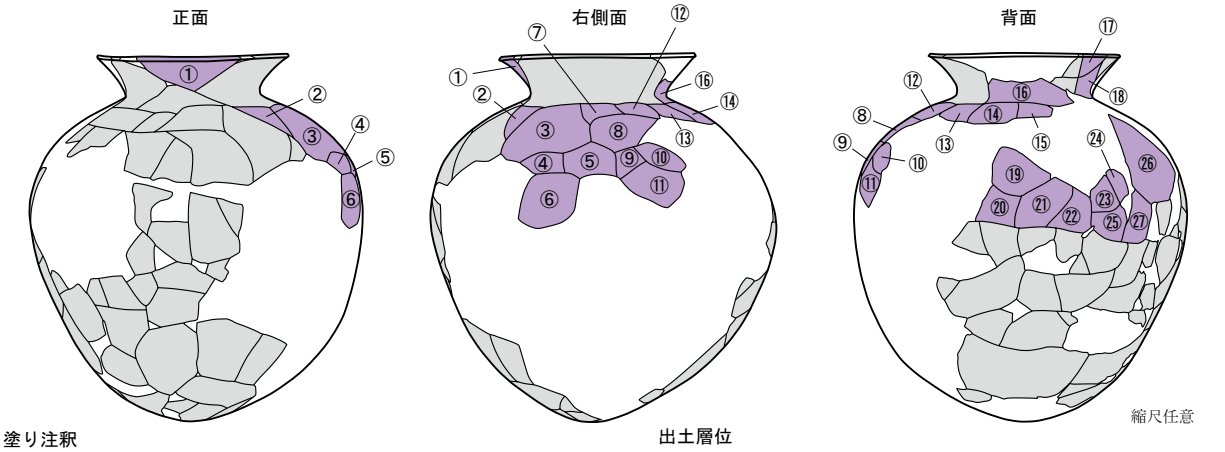
出土層位
ST12 ［墓前域］8～11層
ST13 ［墓前域］12層



A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第97図　ST12 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図（1）

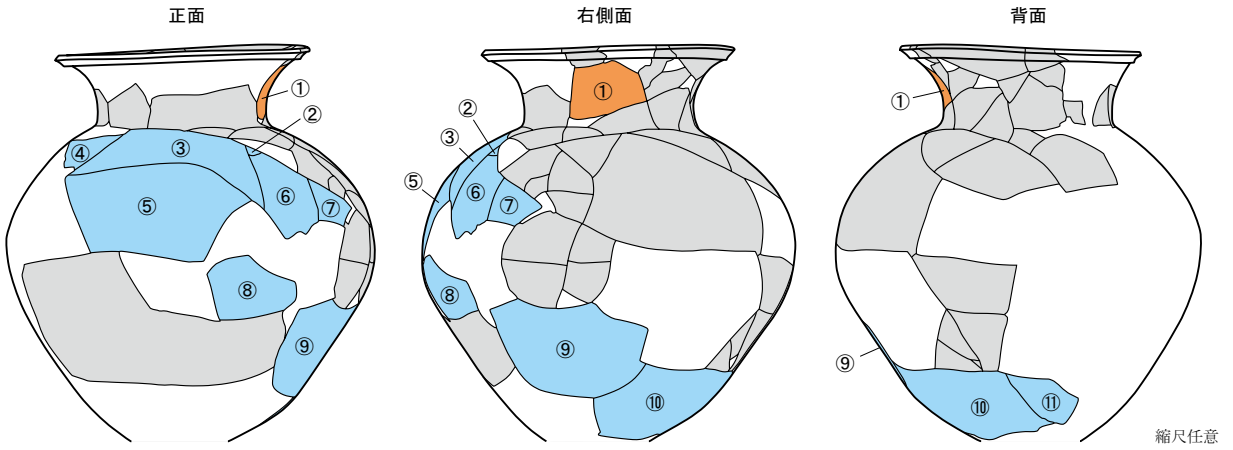
E-144　須恵器 甕（第 104 図 2）



塗り注釈：ST12　①～㉗ ST13　白抜 欠損箇所

出土層位：ST12　［墓前域］2・8～11層　ST13　［墓前域］12層・検出面

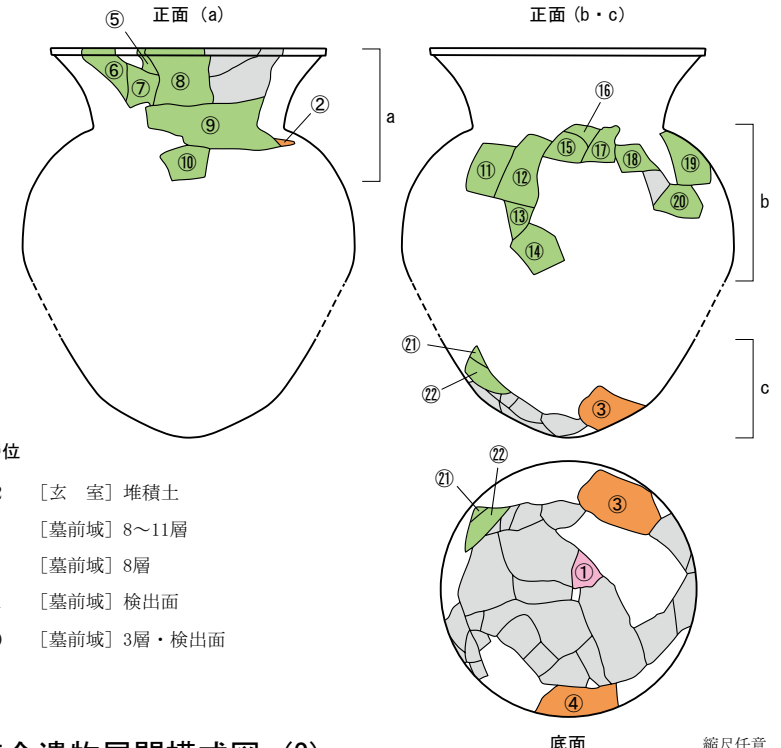
E-139　須恵器 甕（第 102 図 2）



塗り注釈：ST12　①ST11　②～⑪ST14　白抜 欠損箇所

出土層位：ST12　［墓前域］2・8～11層　ST11　［墓前域］検出面　ST14　［墓前域］7層

E-140(a～c)　須恵器 甕（第 103 図 1）

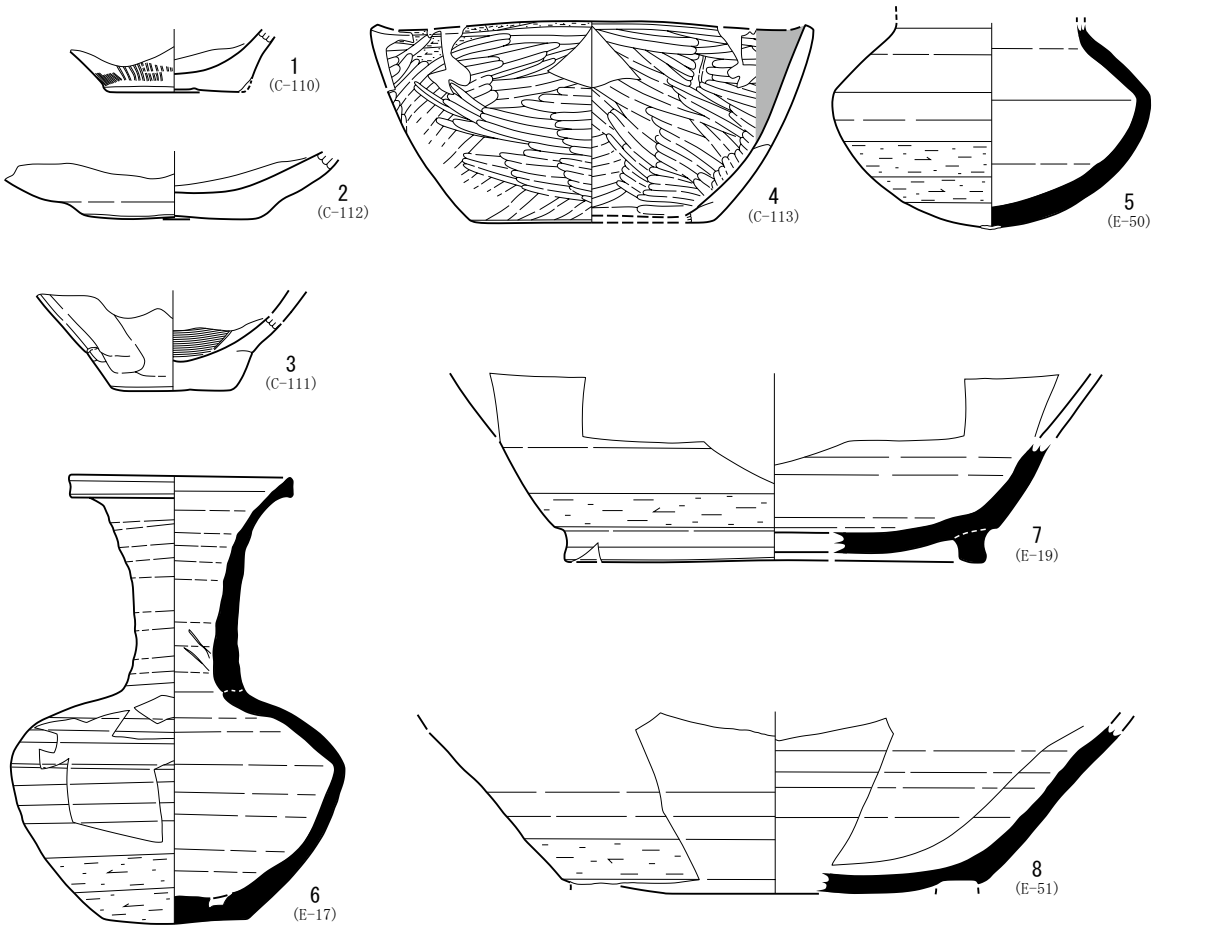


塗り注釈：ST12　①ST7　②～④ST11　⑤～㉒ST20　白抜 欠損箇所

出土層位：ST12　［玄　室］堆積土　［墓前域］8～11層　ST7　［墓前域］8層　ST11　［墓前域］検出面　ST20　［墓前域］3層・検出面

第98図　ST12 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図（2）

墓前域　大別１層

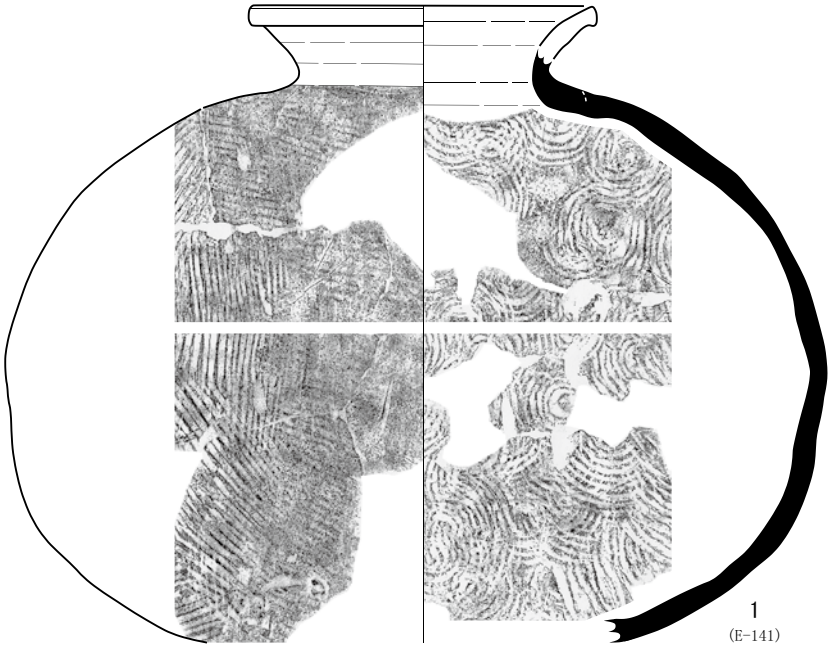


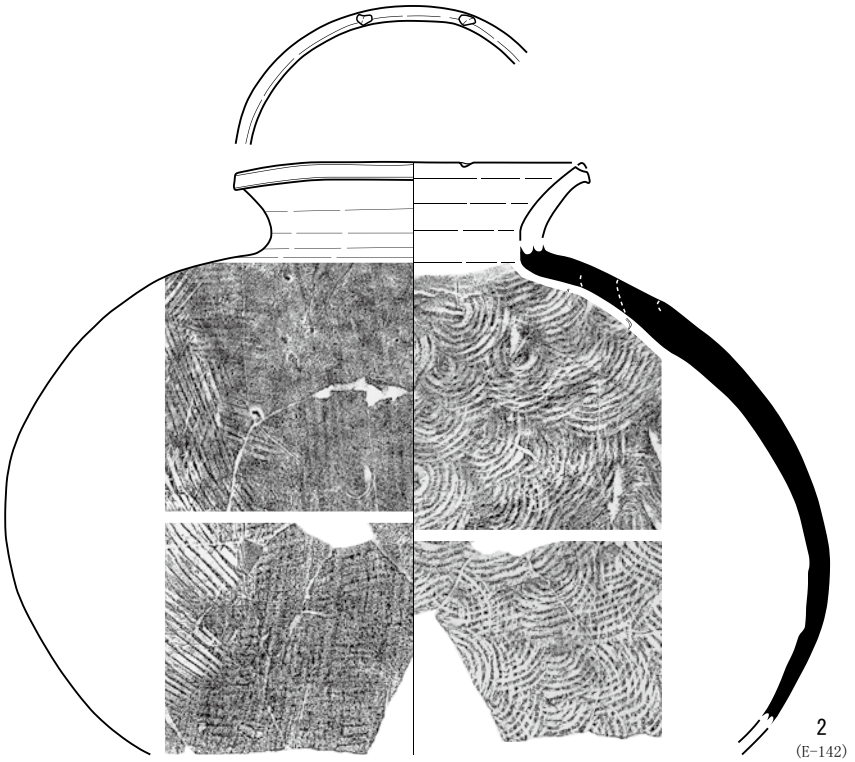
※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	検出面 (8層)	土師器 甕	【技法】外面：体部ハケメ・底部磨滅のため調整不明(ナデ？)、内面：磨滅のため調整不明 【法量】底径5.5cm・残存高2.5cm・器厚0.6～1.3cm	C-110	218-2
2	墓前域	6層 8層	土師器 甕	【技法】内外面：磨滅のため調整不明 【法量】底径7.5cm・残存高2.7cm・器厚0.9～1.3cm	C-112	218-4
3	墓前域	8層	土師器 甕	【技法】外面：体部ハケメ→ナデ・底部磨滅のため調整不明、内面：ヘラナデ 【法量】底径5.0cm・残存高3.9cm・器厚0.6～1.6cm	C-111	218-3
4	墓前域	9層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヘラ削りによる面取り・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：口縁部～体部ヘラミガキ・底部ナデ・黒色処理 【法量】口径(17.0)cm・器高(7.9)cm・底径(9.6)cm・器厚0.5～0.8cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-113	197-2
5	墓前域	◆ST12　9層 ◆ST21　4層	須恵器 短頸壺	◎遺構間接合　**ST12(主体)**＋ST21 【技法】外面：ロクロナデ・体部下半ヘラ削り・底部ヘラ切り無調整 内面：ロクロナデ 【法量】残存高8.1cm・器厚0.4～0.8cm	E-50	226-6
6	墓前域	8～11層	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明 内面：ロクロナデ・絞り目 【法量】口径8.7cm・器高17.8cm・底径5.8cm・器厚0.3～1.1cm	E-17	226-5
7	墓前域	8層	須恵器 広口長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】底径(16.6)cm・残存高7.5cm・器厚0.5～1.0cm	E-19	226-7
8	墓前域	◆ST12　8層 ◆ST34　5層上半部	須恵器 広口長頸壺	◎遺構間接合　**ST12(主体)**＋ST34 【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り・高台貼付(高台欠損) 内面：ロクロナデ 【法量】底径(16.0)cm・残存高7.0cm・器厚0.6～0.8cm	E-51	227-5

第99図　ST12 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層



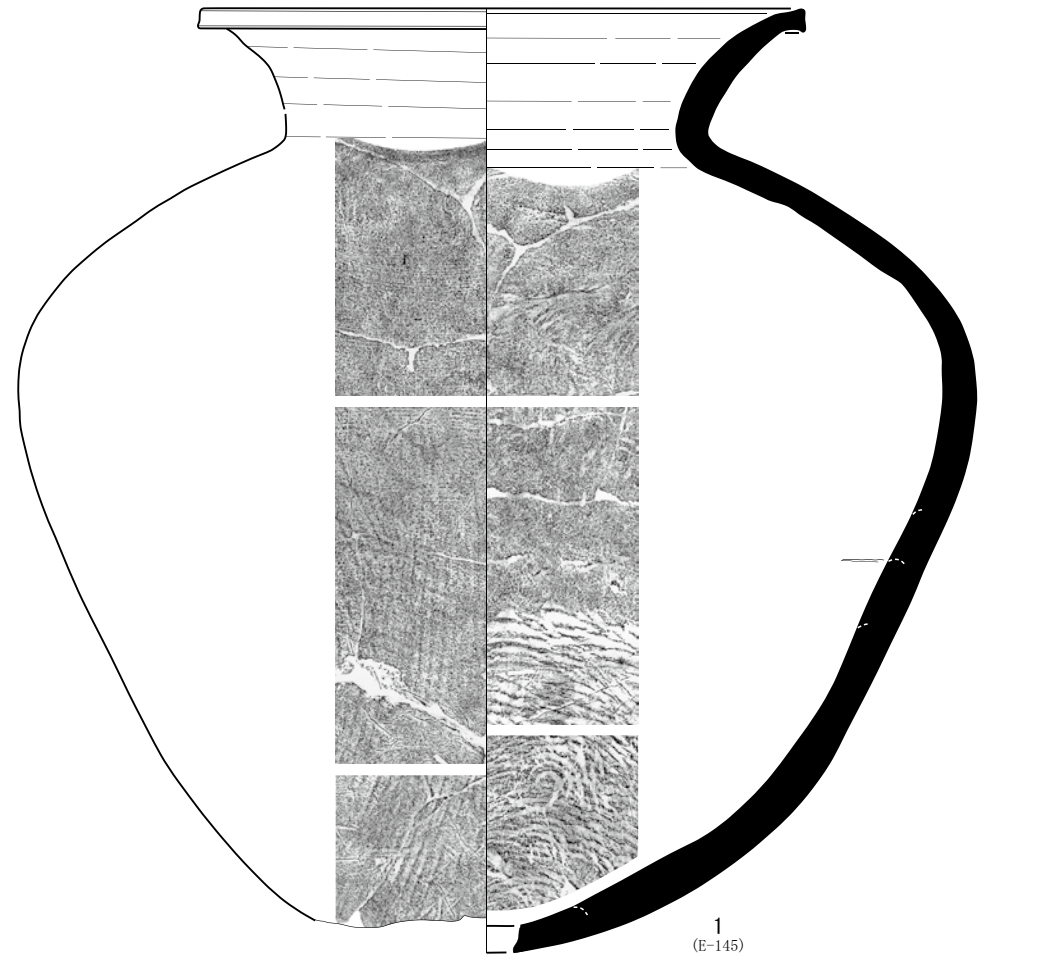


0　5　10cm
(S=1/3)　※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	8層	須恵器 横瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部中央平行タタキ→ロクロナデ・体部左右側平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径(13.5)㎝・残存高25.4㎝・器厚0.5～1.0㎝	E-141	226-1・2 269-6・7
2	墓前域	8～11層	須恵器 横瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部中心平行タタキ→ロクロナデ・体部横平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径13.7㎝・残存高23.6㎝・器厚0.5～1.4㎝	E-142	226-3・4 269-8・9

第100図　ST12 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

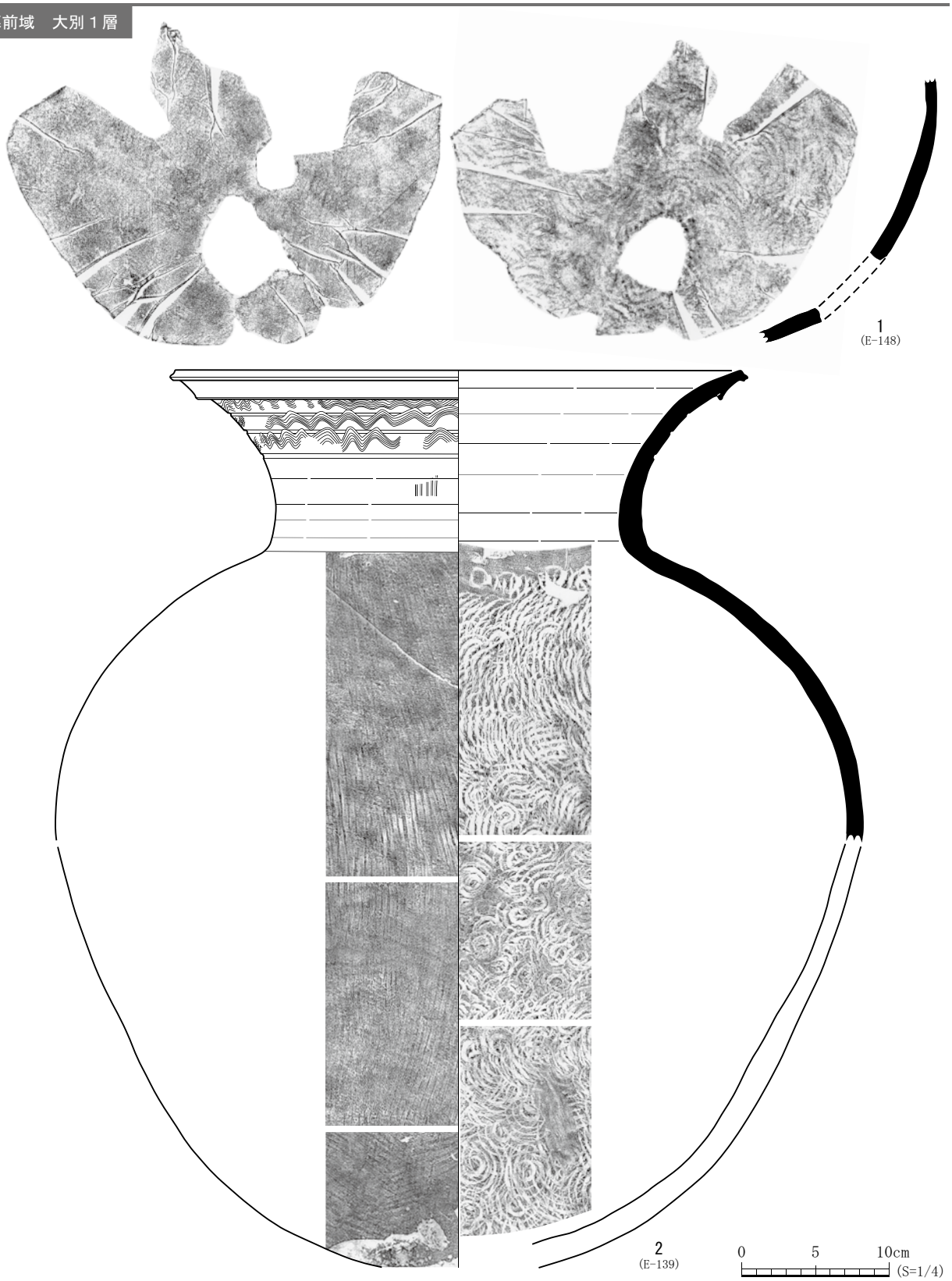


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	7層 8層 11層	須恵器 甕	【技法】 外面：口頸部ロクロナデ・体部上半平行タタキ→カキメ・体部下半平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部上半当て具痕(同心円)→ナデ・体部下半当て具痕(同心円) 【法量】口径(23.8)㎝・器高37.6㎝・器厚0.6～1.5㎝ 【特記事項】底部穿孔	E-145	243-2 269-12 269-13
2	墓前域	8層	須恵器 甕	【技法】外面：口唇部沈線・口頸部ロクロナデ・体部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径26.8㎝・残存高9.9㎝・器厚0.7～0.9㎝	E-146	242-2

第101図　ST12 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

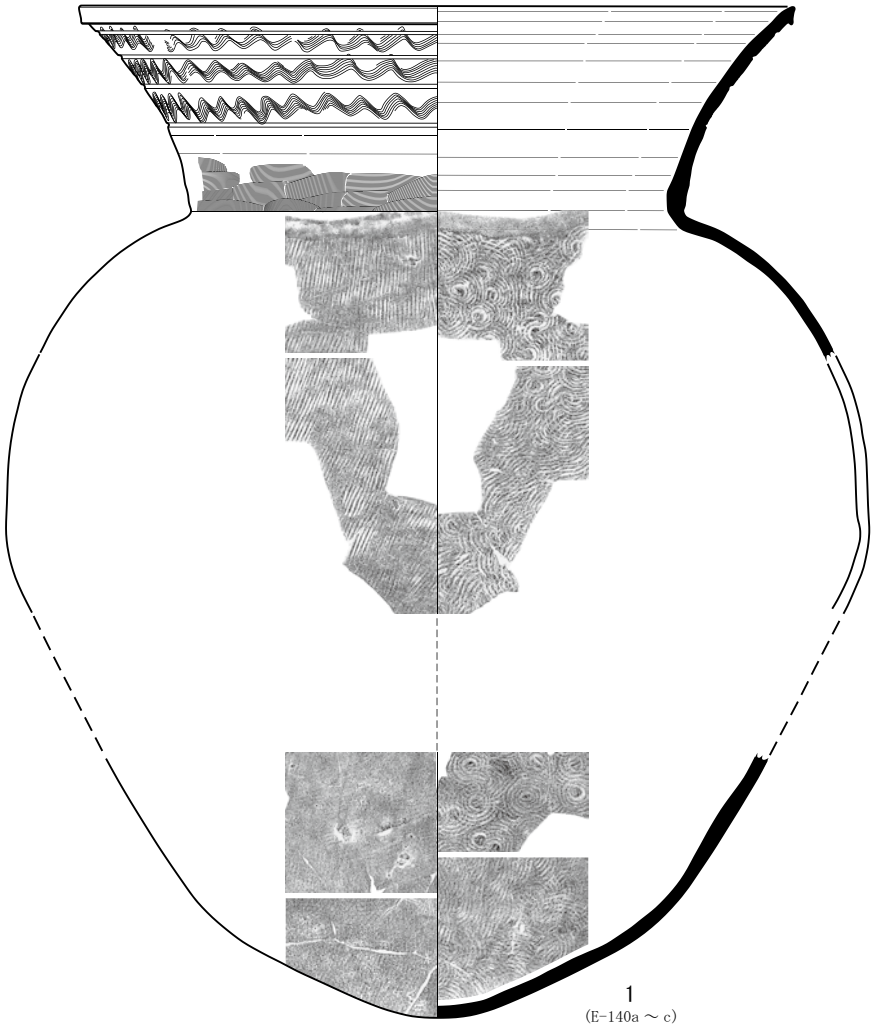
墓前域　大別１層



No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	8～11層	須恵器 甕	【技法】外面：平行タタキ→ナデ、内面：当て具痕(同心円) 【法量】器厚0.6～1.0㎝　【特記事項】穿孔有り	E-148	242-6
2	［ST11］墓前域 ＋ ［ST12・14］ 墓前域	◆ST11　検出面 ◆ST12　2層 8～11層 ◆ST14　7層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST12(主体)**＋ST11＋ST14 【技法】外面：口頸部平行タタキ→ロクロナデ→沈線→波状文・体部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径38.2㎝・残存高61.0㎝・器厚1.0～1.8㎝　【特記事項】類似破片多数有り(第23表)	E-139	244-1 269-1 269-2

第102図　ST12 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

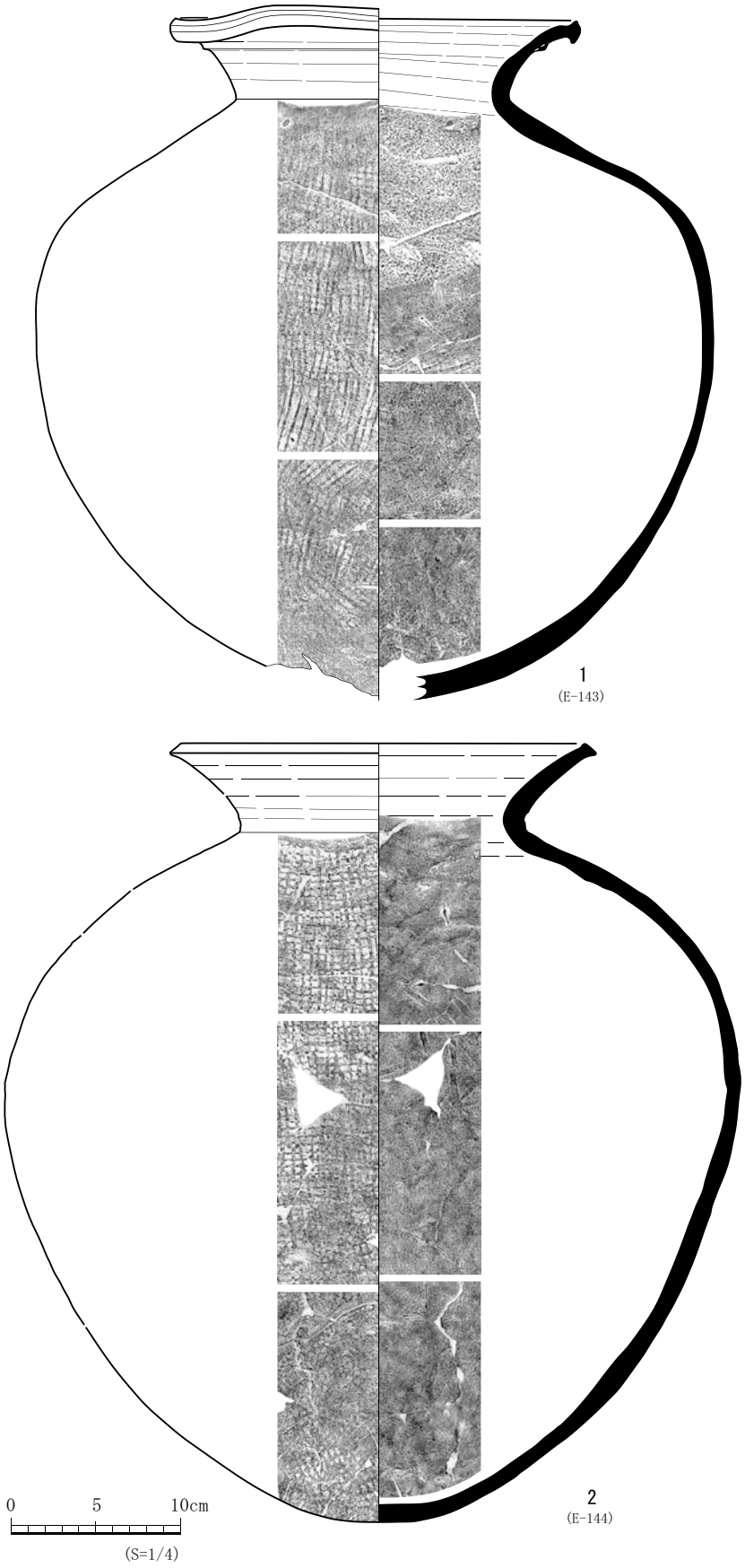


0　10cm
(S=1/6)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	[ST7]墓前域 ＋ [ST11] 墓前域 ＋ [ST12] 玄室・墓前域 ＋ [ST20]墓前域	◆ST7　8層 ◆ST11　検出面 ◆ST12　8～11層 堆積土(玄室) ◆ST20　3層 検出面	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST12(主体)**＋ST7＋ST11＋ST20 【技法】 外面：[E-140a・b]口縁部ロクロナデ→櫛描波状文→沈線・頸部ナデ・体部上位平行タタキ [E-140c]体部下位～底部平行タタキ→ナデ 内面：[E-140a・b]口頸部ロクロナデ・体部上位当て具痕(同心円) [E-140c]体部下位～底部当て具痕(同心円) 【法量】[E-140a・b]口径56.6cm・残存高48.2cm・器厚0.7～1.4cm [E-140c]残存高21.0cm・器厚0.8～1.2cm 【特記事項】焼台付着痕有り、口縁部歪み著しい E-140a・b(口縁部～体部上位)・E-140c(体部下位～底部)	E-140 a～c	242-3～5 269-3～5

第103図　ST12 横穴墓 出土遺物 (5)　－ 土器類 －

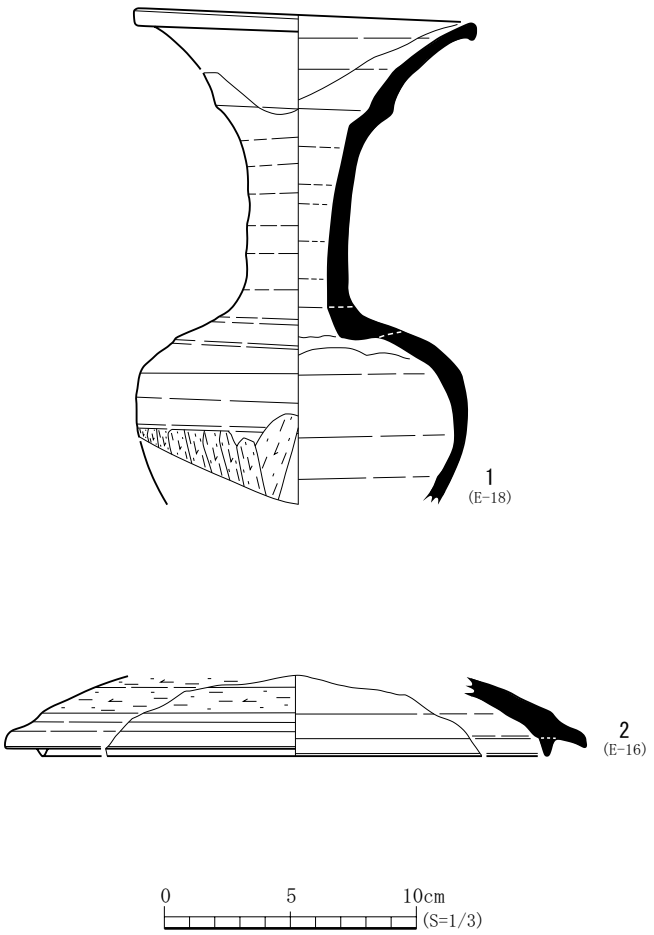
墓前域　大別１層



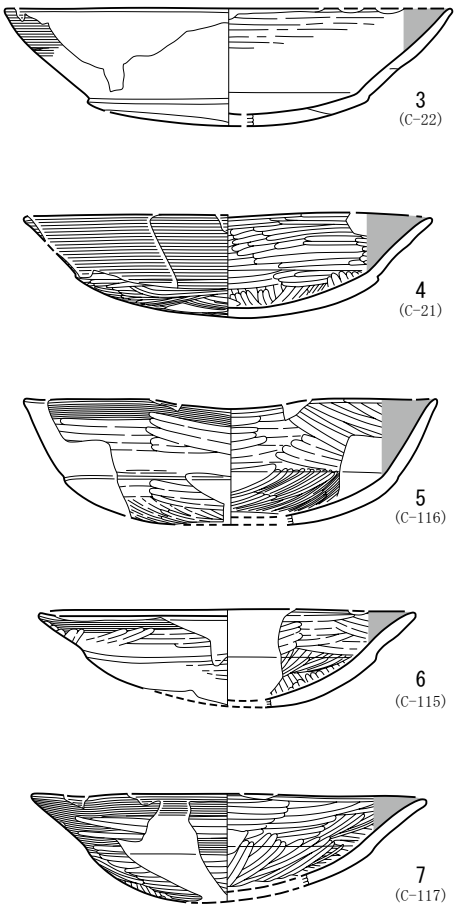
No.		
1	登録	E-143
	写真図版	242-7 269-10
	出土位置	墓前域
	細別層	◆ST12　8～11層 ◆ST13　12層
	種別・器種	須恵器　甕
	技法(外面・内面)・法量・特記事項	
	◎遺構間接合　**ST12(主体)**＋ST13 【技法】外面：口頸部ロクロナデ 体部格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ 体部当て具痕(同心円)→ナデ 【法量】口径23.7cm・残存高41.0cm 器厚0.5～1.3cm 【特記事項】底部穿孔	
2	登録	E-144
	写真図版	243-1 269-11
	出土位置	墓前域
	細別層	◆ST12　2層 8～11層 ◆ST13　12層 検出面
	種別・器種	須恵器　甕
	技法(外面・内面)・法量・特記事項	
	【技法】外面：口頸部ロクロナデ 体部格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ 体部当て具痕(放射状？)→ナデ 【法量】口径23.9cm・器高46.1cm 器厚0.7～1.2cm 【特記事項】遺構間接合の同一個体破片有り ［非図化／ST12(主体)＋ST13］	

第104図　ST12 横穴墓 出土遺物 (6)　－ 土器類 －

墓前域 大別３層



墓前域 大別５層

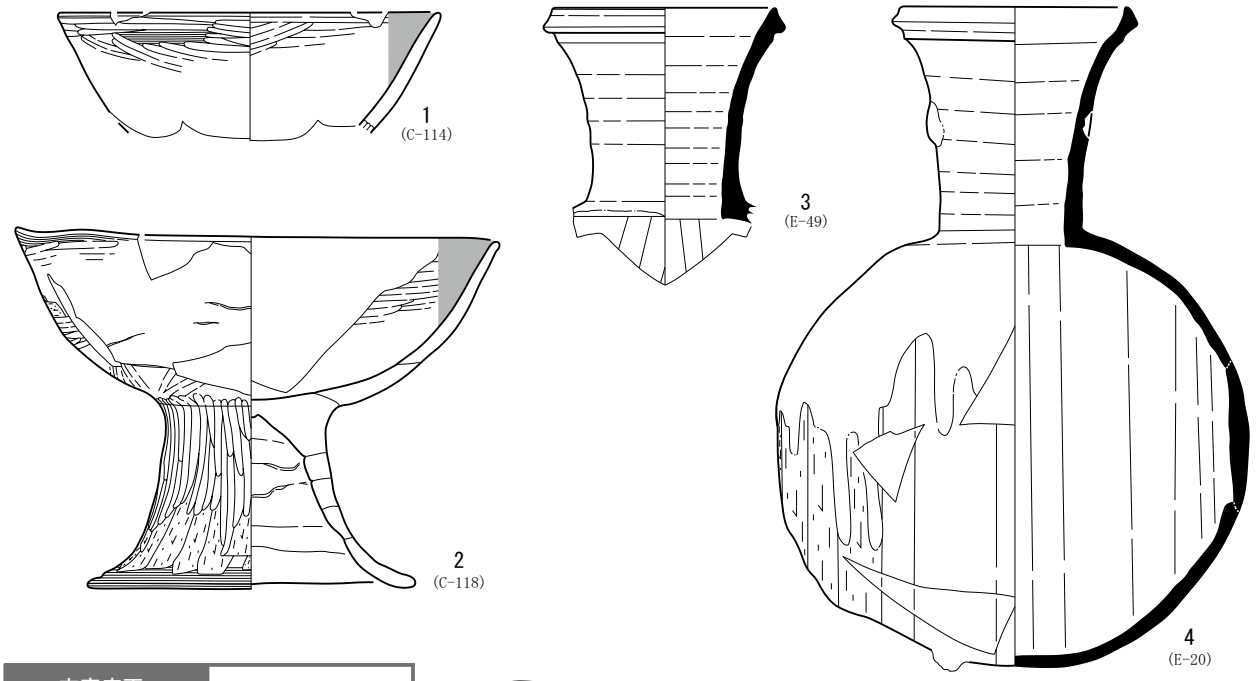


※(　) 内：推定値

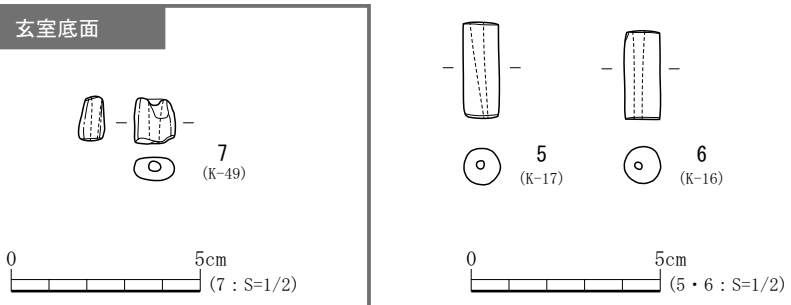
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室 ＋ 墓前域	底面(玄室) 16層(墓前域)	須恵器 甕	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半手持ちヘラ削り・円盤閉塞 内面：ロクロナデ 【法量】口径(13.2)cm・残存高19.2cm・器厚0.3～1.0cm	E-18	227-1
2	墓前域	16層	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ・天井部ヘラ削り・身受部貼付？ 内面：ロクロナデ 【法量】口径(23.0)cm・残存高3.2cm・器厚0.7～1.0cm・身受径(20.0)cm	E-16	219-6
3	墓前域	20層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(17.5)cm・器高4.7cm・器厚0.3～0.5cm	C-22	196-9 265-3
4	墓前域	底面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.9)cm・器高4.2cm・器厚0.3～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-21	196-8
5	玄室 ＋ 墓前域	底面(玄室) 19層(墓前域)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.2)cm・器高5.0cm・器厚0.3～0.6cm	C-116	196-11
6	墓前域	底面直上	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.8cm・器高3.9cm・器厚0.4～0.6cm	C-115	196-10
7	墓前域	底面直上	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.4cm・器高4.3cm・器厚0.3～0.5cm	C-117	196-12

第105図　ST12 横穴墓 出土遺物 (7)　－ 土器類 －

墓前域　大別５層



玄室底面



※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	底面直上	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】坏部口径(15.0)cm・残存高5.1cm・器厚0.4～0.6cm	C-114	213-8
2	墓前域	底面 19層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り・磨滅 [脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理・磨滅　[脚部]ナデ・オサエ 【法量】坏部口径(18.9)cm・器高14.4cm・脚裾部径13.0cm・器厚0.3～2.7cm	C-118	212-10
3	墓前域	19層	須恵器 フラスコ形瓶	【技法】外面：ロクロナデ・口縁部強いナデにより段を形成 内面：ロクロナデ 【法量】口径(9.0)cm・残存高11.0cm・器厚0.4～1.1cm・頸部高7.7cm	E-49	225-7
4	玄室 ＋ 墓前域 (羨門付近)	底面	須恵器 フラスコ形瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・突帯・体部ロクロナデ→回転ヘラ削り・円盤閉塞 内面：ロクロナデ 【法量】口径8.8cm・器高26.3cm・器厚0.4～0.7cm・頸部高8.9cm	E-20	225-6

No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
5	墓前域	19層	石製品	管玉	碧玉	2.55	0.95	－	－	－	0.10～0.40	4.3	K-17	275-6
6	墓前域	21層	石製品	管玉	碧玉	2.35	1.00	－	－	－	0.20～0.30	4.2	K-16	275-5
7	玄室	底面	石製品	棗玉	琥珀	1.20	1.10	0.85	0.70	0.50	0.25～0.35	0.5	K-49	277-12

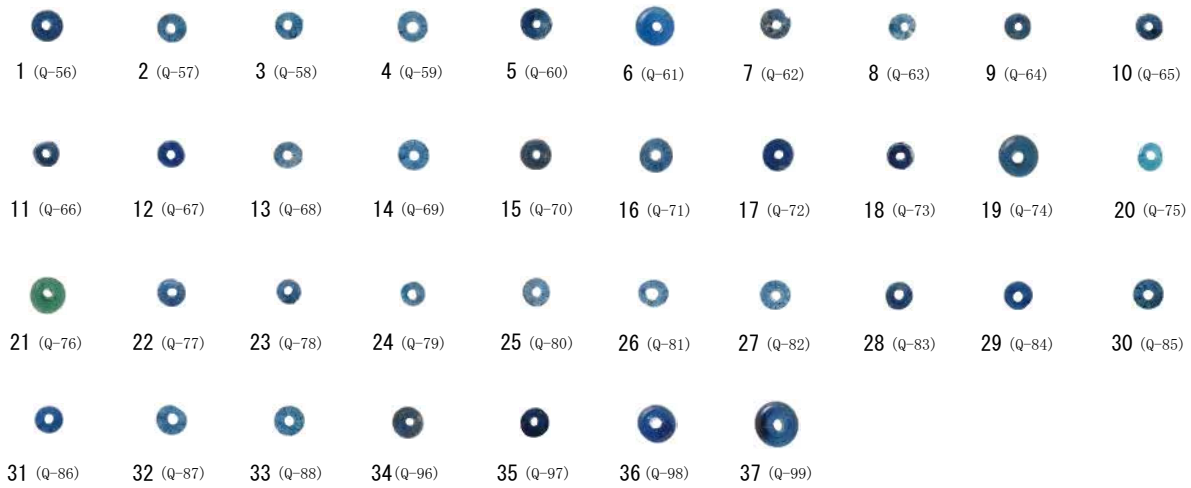
第106図　ST12 横穴墓 出土遺物 (8)　－ 土器類・玉製品 －

玄室底面

No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (㎜)	長 (㎜)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
1	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	—	紺・青	3.9	2.9	0.060	Q-23	280-5
2	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	紺・青	4.1	2.8	0.069	Q-24	280-6
3	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称	孔平行	孔内荒れ	青	4.4	2.9	0.079	Q-25	280-4
4	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	黒い不純物	青	3.8	2.9	0.061	Q-26	280-7
5	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	—	孔平行	—	青	4.0	2.3	0.056	Q-27	280-1
6	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	紺・青	3.8	2.4	0.051	Q-28	280-8
7	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	3.6	2.1	0.036	Q-29	280-9
8	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	4.1	2.4	0.058	Q-30	280-10
9	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	3.6	1.7	0.031	Q-31	280-11
10	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	不純物	紺・青	3.6	1.8	0.030	Q-32	280-12
11	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	3.8	1.9	0.036	Q-33	281-1
12	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	4.1	2.1	0.045	Q-34	281-2
13	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	3.5	1.8	0.028	Q-35	281-3
14	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	3.5	2.0	0.034	Q-36	281-4
15	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青	3.7	1.9	0.030	Q-37	281-5
16	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	不純物	紺・青	3.9	2.3	0.049	Q-38	281-6
17	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	黒い不純物	紺・青	4.0	2.5	0.052	Q-39	281-7
18	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称	孔平行	孔内荒れ	青	5.1	3.0	0.106	Q-40	279-1
19	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	—	孔平行	—	青／同心円状ムラ	4.7	2.7	0.088	Q-41	279-2
20	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	青／モザイク状	3.7	2.9	0.054	Q-42	281-8
21	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	孔平行	黒い不純物	青	3.6	1.8	0.030	Q-43	281-9
22	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	3.6	1.8	0.035	Q-44	281-10
23	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	4.0	2.0	0.042	Q-45	281-11
24	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	不整形	散在	—	青／モザイク状	3.5	1.9	0.022	Q-46	281-12
25	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	青／モザイク状	3.6	1.8	0.029	Q-47	281-13
26	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	4.0	2.2	0.049	Q-48	281-14
27	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	青／モザイク状	3.6	1.9	0.035	Q-49	281-15
28	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	青／モザイク状	3.7	1.9	0.037	Q-50	281-16
29	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	3.3	2.1	0.031	Q-51	282-1
30	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	3.6	1.7	0.031	Q-52	282-2
31	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	カリ	—	孔平行	—	青	3.7	2.2	0.036	Q-53	280-2
32	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	3.7	2.7	0.049	Q-54	282-3
33	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	4.1	2.7	0.061	Q-55	282-4
34	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	3.9	2.1	0.043	Q-89	284-2
35	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	3.6	2.1	0.041	Q-90	284-3
36	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	透明度低い	紺・青／モザイク状	4.0	2.6	0.051	Q-91	284-4
37	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	青／モザイク状	3.8	2.5	0.052	Q-92	284-5
38	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	—	紺・青／モザイク状	4.0	2.7	0.059	Q-93	284-6
39	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	4.0	2.6	0.061	Q-94	284-7
40	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺／モザイク状	4.0	2.7	0.065	Q-95	284-8

第107図　ST12 横穴墓 出土遺物 (9)　－ 玉製品 －

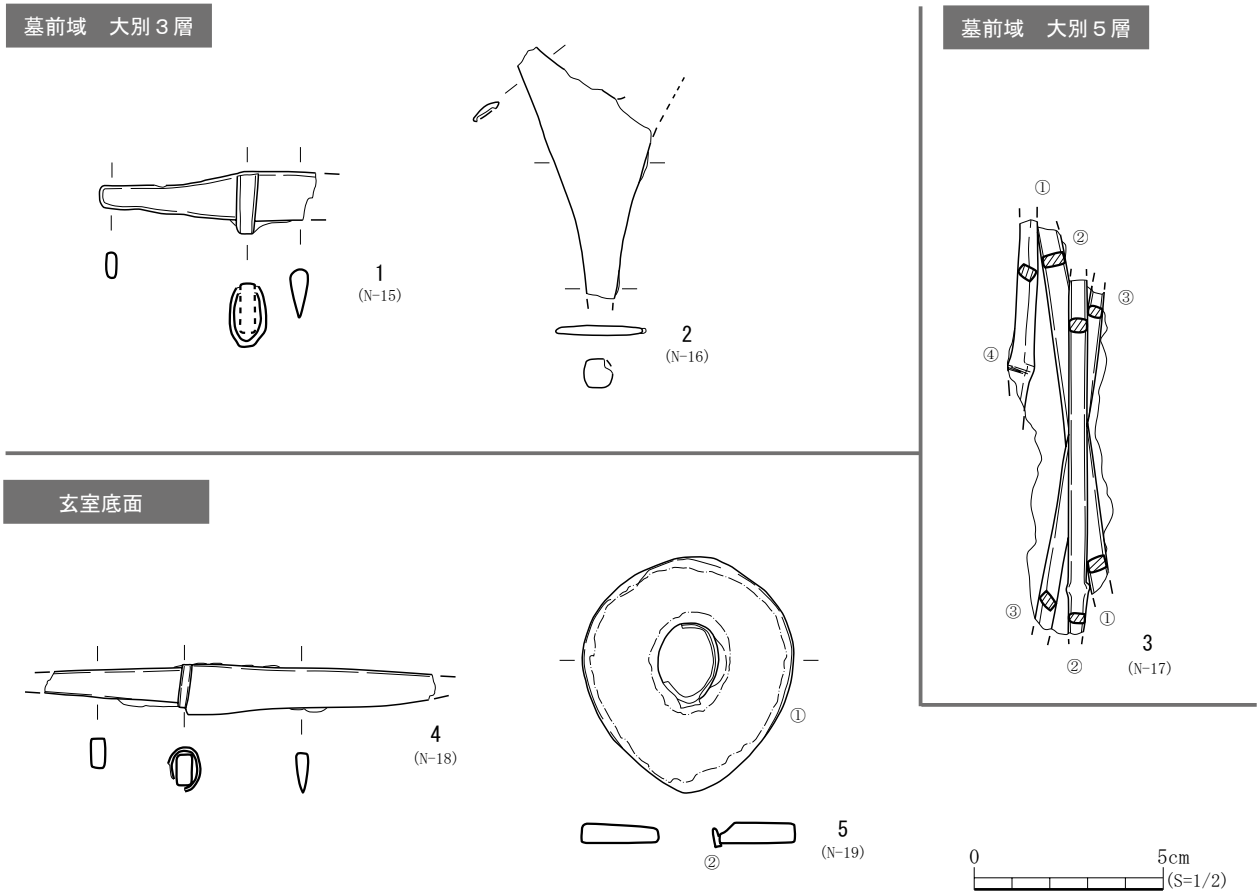
玄室底面



0　1cm
(S=1/1)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (㎜)	長 (㎜)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
1	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	4.0	2.9	0.062	Q-56	282-5
2	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.8	2.3	0.045	Q-57	282-6
3	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.7	2.3	0.038	Q-58	282-7
4	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	黒い不純物	青／モザイク状	4.0	2.0	0.042	Q-59	282-8
5	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	4.0	3.0	0.068	Q-60	282-9
6	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称	孔平行	孔内荒れ	青	5.2	2.6	0.100	Q-61	279-3
7	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	4.0	2.8	0.050	Q-62	282-10
8	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.5	2.0	0.025	Q-63	282-11
9	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.5	2.1	0.034	Q-64	282-12
10	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	3.5	2.3	0.037	Q-65	282-13
11	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.2	2.7	0.041	Q-66	282-14
12	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.5	2.0	0.037	Q-67	282-15
13	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	青／モザイク状	3.6	1.9	0.034	Q-68	282-16
14	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.9	2.1	0.048	Q-69	283-1
15	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	4.0	2.2	0.061	Q-70	283-2
16	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	青／モザイク状	4.4	2.5	0.064	Q-71	283-3
17	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	4.1	2.7	0.064	Q-72	283-4
18	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.4	3.5	0.056	Q-73	283-5
19	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称？	孔平行	孔内荒れ	紺	5.5	3.2	0.147	Q-74	279-4
20	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	－	孔平行	－	淡青	3.7	1.9	0.031	Q-75	280-3
21	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称？	孔平行	孔内荒れ	緑	5.0	3.0	0.112	Q-76	279-5
22	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.6	2.1	0.035	Q-77	283-6
23	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.1	2.1	0.026	Q-78	283-7
24	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.1	1.6	0.021	Q-79	283-8
25	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.5	1.6	0.030	Q-80	283-9
26	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.9	1.8	0.031	Q-81	283-10
27	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.9	2.0	0.039	Q-82	283-11
28	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.5	1.8	0.031	Q-83	283-12
29	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.5	2.2	0.040	Q-84	283-13
30	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	小突起	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	3.9	2.2	0.048	Q-85	283-14
31	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.6	2.1	0.042	Q-86	283-15
32	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	青／モザイク状	3.9	2.1	0.044	Q-87	283-16
33	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	青／モザイク状	3.9	1.9	0.042	Q-88	284-1
34	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	小突起	散在	黒い不純物	紺・青／モザイク状	4.0	2.7	0.061	Q-96	284-9
35	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	－	－	散在	－	紺・青／モザイク状	3.7	3.2	0.060	Q-97	284-10
36	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	－	孔平行	－	青	5.3	3.6	0.140	Q-98	279-6
37	玄室	底面	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称	孔平行	孔内荒れ	紺	6.0	3.7	0.187	Q-99	279-7

第108図　ST12 横穴墓 出土遺物（10） －玉製品－



※鉄鏃観察表　［全長］＝A＋B＋C／［鏃長］＝A＋B

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	墓前域	16層	金属製品	刀子	【法量】［刀身］残存長5.7cm　［刀部］残存長1.6cm・幅1.3cm　［茎部］長さ4.1cm ［鋒］残存長径1.6cm・短径1.0cm・幅0.6cm 【特記事項】無関・鉄製　【残存部位】刀身・鋒	N-15	312-6
4	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】［刀身］残存長10.3cm　［刀部］残存長6.5cm・幅1.3cm　［茎部］残存長3.8cm ［鋒］長径1.2cm・残存短径0.9cm・幅0.3cm 【特記事項】不均等両関(刃側：斜角)・鉄製　【残存部位】刀身・鋒	N-18	312-5
5	玄室	底面	金属製品	①鐔 ②不明鉄製品	①【法量】長径6.2cm・短径5.7cm・厚さ0.5cm 【特記事項】板鐔(無窓鐔)・鉄製　【自然科学分析】第2分冊 第4章 第6節参照 ②【法量】長径1.8cm・残存短径1.4cm	N-19	305-6

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
2	墓前域	16層	金属製品	鉄鏃	その他 雁股形	残存 6.7	3.6	残存 6.7	残存 6.7	—	—		N-16	315-4
3	墓前域 (羨門付近)	19層	金属製品	①鉄鏃	—	残存 9.8	0.6	残存 9.8	—	残存 9.8	—		N-17	315-5
				②鉄鏃	長頸鏃？	残存 9.3	—	残存 8.3	—	残存 8.3	残存 1.0	［茎関］棘関b		
				③鉄鏃	—	残存 9.0	—	残存 9.0	—	残存 9.0	—			
				④鉄鏃	長頸鏃？	残存 5.0	—	残存 4.0	—	残存 4.0	残存 1.0	［茎関］棘関b		

第109図　ST12 横穴墓 出土遺物 (11) － 金属製品 －

13 号横穴墓（ST13）（第 110～116 図、第 24 表、第 4 分冊 写真図版 51～56）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 25～28m の丘陵南斜面に位置する。同斜面の西側には ST12・20、東側には ST14 が隣接している。

【重複関係】 ST14 と重複し、これより古い（ST13→ST14）。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。なお、ST13 の調査は、ST13 の羨道～玄室の上部に位置していた施設（水タンク）移設の都合により、墓前域は平成 26 年度、羨道～玄室は平成 28 年度に精査を行っている。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室と羨道の全ての天井が残存し、玄門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 110 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 15.80m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.68m、玄室の中央幅 3.44m、奥壁幅 3.25m、前壁幅 3.28m、左側壁幅 2.60m、右側壁幅 2.74m、玄室底面から天井の高さ 1.60m を測る。床面積は約 9.0 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：家形を呈する。隅棟線のみ表現されているが、寄棟平入構造を意識した構造と考えられる。

底　　面：玄室左半に地山削り出しによる 2 段の台床（台床 1・2）があり、玄室右半の底面より階段状に高くなる。台床 1 は幅 0.60m、奥行 2.62m、底面からの高さ 0.08m、台床 2 は幅 0.80m、奥行 2.64m、底面からの高さ 0.16m を測る。床面積は、台床 1 が約 1.6 ㎡、台床 2 が約 1.8 ㎡である。玄室右半の底面は平坦で、奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。玄室右半の床面積は約 5.6 ㎡である。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。台床 1･2 の底面には直径 0.05～0.10m の河原石が敷き詰められていた。その総数は、台床 1 が 352 個（総重量 48.0kg）、台床 2 が 294 個（総重量 65.1kg）である。台床 2 と比較し、台床 1 には小型の川原石が多い。台床 1 と玄室右半の底面の境にも河原石 60 個（総重量 7.0kg）が残存していたが、これらは台床 1 の敷石が落下したものと考えられ、機能時の玄室右半の底面には敷石がない状態だったと推定される。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は方形を呈する。幅 0.88m、高さ 1.12m を測る。

工 具 痕：各壁と底面に幅 0.08～0.15m 前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦方向、底面と天井部が放射状である。天井部には工具による隅棟線が表現されているが大棟線は認められない。

付属施設：右半底面の壁際を巡る溝跡 1、台床 1 と 2 の奥壁と前壁側で溝跡 2・3 を確認した。その規模は幅 0.05～0.10m・深さ 0.04～0.05m を測る。溝跡 1 は、玄門付近から羨道の中心を通り羨門に至る溝跡 4 と接続する。位置的にみて排水溝と考えられる。

そ の 他：前壁・両側壁・奥壁の壁面で、棒状の鉄製品が打ち込まれた痕跡を確認した（写真図版 56）。その位置は、前壁左側壁側で 1 か所（棒状鉄製品 1）、左側壁で 1 か所（棒状鉄製品 2）、奥壁

で 4 か所（棒状鉄製品 3～6）、奥壁と右側壁のコーナーで 1 か所（棒状鉄製品 7）、右側壁で 1 か所（棒状鉄製品 8）、右側壁と前壁のコーナーで 1 か所（棒状鉄製品 9）の計 9 か所であり、いずれも玄室底面から高さ 1.1～1.3m の地点に位置する（第 112 図）。多くの棒状鉄製品は壁面に対しやや斜め下方から打ち込まれており、棒状鉄製品 1・2 についてはその一部が折れずに残存していた。これら鉄製品については、現地調査終了時に壁面ごと取り上げ、室内整理の段階で X 線等による内容確認・壁面からの取り外しを行っている。その結果、壁面に打ち込まれた棒状鉄製品には、鉄鏃・鉄釘が転用されたものが混在していることが分かっている。このうち、棒状鉄製品 1（第 116 図 7）と棒状鉄製品 3（第 116 図 6）を図示した。玄室内での位置関係から、これらの棒状鉄製品は、横穴墓機能時に壁面に打ち込まれたものと推定される。なお、棒状鉄製品 2 と 6 については、現場記録等のため壁面に刺さった状態のまま保存処理を行っている（写真図版 337-1・2）。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 1.07m、玄室側の幅 0.85m、墓前域側の幅 0.88m、玄門側の高さ 1.23m、墓前域側の高さ 1.23m を測る。

立 面 形：方形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：風化は進んでいるが、各壁に幅 0.08m 前後の工具痕跡がわずかに残存していた。工具痕の方向は、天井は玄門から羨門方向、壁側は横方向である。

付属施設：玄室玄門付近から羨道の中心を通り羨門に至る溝跡 4 を確認した。その規模は幅 0.08～0.15m・深さ 0.04m を測る。溝跡 4 は玄室側の溝跡 1、墓前域側の溝跡 5 と接続する。位置的にみて排水溝と考えられる。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.06m の段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ 1.60m、幅 0.32～0.48m、深さ 0.04m の溝跡 5 を確認した。溝跡 5 は羨道の溝跡 4 と接続する。溝跡 5 の上部には、0.08×0.07×0.02m（0.3 kg）～0.48×0.30×0.20m（49.9 kg）の角礫・円礫 30 個（総重量 478.8 kg）が残存しており、溝上面から高さ 0.3～0.5m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は花崗閃緑岩 29 個、斑レイ岩 1 個である（第 24 表 4）。溝跡 5 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 12.05m、上幅 2.9～4.2m、下幅 1.80～2.60m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.9m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.9m 程度である。

付属施設：羨門付近で溝跡 6、墓前域の左側面で小横穴 1・2、溝跡 7、小穴 1 を確認した。

溝跡 6 は羨門の墓前域側に位置する溝跡 5 と接続する溝跡で、長さ 1.13m、幅 0.10～0.18m、深さ 0.04m を測る。位置的にみて排水溝と考えられる。

小横穴 1 と溝跡 7 は墓前域の羨門左脇にあるテラス状の高まりと壁面、**小横穴 2** はその下方の左壁面、**小穴 1** はさらに下方の左壁面で確認した（第 110 図）。その規模は、小横穴 1 が奥

行 0.60m、奥壁幅 0.46m、入口幅 0.90m、高さ 0.50m、小横穴 3 が奥行 0.50m、奥壁幅 0.45m、入口幅 0.64m、高さ 0.25m、小穴 1 が幅 0.30m×0.20m、深さ 0.20m、溝跡 7 が長さ 0.70m、幅 0.16 m、深さ 0.03m を測る。これらはいずれも墓前域の左壁面に掘り込まれており、堆積層の確認から横穴墓に伴う遺構と判断した。

【堆積層】 ST13 横穴墓を覆う堆積層は細別 26 層・大別 4 層に分けた（第 111 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1・2 層〕

大別 1 層（細別 1～13 層）は ST13 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 2 層（細別 14～19 層）は玄室～墓前域上半に分布する地山ブロックを含む人為堆積層である。大別 2 層は整地層とみられ、大別 1 と大別 2 層の層理面で遺物が面的に出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。堆積層の状況からみて、この祭祀の段階では玄室への入室は可能だったと想定される。

墓前域大別 1 層の堆積後、ST13 の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 3・4 層〕

大別 3 層（細別 20～25 層）は ST13 の墓前域に堆積する自然堆積層、大別 4 層（細別 26 層）は墓前域下半に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 4 層は造墓直後に横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられる。大別 3 層と 4 層の層理面と横穴墓掘方底面で遺物が面的に出土しており、この面が ST13 における初葬の面と推定される。

なお､ST13 と重複する ST14 は､堆積土の観察から ST13 の大別 3 層堆積後に造墓されたと考えられる。

【出土遺物】土師器 30 点（3 個体、破片 27 点）、須恵器 44 点（6 個体、破片 38 点※うち 4 個体、破片 31 点は遺構間接合遺物）、土製品 1 点、金属製品 27 点（その他不明小破片多数）が出土した（第 24 表 1～3）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、玄室で土器類は出土していない（第 113 図）。土師器坏 2 個体・埦 1 個体、須恵器平瓶 1 個体・フラスコ形瓶 2 個体・甕 2 個体・壺または瓶類 1 個体、土製品 1 点、鉄鏃 2 点・棒状鉄製品 2 点の合計 14 点を図示した（第 115・116 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 12 層底面）出土遺物**、**B：大別 3 層（細別 23 層底面）・玄室底面出土遺物**の 2 群に分かれる。加えて、ST13 では、別の横穴墓（ST7・12）で破砕された須恵器破片の一部が ST13 に混入したと考えられる遺物 31 点（第 24 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C：大別 1 層の堆積途中（検出面および細別 12 層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST13 関連遺物は、古い順から B→A→C の 3 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層（細別 23 層底面）・玄室底面出土遺物〕（第 115・116 図）

大別 3 層（細別 20～25 層）のうち、墓前域に分布する細別 23 層の底面〔＝墓前域底面直上＋整地層細別 26 層上面〕と玄室底面で出土した遺物である（前項 B に相当）。土師器・土製品・金属製品が出土した。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれる。

玄室では金属製品のみが出土した。その内訳は、鉄刀や鉄鏃とみられる棒状の破片と器種不明の細片である（第 24 表 3）。遺存状態が悪く、図示できたものはない。破片数からみて、この段階の玄室内には、少なくとも鉄刀が 1 点以上納めされていたと考えられる。玄室内ではこの他に、壁面に打ち込まれた棒状鉄製品 9 点を確認しており、このうち前壁の棒状鉄製品 1（第 116 図 7）と奥壁の棒状鉄製品 3（第 116 図 6）の 2 点を図示した。壁面で確認した棒状鉄製品には、非図化のものも含め、先端が釘状の形態を呈すると鉄鏃状のものが混在しており、壁面には鉄鏃・鉄釘が打ち込まれたものと推定される。そのほとんどは壁面で折れた状態で残存していることから、その折れた破片は玄室底面で出土した細片の中

に含まれている可能性が高い。玄室内では底面付近の堆積層のみで金属製品が出土する。以上のことから、壁面に棒状鉄製品が打ち込まれた時期は、玄室底面の出土遺物と同時期または造墓後間もない時期とみておきたい。

墓前域では土師器、須恵器、土製品、金属製品が出土した。その内訳は土師器埦 1 個体（第 115 図 6)、須恵器平瓶 1 個体（第 115 図 7)・フラスコ形瓶 2 個体（第 116 図 1・2)、土製紡錘車 1 点（第 116 図 3)、鉄鏃 1 点（第 116 図 4）と図示できなかった土師器坏破片と鉄鏃破片である（第 24 表 1～3)。出土層位が特定できなかった堆積土出土として取り上げた鉄鏃 1 点（第 116 図 5）についても本段階のものとみられる。遺物の出土状況としては、土器類は破片で散在した状態で出土しており、墓前域下半のみに分布する（第 113 図)。出土遺物は少量ではあるが、これらは墓前祭祀で使用された遺物と推定される。なお、図示した須恵器平瓶 1 個体・フラスコ形瓶 2 個体については、接合する同一個体の破片が隣接する ST14 からも出土している（第 114 図)。これらは、出土位置からみて、他の横穴墓で確認している須恵器の破砕散布行為によるものでなく、ST13 で破砕された破片が自然流入したものと考えられる。

本層同一面の玄室・墓前域出土の遺物群は、ST13 における初葬とそれに伴う墓前祭祀で使用された遺物と推定される。墓前域の出土遺物は同一面上で一定の範囲内に分布しており、その多くが破片の状態で原位置を保ったまま埋没した可能性が高い。

〔大別 1 層（細別 12 層底面）出土遺物〕（第 115 図）

大別 1 層（細別 1～13 層）の墓前域に堆積する細別 12 層の底面〔＝整地層にあたる細別 15 層上面〕で出土した遺物である（前頁 A に相当)。検出面として取り上げた遺物についても本段階に属すると考えられる。土師器坏 2 個体（第 115 図 1・2)、須恵器壺または瓶類 1 個体（第 115 図 3)・甕破片 2 点（第 115 図 4・5）と図示できなかった土師器坏・甕破片、須恵器甕破片、不明金属製品破片が出土した（第 24 表 1・3)。

第 115 図 5 の須恵器甕（E-147）については、出土状況からみて、墓前域内で破砕されたものと推定される（第 113 図)。出土遺物は少量ではあるが、本段階に須恵器の破砕行為を伴う墓前祭祀が実施されたとみておきたい。堆積土の状況から、この段階の ST13 については、玄室への入室が可能な状態だったと想定される。玄室内では同時期の遺物が出土していないが、墓前域から続く整地層が玄室にも認められることから、本面での墓前祭祀は追葬に伴うものであった可能性が高い。なお、前述の第 115 図 5 の須恵器甕（E-147）については、接合する同一個体の破片が ST12 からも出土している（第 24 表 2、第 114 図)。ST13 から ST12 への「破砕須恵器の意図的な散布」の可能性が考えられるが、ST12 は ST13 と隣接する横穴墓であることから、「単なる遺物流入」も否定できない。ここでは両者の可能性を想定しておきたい。

〔大別 1 層（細別 12 層～検出面）出土遺物〕

大別 1 層の堆積土中（細別 12 層～検出面）から出土した遺物である（前頁 C に相当)。須恵器長頸壺破片 1 点・甕破片 30 点が墓前域で出土した（第 24 表 2)。

出土した須恵器破片は別遺構で破砕された後、ST13 墓前域に混入した遺構間接合遺物であり、ST7・12 由来の 2 者に分けられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST13 では、**ST7 由来の須恵器長頸壺(E-134／第 63 図 2)**と接合する破片が 1 点（体部破片）・**須恵器甕(E-132／第 62 図 1)**と接合する破片が 2 点（体部破片)、**ST12 由来の須恵器甕(E-144／第 104 図 2)**と接合する破片が 27 点（体部上半と口縁部破片）・**須恵器甕(E-143／第 104 図 1)** と接合する破片が 1 点（底部破片）出土した。

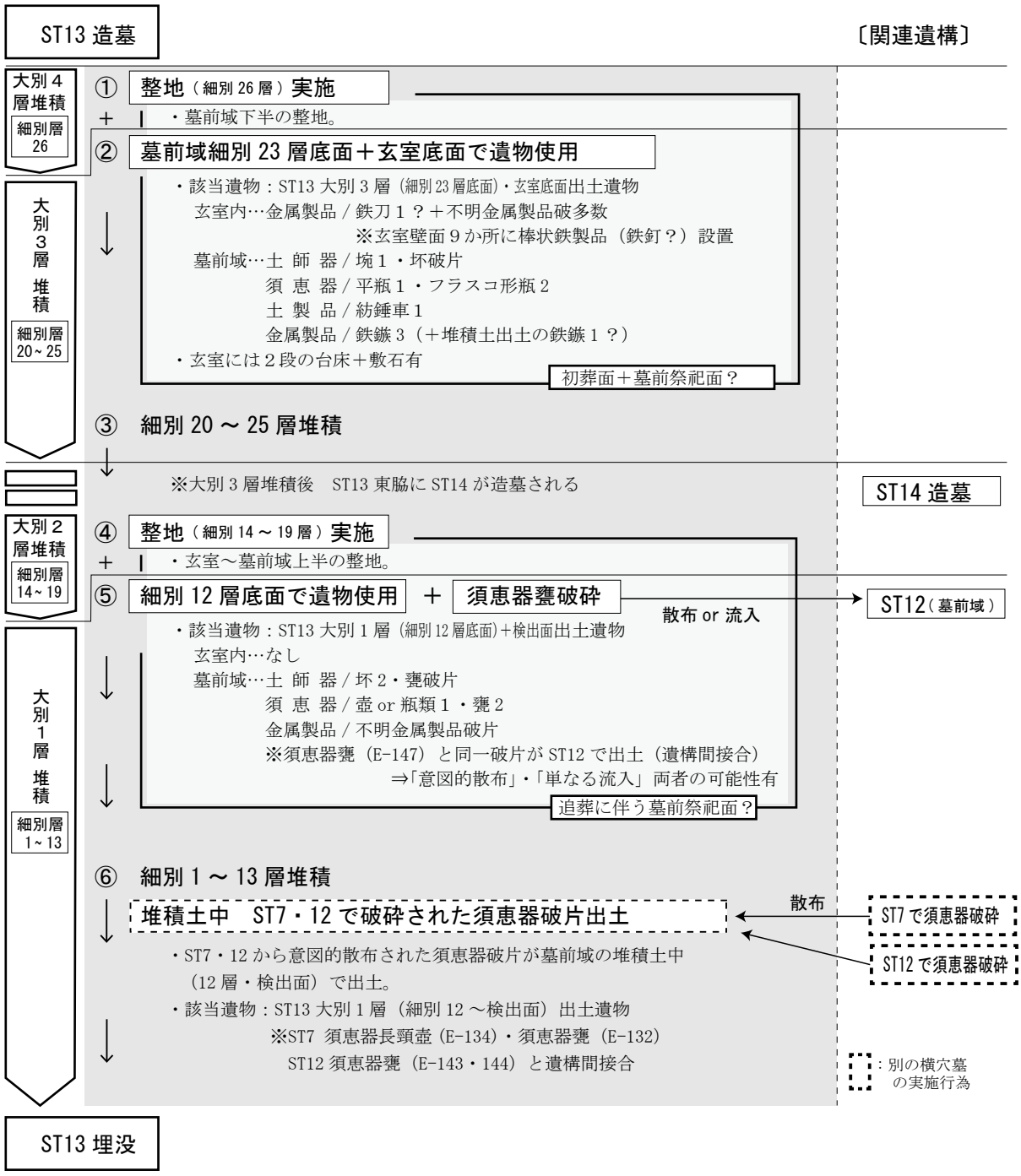
ST13 から ST7 は直線距離で約 25m 南西、ST12 は約 3m 西の地点に位置する。ST7 については両者の位置関係からみて、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。この段階に「ST7 から ST13 の墓前域への須恵

器甕の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。ST12 については、ST13 と隣接するが、ST13 より標高的に低い地点に位置する横穴墓であることから、ST12 から ST13 への雨水等による遺物の自然流入は不可能である。よって、ST12 についても ST13 への意図的な散布行為があったと考えられる。

【まとめ】

ST13 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST13 造墓・使用・埋没の経過〕



第24表　ST13横穴墓　出土遺物一覧

1．土器類・土製品－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体/破片	土師器 坏	土師器 埦	土師器 甕	土師器 小計	須恵器 壺・瓶類	須恵器 甕	須恵器 小計	土製品 紡錘車	土製品 小計
墓前域	－	撹乱	個									
			破	3 (20)		1 (5)	4 (25)					
	1	検出面（15層上面）	個					1 (35)	1 (60)	2 (95)		
			破						5 (20)	5 (20)		
		12層	個	1 (20)			1 (20)					
			破	8 (80)		4 (20)	12 (100)		1 (5)	1 (5)		
		15層上面	個									
			破	1 (5)			1 (5)					
		12層、15層上面検出面	個									
			破						1 (20)	1 (20)		
		検出面（17層上面）	個	1 (20)			1 (20)					
			破	1 (10)			1 (10)					
	3	23層	個									
			破	3 (20)			3 (20)					
		26層上面	個		1 (45)		1 (45)				1 (40.1)	1 (40.1)
			破	6 (25)			6 (25)					
総合計	個体数（重量）			2 (40)	1 (45)		3 (85)	1 (35)	1 (60)	2 (95)	1 (40.1)	1 (40.1)
	破片数（重量）			22 (160)		5 (25)	27 (185)		7 (45)	7 (45)		
	総重量			(200)	(45)	(25)	30 (270)	(35)	(105)	9 (140)	(40.1)	1 (40.1)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数（重量）	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係（★印が主体遺構）	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (1,730)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST13	◆ST12:4点 ★ST13:34点	E 147	第115図5
須恵器	平瓶	1 (65)	◆ST13　23層、26層上面(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST13	★ST13:2点 ◆ST14:2点	E 53a・b	第115図7
須恵器	フラスコ形瓶	1 (335)	◆ST13　23層(墓前域) ◆ST14　6・7・9層(墓前域)	ST13	★ST13:11点 ◆ST14:27点(小破片)	E 52	第116図2
須恵器	フラスコ形瓶	1 (20)	◆ST13　26層上面(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST13	★ST13:1点 ◆ST14:1点	E 54	第116図1
須恵器	大型長頸壺	1 (4,575)	◆ST7　4・6・7層、8層上面(墓前域)、堆積土(玄室) ◆ST12　堆積土(玄室) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST7	★ST7:92点 ◆ST12:2点 ◆ST13:1点	E 134	第63図2
須恵器	甕	1 (3,925)	◆ST7　4・6・7層、8層上面(墓前域) ◆ST13　検出面(墓前域)	ST7	★ST7:98点 ◆ST13:2点	E 132	第62図1
須恵器	甕	1 (6,210)	◆ST12　8～11層(墓前域) ◆ST13　12層(墓前域)	ST12	★ST12:101点 ◆ST13:1点	E 143	第104図1
須恵器	甕	1 (5,710)	◆ST12　2・8～11層(墓前域) ◆ST13　12層、検出面(墓前域)	ST12	★ST12:87点 ◆ST13:27点	E 144 Y・E 121	第104図2

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST13出土須恵器の総数
(表24-1)遺構単独出土　2個体＋破片7点
＋
(表24-2)遺構間接合遺物　4個体＋破片31点　＝　44　点

3．金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載/非掲載	金属製品 鉄刀	鉄鏃	棒状鉄製品	不明鉄製品	小計
玄室	3	台床1底面（6層内）	掲					
			非掲				破片多数	破片多数
		台床2底面（3層内）	掲					
			非掲	2			2+破片多数	4　+破片多数
		底面（16層内）	掲					
			非掲	1			1+破片多数	2　+破片多数
	－	壁面	掲			2		2
			非掲			7		7
墓前域	－	堆積土	掲		1			1
			非掲					
	1	12層	掲					
			非掲				2	2
	3	23層	掲		1			1
			非掲		1		1	2
		26層上面	掲					
			非掲		1		5	6
器種別総合計	掲載遺物点数				2	2		4
	非掲載遺物点数			3	2	7	11+破片多数	23　+破片多数
	総点数			3	4	9	11+破片多数	27　+破片多数

4．閉塞石観察表

石材	形状	法量（単位:cm/kg） 長	幅	厚	重量	石材	形状	法量（単位:cm/kg） 長	幅	厚	重量
花崗閃緑岩	角礫	8	8	4	0.3	花崗閃緑岩	角礫	30	23	20	17.8
花崗閃緑岩	角礫	12	8	3	0.4	花崗閃緑岩	角礫	23	20	20	19.8
花崗閃緑岩	角礫	10	8	4	0.5	花崗閃緑岩	角礫	25	23	18	20.7
花崗閃緑岩	角礫	10	7	5	0.6	花崗閃緑岩	角礫	25	20	20	22.2
花崗閃緑岩	角礫	18	8	7	0.9	花崗閃緑岩	角礫	28	23	20	22.3
花崗閃緑岩	角礫	10	8	6	0.9	花崗閃緑岩	角礫	25	20	20	22.3
花崗閃緑岩	角礫	10	10	8	1.0	花崗閃緑岩	角礫	30	24	17	29.9
花崗閃緑岩	角礫	12	8	5	1.1	花崗閃緑岩	角礫	35	20	20	30.0
花崗閃緑岩	角礫	10	10	5	1.3	花崗閃緑岩	角礫	34	30	20	38.5
花崗閃緑岩	角礫	20	12	10	3.4	花崗閃緑岩	角礫	40	20	20	43.0
花崗閃緑岩	角礫	25	14	14	3.7	花崗閃緑岩	角礫	27	27	20	43.9
花崗閃緑岩	角礫	16	15	10	6.8	花崗閃緑岩	角礫	38	30	20	43.9
花崗閃緑岩	角礫	18	13	8	8.7	花崗閃緑岩	角礫	48	30	20	49.9
花崗閃緑岩	角礫	25	20	18	13.2	斑レイ岩	円礫	8	7	2	0.3
花崗閃緑岩	角礫	25	25	18	15.1	合計:30点／重量(kg)＝					478.8
花崗閃緑岩	角礫	35	20	20	16.4						

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。
(ST13出土の不明小片の重量は136.8g)

ST13 平面部分図（閉塞石・敷石有）

X=-228240
Y=-5140

ST13 玄室左側壁　側面図（A1-A3）

棒状鉄製品 2

ST13 玄室右側壁　側面図（A2-A3）

棒状鉄製品 9
棒状鉄製品 8
棒状鉄製品 7

ST13 玄室天井　加工痕跡（天井見上図）

奥壁
中壁
中壁
N

ST13 羨門 立面図【閉塞石有】（C-C'）

0　2m
1/60

第110図　ST13 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

ST13 玄室前壁 立面図（B'-B）

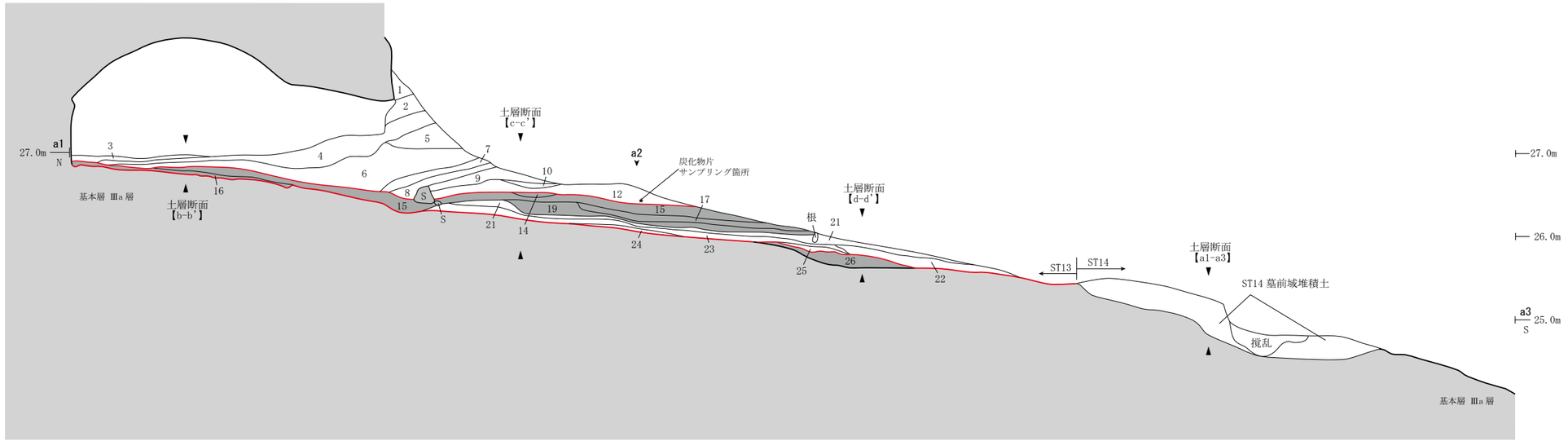
棒状鉄製品 1
棒状鉄製品 9

ST13 玄室奥壁 立面図（B-B'）

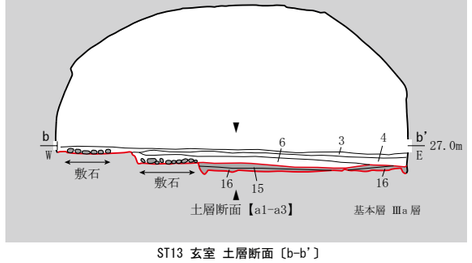
棒状鉄製品 3
棒状鉄製品 4
棒状鉄製品 5
棒状鉄製品 6
棒状鉄製品 7

ST13 羨門 立面図（C-C'）

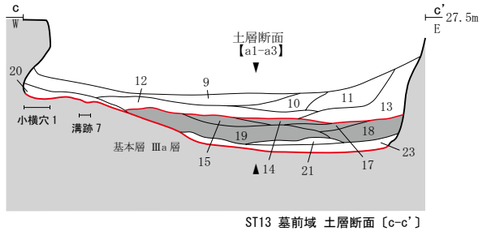
壁面に打ち込まれた棒状鉄製品（数字は取上 No）
礫
敷石
A ▶ ◀ A'　側面・立面図水ベット
a ▶ ◀ a'　土層セクション水ベット
a1　土層セクション水ベット（屈曲点）



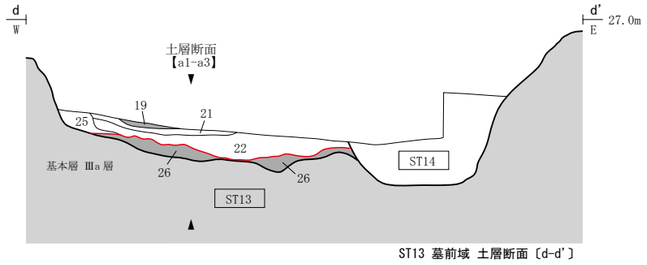
ST13 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a3〕



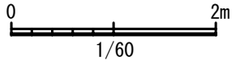
ST13 玄室 土層断面〔b-b'〕



ST13 墓前域 土層断面〔c-c'〕



ST13 墓前域 土層断面〔d-d'〕

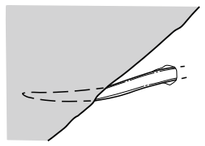


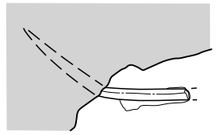
【土層図中の表記】

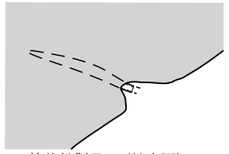
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S　：礫
- P　：土器類
- ▼：土層断面の屈曲点
- ▲▼：各土層断面の交点

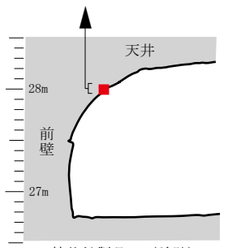
細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山ブロック（小）含む。	1	自然堆積層
2	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	炭化物片少量含む。		
3	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	地山粒子含む。		
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子含む。		
5	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	炭化物片を含む。		
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック、炭化物片含む。		
7	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
8	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片含む。		
9	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	地山粒子含む。		
10	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子含む。		
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	炭化物片含む。		
12	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト			
13	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物片含む。		
14	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック含む。	2	人為堆積層（整地層）
15	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
16	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。		
17	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片含む		
18	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
19	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。		
20	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒子少量を含む。	3	自然堆積層
21	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック微量含む。		
22	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
23	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。		
24	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。		
25	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	地山ブロック少量含む。		
26	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山ブロック・暗褐色土多量含む。	4	人為堆積層（整地層）

第 111 図　ST13 横穴墓 土層断面図

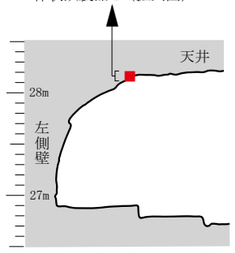

棒状鉄製品１（拡大図）


棒状鉄製品２（拡大図）

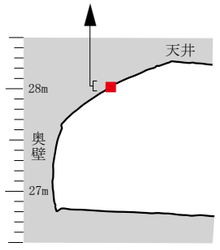

棒状鉄製品３（拡大図）　※拡大図 S=1/3



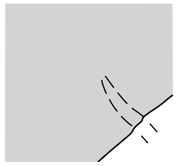
棒状鉄製品１（前壁）

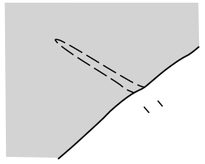


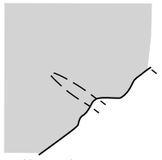
棒状鉄製品２（左側壁）

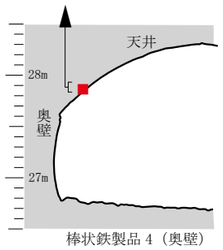


棒状鉄製品３（奥壁）

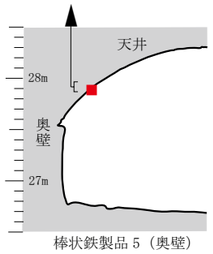

棒状鉄製品４（拡大図）


棒状鉄製品５（拡大図）

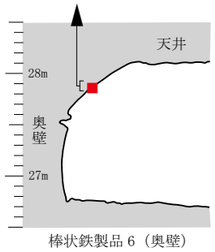

棒状鉄製品６（拡大図）　※拡大図 S=1/3



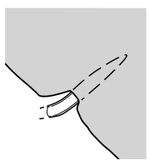
棒状鉄製品４（奥壁）

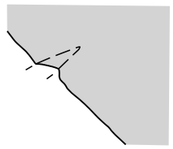


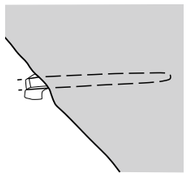
棒状鉄製品５（奥壁）

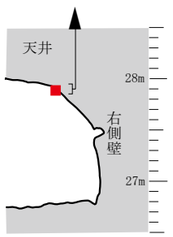


棒状鉄製品６（奥壁）

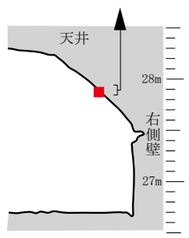

棒状鉄製品７（拡大図）


棒状鉄製品８（拡大図）

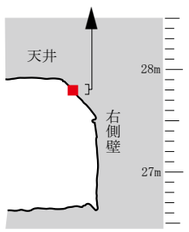

棒状鉄製品９（拡大図）　※拡大図 S=1/3



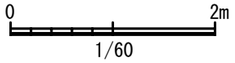
棒状鉄製品７
（奥壁・右側壁コーナー）



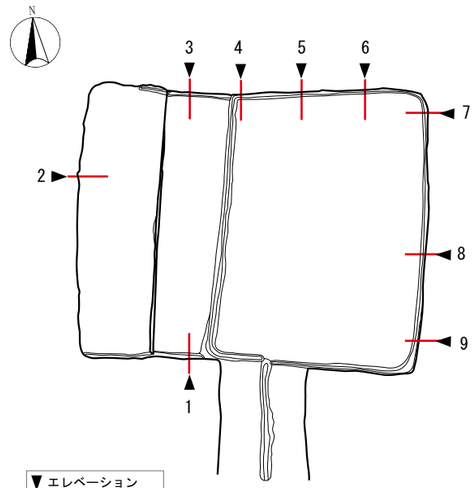
棒状鉄製品８（右側壁）

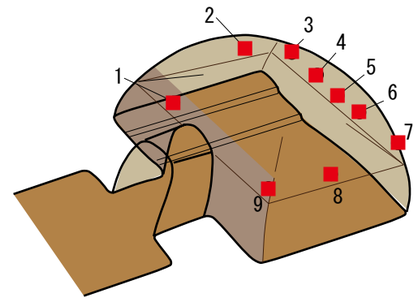


棒状鉄製品９
（前壁・右側壁コーナー）

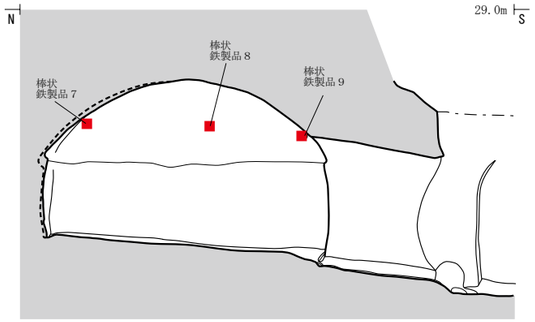


玄室壁面に打ち込まれた棒状鉄製品位置図（エレベーション図）

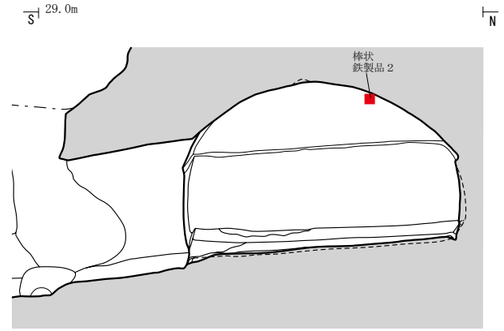




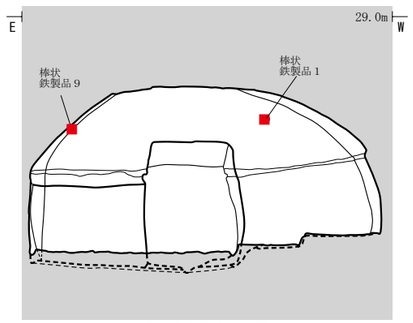
ST13 棒状鉄製品の位置（模式図）



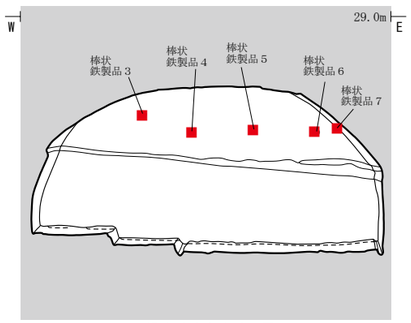
ST13 玄室右側壁 側面図



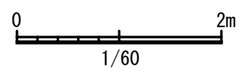
ST13　玄室左側壁　側面図（A1-A3）



ST13 玄室前壁 立面図

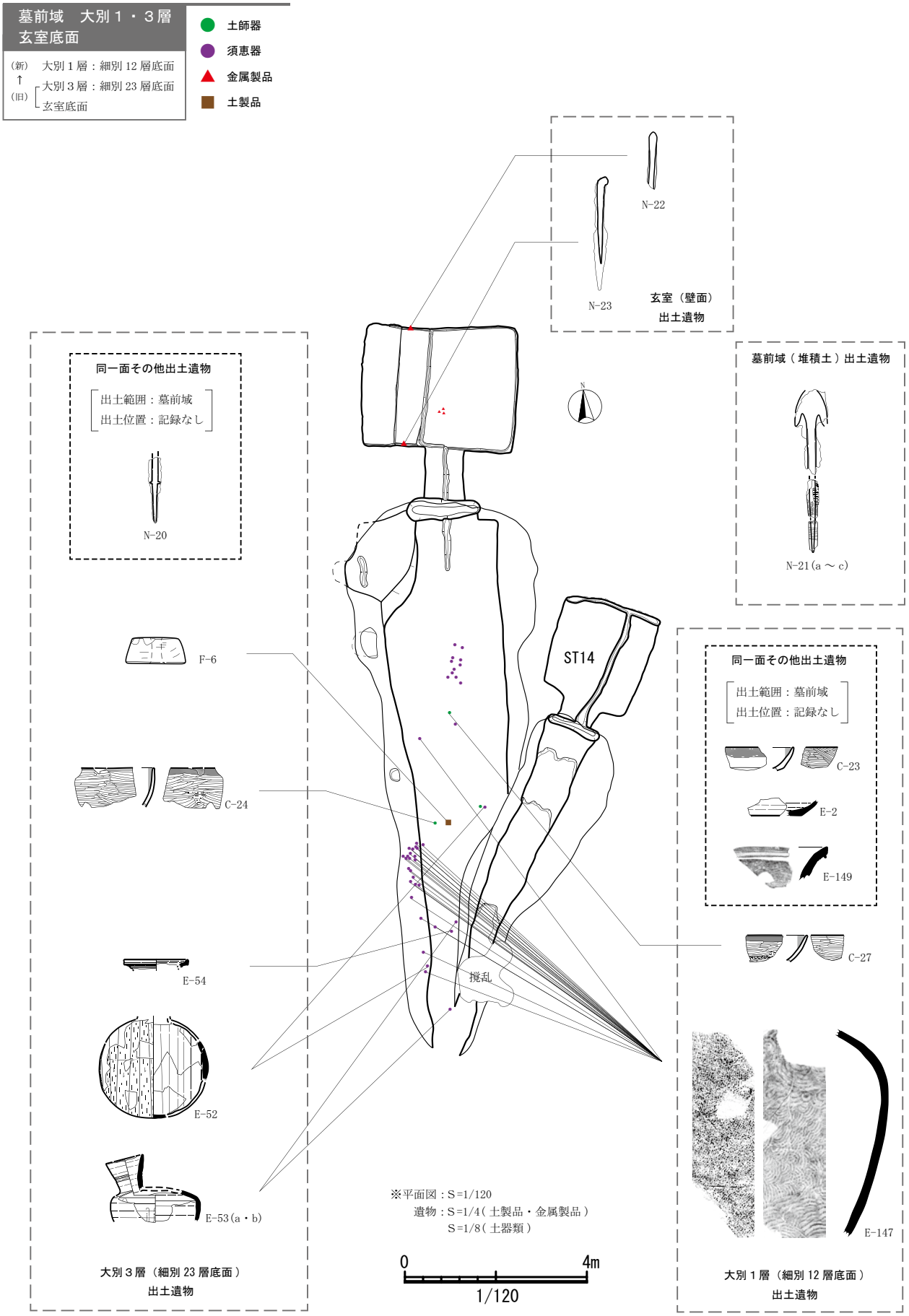


ST13 玄室奥壁 立面図



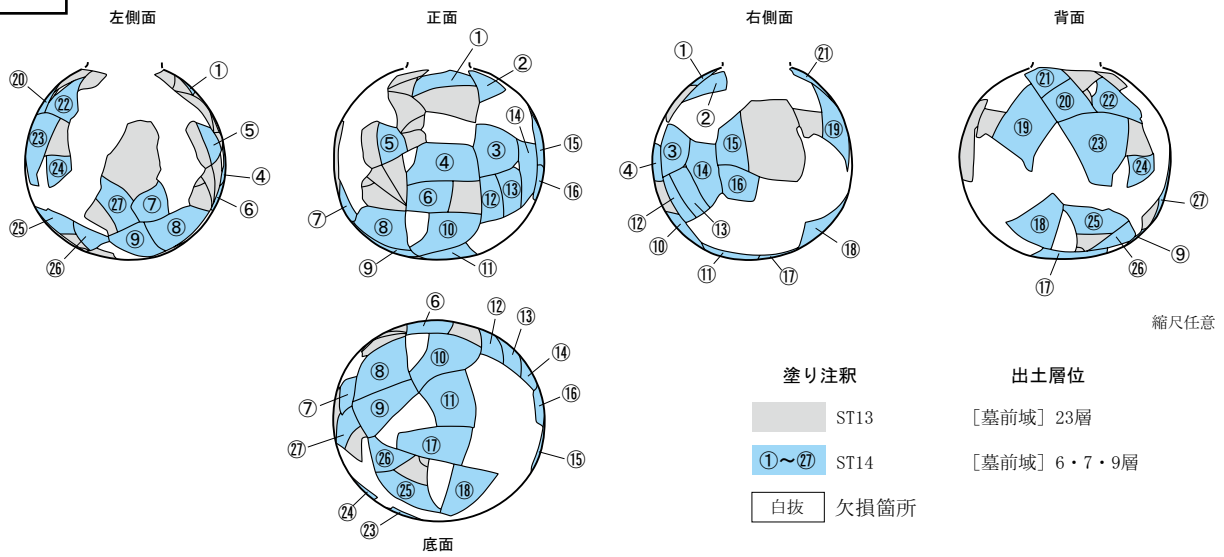
玄室壁面に打ち込まれた棒状鉄製品位置図（立面図）

第112図　ST13 横穴墓 玄室壁面の棒状鉄製品状況図

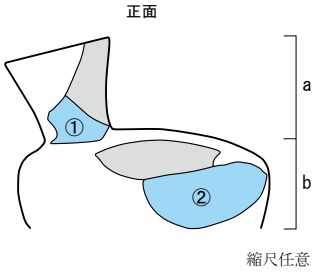


第113図　ST13 横穴墓 遺物出土状況図

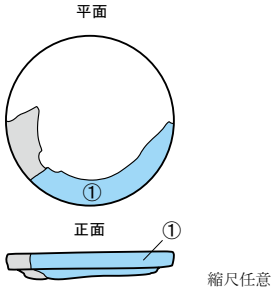
E-52　須恵器 フラスコ形瓶 （第 116 図 2）



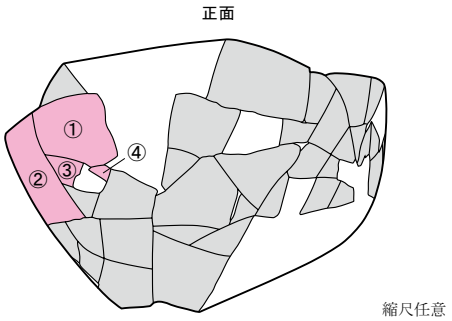
E-53（a・b）　須恵器 平瓶（第 115 図 7）

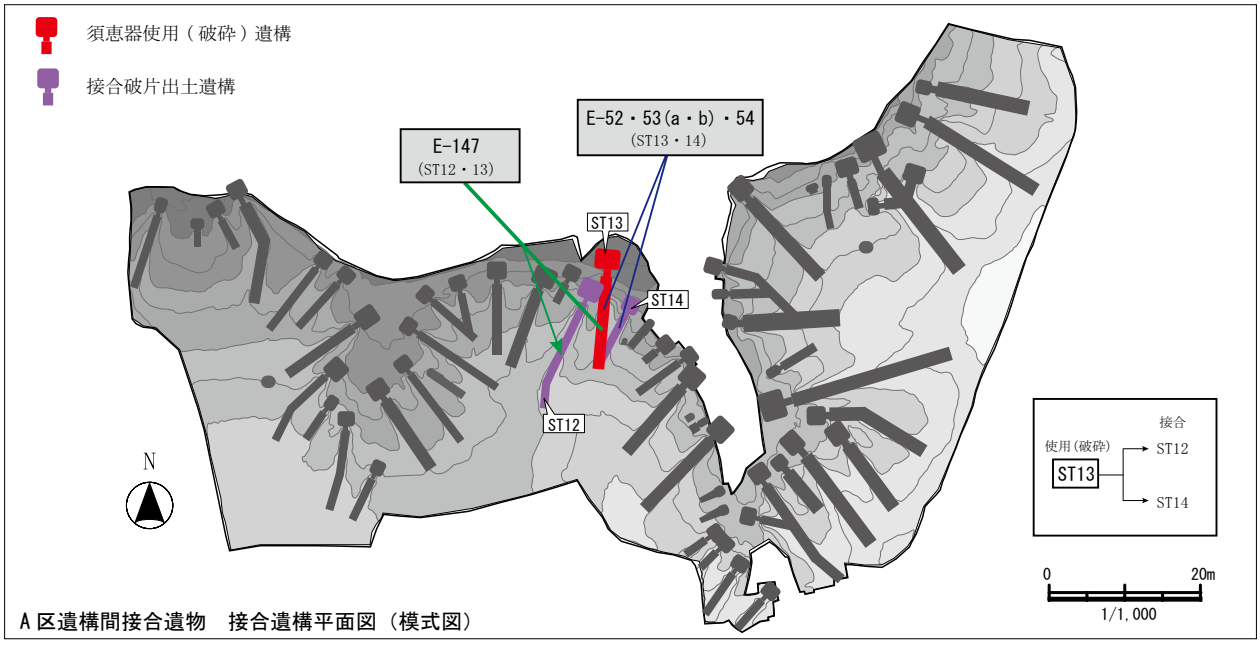


E-54　須恵器 フラスコ形瓶（第 116 図 1）



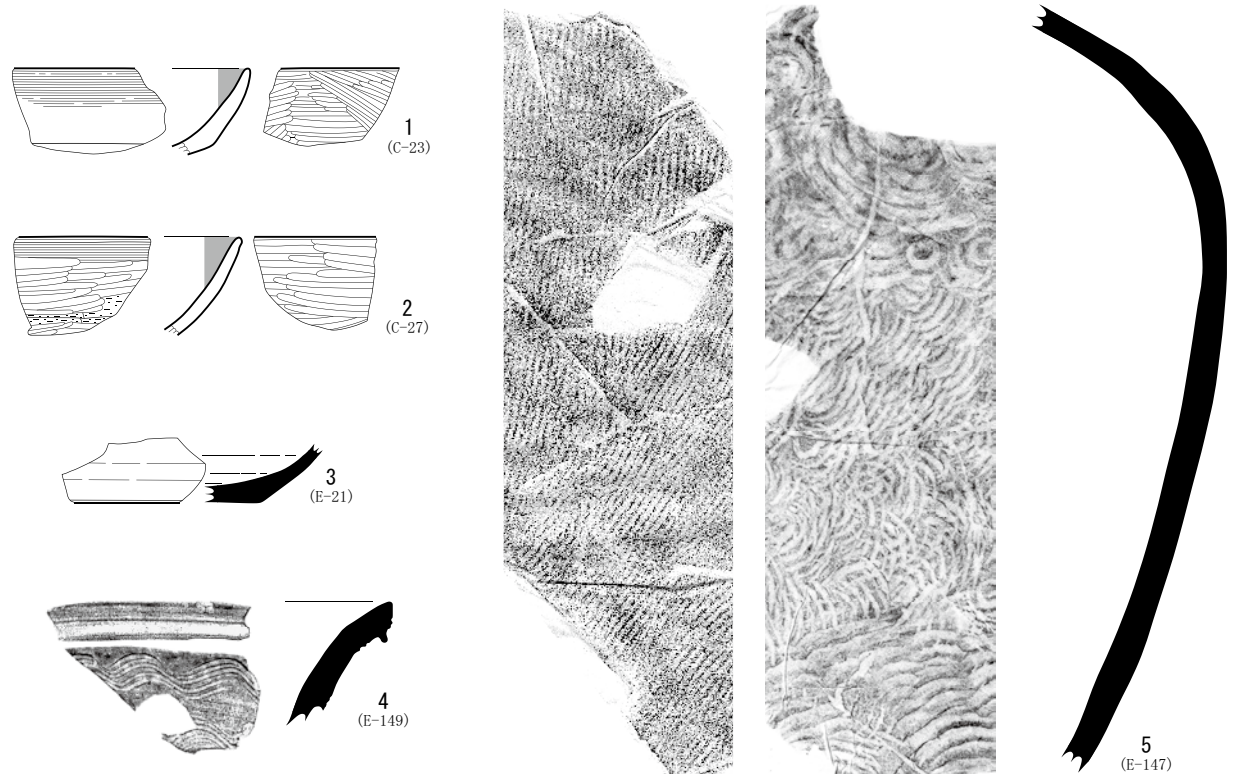
E-147　須恵器 甕（第 115 図 5）



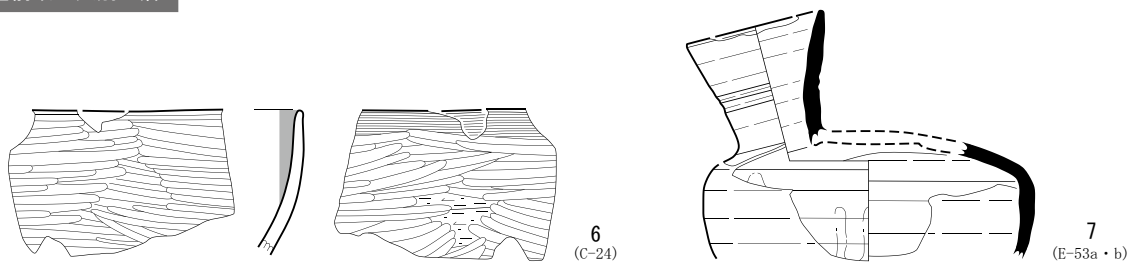


第114図　ST13 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

墓前域　大別１層



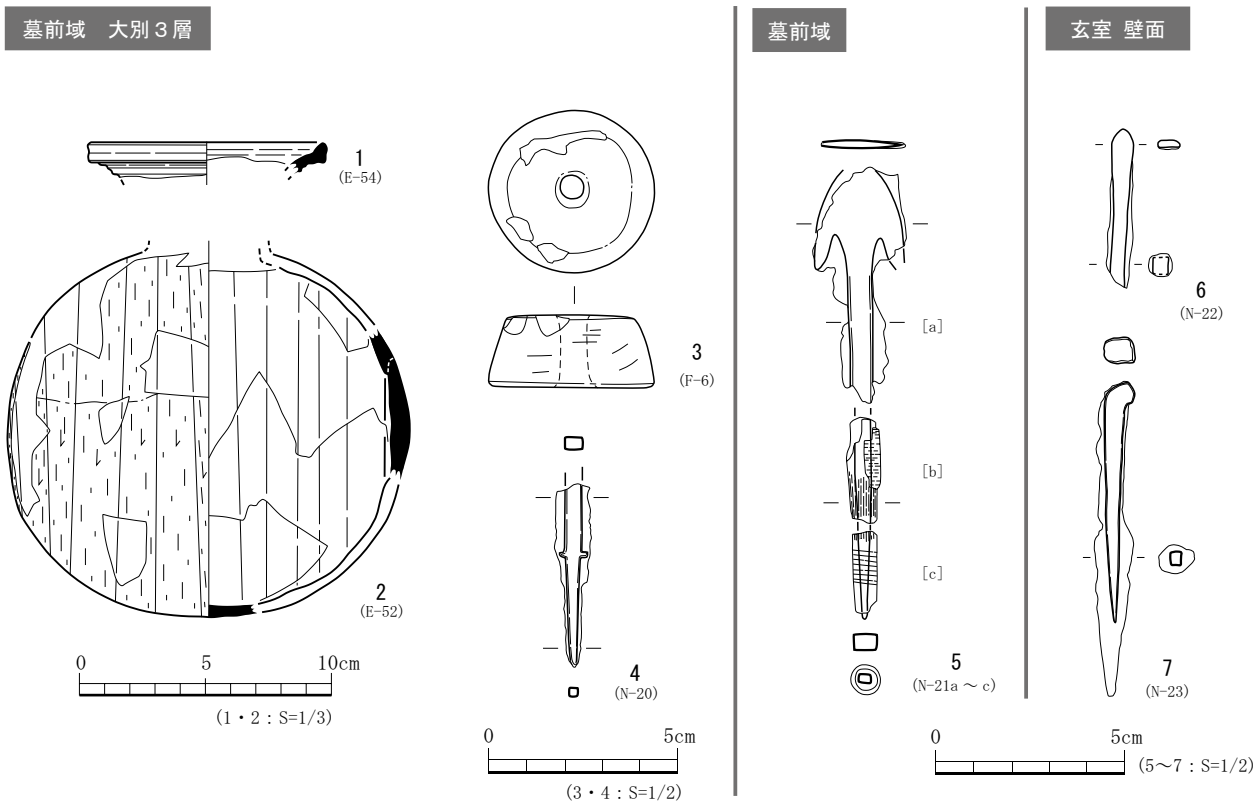
墓前域　大別３層



0　5　10cm (S=1/3)　※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	12層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部磨滅のため調整不明、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.8cm	C-23	197-5
2	墓前域	検出面 (17層上面)	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.3～0.5cm	C-27	197-3
3	墓前域 (羨門付近)	検出面 (15層上面)	須恵器 壺・瓶類	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整？、内面：ロクロナデ 【法量】残存高2.1cm・器厚0.5～1.0cm	E-21	227-8
4	墓前域	検出面 (15層上面)	須恵器 甕	【技法】外面：口唇部沈線・頸部波状文、内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.7～1.1cm 【特記事項】接合はしないが、E-150(ST17出土：第139図5)と同一個体の可能性有り	E-149	245-1
5	墓前域	◆ST12　8層 ◆ST13　検出面	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST13(主体)**＋ST12 【技法】外面：平行タタキ、内面：当て具痕(同心円) 【法量】器厚0.8～1.1cm	E-147	245-2
6	墓前域	26層上面	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.5cm	C-24	197-4
7	墓前域	◆ST13　23層 26層上面 ◆ST14　7層	須恵器 平瓶	◎遺構間接合　**ST13(主体)**＋ST14 【技法】外面：口頸部ロクロナデ→沈線(2条)・体部ロクロナデ、内面：ロクロナデ 【法量】口径(5.6)cm・残存高9.9cm・器厚0.3～0.6cm 【特記事項】E-53a(口頸部)・E-53b(体部)	E-53 a・b	227-6 227-7

第115図　ST13 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －



※鉄鏃観察表
逆刺無しの場合　［全長］＝A＋B＋C　　［鏃長］＝A＋B
逆刺有りの場合　［全長］＝A＋B＋C－逆刺長　［鏃長］＝A＋B－逆刺長

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST13　26層上面 ◆ST14　7層	須恵器 フラスコ形瓶	◎遺構間接合　**ST13(主体)**＋ST14 【技法】外面：ロクロナデ・突帯、内面：ロクロナデ 【法量】口径9.2cm・残存高1.4cm・器厚0.4cm	E-54	227-9
2	墓前域	◆ST13　23層 ◆ST14　6層 7層 9層	須恵器 フラスコ形瓶	◎遺構間接合　**ST13(主体)**＋ST14 【技法】外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り・円盤閉塞、内面：ロクロナデ・オサエ 【法量】残存高14.5cm・器厚0.3～0.7cm	E-52	227-2

No.	出土位置	細別層	種別・器種	全長(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	質量(g)	特記事項	登録	写真図版
3	墓前域	26層上面	土製品 紡錘車	4.40	1.95	0.70	40.1	側面ケズリ→ナデ？ 他ナデ	F-6	297-1

No.	出土位置	細別層	種別・器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
4	墓前域	23層	金属製品 鉄鏃	長頸鏃？	残存 4.8	0.7	残存 2.0	—	残存 2.0	2.8	[茎関]棘関a	N-20	315-7
5	墓前域	堆積土	金属製品 鉄鏃	有頸 平根鏃	残存 11.2	2.3	残存 6.2	残存 2.7	残存 4.4	残存 5.0	[逆刺長]0.9cm [鏃身形]三角形状 矢柄・口巻残存	N-21 a～c	315-6 348-1

No.	出土位置	細別層	種別・器種	特徴	登録	写真図版
6	玄室	壁面	金属製品 棒状鉄製品	【法量】残存長4.2cm・最大幅0.6cm 【特記事項】玄室奥壁に打込まれていたもの(第112図棒状鉄製品3に相当) 鉄鏃を転用	N-22	337-7 348-19
7	玄室	壁面	金属製品 棒状鉄製品	【法量】全長6.4cm・最大幅0.6cm　［頭部］長さ0.8cm・幅0.7cm 【特記事項】玄室前壁に打込まれていたもの(第112図棒状鉄製品1に相当) 鉄釘を転用	N-23	337-8

第116図　ST13 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類・土製品・金属製品 －

14 号横穴墓（ST14）（第 117～121 図、第 25 表、第 4 分冊 写真図版 57）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 25～27m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の西側には ST12・13、東側には ST15・SX2 が隣接している。

【重複関係】 ST13 と重複し、これより新しい（ST13→ST14）。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室と羨道の全ての天井が残存し、玄門は南西に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 117 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 10.38m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.30m、玄室の中央幅 2.12m、奥壁幅 2.10m、前壁幅 1.90m、左側壁幅 1.86m、右側壁幅 2.18m、玄室底面から天井の高さ 1.24m を測る。床面積は約 4.6 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：やや扁平なドーム形を呈する。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆 U 字形を呈する。幅 0.88m、高さ 1.10m を測る。

工 具 痕：各壁と底面に幅 0.07～0.08m 前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が横・斜め方向、天井部は中央部が主軸方向、その他が放射状である。

付属施設：溝跡 1 を確認した。溝跡 1 は、奥壁壁際と玄室の中心を通り羨門に至り、羨門墓前域側に位置する溝跡 2 と接続する。その規模は幅 0.12～0.15m・深さ 0.03～0.06m である。位置的にみて、排水溝の可能性が高い。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.42m、玄室側の幅 0.88m、墓前域側の幅 0.79m、玄門側の高さ 1.10m、墓前域側の高さ 1.11m を測る。

立 面 形：右側壁が崩落している。逆 U 字形を呈していたと考えられる。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：玄室玄門付近から羨道の中心を通り羨門に至る溝跡 1 を確認した。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.17m、幅 0.20～0.25m、深さ 0.05m の溝跡 2 を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。他の横穴墓でみられた閉塞石は 1 点も残存していなかった。閂穴等も検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ7.66m、上幅0.9～2.0m、下幅0.56～0.95mを測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で0.1m前後、羨門付近で1.6m前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は0.9m程度である。

【堆積層】　ST14横穴墓を覆う堆積層は細別27層・大別3層に分けた（第118図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別１層〕

大別1層（細別1～15層）はST14の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。後述する大別2層堆積後の窪地となった段階で、墓前域に人為的に溝が掘り込まれた痕跡（細別15層）が認められたことから、これより上層を大別1層とした。この溝が掘り込まれた段階は、玄室への入室が可能だったと考えられ、その際にST14への人の往来があったと推定される。ただし、遺物は細別1・2・6・7・9層で少量出土しているのみであり、その分布も面的なまとまりはなく、祭祀等が実施されたかは不明である。

墓前域大別1層の堆積後、ST14の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別２・３層〕

大別2層（細別16～26層）はST14の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別3層（細別27層）は墓前域下半に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別3層は造墓直後に横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられる。大別2層の底面と横穴墓掘方底面で遺物が少量に出土した。この面がST14における初葬の面と推定される。

なお、ST13と重複するST14は、ST13大別3層堆積後に造墓されたと考えられる。

【出土遺物】土師器22点（2個体、破片20点）、須恵器46点（うち破片41点は遺構間接合遺物）、玉製品20点、金属製品16点が出土した（第25表）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、玄室で土器類は出土していない（第119図）。土師器坏2個体、玉製品20点、鉄鏃1点の合計23点を図示した（第120・121図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別１層出土遺物**、**B：大別２層（細別22層底面）・玄室底面出土遺物**の2群に分かれる。加えて、ST14では、別の横穴墓（ST12・13・17）で破砕された須恵器破片の一部がST14に混入したと考えられる遺物41点（第25表2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、A：大別1層の堆積途中に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST14関連遺物は、古い順からB→Aの2段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別２層（細別22層底面）・玄室底面出土遺物〕（第121図）

大別2層（細別16～26層）のうち、墓前域に分布する細別22層の底面と玄室底面で出土した遺物である（前項Bに相当）。玉製品・金属製品が出土した。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれる。

玄室では勾玉1点（第121図16）・切子玉1点（第121図15）・ガラス製小玉14点（第121図1～14）、刀子破片1点・不明鉄製品破片1点、**墓前域**では勾玉2点（第121図19・20）・切子玉2点（第121図17・18）が出土した（第25表3・4）。墓前域出土の玉製品は原位置を保った状態での出土か判断できなかった。本来玄室で使用されたものである可能性も考えられる。これらの遺物はST14における初葬に伴い使用された遺物と推定される。墓前域では他に遺物が出土していないため、この初葬に伴う墓前祭祀があったかは不明である。

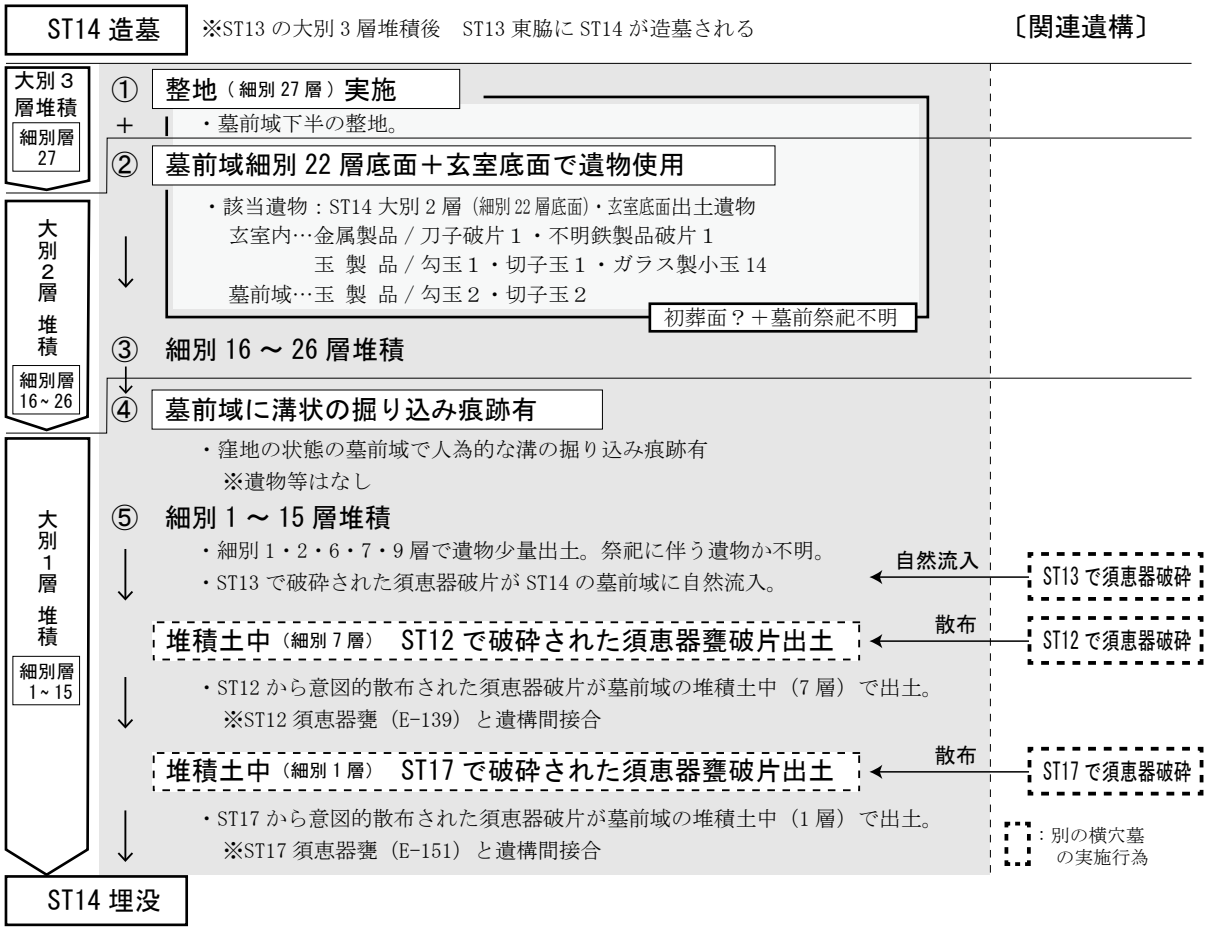
〔大別１層出土遺物〕（第 120・121 図）

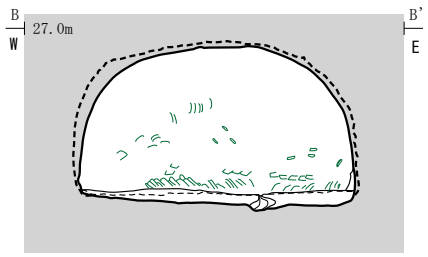
大別１層（細別 1～15 層）の墓前域に堆積する細別 1・2・6・7・9 層で出土した遺物である（前頁 A に相当）。土師器・須恵器・金属製品が出土した。その内訳は、土師器坏 2 個体（第 120 図 1・2）・坏破片 15 点、土師器甕破片 5 点、須恵器甕破片 5 点、鉄刀破片 1 点、鉄鏃 1 点（第 121 図 21）、不明鉄製品 13 点である。すべて破片資料で、出土位置・層位ともにまとまりがない。祭祀等で使用された遺物であるかは不明である。この他、大別１層の堆積土中（細別 1・7 層）では、別遺構出土遺物と接合する須恵器破片 41 点が出土している（第 25 表 2）。これらの破片は別遺構で破砕された後、ST14 墓前域に混入した遺構間接合遺物であり、ST12・13・17 由来の 3 者に分けられる（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST14 では、**ST12 由来の須恵器甕（E-139／第 102 図 2）**と接合する破片が 10 点（体部破片）、**ST13 由来の須恵器フラスコ形瓶（E-52／第 116 図 2）**と接合する小破片が 27 点（体部部破片）**・須恵器平瓶（E-53／第 115 図 7）**と接合する破片が 2 点（頸部と体部破片）**・須恵器瓶類（E-54／第 116 図 1）**と接合する破片が 1 点（口縁部破片）、**ST17 由来の須恵器甕（E-151／第 138 図 2）**と接合する破片が 1 点（口縁部破片）出土した。ST14 から ST12 は直線距離で約 5m 西、ST13 は西に隣接、ST17 は約 8m 南東の地点に位置する。ST13 由来の須恵器破片については出土位置からみて、ST13 で破砕された破片が ST14 に自然流入したものと考えられる。一方、ST12・17 の須恵器甕については両者の位置関係からみて、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。この段階に「ST12・17 から ST14 の墓前域への須恵器甕の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

【まとめ】

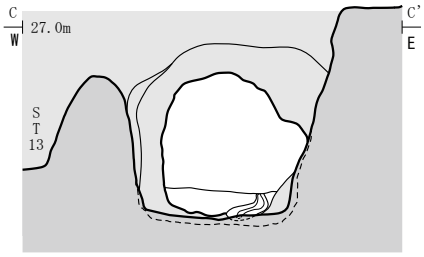
ST14 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST14 造墓・使用・埋没の経過〕

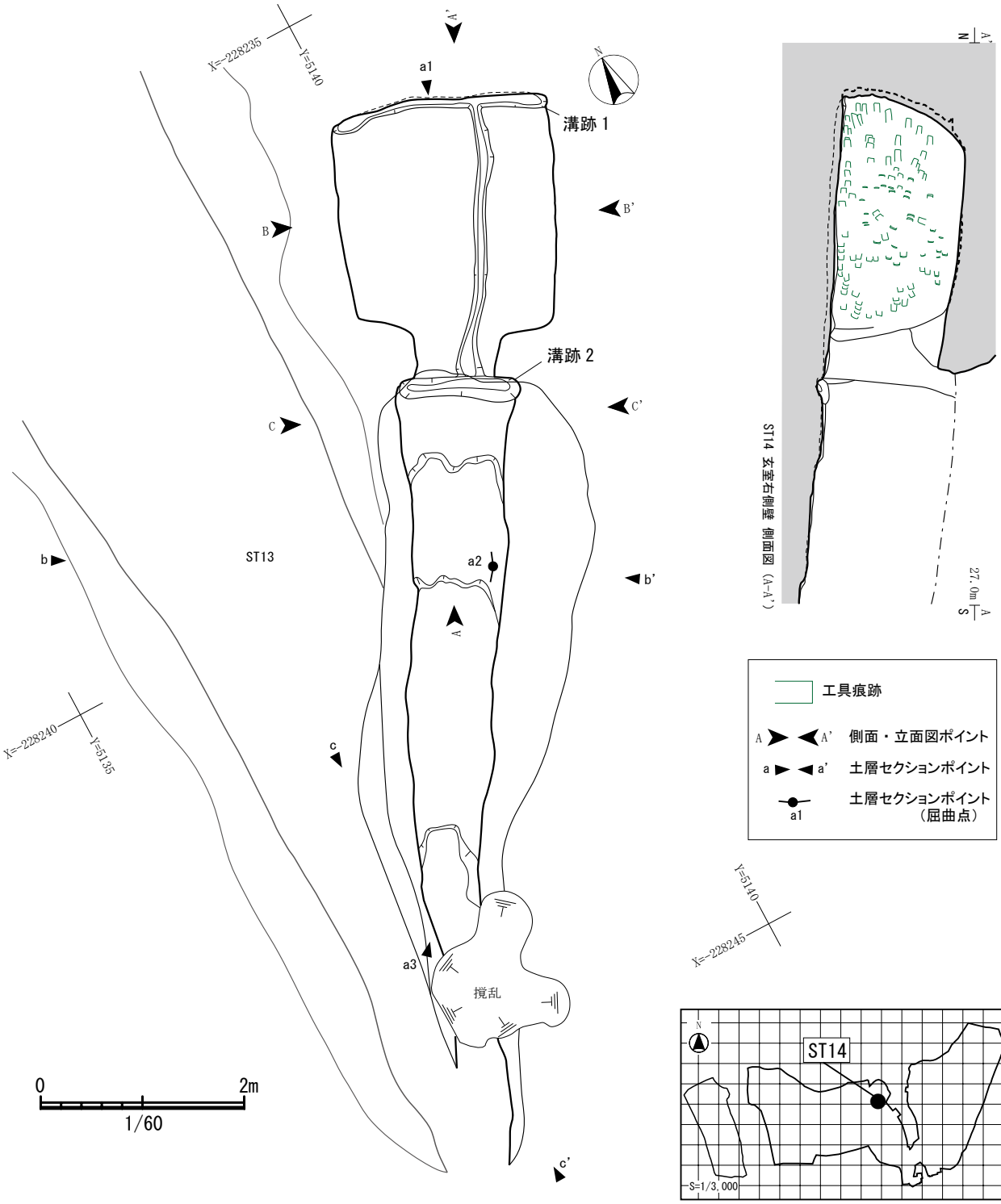




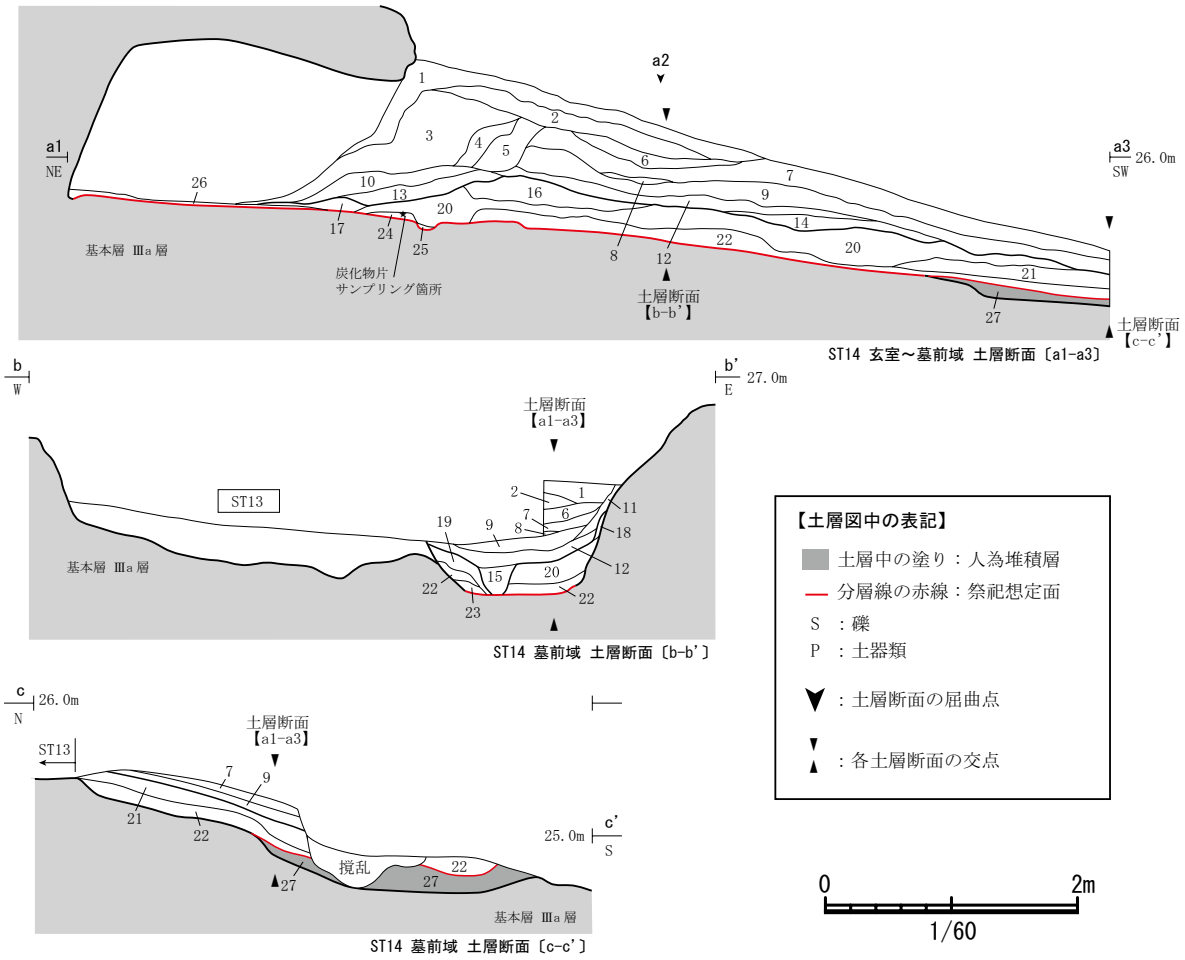
ST14 玄室奥壁 立面図 (B-B')



ST14 羨門 立面図 (C-C')



第117図　ST14 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト		1	自然堆積層
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト			
3	明黄褐色 (10YR7/6)	砂質シルト			
4	黄褐色 (2.5Y5/4)	砂質シルト			
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト			
6	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物片微量含む。		
7	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック微量含む。		
8	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト			
9	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	地山ブロック微量含む。		
10	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト			
11	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト	地山ブロック含む。		
12	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック含む。		
13	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。		
14	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山ブロック含む。		
15	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	地山ブロック含む。		

細別層	土色	土性	備考	大別層	
16	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。	2	自然堆積層
17	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。		
18	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト			
19	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
20	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。		
21	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	砂質シルト	地山粒子含む。		
22	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック含む。		
23	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	シルト	地山粒子含む。		
24	灰黄褐色 (10YR6/2)	シルト	地山粒子含む。		
25	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト			
26	黄灰色 (2.5Y6/1)	シルト			
27	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック多く含む。	3	人為堆積層（整地層）

第 118 図　ST14 横穴墓 土層断面図

第25表　ST14横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器			須恵器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／個体／破片	坏	甕	小計	甕	小計
墓前域	1	1層	個					
			破	1 (25)		1 (25)	5 (505)	5 (505)
		2層	個					
			破	1 (5)		1 (5)		
		6層	個	1 (15)		1 (15)		
			破	6 (55)	4 (15)	10 (70)		
		7層	個					
			破	2 (5)		2 (5)		
		9層	個	1 (25)		1 (25)		
			破	5 (80)	1 (20)	6 (100)		
総合計		個体数(重量)		2 (40)		2 (40)		
		破片数(重量)		15 (170)	5 (35)	20 (205)	5 (505)	5 (505)
		総重量		(210)	(35)	22 (245)	(505)	5 (505)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

※ST14出土須恵器の総数
(表25-1)遺構単独出土　破片5点
＋
(表25-2)遺構間接合遺物　破片41点　＝ 46 点

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (5,935)	◆ST14　1層(墓前域) ◆ST17　9層(墓前域)	ST17	◆ST14:1点 ★ST17:30点	E 151	第138図2
須恵器	甕	1 (11,290)	◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　2･8～11層(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST12	◆ST11:1点 ★ST12:42点 ◆ST14:10点	E 139	第102図2
須恵器	瓶類	1 (20)	◆ST13　26層上面(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST13	★ST13:1点 ◆ST14:1点	E 54	第116図1
須恵器	フラスコ形瓶	1 (325)	◆ST13　23層(墓前域) ◆ST14　6･7･9層(墓前域)	ST13	★ST13:11点 ◆ST14:27点(小破片)	E 52	第116図2
須恵器	平瓶	1 (65)	◆ST13　23層、26層上面(墓前域) ◆ST14　7層(墓前域)	ST13	★ST13:2点 ◆ST14:2点	E 53a･b	第115図7

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

3. 玉製品

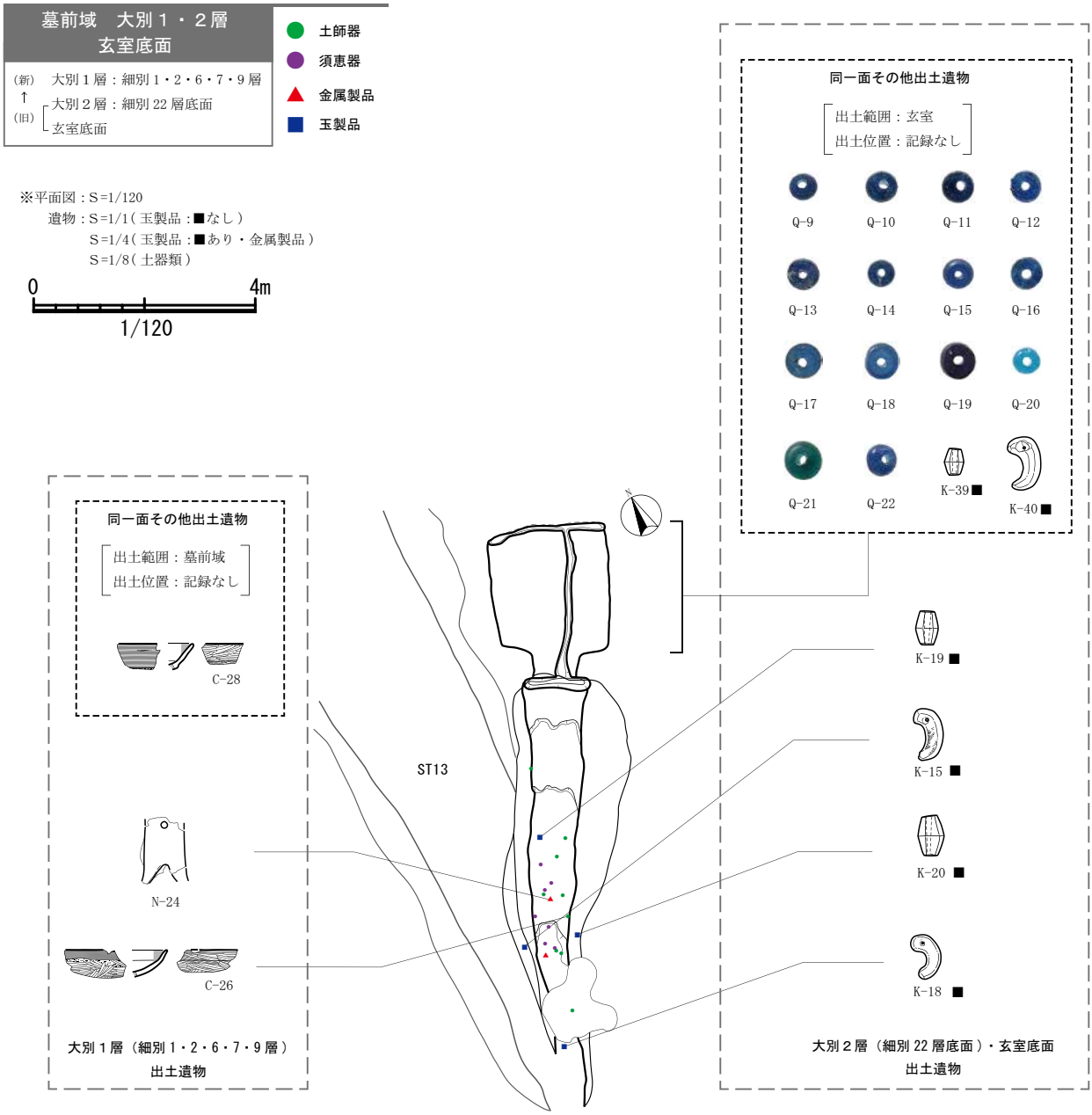
種別				玉製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／個体／破片	石製 勾玉	石製 切子玉	小計	ガラス製 小玉	小計
玄室	2	26層	個	1 (6.5)	1 (2.4)	2 (8.9)	14 (1.474)	14 (1.474)
			破					
墓前域	2	22層	個	2 (9.1)	2 (11.9)	4 (21.0)		
			破					
総合計		個体数(重量)		3 (15.6)	3 (14.3)	6 (29.9)	14 (1.474)	14 (1.474)
		破片数(重量)						
		総重量		(16)	(14)	6 (29.9)	(1.474)	14 (1.474)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が
「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、
「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

4. 金属製品

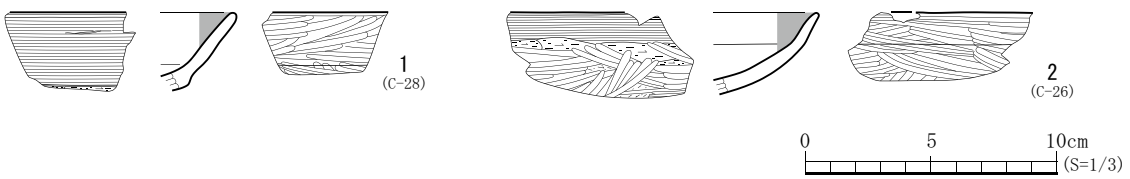
種別				金属製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／掲載／非掲載	鉄刀	刀子	鉄鏃	不明鉄製品	小計
玄室	2	26層	掲					
			非掲		1		1	2
墓前域	1	1層	掲					
			非掲	1				1
		2層	掲					
			非掲				1	1
		6層	掲					
			非掲				5	5
		7層	掲					
			非掲				6	6
		9層	掲			1		1
			非掲					
器種別総合計		掲載遺物点数				1		1
		非掲載遺物点数		1	1		13	15
		総点数		1	1	1	13	16

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。



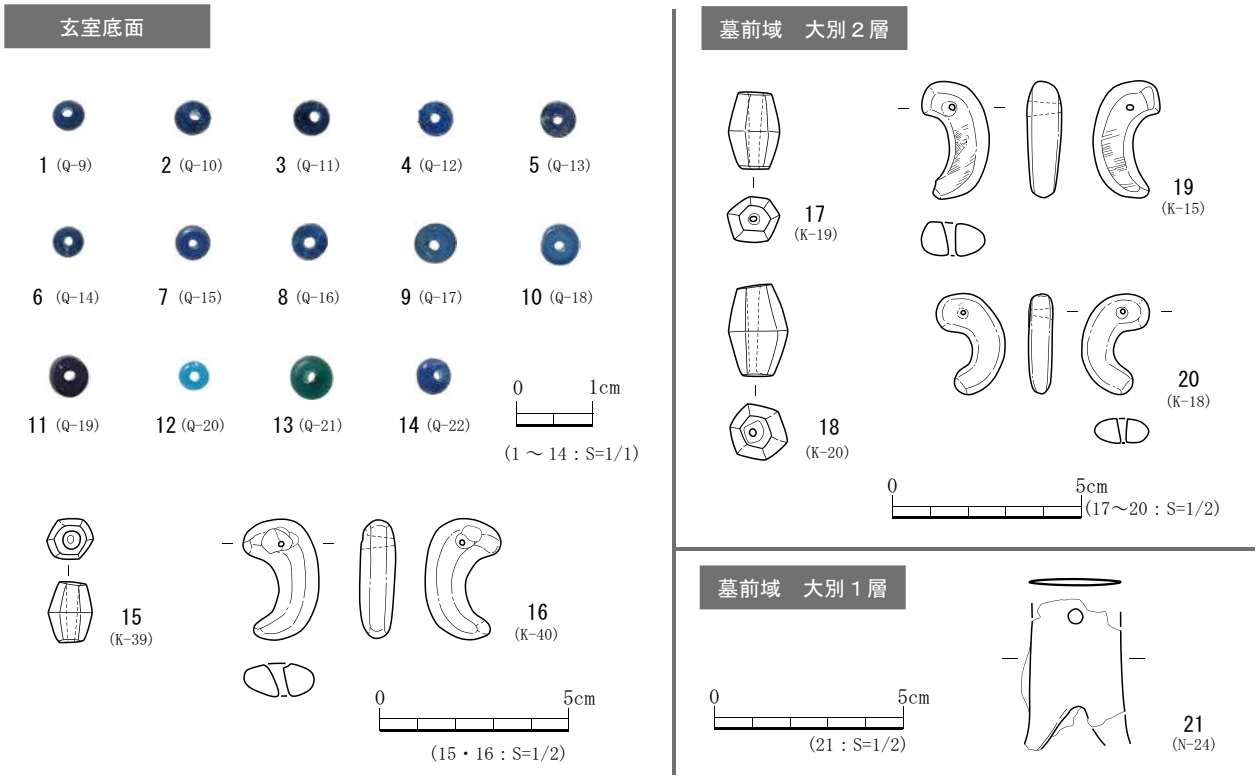
第119図　ST14 横穴墓 遺物出土状況図

墓前域　大別１層



No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	6層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.7cm	C-28	197-7
2	墓前域	9層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.6cm	C-26	197-6

第120図　ST14 横穴墓 出土遺物（1）　－ 土器類 －



※鉄鏃観察表　［全長］=A+B+C／［鏃長］=A+B

No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (mm)	長 (mm)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
1	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	紺・青	4.1	2.9	0.062	Q-9	284-11
2	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	—	紺・青	4.5	3.5	0.093	Q-10	284-12
3	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青	4.6	3.5	0.105	Q-11	284-13
4	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	—	紺・青／モザイク状	4.5	3.1	0.093	Q-12	284-14
5	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	黒い不純物	紺・青	4.6	3.1	0.094	Q-13	284-15
6	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	不純物	紺・青	4.0	2.6	0.057	Q-14	284-16
7	玄室	26層	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	—	孔平行	—	紺	4.6	3.0	0.098	Q-15	285-6
8	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青／モザイク状	4.6	2.9	0.087	Q-16	285-1
9	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	黒い不純物	紺	5.3	2.9	0.121	Q-17	285-8
10	玄室	26層	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称	孔平行	—	青	5.4	3.4	0.169	Q-18	285-5
11	玄室	26層	ガラス製品小玉	引伸	カリ	—	孔平行	透明度低い	紺（暗い）	5.8	3.5	0.181	Q-19	285-3
12	玄室	26層	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	—	孔平行	—	淡青	3.9	2.9	0.065	Q-20	285-7
13	玄室	26層	ガラス製品小玉	引伸	ソーダ	非対称？	散在	孔内荒れ	緑がかった青	5.6	3.4	0.166	Q-21	285-4
14	玄室	26層	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	—	紺・青／モザイク状	4.6	3.1	0.083	Q-22	285-2

No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
15	玄室	26層	石製品	切子玉	水晶	1.60	1.15	0.60	1.10	—	0.15～0.30	2.4	K-39	277-1
16	玄室	26層	石製品	勾玉	瑪瑙	3.20	2.00	1.10	0.95	—	0.20～0.35	6.5	K-40	274-13
17	墓前域	22層	石製品	切子玉	水晶	2.05	1.35	0.75	1.25	—	0.25～0.35	4.7	K-19	276-18
18	墓前域	22層	石製品	切子玉	水晶	2.45	1.55	0.90	1.50	—	0.20～0.35	7.2	K-20	276-17
19	墓前域	22層	石製品	勾玉	碧玉	3.10	1.80	1.05	0.90	—	0.20～0.40	5.5	K-15	274-11
20	墓前域	22層	石製品	勾玉	瑪瑙	2.70	1.80	—	0.65	—	0.30	3.5	K-18	274-12

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
21	墓前域	9層	金属製品	鉄鏃	無茎鏃	残存 4.0	2.7	残存 4.0	残存 4.0	—	—	［逆刺長］残存1.2cm	N-24	315-8

第121図　ST14 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 玉製品・金属製品 －

15 号横穴墓（ST15）（第 122・123 図、第 4 分冊 写真図版 58）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 25～27m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の西側には ST14・SX2、南東側には ST16 が隣接している。

【重複関係】 なし。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室の天井が残存し、入口は南西に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 122 図）

〔規　模〕玄室と墓前域で構成される。玄室奥から墓前域末端までの全長は 4.66m を測る。ST15 の構造は、今回の調査で確認されている一般的な横穴墓と形状が大きく異なる。ここでは、玄室入口と考えられるくびれ部から上方の奥側までを玄室、入口より下方の範囲を墓前域とした。

〔玄　室〕

平 面 形：玄室奥が狭く窄まる不整形を呈する。砲弾に近い形状で、玄室奥壁の範囲認定が困難である。

規　　模：玄室の規模は、玄室奥から入口までの奥行 2.16m、奥付近の幅 0.38m・中央幅 0.95m・入口側の幅 0.83m、天井の高さは奥側 0.28m・中央部 0.52m を測る。床面積は約 1.6 ㎡である。

天　　井：平坦である。

底　　面：奥から入口に向かって傾斜しており、奥側が高い。奥と入口の比高差は 0.2m 程度である。

工 具 痕：各側壁に幅 0.05m 前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、縦・横方向である。

付属施設：左側壁の壁際で幅 0.10～0.25m、深さ 0.10m の溝跡 1 を確認した。溝跡 1 は、玄室左側壁奥の壁際を通り、墓前域に至る。底面の傾斜は玄室奥側が高く、墓前域側が低い。

〔閉塞施設〕

玄室入口と墓前域の境の底面に段差はなく、明確な閉塞施設は確認できなかった。

〔墓前域〕

規　　模：玄室入口から墓前域の末端までの長さ 2.50m、上幅 1.0～1.5m、下幅 0.92m を測る。底面から上端までの高さは、最も残りのよい箇所で 0.5m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

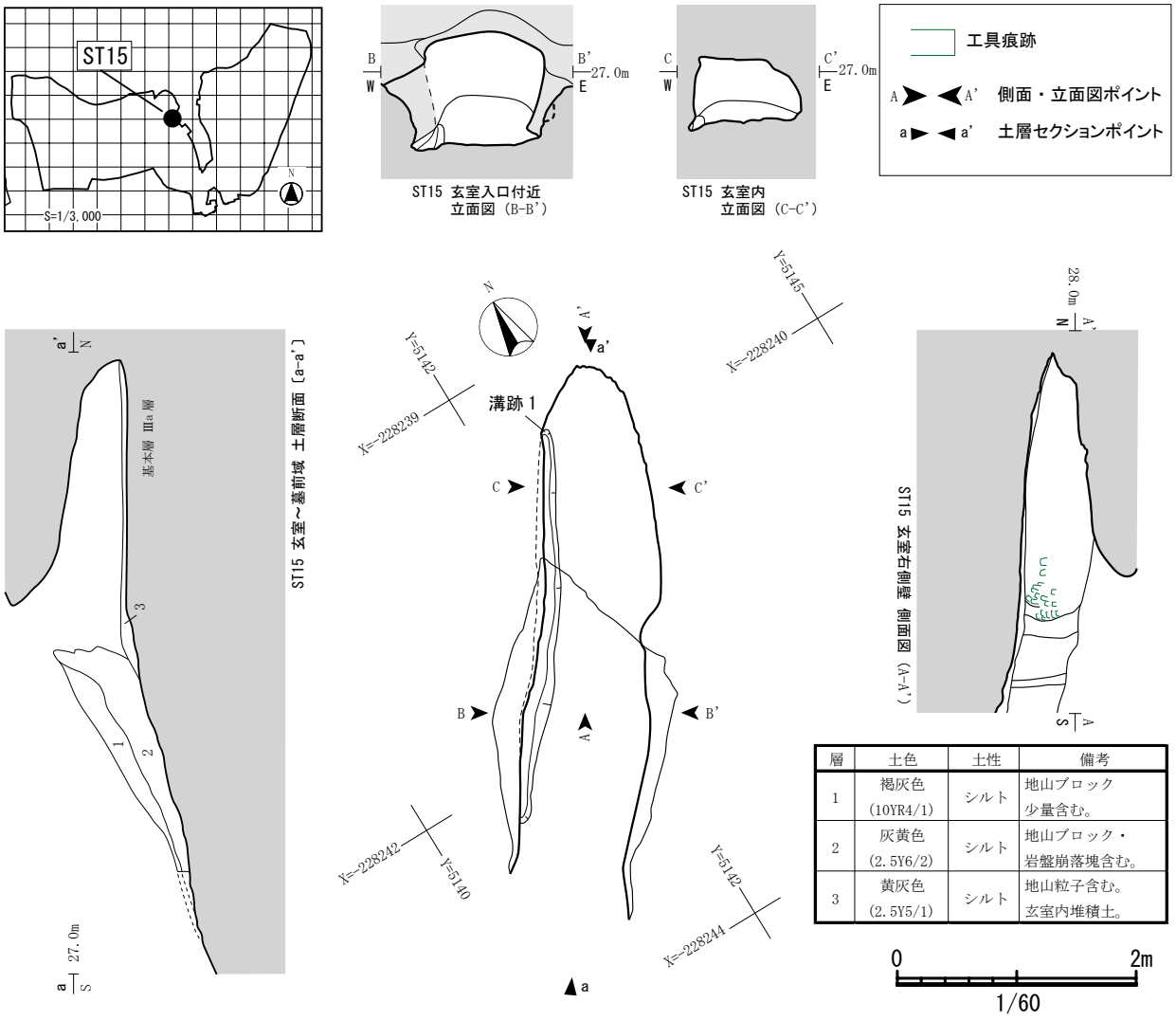
底　　面：玄室入口から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、玄室側が高い。玄室入口付近と末端の比高差は 0.6m 程度である。

付属施設：左壁際で玄室から延びる溝跡 1 を確認した。位置にみて排水溝と考えられる。

【堆積層】 ST15 横穴墓を覆う堆積層は細別 3 層に分けた（第 122 図）。細別 1～3 層はいずれも自然堆積層である。細別 2 層には玄室天井の崩落岩盤が含まれる。人為的な整地層は確認されておらず、遺物は玄室のみで出土している。ST15 は造墓後間もなく使用され、追葬等は行われず埋没したものと考えられる。

【出土遺物】 玄室底面を覆う細別 3 層から刀子 1 点（第 123 図 1）、耳環 2 点（第 123 図 2・3）が出土した。出土状況からみて玄室に伴う遺物と判断される。墓前域から遺物は出土していない。

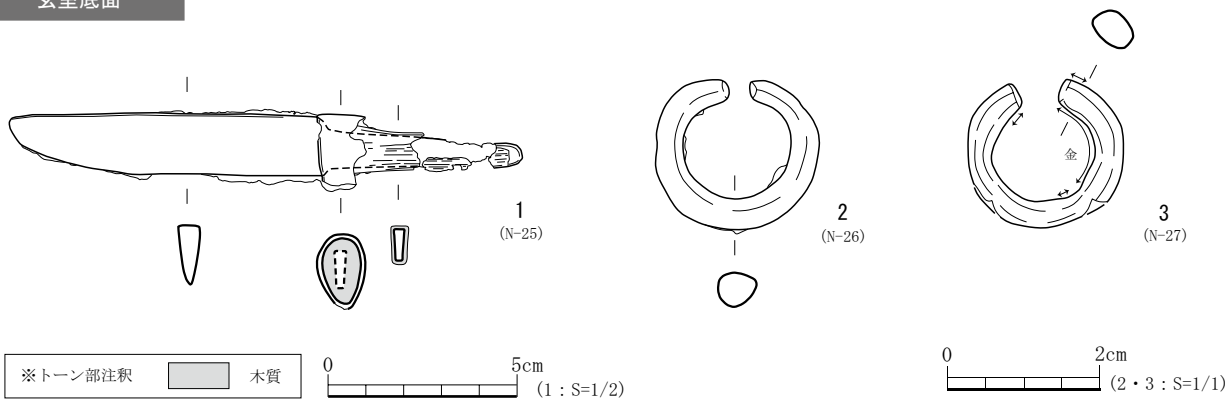
【まとめ】 ST15 横穴墓は、造墓後 1 回の埋葬が実施され、その後埋没したものと考えられる。遺物は刀子 1 点・耳環 2 点が玄室底面で出土したのみである。



層	土色	土性	備考
1	褐灰色（10YR4/1）	シルト	地山ブロック少量含む。
2	灰黄色（2.5Y6/2）	シルト	地山ブロック・岩盤崩落塊含む。
3	黄灰色（2.5Y5/1）	シルト	地山粒子含む。玄室内堆積土。

第122図　ST15 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図

玄室底面



No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	玄室	3層	金属製品	刀子	【法量】[刀身]長さ13.6cm　[刃部]長さ8.3cm・幅1.6cm　[茎部]長さ5.3cm [鞘]残存長径2.0cm・短径1.3cm・残存幅1.3cm 【特記事項】不均等両関？・木質残存(柄)・鉄製 【残存部位】刀身・鞘・柄木	N-25	312-7
2	玄室	3層	金属製品	耳環	【法量】直径2.2cm・断面径0.5cm・環の開き0.3cm 【特記事項】単環・青銅製	N-26	336-5
3	玄室	3層	金属製品	耳環	【法量】直径2.0cm・断面長0.6cm・断面幅0.4cm・環の開き0.5cm 【特記事項】単環・金残存・青銅製	N-27	336-4

第123図　ST15 横穴墓 出土遺物

16 号横穴墓（ST16）（第 124～129 図、第 26 表、写真図版 59・60）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 26～27m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST15、南東側には ST17 が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の天井が残存し、入口は南西に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 124 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成される。玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 4.81m を測る。

〔玄　室〕

平 面 形：楕円形を呈する。玄室各コーナーが不明瞭な形状で、玄室各壁の範囲認定が困難である。

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.42m、玄室の中央幅 2.40m、玄室底面から天井の高さ 0.91m を測る。床面積は約 4.8 ㎡である。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。玄室の右側底面には直径 0.05～0.10m の礫が敷き詰められていた。その総数は 2,271 個（総重量 186.2kg）である。

工 具 痕：風化が進んでいるため明瞭ではないが、各側壁に幅 0.08m 前後の工具痕跡がわずかに残存していた。工具痕の方向は、縦・横方向である。

付属施設：玄室の奥壁・右側壁・前壁の壁際と底面中央を通り、墓前域末端まで至る溝跡 1 を確認した。溝跡 1 は羨門付近に位置する溝跡 2 と接続する。その規模は幅 0.15～0.28m、深さ 0.07～0.09m を測る。底面の傾斜は玄室奥側が高く、墓前域側が低い。排水溝と考えられる。

そ の 他：奥壁の壁面で棒状鉄製品が打ち込まれた痕跡を 1 か所（棒状鉄製品 1）確認した。玄室底面から高さ 0.1m の地点に位置し、壁面で折れた状態で見つかった（写真図版 60-5・第 124 図）。現地調査終了時に壁面ごと取り上げ、室内整理の段階で X 線等による内容確認・壁面からの取り外した結果、この棒状鉄製品 1 は、先端が釘状の形態を呈するものであることが分かっている。状況から見て、玄室に伴うものと考えておきたい。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.36m、玄室側の幅 0.80m、墓前域側の幅 0.84m を測る。

立 面 形：天井が崩落しているため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：玄室から羨道の中心を通り墓前域末端に至る溝跡 1 を確認した。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.60m、幅 0.15～0.25m、深さ 0.07m の溝跡 2 を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。他の横穴墓でみられた閉塞石は 1 点も残存していなかった。閂穴等も検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長2.03m、上幅0.9～2.0m、下幅0.76～0.88mを測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で1.0m前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は0.2m程度である。

付属施設：玄室から延びる溝跡1を確認した。

【堆積層】　ST16横穴墓を覆う堆積層は細別8層・大別2層に分けた（第124図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別1層〕

大別1層（細別1～5層）はST16の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。大別1層底面（細別4層底面）の墓前域で、鉄刀（N-28/第127図1）が据えられた状態で出土した（写真図版60-7・8）。この出土状況から、本段階に墓前祭祀が実施されたと判断し、この面より上層を大別1層とした。

墓前域大別1層の堆積後、ST16の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別2層〕

大別2層（細別6～8層）はST16の玄室～墓前域の底面を覆う自然堆積層である。玄室の底面では鉄刀や玉製品などが出土している。ST16初葬直後の堆積層と考えられる。

【出土遺物】須恵器2点（破片2点※うち破片1点は遺構間接合遺物）、玉製品3点、石製品1点、金属製品56点（その他不明小破片多数）が出土した（第26表1～3）。人骨等は残存していない。須恵器1個体、玉製品3点、石製品1点、金属製品27点の合計32点を図示した（第126～129図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別1層(細別4・5層底面)出土遺物**、**B：大別2層（細別8層底面）・玄室底面出土遺物**の2群に分かれる。加えて、ST16では、別の横穴墓（ST6）で破砕された須恵器甕破片の一部がST16に混入したと考えられる破片1点（第26表2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C：大別1層（細別4層）の堆積途中**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST16関連遺物は、古い順からB→A→Cの3段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別2層（細別8層底面）・玄室底面出土遺物〕（第126～129図）

大別2層（細別6～8層）のうち、玄室細別8層と玄室底面で出土した遺物である（前項Bに相当）。玉製品・石製品・金属製品が出土した（第125図）。その内訳は石製丸玉3点（第126図2～4）、提砥1点（第126図5）、鉄刀1点（第128図1）・鐔1点（第127図2）・鞘尻金具1点（第127図3）・刀子2点（第127図4・5）・鉄鏃18点（第129図1～8）・鑷子とみられる破片1点（第127図6）・不明鉄製品2点（第129図7・8）と図示できなかった鉄鏃破片4点・不明鉄製品破片多数が出土した（第26表1・3）。これらの遺物はST16の初葬に伴い使用された遺物と推定される。墓前域では遺物が出土していないため、この初葬に伴う墓前祭祀があったかは不明である。

玄室内ではこの他に、壁面に打ち込まれた棒状鉄製品1点が出土している。棒状鉄製品は壁面で折れた状態で確認しており、状態が悪く図示はできていない。その折れた破片は、玄室底面で出土した不明金属製品の細片の中に含まれていると考えられる。出土位置からみて、後述する大別1層の段階では埋没していると想定されることから、玄室底面の出土遺物と同時期または造墓直後の間もない頃に奥壁に打ち込まれた可能性が高い。

〔大別１層（細別４・５層底面）出土遺物〕（第 126・127 図）

大別１層（細別 1～5 層）のうち、玄室～墓前域に堆積する細別４・５層の底面で出土した遺物である（前頁 A に相当）。須恵器・金属製品が出土した。その内訳は、須恵器蓋１個体（第 126 図 1)、鉄刀２点（うち１点を図化/第 127 図 1)、足金具とみられる破片１点、不明鉄製品２点である。

出土位置は、図示した須恵器蓋１点と鉄刀１点が墓前域の羨門付近、それ以外は玄室内である（第 125 図)。墓前域出土の鉄刀は羨門付近の底面に据えられた状態で出土しており、原位置を保っていると考えられる（写真図版 60-7・8)。墓前祭祀で使用されたものと判断される。本段階での追葬の有無については、玄室内出土遺物がごく僅かということもあり判断ができなかった。本段階の祭祀行為は、「墓前祭祀のみ」「追葬に伴う墓前祭祀」の両者の可能性を想定してきたい。

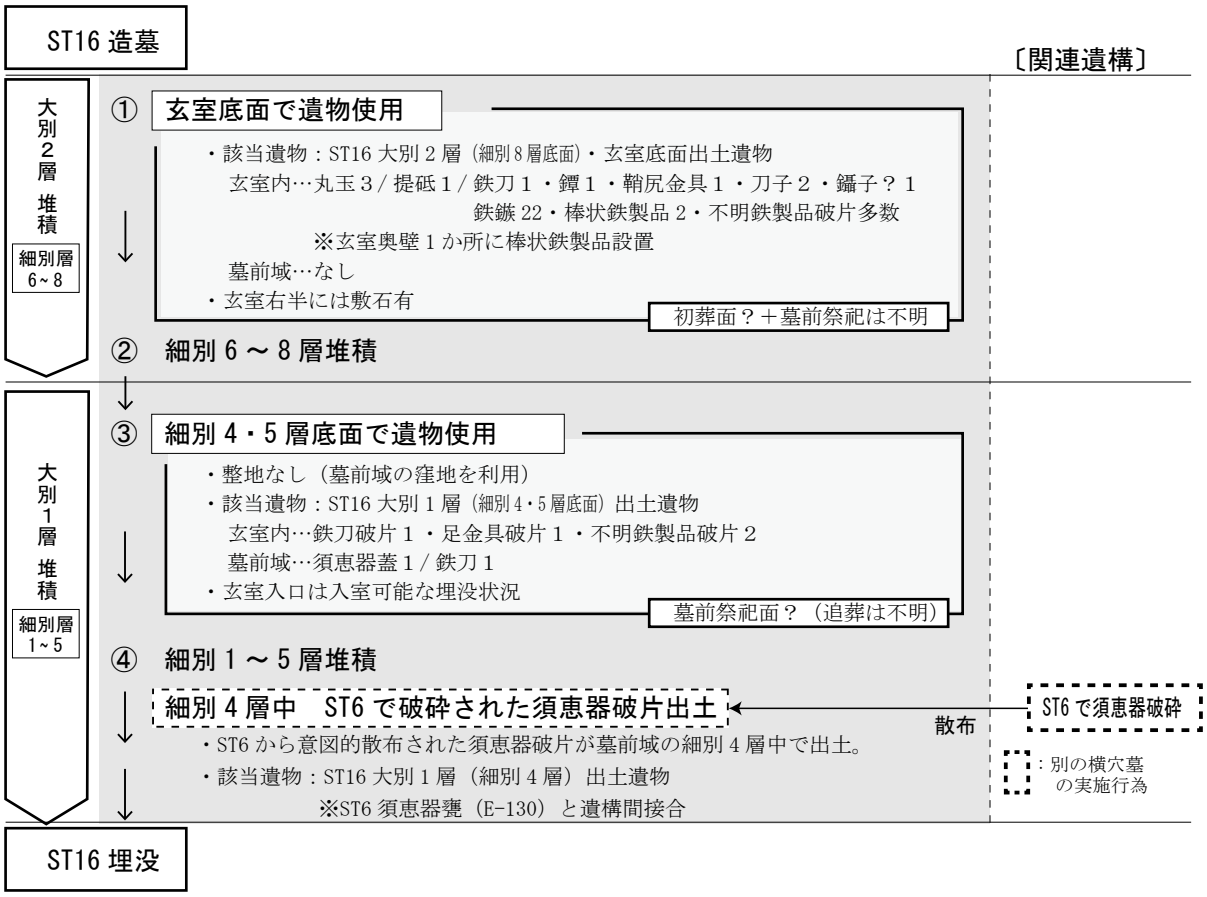
〔大別１層（細別４層）出土遺物〕

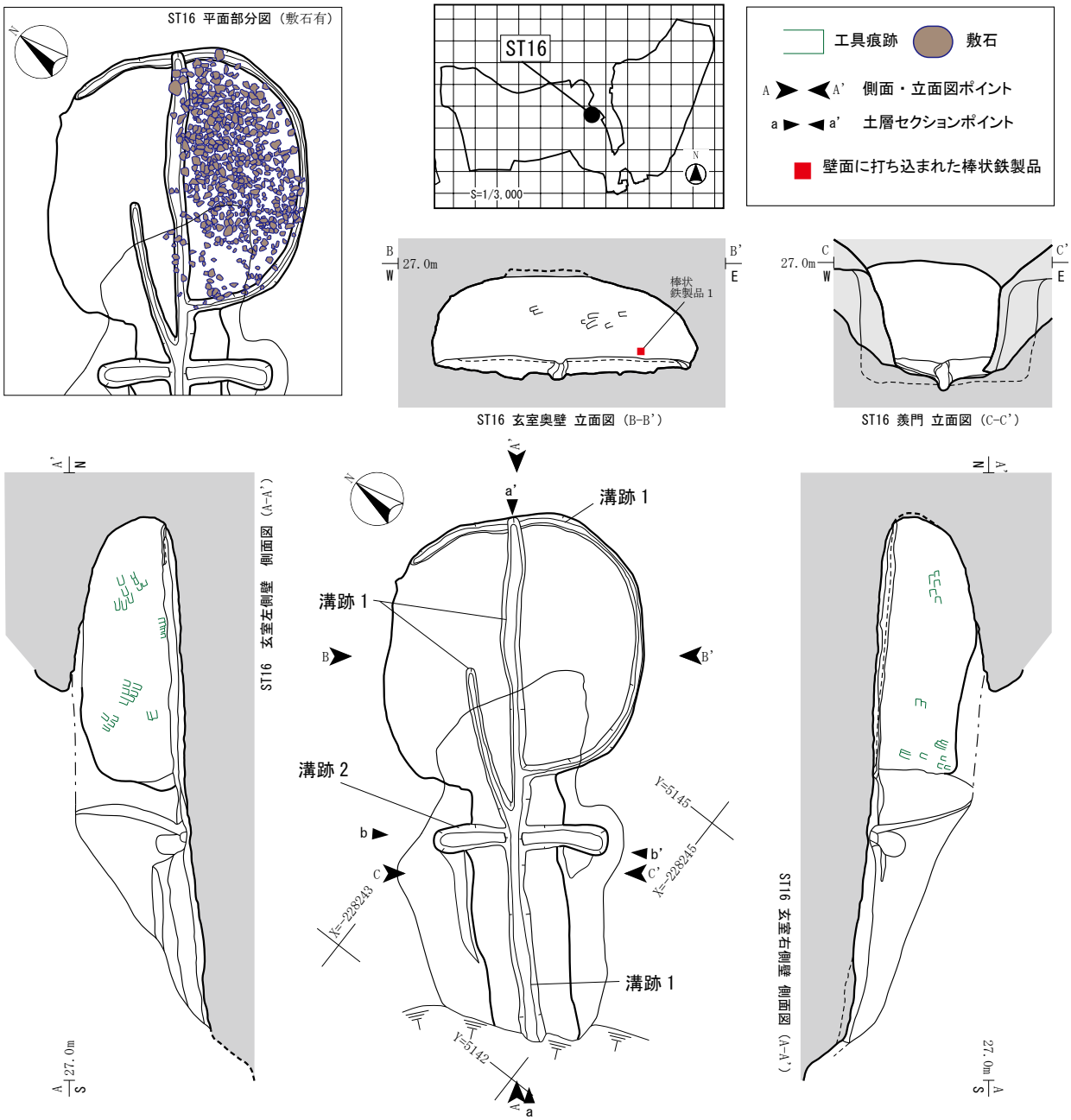
大別１層の細別４層堆積土中から出土した遺物である（前頁 C に相当)。須恵器甕破片１点が墓前域で出土した（第 26 表 2)。この須恵器甕破片は ST6 で破砕された後、ST16 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、**ST6 由来の須恵器甕（E-130／第 52 図 1)**と接合する。大別１層の細別４層堆積途中の段階に「ST6 から ST16 墓前域への須恵器の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。

【まとめ】

ST16 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST16 造墓・使用・埋没の経過〕

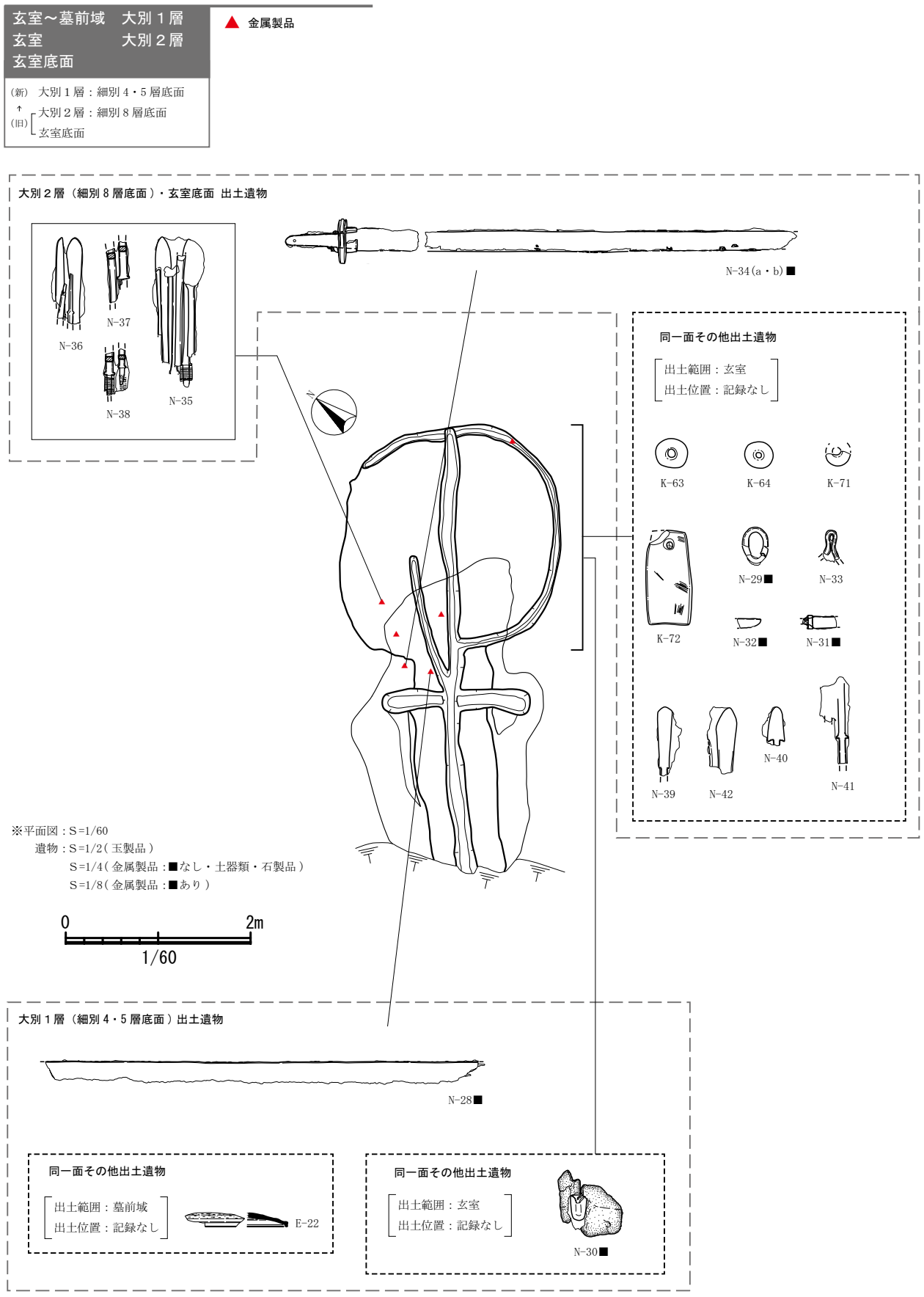




【土層図中の表記】
— 分層線の赤線：祭祀想定面
S ：礫
▼▲ ：各土層断面の交点

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山粒子少量含む。		
3	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	地山粒子少量含む。		
4	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子含む。		
5	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	地山ブロック微量含む。		
6	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質シルト	地山ブロック少量含む。	2	自然堆積層
7	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	地山ブロック多く含む。		
8	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック多く含む。		

第124図　ST16 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図



第125図　ST16 横穴墓 遺物出土状況図

第26表　ST16横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類・玉製品・石製品－遺構単独出土－

種別				須恵器		玉製品		石製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 個体/破片	蓋	小計	石製 丸玉	小計	提砥	小計
玄室	2	8層	個			3 (2.0)	3 (2.0)		
			破						
		底面	個					1 (40.4)	1 (40.4)
			破						
墓前域	1	4層	個	1 (45)	1 (45)				
			破						
総合計		個体数(重量)		1 (45)	1 (45)	3 (2.0)	3 (2.0)	1 (40.4)	1 (40.4)
		破片数(重量)							
		総重量		(45)	1 (45)	(2.0)	3 (2.0)	(40.4)	1 (40.4)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、
「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

3. 金属製品

種別				金属製品									
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 掲載/非掲載	鉄刀	鐔	足金具?	鞘尻金具	刀子	鉄鏃	鑷子?	棒状鉄製品	不明鉄製品	小計
玄室	1	4層	掲										
			非掲	1									1
		5層	掲										
			非掲			1						2	3
	2	8層	掲	1				1	4	1		2	9
			非掲						2			17＋破片多数	19 ＋破片多数
		底面	掲		1		1	1	14				17
			非掲						2			3	5
	–	奥壁	掲										
			非掲								1		1
墓前域	1	4層	掲	1									1
			非掲										
器種別総合計		掲載遺物点数		2	1		1	2	18	1		2	27
		非掲載遺物点数		1		1			4		1	22＋破片多数	29 ＋破片多数
		総点数		3	1	1	1	2	22	1	1	24＋破片多数	56 ＋破片多数

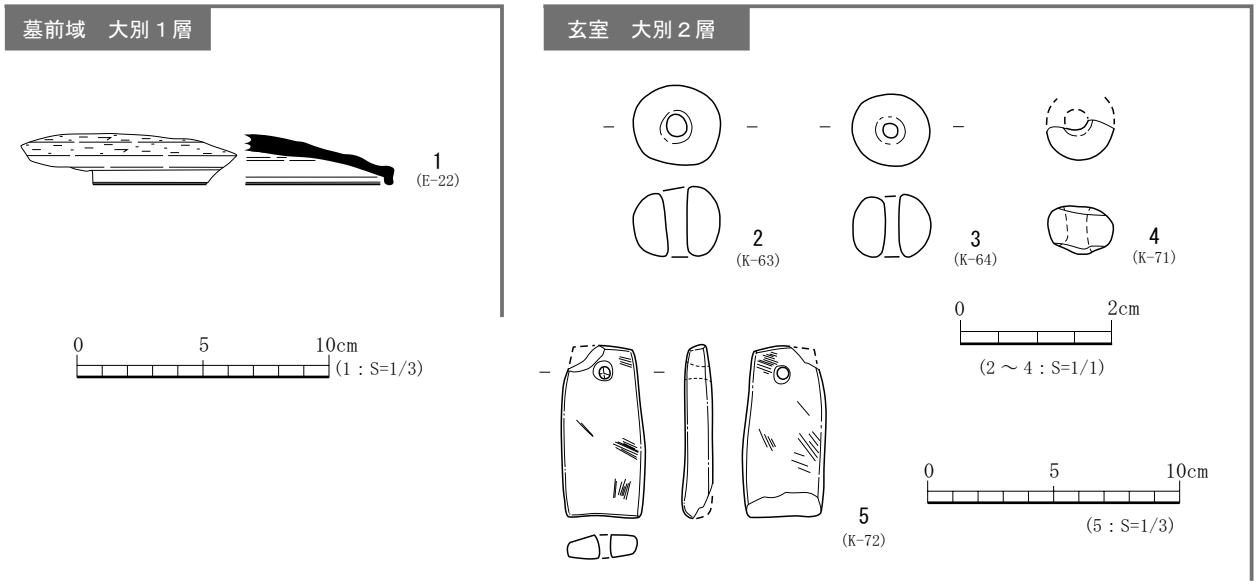
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、
本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示
した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」
とした。(ST16出土の不明小片の重量は28.7g)

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (2,880)	◆ST5　7層 (墓前域) ◆ST6　18・19・21～23層 (墓前域) 26層上面 (墓前域) ◆ST16　4層 (墓前域) ◆A区検出面 (ST4・5付近)	ST6	◆ST5：2点 ★ST6：68点 ◆ST16：1点 ◆A区検出面：1点	E 130	第52図1

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1　検出面 】は、
本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)
であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST16出土須恵器の総数
(表26-1)遺構単独出土　1個体
＋
(表26-2)遺構間接合遺物　破片1点　＝ 2 点

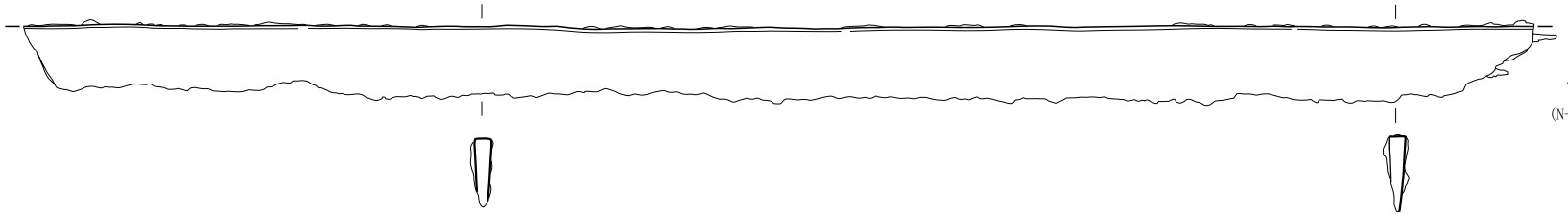


No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層	須恵器 蓋	【技法】外面：天井部回転ヘラ削り・口縁部ロクロナデ、内面：ロクロナデ 【法量】残存高2.0㎝・器厚0.4～0.6㎝	E-22	219-7

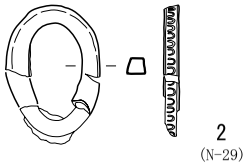
No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
2	玄室	8層	石製品	丸玉	片岩	1.15	－	－	0.95	－	0.20～0.35	0.7	K-63	275-13
3	玄室	8層	石製品	丸玉	片岩	1.05	－	－	0.80	－	0.20	1.1	K-64	275-14
4	玄室	8層	石製品	丸玉	頁岩？	0.90	－	－	0.65	－	0.25	0.2	K-71	275-15
5	玄室	底面	石製品	提砥	片岩	6.85	3.30	－	1.20	－	0.45	40.4	K-72	297-3

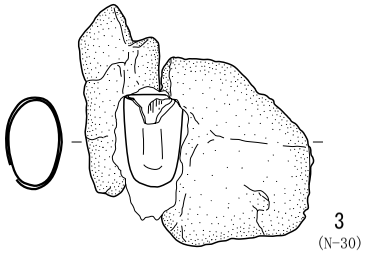
第126図　ST16 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類・玉製品・石製品 －

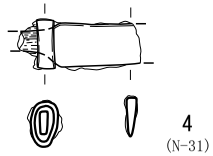
墓前域　大別１層

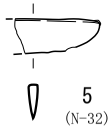


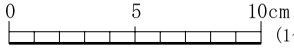
玄室　大別２層

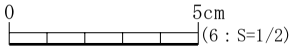








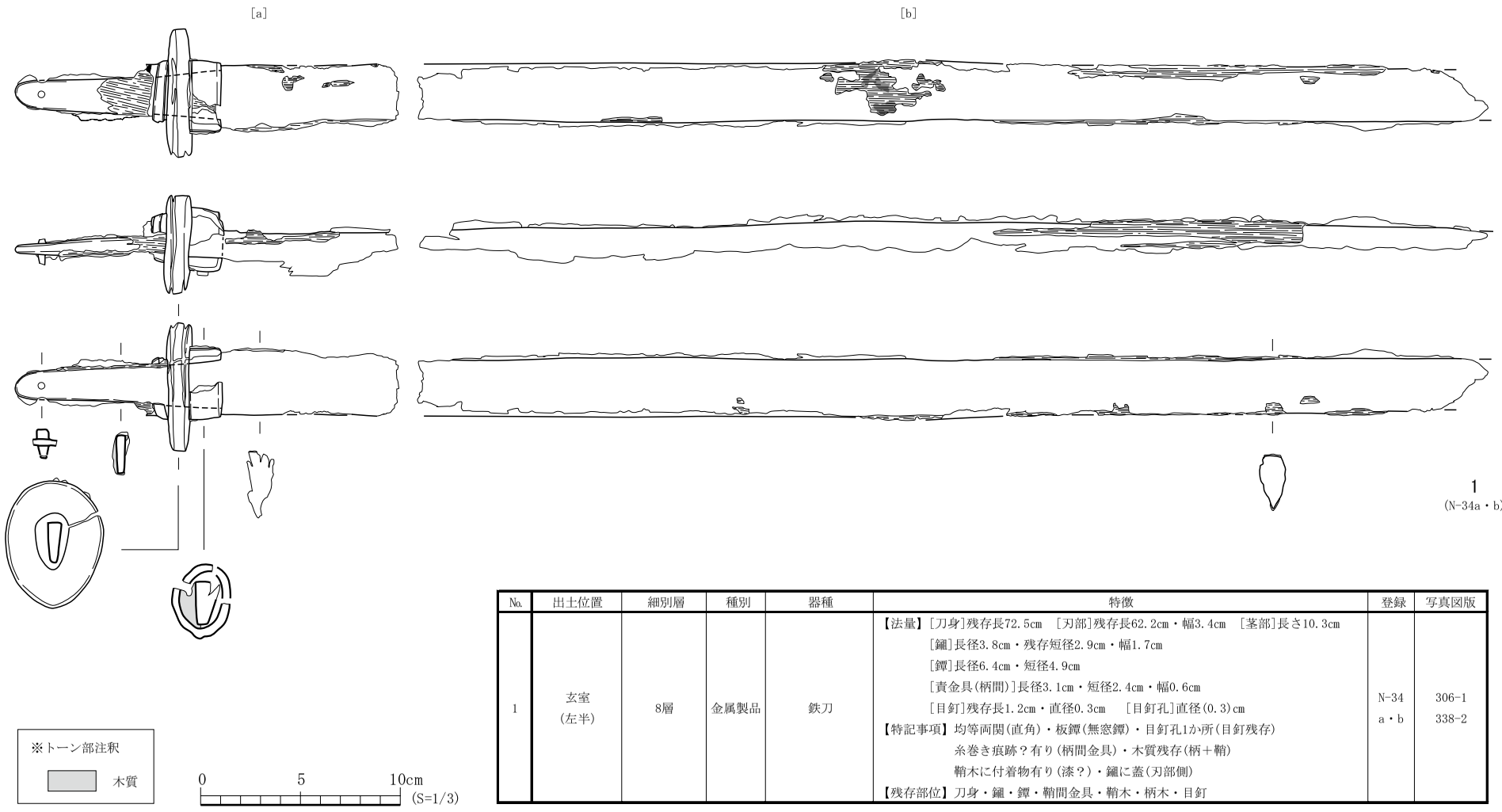




No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	墓前域	4層	金属製品	鉄刀	【法量】残存長63.3cm・残存幅3.2cm	N-28	306-2
2	玄室 (右半)	底面	金属製品	鐔	【法量】残存長径5.3cm・短径3.7cm・厚さ0.6cm 【特記事項】銀象嵌・喰出鐔・耳に「U」字状の象嵌・鉄製 【自然科学分析】第2分冊 第4章 第6節参照	N-29	305-8 305-9
3	玄室 (右半)	底面	金属製品	鞘尻金具	【法量】長径3.6cm・短径2.2cm・残存長3.7cm 【特記事項】礫に付着・鉄製	N-30	305-7
4	玄室 (右半)	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長4.9cm　[刃部]残存長3.2cm・幅1.7cm　[茎部]残存長1.7cm [鋒]長径1.9cm・短径1.1cm・幅0.7cm 【特記事項】不均等両関？・木質残存(柄)・鉄製　【残存部位】刀身・鋒・柄木	N-31	312-9
5	玄室	8層	金属製品	刀子	【法量】残存長3.4cm・幅1.3cm　【特記事項】鉄製	N-32	312-8
6	玄室	8層	金属製品	鏃子？	【法量】残存長2.2cm・残存幅1.2cm・厚さ0.4cm　【特記事項】鉄製	N-33	336-3

第127図　ST16 横穴墓 出土遺物 (2) －金属製品－

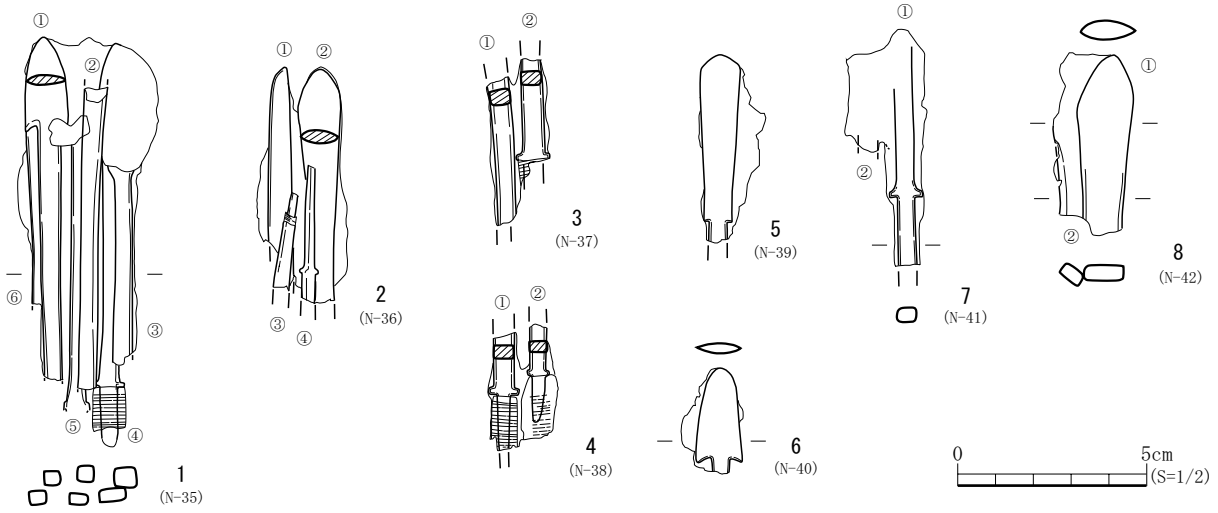
玄室　大別２層



No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	玄室 (左半)	8層	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長72.5cm　[刃部]残存長62.2cm・幅3.4cm　[茎部]長さ10.3cm [鋒]長径3.8cm・残存短径2.9cm・幅1.7cm [鐔]長径6.4cm・短径4.9cm [責金具(柄間)]長径3.1cm・短径2.4cm・幅0.6cm [目釘]残存長1.2cm・直径0.3cm　[目釘孔]直径(0.3)cm 【特記事項】均等両関(直角)・板鐔(無窓鐔)・目釘孔1か所(目釘残存) 糸巻き痕跡？有り(柄間金具)・木質残存(柄＋鞘) 鞘木に付着物有り(漆？)・鋒に蓋(刃部側) 【残存部位】刀身・鋒・鐔・鞘間金具・鞘木・柄木・目釘	N-34 a・b	306-1 338-2

第128図　ST16 横穴墓 出土遺物 (3) －金属製品－

玄室　大別２層



※逆刺無しの場合　［全長］＝A＋B＋C　　［鏃長］＝A＋B
※逆刺有りの場合　［全長］＝A＋B＋C－逆刺長　［鏃長］＝A＋B－逆刺長

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
1	玄室	底面	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃 両刃A1	残存 9.1	1.1	残存 9.1	2.6	残存 6.6	－	[逆刺長]0.1cm	N-35	315-9 344-1
				②鉄鏃	－	残存 8.0	－	残存 8.0	－	残存 8.0	－			
				③鉄鏃	長頸鏃 両刃B	残存 5.3	0.6	残存 5.3	残存 0.3	残存 5.0	－	[鏃身関]斜め		
				④鉄鏃	長頸鏃？	残存 10.6	－	残存 9.1	－	－	残存 1.5	[茎関]棘関a 口巻残存		
				⑤鉄鏃	長頸鏃？	残存 7.0	－	残存 7.0	－	残存 7.0	－	[茎関]棘関a		
				⑥鉄鏃	－	残存 4.7	－	残存 4.7	－	残存 4.7	－			
2	玄室	底面	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 5.8	－	残存 5.8	0.8	残存 5.0	－		N-36	315-10
				②鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 5.7	1.1	残存 5.7	1.0	残存 4.7	－			
				③鉄鏃	長頸鏃？	残存 2.6	－	残存 1.8	－	残存 1.8	残存 0.8	[茎関]角関？ 口巻残存		
				④鉄鏃	長頸鏃？	残存 3.6	－	残存 1.0	－	残存 1.0	残存 2.6	[茎関]棘関b		
3	玄室	底面	金属製品	①鉄鏃	－	残存 3.9	0.6	残存 3.9	－	残存 3.9	－		N-37	315-14
				②鉄鏃	長頸鏃？	残存 3.3	0.9	残存 2.7	－	残存 2.7	残存 0.6	[茎関]棘関a 樹皮巻残存		
4	玄室	底面	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃？	残存 3.1	0.8	残存 1.7	－	残存 1.7	残存 1.4	[茎関]棘関a 口巻残存	N-38	315-15
				②鉄鏃	長頸鏃？	残存 2.6	0.6	残存 1.4	－	残存 1.4	1.2	[茎関]棘関a 口巻残存		
5	玄室	8層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃B	残存 5.0	1.0	残存 5.0	4.4	残存 0.6	－		N-39	315-12 344-2
6	玄室	8層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃A1	残存 2.8	1.2	残存 2.8	2.5	残存 0.4	－	[逆刺長]0.1cm	N-40	315-16 344-3
7	玄室	8層	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃？	残存 5.8	0.8	残存 4.0	－	残存 4.0	残存 1.8	[茎関]台形関a2	N-41	315-11
				②不明	－	残存 0.4	0.5	－	－	－	－	棒状不明鉄製品		
8	玄室	8層	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 4.8	1.4	残存 4.8	1.6	残存 3.2	－		N-42	315-13
				②不明	－	残存 2.4	－	－	－	－	－	棒状不明鉄製品		

第129図　ST16 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 金属製品 －

17 号横穴墓（ST17）（第 130～139 図、第 27 表、第 4 分冊 写真図版 61・62）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 25～27m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST16、南東側には ST18 が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全ての天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 130 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 9.72m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.00m、玄室の中央幅 1.98m、奥壁幅 1.80m、前壁幅 1.80m、左側壁幅 1.60m、右側壁幅 1.93m、玄室底面から天井の高さ 1.15m を測る。床面積は約 3.8 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とするが、奥壁と両側壁のコーナー部分がやや歪んだ形状となる。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形はやや歪んだ逆 U 字形を呈する。幅 0.98m、高さ 1.12m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.06m 前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦・斜め方向、天井部が放射状である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.70m、玄室側の幅 0.98m、墓前域側の幅 1.22m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。やや歪んだ逆 U 字形を呈していたと考えられる。

天　　井：大部分が崩落している。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.18m の段差があり、段差下の墓前域に角礫 17 個が残存していた。礫は 0.20×0.16×0.07m（4.8 kg）～0.30×0.25×0.20m（54.8 kg）、総重量 407.5 kgを測り、石材は全て花崗閃緑岩である（第 27 表 4）。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 7.02m、上幅 1.0～2.7m、下幅 1.35～1.58m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.5m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.9m 程度である。

【堆積層】 ST17 横穴墓を覆う堆積層は細別 13 層・大別 5 層に分けた（第 131 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1 層）は ST17 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別 2 層の層理面（細別 2 層上面）で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別 1 層底面以下には整地層が認められないことから、大別 2 層堆積後の窪地上面を利用した可能性が高い。大別 1 層堆積後、ST17 の入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 2・3 層〕

大別 2 層（細別 2～9 層）は ST17 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 3 層（細別 10 層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 3 層は、横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、整理である大別 3 層中でも一定量遺物が出土する。これらの遺物は大別 3 層上面での祭祀以前に墓前域で使用された遺物と考えられる。

〔大別 4 層〕

大別 4 層（細別 11・12 層）は ST17 の墓前域に堆積する自然堆積層で、遺物は含まれない。造墓直後の堆積層とみられる。

〔大別 5 層〕

大別 5 層（細別 13 層）は ST17 の墓前域末端に堆積する地山ブロックを多く含む人為堆積層で、遺物は含まれない。造墓に伴う掘削排土とみられる。

【出土遺物】土師器 6 点（1 個体、破片 5 点）、須恵器 146 点（14 個体、破片 132 点※うち 3 個体・破片 1 点は遺構間接合遺物）、金属製品 1 点が出土した（第 27 表 1～3）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、大半は墓前域で出土している（第 133・134 図）。土師器埦 1 個体、須恵器坏 4 個体・高台皿 1 個体・蓋 1 個体・長頸壺 1 個体・短頸壺 2 個体・甕 5 個体の合計 15 点を図示した（第 135～139 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 1 層底面）出土遺物**、**B：大別 2 層（細別 9 層底面）出土遺物**、**C：大別 3 層（細別 10 層底面）出土遺物**の 3 群に分かれる。加えて、ST17 では、別の横穴墓（ST51）で破砕された須恵器破片の一部が ST17 に混入したと考えられる遺物 1 点（第 27 表 2）も出土している。この須恵器破片は遺構間で接合する遺物であり、**D：墓前域大別 2 層の堆積途中（細別 7 層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST17 関連遺物は、古い順から C→B→D→A の 4 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層（細別 10 層底面）出土遺物〕（第 139 図）

大別 3 層（細別 10 層）の底面で出土した遺物である（前項 C に相当）。大別 3 層は人為堆積層（整地層）であるが、本層底面出土の遺物は、その整地前の横穴墓掘方底面付近で使用された遺物と考えられる。土師器埦 1 個体（第 139 図 1）、須恵器高台皿 1 個体（第 139 図 4）・蓋 1 個体（第 139 図 3）・甕 1 個体（第 139 図 5）と図示できなかった坏破片・甕破片が出土した。（第 27 表 1）。遺物は全て破片の状態で出土しており、その大半は墓前域に分布する（第 134 図）。このうち、高台坏と蓋の破片は墓前域と玄室の両者で出土し、それぞれが接合関係にある。墓前域で破砕した破片を玄室に散布したものと推定

される。須恵器甕についても墓前域下半の一定範囲で破片の状態で出土しており、墓前域の祭祀で破砕されたものと考えられる。以上の状況から、本層底面出土の遺物はST17の墓前祭祀で使用された遺物と判断される。出土層位が墓前域の掘方底面にあたることから、初葬に関連するものとみておきたい。

なお、大別3層では短頸壺1個体（第139図2）も出土しているが、この壺は大別3層の上半部で出土した遺物であり、次段階の大別2層に関連するものと考えられる（次項参照）。

〔大別２層（細別９層底面）出土遺物〕（第138図）

大別2層（細別2～9層）のうち、墓前域に分布する細別9層の底面〔＝大別3層（細別10層）上面〕で出土した遺物である（前頁Bに相当）。須恵器長頸壺1点（第138図1）・甕1個体（第138図2）が墓前域で出土した（第134図）。このうち、第138図の須恵器甕1個体（E-151）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓（ST14）で出土している（第132図）。墓前域における須恵器甕の破砕散布行為の痕跡と考えられる。この他に、この段階に使用されたと考えられる遺物として、大別2層下層にあたる墓前域大別3層（整地層）出土の須恵器短頸壺1個体（第139図2）がある。この壺は、整地層である大別3層（細別10層）の上半部で正位に据えられた状態で出土した（写真図版61-7）。出土状況からみて、大別3層の整地時に整地土とともに埋納されたものと推定される。これらの遺物は、墓前域の大別2層底面付近で実施された墓前祭祀に関連する遺物と考えられる。

堆積土の状況から、この段階のST17は、ほとんど埋没しておらず、玄室への入室が可能な状態だったと考えられる。また、祭祀面（整地層）の上面には閉塞石が残存しており、この段階で玄室入口の閉塞行為があった可能性が高く、玄室と墓前域の行き来があったことが十分想定できる状況である。玄室内でこの段階に伴うとみられる遺物が1点も出土していないため断定はできないが、本段階の墓前祭祀については、ST17の追葬に関連する可能性が高いとみておきたい。

〔大別２層（細別７層）出土遺物〕

大別2層（細別2～9層）のうち、細別7層の堆積土中から出土した遺物である（前頁Dに相当）。須恵器甕の体部破片1点が出土した（第27表2）。

この須恵器甕破片は別の横穴墓で破砕された後、ST17の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST51由来の須恵器甕**(E-186／第378図1)**のものである（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST51は、ST17から直線距離で約25m南東の尾根を隔てた別斜面に位置することから、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別2層（細別7層）堆積途中の段階に「ST51からST17墓前域への須恵器甕の意図的な散布行為」が行われたと想定される。

〔大別１層（細別１層底面）出土遺物〕（第135～137図）

大別1層（細別1層）の底面で出土した遺物である（前頁Aに相当）。須恵器坏4個体（第135図1～4）・短頸壺1個体（第135図5）・甕3個体（第135図6・第136図1・第137図1）と図示した甕と同一個体とみられる破片が出土した（第27表1・2）。須恵器甕のうち、第135図6と第136図1の甕（E-157・158）は接合しないが同一個体の可能性が高い。

遺物はすべて破片で散在した状態で出土した。その分布は墓前域の羨門付近に集中する（第133図）。このうち、図示した須恵器甕2個体については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓から出土している。具体的には第136図1の甕（E-157）はST18出土遺物、第135図6の甕（E-158）はST18・SK47出土遺物と接合する（第132図）。この他、非図化の須恵器甕破片（Y・E-147）についてもST18出土遺物と接合関係にある（第27表2）。これらは墓前域における須恵器甕類の破砕散布行為の痕跡と考えられる。ST17の墓前域で破砕した須恵器破片は、ST17から少なくとも2か所（ST18・SK47）に散布されたと想定される。本層同一面出土の遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定

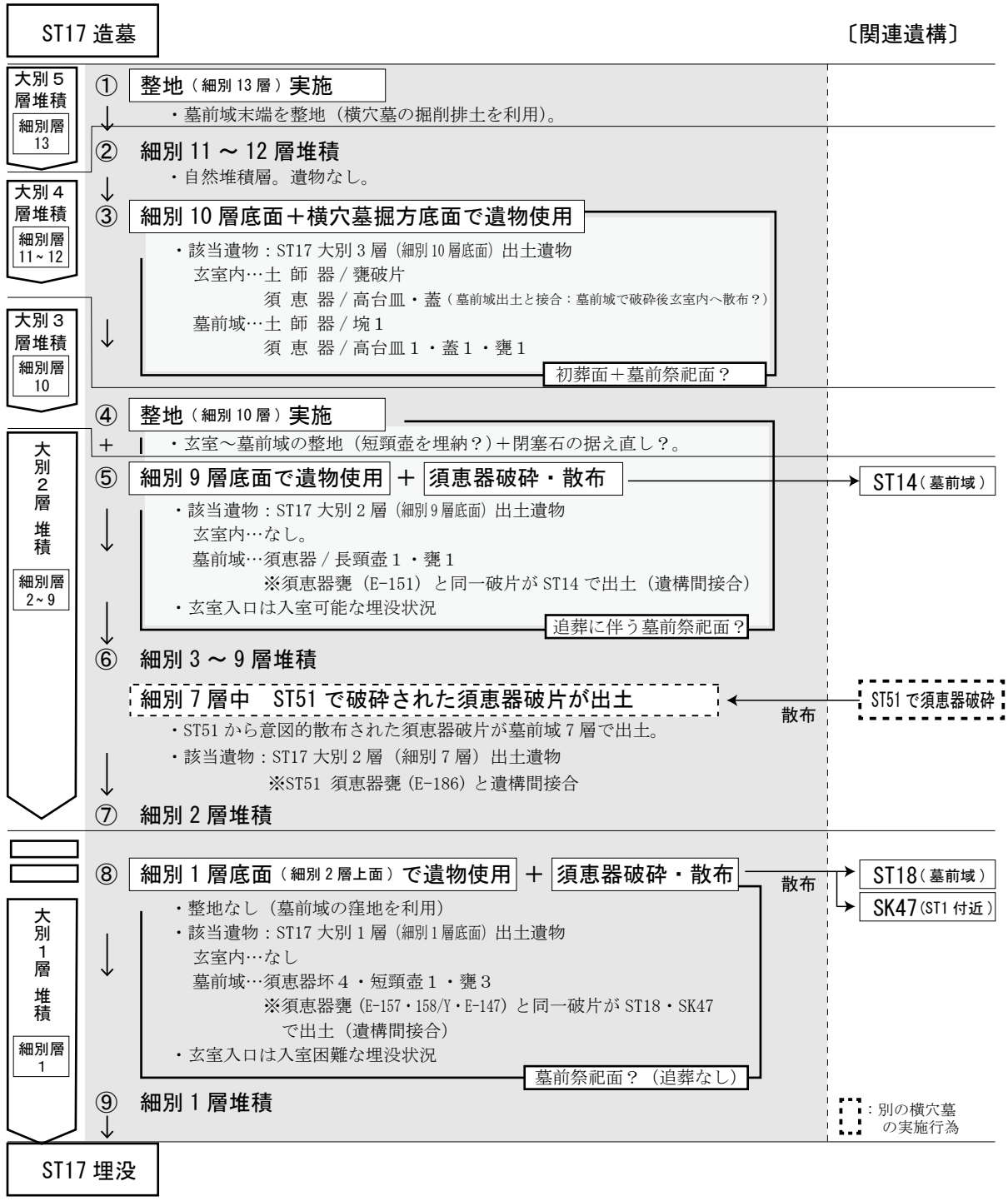
される。遺物は同一面上で出土しており、破片の状態で原位置を保ったまま埋没したものとみられる。

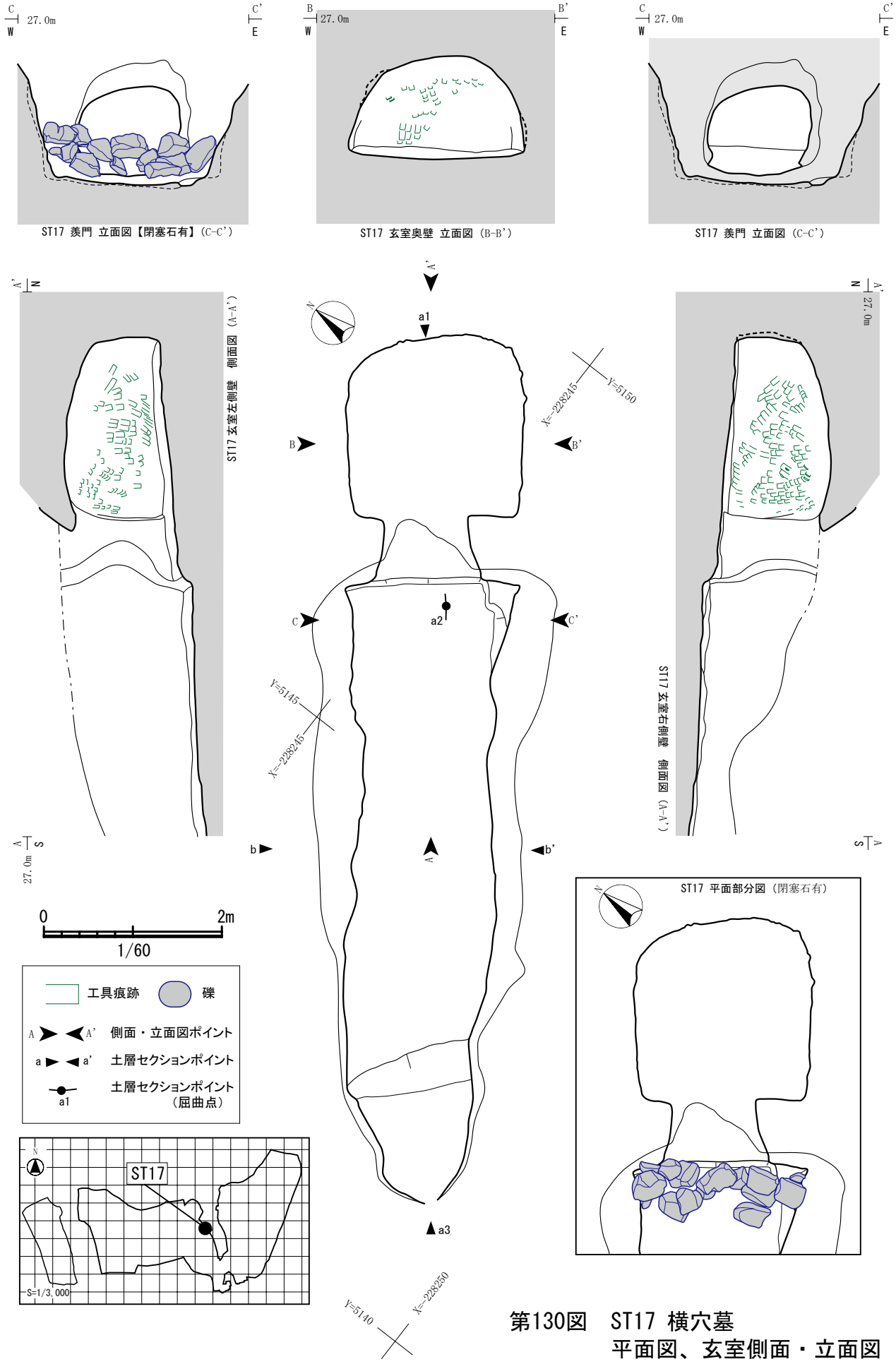
堆積土の状況から、この段階の ST17 については、墓前域がほぼ埋没し、玄室の入口がわずかに開口している状態であったと考えられ、玄室への入室は困難だったと推定される。祭祀のための整地も確認されていない。以上のことから、本面での墓前祭祀は、大別２層堆積後の窪地を利用した祭祀で、追葬とは関連のないものであったと想定される。

【まとめ】

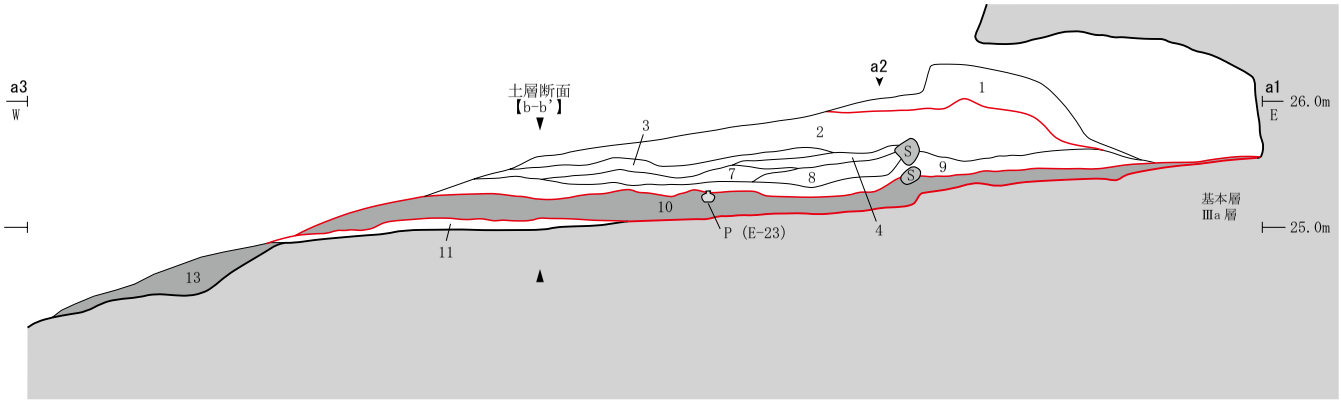
ST17 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST17 造墓・使用・埋没の経過〕



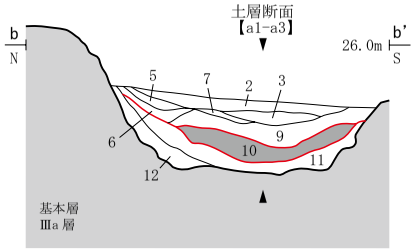


第130図　ST17 横穴墓
平面図、玄室側面・立面図



ST17 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック含む。須恵器片多量含む。	1	自然堆積層
2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	上層に須恵器片含む。	2	自然堆積層
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト			
4	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
5	明黄褐色(10YR7/6)	シルト			
6	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト			
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
8	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
10	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山ブロック・黒色土多く含む。	3	人為堆積層（整地層）
11	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック（小）少量含む。	4	自然堆積層
12	灰黄色(2.5Y7/2)	シルト	地山ブロック（小）含む。		
13	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック（大・小）多量含む。	5	人為堆積層（整地層）



ST17 墓前域 土層断面〔b-b'〕

【土層図中の表記】

- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫
- P ：土器類
- ：土層断面の屈曲点
- ：各土層断面の交点

0 2m

1/60

第131図　ST17横穴墓 土層断面図

第27表　ST17横穴墓　出土遺物一覧

1．土器類－遺構単独出土－

種別				土師器				須恵器						
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／個体／破片	坏	埦	甕	小計	坏	高台皿	蓋	長頸壺	短頸壺	甕	小計
玄室	－	底面直上(10層)	個											
			破			1 (10)	1 (10)	1 (5)					1 (15)	2 (20)
墓前域	1	1層(2層上面)	個					3 (205)				1 (55)		4 (260)
			破	4 (140)			4 (140)						36 (240)	36 (240)
		1層(2層上面)【墓前域＋玄室】	個					1 (130)						1 (130)
			破											
		1･2層	個										1 (4,405)	1 (4,405)
			破											
	2	10層上面(9層)	個								1 (455)			1 (455)
			破											
	3	10層	個		1 (55)		1 (55)					1 (335)	1 (2,025)	2 (2,360)
			破					2 (10)					91 (4,355)	93 (4,365)
		10層(墓前域＋玄室)	個						1 (230)	1 (345)				2 (575)
			破											
総合計	個体数(重量)				1 (55)		1 (55)	4 (335)	1 (230)	1 (345)	1 (455)	2 (390)	2 (6,430)	11 (8,185)
	破片数(重量)			4 (140)		1 (10)	5 (150)	3 (15)					128 (4,610)	131 (4,625)
	総重量			(140)	(55)	(10)	6 (205)	(350)	(230)	(345)	(455)	(390)	(11,040)	142 (12,810)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構･層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (5,935)	◆ST14　1層(墓前域) ◆ST17　9層(墓前域)	ST17	◆ST14:1点 ★ST17:30点	E 151	第138図2
須恵器	甕	1 (960)	◆ST17　1･2層(墓前域) ◆ST18　2層(墓前域)	ST17	★ST17:3点 ◆ST18:2点　※E-158甕と類似	E 157	第136図1
須恵器	甕	1 (2,345)	◆ST17　1･2層(墓前域) ◆ST18　2層(墓前域) ◆A区　SK47　1層	ST17	★ST17:6点 ◆ST18:5点 ◆A区　SK47:3点　※E-157甕と類似	E 158	第135図6
須恵器	甕	(160)	◆ST17　2層上面(墓前域) ◆ST18　2層(墓前域)	ST17	★ST17:2点 ◆ST18:2点 ※類似破片ST17で多く出土 ⇒E-152･157･158のいずれかの破片か	Y･E 147	－
須恵器	甕	1 (22,550)	◆ST17　7層(墓前域) ◆ST18　2層上半部(墓前域) ◆ST47　4層(墓前域) ◆ST48　7層(墓前域) ◆ST49　検出面(墓前域) ◆ST51　22層(墓前域)	ST51	◆ST17:1点 ◆ST18:4点 ◆ST47:1点 ◆ST48:1点 ◆ST49:1点 ★ST51:119点	E 186	第378図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST17出土須恵器の総数
(表27-1)遺構単独出土　11個体＋破片131点
＋
(表27-2)遺構間接合遺物　3個体＋破片1点　＝ 146　点

3．金属製品

種別			金属製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 掲載/非掲載	不明鉄製品	小計
墓前域	2	2層	掲		
			非掲	1	1
器種別総合計	掲載遺物点数				
	非掲載遺物点数			1	1
	総点数			1	1

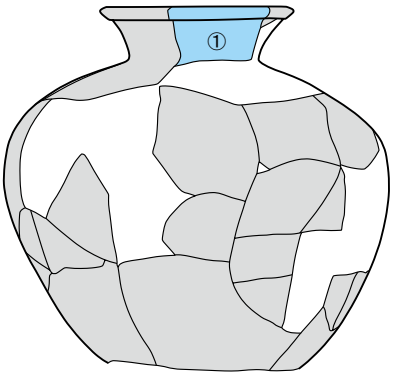
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

4．閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	20	16	7	4.8
花崗閃緑岩	角礫	25	14	8	4.8
花崗閃緑岩	角礫	27	12	12	10.7
花崗閃緑岩	角礫	39	22	9	12.3
花崗閃緑岩	角礫	24	23	13	12.8
花崗閃緑岩	角礫	30	20	12	12.9
花崗閃緑岩	角礫	25	21	15	15.1
花崗閃緑岩	角礫	24	17	15	15.8
花崗閃緑岩	角礫	35	25	23	21.9
花崗閃緑岩	角礫	36	25	14	24.2
花崗閃緑岩	角礫	25	20	13	24.6
花崗閃緑岩	角礫	35	26	20	30.2
花崗閃緑岩	角礫	34	28	20	33.3
花崗閃緑岩	角礫	37	30	20	34.6
花崗閃緑岩	角礫	35	30	23	44.9
花崗閃緑岩	角礫	36	27	20	49.8
花崗閃緑岩	角礫	30	25	20	54.8
合計:17点／重量(kg)＝					407.5

E-151　須恵器 甕（第 138 図 2）

正面

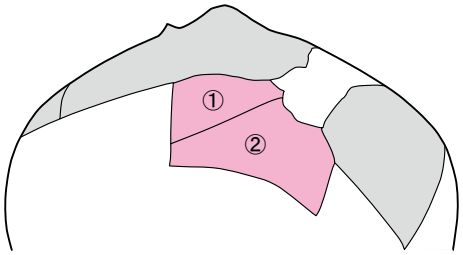


縮尺任意

塗り注釈		出土層位
	ST17	［墓前域］9層
①	ST14	［墓前域］1層
白抜	欠損箇所	

E-157　須恵器 甕（第 136 図 1）

正面

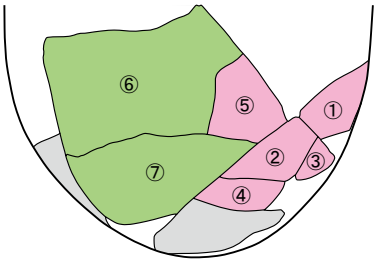


縮尺任意

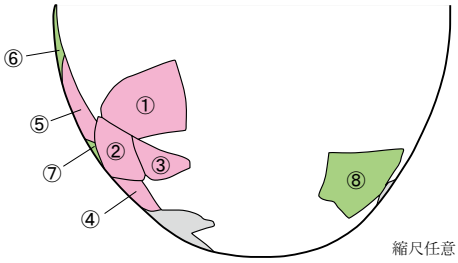
塗り注釈		出土層位
	ST17	［墓前域］1・2層
①②	ST18	［墓前域］2層
白抜	欠損箇所	

E-158　須恵器 甕（第 135 図 6）

正面



右側面



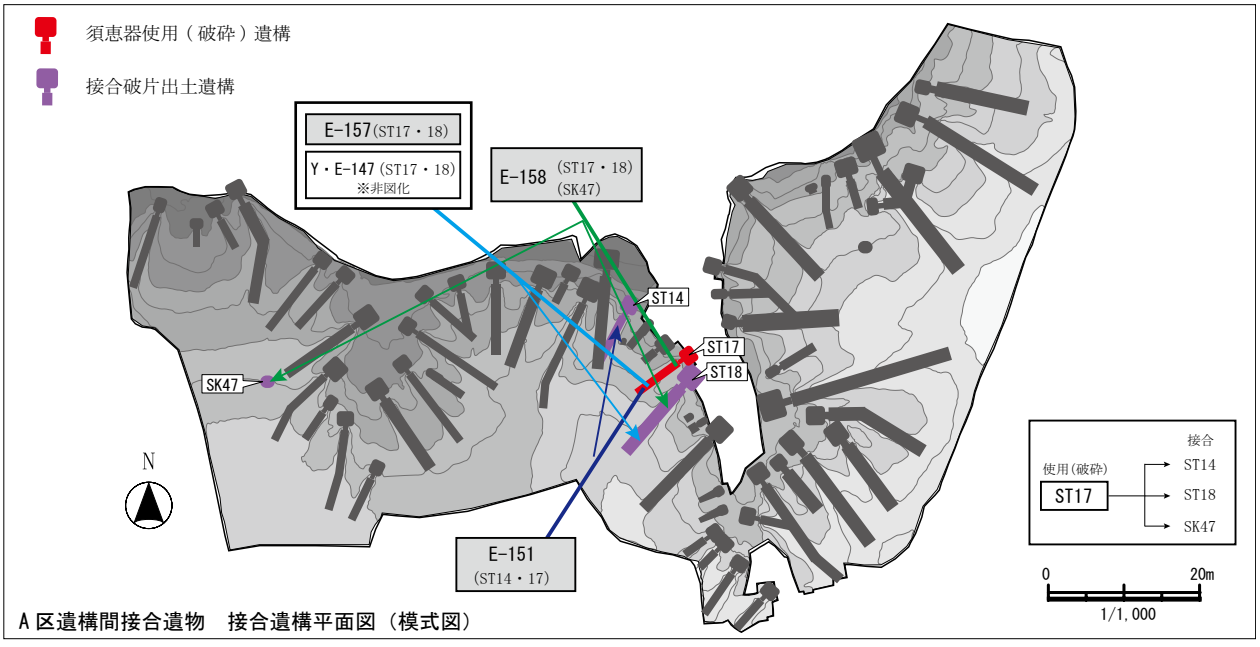
縮尺任意

塗り注釈

	ST17
①～⑤	ST18
⑥～⑧	SK47（A区）
白抜	欠損箇所

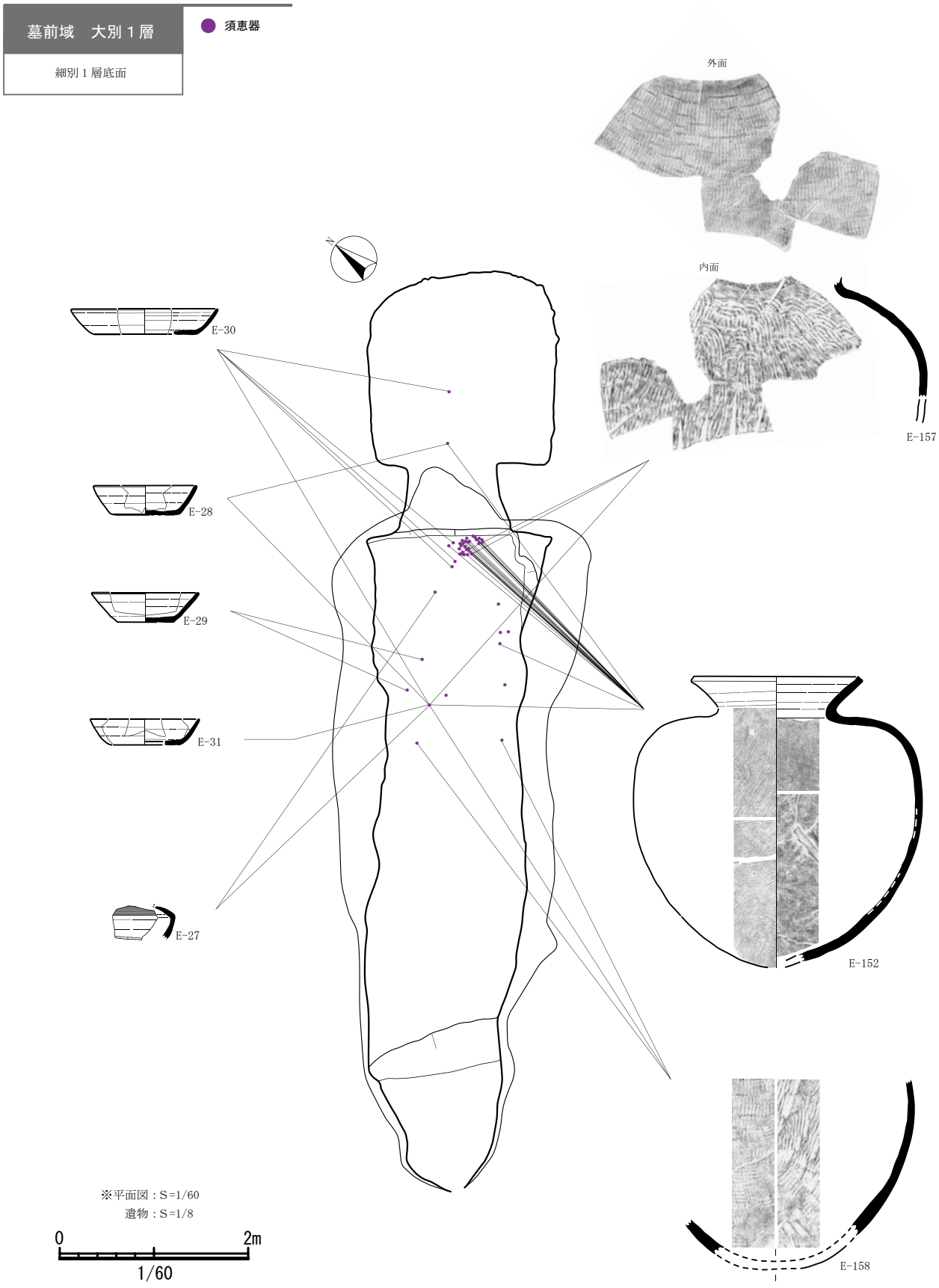
出土層位

ST17	［墓前域］1・2層
ST18	［墓前域］2層
SK47	1層

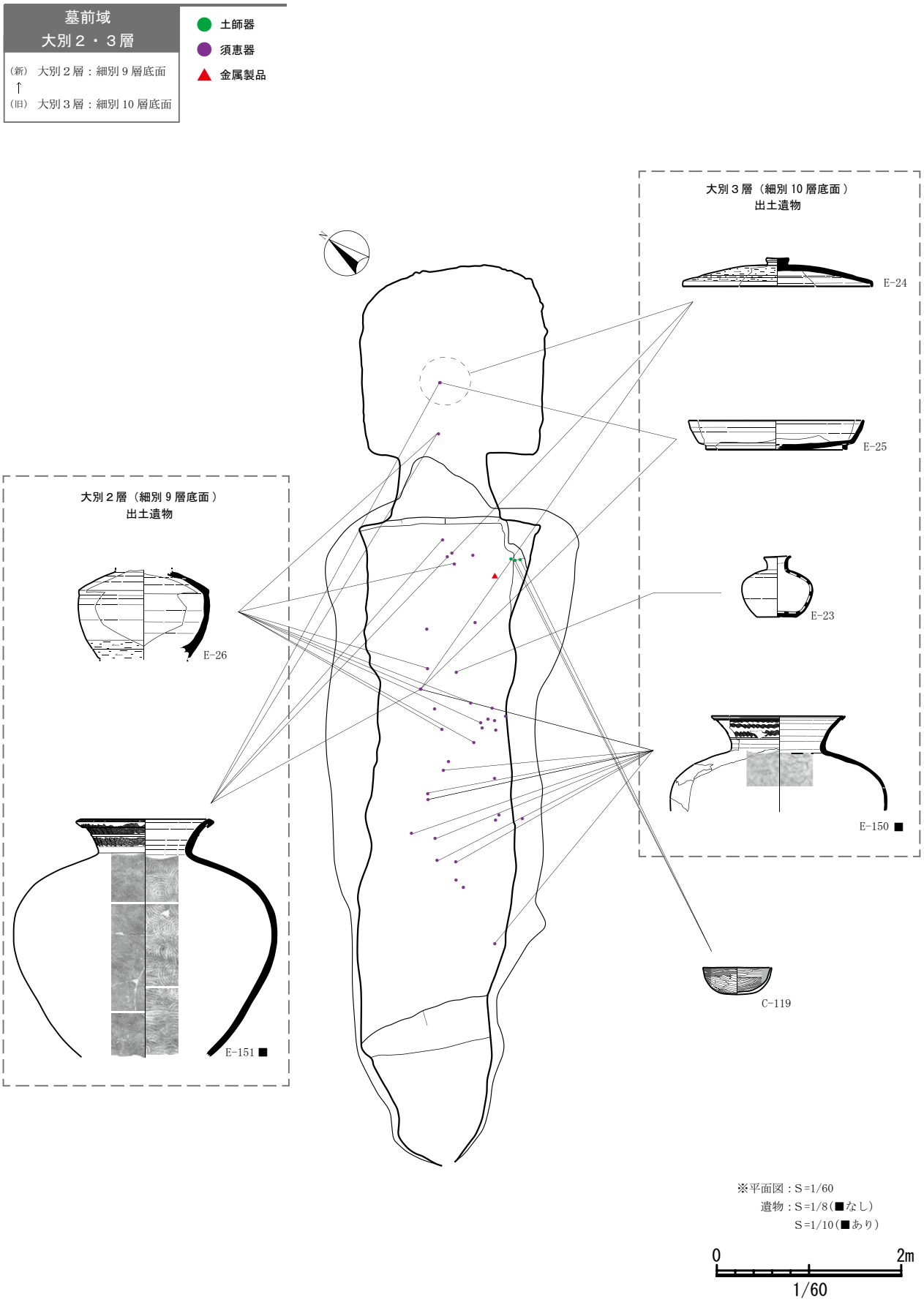


A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第132図　ST17 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

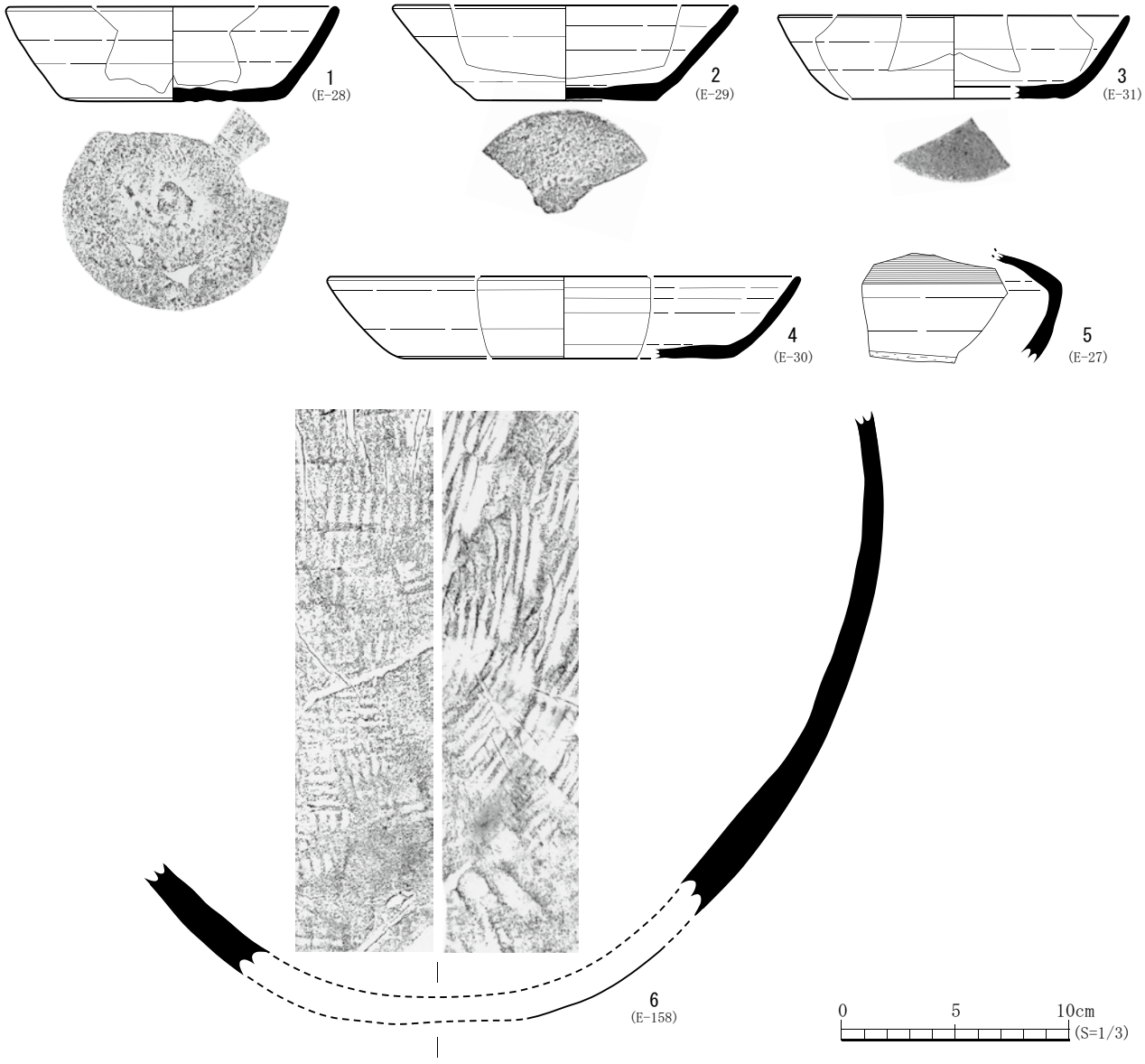


第133図　ST17 横穴墓 遺物出土状況図 (1)　－ 大別１層 －



第134図　ST17 横穴墓 遺物出土状況図（2）　－ 大別２・３層 －

墓前域　大別１層



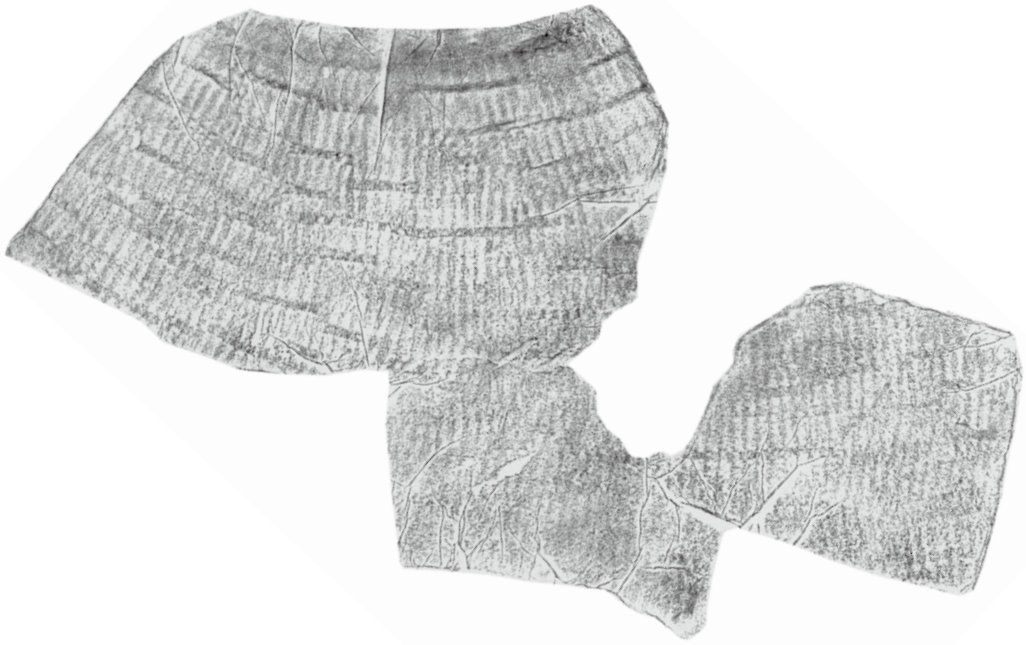
※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室 ＋ 墓前域 (羨門付近)	1層 (2層上面)	須恵器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り→再調整技法不明 内面：ロクロナデ 【法量】口径(14.4)cm・器高4.2cm・底径(9.8)cm・器厚0.4～0.6cm	E-28	219-10
2	墓前域	1層 (2層上面)	須恵器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り→再調整技法不明、内面：ロクロナデ 【法量】口径(14.8)cm・器高4.2cm・底径(8.0)cm・器厚0.4～0.7cm	E-29	219-11
3	墓前域	1層 (2層上面)	須恵器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り？、内面：ロクロナデ 【法量】口径(15.2)cm・器高3.7cm・底径(9.8)cm・器厚0.3～0.5cm	E-31	220-1
4	墓前域	1層 (2層上面)	須恵器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明、内面：ロクロナデ 【法量】口径(20.6)cm・器高3.6cm・底径(15.0)cm・器厚0.3～0.6cm	E-30	219-12
5	墓前域	1層 (2層上面)	須恵器 短頸壺	【技法】外面：口縁部側カキメ・底部側上半ロクロナデ／下半回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.3～0.7cm	E-27	227-10
6	[ST17]墓前域 ＋ [ST18]墓前域 ＋ [SK47]	◆ST17　1・2層 ◆ST18　2層 ◆SK47　1層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST17(主体)**＋ST18＋SK47 【技法】外面：体部平行タタキ・底部ナデ、内面：体部当て具痕・底部ナデ 【法量】器厚0.7～1.5cm 【特記事項】接合はしないが、E-157(ST17出土：第136図1)と同一個体の可能性有り	E-158	246-2

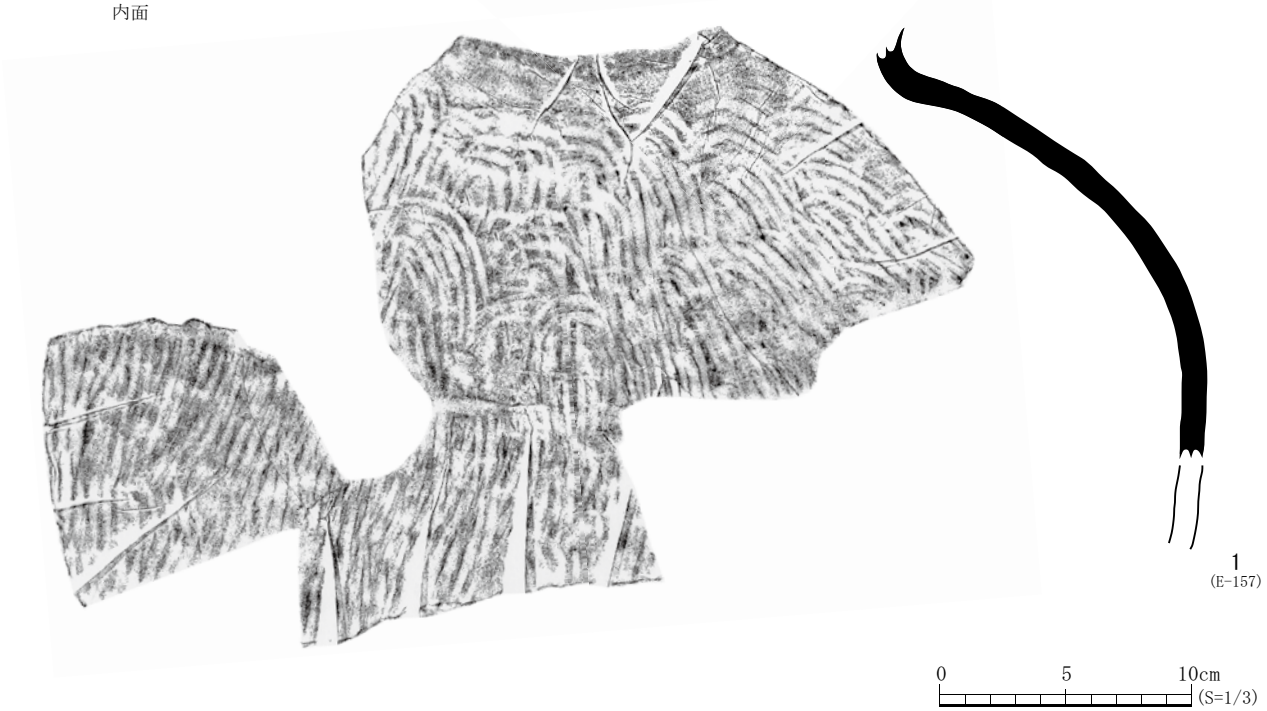
第135図　ST17 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

外面



内面



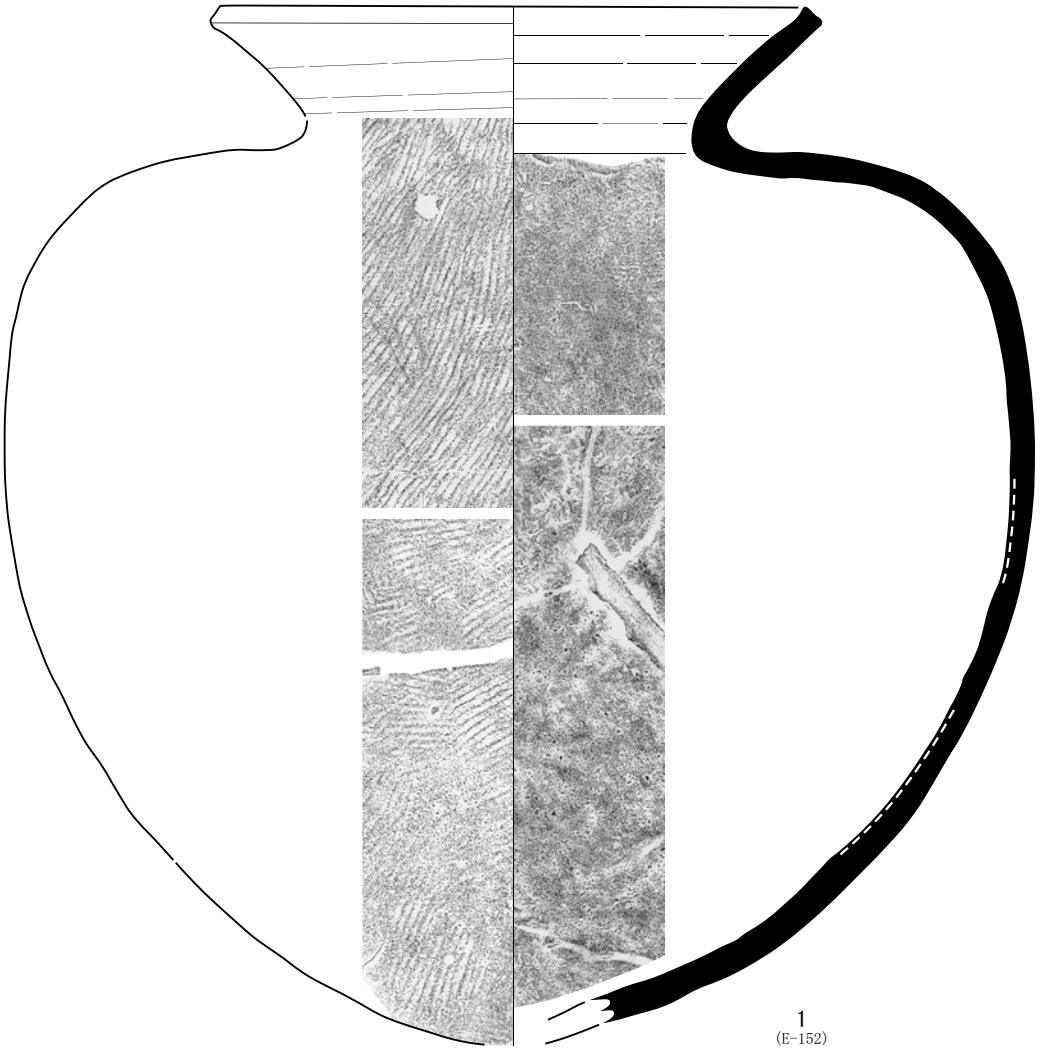
1
(E-157)

0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST17　1・2層 ◆ST18　2層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST17(主体)**＋ST18 【技法】外面：頸部ナデ・体部平行タタキ、内面：頸部ナデ・体部当て具痕 【法量】器厚0.8～1.1㎝ 【特記事項】接合はしないが、E-158(ST17出土：第135図6)と同一個体の可能性有り	E-157	245-4

第136図　ST17 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

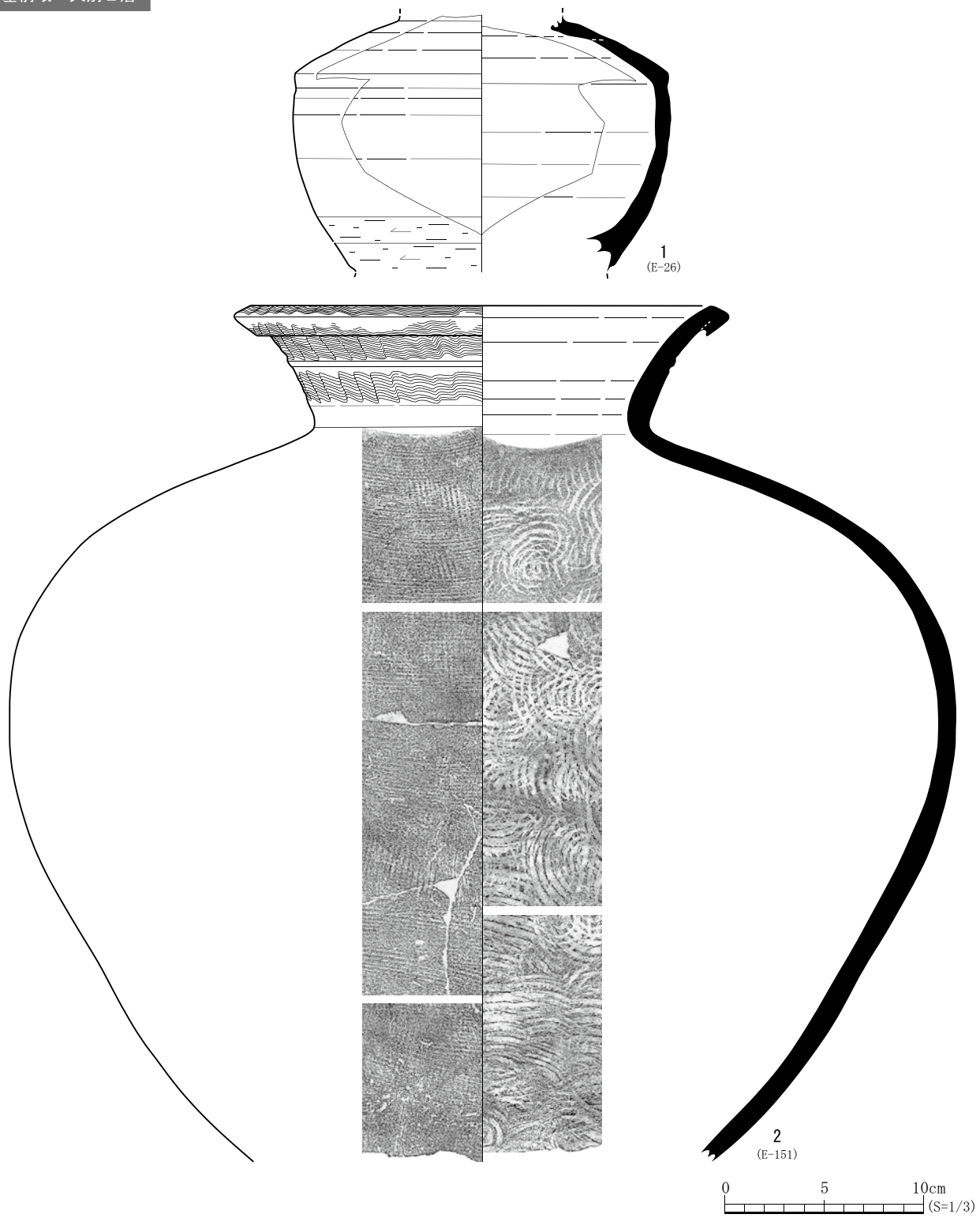


0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	1層 2層	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部～底部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕→ナデ 【法量】口径23.2cm・器高41.3cm・器厚0.8～1.5cm	E-152	246-1

第137図　ST17 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

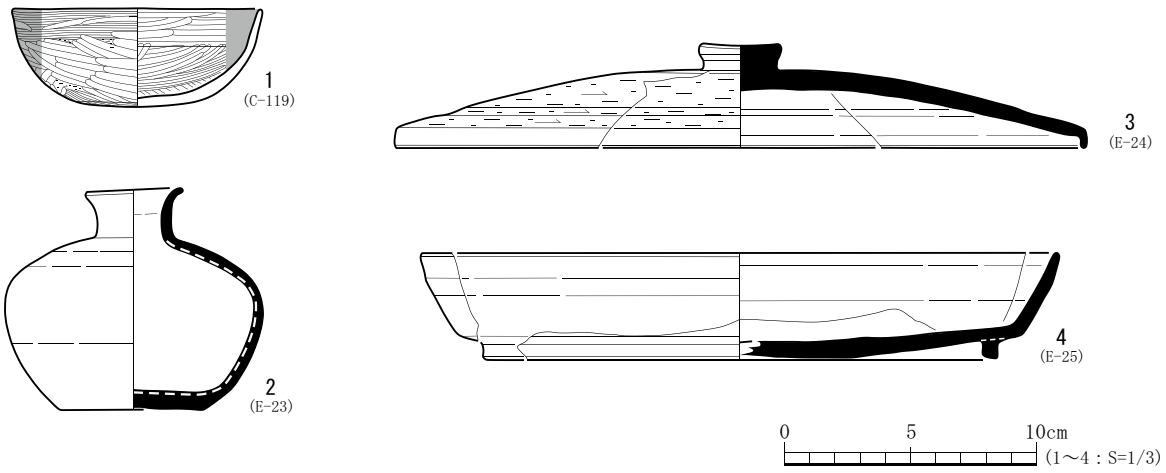
墓前域　大別２層

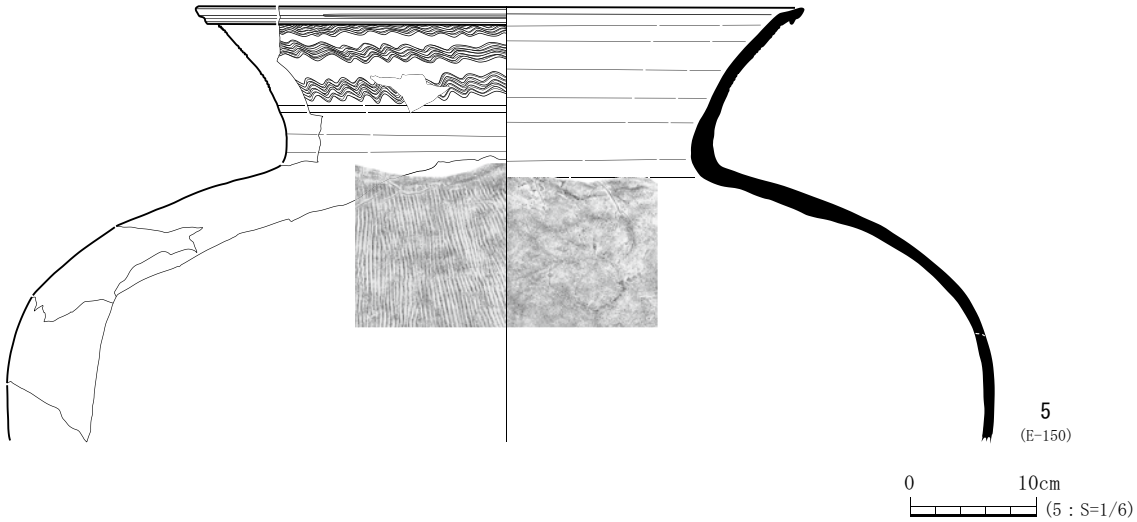


No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	10層上面 (9層)	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り、内面：ロクロナデ 【法量】残存高13.0cm・器厚0.6～1.1cm	E-26	227-11
2	墓前域	◆ST14　1層 ◆ST17　9層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST17(主体)**＋ST14 【技法】 外面：口唇部櫛描波状文・口頸部ロクロナデ→沈線→櫛描波状文・体部平行タタキ→カキメ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径23.0cm・残存高43.1cm・器厚0.7～1.2cm	E-151	245-5 270-1～4

第138図　ST17 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

墓前域　大別３層





※(　) 内 : 推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域 (羨門付近)	10層	土師器 埦	【技法】外面 : 口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面 : ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(9.8)cm・器高3.9cm・器厚0.2～0.5cm	C-119	197-1
2	墓前域	10層 (上半部)	須恵器 短頸壺	【技法】外面 : ロクロナデ・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整 内面 : 口縁部ロクロナデ・頸部～底部観察できないため調整不明 【法量】口径3.8cm・器高9.0cm・底径5.8cm・器厚0.3～0.5cm	E-23	227-3
3	玄室 ＋ 墓前域	玄室底面直上 (10層) 10層(墓前域)	須恵器 蓋	【技法】外面 : ロクロナデ・天井部回転ヘラ削り・摘み貼付(扁平なボタン状) 内面 : ロクロナデ 【法量】口径(27.4)cm・器高4.2cm・器厚0.3～0.8cm・摘径3.1cm	E-24	219-8
4	玄室 ＋ 墓前域	玄室底面直上 (10層) 10層(墓前域)	須恵器 高台皿	【技法】外面 : ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面 : ロクロナデ 【法量】口径(25.4)cm・器高4.5cm・底径(20.4)cm・器厚0.3～0.8cm	E-25	219-9
5	墓前域	10層	須恵器 甕	【技法】外面 : 口縁部櫛描波状文・体部平行タタキ 内面 : 口縁部ナデ・体部当て具痕 【法量】口径(47.2)cm・残存高34.7cm・器厚0.6～1.2cm 【特記事項】接合はしないが、E-149(ST13出土 : 第115図4)と同一個体の可能性有り	E-150	245-3 269-14 269-15

第139図　ST17 横穴墓 出土遺物 (5)　－ 土器類 －

18 号横穴墓（ST18）（第 140～152 図、第 28 表、第 4 分冊 写真図版 63～67）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 23～26m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST17、南東側には ST19・22、SX3 が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全ての天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室・羨門・墓前域上半の範囲がシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲が砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 141 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 14.60m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.66m、玄室の中央幅 2.85m、奥壁幅 2.96m、前壁幅 2.45m、左側壁幅 2.54m、右側壁幅 2.58m、玄室底面から天井の高さ 1.86m を測る。床面積は約 7.5 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥壁幅に対し、前壁幅がやや短い。

天　　井：家形（寄棟平入構造）。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形は逆 U 字形を呈する。幅 1.10m、高 1.05m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.06m 前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁ともに縦方向である。天井部には、境界部に工具による幅 0.05m 程度の水平方向の刻みが入れられており、隅棟・大棟線が表現されている。

付属施設：溝跡 1 と小穴跡 1 を確認した。**溝跡 1** は、奥壁壁際から玄室の中心を通り羨道に至る。玄室中央付近で二又に分かれる。その規模は幅 0.04～0.10m・深さ 0.02m である。位置的にみて排水溝と考えられる。**小穴跡 1** は、奥壁と右側壁のコーナー付近に位置する。直径 0.5m・深さ 0.06m の円形に近い不整形を呈する。遺物等は出土していない。

線刻壁画：天井の奥壁側で 1 か所、右側壁側で 2 か所、前壁側で 1 か所確認した。線刻は、線幅 1～2mm ほどの尖頭状工具により岩盤面（基本層Ⅲa 層）に描かれている（第 143 図）。いずれも直線の組み合わせにより描画されているが、その意匠は不明である。線刻の時期については、玄室内での後世の遺物が皆無ではあるものの、堆積土の観察から近代以降に玄室が一時的に開口した時期もあったと推定されるため、「後世の線刻」「横穴墓機能時の線刻」両者の可能性を想定する必要がある。明確な根拠は不足しているが、ST1 でみられた明らかな落書き的な表現ではないこと、家形を表現した屋根部分にのみ線刻が認められること、線刻の線幅等が他の横穴墓と類似することなどから、ST18 の線刻については本横穴墓に伴う線刻の可能性が高いとみておきたい。

そ の 他：前壁・左側壁・奥壁の壁面で、棒状の鉄製品が打ち込まれた痕跡を確認した（写真図版 67）。

その位置は、前壁と左側壁のコーナーで１か所（棒状鉄製品 1)、奥壁と左側壁のコーナーで１か所（棒状鉄製品 2)、奥壁で１か所（棒状鉄製品 3）の計３か所であり、いずれも玄室底面から高さ 1.4～1.5m の地点に位置する（第 142 図)。確認した棒状鉄製品は全て壁面で折れた状態で見つかっており、現地調査終了後の内容確認の結果、全て鉄鏃が転用されたものであることが分かっている。状況から見て、玄室に伴うものと考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の玄門から墓前域の境までの奥行 0.74m、玄門側の幅 1.10m、羨門側の幅 0.88m、玄門側の高さ 1.05m、羨門側の高さ 1.01m を測る。

立 面 形：逆Ｕ字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。玄門から墓前域屈曲部の範囲に直径 0.05～0.10m の河原石が残存していた。その総数は川原石 53 個（総重量 12.4kg）で、堆積層細別８層上面に帯状に敷き詰められている（第 141 図)。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：玄室奥壁から延びる溝跡１を確認した。溝跡１は羨門付近で途切れる。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面付近に幅 0.2m 前後の礫 10 個が残存しており、底面から高さ 0.2～0.4m まで積み上げられた状態で確認した(写真図版 63-3／石材観察・軽量等は未実施)。これらは位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 11.20m、上幅 1.0～3.4m、下幅 0.87～1.85m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.2m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。羨門から 2.2m 下方の地点で外方向に屈曲し、底面幅が広がる。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近の傾斜が若干緩い。羨門付近と末端の比高差は 1.1m 程度である。羨門から屈曲部の間の堆積層細別８層上面には河原石が残存していた（詳細は羨道の項参照)。

【堆積層】　ST18 横穴墓を覆う堆積層は細別 19 層・大別７層に分けた（第 140 図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別１層〕

大別１層（細別１層）は ST18 玄室～墓前域に堆積する人為堆積層である。平面・断面形が溝状となる埋戻土であり、墓前域中央付近から玄室にかけて認められる。近代の陶器破片が含まれることから、大別１層は、近代以降に人為的な掘削・埋戻しが行われた痕跡と考えられる。

〔大別２・３層〕

大別２層（細別２～４層）は ST18 の墓前域に堆積する自然堆積層、大別３層（細別５・６層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別３層は大別４層上面に敷き詰められた整地層と考えられ、この整地層上面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、大別３層上面の墓前域羨門付近から羨道の範囲に、直径 0.05～0.10m の円礫が敷き詰められた状態で残存していた（第 141 図)。これらは大別３層上面で実施された祭祀に伴う敷石とみられる。

〔大別４・５層〕

大別４層（細別 7～9 層）は ST18 の墓前域に堆積する自然堆積層、大別５層（細別 10 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別５層は大別６層上面に敷き詰められた整地層と考えられ、この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別６・７層〕

大別６層（細別 11～17 層）は ST18 の墓前域に堆積する自然堆積層、大別７層（細別 18・19 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別７層は ST18 造墓直後に掘方底面に敷き詰められた整地層と推定され、この上面とそれ以外の掘方底面で遺物が出土していることから、この面で祭祀行為が行われたものと考えられる。

【出土遺物】土師器 121 点（27 個体、破片 94 点）、須恵器 105 点（6 個体、破片 99 点※うち 1 個体・破片 14 点は遺構間接合遺物）、金属製品 27 点（その他不明小破片多数）、弥生土器 2 点が出土した（第 28 表 1～3）。人骨等は残存していない。弥生土器は周辺から流入したものと考えられる。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、玄室内では土器類が 1 点出土したのみである。土師器小型坏 2 個体・坏 17 個体・高坏 1 個体・埦 3 個体・鉢 4 個体、須恵器フラスコ形瓶 1 個体・脚付長頸壺 1 個体・長頸壺 2 個体・平瓶 1 個体・甕 1 個体、刀子 1 点・鉄鏃 3 点・帯金具 1 点・棒状鉄製品 3 点の合計 41 点を図示した（第 148～152 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別２層（細別２層底面）出土遺物**、**B：大別４層（細別８層底面）出土遺物**、**C：大別６層（細別 11 層底面）・底面出土遺物**の 3 群に分かれる。加えて、ST18 では、別の横穴墓（ST17・51）で破砕された須恵器破片の一部が ST18 に混入したと考えられる遺物 14 点（第 28 表 2）も出土している。この須恵器破片は遺構間で接合する遺物であり、**D：墓前域大別２層の堆積途中（細別２層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST17 関連遺物は、古い順から C→B→A→D の 4 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別６層（細別 11 層底面）・底面出土遺物〕（第 150～152 図）

大別６層（細別 11～17 層）のうち、墓前域に分布する細別 11 層の底面と玄室の底面で出土した遺物である（前項 C に相当）。土師器坏 4 個体（第 150 図 5～8）・埦 3 個体（第 151 図 4～6）・鉢 3 個体（第 151 図 1～3）、須恵器フラスコ形瓶 1 個体（第 152 図 1）・脚付長頸壺 1 個体（第 151 図 7）、鉄鏃 2 点（第 152 図 2・3）と図示できなかった土師器坏破片、刀子・鉄鏃破片・不明鉄製品多数が出土した。（第 28 表 1・3）。出土位置は土器類が墓前域、鉄鏃が玄室と墓前域である（第 147 図）。土師器はほぼ完形の状態で出土したものや底部穿孔されたもの、破片で出土したものなど様々である。須恵器はフラスコ形瓶が羨門付近、脚付長頸壺が墓前域下半で破片の状態で出土している。

玄室ではこの他に玄室壁面に打ち込まれた棒状鉄製品 3 点が出土した（第 152 図 4～6）。いずれも壁面で折れた状態で残存していた。その折れた破片は玄室底面出土の細片の中に含まれている可能性が高い。打ち込まれた時期については、打ち込まれた位置が壁面のコーナーなど計画的な配置が窺えることから、造墓直後のものと想定しておきたい。

以上の大別６層・底面出土遺物は ST17 の初葬時の墓前祭祀で使用された遺物と考えられる。このうち、土器類については、出土状況からみて祭祀時に破砕されたと推定される。唯一玄室から出土している土師器坏の破片は、その破砕後に玄室に散布された可能性がある。

〔大別４層（細別８層底面）出土遺物〕（第 150 図）

大別 4 層（細別 7～9 層）のうち、墓前域に分布する細別 8 層の底面で出土した遺物である（前項 B に相当）。土師器坏 2 個体（第 150 図 1・2）、須恵器長頸壺 1 個体（第 150 図 4）・平瓶 1 個体（第 150

図3）が出土した（第28表1・2)。出土位置は全て墓前域である。

これらの遺物は、墓前域の同一面上で出土した。土師器坏(C-29)はほぼ完形の状態、土師器坏(C-30)、須恵器長頸壺・平瓶は破片の状態で出土しており（第145図・写真図版64-6・7)、一部の遺物は破砕されたものとみられる。また、図示した須恵器長頸壺1個体（第150図4）については、接合する同一個体の破片がST6でも出土している（第146図)。墓前域において須恵器壺・瓶類の破砕散布行為が実施された可能性が高い。

出土遺物は少量ではあるが、同層の下層で整地層（大別5層）も認められることから、本段階に土器の破砕散布行為を伴う墓前祭祀が実施されたと考えられる。堆積土の状況から、この段階のST18については、玄室への入室が可能な状態だったとみられる。玄室への行き来があった可能性が十分想定されるが、玄室内で同一時期とみられる遺物が出土していないことから、本層での墓前祭祀が追葬に伴うものかは判断が難しい。ここでは「墓前祭祀のみ」「追葬に伴う墓前祭祀」両者の可能性を想定しておきたい。

〔大別2層（細別2層底面）出土遺物〕（第148・149図）

大別2層（細別2～4層）のうち、墓前域に分布する細別2層の底面で出土した遺物である（前項Aに相当)。土師器小型坏2個体（第148図1・2)・坏11個体（第148図3～11・第149図1・2)・高坏1個体(第149図3)・鉢1個体(第149図4)、須恵器長頸壺1個体(第149図5)・甕1個体(第149図6)、刀子1点（第149図7)・帯金具1点（第149図8)・鉄鏃1点（第149図9）と図示できなかった土師器坏破片、須恵器甕破片、不明鉄製品破片が出土した（第28表1・3)。検出面出土として取り上げた鉄鏃破片・不明鉄製品破片も本層に帰属するものとみられる。出土位置は全て墓前域である。なお、前述の羨道～羨門付近で確認した敷石については、この段階のものと考えられる。

これらの遺物は、墓前域の同一面上で出土した。土師器坏などほぼ完形の状態で出土したものもあるが、多くの土器類は破片で散在した状態で出土している（第144図)。土器類の多くは破砕されたものとみられ、同層の下層に整地層（大別3層）が認められることから、本段階に土器の破砕散布行為を伴う墓前祭祀が実施されたと考えられる。堆積土の状況から、この段階のST18については、玄室への入室が可能な状態だったと推定される。玄室内で同一時期とみられる遺物が出土していないが、羨道付近の敷石設置など玄室への行き来はあったと想定されることから、本層での墓前祭祀は追葬に関連する祭祀であった可能性が高いと考えられる。

〔大別2層（細別2層）出土遺物〕

大別2層（細別2～4層）のうち、堆積層上半部にあたる検出面～細別2層の堆積土中から出土した遺物である（前頁Dに相当)。須恵器甕破片14点が出土した（第28表2)。

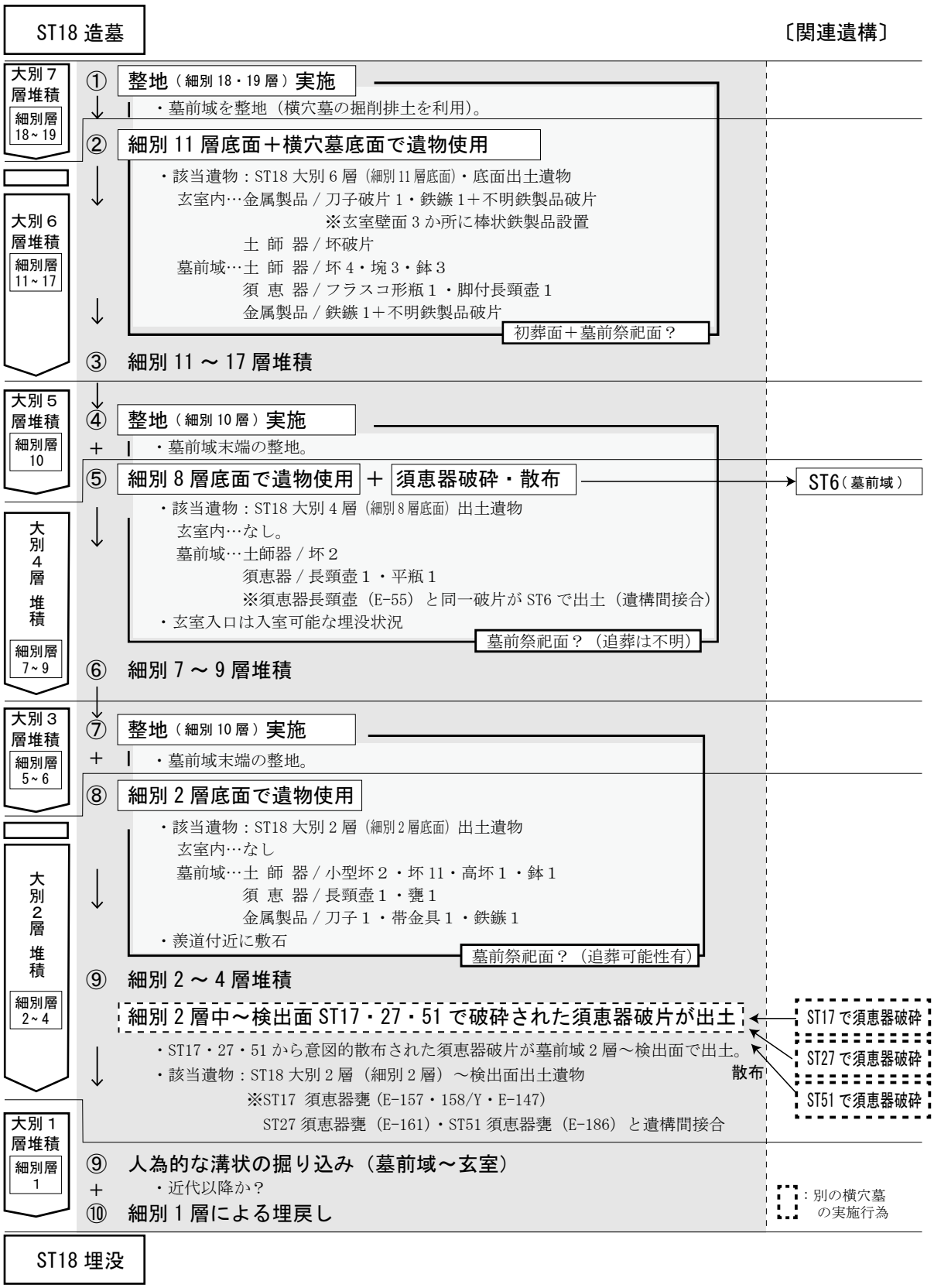
出土した須恵器破片14点は別遺構で破砕された後、ST18墓前域に混入した遺構間接合遺物であり、ST17・27・51由来の3者に分けられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST18では、**ST17由来の須恵器甕（E-157／第136図1)**と接合する破片が2点（体部破片)・**須恵器甕（E-158／第135図6)**と接合する破片が5点(体部破片)・**須恵器甕（Y・E-147／非図化)**と接合する破片が2点(体部破片)、**ST27由来の須恵器甕(E-161／第192図1)**と接合する破片が1点（頸部破片)、**ST51由来の須恵器甕(E-186／第378図1)**と接合する破片が4点(体部破片）出土した。ST18からST17は直線距離で約4m北西、ST27は約25m南、ST51は約25m南東の地点に位置する。ST27・51についてはその位置関係からみて、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。この段階に「ST27・51からST18への須恵器甕の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。ST17については、ST18と隣接する横穴墓であり、「単なる遺物流入」「意図的な散布」の両者の可能性がある。ST17は標高的にST18より高い地点に位置するため、雨水等による遺物流入の想定が十分可能である。しかし、遺構間接合する甕の中には、その破片がST18以外の遺構で出

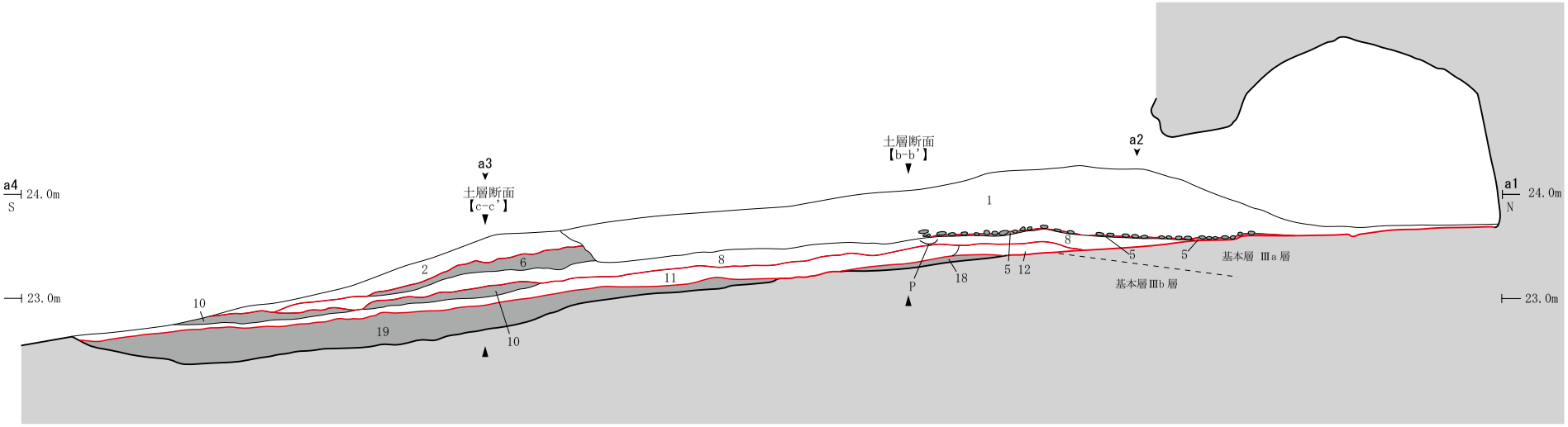
土しているもの（甕 E-158）もあり、ST17 で破砕された甕の散布行為があった可能性が高いと考えられる。よって、ST17 についても「ST18 へ意図的な散布行為」があったと想定しておきたい。

【まとめ】

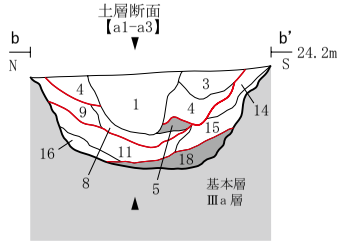
ST18 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST18 造墓・使用・埋没の経過〕

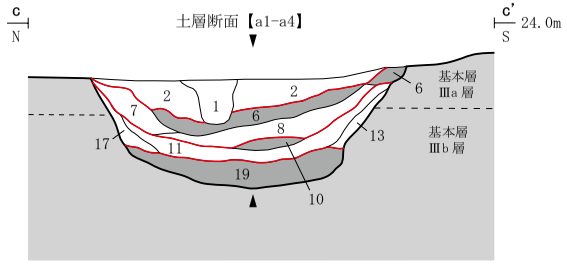




ST18 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3-a4〕



ST18 墓前域 土層断面〔b-b'〕



ST18 墓前域 土層断面〔c-c'〕

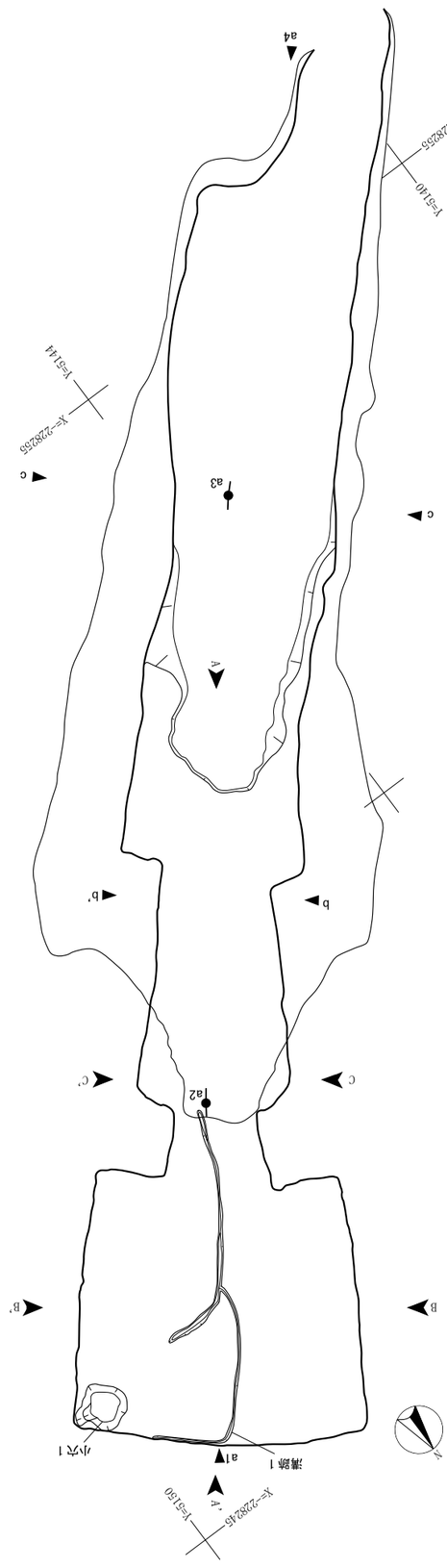
0　2m
1/60

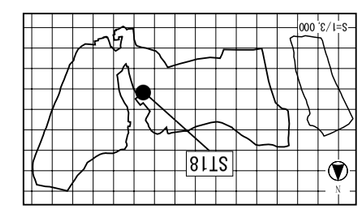
【土層図中の表記】
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫　　P ：土器類
- ▼：土層断面の屈曲点
- ▼▲：各土層断面の交点

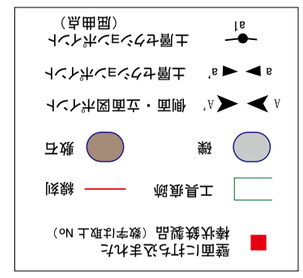
第 140 図　ST18 横穴墓 土層断面図

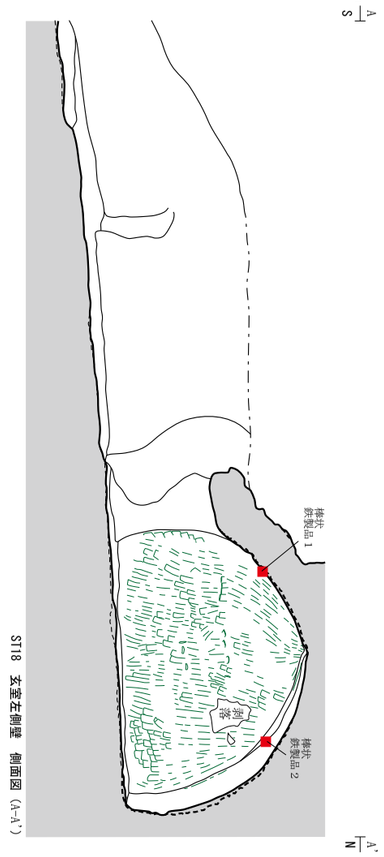
細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	灰白色(10YR8/1)	砂質シルト	地山ブロック多量含む。 近代陶器片含む。	1	人為堆積層
2	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山粒子微量含む。	2	自然堆積層
3	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山粒子微量含む。		
4	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山粒子含む。		
5	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック多量含む。	3	人為堆積層 （整地層）
6	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。		
7	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山粒子含む。	4	自然堆積層
8	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロック少量含む。		
9	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒子含む。		
10	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。	5	人為堆積層 （整地層）
11	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック微量含む。	6	自然堆積層
12	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック微量含む。		
13	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック微量含む。		
14	浅黄色(2.5Y7/4)	シルト	地山ブロック含む。		
15	灰黄色(2.5Y7/2)	シルト	地山ブロック含む。		
16	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック微量含む。		
17	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト			
18	にぶい黄橙色(10YR7/2)	シルト	地山ブロック多量含む。	7	人為堆積層 （整地層）
19	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シルト	地山ブロック多量含む。		

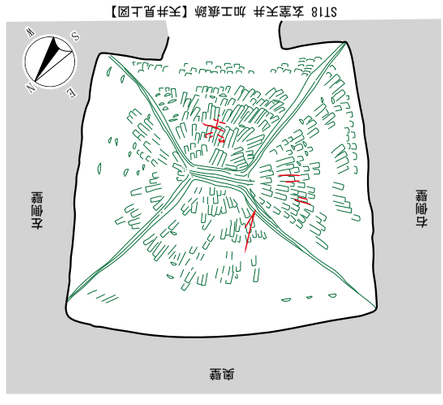
第141図　ST18 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

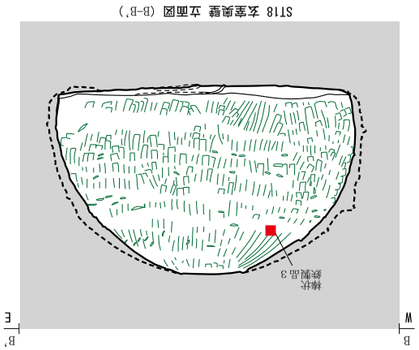


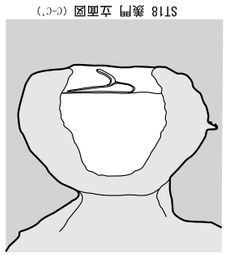


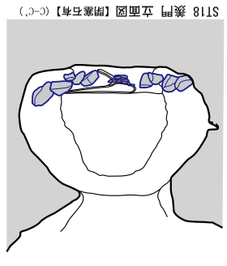


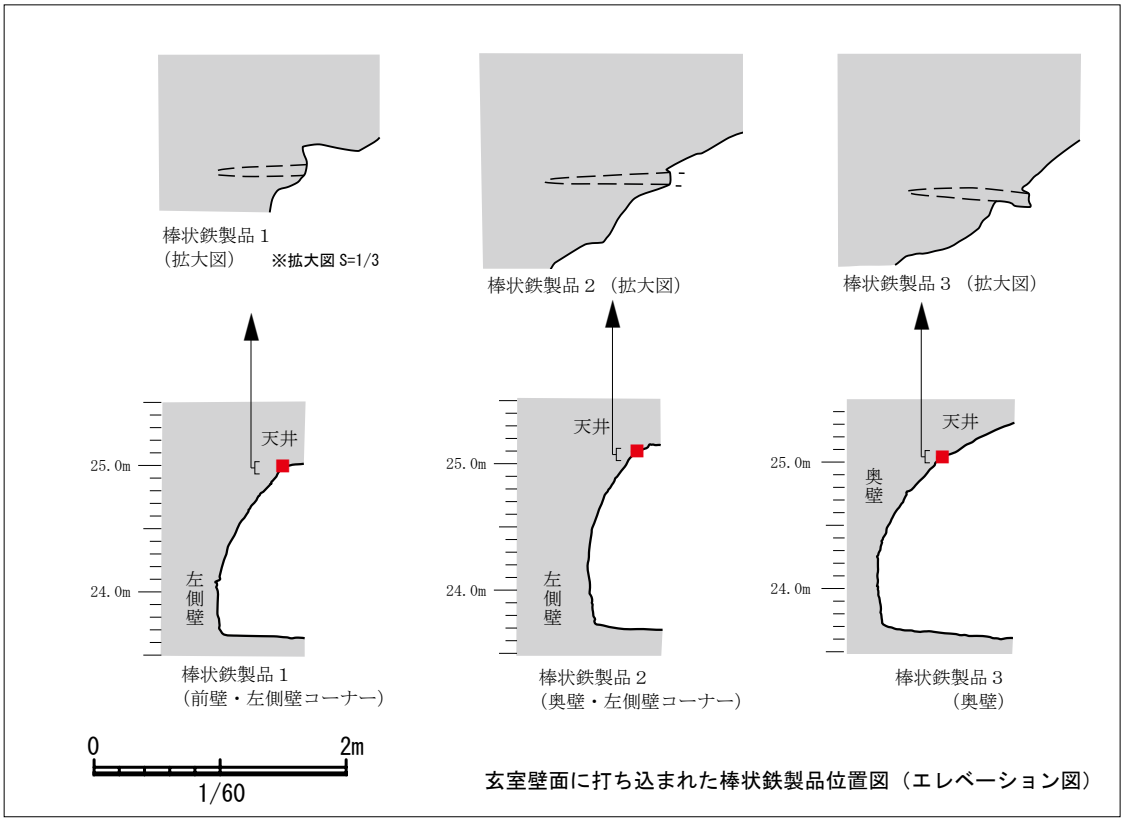


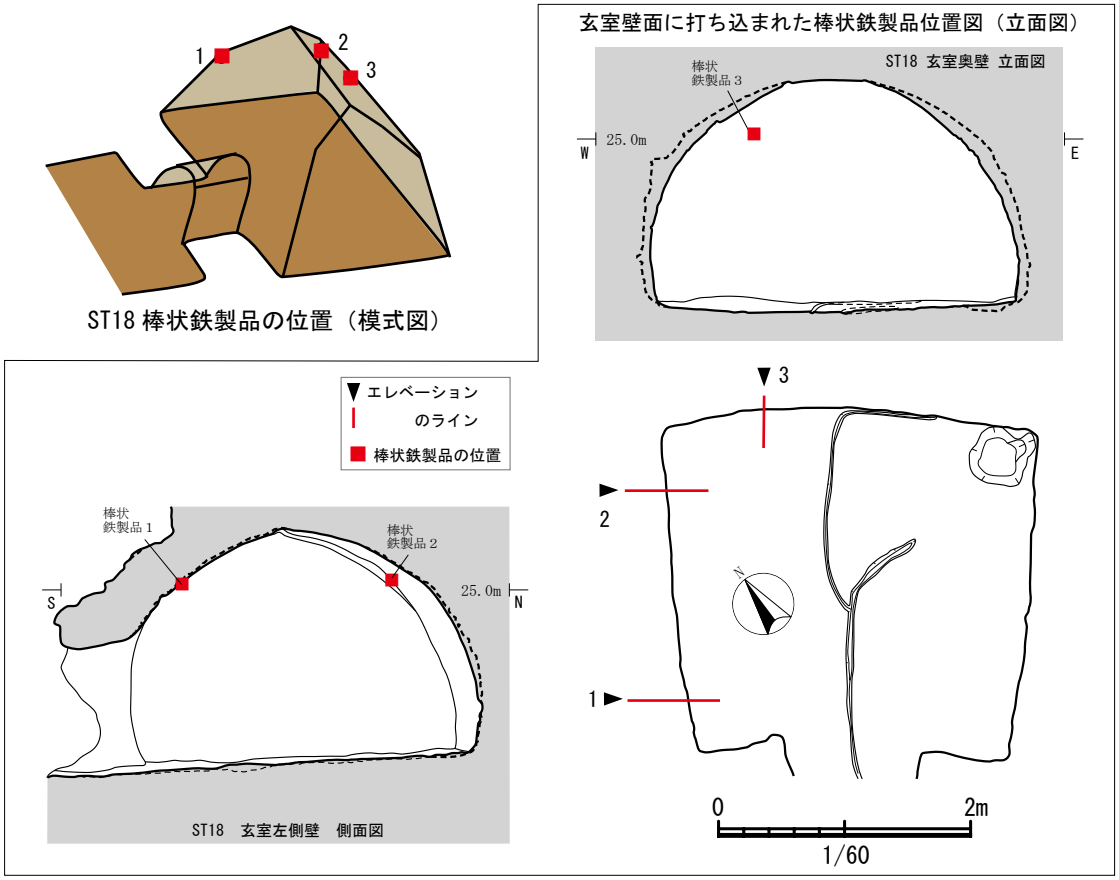




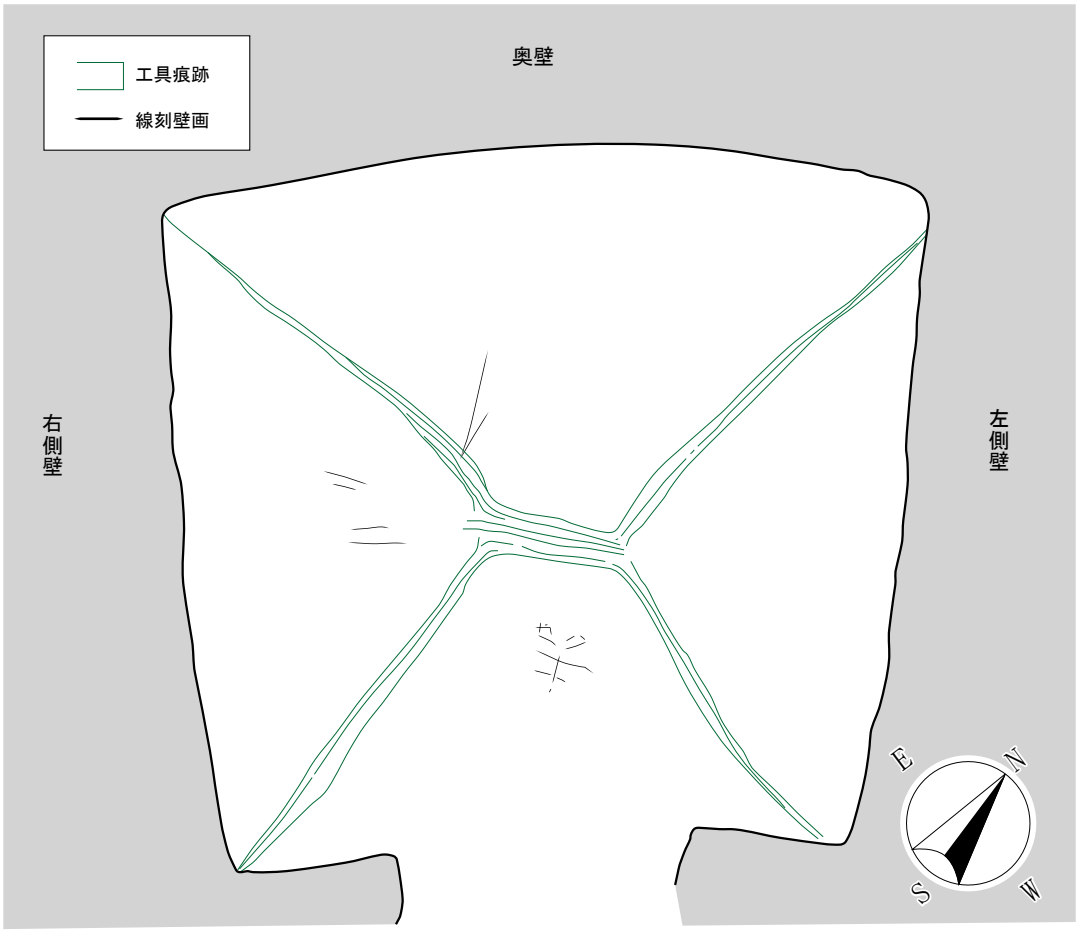




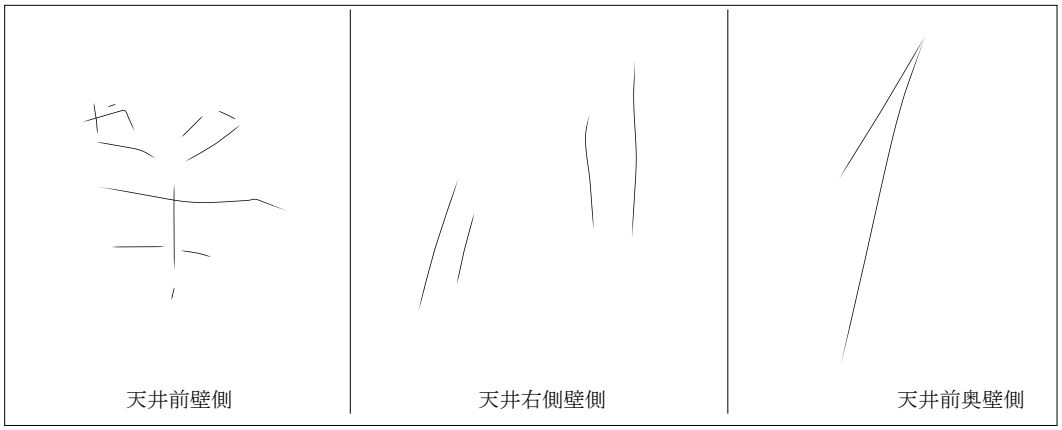




第142図　ST18 横穴墓 玄室壁面の棒状鉄製品状況図



【ST18 玄室天井 線刻壁画】(天井見上げ図 :S=1/30)



(玄室に立ち正面から見た図 :S=1/10)

第143図　ST18 横穴墓玄室　線刻壁画

第28表　ST18横穴墓　出土遺物一覧

1．土器類－遺構単独出土－

種別				土師器					須恵器						弥生土器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏 小型坏	高坏	埦	鉢	小計	長頸壺	脚付長頸壺	フラスコ形瓶	平瓶	甕	小計	甕	小計
玄室	－	底面直上	個													
			破	1 (5)				1 (5)								
墓前域	1	1層	個													
			破	1 (10)				1 (10)					10 (15)	10 (15)		
	2	2層	個	13 (1,070)	1 (65)		1 (170)	15 (1,305)	1 (320)				1 (1,060)	2 (1,380)		
			破	62 (700)				62 (700)					75 (595)	75 (595)	2 (5)	2 (5)
	4	8層	個	2 (405)				2 (405)				1 (15)		1 (15)		
			破	1 (5)				1 (5)								
	6	11層	個	4 (515)		3 (260)	3 (380)	10 (1,155)		1 (720)	1 (870)			2 (1,590)		
			破	29 (140)				29 (140)								
総合計		個体数(重量)		19 (1,990)	1 (65)	3 (260)	4 (550)	27 (2,865)	1 (320)	1 (720)	1 (870)	1 (15)	1 (1,060)	5 (2,985)		
		破片数(重量)		94 (860)				94 (860)					85 (610)	85 (610)	2 (5)	2 (5)
		総重量		(2,850)	(65)	(260)	(550)	121 (3,725)	(320)	(720)	(870)	(15)	(1,670)	90 (3,595)	(5)	2 (5)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	長頸壺	1 (1,140)	◆ST6 25層(墓前域) ◆ST18 8層(墓前域)	ST18	◆ST6:1点 ★ST18:18点	E 55	第150図4
須恵器	甕	1 (960)	◆ST17 1･2層(墓前域) ◆ST18 2層(墓前域) ※E-158甕と類似	ST17	★ST17:3点 ◆ST18:2点	E 157	第136図1
須恵器	甕	1 (2,345)	◆ST17 1･2層(墓前域) ◆ST18 2層(墓前域) ◆A区 SK47 1層 ※E-157甕と類似	ST17	★ST17:6点 ◆ST18:5点 ◆A区 SK47:3点	E 158	第135図6
須恵器	甕	1 (160)	◆ST17 2層上面(墓前域) ◆ST18 2層(墓前域) ※類似破片ST17で多く出土。 ⇒E-152･157･158のいずれかの破片か	ST17	★ST17:2点 ◆ST18:2点	Y･E 147	－
須恵器	甕	1 (15,345)	◆ST2 6層(墓前域) ◆ST18 検出面 ◆ST25 検出面(墓前域) ◆ST27 4･6･7･9･10層、13層上面(玄室･墓前域)	ST27	◆ST2:1点 ◆ST18:1点 ◆ST25:1点 ★ST27:139点	E 161	第192図1
須恵器	甕	1 (22,550)	◆ST17 7層(墓前域) ◆ST18 2層上半部(墓前域) ◆ST47 4層(墓前域) ◆ST48 7層(墓前域) ◆ST49 検出面(墓前域) ◆ST51 22層(墓前域)	ST51	◆ST17:1点 ◆ST18:4点 ◆ST47:1点 ◆ST48:1点 ◆ST49:1点 ★ST51:119点	E 186	第378図1

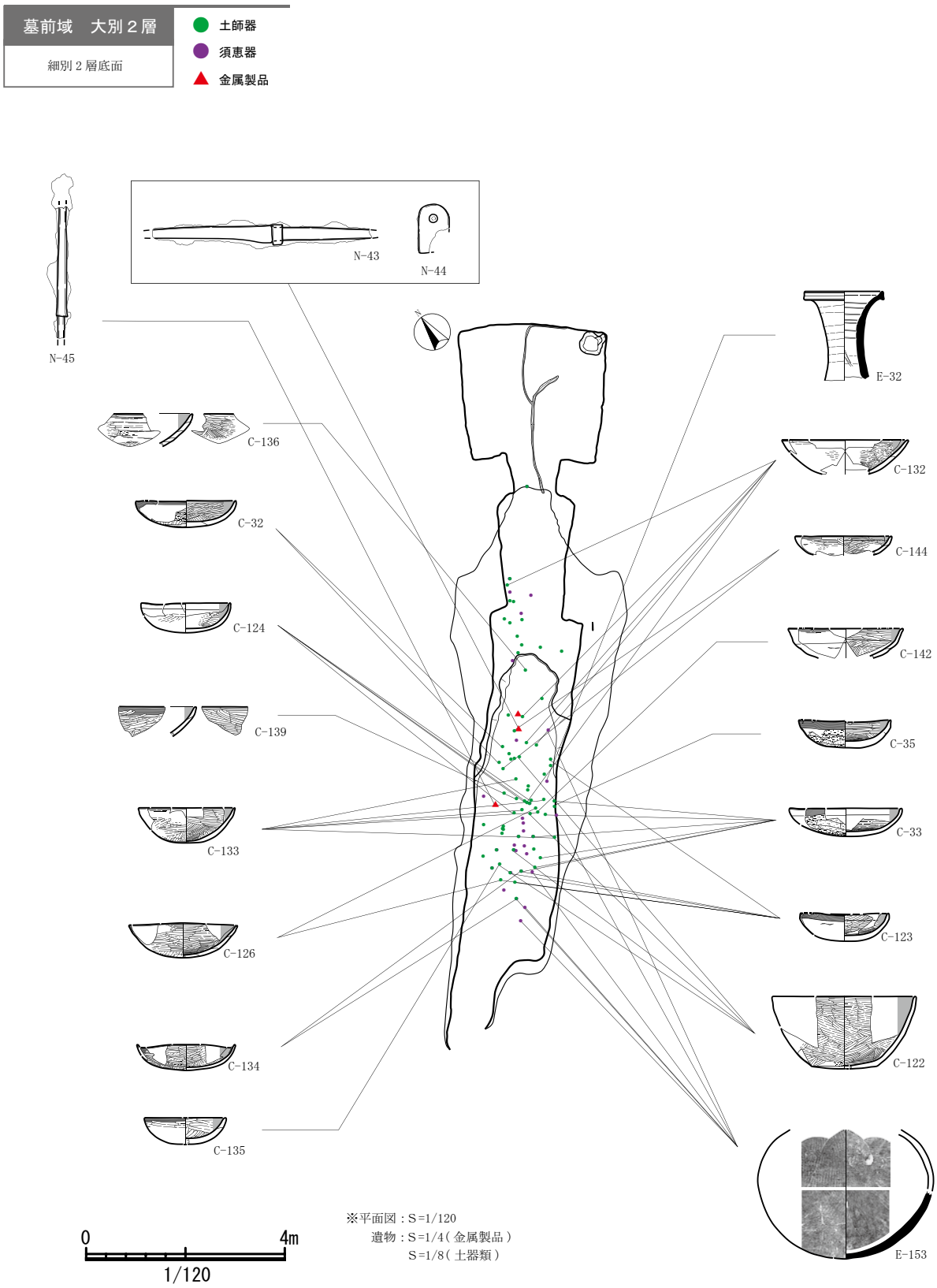
※アンダーラインがあるもの【 例:ST1 検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST18出土須恵器の総数
(表28-1)遺構単独出土 5個体＋破片85点
＋
(表28-2)遺構間接合遺物 1個体＋破片14点 ＝ 105 点

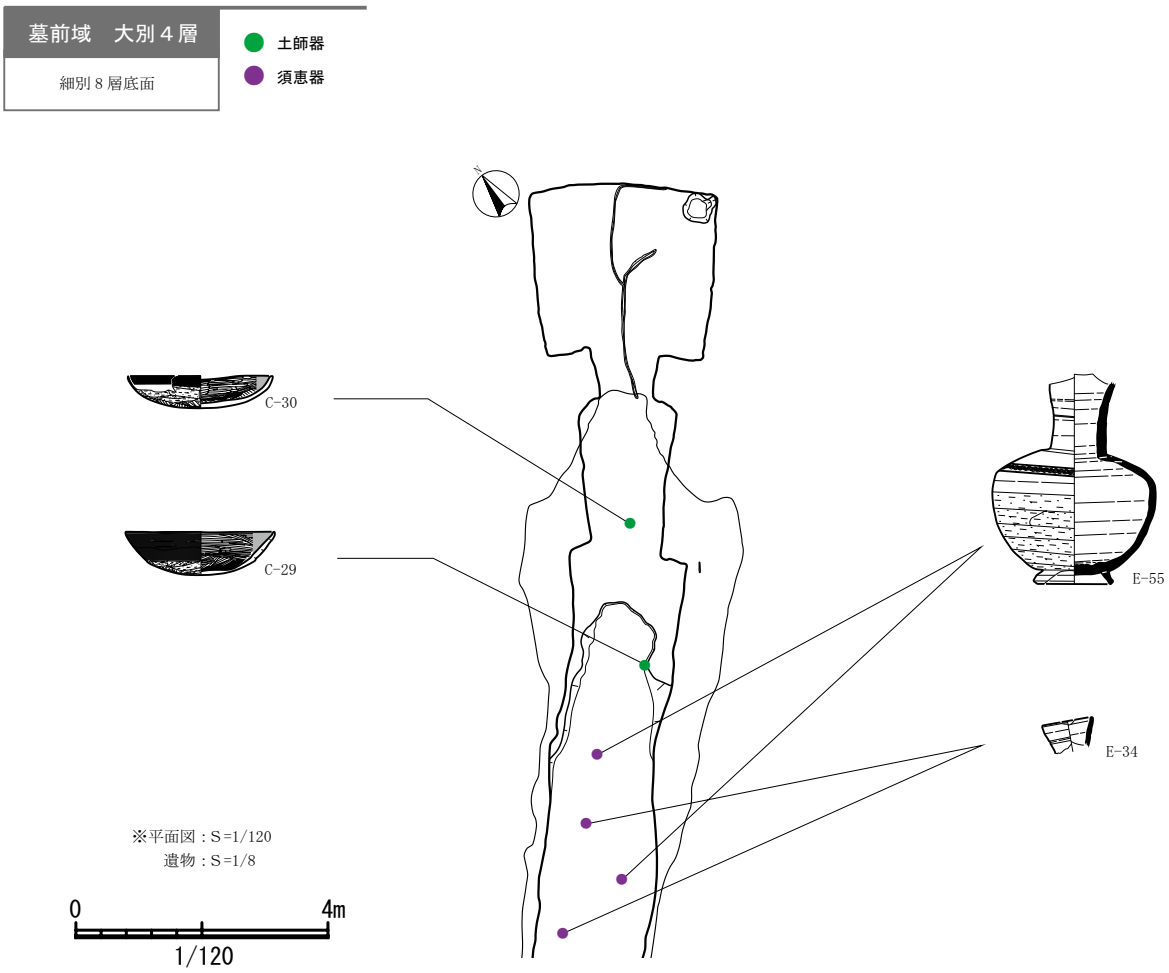
3．金属製品

種別			金属製品						
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	刀子	鉄鏃	帯金具	棒状鉄製品	不明鉄製品	小計
玄室	－	底面	掲		1				1
			非掲	1	1			9＋破片多数	11 ＋破片多数
	－	壁面	掲				3		3
			非掲						
墓前域	－	検出面	掲						
			非掲		2			1	3
	2	2層	掲	1	1	1			3
			非掲					3	3
	6	11層	掲		1				1
			非掲					2	2
器種別総合計		掲載遺物点数		1	3	1	3		8
		非掲載遺物点数		1	3			15＋破片多数	19 ＋破片多数
		総点数		2	6	1	3	15＋破片多数	27 ＋破片多数

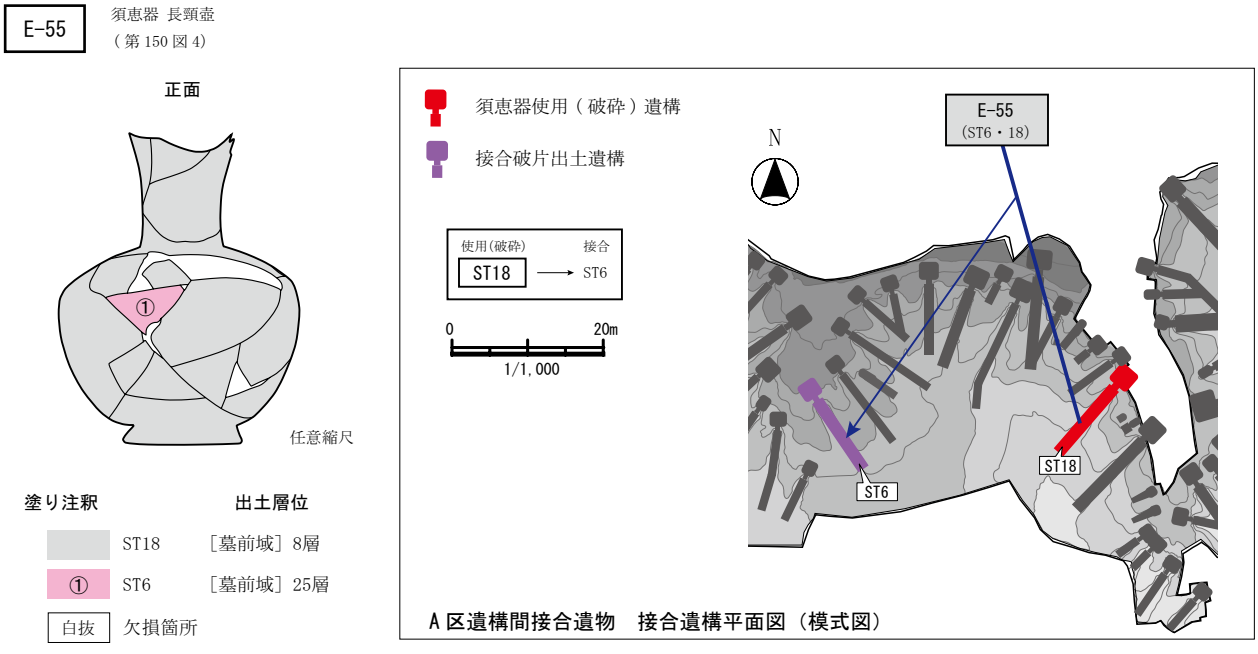
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST18出土の不明小片の重量は72.8g)



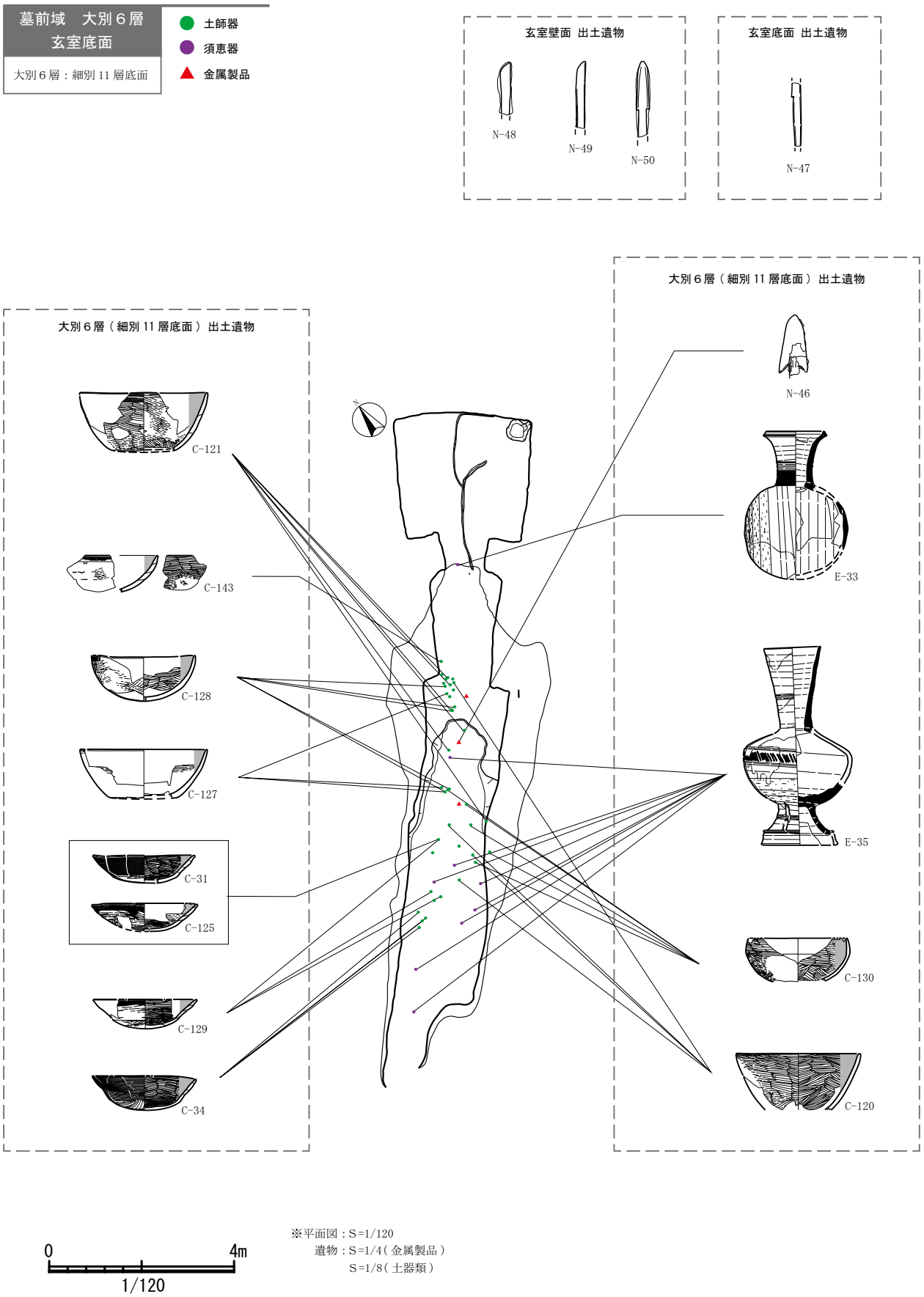
第144図　ST18 横穴墓 遺物出土状況図 (1)　－ 大別２層－



第145図　ST18 横穴墓 遺物出土状況図（2）　－大別４層－

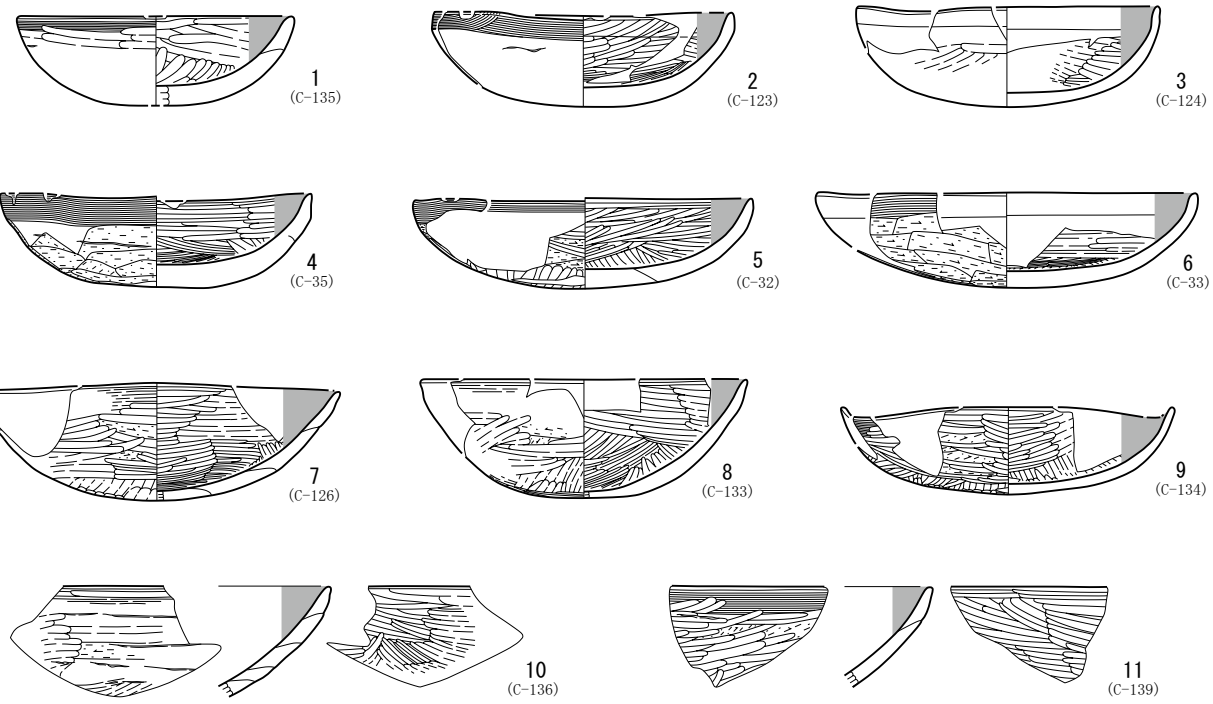


第146図　ST18 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図



第147図　ST18 横穴墓 遺物出土状況図 (3)　－ 大別６層－

墓前域　大別２層

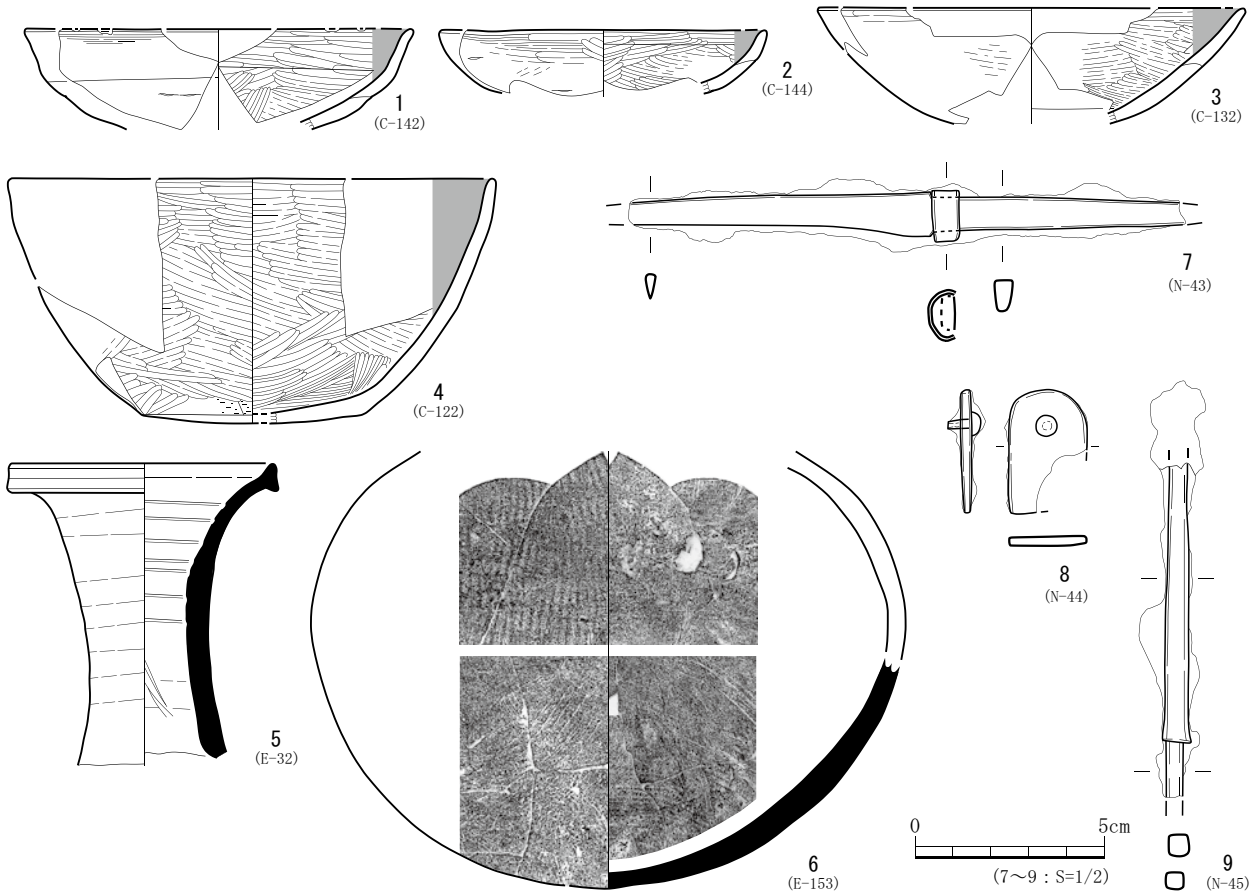


※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	2層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(10.4)cm・器高3.6cm・器厚0.5～0.8cm	C-135	197-8
2	墓前域	2層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径11.8cm・器高3.8cm・器厚0.4～0.8cm	C-123	198-12
3	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(12.0)cm・器高4.0cm・器厚0.3～0.6cm	C-124	198-11
4	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り・ナデ？ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径12.2cm・器高3.8cm・器厚0.3～1.0cm	C-35	198-10
5	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(13.3)cm・器高3.6cm・器厚0.4～0.9cm	C-32	198-7
6	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.0)cm・器高3.8cm・器厚0.4～0.7cm	C-33	198-8 265-5
7	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.4cm・器高4.7cm・器厚0.3～0.6cm	C-126	197-9
8	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.8)cm・器高4.8cm・器厚0.3～0.6cm	C-133	197-10
9	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(13.0)cm・器高3.5cm・器厚0.3～0.4cm	C-134	198-9
10	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.4～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-136	197-12
11	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.5cm	C-139	197-13

第148図　ST18 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層



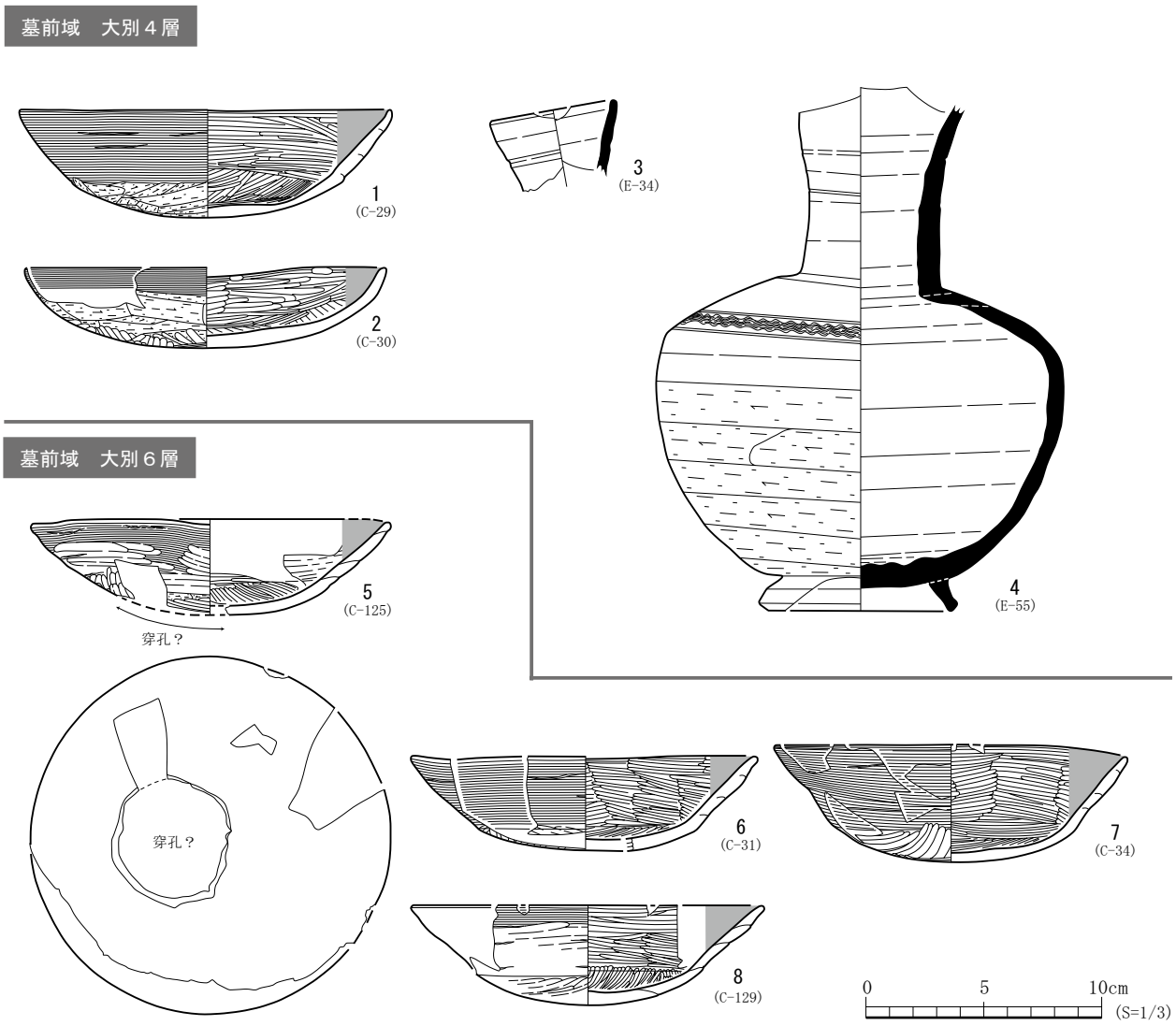
※(　) 内：推定値
※鉄鏃観察表　［全長］=A+B+C ／［鏃長］=A+B

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部磨滅のため調整不明、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.2)cm・残存高4.0cm・器厚0.3～0.5cm	C-142	197-11
2	墓前域	2層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(12.8)cm・残存高2.6cm・器厚0.4cm	C-144	197-14
3	墓前域	2層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【技法】坏部口径(17.0)cm・残存高4.6cm・器厚0.3～0.6cm	C-132	213-9
4	墓前域	2層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(19.0)cm・器高9.7cm・底径8.8cm・器厚0.4～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-122	199-2
5	墓前域	2層	須恵器 長頸壺	【技法】外面：ロクロナデ、内面：ロクロ成形(ヘラ状工具使用？)→絞り目 【法量】口径10.4cm・残存高12.0cm・器厚0.5～0.9cm・頸部高11.8cm	E-32	227-4
6	墓前域	2層	須恵器 甕	【技法】外面：体部上半平行タタキ・体部下半～底部平行タタキ→ナデ 内面：体部上半当て具痕→ナデ・体部下半～底部ナデ 【法量】残存高17.5cm・器厚0.5～1.1cm	E-153	246-3

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
7	墓前域	2層	金属製品	刀子	【法量】［刀身］残存長14.7cm　［刃部］残存長7.9cm・幅1.2cm　［茎部］残存長6.8cm ［鋲］長径1.4cm・残存短径0.7cm・幅0.7cm 【特記事項】均等両関(斜角)・鉄製　【残存部位】刀身・鋲	N-43	312-10
8	墓前域	2層	金属製品	帯金具	【法量】全長3.3cm・幅2.0cm・厚さ0.2cm　［鋲］長さ0.9cm・頭部径0.6cm 【特記事項】鋲1か所・鉄製	N-44	333-2

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
9	墓前域	2層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃？	残存 8.8	0.8	残存 7.4	—	残存 7.4	残存 1.4	［茎関］角関？	N-45	315-17

第149図　ST18 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類・金属製品 －

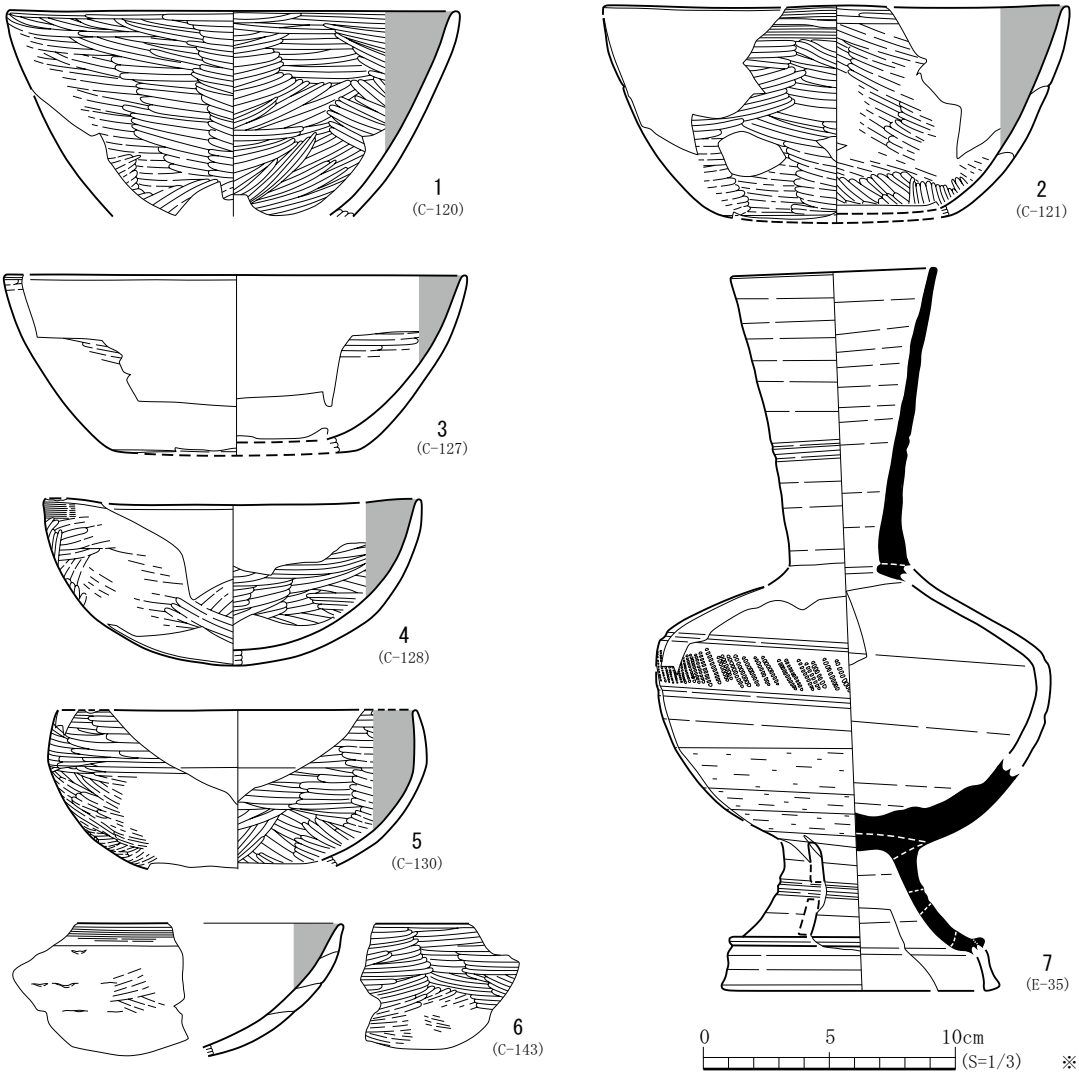


※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.6cm・器高4.6cm・器厚0.2～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-29	198-5
2	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.1cm・器高3.4cm・器厚0.4～0.6cm	C-30	198-6
3	墓前域	8層	須恵器 平瓶	【技法】外面：ロクロナデ・沈線(1条)、内面：ロクロナデ 【法量】口径(5.4)cm・残存高(3.0)cm・器厚0.3～0.5cm	E-34	227-12
4	墓前域	◆ST6　25層 ◆ST18　8層	須恵器 長頸壺	◎遺構間接合　**ST18(主体)**＋ST6 【技法】外面：ロクロナデ・頸部沈線(2条)・肩部波状文／沈線(2条)・体部回転ヘラ削り 底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付、内面：ロクロナデ 【法量】残存高22.3cm・底径7.6cm・器厚0.5～1.1cm	E-55	228-2
5	墓前域	11層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.0cm・器高4.1cm・器厚0.4～0.5cm 【特記事項】底部穿孔？・部分的に赤彩残存？	C-125	198-3 265-4
6	墓前域	11層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.5cm・器高4.0cm・器厚0.3～0.5cm	C-31	198-1
7	墓前域	11層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.8)cm・器高5.0cm・器厚0.3～0.5cm	C-34	198-2
8	墓前域	11層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.8)cm・器高4.3cm・器厚0.3～0.6cm	C-129	198-4

第150図　ST18 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

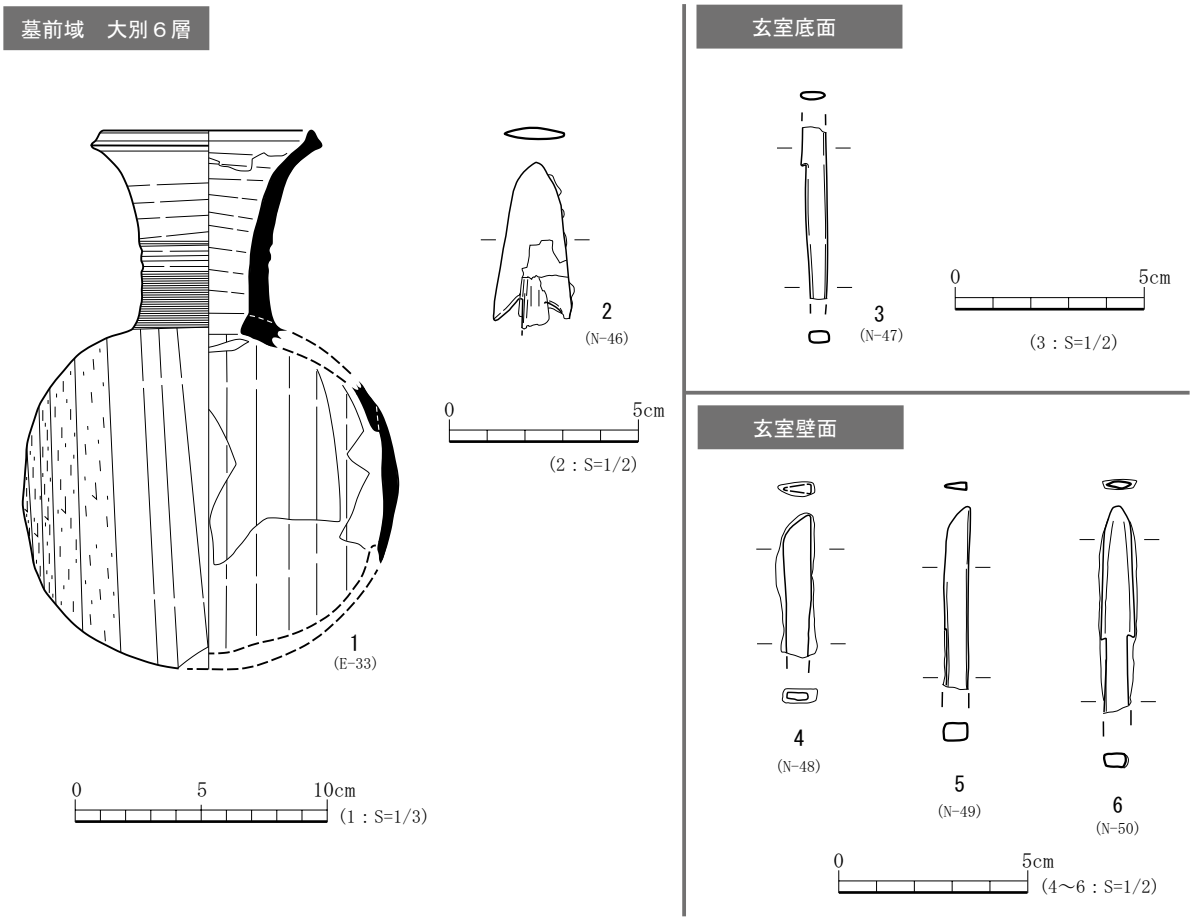
墓前域　大別６層



※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	11層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(17.8)cm・残存高8.2cm・器厚0.5～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-120	199-1
2	墓前域	11層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(18.4)cm・器高(8.5)cm・底径(9.2)cm・器厚0.3～0.6cm	C-121	197-18
3	墓前域	11層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヘラミガキ・体部～底部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(18.2)cm・器高(7.1)cm・底径(9.8)cm・器厚0.4～0.9cm	C-127	197-19
4	墓前域	11層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.8)cm・器高6.6cm・器厚0.3～0.8cm	C-128	197-16
5	墓前域	11層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.2cm・器高(6.3)cm・器厚0.3～0.5cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-130	197-15
6	墓前域	11層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.3～0.6cm	C-143	197-17
7	墓前域	11層	須恵器 脚付長頸壺	【技法】外面：口頸部ロクロナデ→沈線(2条) 体部ロクロナデ→[体部上位]沈線・櫛歯列点文／[体部下位]回転ヘラ削り 脚部ロクロナデ・2段3方透孔・沈線(2条)・突帯貼付・端部面取り 内面：ロクロナデ 【法量】口径8.1cm・器高28.8cm・底径10.8cm・器厚0.2～1.2cm・体部最大径15.8cm 頸部高11.6cm	E-35	228-3 228-4 228-5

第151図　ST18 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －



※(　) 内：推定値

※鉄鏃観察表
逆刺無しの場合　［全長］=A+B+C　　［鏃長］=A+B
逆刺有りの場合　［全長］=A+B+C－逆刺長　［鏃長］=A+B－逆刺長

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	11層	須恵器 フラスコ形瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ→沈線(2条)→カキメ・体部ロクロナデ・円盤閉塞 内面：口頸部ロクロナデ・体部ロクロナデ／オサエ 【法量】口径8.3cm・器高(21.3)cm・器厚0.3～0.9cm・口縁部最大径9.2cm・体部最大径14.9cm 頸部高7.8cm	E-33	228-1

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
2	墓前域	11層	金属製品	鉄鏃	短茎鏃	残存 4.4	2.1	残存 4.4	4.2	残存 0.8	－	[逆刺長]0.6cm [鏃身形]長三角形	N-46	315-18 348-14
3	玄室	底面	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 片刃B	残存 4.5	0.7	残存 4.5	残存 1.0	残存 3.6	－	[逆刺長]0.1cm	N-47	315-19

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
4	玄室	壁面	金属製品	棒状鉄製品	【法量】残存長3.8cm・最大幅0.7cm 【特記事項】先端鏃状・片刃・関なし・ややフクラ有り・鉄鏃を転用 玄室奥壁に打込まれていたもの(第142図棒状鉄製品3に相当)	N-48	337-9 348-15
5	玄室	壁面	金属製品	棒状鉄製品	【法量】残存長4.9cm・最大幅0.6cm 【特記事項】先端鏃状・片刃・角状関？・ややフクラ有り・鉄鏃を転用 玄室奥壁・左側壁コーナーに打込まれていたもの(第142図棒状鉄製品2に相当)	N-49	337-10 348-16
6	玄室	壁面	金属製品	棒状鉄製品	【法量】残存長5.5cm・最大幅0.9cm 【特記事項】先端鏃状・両刃長三角・逆刺有り・鉄鏃を転用 玄室前壁・左側壁コーナーに打込まれていたもの(第142図棒状鉄製品1に相当)	N-50	337-11 348-17

第152図　ST18 横穴墓 出土遺物 (5)　－ 土器類・金属製品 －

19号横穴墓（ST19）（第153～161図、第29表、第4分冊 写真図版68～71）

【検出位置】　A-2区西側の標高22～25mの丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側にはST18・22、SX3、南東側にはST24が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室と羨道の全ての天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室・羨門・墓前域上半の範囲がシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）、それより下部の範囲が砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）である。

【個別部位の特徴】（第153図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は15.91mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行2.66m、玄室の中央幅2.98m、奥壁幅3.04m、前壁幅2.50m、左側壁幅2.50m、右側壁幅2.40m、玄室底面から天井の高さ1.52mを測る。床面積は約7.7㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥壁に対し前壁の長さがやや短い。

天　　井：ドーム形。

底　　面：基本的には平坦であるが、玄門付近とそれ以外の底面に段差がある。その段差は0.05～0.08mである。底面全体の傾斜は、奥壁から玄門に向かって緩やかに低くなっており、奥壁部分と玄門部分の比高差は0.2m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。側壁の一部が崩落している。立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。幅0.92m、高さ1.12mを測る。

工 具 痕：各壁に幅0.05～0.08m前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦・斜め方向、天井部が放射状である。

そ の 他：奥壁の壁面で棒状の鉄製品が打ち込まれた痕跡を1か所確認した。玄室底面から高さ1.01mの地点に位置する（写真図版70-1・2、第155図）。棒状鉄製品は折れずに現存しており、壁面に対しやや斜め上方から打ち込まれた状態で見つかった。この鉄製品については、現地調査終了後のX線写真による内容確認の結果、先端が釘状の形態を呈するものであることが分かっている。状況から見て、玄室に伴うものと考えられる。なお、本資料については、状態が良好であることから壁面のまま保存することした（写真図版337-3）。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.42m、玄室側の幅0.92m、墓前域側の幅0.83m、玄門側の高さ1.12m、墓前域側の高さ1.10mを測る。

立 面 形：逆U字形を呈する。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.72m、幅 0.23～0.26m、深さ 0.28m の溝跡 1 を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。他の横穴墓でみられた閉塞石は 1 点も残存していなかった。閂穴等も検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 12.83m、上幅 1.6～3.2m、下幅 0.98～1.56m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.5m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.6m 程度である。羨門から 4.6m 下方の地点の底面掘方に段差がある。

【堆積層】　ST19 横穴墓を覆う堆積層は細別 8 層・大別 2 層に分けた（第 154 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～4 層）は ST19 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。細別 2 層には羨道壁面の崩落土とみられる地山ブロック（大）が含まれる。本大別層底面（細別 3 層底面）と下層にあたる大別 2 層の層理面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 5～8 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多量含む人為堆積層である。横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層と造墓に伴う掘削排土とみられる。遺物は出土していない。

【出土遺物】土師器 4 点（破片 4 点）、須恵器 9 点（3 個体、破片 6 点）、玉製品 8 点、金属製品 140 点（その他不明小破片多数）が出土した（第 29 表 1～3）。人骨等は残存していない。須恵器 3 個体、玉製品 8 点、金属製品 32 点の合計 43 点を図示した（第 158～161 図）。

ST19 では、整地層である大別 2 層と大別 1 層の層理面（細別 3 層底面・細別 5 層上面）と玄室底面からまとまって遺物が出土した。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、同時期のものと考えられる。以下出土地点ごとに詳細を記載する。

玄室では玉製品と金属製品のみが出土した（第 156・158 図/第 29 表 2・3）。その内訳は切子玉 2 点（第 158 図 1・2）・管玉 4 点（第 158 図 3～6）・ガラス製丸玉 2 点（第 158 図 7・8）、刀子 3 点（第 158 図 9～11）・足金具 1 点（第 158 図 12）と図示できなかった鉄刀・刀子・鉄鏃破片と不明鉄製品の細片である。玄室内ではこの他に、壁面に打ち込まれた棒状鉄製品 1 点が出土している（第 155 図）。これらは初葬に伴う遺物と考えられる。

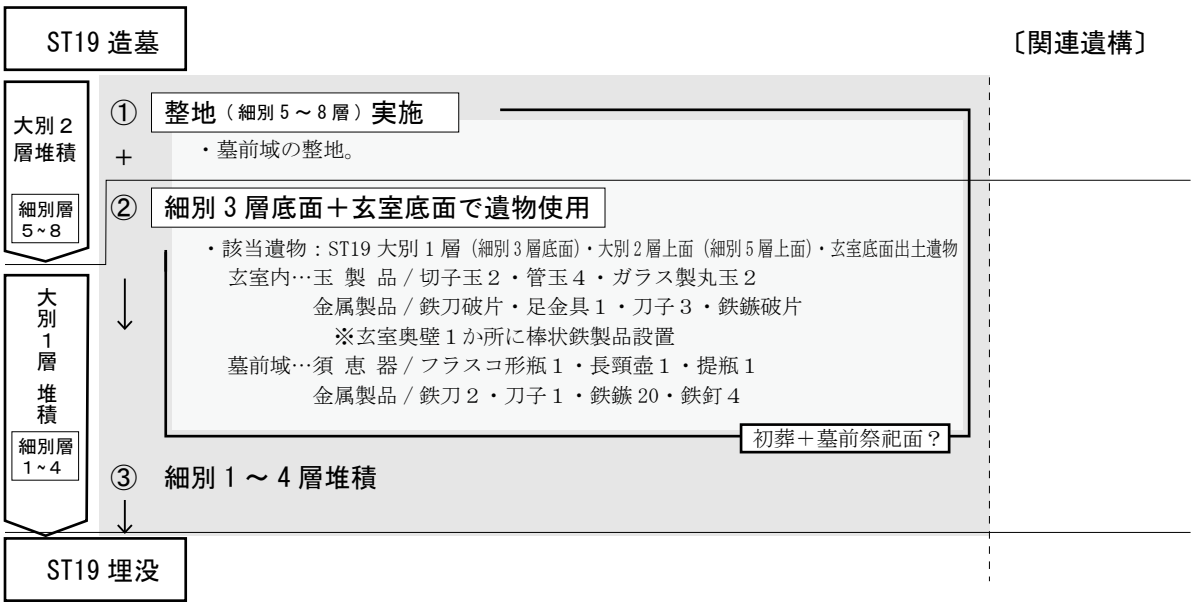
墓前域では土師器・須恵器・金属製品が出土した。その内訳は須恵器フラスコ形瓶 1 個体（第 161 図 1）・長頸壺 1 個体（第 161 図 2）・提瓶 1 個体（第 161 図 3）、鉄刀 2 点（第 159 図 1・2）・刀子 1 点（第 159 図 3）・鉄釘 4 点（第 159 図 4～7）・鉄鏃 20 点（第 160 図 1～15）・不明鉄製品 1 点（第 160 図 14）と図示できなかった土師器坏・甕破片、須恵器瓶類破片、鉄鏃・不明金属製品破片である（第 29 表 1・3）。須恵器提瓶は完形の状態で羨門左脇に据えられた状態、刀子と鉄鏃は羨門右脇付近、須恵器フラスコ形瓶は墓前域末端で横位に据えられた状態で出土した（第 157 図/写真図版 70-5～8）。これらの遺物は墓前祭祀に伴う遺物と推定される。玄室出土遺物と同一の整地層上面で出土していることから、これと同時期の可能性が高い。

ST19 では、この整地層上面での祭祀以後、遺物はほとんど出土しない。以後、祭祀等は行われず、徐々に埋没したと考えられる。

【まとめ】

ST19 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST19 造墓・使用・埋没の経過〕



第29表　ST19横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器			須恵器					
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	甕	小計	長頸壺	フラスコ形瓶	提瓶	瓶類	瓶類 or 高台坏	小計
墓前域	1	1層	個									
			破							1 (80)		1 (80)
		3層	個					1 (740)				1 (740)
			破	2 (10)	2 (90)	4 (100)	1 (80)	2 (80)		1 (5)	1 (10)	5 (175)
		5層上面	個				1 (55)		1 (845)			2 (900)
			破									
総合計		個体数(重量)					1 (55)	1 (740)	1 (845)			3 (1,640)
		破片数(重量)		2 (10)	2 (90)	4 (100)	1 (80)	2 (80)		2 (85)	1 (10)	6 (255)
		総重量		(10)	(90)	4 (100)	(135)	(820)	(845)	(85)	(10)	9 (1,895)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。
ST19では遺構間接合遺物なし

2. 玉製品

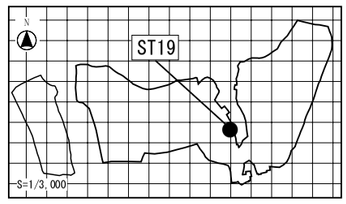
種別				玉製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	石製 管玉	石製 切子玉	小計	ガラス製 丸玉	小計
玄室	–	底面	個	4 (37.4)	2 (16.0)	6 (53.4)	2 (1.393)	2 (1.393)
			破					
総合計		個体数(重量)		4 (37.4)	2 (16.0)	6 (53.4)	2 (1.393)	2 (1.393)
		破片数(重量)						
		総重量		(37.4)	(16.0)	6 (53.4)	(1.393)	2 (1.393)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

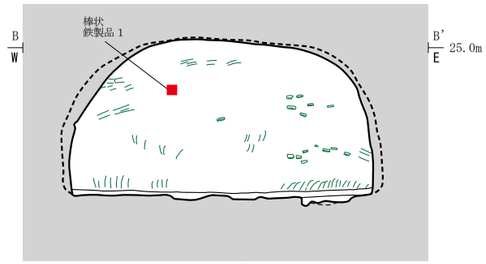
3. 金属製品

種別				金属製品							
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	鉄刀	足金具	刀子	鉄鏃	鉄釘	棒状鉄製品	不明鉄製品	小計
玄室	1	底面	掲		1	3					4
			非掲	1		3	1			1+破片多数	6 +破片多数
		壁面	掲								
			非掲						1		1
墓前域	1	3層	掲	1			20	3		1	25
			非掲				3	3		88	94
		5層上面	掲	1		1		1			3
			非掲				1	1		5	7
器種別総合計		掲載遺物点数		2	1	4	20	4		1	32
		非掲載遺物点数		1		3	5	4	1	94+破片多数	108 +破片多数
		総点数		3	1	7	25	8	1	95+破片多数	140 +破片多数

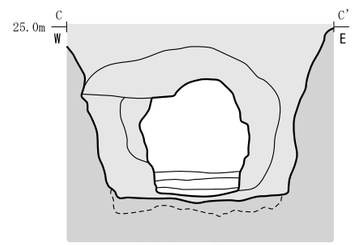
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST19出土の不明小片の重量は41.2g)



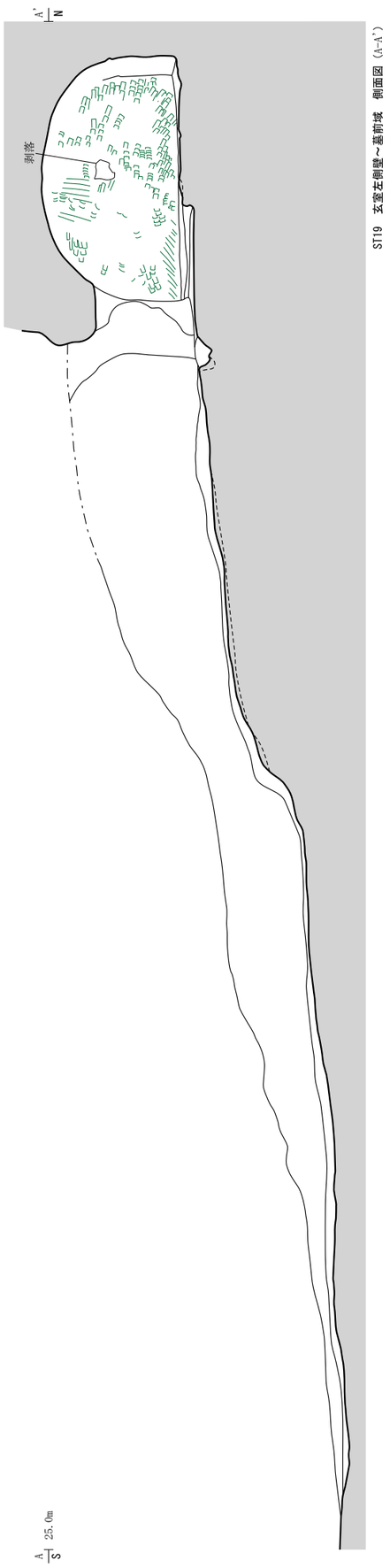
■ 壁面に打ち込まれた棒状鉄製品（数字は取上 No）
工具痕跡
A ▶ ◀ A’ 側面・立面図ポイント
a ▶ ◀ a’ 土層セクションポイント

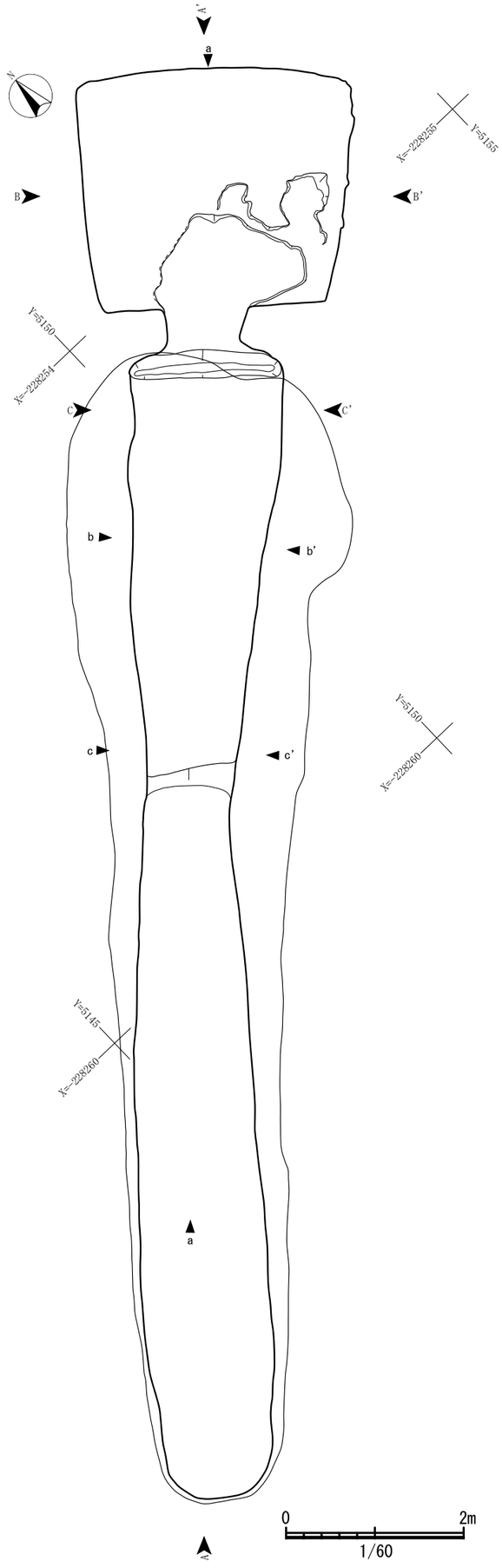


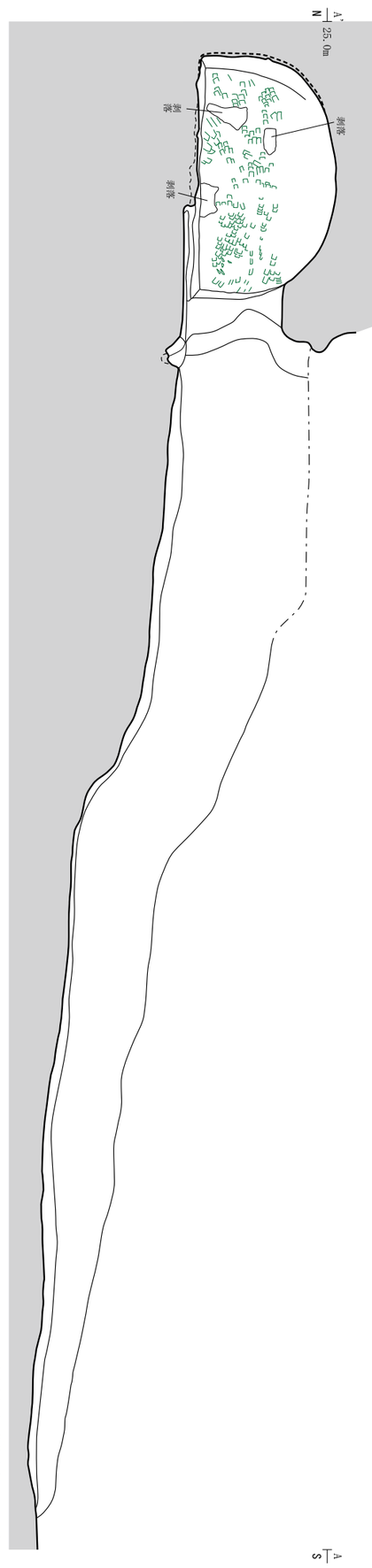
ST19 玄室奥壁 立面図（B-B’）



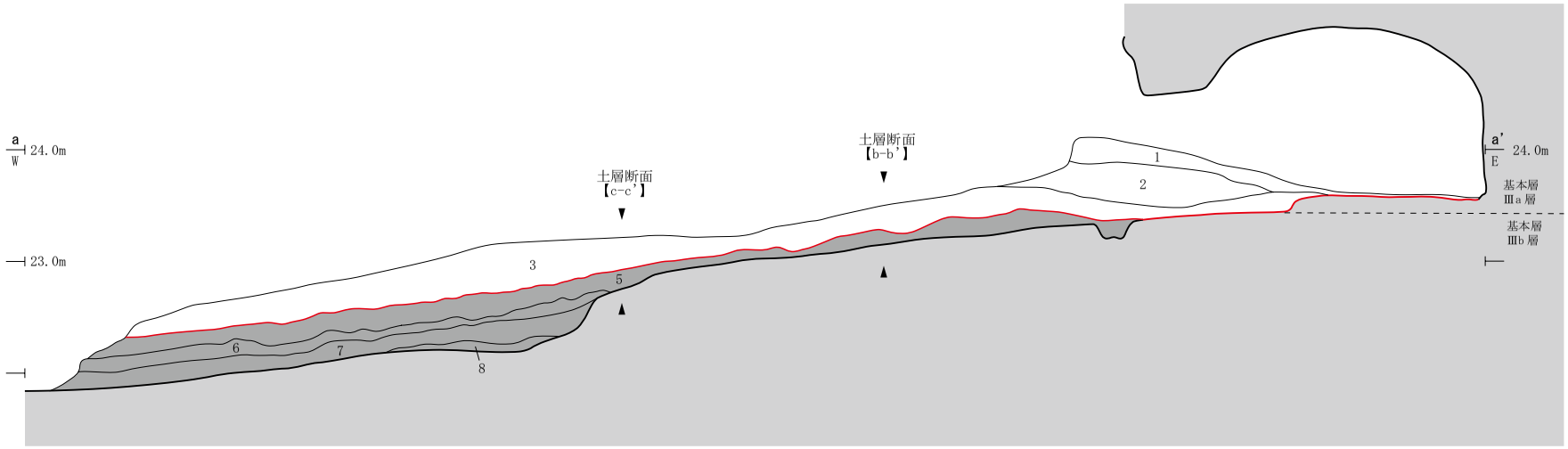
ST19 羨門 立面図（C-C’）



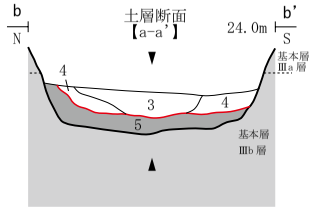




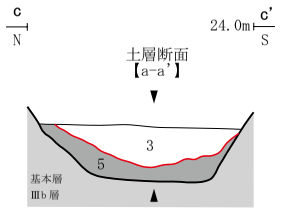
第153図　ST19 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



ST19 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕



ST19 墓前域 土層断面〔b-b'〕



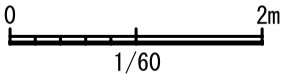
ST19 墓前域 土層断面〔c-c'〕

【土層図中の表記】

土層中の塗り：人為堆積層

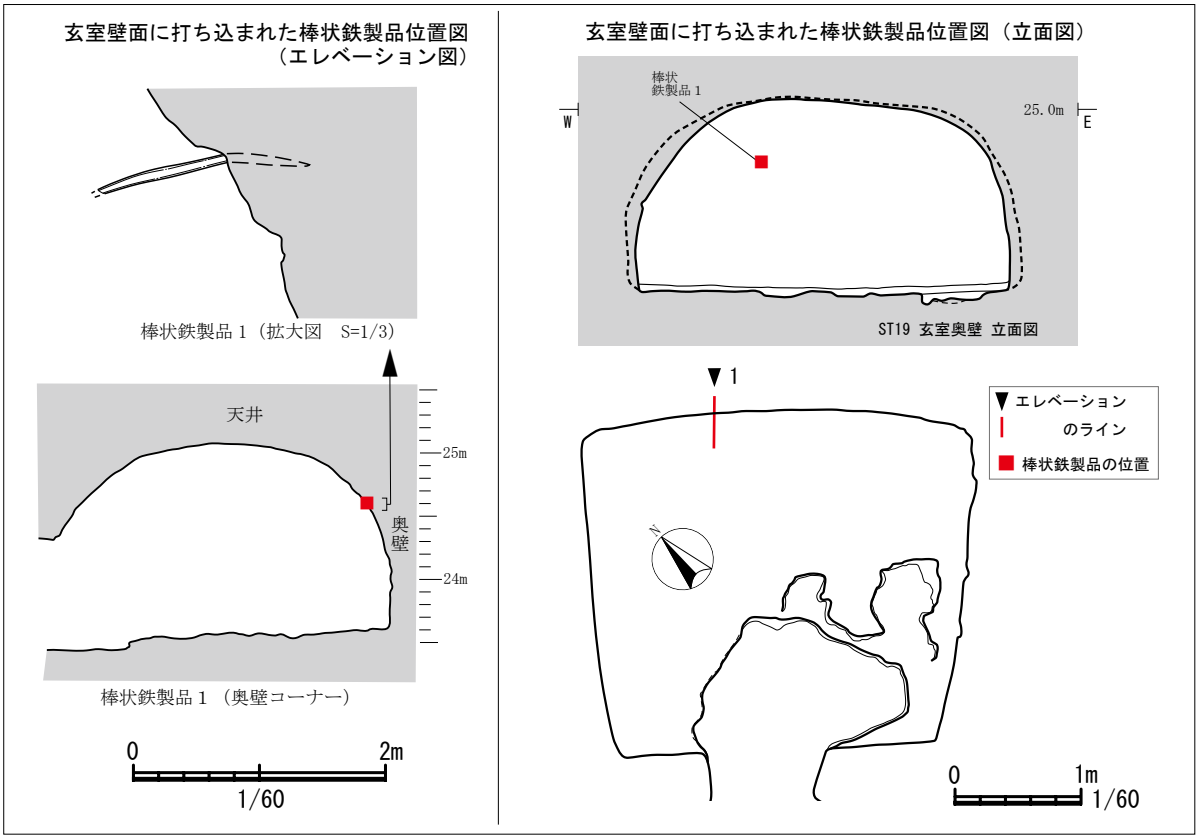
分層線の赤線：祭祀想定面

：各土層断面の交点

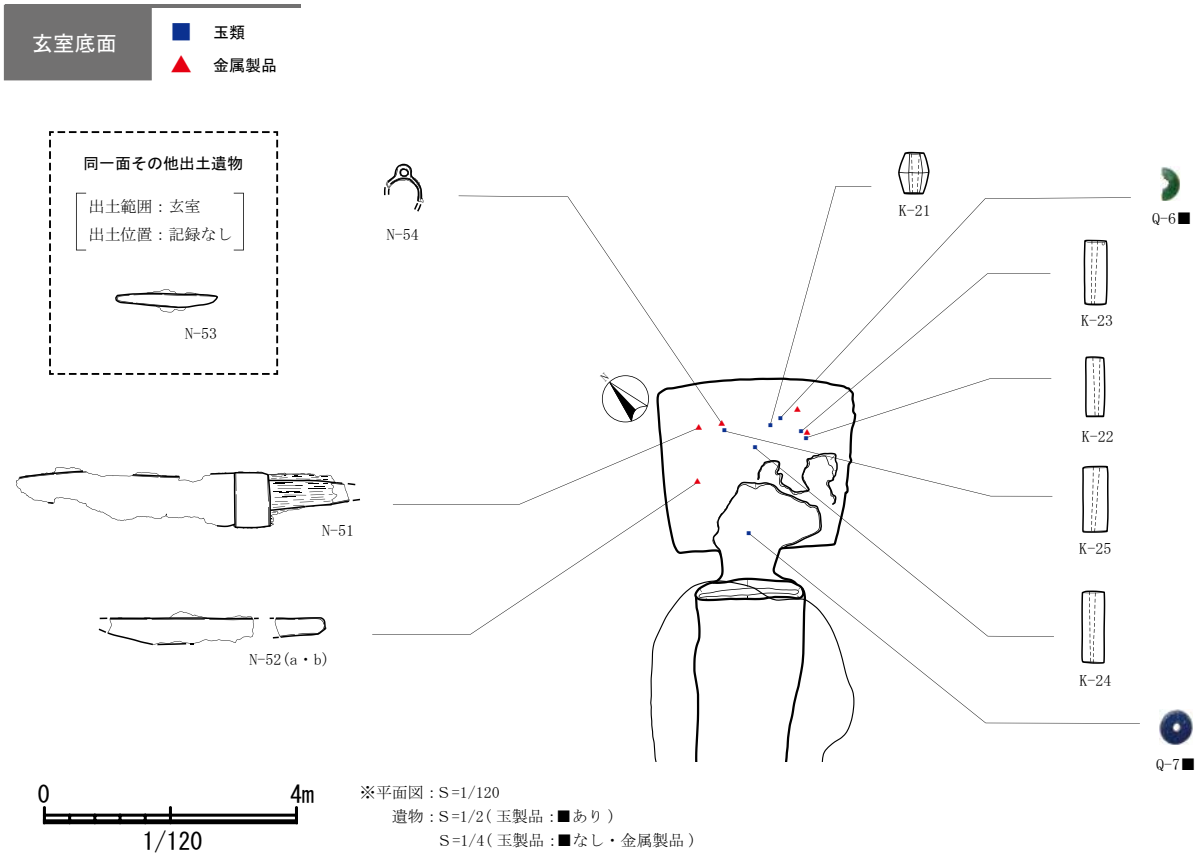


細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	浅黄色(2.5Y7/4)	砂質シルト	黄灰色(2.5Y4/1)シルト土混じる。	1	自然堆積層
2	浅黄色(2.5Y7/4)	砂質シルト	地山ブロック（大）含む。		
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
4	にぶい黄色(2.5Y6/4)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
5	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック多量含む。	2	人為堆積層（整地層）
6	黄褐色(2.5Y5/6)	砂質シルト	地山ブロック多量含む。		
7	黄褐色(2.5Y5/6)	砂質シルト	地山ブロック多量含む。		
8	黄褐色(2.5Y5/6)	砂質シルト	地山ブロック多量含む。		

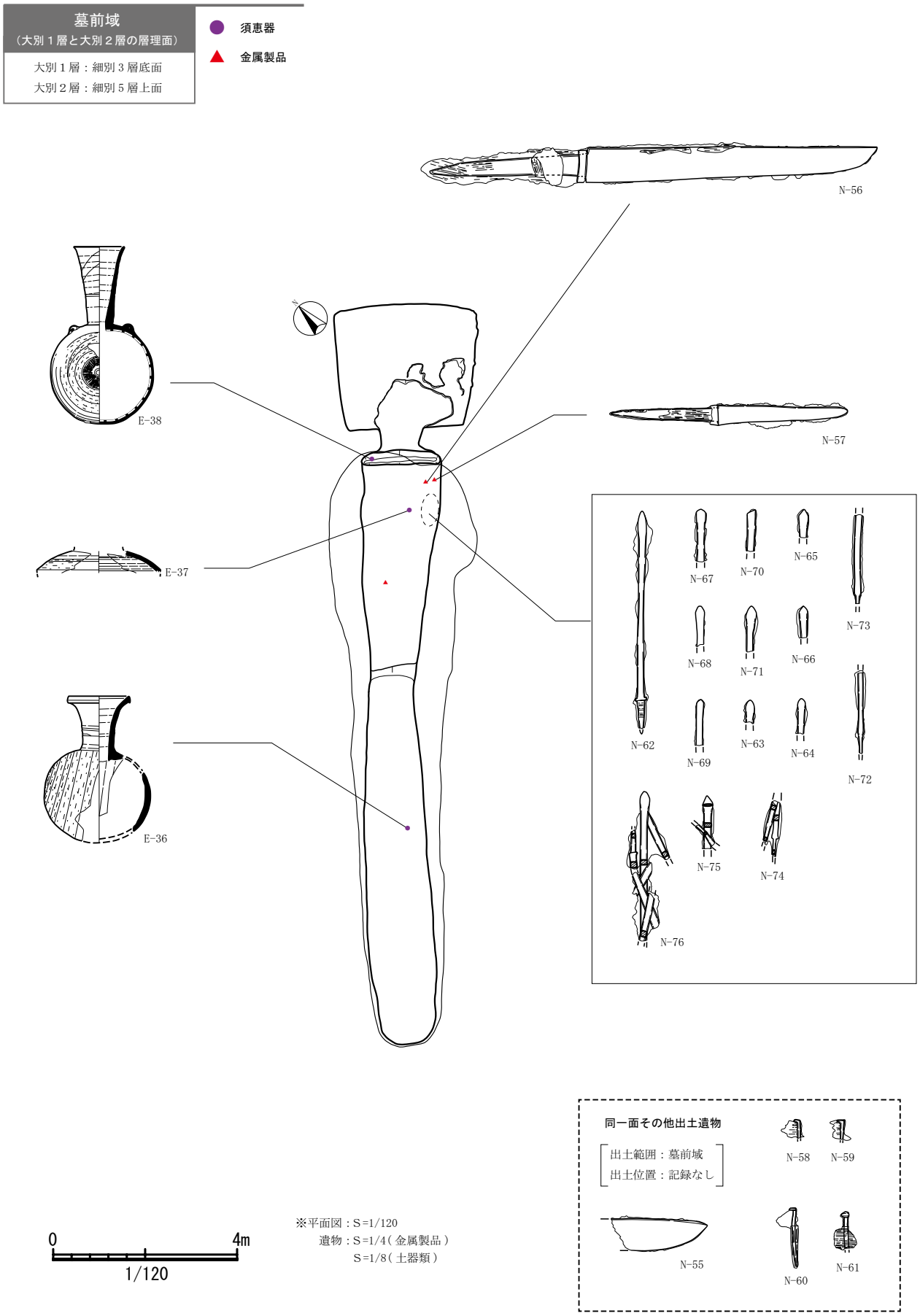
第154図　ST19 横穴墓 土層断面図



第155図　ST19 横穴墓 玄室壁面の棒状鉄製品状況図

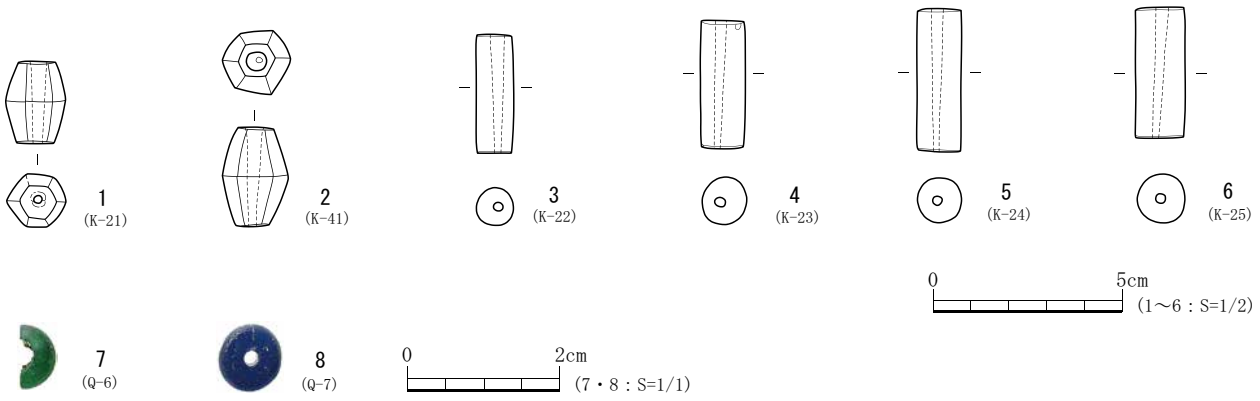


第156図　ST19 横穴墓 遺物出土状況図 (1) ― 玄室底面 ―



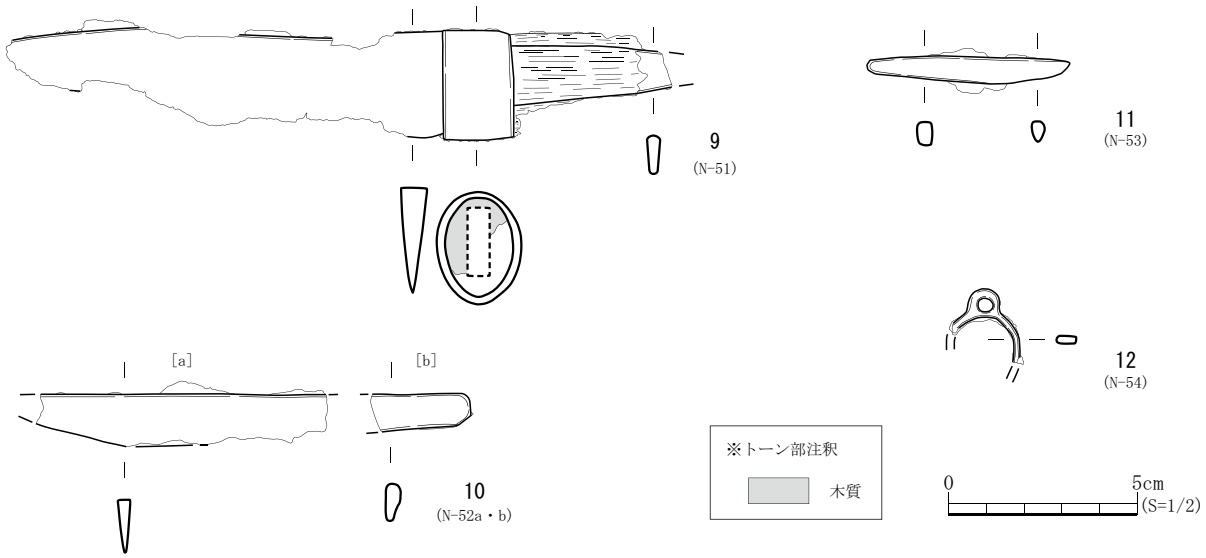
第157図　ST19 横穴墓 遺物出土状況図 (2) －大別１層－

玄室底面



No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
1	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	2.20	1.60	1.00	1.40	—	0.20～0.40	6.6	K-21	277-2
2	玄室	底面	石製品	切子玉	水晶	2.65	1.75	0.85	1.60	—	0.15～0.40	9.4	K-41	277-3
3	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.10	1.00	—	1.00	—	0.15～0.40	5.9	K-22	275-10
4	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.40	1.20	—	—	—	0.10～0.30	10.0	K-23	275-9
5	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.80	1.20	—	—	—	0.15～0.30	10.1	K-24	275-7
6	玄室	底面	石製品	管玉	碧玉	3.45	1.30	—	—	—	0.15～0.30	11.4	K-25	275-8

No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (mm)	長 (mm)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
7	玄室	底面	ガラス製品丸玉	巻付	鉛	—	散在	—	緑	8.9	6.1	0.608	Q-6	286-1
8	玄室	底面	ガラス製品丸玉	引伸	ソーダ	—	孔平行	—	紺	8.6	6.0	0.785	Q-7	286-2

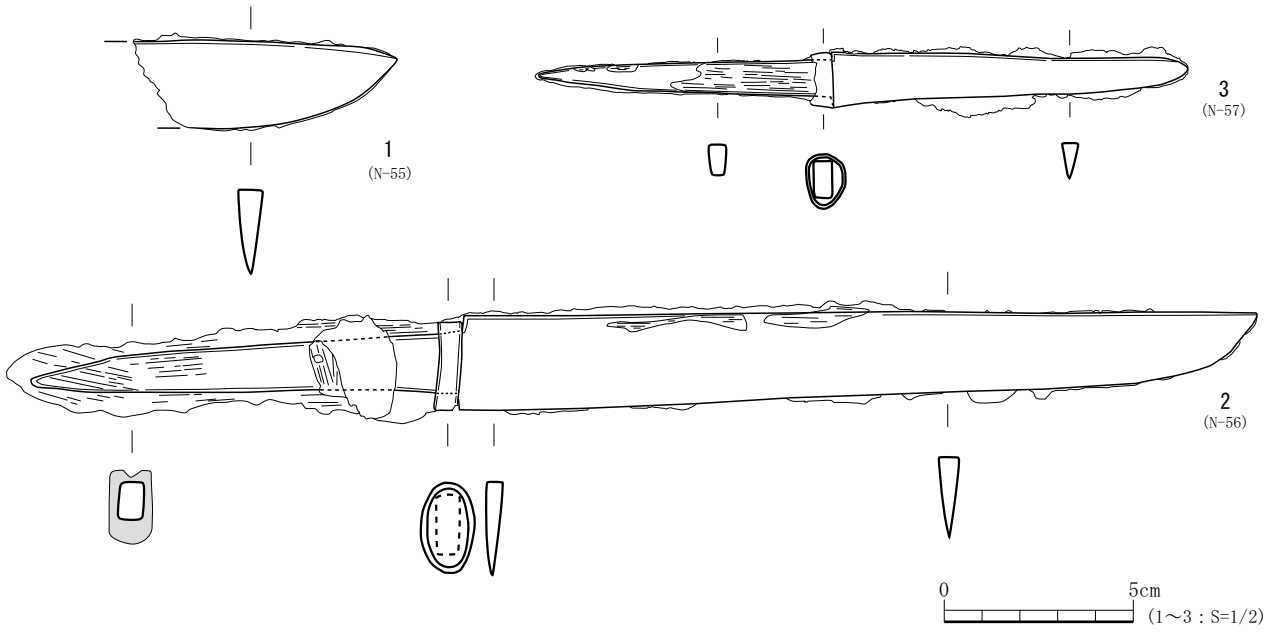


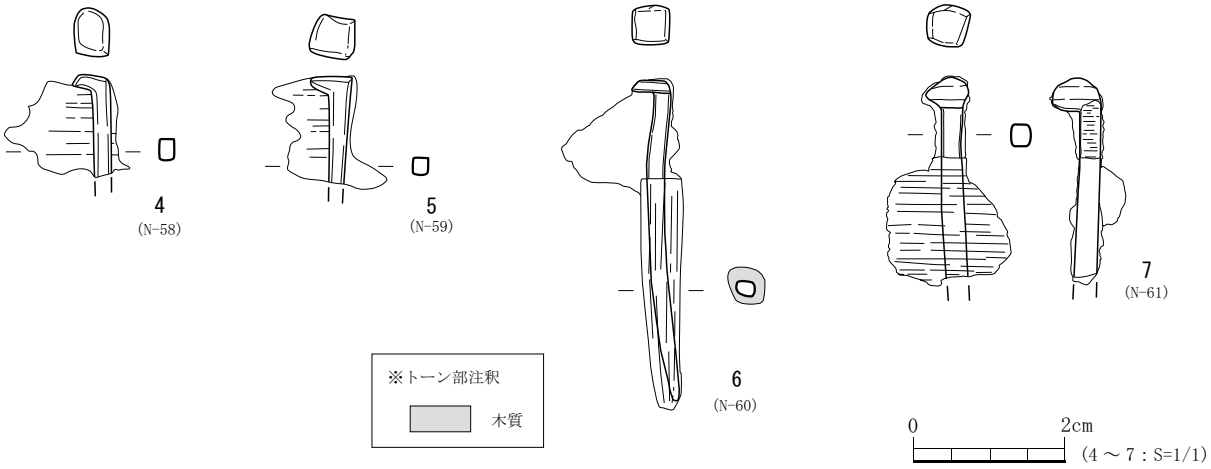
※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
9	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長17.6cm　[刃部]残存長11.6cm・幅2.8cm　[茎部]残存長6.0cm [鏁]長径2.9cm・短径2.3cm・幅1.9cm 【特記事項】不均等両関？・木質残存(柄)・鉄製　【残存部位】刀身・鏁・柄木	N-51	312-11
10	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長10.3cm　[刃部]残存長7.7cm・残存幅1.4cm　[茎部]残存長2.6cm 【特記事項】鉄製	N-52 a・b	312-12
11	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]長さ5.4cm　[刃部]長さ2.1cm・幅0.5cm　[茎部]長さ3.3cm 【特記事項】無関・鉄製	N-53	312-13
12	玄室	底面	金属製品	足金具	【法量】残存長径2.0cm・残存短径1.8cm・幅0.5cm・吊手孔径0.4cm 【特記事項】吊手孔付足金具・鉄製	N-54	306-4

第158図　ST19 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 玉製品・金属製品 －

墓前域　大別１層

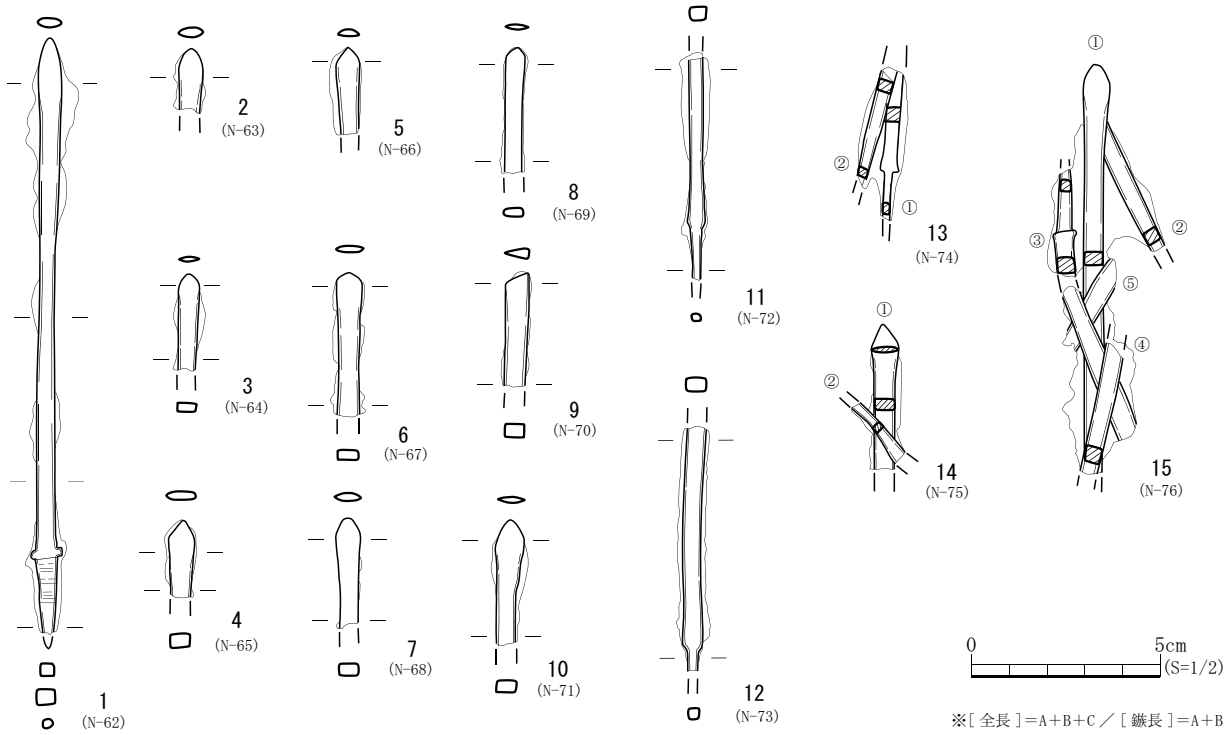




No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	墓前域 (羨門付近)	3層	金属製品	鉄刀	【法量】残存長7.0cm・幅2.4cm　【特記事項】フクラ切先	N-55	306-5
2	墓前域 (羨門付近)	5層上面	金属製品	鉄刀	【法量】残存長33.1cm [刀身]残存長32.5cm [刀部]残存長21.2cm・幅2.5cm [茎部]長さ11.3cm [鍔]長径2.4cm・短径1.4cm・幅0.6cm [柄木]残存長11.4cm・残存幅2.8cm 【特記事項】フクラ切先・均等両関(直角)・目釘孔1か所？・木質残存(柄＋鞘) 【残存部位】刀身・鍔・鞘木・柄木	N-56	306-3
3	墓前域 (羨門付近)	5層上面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]長さ17.2cm [刃部]長さ9.4cm・幅1.5cm [茎部]長さ7.8cm [鍔]長径1.5cm・短径1.1cm・幅0.6cm 【特記事項】均等両関？・木質残存(柄)・鉄製 【残存部位】刀身・鍔・柄木	N-57	312-14
4	墓前域 (羨門付近)	3層	金属製品	鉄釘	【法量】残存長1.3cm・幅0.2cm・厚さ0.3cm　[頭部]長さ0.6cm・幅0.5cm 【特記事項】木質残存	N-58	336-11
5	墓前域 (羨門付近)	3層	金属製品	鉄釘	【法量】残存長1.4cm・幅0.3cm・厚さ0.2cm　[頭部]長さ0.6・幅0.6cm 【特記事項】木質残存	N-59	336-10
6	墓前域 (羨門付近)	3層	金属製品	鉄釘	【法量】全長4.2cm・幅0.2cm・厚さ0.2cm　[頭部]長さ0.5cm・幅0.5cm 【特記事項】木質残存	N-60	336-9
7	墓前域 (羨門付近)	5層上面	金属製品	鉄釘	【法量】残存長2.7cm・幅0.3cm・厚さ0.3cm　[頭部]長さ0.6cm・幅0.6cm 【特記事項】木質残存	N-61	336-8

第159図　ST19 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 金属製品 －

墓前域　大別１層

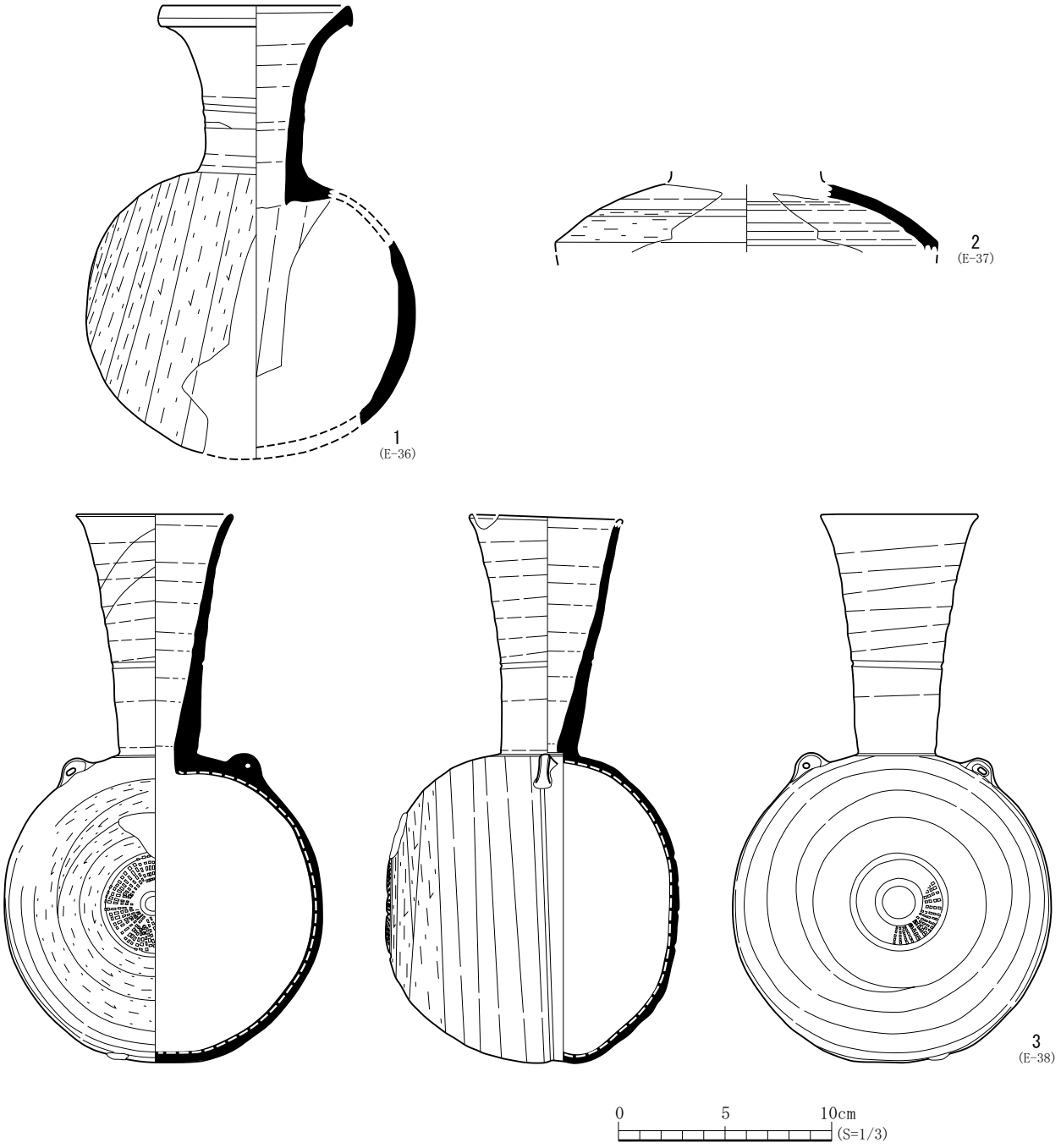


※[全長]＝A＋B＋C ／ [鏃長]＝A＋B

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
1	墓前域 (羨門付近)	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃C1	残存 15.8	0.8	13.8	0.7	13.1	残存 2.0	[茎関]棘関a 口巻残存	N-62	315-34 344-5
2	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 1.7	0.6	残存 1.7	0.5	残存 1.2	—		N-63	315-25
3	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 2.6	0.5	残存 2.6	0.3	残存 2.3	—		N-64	315-21
4	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 2.1	0.7	残存 2.1	0.5	残存 1.6	—		N-65	315-24
5	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 2.3	0.6	残存 2.3	0.4	残存 1.9	—		N-66	315-26
6	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 3.8	0.7	残存 3.8	0.2	残存 3.6	—		N-67	315-28
7	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 3.0	0.6	残存 3.0	0.5	残存 2.5	—		N-68	315-22
8	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 3.3	0.5	残存 3.3	0.2	残存 3.1	—		N-69	315-27
9	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 片刃D	残存 3.0	0.6	残存 3.0	0.3	残存 2.7	—		N-70	315-29
10	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 3.4	0.7	残存 3.4	0.5	残存 2.9	—		N-71	315-20
11	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃？	残存5.9	0.5	残存4.5	—	残存4.5	残存1.4	[茎関]台形関b	N-72	315-31
12	墓前域	3層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃？	残存6.5	0.5	残存6.0	—	残存6.0	残存0.5	[茎関]台形関b	N-73	315-32
13	墓前域	3層	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃？	残存 3.8	0.4	残存 2.6	—	残存 2.6	残存 1.2	[茎関]台形関a1	N-74	315-30
				②鉄鏃	—	残存3.2	0.4	—	—	—	—			
14	墓前域	3層	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃 両刃D	残存 3.8	0.7	残存 3.8	0.6	残存 3.2	—		N-75	315-23
				②不明	—	残存1.8	0.4	—	—	—	—	棒状不明鉄製品		
15	墓前域	3層	金属製品	①鉄鏃	長頸鏃 両刃C	残存 10.8	0.7	残存 10.8	0.5	残存 10.3	—		N-76	315-33
				②鉄鏃	—	残存3.6	0.4	—	—	—	—	長頸鏃頸部？		
				③鉄鏃	長頸鏃？	残存2.8	0.6	残存1.2	—	残存1.2	残存1.6	[茎関]棘関b		
				④鉄鏃	—	残存4.2	0.5	—	—	—	—	長頸鏃頸部？		
				⑤鉄鏃	—	残存2.6	0.6	—	—	—	—	長頸鏃頸部？		

第160図　ST19 横穴墓 出土遺物 (3)　— 金属製品 —

墓前域　大別１層



※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	3層	須恵器 フラスコ形瓶	【技法】外面：ロクロナデ・頸部沈線(2条→途中で1条になる)・体部回転ヘラ削り・円盤閉塞 頸部が接合する部分に孔を穿ち、口頸部接合(接合のための粘土無し) 内面：ロクロナデ 【法量】口径8.7cm・器高(21.4)cm・器厚0.5～1.5cm・頸部高8.0cm	E-36	229-1
2	墓前域	5層上面	須恵器 長頸壺	【技法】外面：肩部上半ロクロナデ・下半回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ 【法量】残存高3.2cm・器厚0.6cm	E-37	229-2
3	墓前域	5層上面	須恵器 提瓶	【技法】外面：ロクロナデ・頸部沈線／絞り目？・体部中心沈線(2条・円心円状) 櫛描列点文(放射状)・体部下半回転ヘラ削り・把手貼付・円盤閉塞？ 内面：頸部ロクロナデ・体部調整不明・円盤により片側閉塞？ 【法量】口径7.2cm・器高25.9cm・器厚0.3～1.0cm	E-38	228-6 228-7

第161図　ST19 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

20号横穴墓（ST20）（第162～165図、第30表、第4分冊 写真図版72）

【検出位置】 A-2区西側の標高27～28mの丘陵南斜面に位置する。同斜面の西側にはST11、東側にはST12・13が隣接している。

【重複関係】 玄室の一部の天井と羨道天井が現代の造成により削平を受けている。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室の一部の天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）である。

【個別部位の特徴】（第162図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は5.38mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行1.90m、玄室の中央幅1.66m、奥壁幅1.24m、前壁幅1.40m、左側壁幅1.79m、右側壁幅1.80m、玄室底面から天井の高さ1.02mを測る。床面積は約2.8㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とするが、中央幅に対し奥行が若干長く、両側壁中央部が外にやや張った形状を呈する。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.2m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。幅0.76mを測る。天井が削平を受け残存していない。残存状況からみて、立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。

工 具 痕：各壁に幅0.07m前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦・斜め方向、天井部が放射状である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.85m、玄室側の幅0.76m、墓前域側の幅0.70mを測る。

立 面 形:天井が残存していないため不明である。玄門の形状から逆U字形を呈していたと考えられる。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ1.32m、幅0.12～0.18m、深さ0.02～0.03mの溝跡1を確認した。溝跡1の上部には、0.20×0.10×0.03m(1.9kg)～0.35×0.20×0.10m(24.8kg)の角礫・円礫13個（総重量125.3kg）が残存しており、溝上面から高さ0.3mまで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩9個、砂岩3個、斑岩1個である（第30表4)。溝跡1と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 2.63m、上幅 0.9～1.4m、下幅 0.60～1.32m を測る。底面から上端までの高さは、墓前域末端で 0.1m 前後、羨門付近で 1.0m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.6m 程度である。

【堆積層】 ST20 横穴墓を覆う堆積層は細別 8 層・大別 2 層に分けた（第 162 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～6 層）は ST20 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。墓前域大別 1 層の堆積後、ST20 の玄室入口の大部分が埋没したと考えられる。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 7・8 層）は ST20 の玄室から墓前域に堆積する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層は整地層とみられ、大別 1 層と大別 2 層の層理面にあたる細別 7 層上面で遺物が少量出土した。

【出土遺物】土師器 1 点（破片 1 点）、須恵器 37 点（5 個体、破片 32 点※うち 1 個体、破片 26 点は遺構間接合遺物）、金属製品 4 点が出土した（第 30 表 1～3/第 163 図）。人骨等は残存していない。須恵器 5 点、金属製品 1 点の合計 6 点を図示した（第 165 図）。

出土遺物は、出土層位から **A：大別 1 層（細別 3 層～検出面）出土遺物**、**B：大別 1 層（大別 2 層上面）出土遺物**の 2 群に分かれ、新旧関係は古い順から B→A となる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 1 層（大別 2 層上面）出土遺物〕（第 165 図）

大別 1 層のうち、大別 2 層上面（細別 7 層上面）で出土した遺物である（前項 B に相当）。須恵器盤 1 点（第 165 図 5）と鉄鏃 1 点（第 165 図 6）・不明鉄製品 3 点が出土した。このうち、須恵器盤については破片の状態で出土しており、これと接合する同一個体の破片が ST12 でも出土している（第 30 表 2/第 164 図）。出土状況からみて、須恵器盤は ST20 で破砕されたと考えられ、その破片が ST12 へ「意図的に散布」された可能性がある。ただし、ST12 は ST20 と隣接する横穴墓でもあり、「単なる自然流入」の可能性も想定できるため、ここでは両者の可能性を提示するに留めておきたい。本面出土遺物については、少量ではあるが整地層上面で出土している点から、この面で何らかの祭祀行為が実施された想定しておきたい。

〔大別 1 層（細別 3 層～検出面）出土遺物〕（第 165 図）

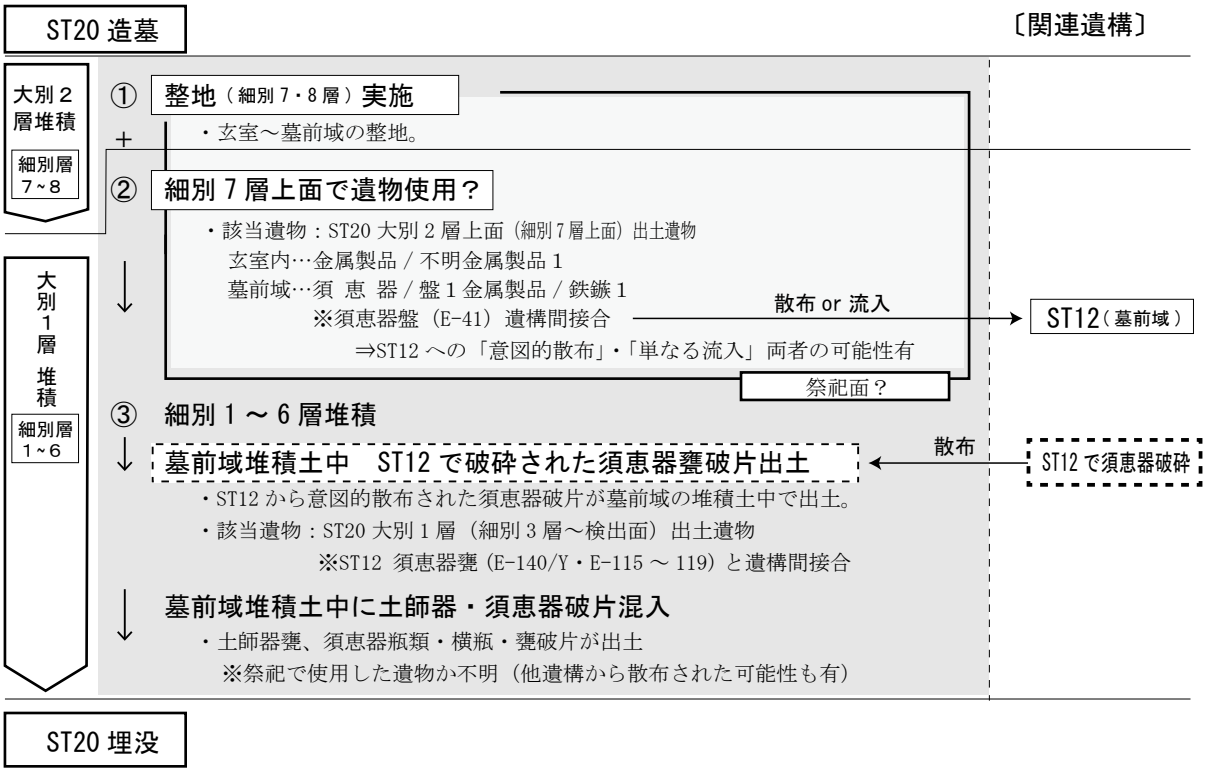
大別 1 層のうち、墓前域の堆積土上層にあたる細別 3 層と検出面から出土した遺物である（前頁 A に相当）。須恵器瓶・壺類破片 1 点（第 165 図 2）・横瓶破片 1 点（第 165 図 1）・甕破片 2 点（第 165 図 3・4）と図示できなかった土師器甕破片、須恵器瓶類破片・甕破片が出土した（第 30 表 1）。いずれも出土位置にまとまりはなく、祭祀等で使用された遺物かは判断がつかない。

本層ではこのほかに、ST12 で破砕された後、ST20 墓前域に混入したと考えられる須恵器破片が 26 点出土した（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。その内訳は、**ST12 由来の須恵器甕（E-140／第 103 図 1）**と接合する破片が 18 点（口縁～体部破片）、**非図化の須恵器甕破片（Y・E-115～119）**と接合する破片が 8 点（体部破片）である。ST12 は ST20 に隣接する横穴墓であるが、ST12 は標高的に ST20 より低い地点に位置することから、ST12 からの自然流入は物理的に不可能と判断される。したがって、これらの須恵器は ST20 の大別 1 層堆積途中の段階に「ST12 から意図的に散布されたもの」と考えられる。

【まとめ】

ST20 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST20 造墓・使用・埋没の経過〕



第30表　ST20横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体 / 破片	土師器 甕	土師器 小計	須恵器 瓶類	須恵器 横瓶	須恵器 甕	須恵器 小計
墓前域	1	検出面	個			1 (30)	1 (90)	1 (170)	3 (290)
			破	1 (25)	1 (25)	1 (15)		5 (270)	6 (285)
		5層	個					1 (215)	1 (215)
			破						
合計		個体数(重量)				1 (30)	1 (90)	2 (385)	4 (505)
		破片数(重量)		1 (25)	1 (25)	1 (15)		5 (270)	6 (285)
		総重量		(25)	1 (25)	(45)	(90)	(655)	10 (790)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数（重量）	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係（★印が主体遺構）	登録No	図版番号
須恵器	盤	1 (325)	◆ST12　検出面(墓前域) ◆ST20　7層上面(墓前域)	ST 20	◆ST12:2点(小破片) ★ST20:3点(大破片)	E 41	第165図5
須恵器	甕	1 (7,330)	◆ST7　8層(墓前域) ◆ST11　検出面(墓前域) ◆ST12　堆積土(玄室)、8～11層(墓前域) ◆ST20　3層・検出面(墓前域)	ST 12	◆ST7:(c)1点 ◆ST11:(a)1点＋(c)2点 ★ST12:(a)2点＋(b)1点＋(c)25点 ◆ST20:(a)6点＋(b)10点＋(c)2点	E 140 abc	第103図1
須恵器	甕	1 (985)	◆ST12　8～11層・検出面(墓前域) ◆ST20　検出面(墓前域)	ST 12	★ST12:6点 ◆ST20:2点	Y・E 115	－
須恵器	甕	1 (320)	◆ST12　8～11層(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST 12	★ST12:1点 ◆ST20:3点	Y・E 116	－
須恵器	甕	1 (540)	◆ST9　小横穴1　堆積土 ◆ST12　8層・検出面(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST 12	◆ST9:1点 ★ST12:4点 ◆ST20:1点	Y・E 117	－
須恵器	甕	1 (150)	◆ST12　検出面(墓前域) ◆ST20　検出面(墓前域)	ST 12	★ST12:1点 ◆ST20:1点	Y・E 118	－
須恵器	甕	1 (240)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST20　3層(墓前域)	ST 12	★ST12:1点 ◆ST20:1点	Y・E 119	－

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1　検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

Y・E115～119:同一個体破片がST12より出土

※ST20出土須恵器の総数
(表30-1)遺構単独出土　4個体＋破片6点
＋
(表30-2)遺構間接合遺物　1個体＋破片26点　＝ 37 点

3. 金属製品

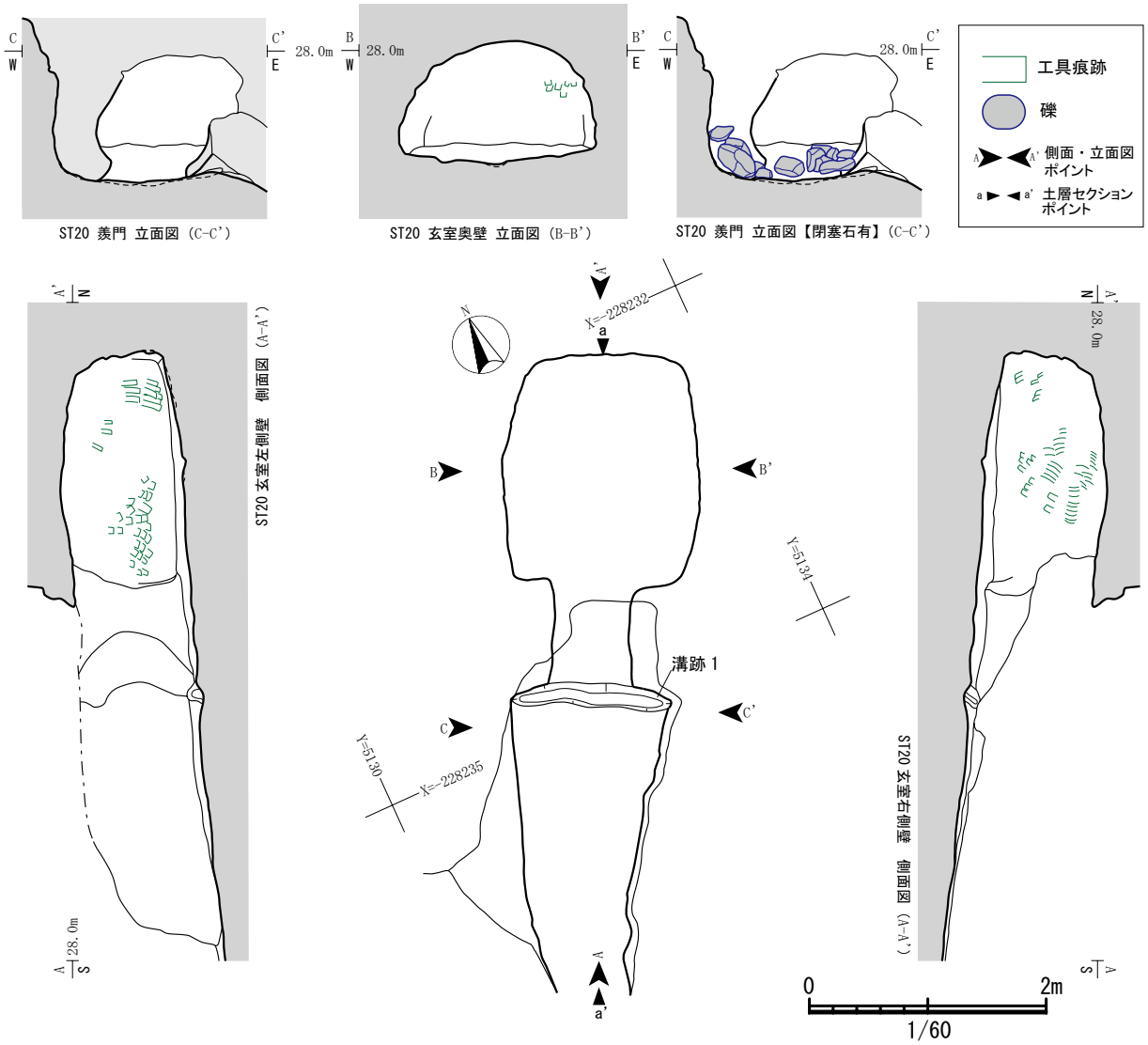
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 掲載/非掲載	金属製品 鉄鏃	金属製品 不明鉄製品	金属製品 小計
玄室	1	7層上面	掲			
			非掲		3	3
墓前域	1	検出面(7層上面)	掲	1		1
			非掲			
器種別総合計		掲載遺物点数		1		1
		非掲載遺物点数			3	3
		総点数		1	3	4

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

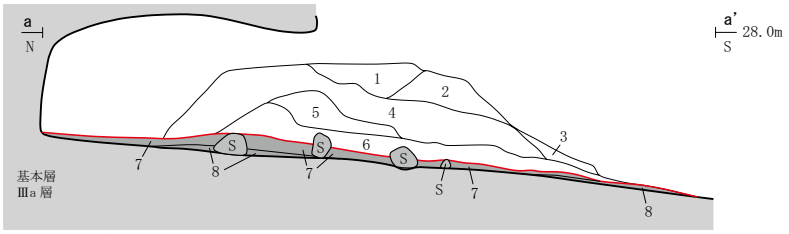
4. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	円礫	20	10	3	1.9
頁岩	角礫	15	10	10	3.8
頁岩	角礫	20	12	10	5.3
頁岩	角礫	20	10	10	5.9
頁岩	角礫	28	18	8	7.2
頁岩	角礫	20	15	12	8.9
頁岩	円礫	30	20	6	10.1
頁岩	角礫	25	20	17	21.6
頁岩	角礫	35	20	10	24.8
砂岩	角礫	13	11	7	3.3
砂岩	角礫	20	12	10	5.6
砂岩	角礫	25	20	13	12.7
斑岩	円礫	24	19	12	14.2
合計:13点／重量(kg)＝					125.3

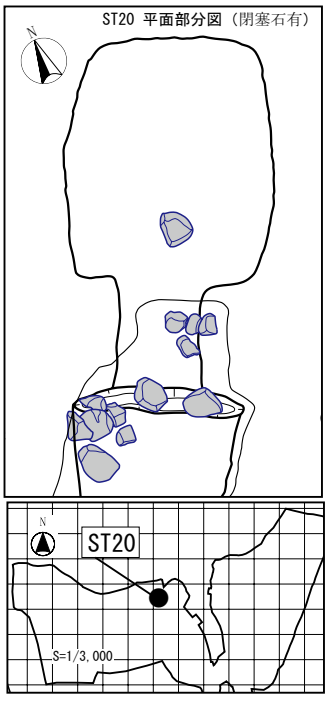
【平面図、玄室側面・立面図】



【土層断面図】

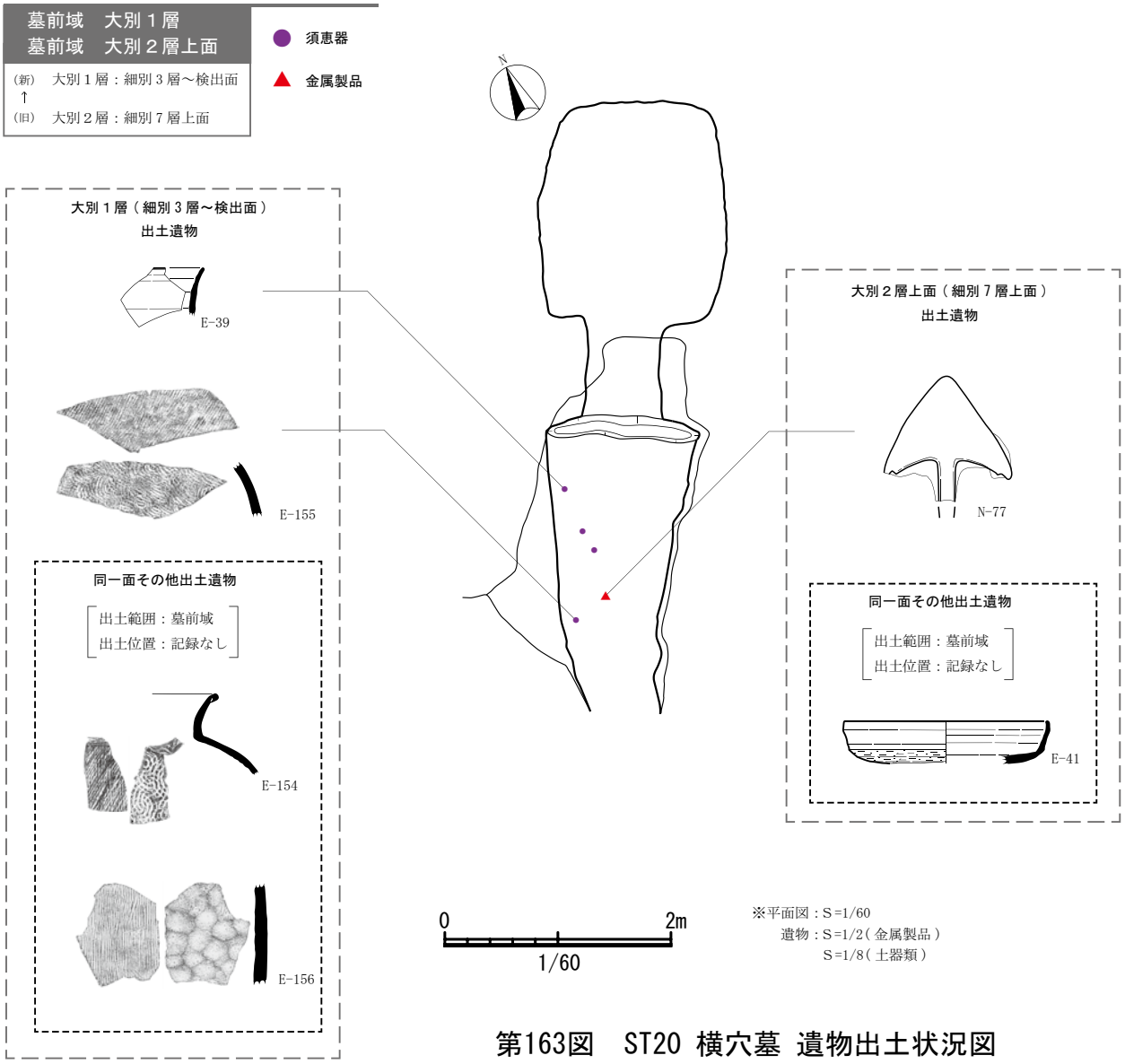


【土層図中の表記】
土層中の塗り：人為堆積層
分層線の赤線：遺物使用想定面

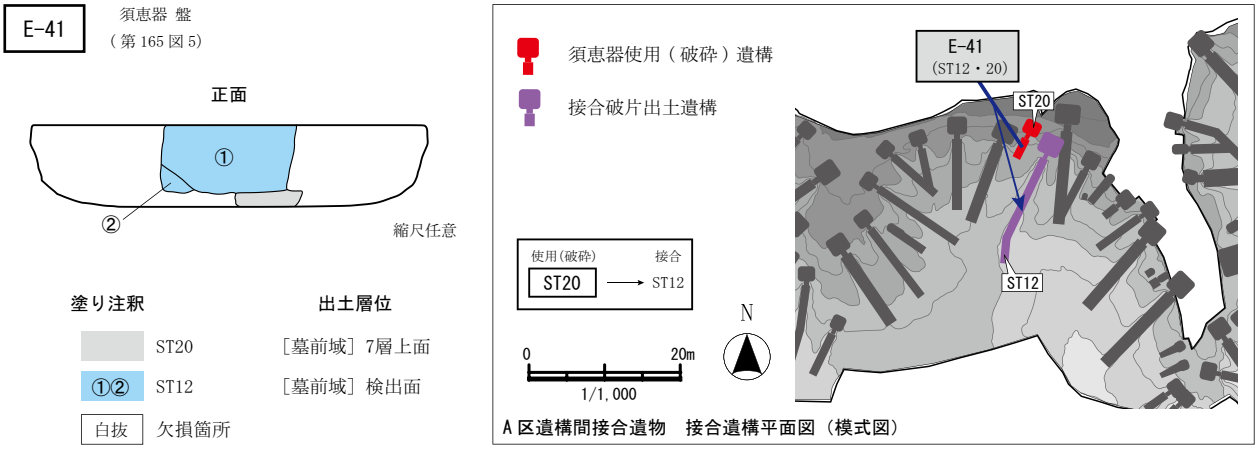


細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト		1	自然堆積層
2	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	黒褐色(10YR3/4)粒子、炭化物片含む。		
3	褐灰色(10YR5/1)	シルト	地山粒子少量、酸化鉄含む。		
4	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山粒子少量含む。		
5	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山粒子少量含む。		
6	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山粒子少量含む。		
7	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック多量含む。	2	人為堆積層（整地層）
8	褐灰色(10YR5/1)	シルト	地山ブロック・炭化物片含む。		

第162図　ST20 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図

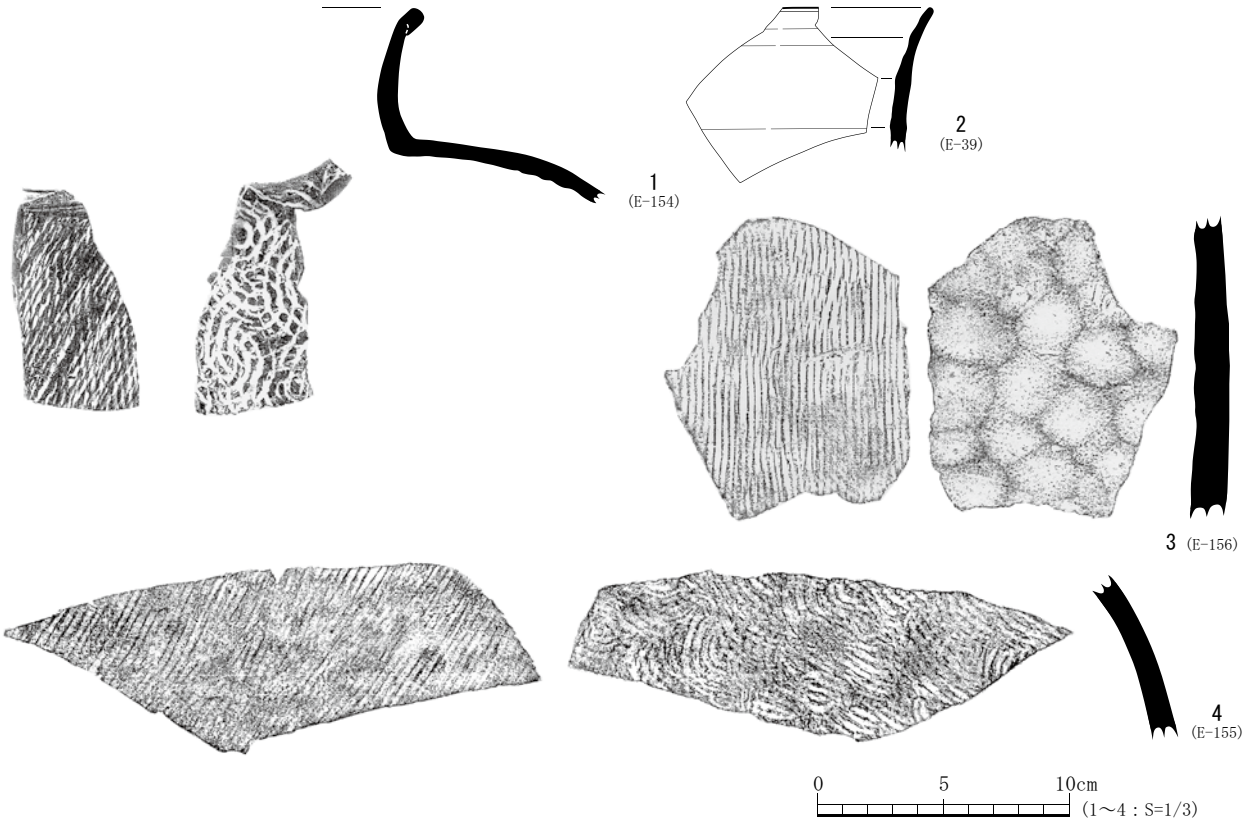


第163図　ST20 横穴墓 遺物出土状況図

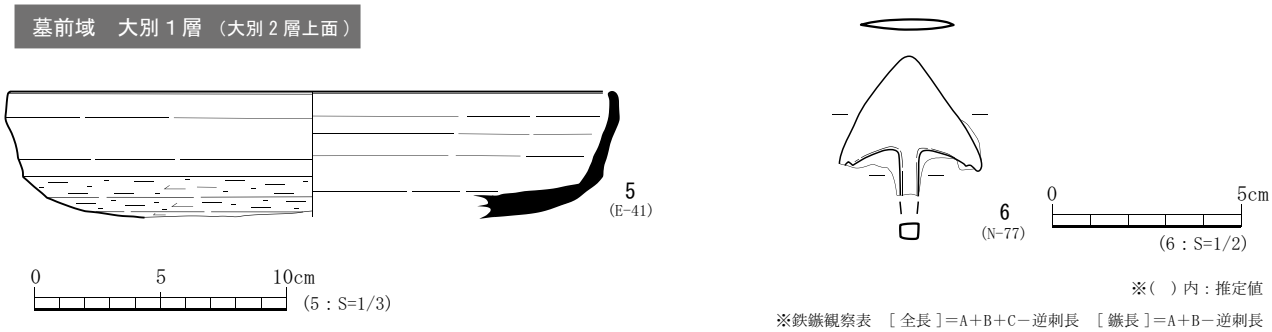


第164図　ST20 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

墓前域　大別１層（大別１層堆積土中）



墓前域　大別１層（大別２層上面）



※(　)内：推定値

※鉄鏃観察表　［全長］=A+B+C－逆刺長　［鏃長］=A+B－逆刺長

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	検出面	須恵器 横瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ→貼付・体部格子状タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】器厚0.5～1.0cm	E-154	229-4
2	墓前域	検出面	須恵器 壺・瓶類	【技法】外面：ロクロナデ・突帯、内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.4～0.6cm	E-39	229-3
3	墓前域	5層	須恵器 甕	【技法】外面：平行タタキ、内面：当て具痕(同心円) 【法量】器厚1.0～1.3cm	E-156	249-2
4	墓前域	検出面	須恵器 甕	【技法】外面：平行タタキ、内面：当て具痕(同心円) 【法量】器厚0.8～1.0cm	E-155	249-1
5	墓前域	◆ST12　検出面 ◆ST20　7層上面	須恵器 盤	◎遺構間接合　**ST20(主体)**＋ST12 【技法】外面：口縁部～体部上半ロクロナデ・体部下半～底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ 【法量】口径(24.0)cm・残存高5.1cm・器厚0.5～0.9cm	E-41	220-2

No.	出土位置	細別層	種別・器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
6	墓前域	検出面 (7層上面)	金属製品 鉄鏃	有頸 平根鏃	残存 3.6	3.8	残存 3.6	3.0	残存 1.2	－	[逆刺長]0.6cm 逆刺先端に抉り有り [鏃身形]三角形	N-77	316-1 348-10

第165図　ST20 横穴墓 出土遺物

21号横穴墓（ST21）（第166～170図、第31表、第4分冊 写真図版73～75）

【検出位置】　A-2区西側の標高26～28mの丘陵南斜面に位置する。同斜面の南西側にはST8、東側にはST9が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。ST21は隣接するST9と墓前域が重複する。両横穴墓の位置関係・堆積層・出土遺物等の観察から、その前後関係については、①「ST9 造墓」→②「ST9の墓前域に接続する形でST21を造墓」→③「ST9・21の両者で墓前域を共有」の大きく3段階に分けられる（ST9→ST21→ST9・21）。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南東側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）である。

【個別部位の特徴】（第167図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は9.75mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行1.85m、玄室の中央幅2.25m、奥壁幅2.06m、前壁幅1.86m、左側壁幅1.71m、右側壁幅1.74m、玄室底面から天井の高さ1.22mを測る。床面積は約3.8㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.2m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。両側壁が崩落している。立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。幅0.74m、高さ1.00mを測る。

工 具 痕：各壁に幅0.05～0.08m前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁が斜め方向、奥壁・前壁が縦方向、天井部が放射状である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.70m、玄室側の幅0.74m、墓前域側の幅0.80m、玄門側の高さ1.00mを測る。

立 面 形：両側壁が崩落している。逆U字形を呈していたと考えられる。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：壁面が風化・崩落しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に0.13mの段差があり、段差下の墓前域に角礫14個が残存していた。礫は0.15×0.12×0.09m（2.2kg）～0.36×0.16×0.16m（21.8kg）、総重量206.2kgを測り、石材は花崗閃緑岩12個、砂岩1個、頁岩1個である（第31表6）。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用された

ものと考えられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長 7.20m、上幅 1.6～2.8m、下幅 0.80～1.83m を測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.7m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.9m 程度である。

【堆積層】　ST21 横穴墓を覆う堆積層は細別 11 層・大別 4 層に分けた（第 166 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～5 層）は ST21 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層の下層にあたる細別 4 層底面と大別 2 層の層理面で遺物が出土した。この上面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別 1 層底面以下には整地層が認められないことから、大別 2 層堆積後の窪地上面を利用したと可能性が高い。

大別 1 層の堆積後、ST21 の玄室入口は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 2・3 層〕

大別 2 層（細別 5～8 層）は ST9 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 3 層（細別 9・10 層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 3 層は、横穴墓の掘方底面上に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面と玄室底面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 4 層〕

大別 4 層（細別 11 層）は ST21 の墓前域に堆積する自然堆積層である。溝状の形状を呈する墓前域の壁際に堆積する均一層である。遺物は出土していない。ST21 造墓直後の堆積層と考えられる。

【出土遺物】土師器 43 点（6 個体、破片 37 点）、須恵器 9 点（3 個体、破片 6 点※うち破片 5 点は遺構間接合遺物）、玉製品 9 点、金属製品 7 点（その他不明小破片多数）、石器 1 点（写真図版 297-5）が出土した（第 31 表 1～5）。人骨等は残存していない。このうち、石器は周辺から流入したものと考えられる。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる。土師器鉢 2 個体・高坏 4 個体、須恵器高台坏 2 個体・短頸壺 1 個体、勾玉 1 点・切子玉 1 点・臼玉 1 点、ガラス製丸玉 1 点・小玉 5 点、鉄刀 1 点・刀子 3 点の合計 22 点を図示した（第 169・170 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 4 層底面）出土遺物**、**B：大別 2 層・玄室底面出土遺物**の 2 群に分かれる。加えて、ST21 では、別の横穴墓（ST9・10・12）で破砕された須恵器破片の一部が ST21 に混入したと考えられる遺物 5 点（第 31 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**C:墓前域大別 1 層の下層にあたる細別 2～4 層堆積途中**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST21 関連遺物は、古い順から B→A→C の 3 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 2 層・玄室底面出土遺物〕（第 169・170 図）

大別 2 層（細別 5～8 層）のうち、羨道～墓前域に分布する細別 7・8 層の底面〔＝大別 3 層（細別 9・10 層）上面〕と玄室底面で出土した遺物である（前項 B に相当）。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれるが、同時期ものと考えられる。以下、出土地点ごとに詳細を記載する。

玄室では金属製品と玉製品が出土した。その内訳はガラス製小玉 4 点（第 170 図 6～9）、鉄刀 1 点（第

170図13)・刀子3点（第170図10～12）と不明鉄製品破片である（第31表3・4)。鉄刀は玄室左側壁と前壁のコーナー付近で出土した。刀子とガラス製小玉は玄室底面に堆積する泥化した土壌内から出土したため位置は特定できなかった（第168図)。これらはST21の初葬に伴う遺物とみられる。

墓前域では土師器・須恵器・玉製品が出土した。その内訳は土師器高坏4個体（第169図5～8)、須恵器短頸壺1個体（第169図9)、勾玉1点（第170図3)、切子玉1点（第170図2)、臼玉1点（第170図1)、ガラス製小玉1点（第170図4)・丸玉1点（第170図5）と図示できなかった土師器坏・甕破片である（第31表1・3・4)。土師器の坏破片は図示した高坏の坏部破片の可能性がある。遺物は羨門付近から墓前域上半の範囲の同一面上に分布する（第168図)。第169図9の須恵器短頸壺(E-40)はほぼ完形で逆位の状態で出土しており、原位置を保ったままの出土と考えられる（写真図版 74-5)。玉製品は出土位置にまとまりがないことから、本来は玄室内使用された遺物の可能性がある。高坏については破片の状態で出土しているが､接合する破片がまとまりをもった形での出土状況を示す｡以上の状況から、本層同一面出土の遺物群については、土器類に関しては初葬時の墓前祭祀に使用された遺物の可能性が高い。なお、本段階以降、隣接するST9と墓前域を共有したと考えられる。

〔大別1層（細別4層底面）出土遺物〕（第169図）

大別1層（細別1～4層）のうち、墓前域に分布する細別4層の底面付近で出土した遺物である（前項Aに相当)。土師器・須恵器が出土した。その内訳は土師器鉢2個体（第169図1・2)・坏破片16点、須恵器高台坏2個体（第169図3・4)・瓶類破片1点である（第31表1)。

これらの遺物は、羨門付近の墓前域側において破片の状態で出土した。少量ではあるが墓前祭祀に伴う遺物の可能性がある。遺物の特徴・年代からみて、隣接するST9の「大別1層（細別5層底面）出土遺物」と同時期または近い時期のものと判断される。ST9と比較し遺物量が少ないこと、ST9とST21は墓前域を共有していた横穴墓であることなどから、ST9 で実施された墓前祭祀に関連する遺物の可能性も考えられる。

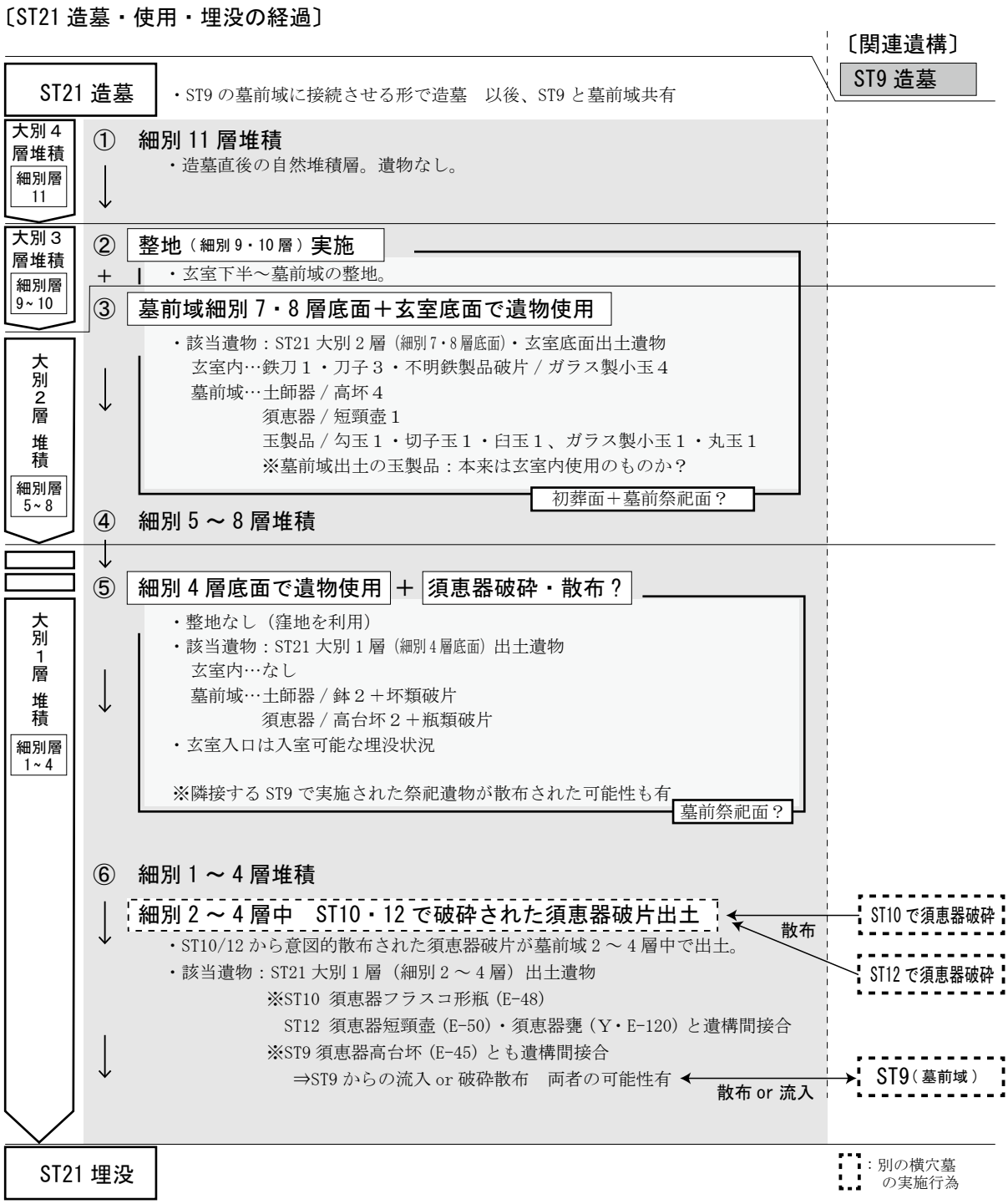
〔大別1層（細別2～4層）出土遺物〕

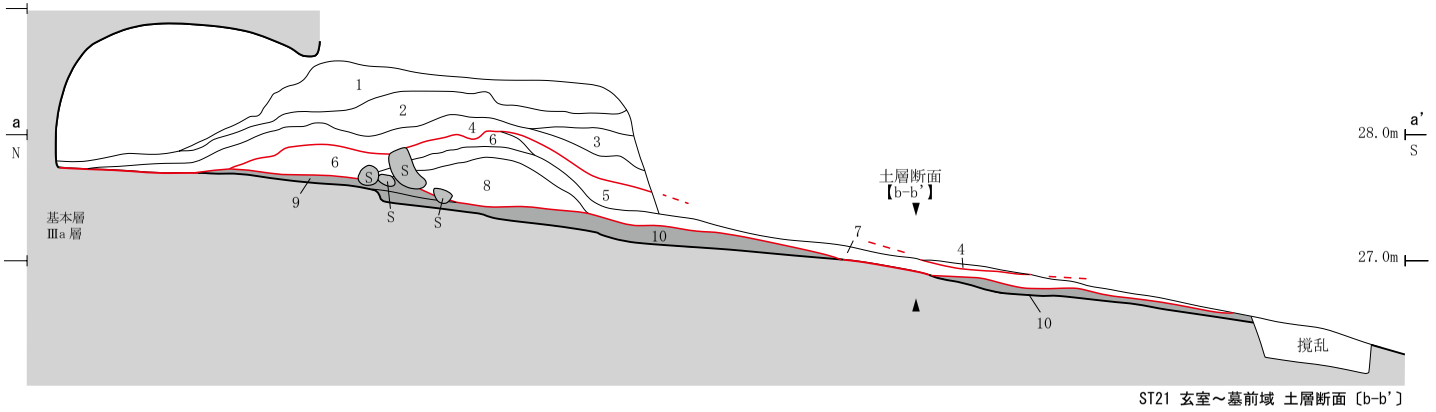
墓前域に分布する大別1層（細別2～4層）の堆積土中から出土した遺物である（前項Cに相当)。須恵器高台坏・フラスコ形瓶・短頸壺・甕の破片が出土した（第31表2)。

これらの須恵器破片は別遺構で破砕された後、ST21の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST9・10・12 由来の 3 者に分けられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST21 では、**ST9由来の須恵器高台坏（E-45／第75図3)**と接合する破片が2点（高台部破片)、**ST10由来の須恵器フラスコ形瓶(E-48／第84図6)**と接合する破片が 1 点（体部破片)、**ST12由来の須恵器短頸壺（E-50／第99図5)**と接合する破片が 1 点（体部下半破片)・**須恵器甕(Y・E-120／非図化)**と接合する破片が 1 点（体部破片）出土した。ST21からST9は直線距離で約3m東、ST10は約5m東、ST12は約15m東の地点に位置する。いずれも ST21 に隣接もしくは同斜面上に位置する横穴墓である。ST10・12 については、位置的にみて単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別 1 層堆積途中の段階に「ST10・12 から ST21 墓前域への須恵器の意図的な散布行為」が行われたと想定したい。ST9 と接合する高台坏（E-45）については、ST21 と墓前域を共有する横穴墓であることから隣接遺構からの流れ込みの可能性も否定できない。「隣接遺構からの流入」「破砕遺物の散布」の両者の可能性を想定しておきたい。

【まとめ】

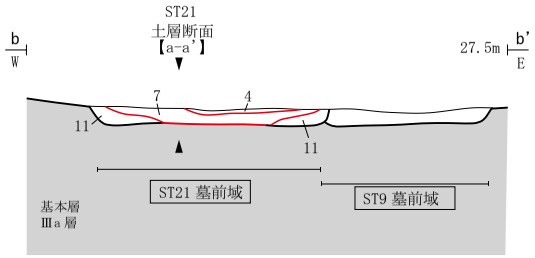
ST21 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。



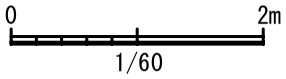


ST21 玄室～墓前域 土層断面〔b-b'〕

【土層図中の表記】
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫
- ▼▲：各土層断面の交点

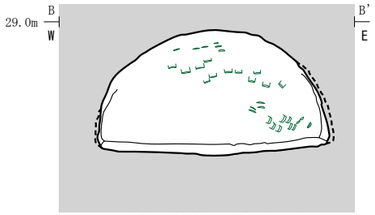


ST9・ST21 墓前域 土層断面〔b-b'〕

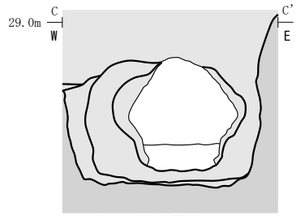


細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	明黄褐色(2.5Y6/6)	シルト	地山ブロック(大)、地山粒子多く含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子多量含む。		
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。遺物多く含む。		
5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック(小)含む。	2	自然堆積層
6	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック(小)含む。		
7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック(小)微量、地山粒子少量。		
8	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山ブロック(小)含む。		
9	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック、地山粒子含む。	3	人為堆積層（整地層）
10	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック多量含む。		
11	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック、地山粒子微量含む。	4	自然堆積層

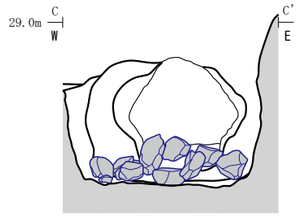
第 166 図　ST21 横穴墓 土層断面図



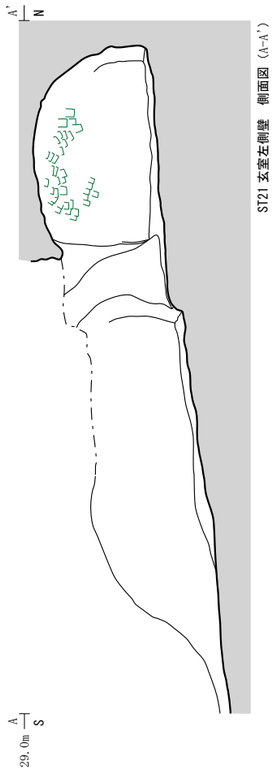
ST21 玄室奥壁 立面図（B-B'）



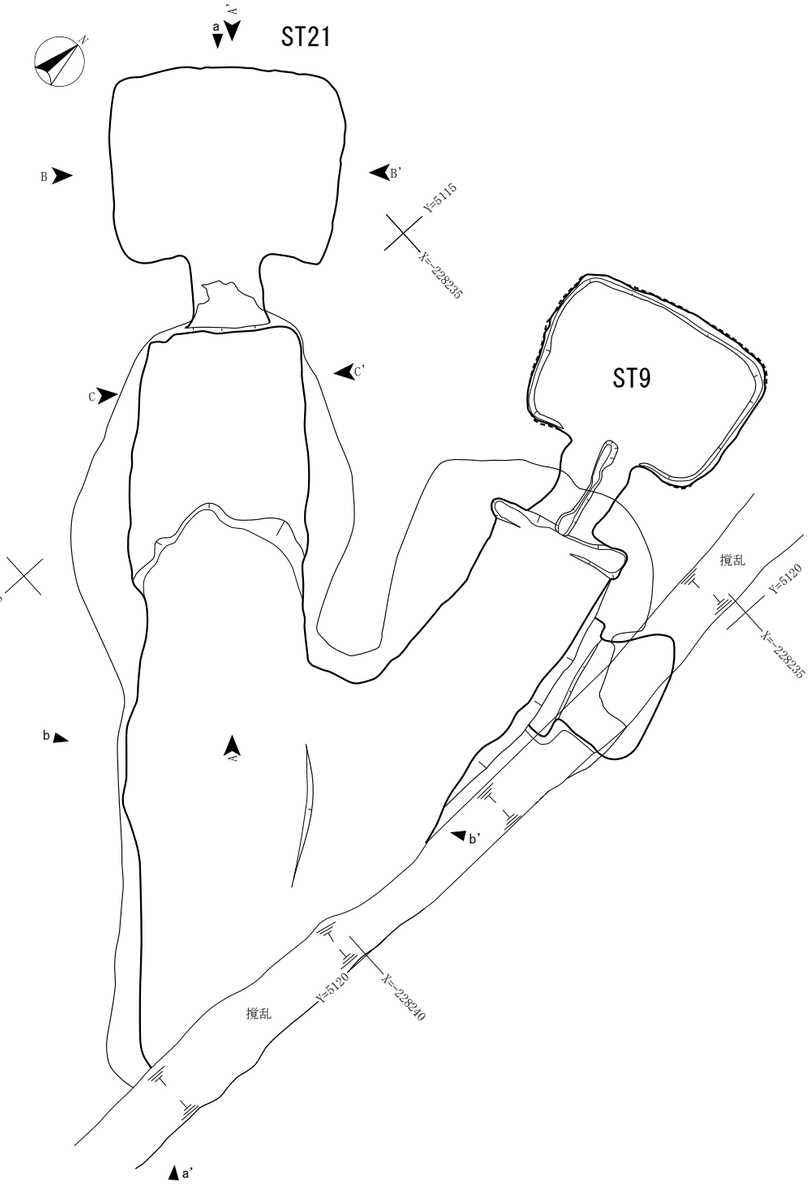
ST21 羨門 立面図（C-C'）

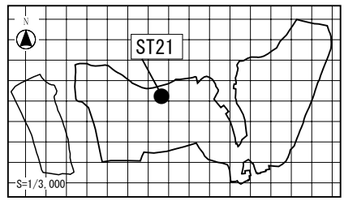


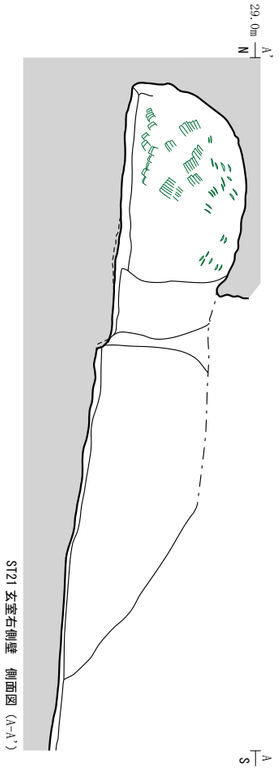
ST21 羨門 立面図【閉塞石有】（C-C'）

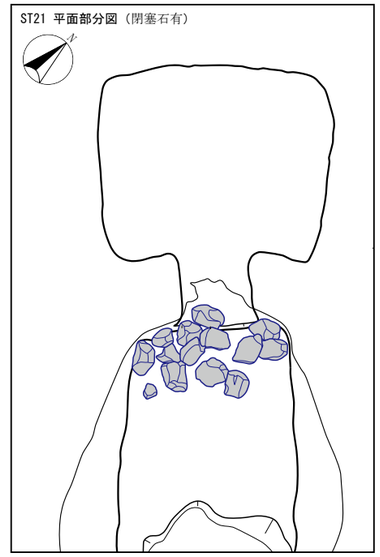


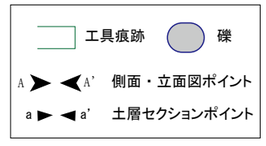
ST21 玄室左側壁 側面図（A-A'）



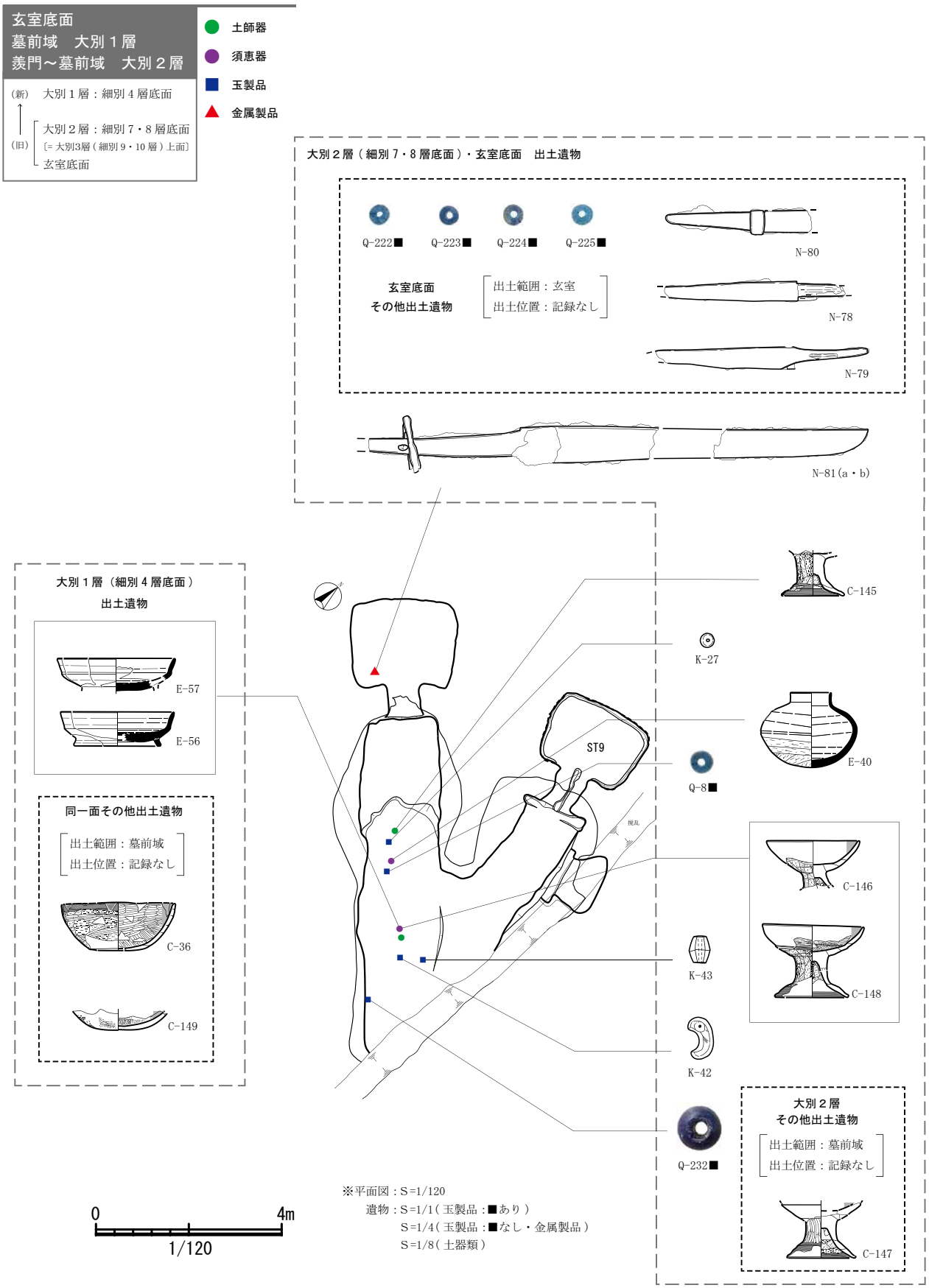








第167図　ST21 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



第168図　ST21 横穴墓 遺物出土状況図

第31表　ST21横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器					須恵器			
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	鉢	高坏	甕	小計	高台坏	短頸壺	瓶類	小計
墓前域	1	4層	個		2 (475)			2 (475)	2 (420)			2 (420)
			破	16 (90)				16 (90)			1 (5)	1 (5)
	2	7層	個			3 (555)		3 (555)				
			破	16 (80)			2 (15)	18 (95)				
		10層上面	個			1 (155)		1 (155)		1 (545)		1 (545)
			破	3 (40)				3 (40)				
総合計		個体数(重量)			2 (475)	4 (710)		6 (1,185)	2 (420)	1 (545)		3 (965)
		破片数(重量)		35 (210)			2 (15)	37 (225)			1 (5)	1 (5)
		総重量		(210)	(475)	(710)	(15)	43 (1,410)	(420)	(545)	(5)	4 (970)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	高台坏	1 (375)	◆ST9　5層(墓前域・羨門付近) ◆ST21　4層(墓前域)	ST9	★ST9:3点(破片大) ◆ST21:2点	E 45	第75図3
須恵器	フラスコ形瓶	1 (490)	◆ST9　4･5層、検出面(墓前域) ◆ST10　7層(墓前域) ◆ST21　4層(墓前域)	ST10	◆ST9:1点(破片小) ★ST10:2点(破片大) ◆ST21:1点(破片小)	E 48	第84図6
須恵器	短頸壺	1 (265)	◆ST12　9層(墓前域) ◆ST21　4層(墓前域)	ST12	★ST12:4点 ◆ST21:1点	E 50	第99図5
須恵器	甕	1 (390)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST21　2層(墓前域)	ST12	◆ST12:5点 ◆ST21:1点 ※同一個体破片ST12で多量出土	Y･E 120	－

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST21出土須恵器の総数
(表31-1)遺構単独出土　3個体＋破片1点
＋
(表31-2)遺構間接合遺物　破片5点　＝ 9 点

3. 玉製品

種別			玉製品						
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	石製 勾玉	石製 切子玉	石製 臼玉	小計	ガラス製 丸玉	ガラス製 小玉	小計
玄室	－	底面	個						4 (0.144)	4 (0.144)
			破							
墓前域	2	7層	個	1 (5.6)	1 (5.2)	1 (1.2)	3 (12.0)	1 (0.601)		1 (0.601)
			破							
		10層上面	個						1 (0.068)	1 (0.068)
			破							
総合計		個体数(重量)		1 (5.6)	1 (5.2)	1 (1.2)	3 (12.0)	1 (0.601)	5 (0.212)	6 (0.813)
		破片数(重量)								
		総重量		(5.6)	(5.2)	(1.2)	3 (12.0)	(0.601)	(0.212)	6 (0.813)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

4. 金属製品

種別			金属製品						
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	鉄刀	鉄刀(柄部)	責金具?	刀子	不明鉄製品	小計
玄室	2	9層上面	掲	1			1		2
			非掲						
	－	底面	掲				2		2
			非掲	1	1	1		破片多数	3 ＋破片多数
器種別総合計		掲載遺物点数		1			3		4
		非掲載遺物点数		1	1	1		破片多数	3 ＋破片多数
		総点数		2	1	1	3	破片多数	7 ＋破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。
(ST21出土の不明小片の重量は30.8g)

5. その他の遺物

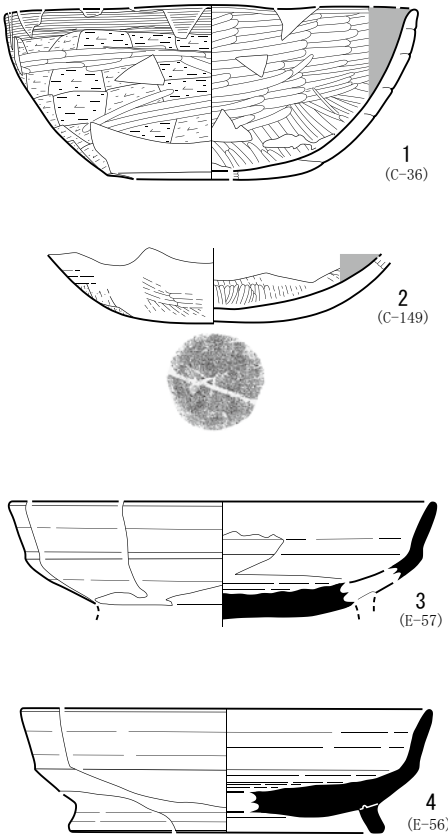
種別			石器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層 / 器種 個体/破片	石鏃	小計
墓前域	1	4層 個	1 (1.0)	1 (1.0)
		破		
総合計		個体数(重量)	1 (1.0)	1 (1.0)
		破片数(重量)		
		総重量	(1.0)	(1.0)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値

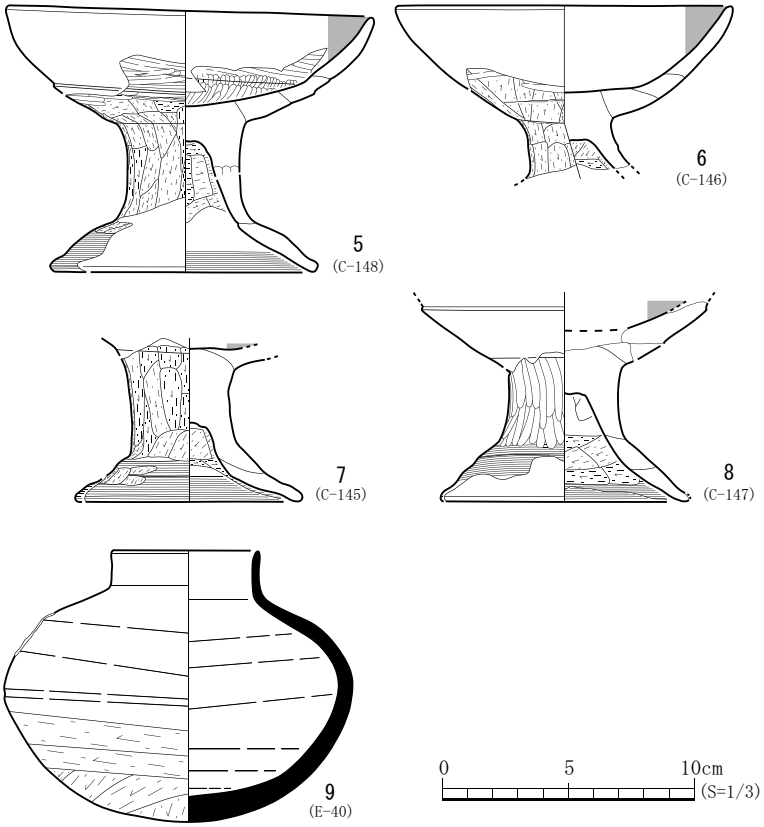
6. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	15	12	9	2.2
花崗閃緑岩	角礫	20	15	12	6.5
花崗閃緑岩	角礫	27	20	12	7.8
花崗閃緑岩	角礫	25	22	12	10.4
花崗閃緑岩	角礫	30	20	15	14.9
花崗閃緑岩	角礫	28	21	18	15.7
花崗閃緑岩	角礫	28	23	15	16.4
花崗閃緑岩	角礫	28	18	18	17.1
花崗閃緑岩	角礫	30	25	10	17.4
花崗閃緑岩	角礫	28	25	16	19.4
花崗閃緑岩	角礫	25	20	17	20.6
花崗閃緑岩	角礫	36	16	16	21.8
砂岩	角礫	30	18	15	18.2
頁岩	角礫	33	20	10	17.8
合計:14点／重量(kg)＝					206.2

墓前域　大別１層



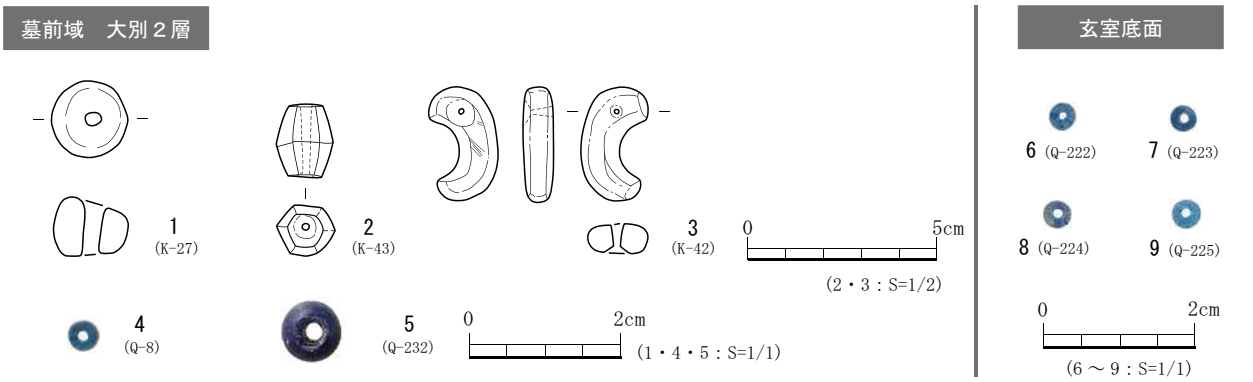
墓前域　大別２層



※(　) 内：推定値

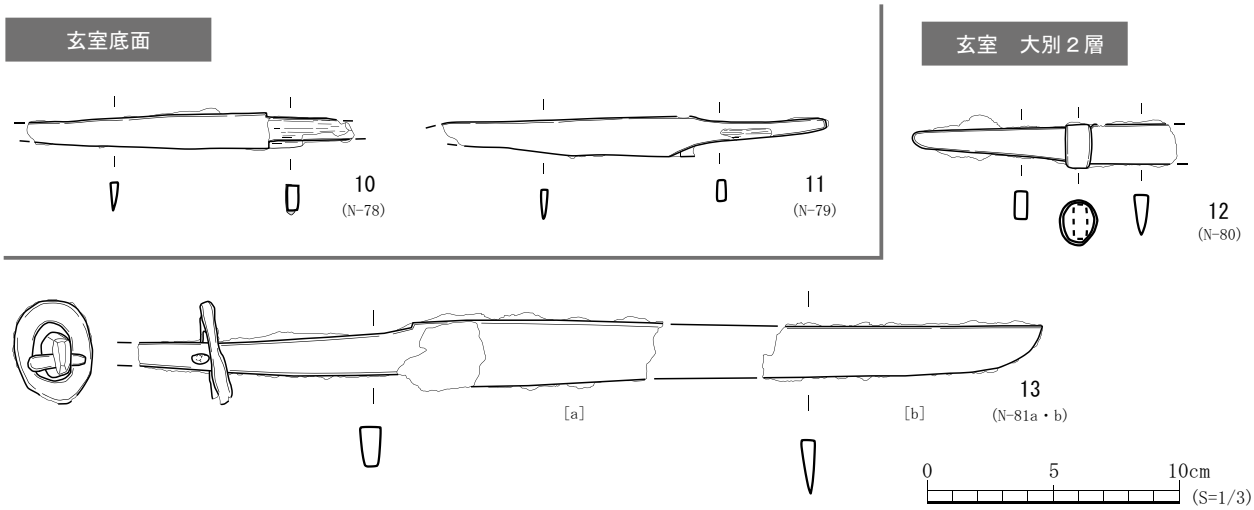
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラ削り→ヘラミガキ・底部ヘラ削り 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.2)cm・器高6.9cm・底径(8.2)cm・器厚0.3～0.6cm	C-36	199-4
2	墓前域	4層	土師器 鉢	【技法】外面：体部ヘラ削り→ヘラミガキ・底部木葉痕？・磨滅 内面：ヘラミガキ→黒色処理 【法量】残存高3.0cm・器厚0.5～0.7cm	C-149	199-3
3	墓前域	4層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り→ナデ再調整 高台貼付(高台欠損) 内面：ロクロナデ 【法量】口径16.6cm・残存高4.6cm・器厚0.3～1.0cm	E-57	220-3
4	墓前域	4層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】口径(16.0)cm・器高4.9cm・底径(12.4)cm・器厚0.5～1.3cm	E-56	220-4
5	墓前域	7層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】坏部口径(14.4)cm・器高(10.2)cm・脚裾部径10.6cm・器厚0.4～1.4cm	C-148	213-4
6	墓前域	7層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]ヘラ削り→ヘラミガキ　[脚部]ヘラ削り 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]ヘラ削り 【法量】坏部口径(13.2)cm・残存高7.5cm・器厚0.3～1.1cm	C-146	213-2
7	墓前域	10層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】脚裾部径(9.0)cm・残存高6.5cm・器厚0.4～1.1cm	C-145	213-1
8	墓前域	7層	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理 [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 【法量】脚裾部径9.8cm・残存高7.9cm・器厚0.4～1.3cm	C-147	213-3
9	墓前域	10層上面	須恵器 短頸壺	【技法】外面：ロクロナデ・体部下半回転ヘラ削り(一部手持ちヘラ削り？) 内面：ロクロナデ 【法量】口径5.8～7.4cm・器高10.8cm・器厚0.3～0.9cm	E-40	229-5

第169図　ST21 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －



No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
1	墓前域	7層	石製品	臼玉	滑石	1.00	1.00	—	0.80	0.50	0.20	1.2	K-27	275-29
2	墓前域	7層	石製品	切子玉	水晶	2.00	1.50	0.90	1.35	—	0.15～0.30	5.2	K-43	277-4
3	墓前域	7層	石製品	勾玉	瑪瑙	3.05	1.80	1.05	0.80	—	0.15～0.30	5.6	K-42	274-14

No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径 (mm)	長 (mm)	質量 (g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
4	墓前域	10層上面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	—	青	4.0	2.9	0.068	Q-8	286-4
5	墓前域	7層	ガラス製品丸玉	巻付	ソーダ	—	同心円方向らせん状	—	紺	8.1	7.1	0.601	Q-232	286-3
6	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	不純物	紺・青	3.5	2.8	0.041	Q-222	286-5
7	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	不純物	青	3.5	2.0	0.033	Q-223	286-6
8	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	小突起	散在	不純物	紺・青／モザイク状	3.6	1.8	0.031	Q-224	286-7
9	玄室	底面	ガラス製品小玉	鋳型	—	—	散在	不純物	紺・青／モザイク状	3.2	1.9	0.039	Q-225	286-8



No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
10	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長13.0cm　[刃部]残存長9.6cm・幅1.4cm　[茎部]残存長3.4cm 【特記事項】不均等両関？・木質残存(柄)・鉄製 【残存部位】刀身・柄木	N-78	313-1
11	玄室	底面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長15.3cm　[刃部]残存長9.1cm・幅1.6cm　[茎部]長さ6.2cm 【特記事項】片関(刃側：斜角)・木質残存(柄)・鉄製 【残存部位】刀身・鏁・柄木	N-79	313-2
12	玄室	9層上面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長10.5cm　[刃部]残存長3.4cm・幅1.6cm　[茎部]長さ7.1cm [鏁]長径1.8cm・短径1.5cm・幅1.1cm 【特記事項】鉄製　【残存部位】刀身・鏁	N-80	313-3
13	玄室	9層上面	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長32.0cm　[刃部]残存長21.0cm・幅2.6cm　[茎部]残存長11.0cm [鐔]長径4.1cm・短径3.1cm・厚さ0.6cm [目釘]長さ2.3cm・直径0.6cm　[目釘孔]直径(0.6)cm 【特記事項】フクラ切先・不均等両関(背側：直角)・板鐔(無窓鐔) 目釘孔1か所(目釘残存) 【残存部位】刀身・鐔・目釘	N-81 a・b	306-6

第170図　ST21 横穴墓 出土遺物 (2)　― 玉製品・金属製品 ―

22 号横穴墓（ST22）（第 171 図、第 32 表、第 4 分冊 写真図版 76）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 25～26m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST18・SX3、南東側には ST19 が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室奥壁側の天井の一部が残存し、入口は南西に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 171 図）

〔規　模〕玄室・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 3.13m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.77m、玄室の中央幅 0.85m、奥壁幅 0.70m、墓前域側の幅 0.68m、玄室底面から天井の高さ 0.58m を測る。床面積は約 1.3 ㎡である。

平 面 形：玄室幅に対し奥行が長い隅丸長方形を呈する。墓前域との接続部でやや窄まる。

天　　井：奥壁側の天井の一部が残存しているが、天井形は不明である。

底　　面：平坦である。

玄　　門：残存していない。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

玄室と墓前域の境の底面に段差はなく、玄門の墓前域側底面で長さ 1.12m、幅 0.12～0.18m、深さ 0.07m の溝跡 1 を確認した。溝跡 1 の上部には、0.40×0.20×0.20m（20.1 kg）～0.40×0.28×0.20m（47.8 kg）の円礫 6 個(総重量 182.6 kg)が残存しており､溝上面から高さ 0.4m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は砂岩 4 個、頁岩 2 個である（第 32 表 2)。溝跡 1 と礫は横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。

〔墓前域〕

規　　模：玄門から墓前域の末端までの長さ 1.36m、上幅 1.26m、下幅 0.92m を測る。

形　　状：溝状の形状を呈する。

底　　面：玄門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側が高い。

付属施設：中央を通る溝跡 2 を確認した。幅 0.12～0.20m、深さ 0.10m を測る。溝跡 2 は玄門付近の溝跡 1 と接続する。位置にみて排水溝と考えられる。

【堆積層】　ST22 横穴墓を覆う堆積層は細別 5 層に分けた（第 171 図)。細別 1～5 層はいずれも自然堆積層である。人為的な整地層は確認されていない。遺物は玄室のみで出土している。

【出土遺物】玄室に堆積する細別 2 層から須恵器広口長頸壺の体部下半の破片 1 点が出土したのみである(第 32 表 1)。この須恵器破片は ST51 で破砕された広口長頸壺（第 382 図 2/E-103）の破片が ST22 に意図的に散布されたものと考えられる(遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。

【まとめ】　ST22 横穴墓は、底面等で遺物が出土していないが、閉塞石が残存することから造墓後 1 回の埋葬は実施されたものと想定しておきたい。その後、玄室天井が崩落し、横穴墓が埋没する過程で、ST51 から破砕された須恵器破片が ST22 に散布されたと考えられる。

第32表　ST22横穴墓　出土遺物一覧

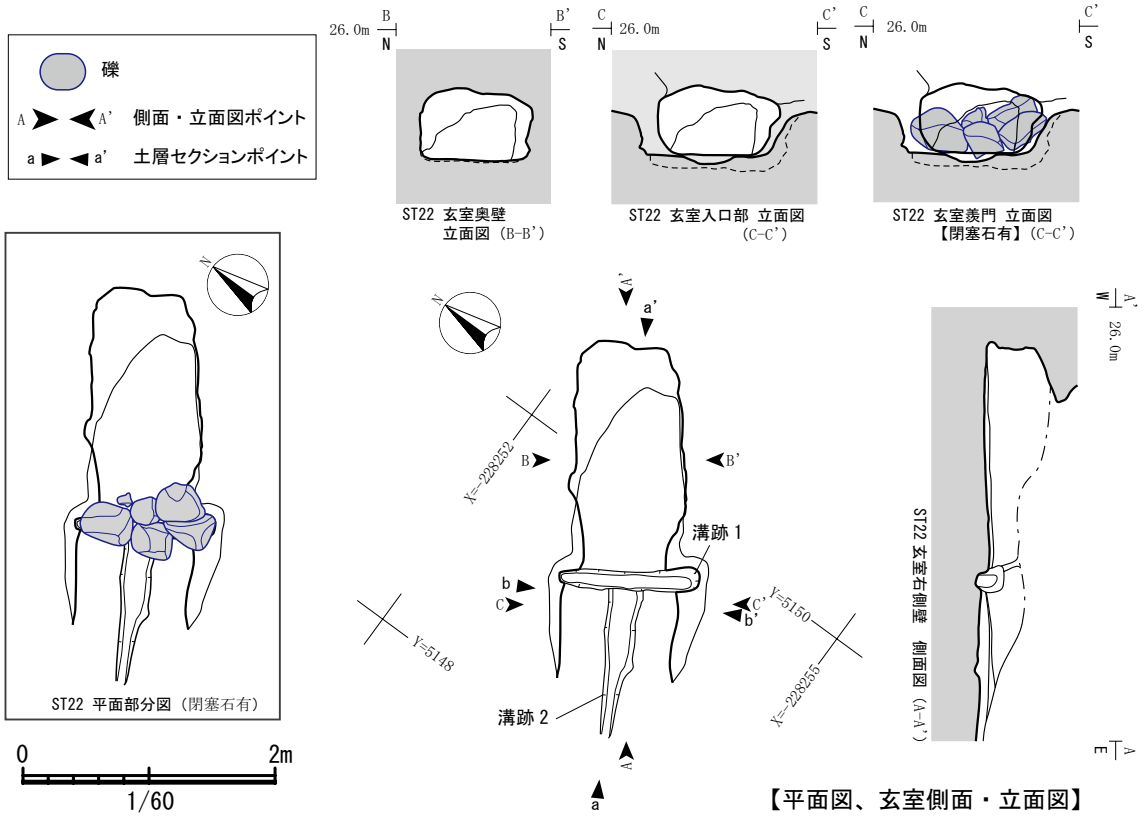
1．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数（重量）	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係（★印が主体遺構）	登録No	図版番号
須恵器	広口長頸壺	1（440）	◆ST22　2層（玄室） ◆ST51　19・20・22層（墓前域）	ST51	◆ST22：1点 ★ST51：9点	E 103	第382図2

※アンダーラインがあるもの【　例：ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量（g／乾燥重量）であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

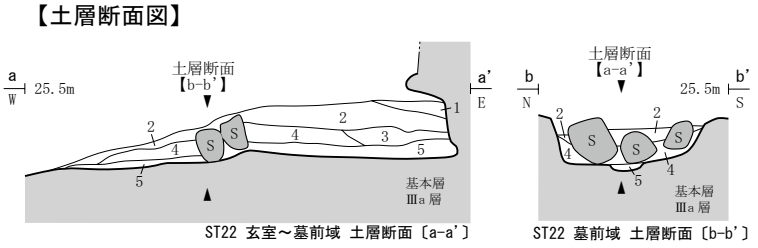
2．閉塞石観察表

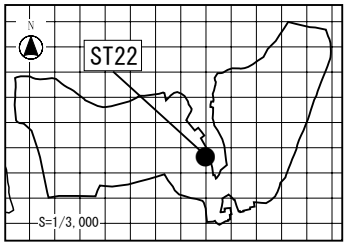
石材	形状	法量（単位：cm/kg）			
		長さ	幅	厚さ	重量
砂岩	円礫	40	20	20	20.1
砂岩	円礫	40	30	18	34.1
砂岩	円礫	34	25	20	35.3
砂岩	円礫	40	28	20	47.8
頁岩	円礫	35	20	13	21.5
頁岩	円礫	26	20	15	23.8
合計：6点／重量（kg）＝					182.6



【平面図、玄室側面・立面図】

【土層断面図】





層	土色	土性	備考
1	明黄褐色（2.5Y7/6）	シルト	
2	褐灰色（10YR4/1）	シルト	地山ブロック含む。
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	
4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック少量含む。
5	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	地山ブロック微量含む。

【土層図中の表記】
▼▲：各土層断面の交点　　S　：礫

0　2m
1/60

第171図　ST22 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図

23 号横穴墓（ST23）（第 172・173 図、第 33 表、第 4 分冊 写真図版 77）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 23～24m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST24、南東側には ST26 が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。天井は全て崩落している。玄室入口は南西に向かって開口していたと考えられる。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 172 図）

〔規　模〕玄室・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 4.16m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.18m、玄室の中央幅 1.20m、奥壁幅 1.45m、墓前域側の幅 0.85m を測る。床面積は約 1.4 ㎡である。

平 面 形：玄室の奥壁幅に対し入口の幅が狭いやや歪んだ逆台形を呈する。

天　　井：残存していない。

底　　面：基本的に平坦であるが、玄室の上方奥壁が一段高くなる。その比高差は 0.08m 程度である。

玄　　門：残存していない。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

玄室と墓前域の境の底面に段差はなく、玄門の墓前域側底面で長さ 0.76m、幅 0.12m、深さ 0.03m の溝跡 1 を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。閉塞石等は残存していない。

〔墓前域〕

規　　模：玄門から墓前域の末端までの長さ 2.98m、上幅 0.58～0.96m、下幅 0.33～0.66m を測る。

形　　状：溝状の形状を呈する。

底　　面：玄門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側が高い。

【堆積層】　ST23 横穴墓を覆う堆積層は細別 4 層に分けた（第 172 図）。細別 1～4 層はいずれも自然堆積層である。人為的な整地層は確認されていない。最下層にあたる 4 層の玄室側で、天井崩落土とみられる地山ブロックが多く含まれていることから、ST23 は早い段階で天井が崩落したものと考えられる。

【出土遺物】墓前域に堆積する 4 層底面付近で土師器蓋（第 173 図 2）、玄室底面で鉄刀 1 点（第 173 図 1）と図示できなかった鉄刀破片 1 点･不明金属製品破片 1 点(その他不明小破片多数)が出土した(第 33 表)。図示した鉄刀は玄室奥壁付近に底面に据えられた状態で出土しており、原位置を保った状態での出土と判断される（第 172 図）。遺物の出土量は極めて少ないが、出土状況からみて、底面付近の墓前域 4 層と玄室の底面で出土した遺物は、ST23 の初葬時に使用された遺物と考えられる。

【まとめ】　ST23 横穴墓は、出土遺物と堆積層の状況から、造墓後 1 回の埋葬が実施され、その後間もなく、玄室天井が崩落し埋没したものと考えられる。

第33表　ST23横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体・破片	土師器 蓋	土師器 小計
墓前域	－	4層	個	1 (105)	1 (105)
			破		
合計		個体数(重量)		1 (105)	1 (105)
		破片数(重量)			
		総重量		(105)	1 (105)

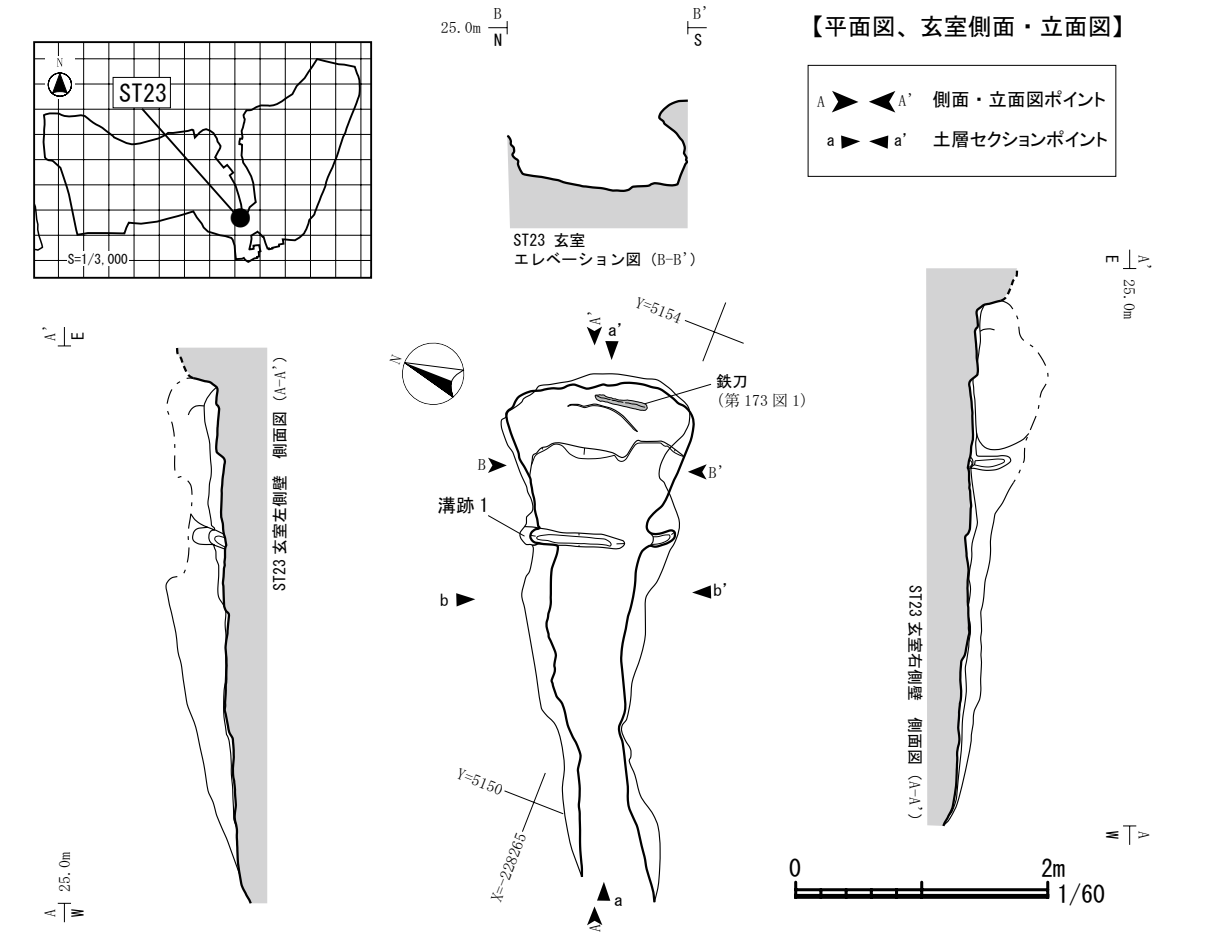
ST23では遺構間接合遺物なし

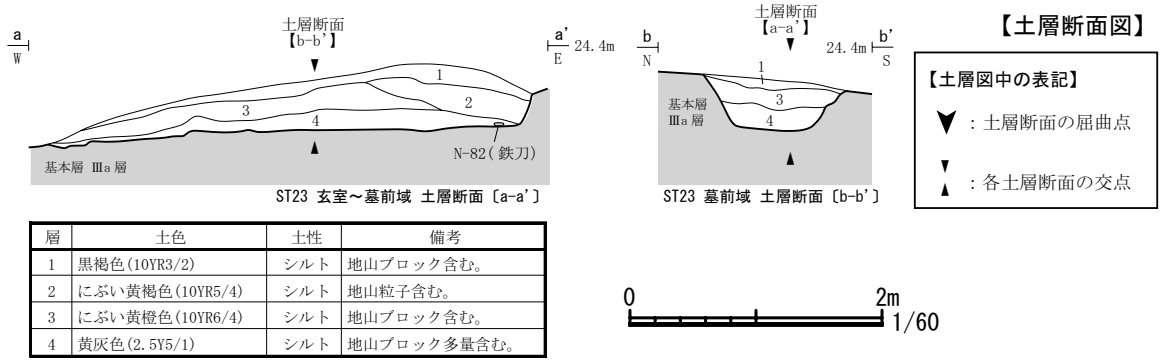
※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数（図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載・非掲載	金属製品 鉄刀	金属製品 不明鉄製品	金属製品 小計
玄室	－	4層	掲			
			非掲		1＋破片多数	1 ＋破片多数
		底面	掲	1		1
			非掲	1		1
器種別総合計		掲載遺物点数		1		1
		非掲載遺物点数		1	1＋破片多数	2 ＋破片多数
		総点数		2	1＋破片多数	3 ＋破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST23出土の不明小片の重量は5.8g)

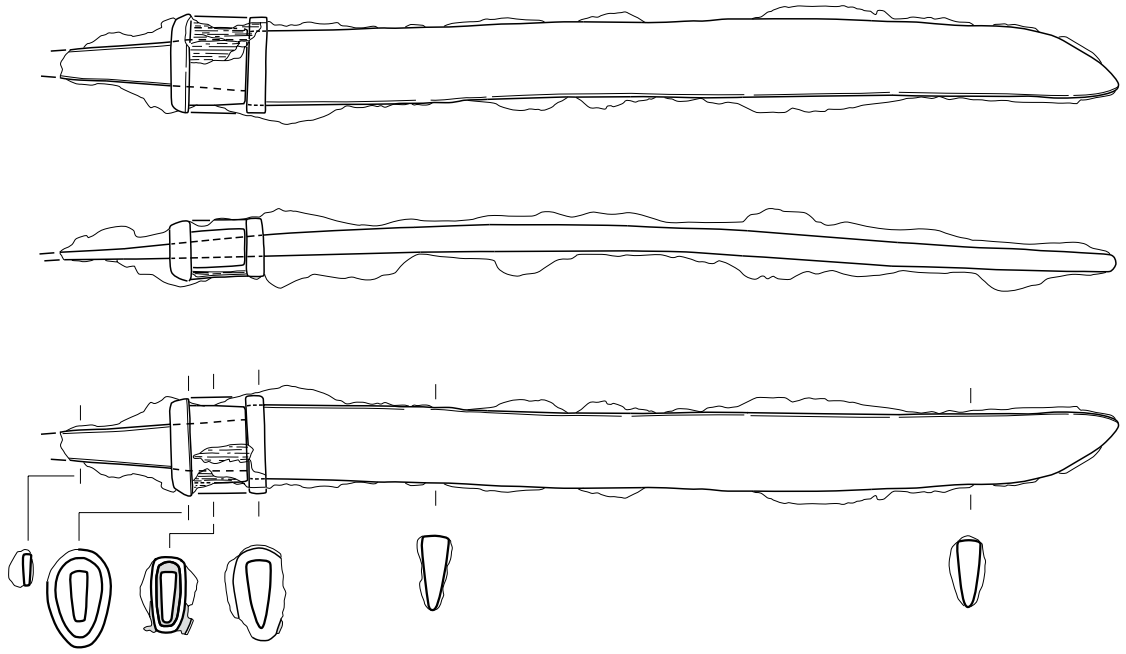




層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒子含む。
3	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック含む。
4	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	地山ブロック多量含む。

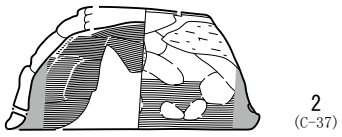
第172図　ST23 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図

玄室底面



No.	出土位置	細別層	種別・器種	特徴	登録	写真図版
1	玄室	底面	金属製品 鉄刀	【法量】[刀身]残存長41.9cm　[刃部]残存長34.4cm・幅2.9cm　[茎部]残存長7.5cm [鋒]長径3.0cm・短径1.4cm・幅2.2cm [鐔]長径3.9cm・短径2.5cm・厚さ0.8cm [責金具(鞘口)]長径3.6cm・残存短径2.0cm・幅0.7cm 【特記事項】フクラ切先・均等両関(直角)？・喰出鐔・木質残存(柄＋鞘) 柄木は鋒内部に至る 【残存部位】刀身・鋒・鐔・責金具(鞘口)・鞘木・柄木	N-82	306-7

墓前域



※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
2	墓前域	4層	土師器 蓋	【技法】外面：口縁部ヨコナデ(一部オサエ)・体部無調整(一部ヘラ削り・ナデ)・天井部ナデ 黒色処理 内面：口縁部ヨコナデ・体部～天井部ハケメ→ナデ・黒色処理 【法量】口径(9.5)cm・器高4.9cm・天井径(5.2)cm・器厚0.5～0.9cm 【特記事項】口縁部穿孔(外→内・2か所)	C-37	199-5 264-6

第173図　ST23 横穴墓 出土遺物

24号横穴墓（ST24）（第174図、第4分冊 写真図版77）

【検出位置】　A-2区西側の標高23～24mの丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側にはST19、南東側にはST23が隣接している。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。天井は全て崩落しており、玄室右側壁～奥壁のコーナー部分も残存していない。玄室入口は南西に向かって開口していたと考えられる。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）である。

【個別部位の特徴】（第174図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は3.51mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行0.83m、玄室の中央幅0.90m、前壁幅0.88m、を測る。床面積は約0.7㎡である。

平 面 形：隅丸方形を呈していたと考えられる。

天　　井：残存していない。

底　　面：平坦である。

玄　　門：残存していない。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.18m、玄室側の幅0.53m、墓前域側の幅0.56mを測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

玄室と墓前域の境の底面に段差はなく、玄門の墓前域側底面で長さ1.22m、幅0.12m、深さ0.07mの溝跡1を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。閉塞石等は残存していない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ2.50m、上幅0.58～0.96m、下幅0.33～0.66mを測る。

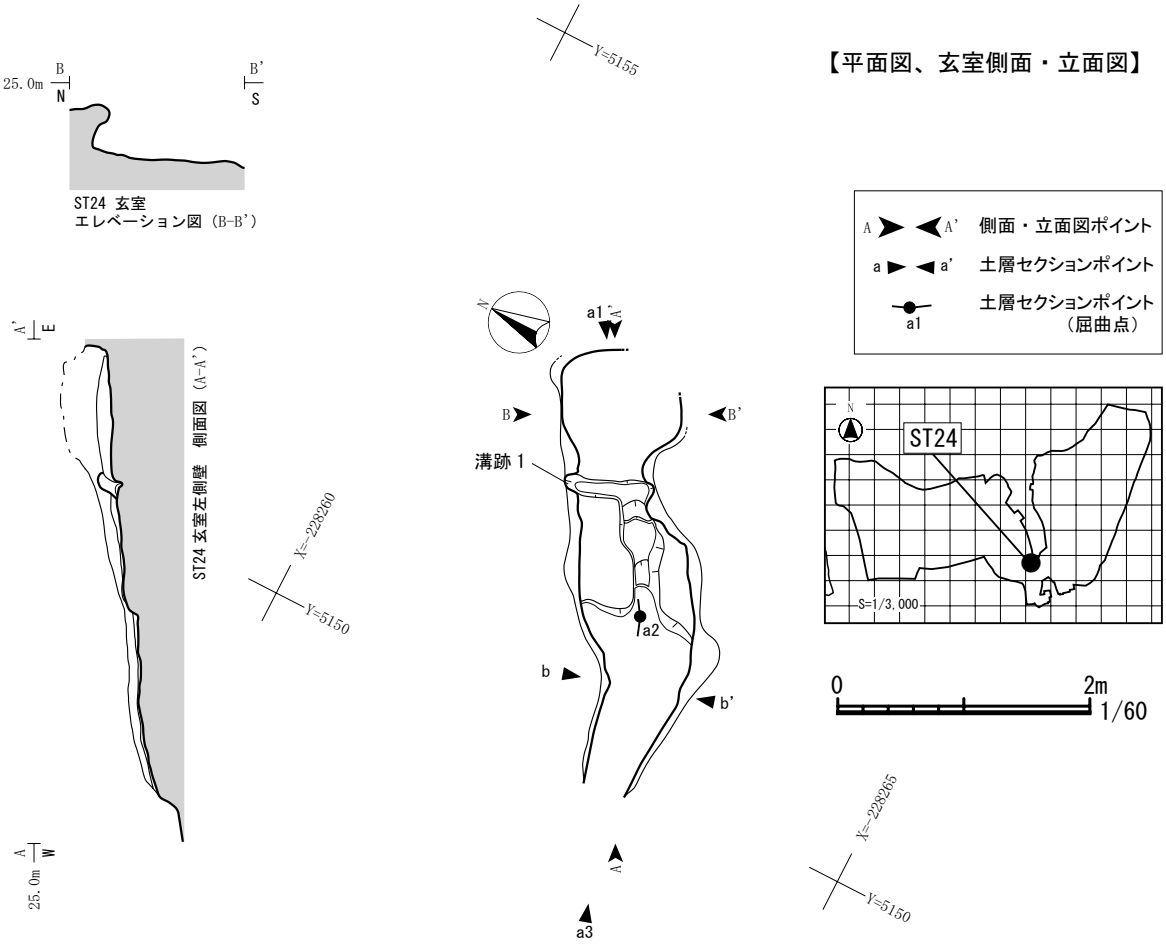
形　　状：溝状の形状を呈する。

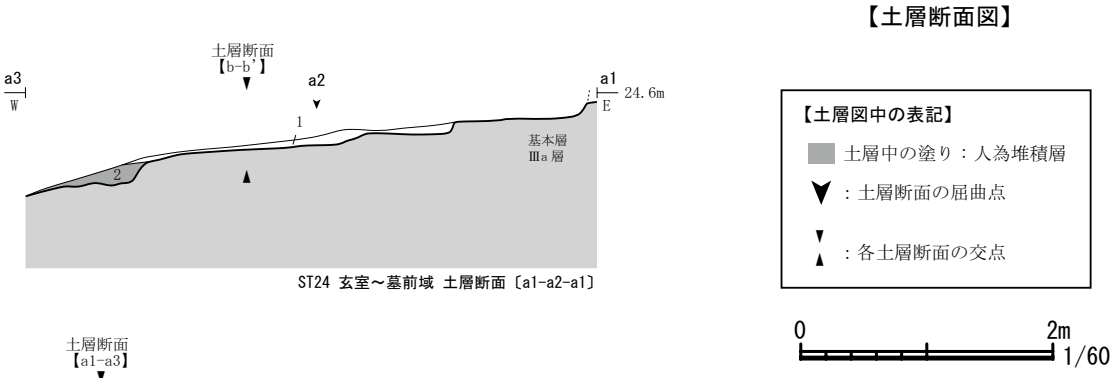
底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側が高い。中央部に溝状の窪みがあり、溝跡1と接続する。

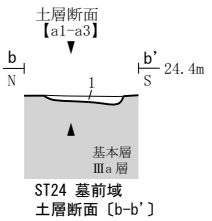
【堆積層】　ST24横穴墓を覆う堆積層は細別2層に分けた（第174図）。細別1層は自然堆積層、2層は地山ブロックを多量含む人為堆積層である。2層は造墓時の掘削廃土を敷き詰めた整地層とみられる。

【出土遺物】出土していない。

【まとめ】　ST24横穴墓は遺構の残存状態が不良で、遺物も出土していないため、その詳細は不明である。







層	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック含む。
2	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山ブロック多量含む。 人為堆積層（整地層）。

第174図　ST24 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図

25号横穴墓（ST25）（第175～181図、第34表、第4分冊 写真図版78・79）

【検出位置】　A-2区西側の標高21～23mの丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側にはST26、南東側にはST27が隣接している。

【重複関係】　ST26と重複し、これより新しい（ST26→ST25）。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室天井の大部分は残存していない。墓前域の末端は発掘区外に延びる。玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室天井上部がシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）、それより下部の範囲が砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）である。

【個別部位の特徴】（第176図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は6.42mである。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行2.15m、玄室の中央幅1.93m、前壁幅1.62m、を測る。床面積は約3.3㎡である。

平 面 形：不整形である。奥壁と両側壁のコーナーがなく、奥壁との区別が困難である。

天　　井：大部分が崩落しており、右側壁付近の天井がわずかに残存している。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.2m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置し、幅0.51mを測る。立面形は不明である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

そ の 他：奥壁の砂質の壁面(基本層Ⅲb 層)でトンネル状の掘り込みを確認した。奥壁の掘り込みは、ST54の玄室左側壁まで至っているとみられる。遺物は出土しておらず、規模からみて人為的なものでなく、小動物等によって掘り込まれた痕跡と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.75m、玄室側の幅0.51m、墓前域側の幅0.60mを測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ1.52m、幅0.14～0.26m、深さ0.06mの溝跡1を確認した。溝跡1の上部には、0.47×0.14×0.10m（13.2kg）～0.40×0.30×0.25m（66.0kg）の角礫6個(総重量224.6kg)が残存しており､溝上面から高さ0.3mまで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は全て花崗閃緑岩である（第34表4)。溝跡1と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の発掘区際までの長さ3.52m、上幅2.2～2.5m、下幅0.78～1.20mを測り、末

端は発掘区外に延びる。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.4m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と発掘区際の比高差は 0.4m 程度である。

【堆積層】 ST25 横穴墓を覆う堆積層は細別 16 層・大別 3 層に分けた（第 175 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～7 層）は ST25 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別 2 層の層理面（細別 2 層・6 層底面）で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。なお、この段階で、ST25 の玄室天井は崩落していたと考えられる。

〔大別 2・3 層〕

大別 2 層（細別 8～13 層）は ST25 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 3 層（細別 14～16 層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層のうち、細別 12 層には地山ブロック片（大）が多く含まれる。この段階で玄室周辺の天井が崩落したと考えられる。大別 3 層は、横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、玄室に堆積する大別 3 層中（整地層内）には金属製品が含まれる。

【出土遺物】土師器 14 点（8 個体、破片 6 点）、須恵器 4 点（2 個体、破片 2 点※うち破片 1 点は遺構間接合遺物）、金属製品 6 点が出土した（第 34 表 1～3）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる。土師器坏 1 個体・鉢 3 個体・高坏 4 個体、須恵器甕 2 個体、刀子 1 点・鉄鏃 1 点の合計 12 点を図示した（第 178～181 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 2 層・6 層底面）出土遺物**、**B：大別 2 層（細別 13 層底面）出土遺物**、**C：大別 3 層（細別 15・16 層）出土遺物**の 3 群に分かれる。加えて、ST25 では、別の横穴墓（ST27）で破砕された須恵器破片の一部が ST25 に混入したと考えられる遺物 1 点（第 34 表 2）も出土している。この須恵器破片は遺構間で接合する遺物であり、**D：墓前域大別 1 層（検出面）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST25 関連遺物は、古い順から C→B→A→D の 4 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層（細別 15・16 層）出土遺物〕（第 181 図）

大別 3 層（細別 14～16 層）のうち、玄室内の堆積層（細別 15・16 層）内から出土した遺物である（前項 C に相当）。刀子 1 点（第 181 図 4）と不明鉄製品破片 3 点が出土した（第 34 表 3）。大別 3 層は人為堆積層（整地層）であり、本層出土の遺物については「整地前に玄室で使用された遺物」「整地時に意図的に整地層内へ埋納した遺物」の両者の可能性が想定される。本層出土の遺物数が少なく、かつその出土位置にもまとまりがないことから、後者の可能性が高いと考えられる。

〔大別 2 層（細別 13 層底面）出土遺物〕（第 180・181 図）

大別 2 層（細別 8～13 層）のうち、墓前域に分布する細別 13 層の底面〔＝大別 3 層（細別 15 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 B に相当）。土師器坏 1 個体（第 180 図 1）・鉢 3 個体（第 180 図 6、第 181 図 1・2）・高坏 4 個体（第 180 図 2～5）、鉄鏃 1 点（第 181 図 3）と図示できなかった土師器坏破片・不明鉄製品破片が出土した（第 34 表 1・3）。これらの遺物は、墓前域の大別 2 層底面付近で実施された墓前祭祀に伴う遺物と考えられる。前述のとおり、大別 3 層出土遺物もこの段階に属する可能性が高い。この段階の ST25 は、大別 3 層による整地が実施された直後と考えられ、本段階の墓前祭祀は ST25 の初

葬に関連するものと推定される。

〔大別１層（細別２・６層底面）出土遺物〕（第 178・179 図）

大別１層（細別 1～7 層）のうち、墓前域の細別２層底面と玄室の細別６層底面で出土した遺物である（前頁 A に相当）。須恵器甕２個体（第 178 図 1・第 179 図 1）が出土した（第 34 表 1)。図示した須恵器甕は、墓前域で破砕された状態で出土し、接合する破片が玄室でも確認されている（第 177 図)。墓前域での須恵器破砕・玄室への破片散布が行われた痕跡とみられる。これらの遺物は大別１層底面付近で実施された墓前祭祀に伴う遺物と考えられる。大別１層底面以下には整地層が認められないことから、大別２層堆積後の窪地上面をそのまま利用して祭祀行為が実施されたと推定される。

堆積土の状況から、この段階の ST25 については、玄室の天井は崩落し、その範囲が窪んだ状態だったと想定される。したがって、大別１層底面での墓前祭祀は追葬と関連しないものとみておきたい。

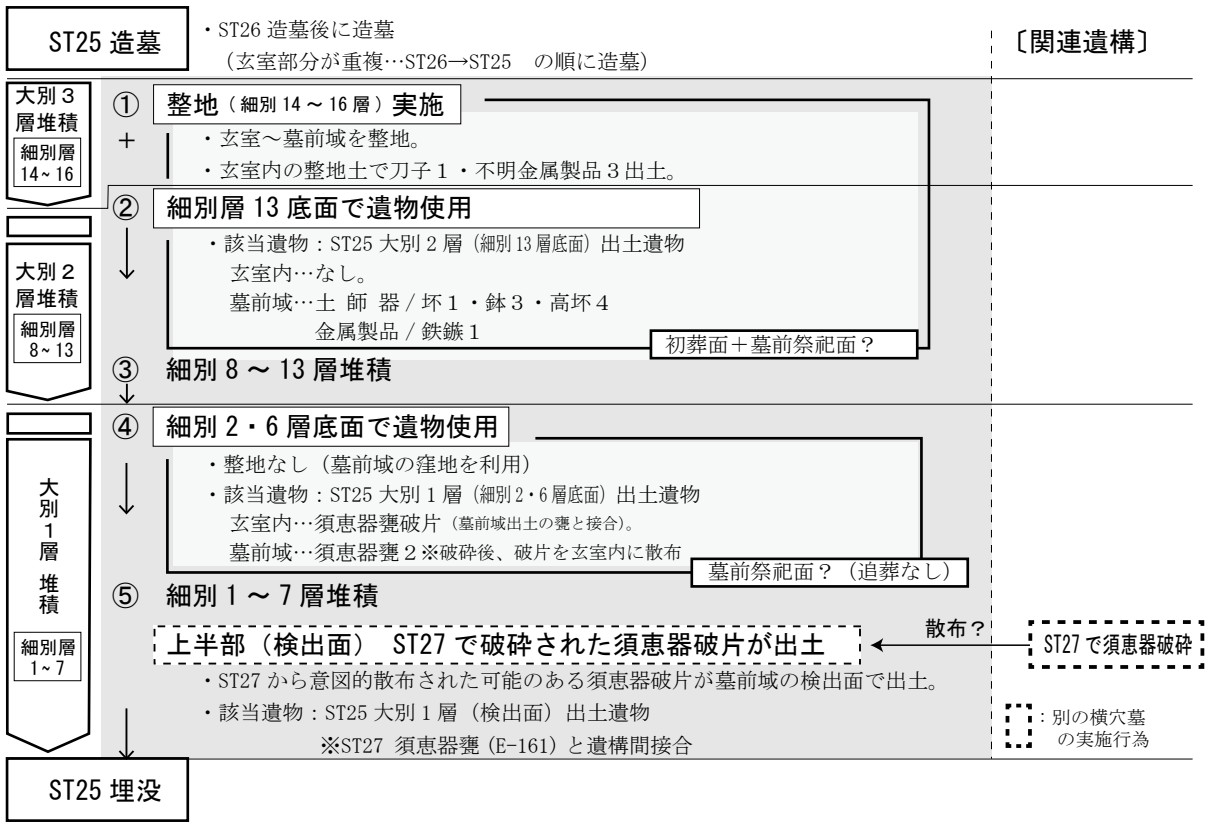
〔大別１層（検出面）出土遺物〕

大別１層（細別 1～7 層）のうち、その上半部にあたる墓前域の検出面から出土した遺物である（前頁 D に相当)。須恵器甕破片１点が出土した（第 34 表 2)。この須恵器甕破片は、別の横穴墓で破砕された後、ST25 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST27 由来の須恵器甕**(E-161／第 192 図 1)**と接合する（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST27 は、ST25 と隣接する横穴墓であり、「単なる遺物流入」「意図的な散布」の両者の可能性が考えられるが、この須恵器甕（E-161）と接合する破片は、ST25 以外の遺構（ST2・18）でも出土していることから、ST25 出土の甕破片についても「ST27 から意図的に散布されたもの」と想定しておきたい。

【まとめ】

ST25 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST25 造墓・使用・埋没の経過〕



第34表　ST25横穴墓　出土遺物一覧

1．土器類－遺構単独出土－

種別				土師器				須恵器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／個体／破片	坏	鉢	高坏	小計	甕	小計
墓前域	1	2層	個					1 (9,320)	1 (9,320)
			破					1 (5)	1 (5)
		2層(墓前域)+6層(玄室)	個					1 (8,400)	1 (8,400)
			破						
	2	13層	個		2 (490)	4 (790)	6 (1,280)		
			破	6 (65)			6 (65)		
		13層・15層上面	個	1 (230)			1 (230)		
			破						
		15層上面	個		1 (360)		1 (360)		
			破						
総合計	個体数(重量)			1 (230)	3 (850)	4 (790)	8 (1,870)	2 (17,720)	2 (17,720)
	破片数(重量)			6 (65)			6 (65)	1 (5)	1 (5)
	総重量			(295)	(850)	(790)	14 (1,935)	3 (17,725)	(17,725)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (15,345)	◆ST2　6層(墓前域) ◆ST18　検出面(墓前域) ◆ST25　検出面(墓前域) ◆ST27　4・6・7・9・10層、13層上面(玄室・墓前域)	ST27	◆ST2:1点 ◆ST18:1点 ◆ST25:1点 ★ST27:139点	E 161	第192図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST25出土須恵器の総数
(表34-1)遺構単独出土　2個体＋破片1点
＋
(表34-2)遺構間接合遺物　破片1点　＝ 4 点

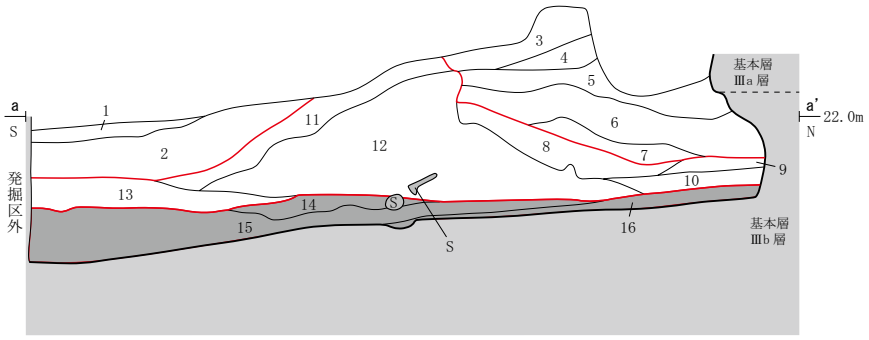
3．金属製品

種別				金属製品			
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／掲載／非掲載	刀子	鉄鏃	不明鉄製品	小計
玄室	3	15層	掲	1			1
			非掲				
		16層	掲				
			非掲			3	3
墓前域	2	13層	掲		1		1
			非掲			1	1
器種別総合計	掲載遺物点数			1	1		2
	非掲載遺物点数					4	4
	総点数			1	1	4	6

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

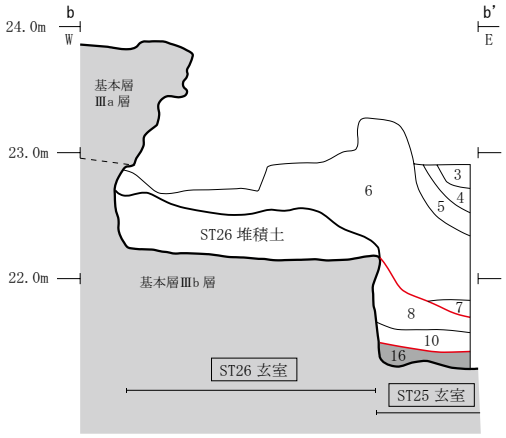
4．閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	47	14	10	13.2
花崗閃緑岩	角礫	36	25	16	24.0
花崗閃緑岩	角礫	33	25	15	31.0
花崗閃緑岩	角礫	43	25	14	33.6
花崗閃緑岩	角礫	34	26	20	56.8
花崗閃緑岩	角礫	40	30	25	66.0
合計:6点／重量(kg)＝					224.6

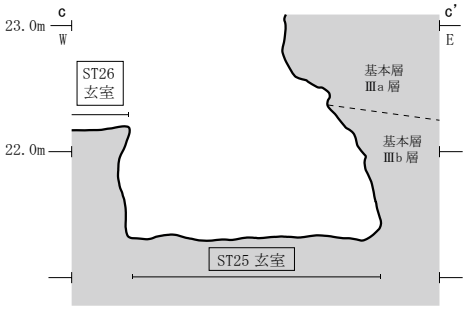


ST25 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕

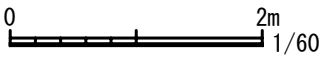
【土層図中の表記】
土層中の塗り：人為堆積層
分層線の赤線：祭祀想定面
S ：礫



ST25 玄室 土層断面〔b-b'〕

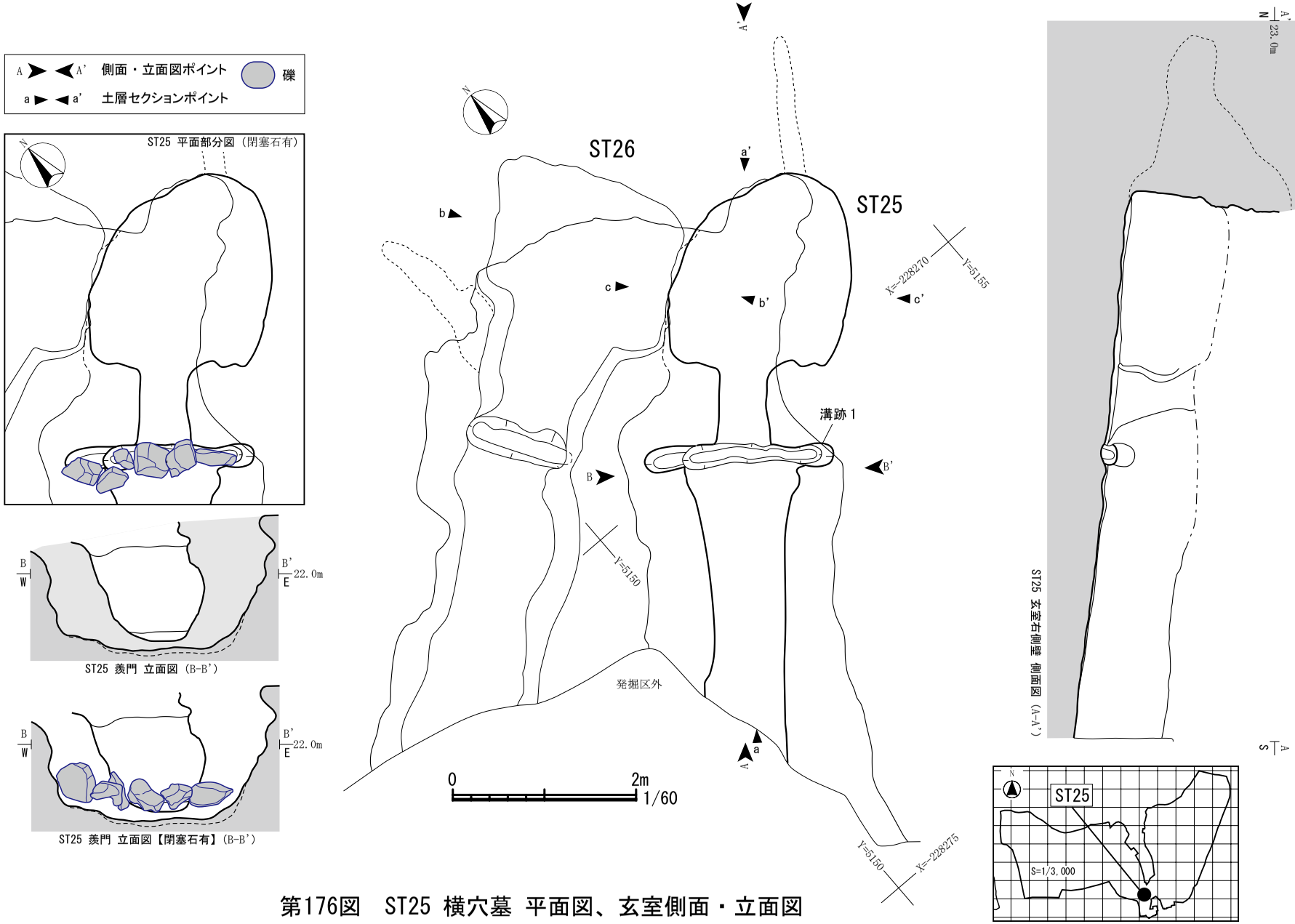


ST25 玄室 エレベーション図〔c-c'〕

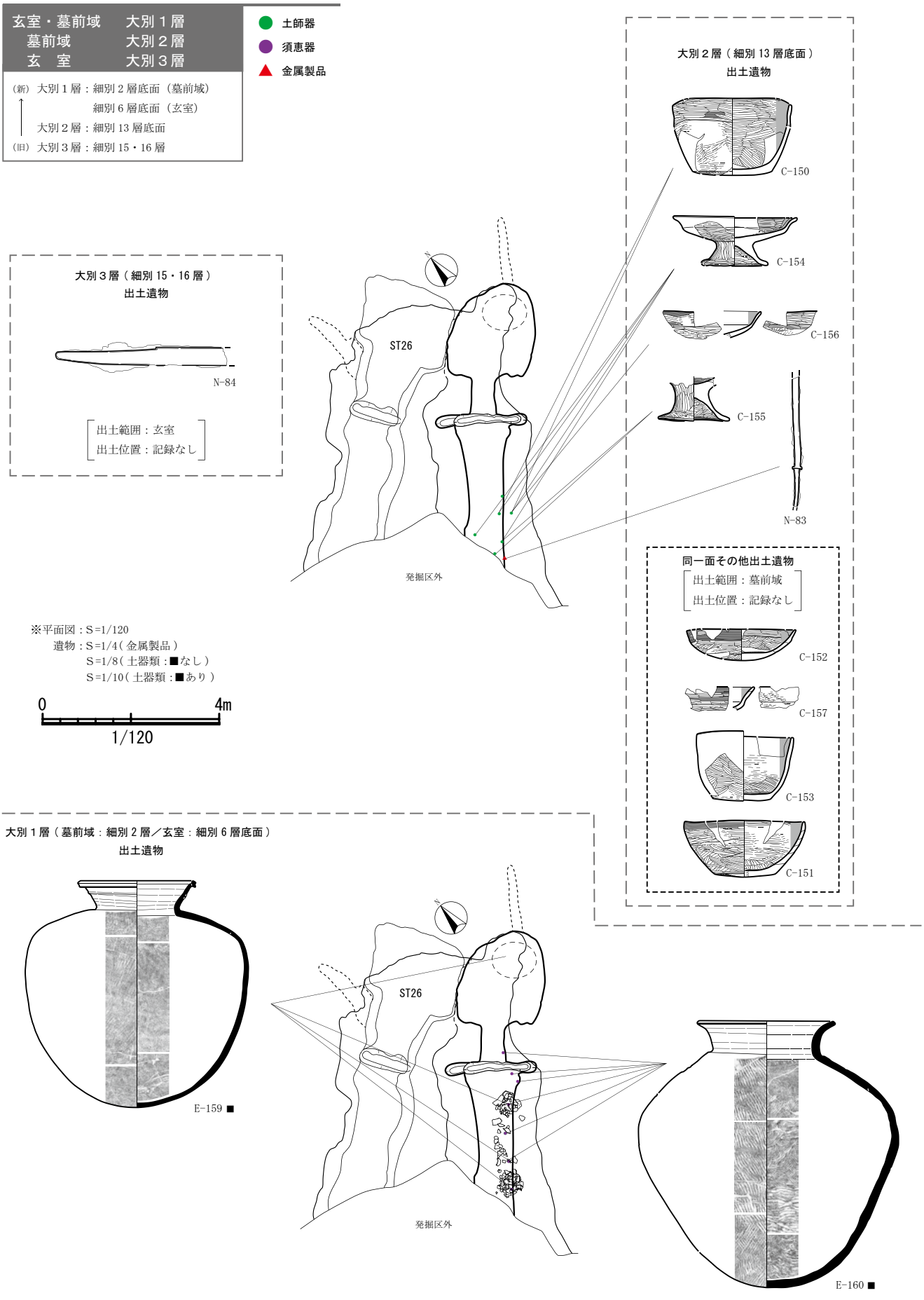


細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロック多く含む。	1	自然堆積層
2	黒色（10YR2/1）	シルト	炭化物片少量含む。 層底面より須恵器多量出土。		
3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック含む。		
4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック少量、炭化物片含む。		
5	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック含む。		
6	灰黄褐色（10YR6/2）	シルト	地山ブロック多く含む。		
7	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト	地山ブロック多く含む。		
8	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。	2	自然堆積層
9	黄褐色（10YR5/6）	シルト質砂	炭化物片少量含む。		
10	黄褐色（10YR5/8）	シルト質砂	壁際に黒色砂多く含む。		
11	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。		
12	灰黄褐色（10YR6/2）	シルト	地山ブロック（大）多く含む。		
13	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック・炭化物片含む。		
14	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	地山ブロック（小）多量含む。	3	人為堆積層（整地層）
15	明黄褐色（10YR6/8）	シルト	地山ブロック（小）多量含む。		
16	明黄褐色（10YR6/6）	シルト質砂	地山粒子（砂質土）多量含む。		

第 175 図　ST25 横穴墓 土層断面図

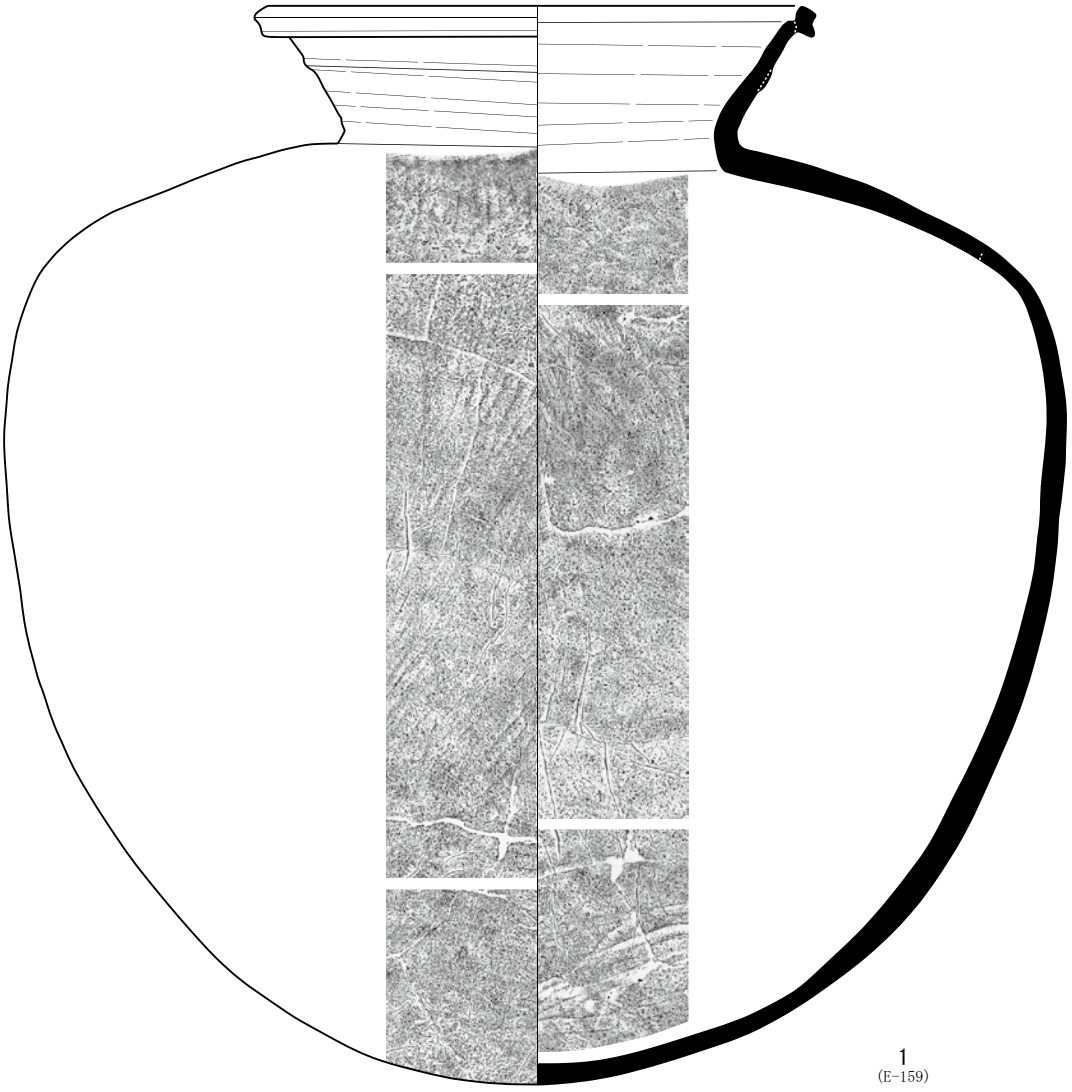


第176図　ST25 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



第177図　ST25 横穴墓 遺物出土状況図

墓前域　大別１層

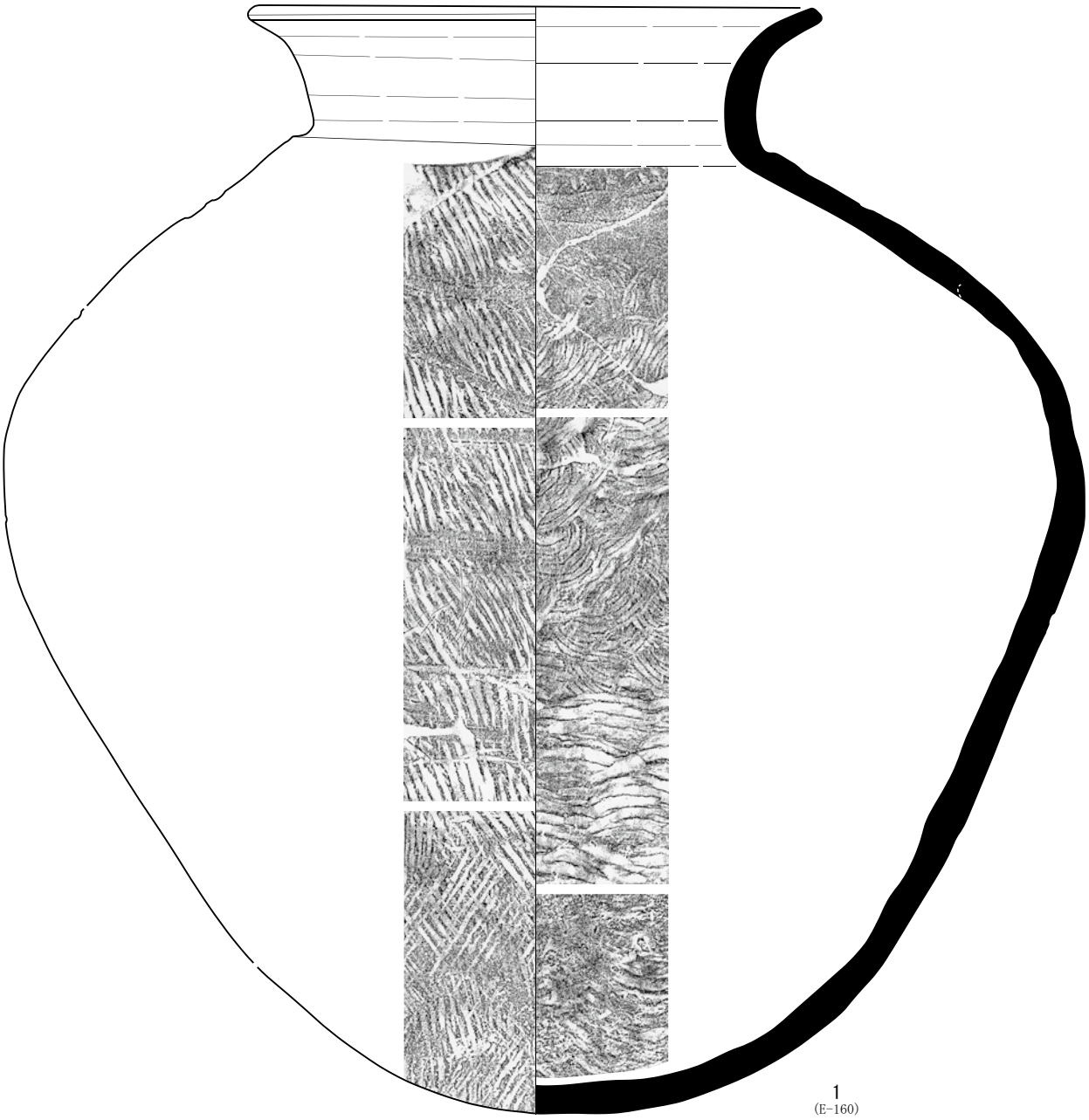


0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室 ＋ 墓前域	2層(墓前域) 6層(玄室)	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ／突帯貼付・体部～底部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部～底部当て具痕(平行？)→ナデ 【法量】口径21.1cm・器高42.8cm・器厚0.4～1.0cm	E-159	247-1 270-5

第178図　ST25 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

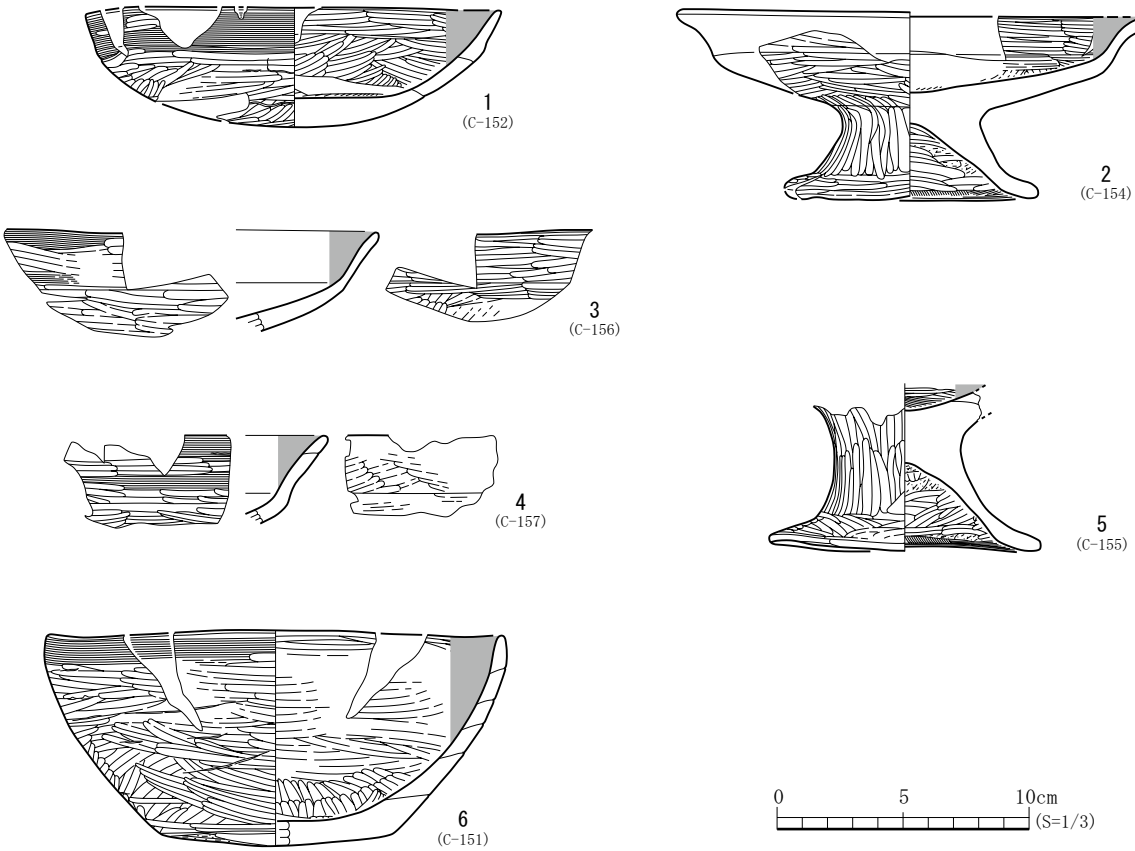


0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	2層	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部上半平行タタキ→ナデ？・体部下半～底部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径25.3cm・器高50.7cm・器厚0.8～1.6cm	E-160	247-2 270-6 270-7

第179図　ST25 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層

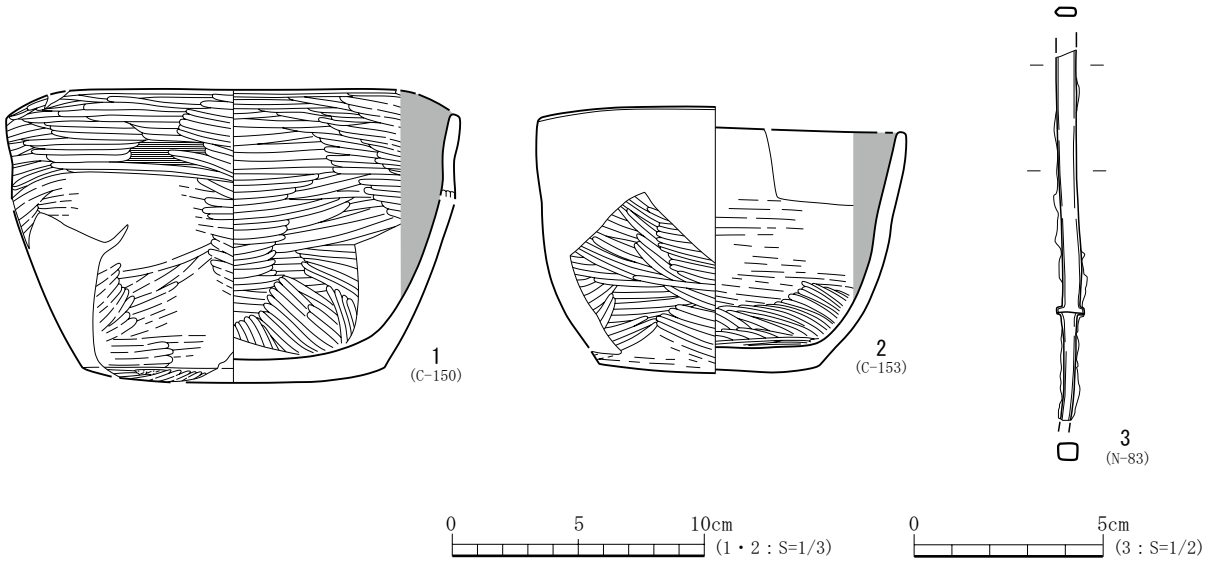


※(　)内：推定値

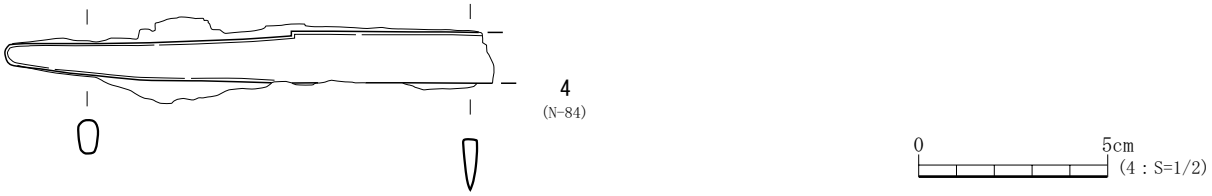
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	13層 15層上面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径16.3cm・器高4.8cm・器厚0.4～1.2cm	C-152	199-9
2	墓前域	13層	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ [脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 [脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ナデ 【法量】坏部口径(18.4)cm・器高(7.3)cm・脚裾部径10.1cm・器厚0.4～1.2cm	C-154	213-5
3	墓前域	13層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.3～0.7cm	C-156	213-11
4	墓前域	13層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.4～0.6cm	C-157	213-10
5	墓前域	13層	土師器 高坏	【技法】 外面：[脚部]柱部・裾端部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ・黒色処理 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理 [脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ 【法量】脚裾部径10.8cm・残存高6.5cm・器厚0.4～1.4cm	C-155	213-6
6	墓前域	13層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(17.8)cm・器高8.6cm・底径(9.2)cm・器厚0.5～1.3cm	C-151	199-7

第180図　ST25 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層



玄室　大別３層



※(　) 内：推定値
※鉄鏃観察表　［全長］=A+B+C／［鏃長］=A+B

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	13層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(17.4)cm・器高11.7cm・底径(12.0)cm・器厚0.5～1.3cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-150	199-6
2	墓前域	15層上面	土師器 鉢	【技法】外面：口縁端部面取り・口縁部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(14.6)cm・器高10.6cm・底径8.8cm・器厚0.5～0.9cm 【特記事項】赤彩残存	C-153	199-8

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
3	墓前域	13層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃？	残存 9.8	0.7	残存 7.0	—	残存 7.0	残存 2.8	［茎関］棘関a	N-83	316-2

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
4	玄室	15層	金属製品	刀子	【法量】［刀身］残存長12.9cm　［刃部］残存長5.3cm・幅1.4cm　［茎部］長さ7.6cm 【特記事項】片関(背側：直角)・鉄製	N-84	313-4

第181図　ST25 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類・金属製品－

26 号横穴墓（ST26）（第 182～184 図、第 35 表、第 4 分冊 写真図版 78・79）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 21～23m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST23、南東側には ST25 が隣接している。

【重複関係】 ST25 と重複し、これより古い（ST26→ST25）。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に横穴墓の範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室天井と右側壁の大部分は残存していない。墓前域の末端は発掘区外に延びる。玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室天井上半部がシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲が砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 182 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 6.54m である。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.58m、玄室の奥壁幅 2.00m、中央幅 2.01m、前壁幅 1.94m、左側壁幅 1.29m を測る。床面積は約 3.1 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥行に対し幅が若干長い。

天　　井：残存していない。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置し、幅 1.20m を測る。立面形は不明である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 1.26m、玄室側の幅 1.20m、墓前域側の幅 0.92m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

そ の 他：左壁の砂質壁面（基本層Ⅲb 層）でトンネル状の掘り込みを確認した。遺物は出土しておらず、規模からみて人為的なものでなく、小動物等によって掘り込まれた痕跡と考えられる。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.18m、幅 0.32～0.40m、深さ 0.13m の溝跡 1 を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。他の横穴墓でみられた閉塞石は 1 点も残存していなかった。閂穴等も検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の発掘区際までの長さ 3.70m、上幅 1.3～1.8m、下幅 0.81～1.05m を測り、末端は発掘区外に延びる。底面から上端までの高さは、羨門付近で 0.9m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と発掘区際の比高差は 0.3m 程度である。

【堆積層】　ST26 横穴墓を覆う堆積層は細別 10 層・大別 2 層に分けた（第 183 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～8 層）は ST26 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。細別 5～8 層には基盤層起源の地山粒子・ブロックが多く含まれる。天井崩落土とみられる。細別 1～4 層は天井崩落後の自然堆積層と考えられる。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 9・10 層）は ST26 の玄室～墓前域に堆積する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層は、横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で少量の遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

【出土遺物】土師器 2 点（2 個体）、玉製品 11 点が出土した（第 35 表）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる。土師器坏 1 個体・鉢 1 個体、石製丸玉 5 点・臼玉 1 点、土製丸玉 3 点・臼玉 2 点の合計 13 点を図示した（第 184 図）。

出土遺物は、出土層位から **A：大別 1 層（細別 4 層）出土遺物**、**B：大別 2 層上面（細別 10 層上面）出土遺物**の 2 群に分かれる。その新旧関係は B が古く、A が新しい。以下、出土層位毎に記載する。

〔大別 2 層上面（細別 10 層上面）出土遺物〕

大別 2 層（細別 9・10 層）のうち、玄室内の細別 10 層（整地層）の上面から出土した遺物である（前項 B に相当）。石製丸玉 5 点（第 184 図 8～12）・臼玉 1 点（第 184 図 13）、土製丸玉 3 点（第 184 図 3～5）・臼玉 2 点（第 184 図 6・7）が出土したのみである（第 35 表）。ST26 の初葬で使用された遺物と推定される。

なお、墓前域の同一面にも整地層が認められるが、遺物が出土していないため、この初葬に関連する墓前祭祀が行われたかは不明である。

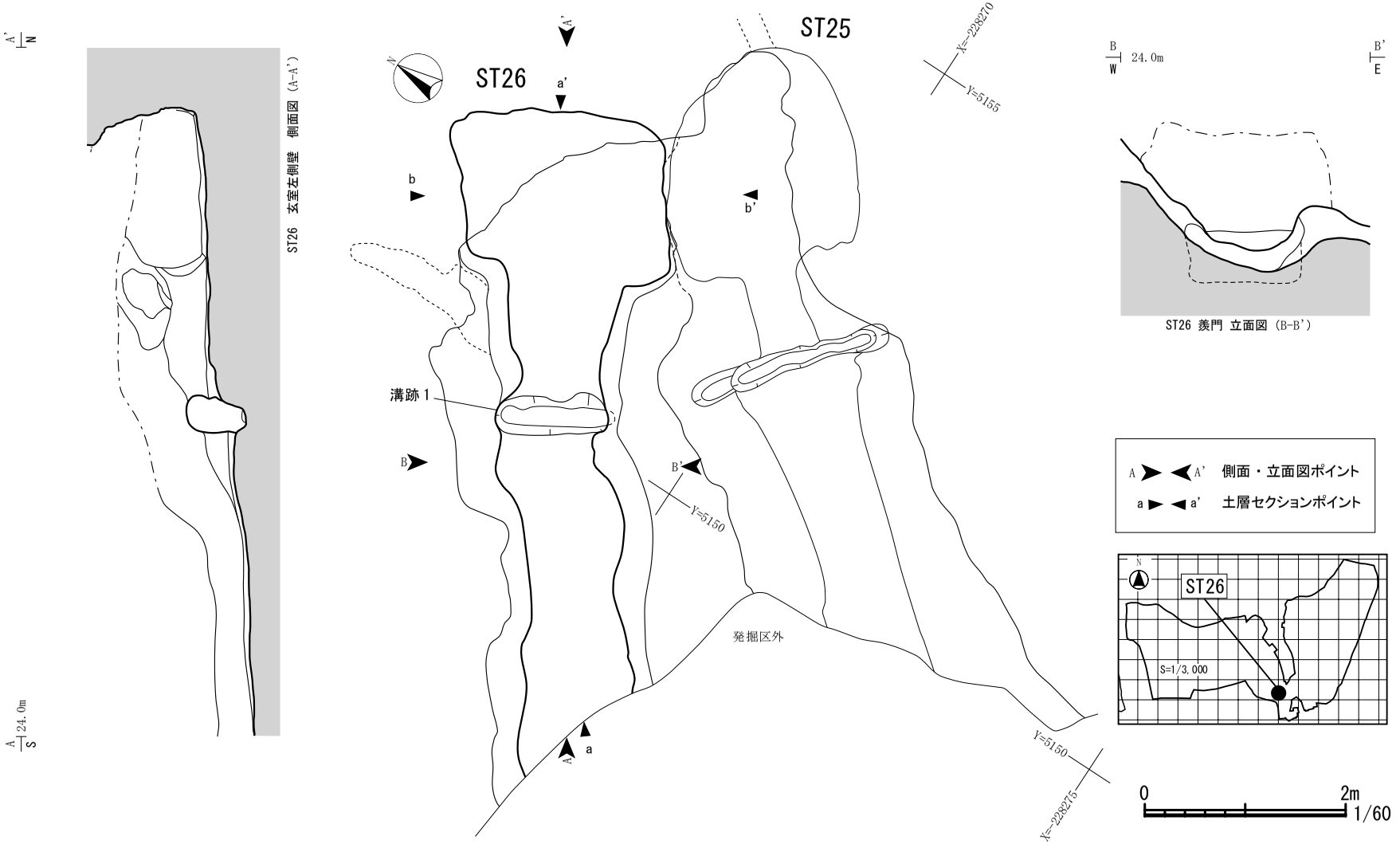
〔大別 1 層（細別 4 層）出土遺物〕

大別 1 層（細別 1～8 層）のうち、墓前域に分布する細別 4 層の堆積土で出土した遺物である（前頁 A に相当）。土師器坏 1 個体（第 184 図 1）・鉢の破片 1 点（第 184 図 2）が出土した（第 35 表）。これらの遺物は、玄室の天井崩落後の堆積層から出土している。本層で出土した遺物はこの破片 2 点のみであり、ST26 に伴う遺物かは判断ができない。

【まとめ】

ST26 横穴墓は、出土遺物と堆積層の状況から、造墓後 1 回の埋葬が実施されたものと考えられる。その後、早い段階で玄室～羨道の天井が崩落し埋没したとみられる。

なお、ST26 と重複する ST25 は少なくとも玄室天井崩落後に造墓されたと考えられる。

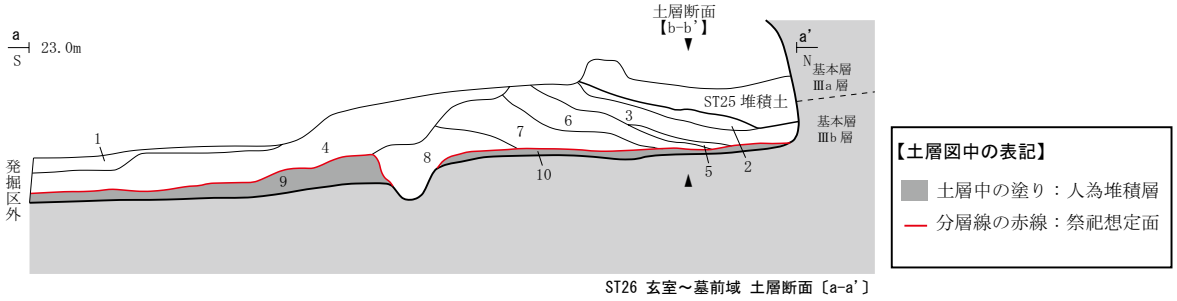


第182図　ST26 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

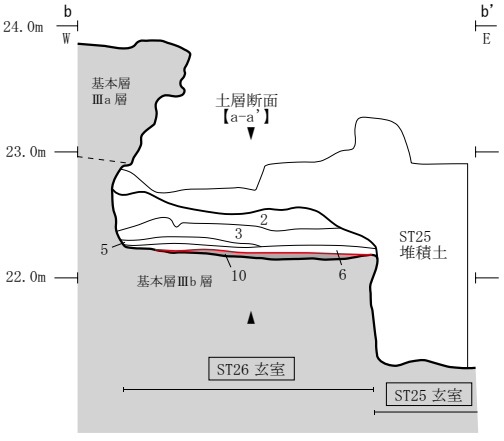
第35表　ST26横穴墓　出土遺物一覧

種別				土師器			玉製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 個体／破片	坏	鉢	小計	石製 丸玉	石製 臼玉	土製 丸玉	土製 臼玉	小計
玄室	1	10層上面	個				5 (4.7)	1 (0.4)	3 (0.9)	2 (0.6)	11 (6.6)
			破								
墓前域	1	4層	個	1 (200)	1 (15)	2 (215)					
			破								
総合計		個体数(重量)		1 (200)	1 (15)	2 (215)	5 (4.7)	1 (0.4)	3 (0.9)	2 (0.6)	11 (6.6)
		破片数(重量)									
		総重量		(200)	(15)	2 (215)	(4.7)	(0.4)	(0.9)	(0.6)	11 (6.6)

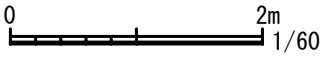
※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。



ST26 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕



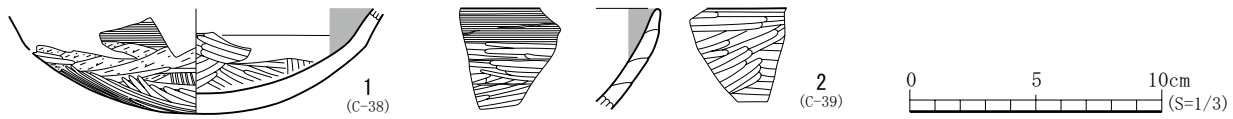
ST26 玄室 土層断面〔b-b'〕



細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	炭化物片微量含む。		
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物片含む。		
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック含む。炭化物片微量含む。		
5	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	砂質土多く含む。		
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物片少量含む。		
7	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山ブロック多く含む。		
8	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック（大）含む。		
9	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	地山ブロック（小）多量含む。	2	人為堆積層（整地層）
10	褐色 (10YR4/6)	シルト質砂	地山ブロック（小）多量含む、炭化物片含む。		

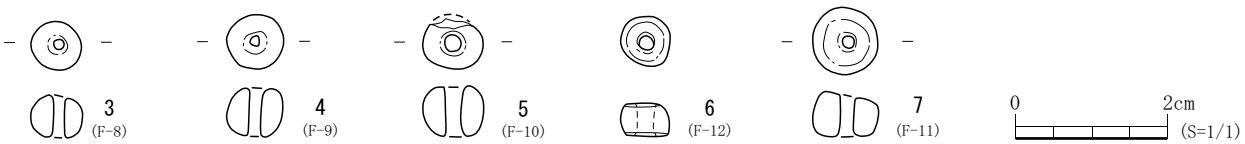
第 183 図　ST26 横穴墓 土層断面図

墓前域　大別１層



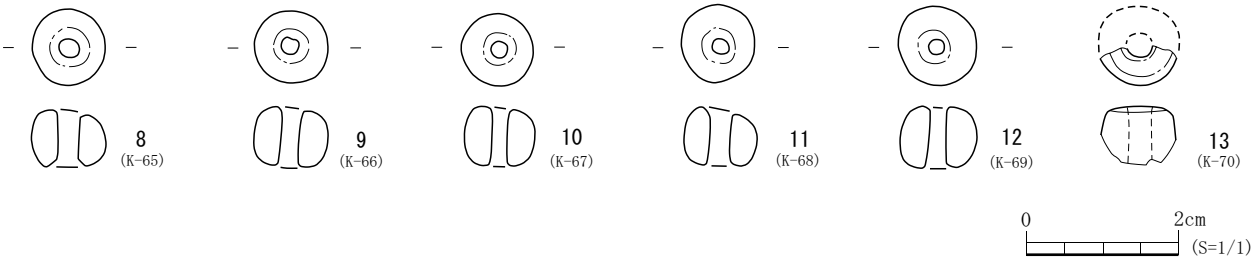
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ハケメ→ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】残存高4.2cm・器厚0.5～0.9cm	C-38	199-10
2	墓前域	4層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.3～0.6cm	C-39	199-11

玄室　大別２層上面



※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別	器種	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	質量(g)	特記事項	登録	写真図版
3	玄室	10層上面	土製品	丸玉	0.65	－	0.55	0.15	0.2		F-8	275-23
4	玄室	10層上面	土製品	丸玉	0.75	－	0.65	0.15	0.4		F-9	275-24
5	玄室	10層上面	土製品	丸玉	(0.8)	－	0.65	0.15	0.3	一部欠損	F-10	275-16
6	玄室	10層上面	土製品	臼玉	0.65	－	0.45	0.20	0.1		F-12	275-25
7	玄室	10層上面	土製品	臼玉	0.85	－	0.60	0.15	0.5		F-11	275-30



No.	出土位置	細別層	種別	器種	材質	全長(cm)	最大幅(cm)	最少幅(cm)	最大厚(cm)	最小厚(cm)	孔径(cm)	質量(g)	登録	写真図版
8	玄室	10層上面	石製品	丸玉	片岩	1.00	－	－	0.75	－	0.30	1.1	K-65	275-17
9	玄室	10層上面	石製品	丸玉	緑色片岩	1.00	－	－	0.80	－	0.20	1.0	K-66	275-18
10	玄室	10層上面	石製品	丸玉	緑色片岩	0.95	－	－	0.80	－	0.20	0.9	K-67	275-19
11	玄室	10層上面	石製品	丸玉	片岩	1.05	－	－	0.80	－	0.25	0.7	K-68	275-20
12	玄室	10層上面	石製品	丸玉	片岩	1.05	－	－	0.80	－	0.20	1.0	K-69	275-21
13	玄室	10層上面	石製品	臼玉？	片岩	1.00	－	－	0.80	－	0.30	0.4	K-70	275-22

第184図　ST26 横穴墓 出土遺物

27 号横穴墓（ST27）（第 185～194 図、第 36 表、第 4 分冊 写真図版 80～82）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 21～23m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST25、南東側には ST34 が隣接している。

【重複関係】　墓前域の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室～羨道の天井は残存していない。墓前域の末端は発掘区外に延びる。玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室上半部がシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲が砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 186 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 10.02m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.16m、玄室の中央幅 2.12m、奥壁幅 2.00m、前壁幅 2.04m、左側壁幅 1.79m、右側壁幅 2.25m を測る。床面積は約 4.3 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：残存していない。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置し、幅 0.52m を測る。立面形は不明である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：溝跡 1 と小穴 4 基を確認した。溝跡 1 は玄室掘方底面の奥壁～両側壁の壁際、小穴 1～4 は玄室掘方底面直上に敷き詰められた整地層（細別 19 層）の上面で見つかっており、溝跡 1 と小穴 1～4 の両者には時期差がある。溝跡 1 が古く、小穴 1～4 が新しい。溝跡 1 は幅 0.15～0.25m、深さ 0.03～0.05m を測る。小穴 1～4 は直径 0.3～0.4m、深さ 0.2m の楕円形を呈する小穴で、玄室奥壁のコーナーと両側壁の中央付近の壁際に位置する。このうち、奥壁コーナー部分に小穴 1・3 では直径 0.2m ほどの柱痕跡を確認している。小穴 1～4 の掘り込み面は整地層にあたる細別 19 層上面であり、横穴墓に伴う遺構と考えられる。

そ の 他：玄室奥壁コーナー付近と右側壁の壁面で小穴 5～9 を確認した。小穴 5・6・8 が玄室底面から高さ 1.3m、小穴 7・9 が高さ 0.5m の地点に位置する。いずれも壁面に対し横方向に掘り込まれており、掘方の形状は円形である。その規模は、小穴 5 が直径 0.25m・奥行 0.90m、小穴 6 が直径 0.25～0.30m・奥行 0.63m、小穴 7 が直径 0.25～0.30m・奥行 0.15m、小穴 8 が直径 0.15～0.25m・奥行 0.57m、小穴 9 が直径 0.27～0.30m・奥行 0.13m を測る。玄室壁面精査の過程で堆積層の記録をとらず掘り上げてしまったため、柱痕跡等の有無は確認できていない。平面的にみて、玄室整地層（細別 19 層）上面で確認した小穴 1～4 と位置が近いことから、これらに関連する遺構の可能性が高い。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 1.15m、玄室側の幅 0.52m、墓前域側の幅 0.80m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 2.02m、幅 0.36～0.45m、深さ 0.10～0.12m の溝跡 2 を確認した。また、その溝跡 2 の上部と羨道に堆積する整地層（細別 19 層）の上面に、0.55×0.30×0.12m（42.1 kg）～0.53×0.35×0.20m（60.8 kg）の角礫 4 個（総重量 207.8 kg）が残存していた。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩 2 個と花崗閃緑岩 2 個である（第 36 表 5)。溝跡 2 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の発掘区際までの長さ 6.71m、上幅 2.6～3.2m、下幅 1.08～1.72m を測り、末端は発掘区外に延びる。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.1m 前後残存している

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。羨門から 2.2m 下方の地点で外方向に屈曲し、底面幅が広がる。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と発掘区際の比高差は 0.3m 程度である。

【堆積層】　ST27 横穴墓を覆う堆積層は細別 19 層・大別 4 層に分けた（第 185 図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1・2 層〕

大別 1 層（細別 1～10 層）は ST27 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 2 層（細別 11～14 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 1 層のうち、玄室～羨道に堆積する細別 2～8 層には天井の崩落土とみられる地山ブロックが多く含まれる。大別 2 層は整地層とみられ、大別 1 層と 2 層の層理面で一定量の遺物が面的に出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 3・4 層〕

大別 3 層（細別 15～17 層）は ST27 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 4 層（細別 18・19 層）は玄室～墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 4 層は、横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、玄室内の大別 4 層中でも鉄刀破片が数点出土している。これらの遺物は大別 3 層上面での祭祀以前に墓前域で使用された遺物と考えられる。

【出土遺物】土師器 56 点（9 個体、破片 47 点)、須恵器 31 点（13 個体、破片 18 点※うち 1 個体・破片 1 点は遺構間接合遺物)、金属製品 54 点（その他不明小破片多数)、動物遺存体 6 点が出土した（第 36 表 1～4)。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、土器類の大半は墓前域で出土している。土師器坏 4 個体・高台埦 1 個体・高台皿 2 個体・蓋 2 個体、須恵器坏 2 個体・高台坏 5 個体・蓋 4 個体・長頸壺 1 個体・甕 1 個体、鉄刀 1 点・鞘 1 点・鉄鏃 6 点の合計 30 点を図示した（第 190～194 図)。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 10 層底面）出土遺物**、**B：大別 3 層（細別 17 層底面）出土遺物**、**C：大別 4 層（細別 19 層）出土遺物**の 3 群に分かれる。加えて、ST27 では、別の横穴墓（ST34）で破砕された須恵器破片の一部が ST27 に混入したと考えられる遺物 1 点（第 36 表 2）も出土している。この須恵器破片は遺構間で接合する遺物であり、**D：墓前域大別 3 層の堆積途中（細別 15 層）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST27 関連遺物は、古い順から C→B→D→A の 4 段階に分けること

ができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 4 層（細別 19 層）出土遺物〕

大別 4 層（細別 18・19 層）のうち、玄室に堆積する細別 19 層内で出土した遺物である（前項 C に相当）。大別 4 層は人為堆積層（整地層）であるが、本層底面出土の遺物は、その整地前の横穴墓玄室掘方底面で使用された遺物と考えられる。鉄刀破片 2 点と不明鉄属製品破片 7 点が出土した（第 36 表 3）。いずれも小破片のため、図示はできなかった。これらは ST27 の初葬時に使用された遺物と考えられる。

〔大別 3 層（細別 17 層底面）出土遺物〕（第 193・194 図）

大別 3 層（細別 15～17 層）のうち、墓前域に分布する細別 17 層の底面〔＝大別 4 層（細別 19 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 B に相当）。土師器、須恵器、金属製品、動物遺存体が出土した。遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれる。

玄室では土師器、金属製品、動物遺存体が出土した。内訳は土師器坏の細片 4 点、鉄刀 1 点（第 194 図 4）と図示できなかった鉄刀破片・不明鉄製品破片、人歯 1 点（写真図版 297-7）・馬顎骨 5 点（写真図版 297-8～12）が出土した（第 36 表 1・3・4）。このうち、図示した鉄刀と非図化の鉄刀破片は同一体の可能性がある。人骨が出土していることから、この面で追葬が実施されたと想定される。

墓前域では土師器、須恵器、金属製品が出土した。内訳は土師器坏 2 個体（第 193 図 1・2）、須恵器長頸壺 1 個体（第 193 図 3）、鞘 1 点（第 193 図 4）・鉄鏃 6 点（第 194 図 1～3）と図示できなかった土師器坏破片、不明鉄製品破片である（第 36 表 1・3）。須恵器長頸壺を除く遺物は墓前域の羨門～屈曲部内で出土した（第 188 図）。土師器坏は全て破片の状態で出土している。須恵器長頸壺は墓前域の屈曲部外から出土しており、墓前域の壁面上に破砕された状態で据えられていた（写真図版 82-3・4）。これらは ST27 の追葬に伴い実施された墓前祭祀で使用された遺物の可能性が高い。土器類は祭祀の際に破砕されたものと考えられる。

〔大別 3 層（細別 15 層）出土遺物〕（第 193・194 図）

大別 3 層（細別 15～17 層）のうち、堆積層の上半にあたる細別 15 層の堆積土中から出土した遺物である（前頁 D に相当）。須恵器甕破片 1 点が出土した（第 36 表 2）。

この須恵器甕破片は、別の横穴墓で破砕された後、ST27 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST34 由来の須恵器甕**(E-172／第 241 図 1)**と接合する（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST34 は、ST27 と隣接する横穴墓であり、「単なる遺物流入」「意図的な散布」の両者の可能性が考えられるが、この須恵器甕（E-172）と接合する破片は、ST27 以外（ST3 付近の検出面）でも出土していることから、ST27 出土の甕破片についても「ST34 から意図的に散布されたもの」と想定しておきたい。

〔大別 1 層（細別 10 層底面）出土遺物〕（第 190～192 図）

大別 1 層（細別 1～10 層）のうち、細別 10 層の底面〔＝大別 2 層（細別 13・14 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 A に相当）。土師器、須恵器、金属製品が出土した。内訳は土師器坏 2 個体（第 190 図 1・2）・高台埦 1 個体（第 190 図 3）・高台皿 2 個体（第 190 図 6・7）・蓋 2 個体（第 190 図 4・5）、須恵器坏 2 個体（第 191 図 1・2）・高台坏 5 個体（第 191 図 3～7）・蓋 4 個体（第 191 図 8～11）・甕 1 個体（第 192 図 1）と図示できなかった土師器埦破片・須恵器甕破片、不明鉄製品破片である（第 36 表 1・3）。なお、大別 2 層中から出土した遺物（土師器坏破片、須恵器甕破片、刀子・鉄鏃破片）についても本来は本段階に帰属するものと考えられる（第 36 表 1・3）。

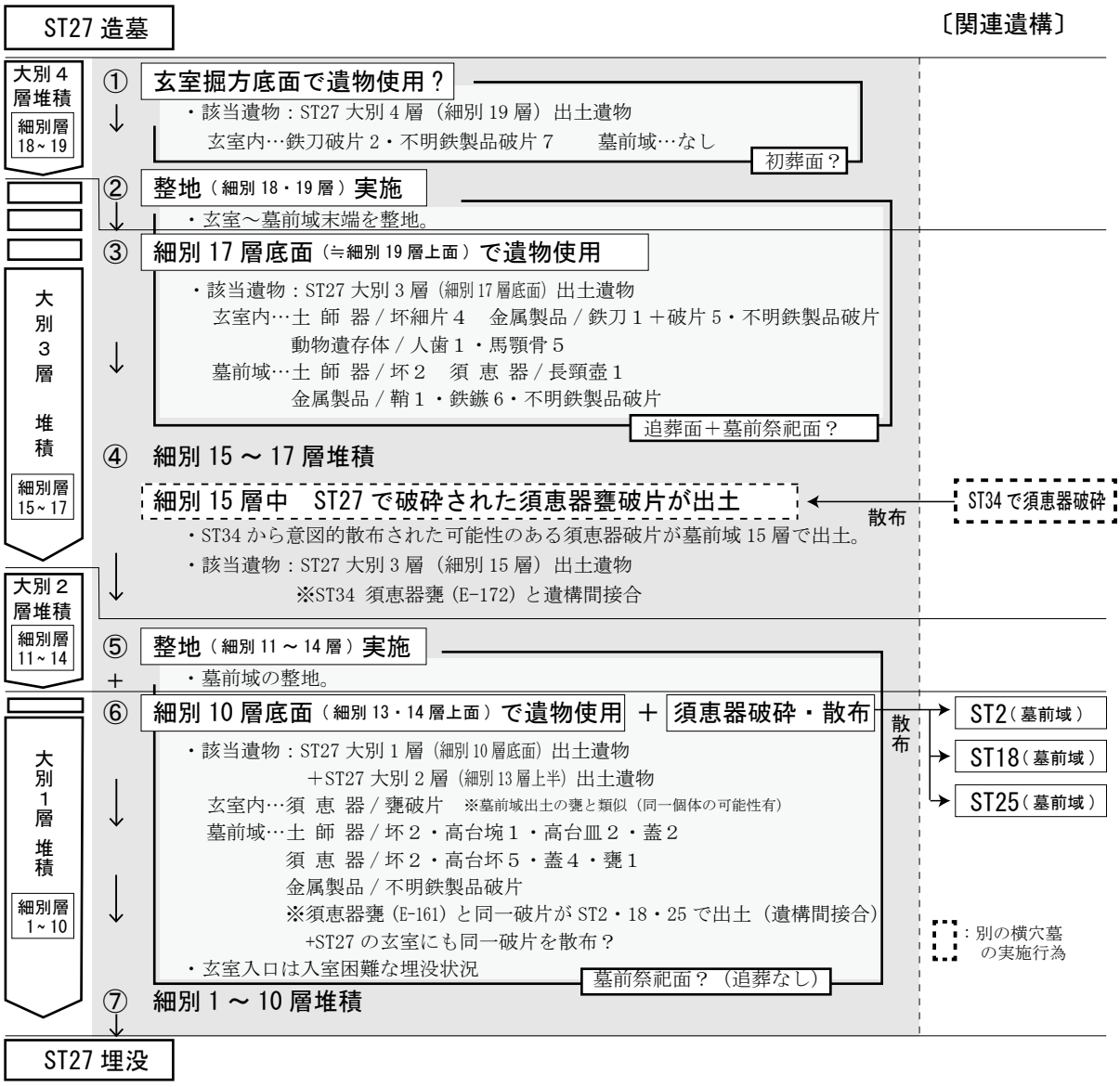
遺物の出土位置は玄室と墓前域に分かれるが、玄室出土遺物は図示できなかった須恵器甕破片のみであり、大部分は墓前域に分布する。土器類は須恵器坏 1 点（第 191 図 2/E-58）を除き、すべて破片の状態で出土した。その分布は墓前域の上半付近に集中する（第 187 図）。このうち、須恵器甕 1 個体（E-161/

第 192 図 1）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓（ST2・18・25）でも出土している（第 189 図）。ST27 玄室出土の須恵器甕は、この須恵器甕（E-161）と同一個体の可能性の高い（接合関係はなし）。以上の状況から、ST27 では、「墓前域で破砕した須恵器甕」を同一遺構内（玄室）と別遺構（ST2・18・25）に散布していたと考えられる。本層の同一面出土の遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。出土状況からみて、遺物は破片の状態で原位置を保ったまま埋没したものとみられる。堆積土の状況から、この段階の ST27 は、墓前域が半分程度、羨門付近が大部分埋没し、玄室入口がわずかに開口している状態であったと考えられる。このような状況下で本段階に追葬はあったとは想定し難い。以上のことから、本面での墓前祭祀は追葬とは関連のないものであったと推定される。

【まとめ】

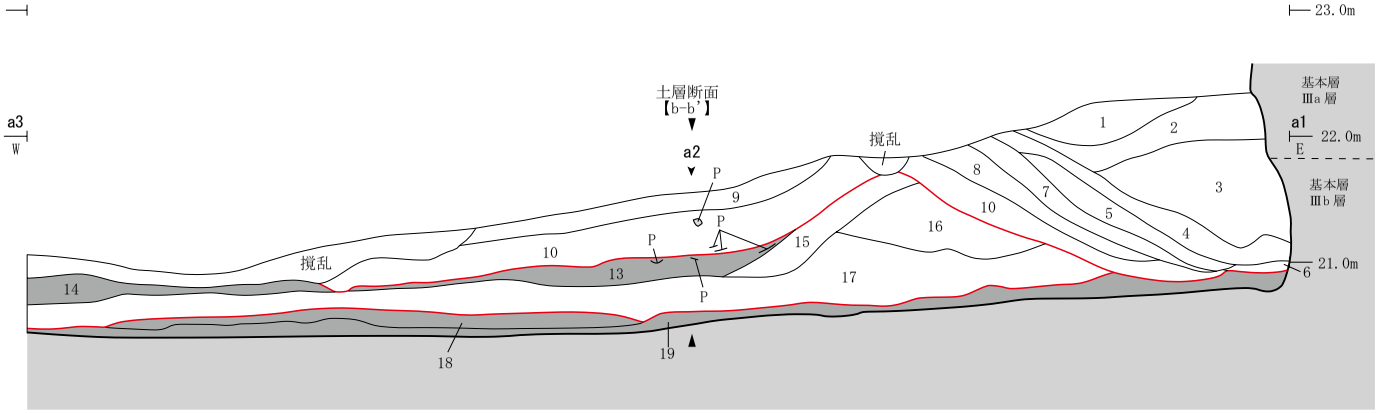
ST27 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST27 造墓・使用・埋没の経過〕



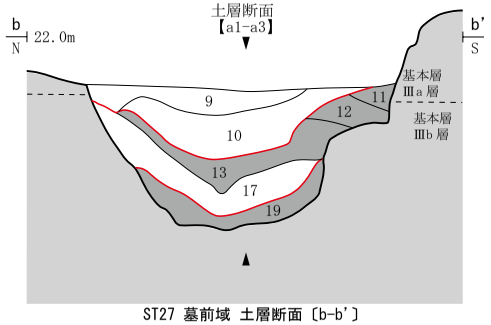
【土層図中の表記】

- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S　：礫
- P　：土器類
- ：土層断面の屈曲点
- ：各土層断面の交点

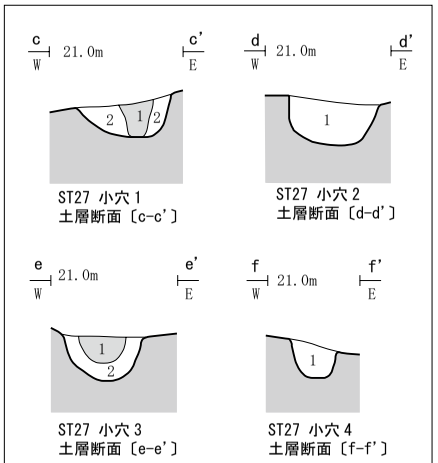


ST27 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	炭化物片少量含む。地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山ブロック（小）多く含む。		
3	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロック（小・大）多く含む。。		
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片微量・暗褐色土含む。		
5	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。		
6	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山ブロック含む。		
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片含む。		
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック多量含む。		
9	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック微量含む。		
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片含む。		
11	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	2	人為堆積層（整地層）
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片含む。		
13	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック・炭化物片含む。上層に遺物含む。		
14	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片含む。		
15	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・黒色土含む。	3	自然堆積層
16	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片微量含む。		
17	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック含む。		
18	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。炭化物粒を少量含む。	4	人為堆積層（整地層）
19	黄褐色(10YR5/6)	シルト質砂	地山ブロック多く含む。		



ST27 墓前域 土層断面〔b-b'〕



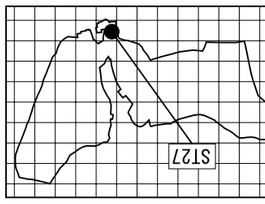
小穴１・３　土層注記【土色／土性／備考の順に記載】
１層：黒 褐 色（10YR2/2）／砂質シルト／柱痕跡
２層：灰黄褐色（10YR4/2）／砂質シルト／地山ブロック含む（柱掘方埋土）

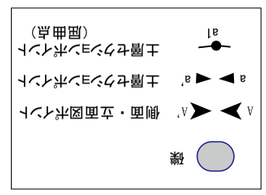
小穴２・４　土層注記【土色／土性／備考の順に記載】
１層：灰黄褐色（10YR4/2）／砂質シルト／地山ブロック含む

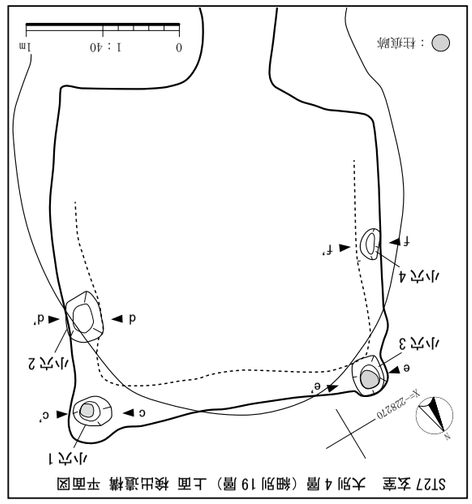
：柱痕跡

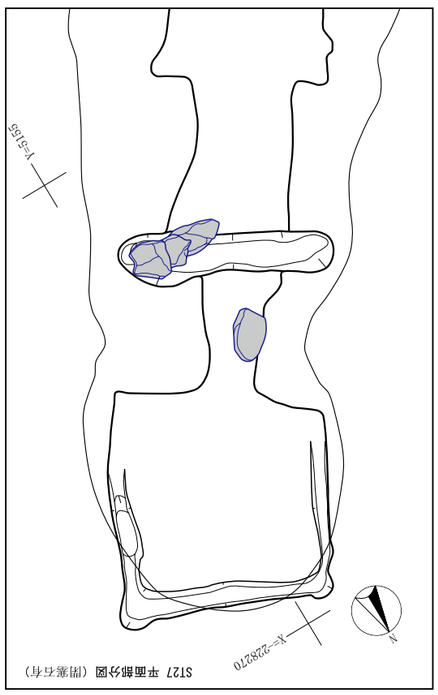
第 185 図　ST27 横穴墓 土層断面図

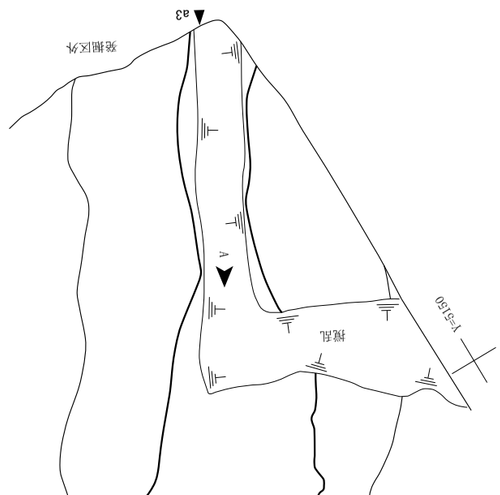
第186図　ST27 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図











第36表　ST27横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体・破片	土師器 坏	土師器 高台埦	土師器 高台皿	土師器 蓋	土師器 小計	須恵器 坏	須恵器 高台坏	須恵器 蓋	須恵器 長頸壺	須恵器 甕	須恵器 小計
玄室	1	10層	個											
			破										13 (95)	13 (95)
	3	19層上面	個											
			破	4 (5)				4 (5)						
墓前域	1	4層	個											
			破										1 (30)	1 (30)
		9層	個											
			破										1 (125)	1 (125)
		10層	個				1 (20)	1 (20)						
			破		11 (55)			11 (55)					1 (5)	1 (5)
		10層 13層	個	1 (45)	1 (345)			2 (390)	1 (65)	4 (595)	1 (150)			6 (810)
			破											
		10層 13層上面	個			1 (45)		1 (45)						
			破											
		9･10層 13層上面	個							1 (185)				1 (185)
			破											
		13層上面	個	1 (100)		1 (285)		2 (385)	1 (145)		3 (395)			4 (540)
			破											
		13･14層上面	個				1 (70)	1 (70)						
			破											
	2	13層上半部	個											
			破	15 (115)				15 (115)					1 (5)	1 (5)
	3	17層	個	1 (20)				1 (20)						
			破	17 (200)				17 (200)						
		19層上面	個									1 (1,640)		1 (1,640)
			破											
		17層、19層上面	個	1 (35)				1 (35)						
			破											
総合計		個体数(重量)		4 (200)	1 (345)	2 (330)	2 (90)	9 (965)	2 (210)	5 (780)	4 (545)	1 (1,640)		12 (3,175)
		破片数(重量)		36 (320)	11 (55)			47 (375)					17 (260)	17 (260)
		総重量		(520)	(400)	(330)	(90)	56 (1,340)	(210)	(780)	(545)	(1,640)	(260)	29 (3,435)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (15,345)	◆ST2　6層(墓前域) ◆ST18　検出面(墓前域) ◆ST25　検出面(墓前域) ◆ST27　4･6･7･9･10層、13層上面(玄室･墓前域)	ST27	◆ST2:1点 ◆ST18:1点 ◆ST25:1点 ★ST27:139点	E 161	第192図1
須恵器	甕	1 (7,560)	◆ST27　15層(墓前域) ◆ST34　5･6層(墓前域) ◆A区検出面(ST3付近)	ST34	◆ST27:1点 ★ST34:77点 ◆A区検出面:1点	E 172	第241図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。

※ST27出土須恵器の総数
(表36-1)遺構単独出土　12個体＋破片17点
＋
(表36-2)遺構間接合遺物　1個体＋破片1点　＝ 31 点

3. 金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載・非掲載	金属製品 鉄刀	鞘	刀子	鉄鏃	不明鉄製品	小計
玄室	3	19層上面	掲	1					1
			非掲	5				8+破片多数	13 ＋破片多数
	4	19層	掲						
			非掲	2				7	9
墓前域	1	9層	掲						
			非掲					1	1
		10層	掲						
			非掲					4	4
	2	13層	掲						
			非掲			1		1	2
	3	17層	掲				1		1
			非掲					14	14
		19層上面	掲		1		5		6
			非掲					3	3
器種別総合計		掲載遺物点数		1	1		6		8
		非掲載遺物点数		7		1		38+破片多数	46 ＋破片多数
		総点数		8	1	1	6	38+破片多数	54 ＋破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST27出土の不明小片の重量は39.6g)

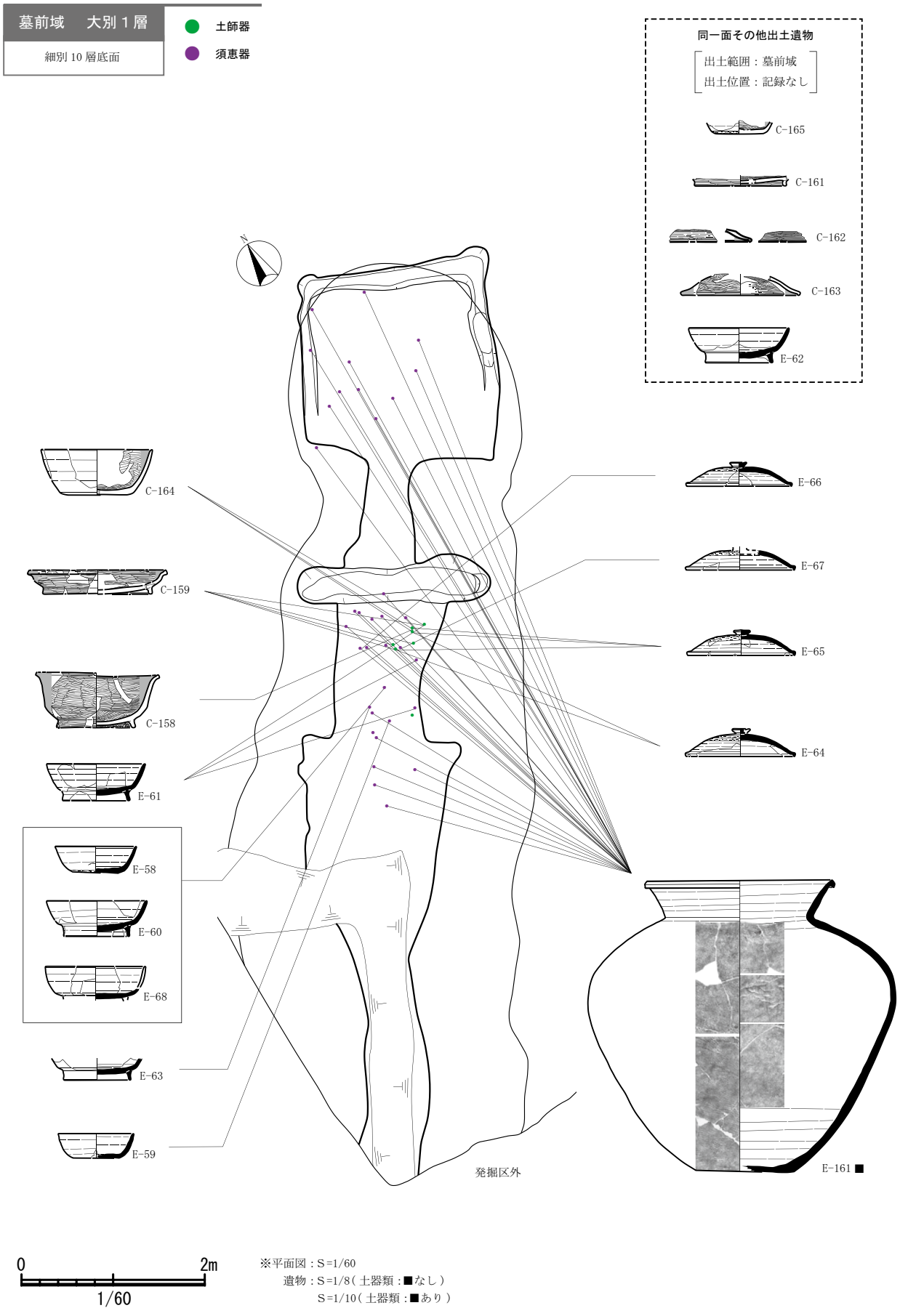
4. その他

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体・破片	動物遺存体 獣骨(馬顎骨)	人骨(歯)	小計
玄室	3	19層上面	個	5 (88.8)	1 (0.3)	6 (89.1)
			破			
総合計		個体数(重量)		5 (88.8)	1 (0.3)	6 (89.1)
		破片数(重量)				
		総重量		(88.8)	(0.3)	6 (89.1)

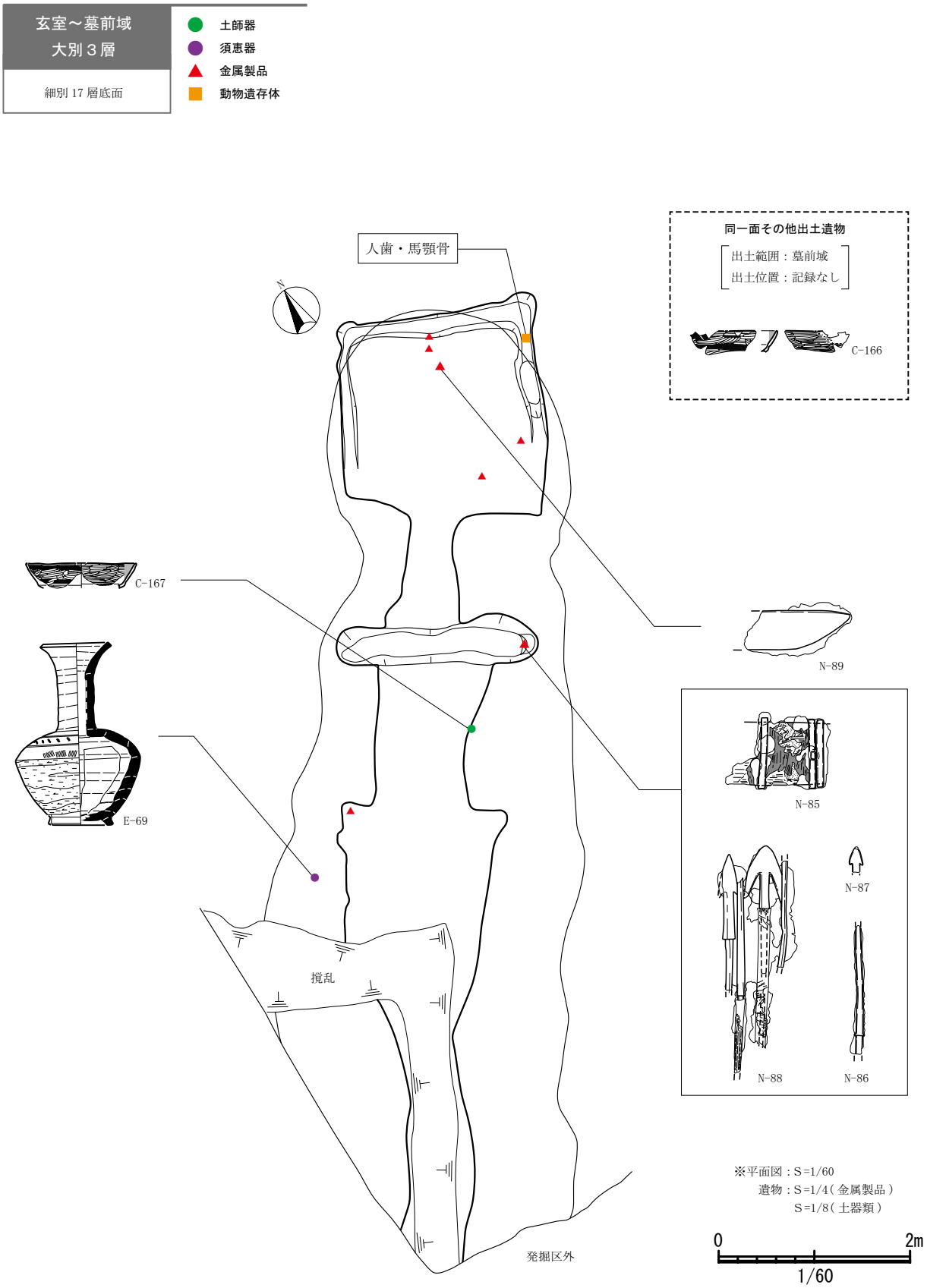
※各表中の左の数値が「点数」、右の()内の数値が「総重量(g)」

5. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	角礫	55	30	12	42.1
頁岩	角礫	50	28	21	57.6
花崗閃緑岩	角礫	37	32	23	47.3
花崗閃緑岩	角礫	53	35	20	60.8
合計:4点／重量(kg)＝					207.8

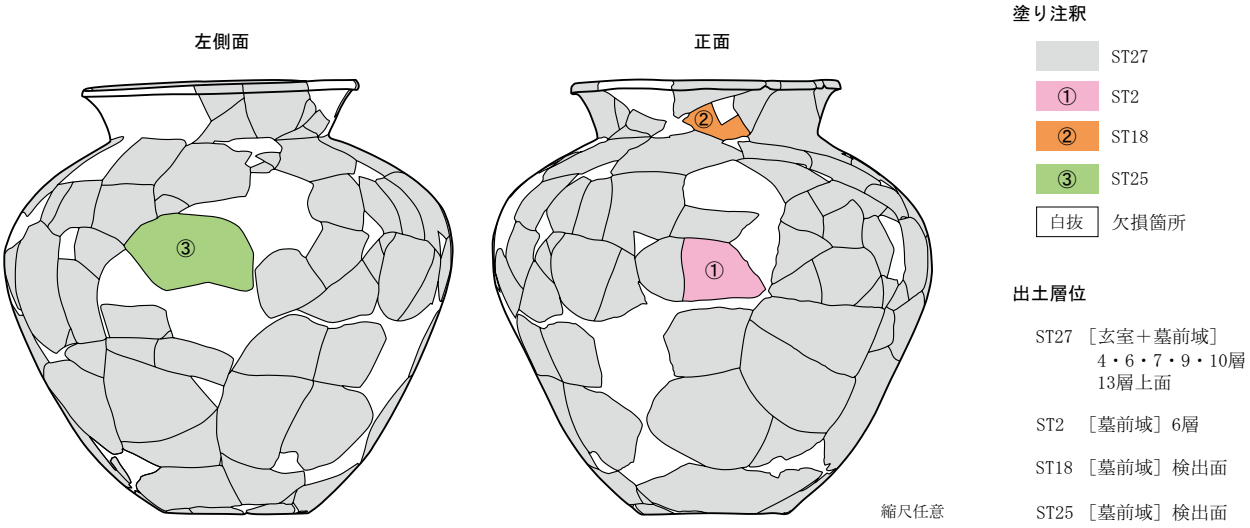


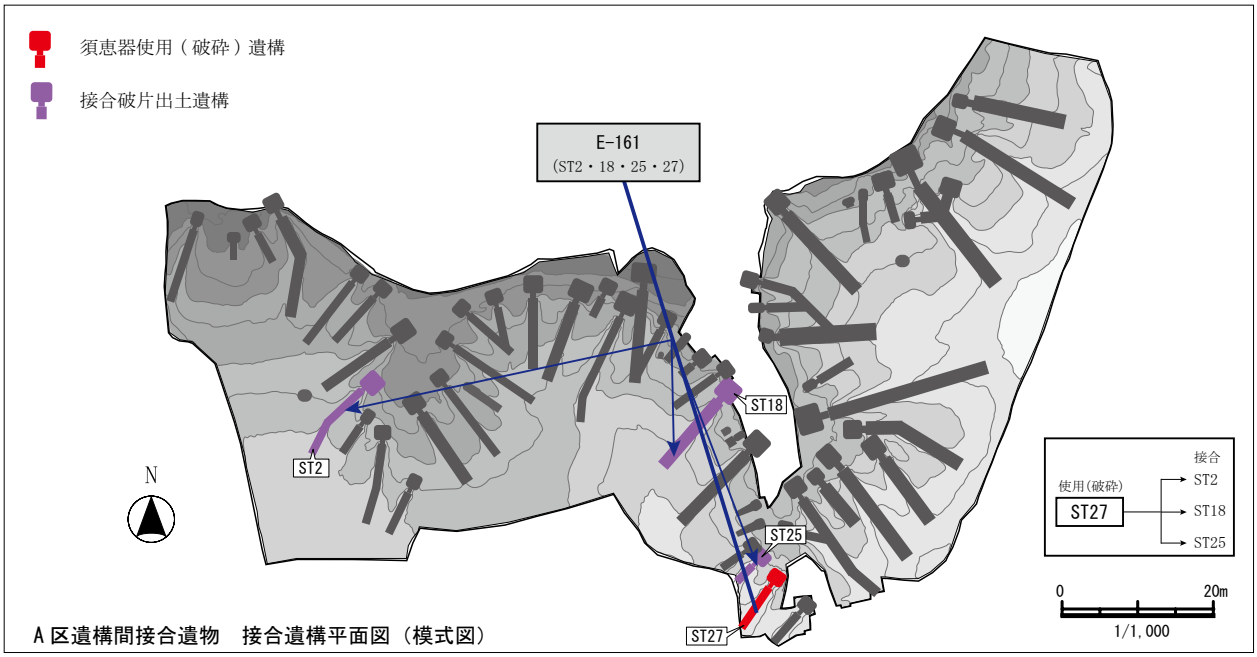
第187図　ST27 横穴墓 遺物出土状況図 (1) ― 大別１層―



第188図　ST27 横穴墓 遺物出土状況図 (2) －大別３層－

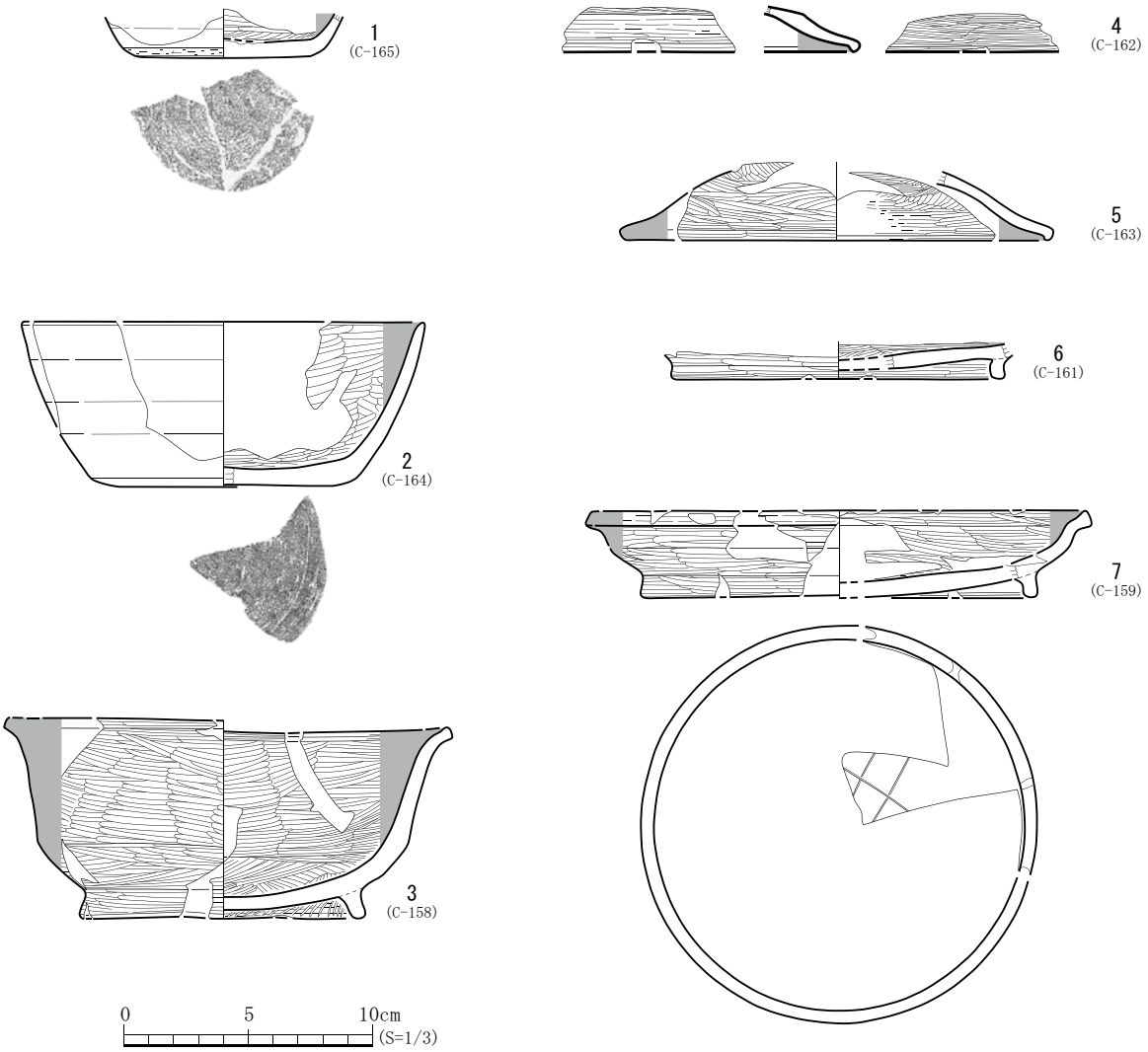
E-161　須恵器 甕
（第 192 図 1）





第189図　ST27 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

墓前域　大別１層

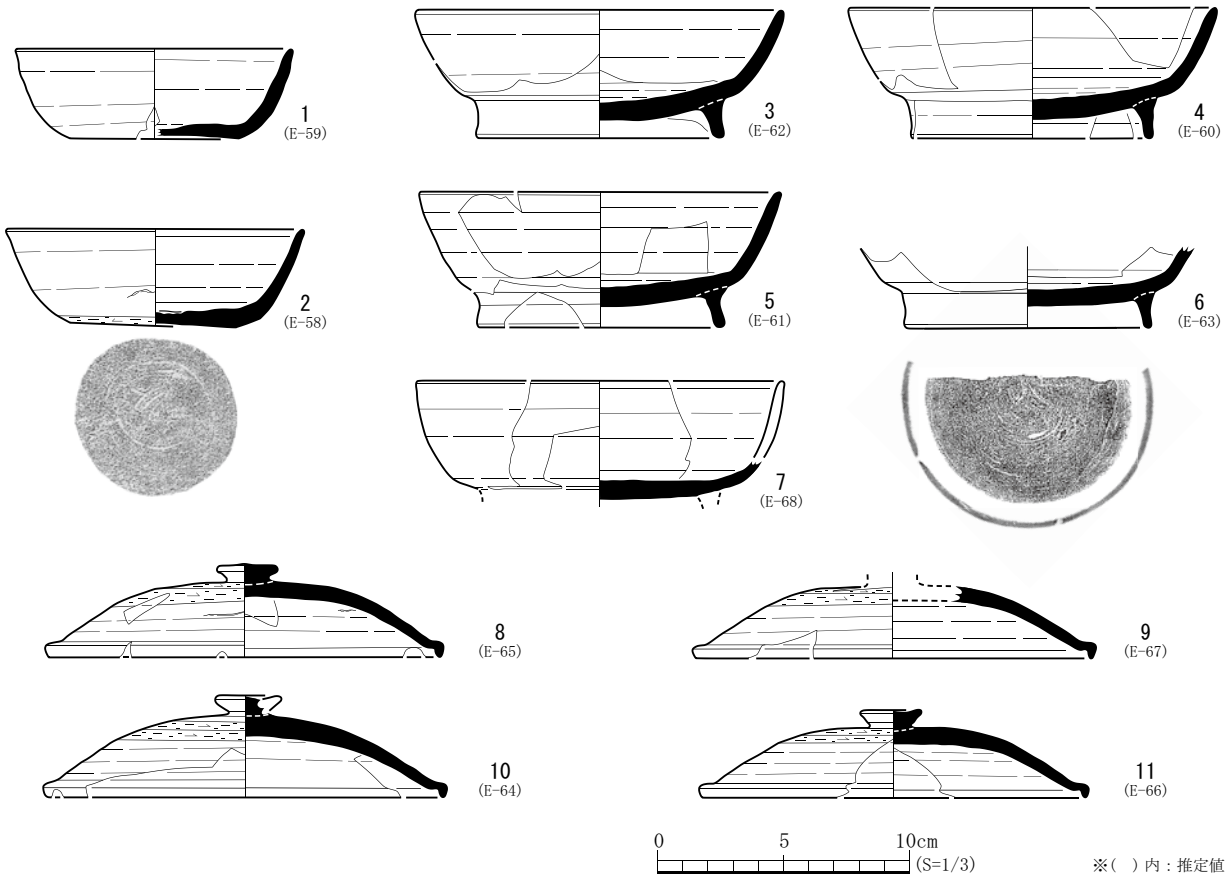


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	10層 13層	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・体部下端回転ヘラ削り・底部ヘラ切り→回転ヘラ削り再調整 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】底径(7.0)cm・残存高2.0cm・器厚0.4～0.7cm	C-165	200-2
2	墓前域	13層上面	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.0)cm・器高6.7cm・底径(10.8)cm・器厚0.4～1.0cm	C-164	200-1
3	墓前域	10層 13層	土師器 高台埦	【技法】外面：ヘラミガキ・黒色処理・口縁端部面取り・高台貼付 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径17.6cm・器高8.1cm・底径11.5cm、器厚0.4～0.9cm　【特記事項】ロクロ成形	C-158	200-5
4	墓前域	10層	土師器 蓋	【技法】外面：天井部ヘラ削り→ヘラミガキ・口縁部ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】残存高1.8cm・器厚0.3～0.6cm　【特記事項】ロクロ成形	C-162	199-14
5	墓前域	13層上面 14層上面	土師器 蓋	【技法】内外面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.8)cm・残存高3.2cm・器厚0.4～0.5cm　【特記事項】ロクロ成形	C-163	199-15
6	墓前域	10層 13層上面	土師器 高台皿	【技法】外面：底部ヘラ削り→ヘラミガキ・高台貼付・高台ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】底径(13.4)cm・残存高1.5cm・器厚0.5～0.6cm　【特記事項】ロクロ成形	C-161	200-4
7	墓前域	13層上面	土師器 高台皿	【技法】外面：ヘラミガキ・黒色処理・口縁端部面取り・高台貼付 底部ヘラ記号(焼成後「　卄　」) 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(19.8)cm・器高3.5cm・底径16.0cm・器厚0.5～0.8cm　【特記事項】ロクロ成形	C-159	200-3 264-1

第190図　ST27 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

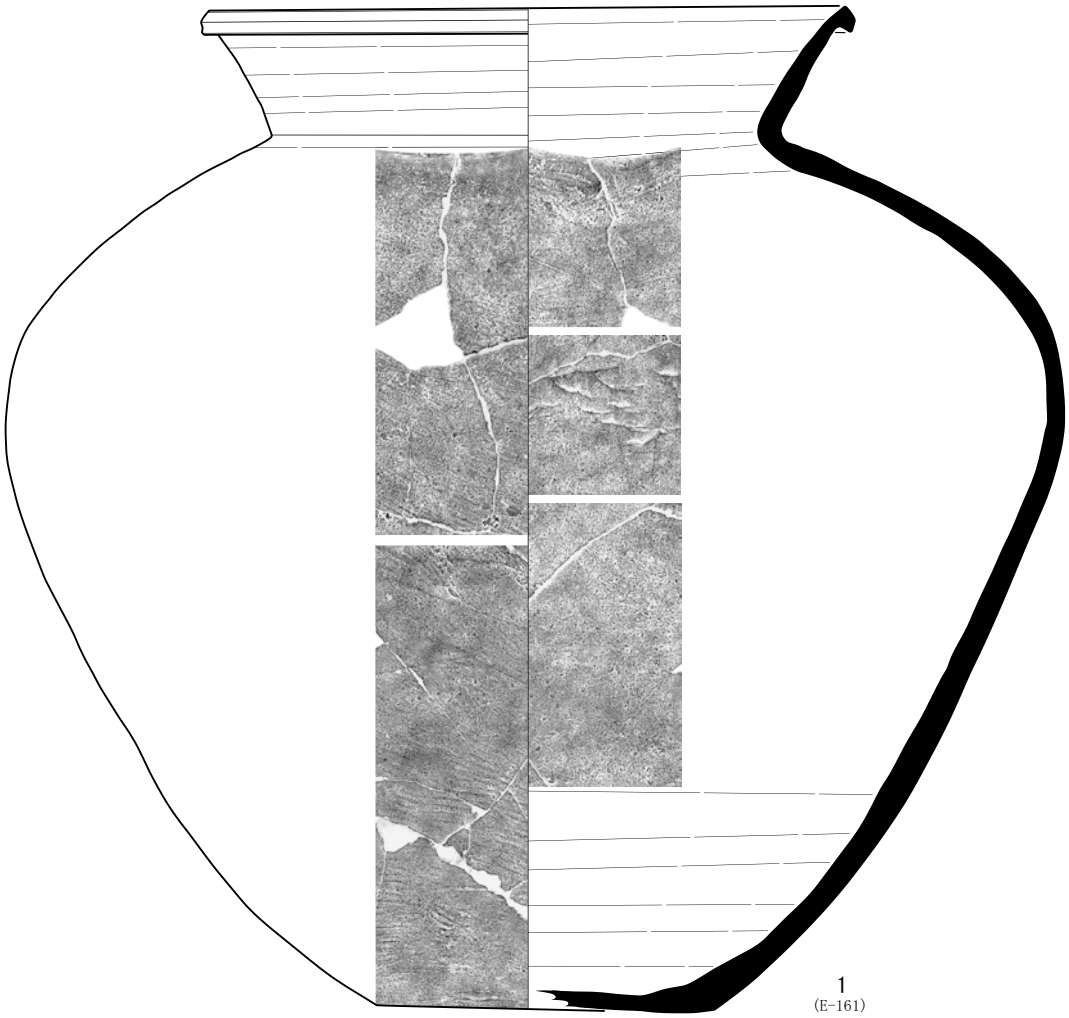


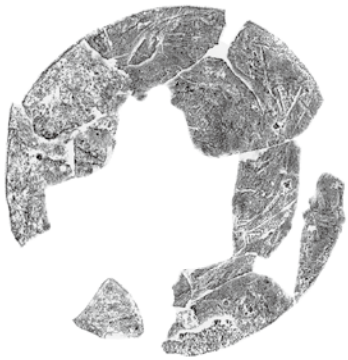
※(　) 内：推定値

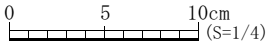
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	10層 13層	須恵器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整 内面：ロクロナデ 【法量】口径(10.8)cm・器高3.6cm・底径(6.7)cm・器厚0.2～0.6cm	E-59	221-3
2	墓前域	13層上面	須恵器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部回転糸切り→回転ヘラ削り再調整 内面：ロクロナデ 【法量】口径11.7cm・器高3.9cm・底径6.6cm・器厚0.3～0.7cm	E-58	221-2
3	墓前域	9層 10層 13層上面	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】口径14.4cm・器高5.1cm・底径9.5cm・器厚0.4～0.8cm	E-62	220-11
4	墓前域	10層 13層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】口径14.4cm・器高5.2cm・底径9.4cm・器厚0.4～0.8cm	E-60	220-9
5	墓前域	10層 13層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】口径14.1cm・器高5.4cm・底径9.4cm・器厚0.4～0.7cm	E-61	220-10
6	墓前域	10層 13層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部回転糸切り？→回転ヘラ削り再調整・高台貼付 内面：ロクロナデ 【法量】底径9.4cm・残存高3.2cm・器厚0.3～0.7cm	E-63	220-12
7	墓前域	10層 13層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部ヘラ切り→回転ヘラ削り再調整・高台貼付(高台欠損) 内面：ロクロナデ 【法量】口径(14.4)cm・残存高4.8cm・器厚0.3～0.7cm	E-68	221-1
8	墓前域	10層 13層	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り・摘み貼付(扁平なボタン状) 内面：ロクロナデ 【法量】口径15.5cm・器高3.9cm・器厚0.3～0.6cm・摘径2.4cm	E-65	220-6
9	墓前域	10層 13層	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り、内面：ロクロナデ 【法量】口径15.7cm・残存高2.9cm・器厚0.3～0.6cm	E-67	220-8
10	墓前域	13層上面	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り・摘み貼付(扁平なボタン状)、内面：ロクロナデ 【法量】口径15.7cm・器高4.1cm・器厚0.3～0.8cm・摘径(2.6)cm	E-64	220-5
11	墓前域	13層上面	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り・摘み貼付(扁平なボタン状)、内面：ロクロナデ 【法量】口径(15.2)cm・器高3.5cm・器厚0.3～0.6cm・摘径2.4cm	E-66	220-7

第191図　ST27 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層



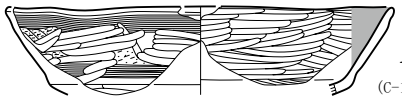


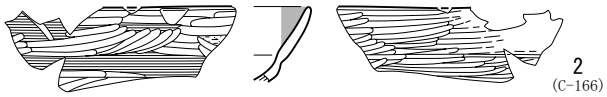


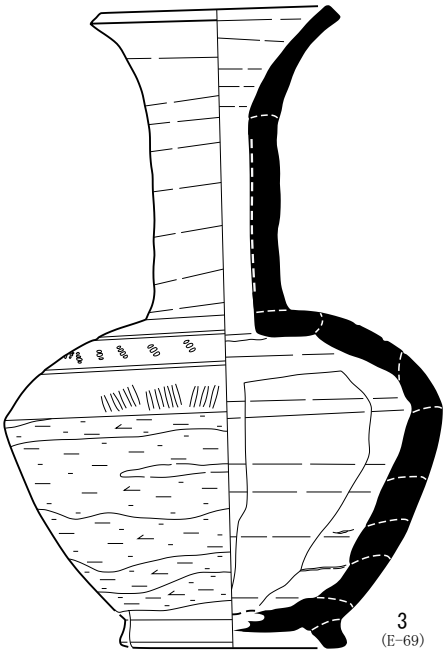
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	[ST2]墓前域 ＋ [ST18]墓前域 ＋ [ST25]墓前域 ＋ [ST27] 玄室・墓前域	◆ST2　6層 ◆ST18　検出面 ◆ST25　検出面 ◆ST27　4・6層 7・9・10層 13層上面	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST27(主体)**＋ST2＋ST18＋ST25 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部平行タタキ→ナデ・底部平行タタキ→ヘラ削り 内面：口縁部ロクロナデ・体部上～中位当て具痕(同心円)→ナデ 体部下位～底部ロクロナデ 【法量】口径33.6cm・器高53.4cm・底径17.9cm・器厚0.6～1.8cm	E-161	248-1

第192図　ST27 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別３層

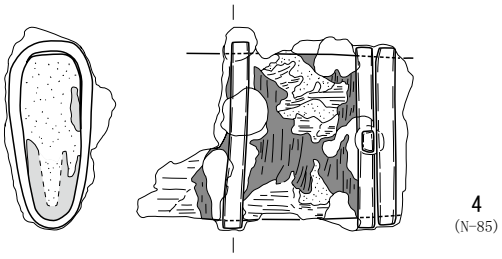

1
(C-167)


2
(C-166)


3
(E-69)

0　5　10cm
(S=1/3)　※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	17層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.2)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～0.4cm	C-167	199-13
2	墓前域	17層 19層上面	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.2～0.4cm	C-166	199-12
3	墓前域	19層上面	須恵器 長頸壺	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・口縁端部面取り・体部平行タタキ→ロクロナデ →回転ヘラ削り・沈線・櫛歯状工具による列点文・底部ヘラ切り→ヘラ削り →ナデ・高台貼付 内面：ロクロナデ・ナデ・オサエ 【法量】口径9.0cm・器高25.5cm・底径8.8cm・器厚0.6～1.5cm・口縁部最大径10.0cm 体部最大径17.4cm	E-69	229-6 229-7 266-2


4
(N-85)

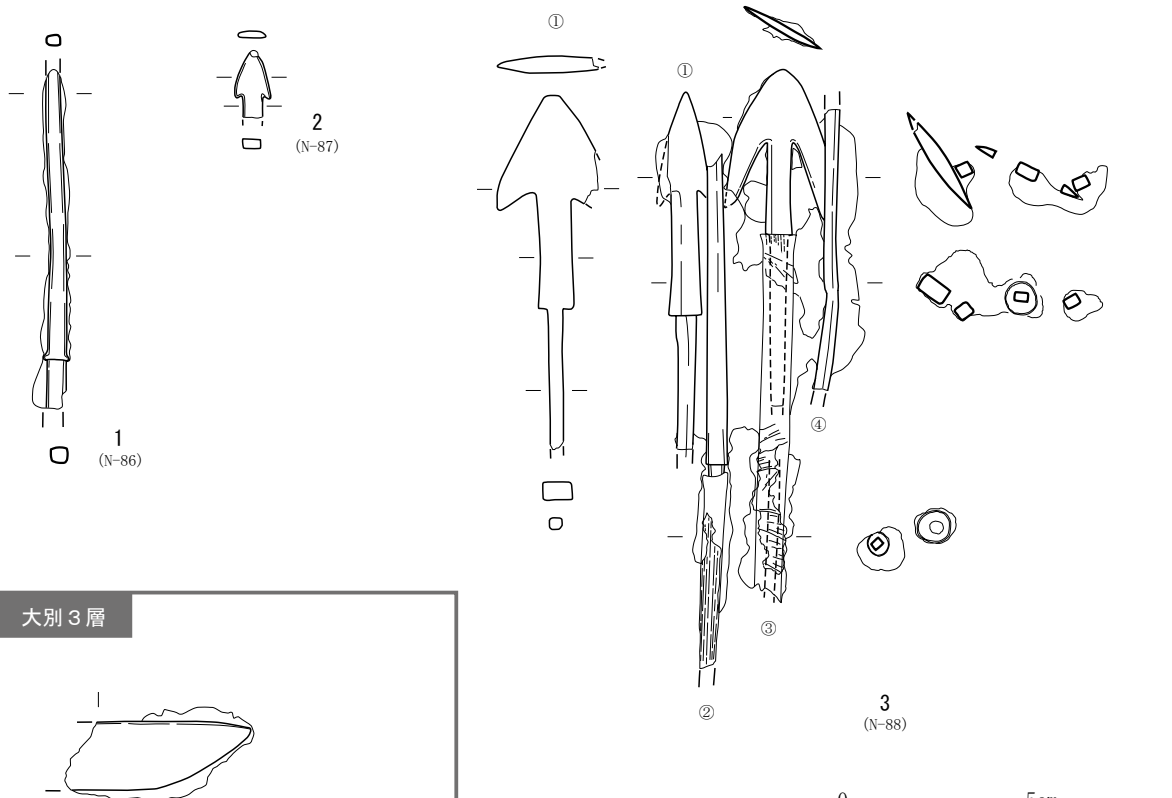
※トーン部注釈
砂
木質
黒色被膜

0　5cm
(S=1/2)

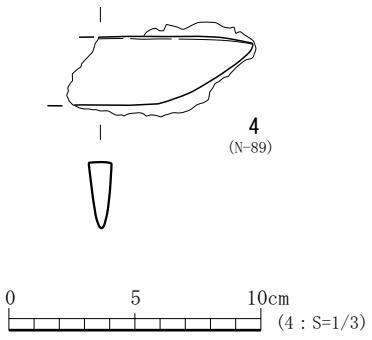
No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
4	墓前域 (羨門付近)	19層上面	金属製品	鞘	【法量】残存長7.3cm [責金具]長径4.9cm・短径2.0cm・幅0.5cm 【特記事項】部位不明・黒色被膜有り・責金具残存・鉄製	N-85	306-8

第193図　ST27 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類・金属製品－

墓前域　大別３層



玄室　大別３層



※鉄鏃観察表
逆刺無しの場合　［全長］=A+B+C　　［鏃長］=A+B
逆刺有りの場合　［全長］=A+B+C－逆刺長　［鏃長］=A+B－逆刺長

No.	出土位置	細別層	種別	器種	分類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	鏃長 (cm)	A 鏃身部 長さ (cm)	B 頸部 長さ (cm)	C 茎部 長さ (cm)	備考	登録	写真図版
1	墓前域	17層	金属製品	鉄鏃	長頸鏃？	残存 9.0	0.7	残存 7.7	－	残存 7.7	残存 1.3	[茎関]棘関	N-86	316-4
2	墓前域 (羨門付近)	19層上面	金属製品	鉄鏃	長頸鏃 両刃A2	残存 1.7	0.9	残存 1.7	1.2	残存 0.6	－	[逆刺長]0.1cm	N-87	316-3 344-4
3	墓前域 (羨門付近)	19層上面	金属製品	①鉄鏃	有頸 平根鏃	残存 9.4	2.6	5.6	3.0	3.0	残存 3.8	[逆刺長]0.4cm [鏃身形]三角形 [茎関]角関	N-88	316-5 348-5
				②鉄鏃	長頸鏃？	残存 13.6	0.6	残存 8.2	－	残存 8.2	残存 5.4	[茎関]角関		
				③鉄鏃	有頸 平根鏃	残存 13.9	－	4.4	4.0	2.4	残存 9.5	[逆刺長]2.0cm [鏃身形]長三角形 矢柄・口巻残存		
				④鉄鏃	－	残存 7.4	－	残存 7.4	－	残存 7.4	－	頸部のみ		

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
4	玄室	19層上面	金属製品	鉄刀	【法量】残存長7.6cm・幅2.7cm　【特記事項】フクラ切先	N-89	306-9

第194図　ST27 横穴墓 出土遺物 (5)　－金属製品－

28号横穴墓（ST28）（第195～198図、第37表、第4分冊 写真図版83・84）

【検出位置】　A-2区西側の標高26～29mの丘陵南西斜面に位置する。同斜面の西にはST29、南東にはST1が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の大部分の天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）である。

【個別部位の特徴】（第195図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は10.46mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行1.95m、玄室の中央幅1.56m、奥壁幅1.20m、前壁幅1.30m、左側壁幅1.90m、右側壁幅1.78m、玄室底面から天井の高さ1.01mを測る。床面積は約2.8㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥壁・左側壁のコーナーのつくりがやや崩れている。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.3m程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。天井部分が崩落している。立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。幅0.63mを測る。

工 具 痕：各壁に幅0.06～0.7m前後の工具痕跡が残存していた。工具痕の方向は、側壁・奥壁が縦・横・斜め方向、天井部が放射状である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行1.00m、玄室側の幅0.63m、墓前域側の幅0.70mを測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。逆U字形を呈していたと考えられる。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は0.1m程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には0.18mの段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ1.37m、幅0.27m、深さ0.05mの溝跡1を確認した。溝跡の周辺には、0.14×0.10×0.06m（1.4kg）～0.46×0.30×0.30m（79.5kg）の角礫11個（総重量226.4kg）が残存していた。これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は花崗閃緑岩10個、アプライト花崗岩1個である（第37表3）。溝跡1と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長7.51m、上幅1.4～2.4m、下幅0.86～1.10mを測る。底面

から上端までの高さは、羨門付近で 1.2m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端付近の比高差は 1.2m 程度である。

【堆積層】　ST28 横穴墓を覆う堆積層は細別 24 層・大別 2 層に分けた（第 196 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～21 層）は ST27 玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。細別 14・15 層には羨道～玄室の天井崩落土とみられる地山ブロックが多く含まれる。この段階で ST28 の入口付近の大部分が埋没したと考えられる。大別 1 層の堆積後、玄室入口は完全に埋没したとみられる。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 22～24 層）は ST28 の墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 2 層は横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この上面（細別 22 層上面）で遺物が少量出土した。この面で何らかの行為が行われた可能性がある。

【出土遺物】土師器高坏 1 個体（第 198 図 1）・坏小破片 1 点、管玉 1 点（第 198 図 2）、不明鉄属製品小破片多数が出土した（第 37 表 1・2）。土師器坏の小破片は図示した高坏の坏部破片の可能性がある。人骨等は残存していない。

遺物の出土位置は、土師器高坏が墓前域下半の大別 2 層上面（細別 22 層上面）、それ以外が玄室底面である（第 197 図）。このうち、高坏は墓前域の中央付近で逆位の状態で出土している（写真図版 84-2）。出土遺物はごく少量ではあるが、遺物自体は玄室底面と整地層上面で出土していることから、これらは初葬に伴う遺物と考えておきたい。

【まとめ】　ST28 横穴墓は、出土遺物と堆積層の状況から、造墓後 1 回の埋葬が実施され、その後は徐々に埋没したものと考えられる。

第37表　ST28横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類･玉製品－遺構単独出土－

種別				土師器			玉製品	
出土位置	大別層	細別層	器種／個体／破片	坏	高坏	小計	石製管玉	小計
玄室	－	底面直上	個					
			破	1 (5)		1 (5)		
墓前域	－	22層上面	個		1 (515)	1 (515)	1 (8.7)	1 (8.7)
			破					
合計		個体数(重量)			1 (515)	1 (515)	1 (8.7)	1 (8.7)
		破片数(重量)		1 (5)		1 (5)		
		総重量		(5)	(515)	2 (520)	(8.7)	1 (8.7)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

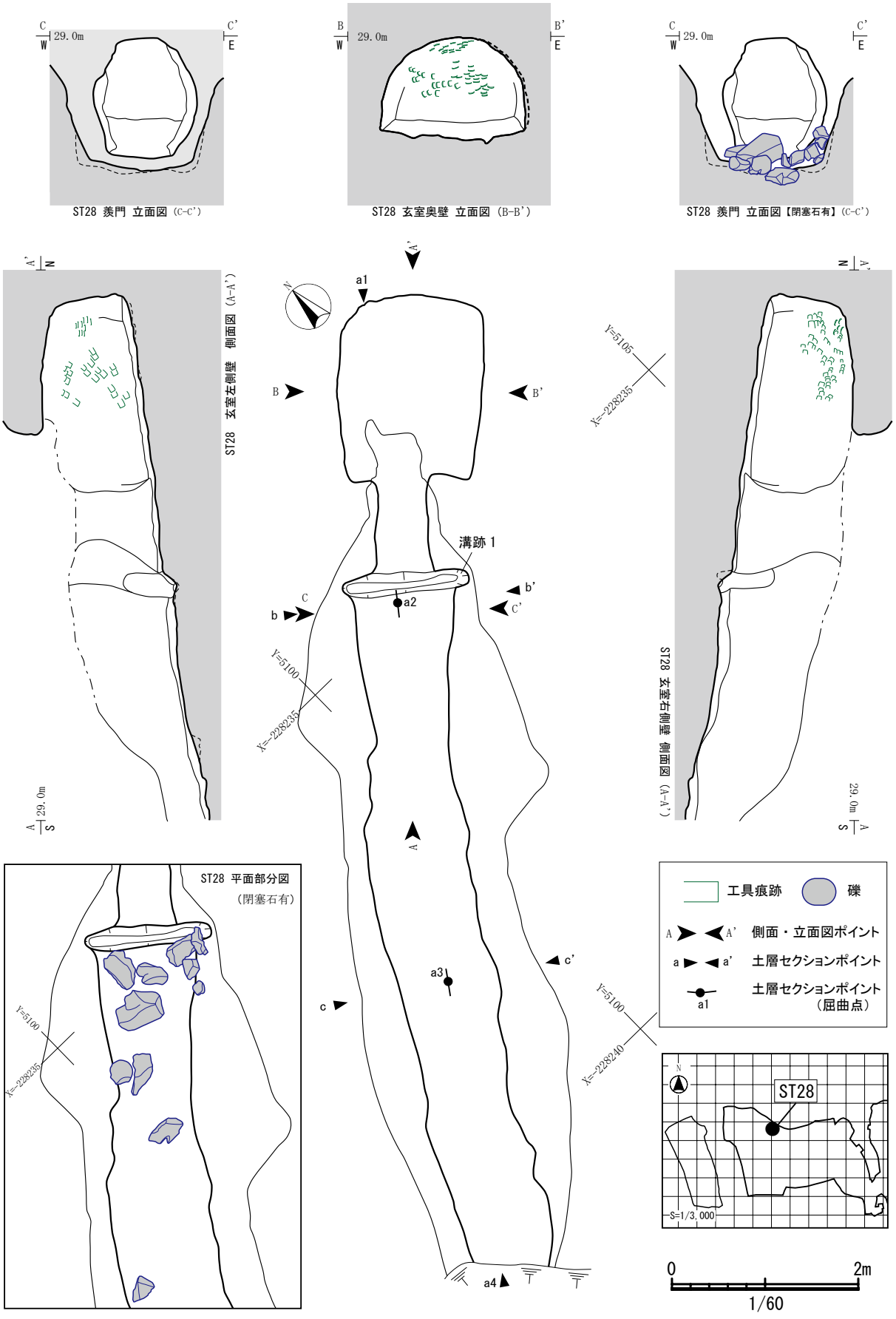
2. 金属製品

種別				金属製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種／掲載／非掲載	不明鉄製品	小計
玄室	－	底面	掲		
			非掲	破片多数	
器種別総合計		掲載遺物点数			
		非掲載遺物点数		破片多数	
		総点数		破片多数	破片多数

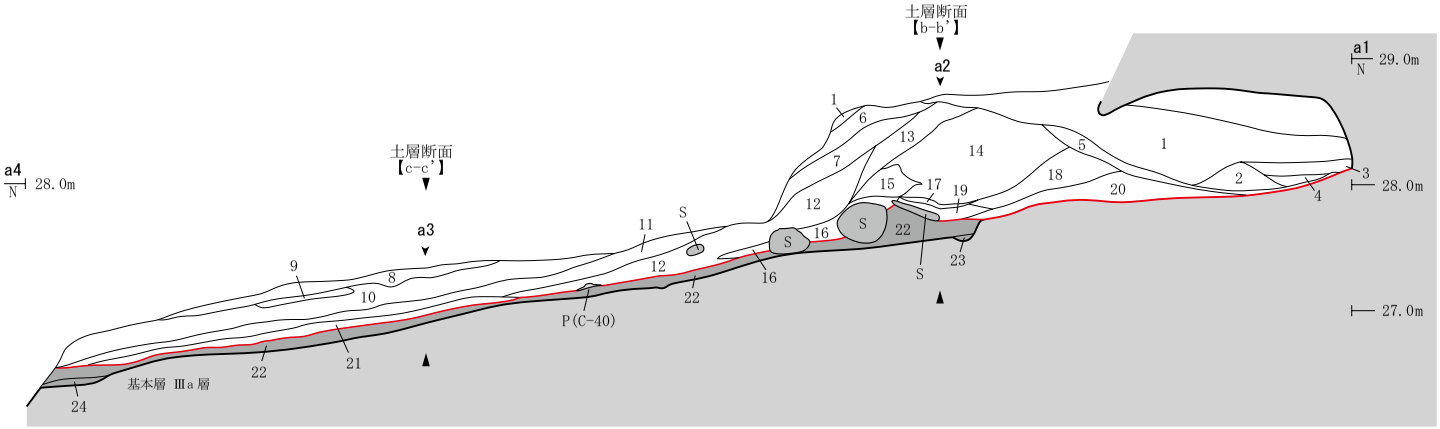
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST28出土の不明小片の重量は1.1g)

3. 閉塞石観察表

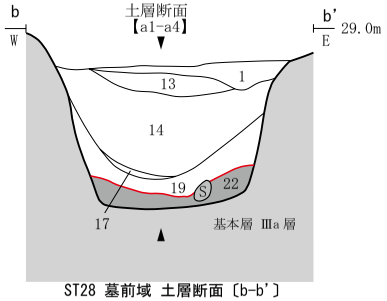
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	14	10	6	1.4	花崗閃緑岩	角礫	36	20	16	18.8
花崗閃緑岩	角礫	20	20	10	11.2	花崗閃緑岩	角礫	42	20	15	20.0
花崗閃緑岩	角礫	30	20	12	12.0	花崗閃緑岩	角礫	42	20	17	23.3
花崗閃緑岩	角礫	30	20	10	12.2	花崗閃緑岩	角礫	46	30	30	79.5
花崗閃緑岩	角礫	23	22	12	12.3	アプライト花崗岩	角礫	42	26	12	20.1
花崗閃緑岩	角礫	35	20	20	15.6	合計:11点／重量(kg)＝					226.4



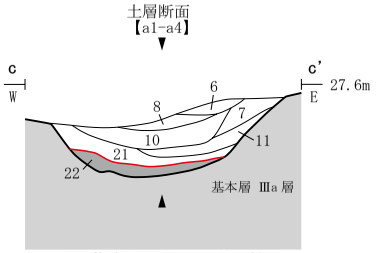
第195図　ST28 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



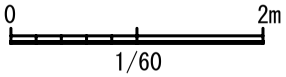
ST28 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3-a4〕



ST28 墓前域 土層断面〔b-b'〕



ST28 墓前域 土層断面〔c-c'〕

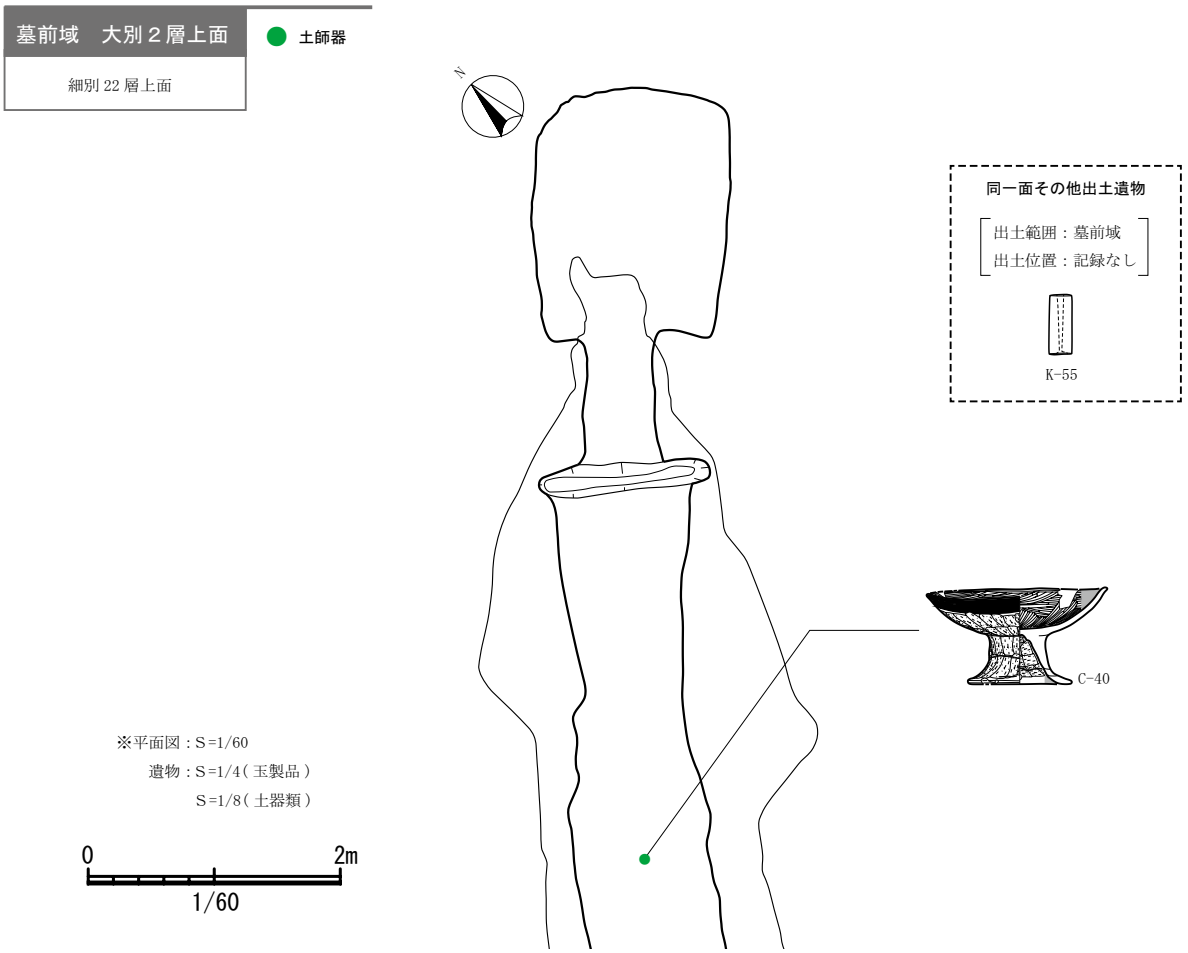


【土層図中の表記】

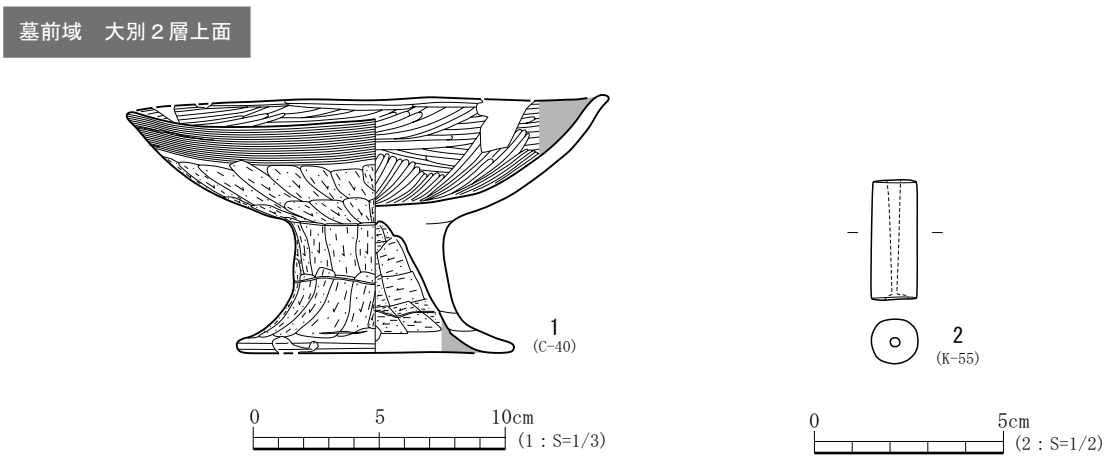
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫
- P ：土器類
- ▼ ：土層断面の屈曲点
- ▼▲ ：各土層断面の交点

第 196 図
ST28 横穴墓 土層断面図

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（小・大）多量含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	玄室天井の崩落土ブロック。		
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	均質層。		
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック（中）少量含む。		
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片微量含む。		
6	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。		
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化粒片少量含む		
8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
9	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
10	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロック微量含む。		
11	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	部分的に地山ブロック少量含む。		
12	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック（小・中）少量含む。		
13	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（小）微量含む。		
14	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック多量含む。天井崩落土。		
15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック多量含む。天井崩落土。		
16	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック（小）多く含む。		
17	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック（大）含む。		
18	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	均質層。		
19	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
20	浅黄色(2.5Y7/4)	シルト	砂質シルト土少量含む。		
21	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック（小）微量含む。		
22	黄褐色(2.5Y5/4) にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（小・大）多量含む。	2	人為堆積層 （整理層）
23	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
24	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック（小）多量含む。		



第197図　ST28 横穴墓 遺物出土状況図



※( ) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	22層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ・体部ヘラ削り　[脚部]ヘラ削り 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]ヘラ削り・黒色処理 【法量】坏部口径(18.7)cm・器高10.3cm・脚裾部径11.0cm・器厚0.5～2.3cm	C-40	213-7

No.	出土位置	細別層	種別・器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
2	墓前域	22層上面	石製品 管玉	碧玉	3.20	1.20	—	—	—	0.15～0.35	8.7	K-55	275-11

第198図　ST28 横穴墓 出土遺物

29 号横穴墓（ST29）（第 199～203 図、第 38 表、第 4 分冊 写真図版 85）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 26～28m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西には ST30、南東には ST28 が隣接している。

【重複関係】 墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室の全ての天井が残存し、玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 199 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 12.65m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.52m、玄室の中央幅 1.88m、奥壁幅 1.45m、前壁幅 1.66m、左側壁幅 1.33m、右側壁幅 1.21m、玄室底面から天井の高さ 0.99m を測る。床面積は約 2.4 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置する。立面形はやや歪んだ逆 U 字形を呈する。幅 0.86m、高さ 0.98m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.08m 前後の工具痕跡がわずかに残存している。工具痕の方向は縦・横方向である。

付属施設：奥壁・両側壁・前壁の壁際を巡る溝跡 1・2 を確認した。その規模は幅 0.08～0.13m・深さ 0.08m であり、玄門中央付近を通り、羨道・墓前域に至る。排水溝と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.73m、玄室側の幅 0.86m、墓前域側の幅 0.96m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。やや歪んだ逆 U 字形を呈していたと考えられる。

天　　井：大部分が崩落しており残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：玄室から羨道の中心を通り墓前域に至る溝跡 1 を確認した。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.07m の段差があり、段差下の墓前域付近に角礫・円礫 10 個が残存していた。礫は 0.18×0.12×0.03m（1.2 kg）～0.45×0.30×0.20m（49.0 kg）、総重量 171.8 kgを測り、石材は花崗閃緑岩 6 個・頁岩 3 個・アプライト花崗岩 1 個である（第 38 表 3）。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長 10.40m、上幅 1.0～2.4m、下幅 0.11～1.27m を測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.2m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.1m 程度である。

付属施設：玄室・羨道から延びる溝跡 1 を確認した。溝跡 1 は羨門から 1.3m 下方の地点で途切れる。

【堆積層】　ST29 横穴墓を覆う堆積層は細別 17 層・大別 3 層に分けた（第 200 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～5 層）は ST29 の羨道～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別 2 層の層理面（細別 4 層底面・細別 6 層上面）で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別 1 層底面以下には整地層が認められないことから、大別 2 層堆積後の窪地上面を利用した可能性が高い。

大別 1 層堆積後、ST29 の玄室入口の大部分は埋没したと考えられる。

〔大別 2・3 層〕

大別 2 層（細別 6～15 層）は ST29 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層、大別 3 層（細別 16・17 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 3 層は、横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられ、この整地層上面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。なお、整地層である大別 3 層内で遺物は出土していない。

【出土遺物】土師器 37 点（9 個体、破片 28 点）、須恵器 3 点（1 個体、破片 2 点）、金属製品 1 点が出土した（第 38 表 1・2）。人骨等は残存していない。遺物の出土位置は全て墓前域である。土師器坏 1 個体・高坏 8 個体、須恵器甕 1 個体、刀子 1 点の合計 10 点を図示した（第 202・203 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 4 層底面）出土遺物**、**B：大別 2 層（細別 12 層底面）出土遺物**の 2 群に分かれる。その新旧関係は B が古く、A が新しい。以下、出土層位毎に記載する。

〔大別 2 層（細別 12 層底面）出土遺物〕（第 203 図）

大別 2 層（細別 6～15 層）のうち、墓前域に分布する細別 12 層の底面〔＝大別 3 層（細別 16 層）上面〕で出土した遺物である（前項 B に相当）。土師器坏 1 個体（第 203 図 1）・高坏 8 個体（第 203 図 2～9）と図示できなかった坏破片が出土した（第 38 表 1）。遺物は全て破片の状態で出土しており、墓前域の末端・中央・羨門付近に分布する（第 201 図）。玄室で遺物が出土していないが、これらは ST29 の初葬に関連する墓前祭祀等で使用された遺物と考えられる。

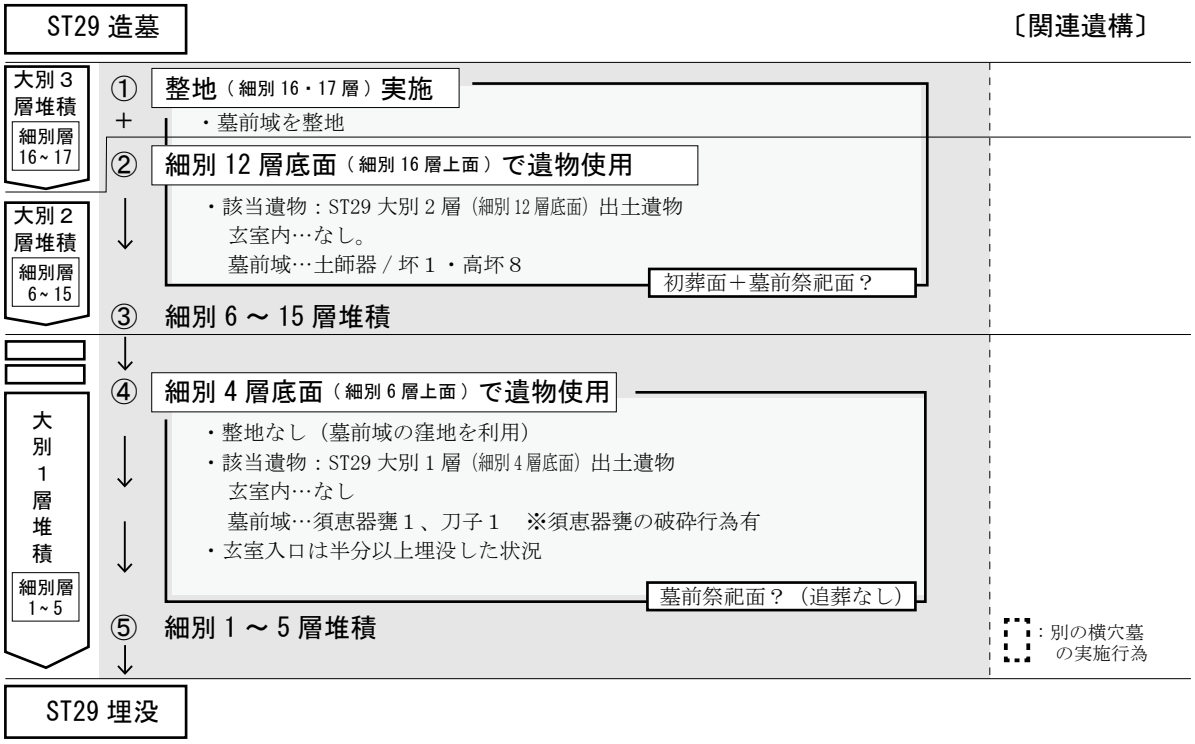
〔大別 1 層（細別 4 層底面）出土遺物〕（第 202 図）

大別 1 層（細別 1～5 層）のうち、墓前域に分布する細別 4 層の底面〔＝大別 2 層上面（細別 6 層上面）〕で出土した遺物である（前頁 A に相当）。須恵器甕 1 個体（第 202 図 1）とこれと同一個体とみられる須恵器甕破片、刀子 1 点（第 202 図 2）が出土した（第 38 表 1・2）。この須恵器甕（第 202 図 1）は、羨門付近の墓前域で破砕された状態で出土しており（写真図版 85-6）、ST29 の墓前祭祀に使用されたものと判断される。大別 1 層底面以下には整地層が認められないことから、本面での墓前祭祀は大別 2 層堆積後の窪地を利用して実施されたと考えられる。なお、この段階の ST29 は、堆積土の状況から、玄室入口が半分以上埋没し、玄室での埋葬行為は困難だったと推定される。したがって、この段階の墓前祭祀については追葬とは関連のないものであったと想定しておきたい。

【まとめ】

ST29 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST29 造墓・使用・埋没の経過〕



第38表　ST29横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器			須恵器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	高坏	小計	甕	小計
墓前域	1	2層	個					
			破	2 (15)		2 (15)		
		3層	個					
			破	10 (40)		10 (40)	1 (5)	1 (5)
		4層	個					
			破				1 (5)	1 (5)
		2～4層、6層上面	個				1 (4,710)	1 (4,710)
			破					
		6層上面	個					
			破	3 (30)		3 (30)		
	2	12層	個					
			破	10 (40)		10 (40)		
		12層、16層上面	個		3 (660)	3 (660)		
			破					
		16層上面	個	1 (115)	5 (890)	6 (1,005)		
			破	3 (15)		3 (15)		
総合計		個体数(重量)		1 (115)	8 (1,550)	9 (1,665)	1 (4,710)	1 (4,710)
		破片数(重量)		28 (140)		28 (140)	2 (10)	2 (10)
		総重量		(255)	(1,550)	37 (1,805)	(4,720)	3 (4,720)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

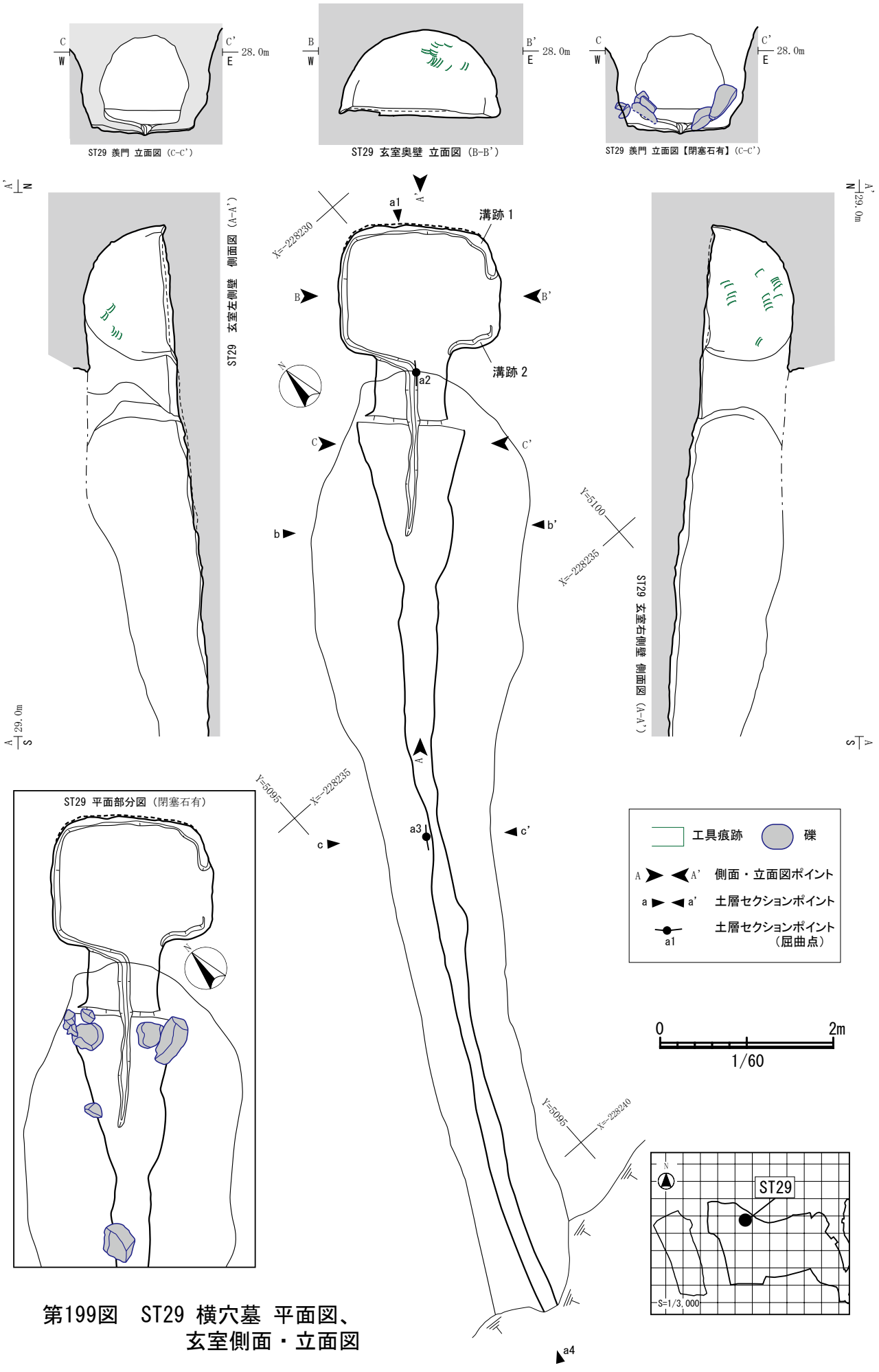
2. 金属製品

種別				金属製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	刀子	小計
墓前域	-	6層上面	掲	1	1
			非掲		
器種別総合計		掲載遺物点数		1	1
		非掲載遺物点数			
		総点数		1	1

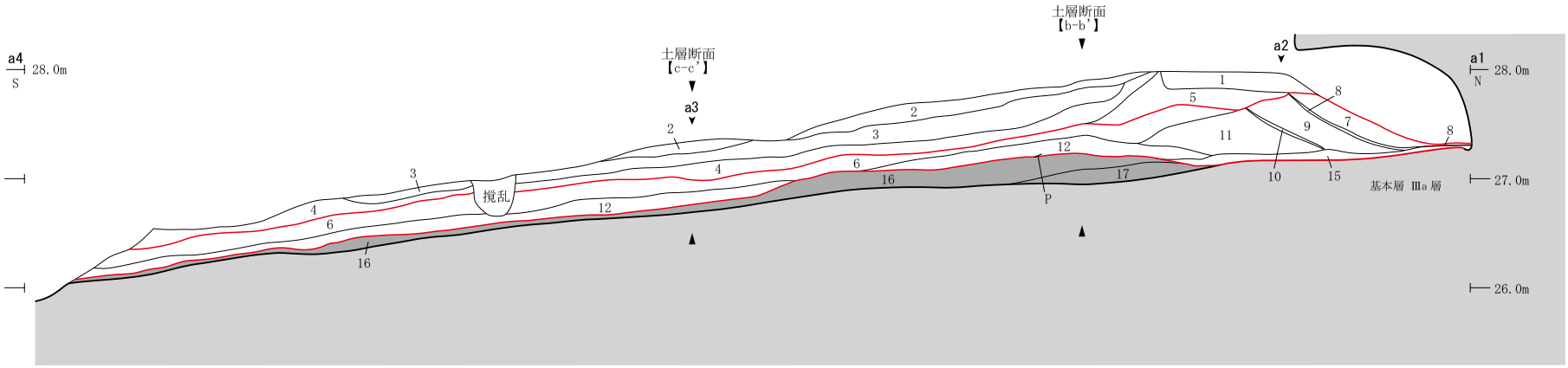
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。

3. 閉塞石観察表

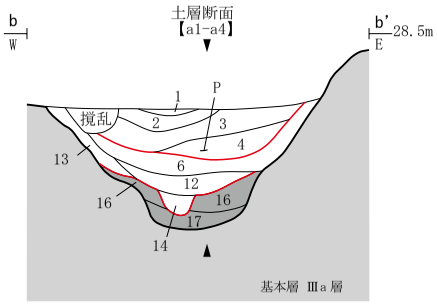
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	18	12	3	1.2
花崗閃緑岩	角礫	24	13	8	2.6
花崗閃緑岩	角礫	23	14	4	2.0
花崗閃緑岩	角礫	23	13	8	4.3
花崗閃緑岩	角礫	35	35	15	34.4
花崗閃緑岩	角礫	62	27	10	36.6
アプライト花崗岩	角礫	45	30	20	49.0
頁岩	角礫	15	12	4	1.3
頁岩	円礫	16	16	6	5.2
頁岩	角礫	40	30	20	35.2
合計:10点／重量(kg)＝					171.8



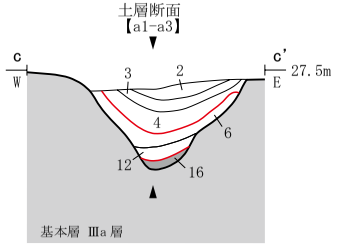
第199図　ST29 横穴墓 平面図、
玄室側面・立面図



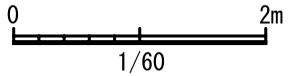
ST29 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3-a4〕



ST29 墓前域 土層断面〔b-b'〕



ST29 墓前域 土層断面〔c-c'〕

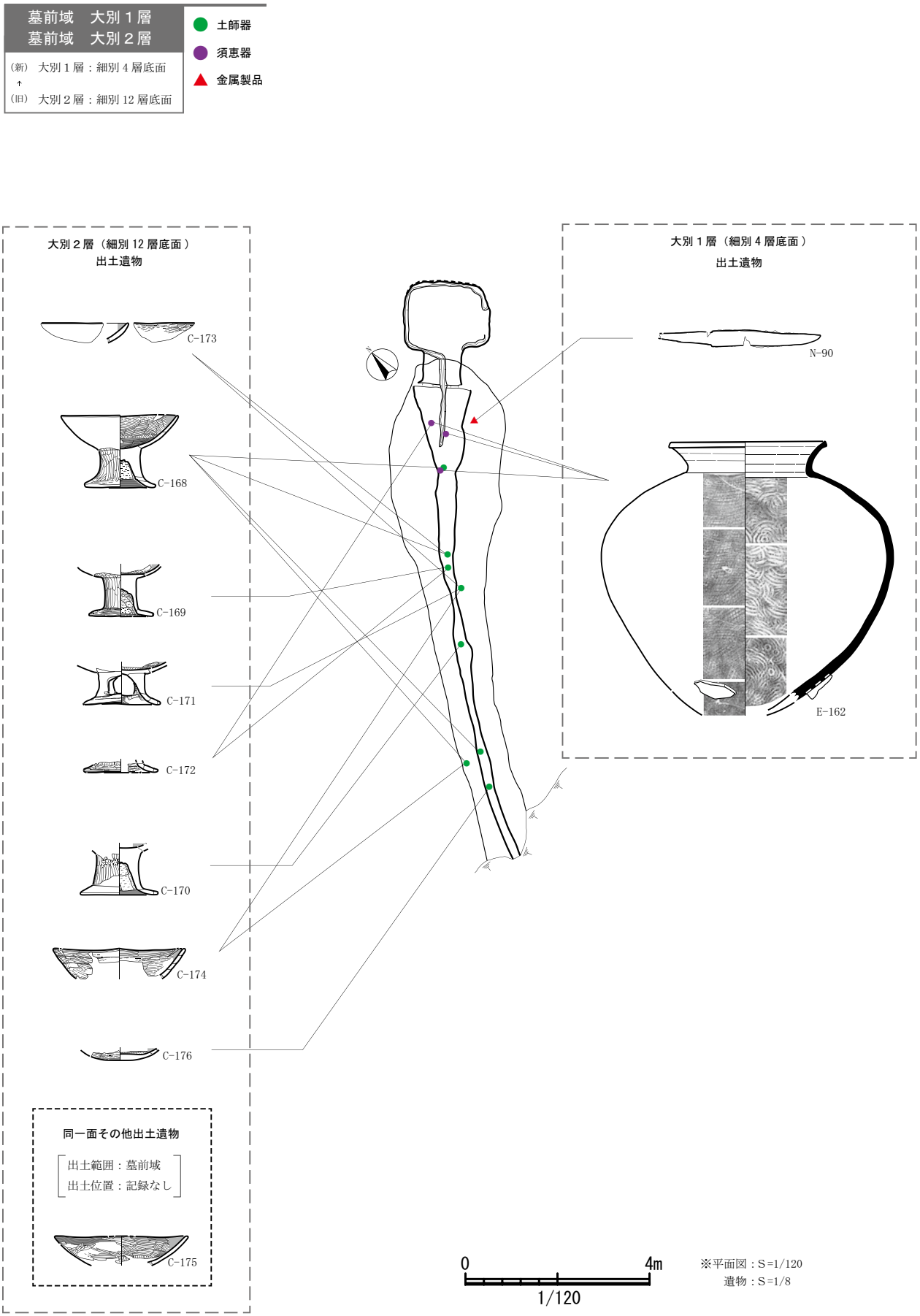


【土層図中の表記】

- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- P ：土器類
- ：土層断面の屈曲点
- ：各土層断面の交点

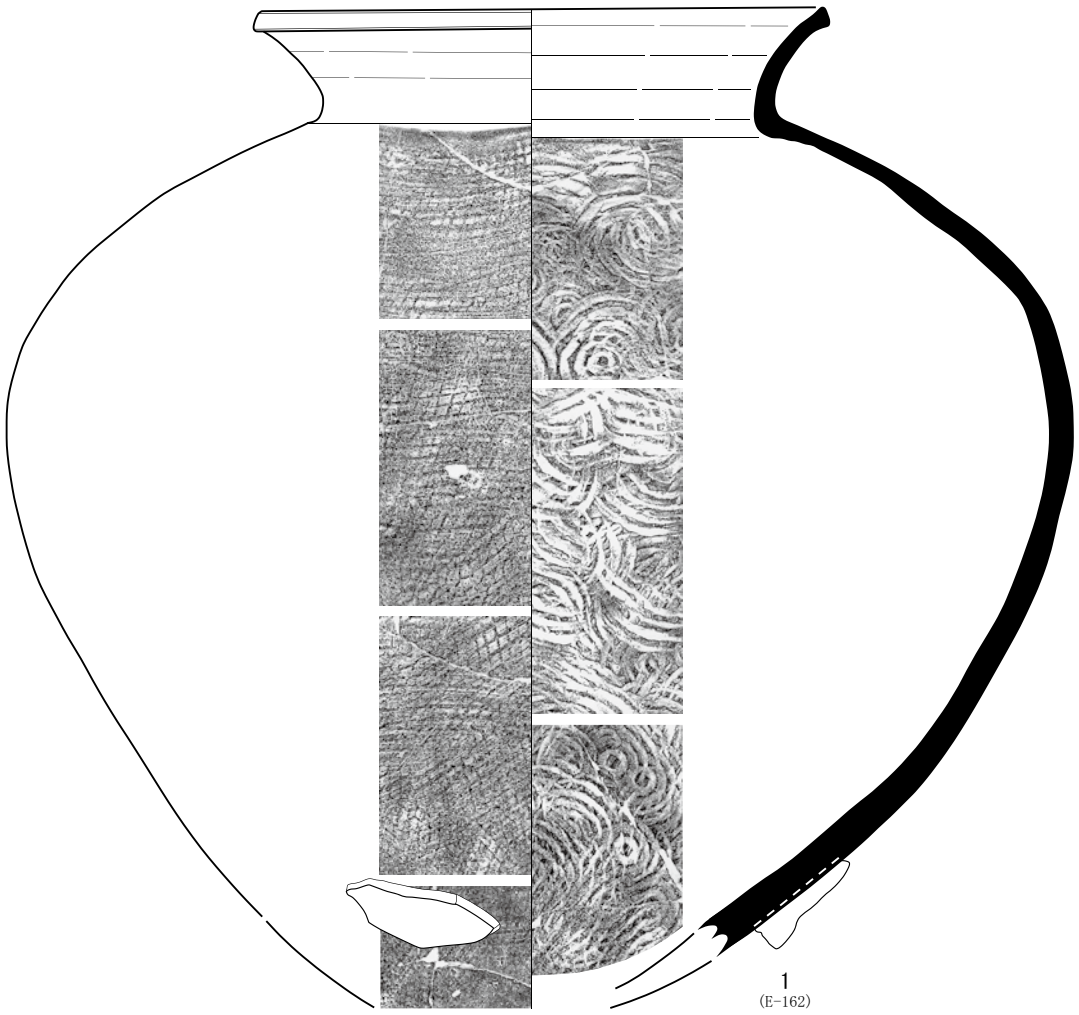
細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック多量含む。天井崩落土。	1	自然堆積層
2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック含む。		
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック・炭化物片微量含む。		
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片含む。		
5	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック（小）少量含む。		
6	灰黄褐色(10YR5/2) 暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山ブロック含む。	2	自然堆積層
7	灰黄色(2.5Y6/2)	砂質シルト	地山ブロック（小）少量含む。		
8	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒子少量含む。		
9	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック多量含む。天井崩落土。		
10	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック少量含む。		
11	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック多量含む。天井崩落土。		
12	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック・粒子含む。		
13	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	均一層		
14	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロック少量含む。		
15	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	地山ブロック（小）少量含む。		
16	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	砂質シルト土、地山ブロック（小）多量含む。	3	人為堆積層（整地層）
17	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山ブロック多量含む。		

第 200 図　ST29 横穴墓 土層断面図

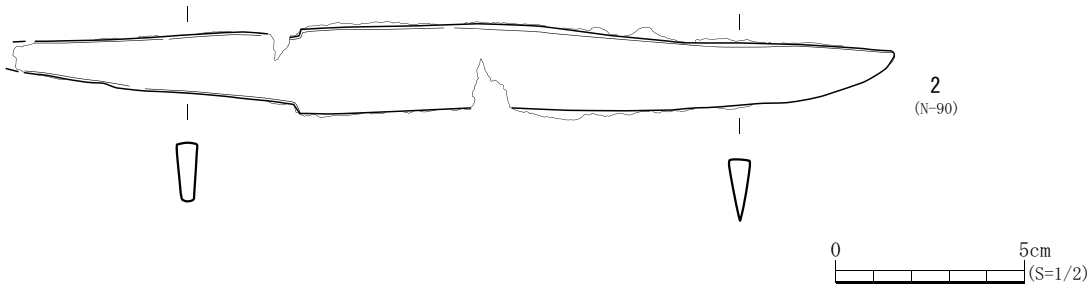


第201図　ST29 横穴墓 遺物出土状況図

墓前域　大別１層



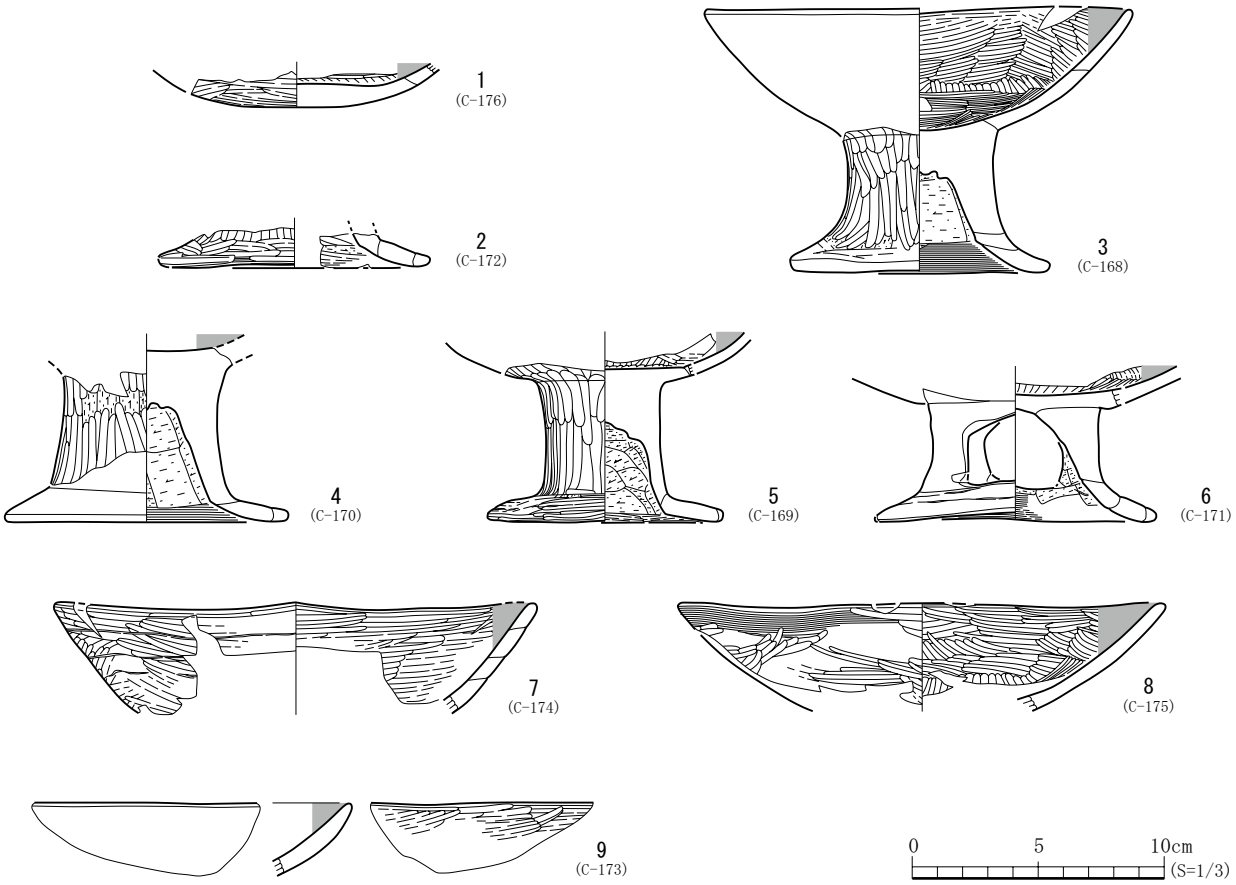
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	2・3・4層 6層上面	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部格子状タタキ→カキメ？・底部格子状タタキ→ナデ 内面：口頸部ロクロナデ・体部～底部当て具痕(同心円) 【法量】口径22.3cm・残存高39.8cm・器厚0.5～1.4cm	E-162	248-2 270-8 270-9



No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
2	墓前域	6層上面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]残存長23.3cm　[刃部]長さ15.7cm・幅2.2cm　[茎部]残存長7.6cm 【特記事項】不均等両関(斜角)・鉄製	N-90	313-5

第202図　ST29 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類・金属製品 －

墓前域　大別２層



※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	16層上面	土師器 坏	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】残存高1.7cm・器厚0.4～0.9cm	C-176	200-6
2	墓前域	12層 16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ 【法量】脚裾部径(10.8)cm・残存高1.6cm・器厚0.5～0.6cm	C-172	214-5
3	墓前域	12層 16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[坏部]口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ [脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理 [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】坏部口径(16.7)cm・器高10.6cm・脚裾部径10.3cm・器厚0.4～1.7cm	C-168	214-1
4	墓前域	12層 16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理 [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】脚裾部径(11.2)cm・残存高6.8cm・器厚0.6～2.4cm	C-170	214-3
5	墓前域	16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理 [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 【法量】脚裾部径9.4cm・残存高7.5cm・器厚0.4～1.3cm	C-169	214-2
6	墓前域	16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ？・裾部ヘラミガキ？・2方透孔・磨滅 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理 [脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ・磨滅 【法量】脚裾部径11.2cm・残存高6.2cm・器厚0.5～2.2cm	C-171	214-4
7	墓前域	16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】坏部口径(18.8)cm・残存高4.6cm・器厚0.5cm	C-174	213-13
8	墓前域	16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】坏部口径(19.0)cm・残存高4.3cm・器厚0.4～0.6cm	C-175	213-14
9	墓前域	16層上面	土師器 高坏	【技法】外面：磨滅のため調整不明、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.4～0.6cm	C-173	213-12

第203図　ST29 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

30 号横穴墓（ST30）（第 204～214 図、第 39 表、第 4 分冊 写真図版 86～89）

【検出位置】　A-2 区西側の標高 27～29m の丘陵南斜面に位置する。同斜面の西には ST31、南東には ST29 が隣接している。

【重複関係】　墓前域末端の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。精査前に玄室入口と墓前域範囲特定のため、遺構堆積層上部の掘削を行い、その後、平面プラン確定および土層断ち割りを行った。したがって、以下で報告する堆積層は、遺構全面を覆う堆積層全ての情報を網羅したものでない。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の全てと羨道の一部の天井が残存し、玄門は南東側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 205 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 16.94m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.36m、玄室の中央幅 2.53m、奥壁幅 2.08m、前壁幅 2.53m、左側壁幅 2.21m、右側壁幅 1.87m、玄室底面から天井の高さ 1.59m を測る。床面積は約 5.2 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥壁幅に対し前壁幅がやや広い。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁中央に位置し、立面形はやや胴が張る逆 U 字形を呈する。幅 0.82m、高さ 1.33m を測る。

工 具 痕：各壁に幅 0.07～0.12m 前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は、側壁と奥壁・前壁が縦方向、天井部が放射状である。

付属施設：奥壁・両側壁・前壁の壁際と玄室の中央を巡る溝跡 1 を確認した。その規模は幅 0.07～0.15m・深さ 0.06m であり、羨門墓前域側に位置する溝跡 2 と接続する。排水溝と考えられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 1.30m、玄室側の幅 0.82m、墓前域側の幅 0.90m、玄門側の高さ 1.33m、中央部の高さ 1.28m を測る。

立 面 形：やや胴張りの逆 U 字形を呈していたと考えられる。

天　　井：平坦である。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：羨道底面中央で玄門から続く溝跡 1 を確認した。溝跡 1 は墓前域側で溝跡 2 と接続する。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.12m の段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ 2.05m、幅 0.20～0.25m、深さ 0.05～0.10m の溝跡 2 を確認した。その溝上に、0.12×0.08×0.06m（0.5kg）～0.44×0.37×0.22m（59.9kg）の角礫・円礫 17 個（総重量 324.3 kg）が残存しており、溝上面から高さ 0.4m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材

は花崗閃緑岩16個、アプライト花崗岩1個である（第39表4)。溝跡2と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長13.28m、上幅1.6～3.6m、下幅1.15～2.00mを測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で1.1m前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。羨門から約5.3m下方の地点で南方向に屈曲して端部に至る。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は0.9m程度である。

【堆積層】　ST30横穴墓を覆う堆積層は細別19層・大別5層に分けた（第206図)。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別1層〕

大別1層（細別1～9層）はST30の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別2層の層理面で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別1層堆積後、ST30玄室入口の大部分が埋没したと考えられる。

〔大別2・3層〕

大別2層（細別10～14層）はST30の羨道～墓前域に堆積する自然堆積層、大別3層（細別15層）は墓前域の羨門付近に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別2層のうち、細別10～13層には羨道天井の崩落土とみられる地山ブロックが多く含まれる。大別2層堆積後、羨道天井の大部分が崩落したと考えられる。大別3層は整地層とみられ、この整地層上面と大別2層の底面付近で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別4・5層〕

大別4層（細別16～18層）はST30の玄室と墓前域に堆積する自然堆積層、大別5層（細別19層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別5層は横穴墓の掘方底面に敷き詰められた造墓直後の整地層と考えられ、この上面と横穴墓掘方底面で遺物が出土した。この面で初葬に関連する祭祀行為が行われたものと推定される。

【出土遺物】土師器63点（8個体、破片55点)、須恵器176点（5個体、破片171点※うち1個体・破片23点は遺構間接合遺物)、玉製品2点、金属製品7点(その他不明小破片多数)、弥生土器12点が出土した（第39表1～3)。人骨等は残存していない。弥生土器は周辺から流入したものと考えられる。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれる。土師器小型坏1個体・坏4個体・鉢3個体、須恵器長頸壺1個体・平瓶1個体・甕3個体、ガラス製小玉1点・丸玉1点、蕨手刀1点の合計16点を図示した（第209～214図)。

出土遺物は、出土層位から**A：玄室大別1層（細別2層）出土遺物**、**B：墓前域大別1層（細別8層底面）出土遺物**、**C：大別2層（細別14層底面）出土遺物**、**D：大別3・4層（細別15・16層）・玄室底面出土遺物**の4群に分かれる。加えて、ST30では、別の横穴墓（ST31・32）で破砕された須恵器破片の一部がST30に混入したと考えられる遺物24点（第39表2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**E：大別1層の堆積途中（細別8層上半部）**に混入したものと、**F:大別2層の堆積途中（細別13層・14層上半部）**に混入したものがある。以上をまとめると、ST30関連遺物は、古い順からD→C→F→B→E→Aの6段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別3・4層（細別15・16層）・玄室底面出土遺物〕（第212～214図）

大別3層（細別15層）の堆積土中、大別4層（細別16層）底面、玄室底面で出土した遺物である（前項Dに相当)。大別3層（整地層）出土遺物は、本来大別4層に帰属していたものが整地の際に混入した

ものと考えられる。土師器、玉製品、金属製品が出土した。出土位置は玄室と墓前域に分かれる。

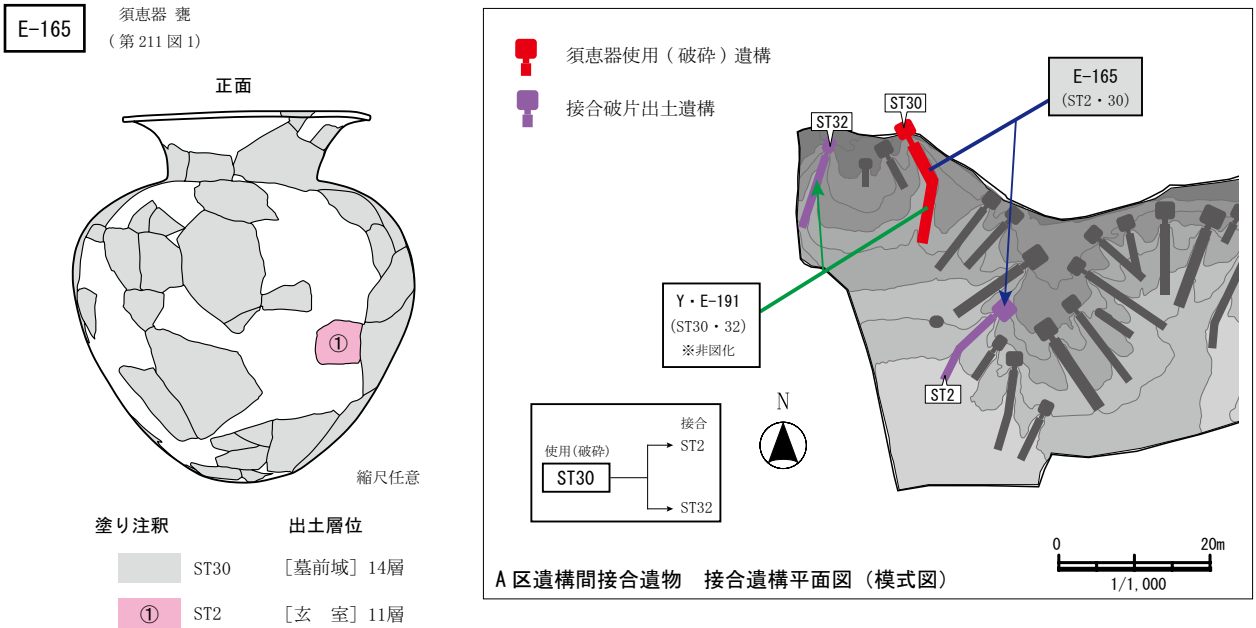
玄室では土師器、玉製品、金属製品が出土した。内訳はガラス製小玉 1 点（第 213 図 4）・丸玉 1 点（第 213 図 5）、蕨手刀 1 点（第 214 図 1）と図示できなかった土師器坏小破片、鉄刀・刀子破片、不明鉄製品破片である。金属製品と玉製品については、初葬に関連する遺物とみられる。蕨手刀は玄室前壁の壁際で出土しており、原位置を保っているかは判断ができなかった（第 208 図/写真図版 89-6）。追葬時に壁際に寄せられた可能性も考えられる。

墓前域では土師器小型坏 1 個体（第 212 図 6）・坏 3 個体（第 212 図 3～5）・鉢 3 個体（第 213 図 1～3）と図示できなかった土師器坏破片が出土した（第 39 表 1）。土器類は墓前域上半部の範囲内を中心に分布しており、全て破片の状態で出土している（第 208 図）。出土状況からみて、これらは祭祀の際に破砕されたものと考えられる。ST30 の初葬に伴い実施された墓前祭祀で使用された遺物の可能性が高い。

〔大別 2 層（細別 14 層底面）出土遺物〕（第 210～212 図）

大別 2 層（細別 10～14 層）のうち、墓前域に分布する細別 14 層の底面付近〔＝大別 3 層（細別 15 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 C に相当）。須恵器長頸壺 1 点（第 212 図 2）・平瓶 1 個体（第 212 図 1）・甕 2 個体（第 210 図 1・第 211 図 1）と図示できなかった土師器坏破片・須恵器甕破片が出土した（第 39 表 1･2）。遺物は墓前域の羨道付近に破片の状態で出土した。このうち須恵器甕 1 個体（E-165/第 211 図 1）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓（ST2）で出土している（第 204 図）。この他、第 210 図 1 の甕（E-164）と同一個体とみられる非図化の須恵器甕破片（Y・E-191）ついても ST32 出土遺物と接合関係にある（第 39 表 2）。これらは墓前域における須恵器の破砕散布行為の痕跡と考えられる。墓前域で破砕した須恵器破片は、ST30 から少なくとも 2 か所（ST2・32）の横穴墓に散布されたと推定される。

本層の同一面出土の遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と推定される。堆積土の状況から、この段階の ST30 は、ほとんど埋没しておらず、玄室への入室が可能な状態だったと考えられる。玄室内でこの段階に伴うとみられる遺物が 1 点も出土していないため断定はできないが、本段階の墓前祭祀については、ST30 の追葬に関連するものである可能性が高いとみておきたい。



第204図　ST30 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

〔大別２層（細別13層・14層上半部）出土遺物〕

大別２層（細別10～14層）のうち、墓前域に分布する細別13層と細別14層の上半部から出土した遺物である（前頁Fに相当）。須恵器甕破片21点が出土した（第39表2）。出土した須恵器破片21点は別遺構で破砕された後、ST30墓前域に混入した遺構間接合遺物であり、ST31・32由来の２者に分けられる（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST30では、**ST31由来の須恵器長頸壺（E-73／第226図1）**と接合する破片が13点（体部上半部・底部破片）、**フラスコ形瓶（E-74／第226図2）**と接合する破片が1点（体部破片）、**高台埦（E-75／第224図8）**と接合する破片が1点（口縁部破片）、**平瓶（E-76／第225図2）**と接合する破片が1点（頸部破片）、**甕（E-167＋Y・E-192／第225図1）**と接合する破片が4点（体部破片）、**ST32由来の須恵器甕（E-168／第233図1）**と接合する破片が1点（体部上半部破片）出土した。ST30からST31は直線距離で約3m西、ST32は約15m西の地点に位置する。ST32については、位置関係からみて、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。この段階に「ST32からST30の墓前域への須恵器の意図的な散布行為」が行われたと考えられる。ST31については、ST30と隣接する横穴墓であり、「単なる遺物流入」「意図的な散布」の両者の可能性がある。ST31は標高的にST30より高い地点に位置することから、雨水等による遺物流入の想定が十分可能である。ここではST31由来の遺構間接合遺物は「単なる自然流入」の可能性が高いと考えておきたい。

〔墓前域大別１層（細別８層底面）出土遺物〕（第209図）

大別１層（細別1～9層）のうち、墓前域に分布する細別８層の底面付近で出土した遺物である（前頁Bに相当）。須恵器甕１個体（第209図１）とその同一個体とみられる破片多数が出土した（第39表1）。図示した須恵器甕（E-163）は墓前域末端部付近の一定範囲内に破片で散在した状態で出土した（第207図）。墓前域における須恵器甕の破砕行為を伴う墓前祭祀が行われた痕跡と考えられる。祭祀のための整地は確認されていないことから、本面での祭祀は、大別２層堆積後の窪地を利用した墓前祭祀であったと推定される。

堆積土の状況から、この段階のST30については、羨道付近の天井が崩落し、玄室への入室が困難な状態だったと考えられ、本段階の墓前祭祀は追葬とは関連のないものであったと想定される。

〔大別１層（細別８層上半部）出土遺物〕

大別１層（細別1～9層）のうち、墓前域に分布する細別８層上半部の堆積土中から出土した遺物である（前頁Eに相当）。須恵器甕破片３点（頸部１点・体部２点）が出土した（第39表2）。この須恵器甕破片は、別の横穴墓で破砕された後、ST30の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST31由来の須恵器甕**（E-166／第223図2）**と接合する（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載）。ST31はST30と隣接する横穴墓であり、「単なる自然流入」の可能性も考えられるが、この甕（E-166）の破片はST2・SK47でも出土している。したがって、E-166の甕はST31で破砕された後、意図的に別遺構に散布された遺物であることは確実である。ST30出土の甕破片についても、「ST31から意図的に散布されたもの」である可能性が高い。

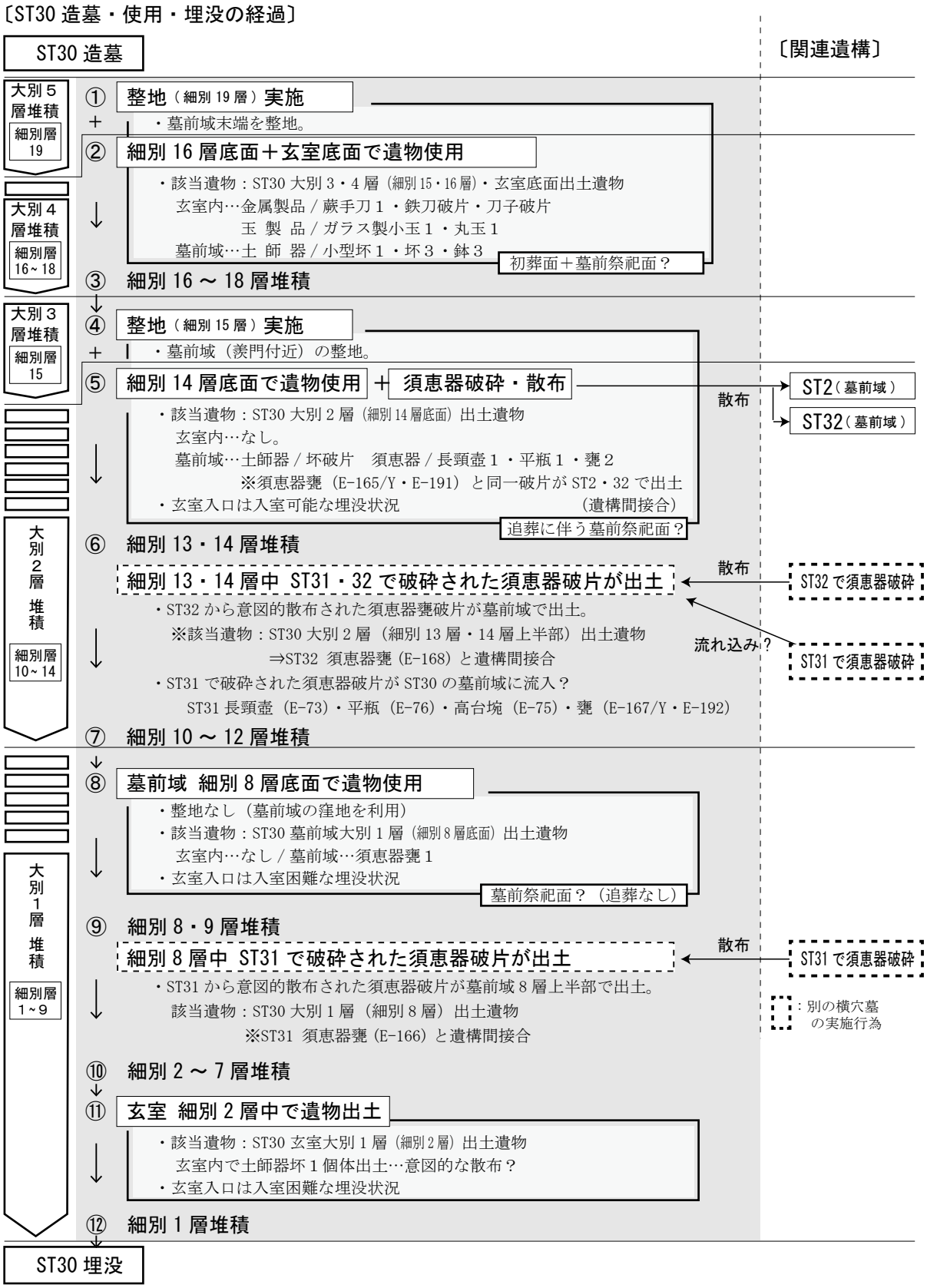
〔玄室大別１層（細別２層）出土遺物〕（第209図）

大別１層（細別1～9層）のうち、玄室に分布する細別２層の堆積土中から出土した遺物である（前頁Aに相当）。土師器坏１個体（第209図1）と図示できなかった須恵器甕破片が出土した（第39表1）。

堆積土の状況から、この段階のST30については、玄室入口の大部分が埋没し、わずかに開口している状態であったと考えられる。土師器坏はこの玄室入口から意図的に内部に散布されたものとみられる。

【まとめ】

ST30 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。



第39表　ST30横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類・玉製品－遺構単独出土－

種別				土師器			須恵器				弥生土器		玉製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体・破片	坏 小型坏	鉢	小計	長頸壺	平瓶	甕	小計	壺・甕	小計	ガラス製 丸玉・小玉	小計
玄室	1	2層	個	1 (135)		1 (135)								
			破						1 (50)	1 (50)				
	4	17・18層	個										2 (1.048)	2 (1.048)
			破	4 (10)		4 (10)								
墓前域	－	検出面	個											
			破	2 (10)		2 (10)			17 (235)	17 (235)				
	1	4層	個											
			破	1 (5)		1 (5)			2 (15)	2 (15)				
		5層	個											
			破						9 (230)	9 (230)	1 (10)	1 (10)		
		8層	個						1 (3,670)	1 (3,670)				
			破						64 (465)	64 (465)	7 (155)	7 (155)		
		9層	個											
			破								1 (5)	1 (5)		
	2	11層	個											
			破	6 (95)		6 (95)					3 (20)	3 (20)		
		14層	個				1 (730)			1 (730)				
			破	6 (50)		6 (50)			22 (170)	22 (170)				
		13・14層	個					1 (1,495)	1 (1,980)	2 (3,475)				
			破	9 (160)		9 (160)			33 (700)	33 (700)				
	3	15層	個	4 (465)	2 (445)	6 (910)								
			破	3 (15)		3 (15)								
	4	16層	個		1 (185)	1 (185)								
			破	24 (135)		24 (135)								
総合計	個体数(重量)			5 (600)	3 (630)	8 (1,230)	1 (730)	1 (1,495)	2 (5,650)	4 (7,875)			2 (1.048)	2 (1.048)
	破片数(重量)			55 (480)		55 (480)			148 (1,865)	148 (1,865)	12 (190)	12 (190)		
	総重量			(1,080)	(630)	63 (1,710)	(730)	(1,495)	(7,515)	152 (9,740)	(190)	12 (190)	(1.048)	2 (1.048)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の( )内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (13,745)	◆ST2　11層(玄室) ◆ST30　14層(墓前域)	ST30	◆ST2:1点 ★ST30:95点	E 165	第211図1
須恵器	甕	(90)	◆ST30　13層(墓前域) ◆ST32　14・15層(墓前域)	ST30	★ST30:1点 ◆ST32:1点 ※E-164甕(ST30)と同一個体破片	Y・E 191	－
須恵器	甕	1 (10,300)	◆ST2　検出面 ◆ST30　8層上半部(墓前域) ◆ST31　2層(墓前域) ◆A区SK47　1層	ST31	◆ST2:1点 ◆ST30:3点 ★ST31:53点 ◆SK47:4点	E 166	第223図2
須恵器	甕	1 (11,980)	◆ST30　14層(墓前域) ◆ST32　9層、14層上面(墓前域)	ST32	◆ST30:1点 ★ST32:49点	E 168	第233図1
須恵器	長頸壺	1 (985)	◆ST30　14層上半部(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:13点 ★ST31:56点	E 73	第226図1
須恵器	高台埦	1 (300)	◆ST30　14層上半部(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:1点 ★ST31:14点	E 75	第224図8
須恵器	平瓶	1 (2,015)	◆ST30　13層(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:1点 ★ST31:24点	E 76	第225図2
須恵器	甕	1 (1,585)	◆ST30　13層、14層上半部(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:4点 ★ST31:26点	E 167 Y・E 192	第225図1

※アンダーラインがあるもの【 例:ST1　検出面 】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST30出土須恵器の総数
(表39-1)遺構単独出土　4個体＋破片148点
＋
(表39-2)遺構間接合遺物　1個体＋破片23点　＝　176 点

3. 金属製品

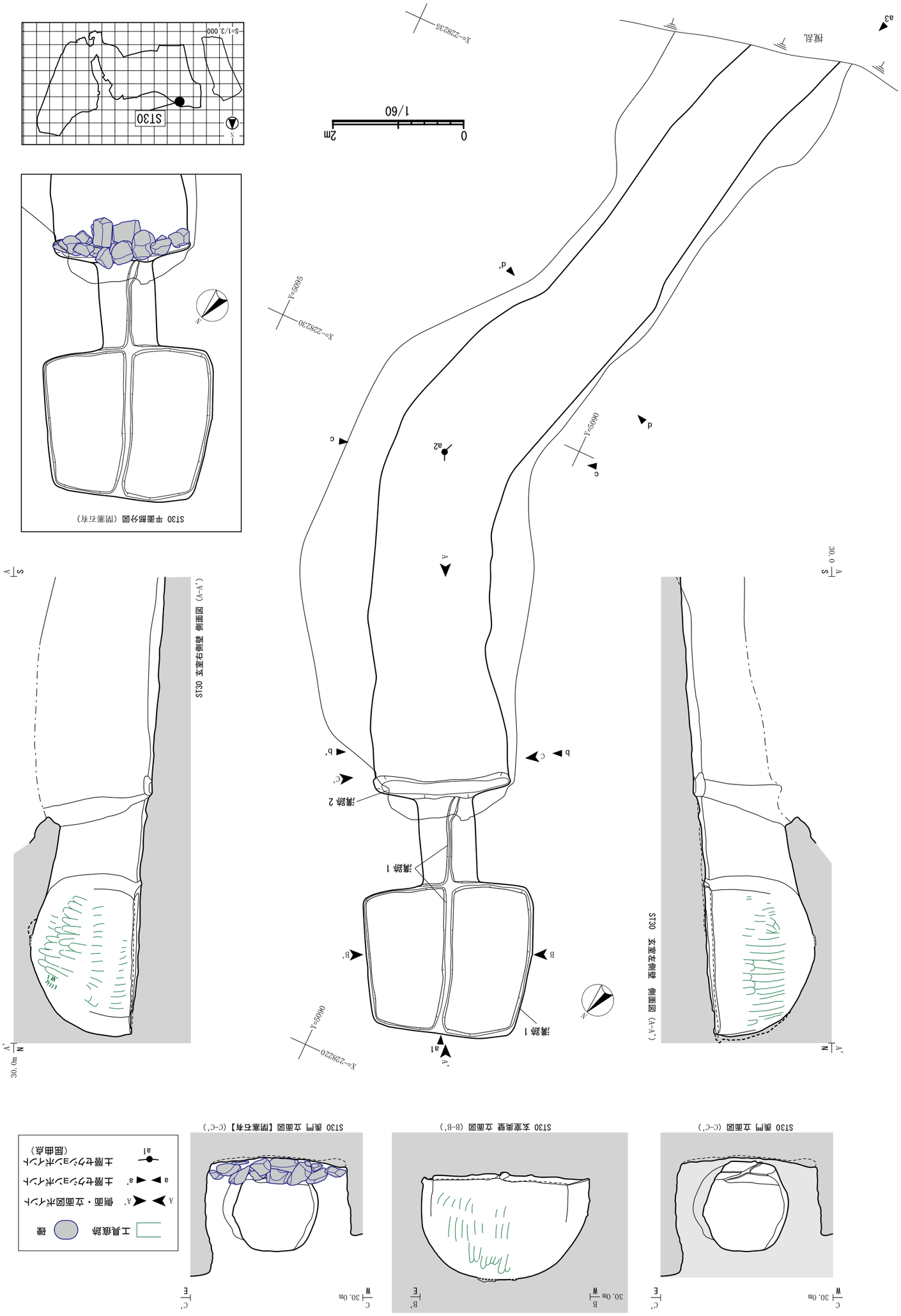
種別			金属製品				
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載／非掲載	鉄刀	蕨手刀	刀子	不明鉄製品	小計
玄室	4	17層 18層	掲					
			非掲	1		1	破片多数	2 ＋破片多数
		底面	掲		1			1
			非掲					
墓前域	1	検出面	掲					
			非掲				3	3
		9層	掲					
			非掲				1	1
器種別総合計	掲載遺物点数				1			1
	非掲載遺物点数			1		1	4＋破片多数	6 ＋破片多数
	総点数			1	1	1	4＋破片多数	7 ＋破片多数

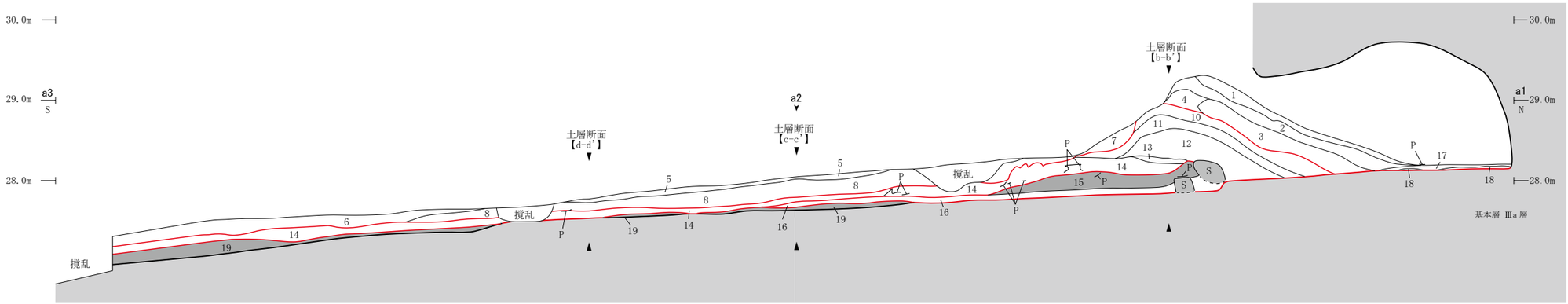
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST30出土不明小片の重量16.7g)

4. 閉塞石観察表

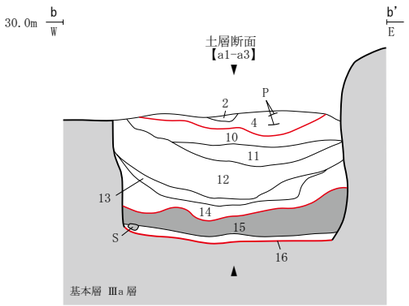
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	12	8	6	0.5	花崗閃緑岩	角礫	16	12	7	2.9	花崗閃緑岩	角礫	26	20	13	16.8	花崗閃緑岩	角礫	35	30	25	41.9
花崗閃緑岩	角礫	15	12	3	0.9	花崗閃緑岩	角礫	24	13	10	2.9	花崗閃緑岩	角礫	27	20	20	18.4	花崗閃緑岩	角礫	38	38	15	53.2
花崗閃緑岩	角礫	10	10	7	1.2	花崗閃緑岩	角礫	28	18	10	5.7	花崗閃緑岩	円礫	35	22	14	18.6	花崗閃緑岩	角礫	44	37	22	59.9
花崗閃緑岩	角礫	20	18	4	2.3	花崗閃緑岩	角礫	22	15	10	6.4	花崗閃緑岩	角礫	38	20	18	19.1	アプライト花崗岩	角礫	43	22	22	47.3
												花崗閃緑岩	円礫	34	28	10	26.3	合計:17点／重量(kg)＝					324.3

第205図　ST30 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

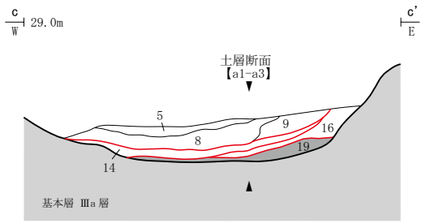




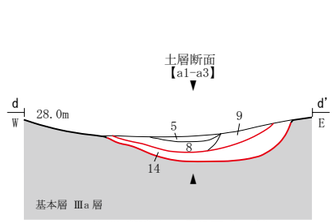
ST30 玄室～墓前域 土層断面〔a1-a2-a3〕



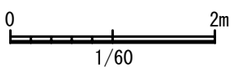
ST30 墓前域 土層断面〔b-b'〕



ST30 墓前域 土層断面〔c-c'〕



ST30 墓前域 土層断面〔d-d'〕

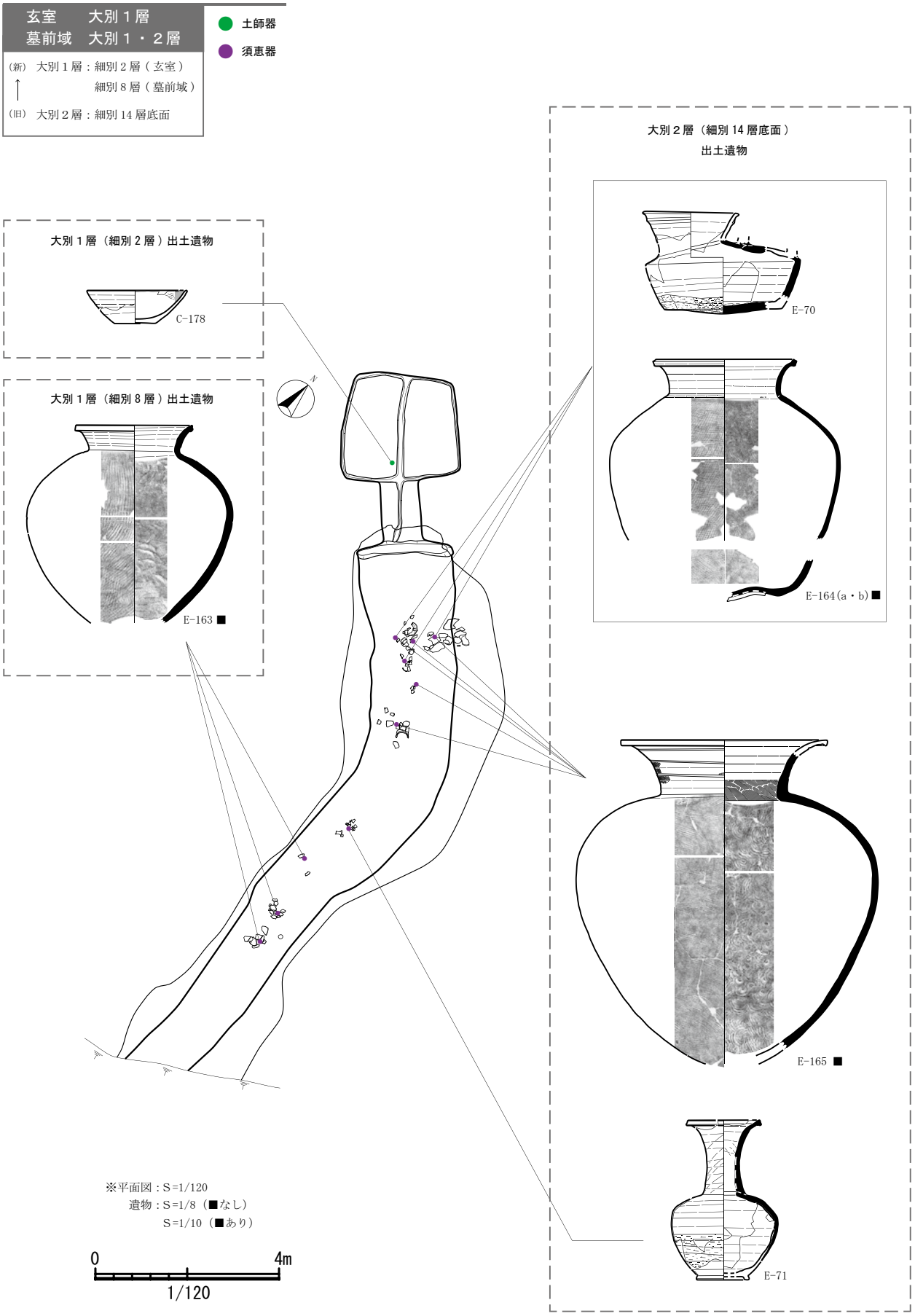


【土層図中の表記】

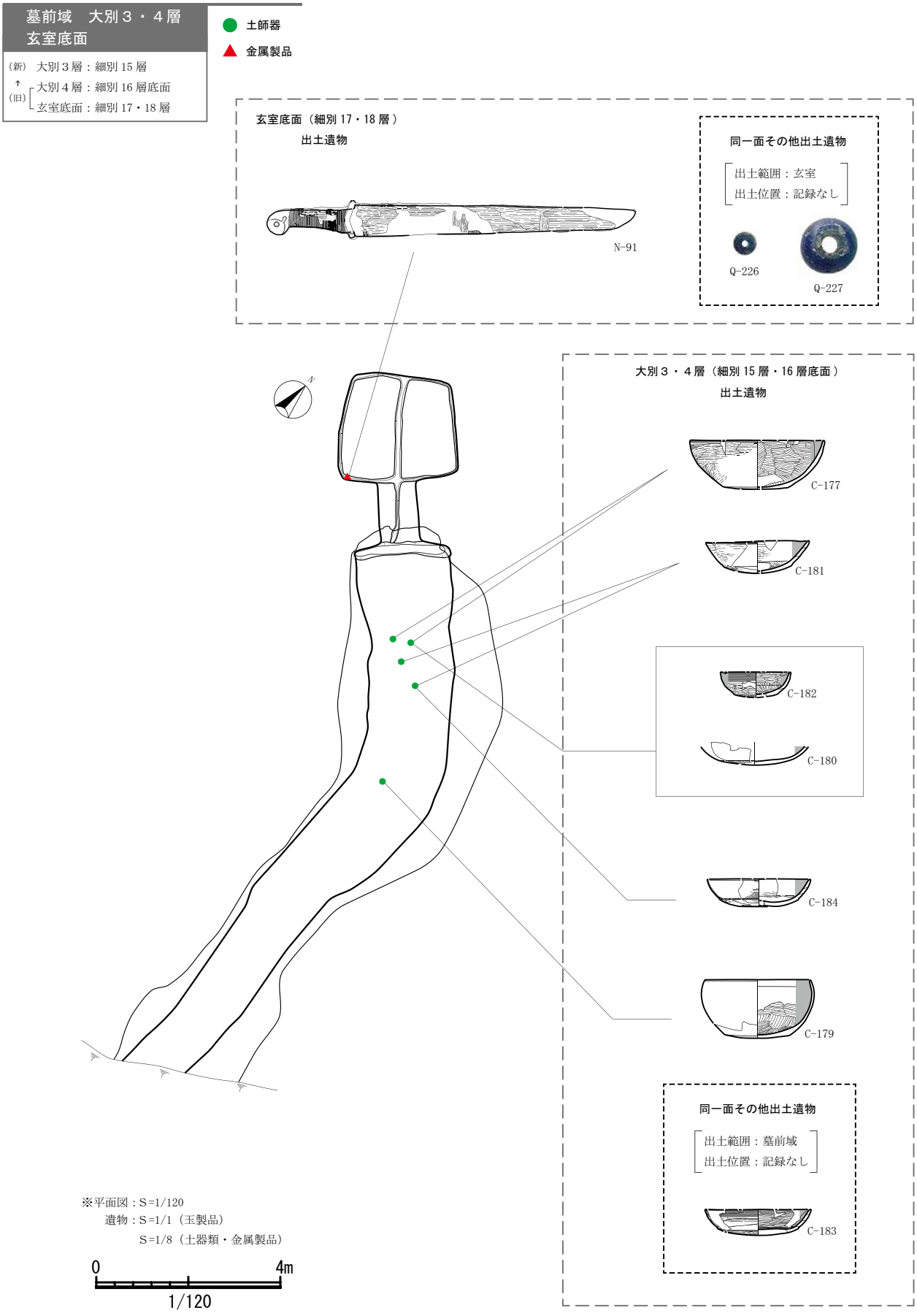
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- P　：土器類
- ：土層断面の屈曲点
- ：各土層断面の交点

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック含む。	1	自然堆積層
2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト			
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト			
5	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック（小～大）多く含む。		
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト			
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片少量含む。		
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト			
9	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片少量含む。		
10	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック（小）少量含む。	2	自然堆積層
11	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト	地山ブロック（中）少量含む。		
12	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト	地山ブロック（小～大）少量含む。		
13	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック（大）部分的に含む。		
14	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロックを含む。		
15	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック（壁・天井の崩落土）を多く含む。	3	人為堆積層
16	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	砂質シルト土・地山ブロック含む。	4	自然堆積層
17	褐灰色(10YR6/1)	粘土質シルト	玄室内堆積土。		
18	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	玄室内堆積土。		
19	灰黄色(2.5Y7/2)	シルト	地山ブロック多量含む。	5	人為堆積層

第 206 図　ST30 横穴墓 土層断面図

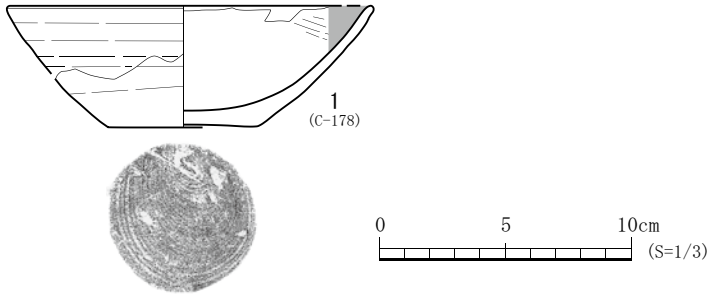


第207図　ST30 横穴墓 遺物出土状況図（1）－大別１・２層－

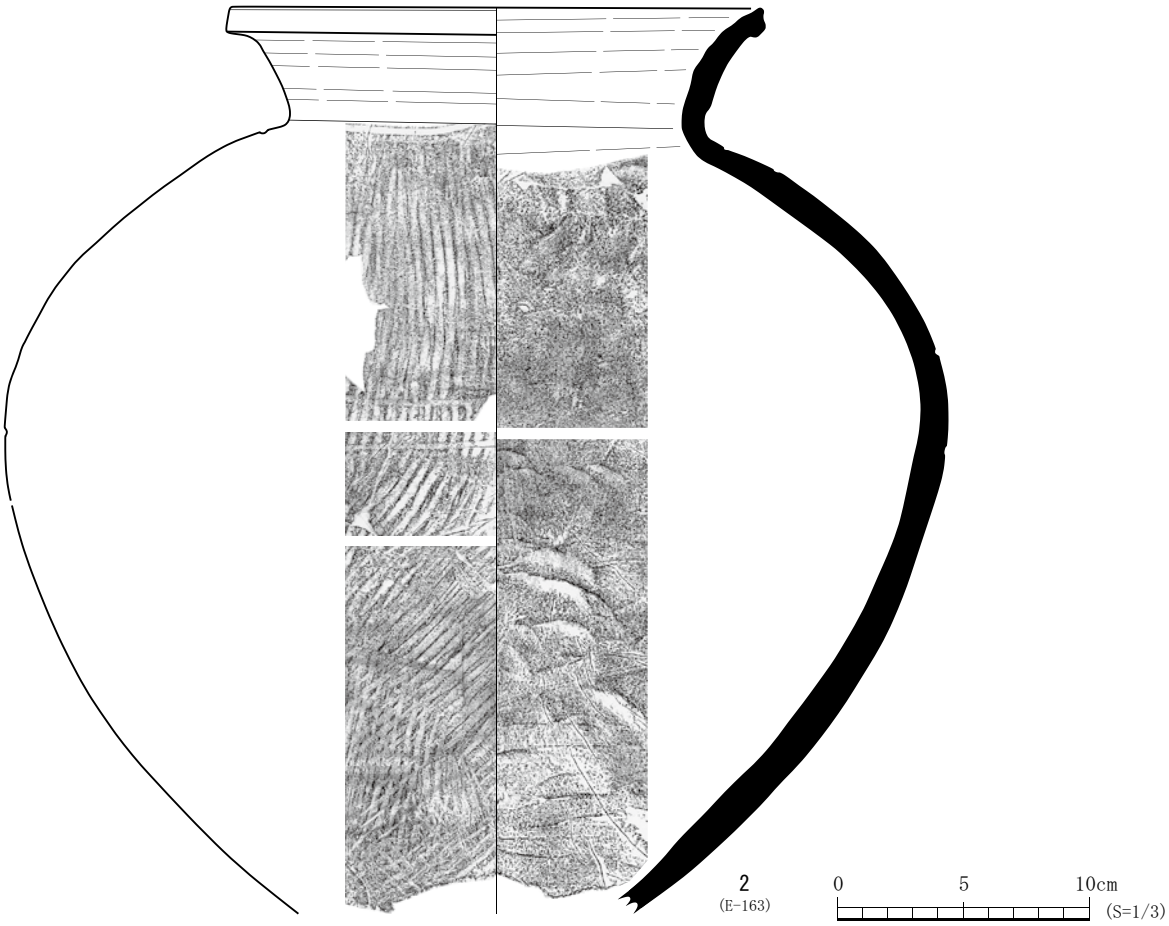


第208図　ST30 横穴墓 遺物出土状況図 (2)　－ 大別３・４層、玄室底面－

玄室　大別１層



墓前域　大別１層

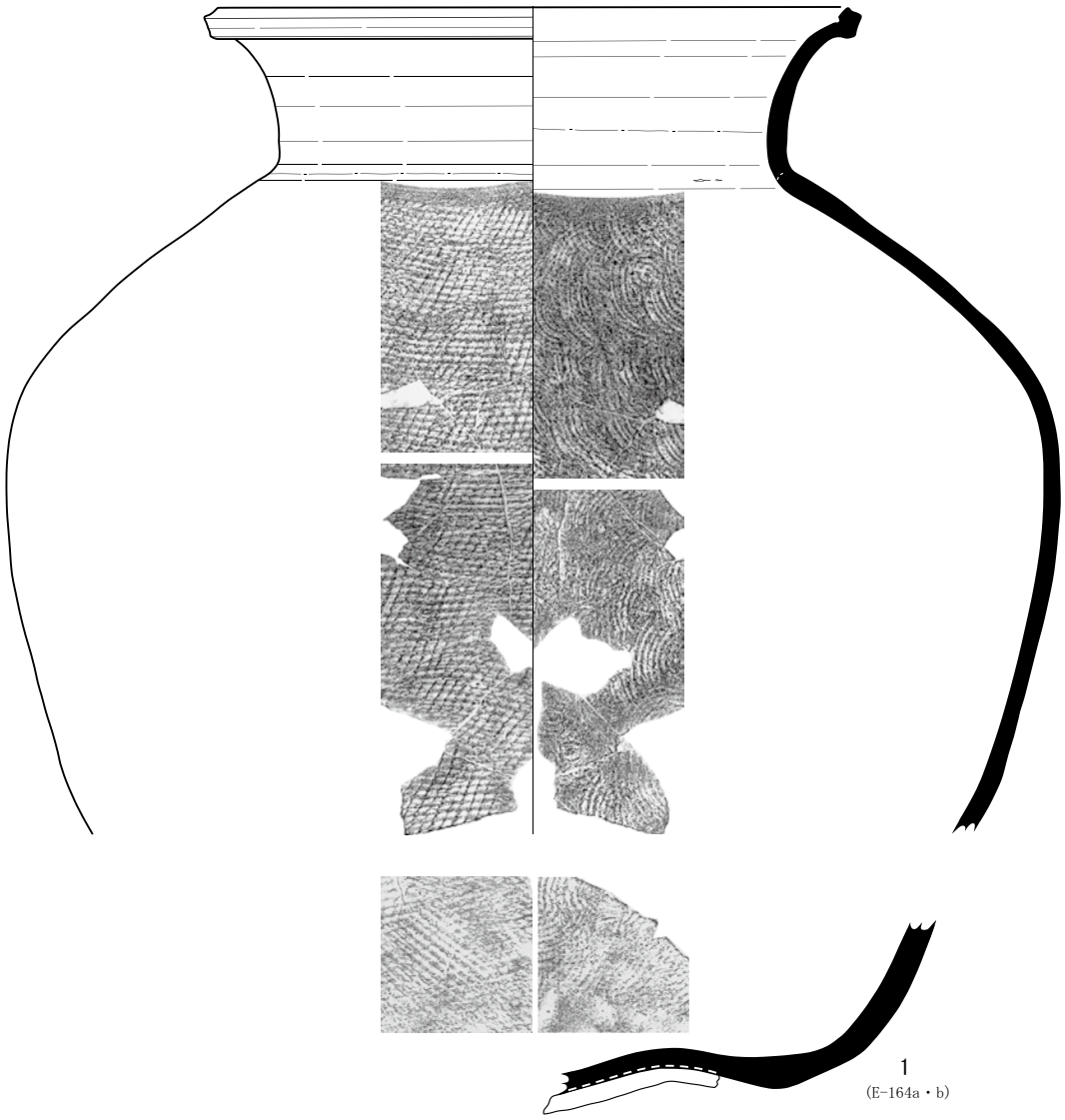


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室	2層	土師器 坏	【技法】外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(14.4)cm・器高4.8cm・底径6.0cm・器厚0.3～1.0cm	C-178	200-10
2	墓前域	8層	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部上半平行タタキ→沈線・体部下半平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕→ナデ 【法量】口径21.0cm・残存高36.1cm・器厚0.7～1.3cm	E-163	249-5 270-10

第209図　ST30 横穴墓 出土遺物 (1)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層



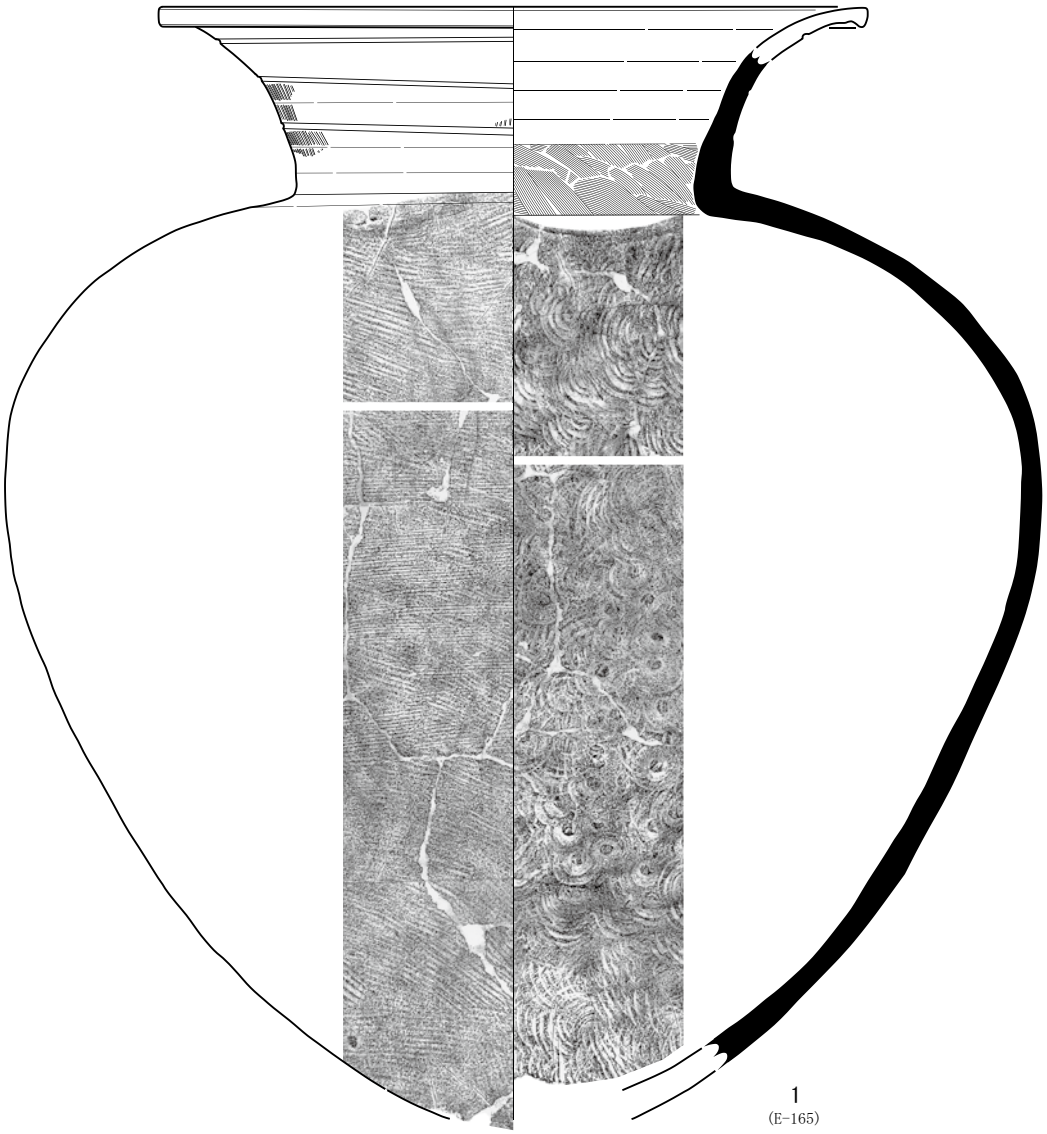
0　5　10cm
(S=1/3)

※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	13層 14層	須恵器 甕	【技法】外面：[E-164a]口頸部ロクロナデ・体部格子状タタキ [E-164b]底部格子状タタキ 内面：[E-164a]口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) [E-164b]底部当て具痕(同心円) 【技法】[E-164a]口径(25.2)cm・残存高32.9cm・器厚0.4～0.9cm [E-164b]器厚0.8～1.0cm 【特記事項】底部外面に焼台付着、E-164a(口縁部～体部)・E-164b(底部) 遺構間接合の同一個体破片有り[非図化／ST30(主体)＋ST32]	E-164 a・b	249-3 249-4 270-11 270-12

第210図　ST30 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層

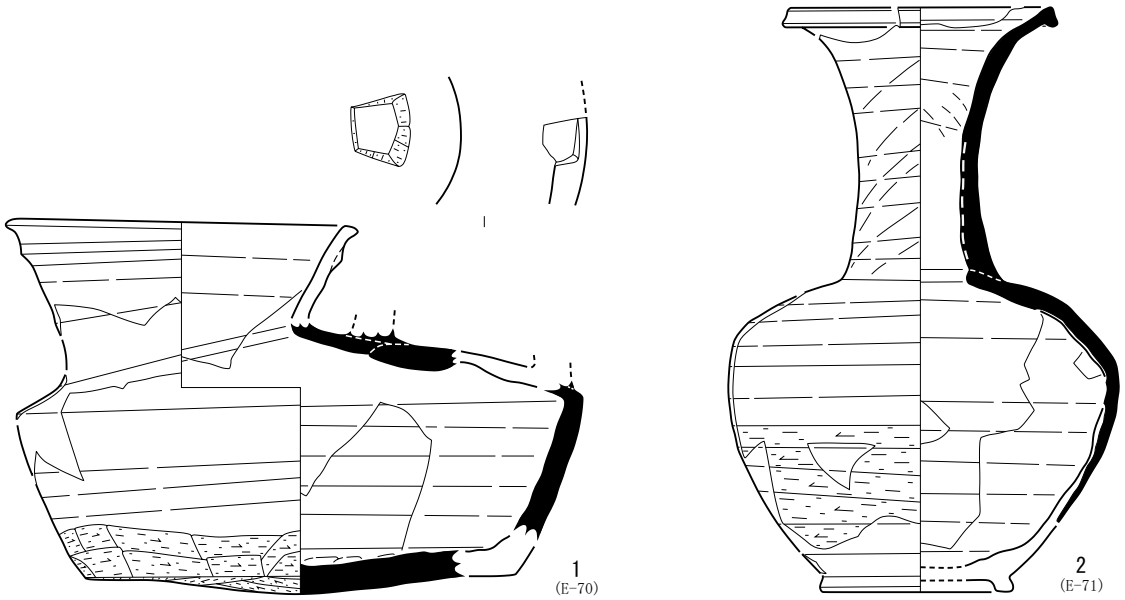


0　5　10cm
(S=1/4)

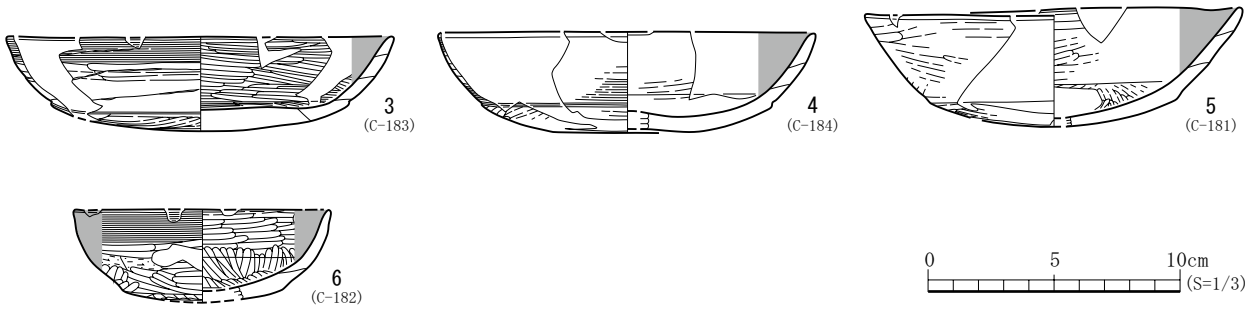
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	[ST2] 玄室 ＋ [ST30] 墓前域	◆ST2　11層 ◆ST30　14層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST30(主体)**＋ST2 【技法】外面：口頸部ハケメ→ロクロナデ→沈線・体部上半平行タタキ→カキメ 体部下半平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・頸部指ナデ・体部当て具(同心円) 【法量】口径37.3cm・残存高59.1cm・器厚0.8～2.0cm	E-165	249-6 270-13 270-14

第211図　ST30 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層



墓前域　大別３・４層

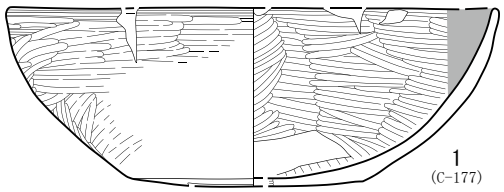


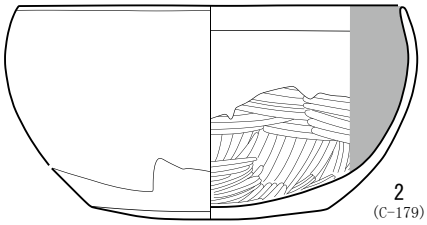
※(　) 内：推定値

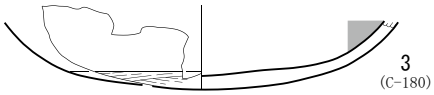
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	13層 14層	須恵器 平瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・突帯貼付・口縁端部外方へつまみ出し 体部ロクロナデ・把手貼付(ヘラ削り調整)・円盤閉塞 体部下端～底部手持ちヘラ削り 内面：口縁部～体部ロクロナデ・底部ナデ／オサエ 【法量】口径(13.0)cm・器高14.8cm・底径17.0cm・器厚0.5～1.3cm・口縁部最大径(14.0)cm 体部最大径22.5cm 【特記事項】把手断面：方形、焼台接地痕？、風船技法を行う際の空気孔有り	E-70	230-1 230-2
2	墓前域	14層	須恵器 長頸壺	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・絞り目・口縁端部斜め下方へつまみ出し 体部ロクロナデ→回転ヘラ削り・底部切離し技法不明→ナデ再調整・高台貼付 内面：口頸部ロクロナデ／絞り目・体部～底部ロクロナデ 【法量】口径(10.4)cm・器高23.2cm・底径7.4cm・器厚0.3～1.0cm・口縁部最大径(11.0)cm 頸部高10.9cm・体部最大径15.5cm	E-71	229-8
3	墓前域	15層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.2)cm・器高3.8cm・器厚0.4～0.8cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-183	200-8
4	墓前域	15層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・体部と底部の境に沈線・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(14.8)cm・器高4.0cm・器厚0.4～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-184	200-9
5	墓前域	15層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径14.8cm・器高3.8cm・器厚0.4～0.6cm	C-181	200-7
6	墓前域	15層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(10.0)cm・器高(3.6)cm・底径(6.2)cm・器厚0.3～0.7cm	C-182	202-6

第212図　ST30 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

墓前域　大別３・４層



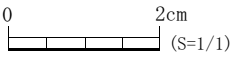




※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	15層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径19.2cm・器高7.1cm・底径9.2cm・器厚0.3～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-177	200-11
2	墓前域	16層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.2)cm・器高8.5cm・底径9.5cm・器厚0.3～1.0cm	C-179	200-12
3	墓前域	15層	土師器 鉢	【技法】外面：ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】残存高3.4cm・器厚0.4～0.6cm	C-180	201-1

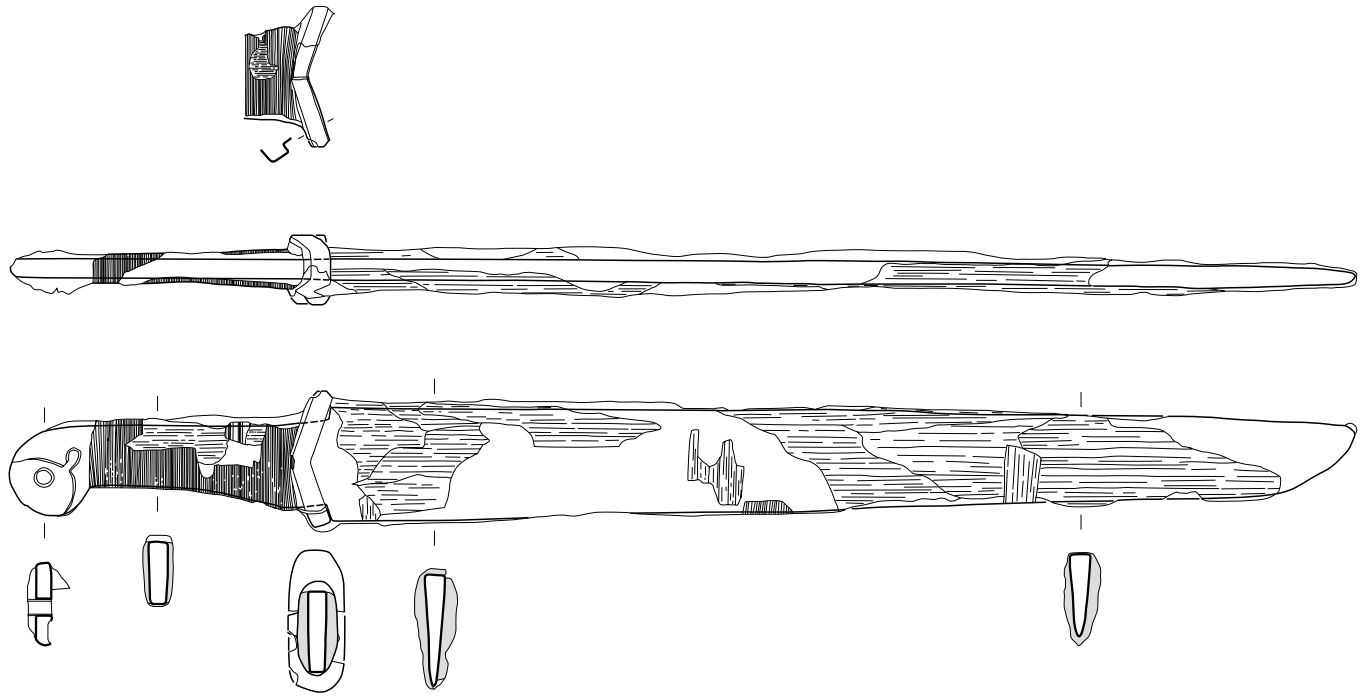
玄室　大別４層



No.	出土位置	細別層	種別・器種	製作方法	材質	特徴			色調	径(mm)	長(mm)	質量(g)	登録	写真図版
						形態など	気泡	その他						
4	玄室	17・18層	ガラス製品 小玉	鋳型	―	小突起	散在	不純物	紺・青	4.1	3.9	0.069	Q-226	286-10
5	玄室	17・18層	ガラス製品 丸玉	巻付	ソーダ	―	同心円方向 らせん状	不純物	青	10.1	8.1	0.979	Q-227	286-9

第213図　ST30 横穴墓 出土遺物 (5)　― 土器類・玉製品 ―

玄室底面



※トーン部注釈
木質

0　5　10cm
(S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	玄室	底面	金属製品	蕨手刀	【法量】全長53.4cm [刃部]長さ40.8cm・幅4.4cm　[鐔]長径5.5cm・短径2.8cm・厚さ1.2cm [柄部]長さ12.6cm・幅2.4cm　[柄頭]柄反り-0.5cm・絞り1.0cm [懸緒通孔]直径0.6cm 【特記事項】フクラ切先・均等両関(斜角)・喰出鐔・木質残存(鞘) 樺巻き？(鞘木)・糸巻き後漆塗り？(柄木)・鉄製 【残存部位】刃部・柄部・鐔・鞘木 【自然科学分析】第2分冊 第4章 第3節参照	N-91	304-1 304-2

第214図　ST30 横穴墓 出土遺物 (6)　－金属製品－

31 号横穴墓（ST31）（第 215～228 図、第 40 表、第 4 分冊 写真図版 86・90～92）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 28～30m の丘陵南斜面に位置する。同斜面の西には ST33、東には ST30 が隣接している。

【重複関係】 なし。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室の一部の天井が残存し、玄門は南東側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 215 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 7.25m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 2.13m、玄室の中央幅 2.09m、奥壁幅 1.95m、前壁幅 1.85m、左側壁幅 1.60m、右側壁幅 1.70m、玄室底面から天井の高さ 1.02m を測る。床面積は約 3.9 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。奥壁と両側壁のコーナーに丸みがあり、その境はやや不明瞭である。

天　　井：ドーム形。

底　　面：部分的に凹凸があるが、基本的には平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁中央に位置する。玄門付近の天井は崩落しており残存していない。立面形は逆 U 字形を呈していたと考えられる。幅 0.55m を測る。

工 具 痕：天井以外の壁に幅 0.04～0.09m 前後の工具痕跡が残存している。工具痕の方向は斜め方向である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.57m、玄室側の幅 0.55m、墓前域側の幅 0.66m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：羨道底面中央で溝跡 1 を確認した。その規模は幅 0.08～0.10m・深さ 0.03～0.05m であり、羨門墓前域側に位置する溝跡 2 と接続する。排水溝と考えられる。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には 0.10m の段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ 1.25m、幅 0.15m、深さ 0.04～0.07m の溝跡 2 を確認した。溝跡 2 は中央部分が T 字状に分岐し、墓前域の 0.2m 下方の地点まで延びる。その溝上に、0.20×0.12×0.07m（2.5kg）～0.45×0.30×0.16m（51.7kg）の角礫 12 個（総重量 220.5kg）が残存しており、溝上面から高さ 0.5m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は花崗閃緑岩 11 個、頁岩 1 個である（第 40 表 4）。溝跡 2 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの残存長 4.55m、上幅 1.8m、下幅 0.70～1.15m を測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.0m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.5m 程度である。底面は所々に段差が認められる。

【堆積層】　ST31 横穴墓を覆う堆積層は細別 11 層・大別 3 層に分けた（第 216 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1 層〕

大別 1 層（細別 1～3 層）は ST31 の墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別 2 層の層理面付近で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別 1 層堆積後、ST31 は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 2 層〕

大別 2 層（細別 4～7 層）は ST31 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別 3 層の層理面で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。この祭祀後、羨道付近の天井が崩落した（細別 5・6 層堆積）と考えられる。

〔大別 3 層〕

大別 3 層（細別 8～11 層）は ST31 の玄室と墓前域の掘方底面直上に堆積する自然堆積層である。大別 3 層の底面付近（横穴墓掘方底面付近）で遺物が出土した。この面で初葬に関連する祭祀行為が行われたものと推定される。

【出土遺物】土師器 102 点（20 個体、破片 82 点）、須恵器 163 点（8 個体、破片 155 点※うち 5 個体は遺構間接合遺物）、金属製品 13 点（その他不明小破片多数）、製鉄関連遺物 1 点、弥生土器 7 点が出土した（第 40 表 1～3）。人骨等は残存していない。このうち、弥生土器は周辺から流入したものと考えられる。土師器小型坏 2 個体・坏 15 個体・鉢 3 個体、須恵器高台埦 1 個体・蓋 1 個体・長頸壺 1 個体・フラスコ形瓶 1 個体・平瓶 1 個体・甕 2 個体と破片 1 点、鉄刀 2 点・鐔 2 点・不明鉄製品 1 点、羽口 1 点の合計 34 点を図示した（第 218・223～228 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 2・3 層）出土遺物**、**B：大別 2 層（細別 4 層底面）出土遺物**、**C：大別 3 層（細別 8～11 層底面）出土遺物**の 3 群に分かれる。その新旧関係は古い順から C→B→A となる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層（細別 8～11 層底面）出土遺物〕（第 226～228 図）

大別 3 層（細別 8～11 層）の堆積土底面にあたる横穴墓の掘方直上で出土した遺物である（前項 C に相当）。土師器、金属製品が出土した。出土位置は玄室と墓前域に分かれる（第 220 図）。

玄室では鉄刀 2 点（第 228 図 3・4）・鐔 1 点（第 228 図 5）と図示できなかった不明鉄製品破片多数が出土した（第 40 表 3）。初葬に関連する遺物とみられる。鉄刀 2 点と鐔は玄室左側壁の前壁付近でまとまって出土しており、同一個体の可能性が高い（写真図版 91-6・7）。

墓前域では土師器小型坏 1 個体（第 227 図 11）・坏 10 個体（第 227 図 1～10）・鉢 2 個体（第 226 図 3・4）、鐔とみられる破片 1 点（第 228 図 1）・鉸具の可能性がある不明鉄製品破片 1 点（第 228 図 2）と図示できなかった鉄刀破片が出土した（第 40 表 1・4）。土師器は接合する破片が一定の範囲内でまとまっており、その多くが正位の状態で出土していることから、墓前祭祀時の原位置を保った状態で埋没したものと考えられる（写真図版 92-5）。ただし、これらが破砕されたものか土圧等により割れたものかは

判断がつかなかった。本面出土の遺物はST31の初葬に伴い実施された墓前祭祀で使用されたものと考えられる。

〔大別２層（細別４層底面）出土遺物〕（第224～226図）

大別２層（細別4～7層）のうち、墓前域に分布する細別４層の底面付近で出土した遺物である（前頁Bに相当）。土師器小型坏１個体（第224図6）・坏５個体（第224図1～5）・鉢１個体（第224図7）、須恵器高台埦１個体（第224図8）・蓋１個体（第224図9）・須恵器長頸壺１点（第226図1）・フラスコ形瓶１個体（第226図2）・平瓶１個体（第225図2）・甕１個体（第225図1）と図示できなかった土師器坏破片、須恵器瓶類・甕破片、不明鉄製品破片が出土した（第40表1～3）。遺物は墓前域のほぼ全域に分布し、全て破片の状態で面的に出土している。玄室から遺物は出土していない（第219図）。

このうち、図示した須恵器高台埦・須恵器長頸壺・平瓶・甕については、接合する同一個体の破片がST30でも出土している（第40表2、第221・222図）。ST31は、ST30と隣接する横穴墓であり、かつ標高的にST30より高い地点に位置する。こうした地形的立地から、ST31と遺構間接合関係にあるこれらの須恵器破片については、ST31で破砕された後、ST30の墓前域に自然流入した可能性が高いと考えられる。

本層の同一面出土の遺物群は、須恵器の破砕行為をはじめする一連の墓前祭祀に伴う遺物と判断される。祭祀のための整地は確認されていない。したがって、本面での祭祀は、大別３層堆積後の窪地を利用した墓前祭祀であったと推定される。なお、この段階のST31は、堆積土の状況からみて、玄室への入室が可能な状態だったと考えられる。さらに、遺物が面的に出土した同一祭祀面上に閉塞石が残存していることから、この段階で玄室入口の閉塞行為があったと想定される。以上のことから、玄室内での遺物は皆無であるが、本段階の墓前祭祀についてはST31の追葬に関連するものである可能性が高いとみておきたい。

〔大別１層（細別２・３層）出土遺物〕（第218・223図）

大別１層（細別1～3層）のうち、墓前域に分布する細別２層と玄室の細別３層の底面付近から出土した遺物である（前頁Aに相当）。須恵器甕１個体（第223図2）・破片16点（うち１点を図示/第223図1）、羽口１点（第218図1）が出土した（第40表1）。

このうち、図示した第223図2の須恵器甕（E-166）については、墓前域を中心に破片で面的に出土しており、これと接合する同一個体の破片がST2・30・SK47でも出土した（第222図/第40表2）。また、同甕と胎土・タタキ目が類似する甕破片（E-169/第223図1）がST31内の玄室においても出土している（細別３層底面出土）。以上の状況から、本段階のST31の墓前域では、須恵器甕の破砕・散布を伴う墓前祭祀が実施されていたと考えられる。墓前域で破砕した須恵器破片は、ST31から少なくとも3か所（ST2・30、SK47）の遺構に散布されたと推定される。

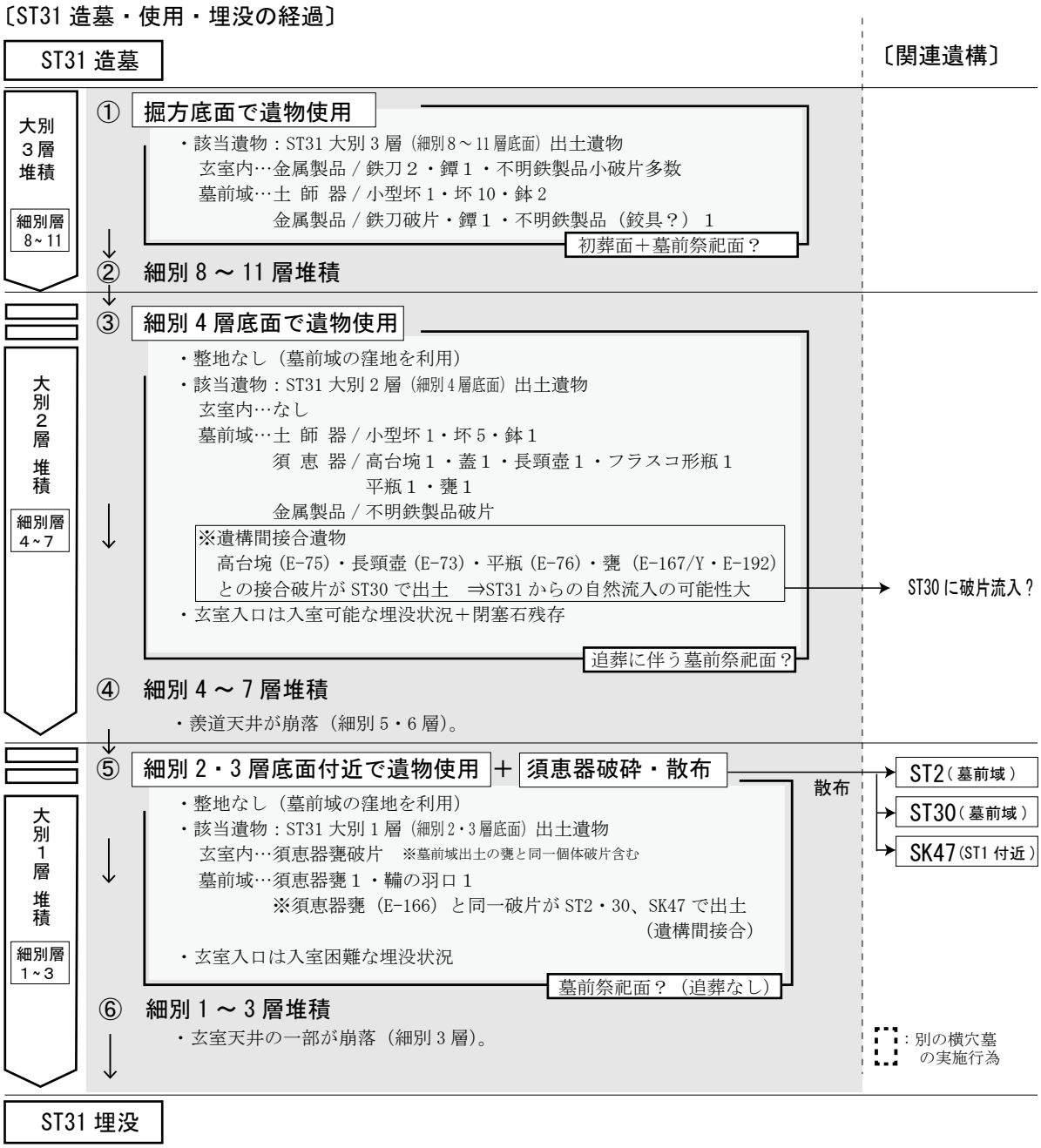
加えて、この甕と同一面から出土した鞴の羽口については、その出土状況からみて、周辺から流れ込んだものではなく、須恵器甕を用いた墓前祭祀の際に使用された遺物と判断される（第217図/写真図版90-4・92-1・2）。今回の横穴墓の発掘区（A区）で出土した羽口はこの１点のみであり、その他の製鉄に関わる遺物についても、後述するST52で鉄滓が２点出土したのみである。A区では製鉄関連遺構は確認されておらず、この羽口が偶然周辺から流入したとは想定し難い。羽口はその形状から箱形炉の炉壁に着装されたものとみられ、鉄滓や炉壁が羽口の先端に付着していることから、製鉄炉で使用されたものと考えられる。横穴墓が分布するA区の周辺では200m程度離れた地点ではあるが、B・C区で古代の製鉄炉が確認されている。使用済の羽口が横穴墓の祭祀遺物と共伴する事実から、本地区で横穴墓が造営されていた当時、周辺で鉄の生産が行われていたことは間違いないと考えられる。このST31の大別２

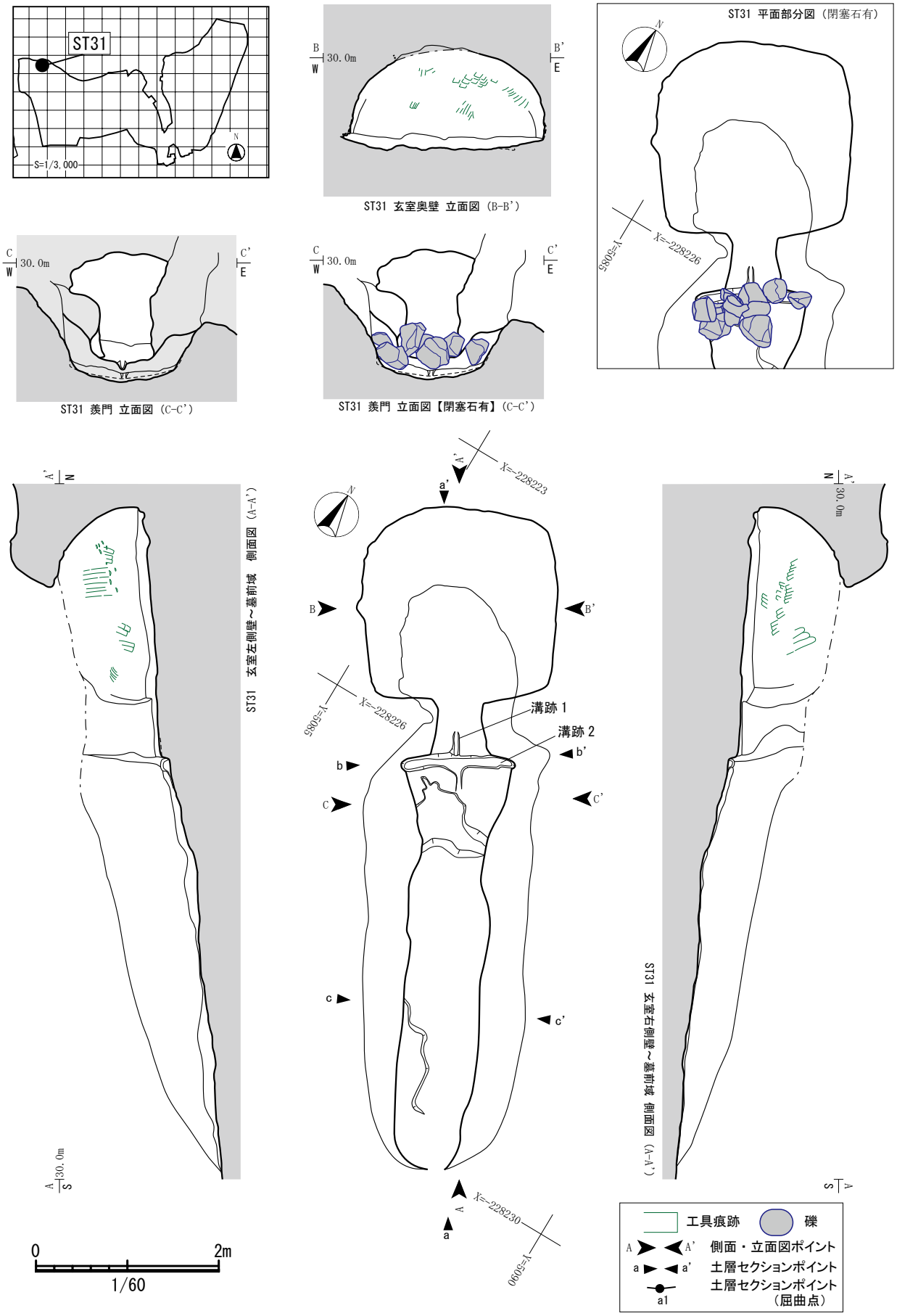
層で墓前祭祀を行った集団は、製鉄に関連する集団であった可能性がある。

本層の同一面出土の遺物群は、須恵器の破砕行為を主とする墓前祭祀に伴う遺物と判断される。祭祀のための整地は確認されていないことから、本面での祭祀は、大別２層堆積後の窪地を利用した墓前祭祀であったと推定される。堆積土の状況から、この段階の ST31 については、羨道の天井が崩落し、玄室への入室が困難な状態だったと考えられ、本段階の墓前祭祀は追葬とは関連のないものであったと想定される。なお、墓前域で破砕された甕の破片が玄室内で出土している状況からみて、玄室の入り口はわずかに開口していたと考えられる。

【まとめ】

ST31 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。





第215図　ST31 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

第40表　ST31横穴墓　出土遺物一覧

1．土器類・製鉄関連遺物－遺構単独出土－

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 個体・破片	土師器 坏 小型坏	土師器 鉢	土師器 小計	須恵器 蓋	須恵器 フラスコ形瓶	須恵器 瓶類	須恵器 甕	須恵器 小計	製鉄関連遺物 羽口	製鉄関連遺物 小計	弥生土器 甕	弥生土器 小計
玄室	－	3層	個							1 (430)	1 (430)				
			破							15 (250)	15 (250)				
墓前域	1	2層	個									1 (520)	1 (520)		
			破	29 (195)		29 (195)				75 (1,050)	75 (1,050)			6 (15)	6 (15)
	2	4層	個	6 (630)	1 (165)	7 (795)	1 (25)	1 (740)			2 (765)				
			破	23 (230)		23 (230)			16 (45)	38 (305)	54 (350)				
		5層	個												
			破							11 (10)	11 (10)			1 (5)	1 (5)
	3	4・8層 (8層起源)	個	5 (420)	2 (620)	7 (1,040)									
			破												
		8層	個	6 (805)		6 (805)									
			破	30 (200)		30 (200)									
総合計		個体数(重量)		17 (1,855)	3 (785)	20 (2,640)	1 (25)	1 (740)		1 (430)	3 (1,195)	1 (520)	1 (520)		
		破片数(重量)		82 (625)		82 (625)			16 (45)	139 (1,615)	155 (1,660)			7 (20)	7 (20)
		総重量		(2,480)	(785)	102 (3,265)	(25)		(45)	(2,045)	158 (2,855)	(520)	1 (520)	(20)	7 (20)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2．土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構・層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (10,300)	◆ST2　検出面 ◆ST30　8層上半部(墓前域) ◆ST31　2層(墓前域) ◆A区SK47　1層	ST31	◆ST2:1点 ◆ST30:3点 ★ST31:53点 ◆SK47:4点	E 166	第223図2
須恵器	高台塊	1 (300)	◆ST30　14層上半部(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:1点 ★ST31:14点	E 75	第224図8
須恵器	長頸壺	1 (985)	◆ST30　14層上半部(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:13点 ★ST31:56点	E 73	第226図1
須恵器	平瓶	1 (2,015)	◆ST30　13層(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:1点 ★ST31:24点	E 76	第225図2
須恵器	甕	1 (1,585)	◆ST30　13層、14層上半部(墓前域) ◆ST31　4層(墓前域)	ST31	◆ST30:4点 ★ST31:26点	E 167 Y・E 192	第225図1

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y・E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST31出土須恵器の総数
(表40-1)遺構単独出土　3個体＋破片155点
＋
(表40-2)遺構間接合遺物　5個体　＝　163　点

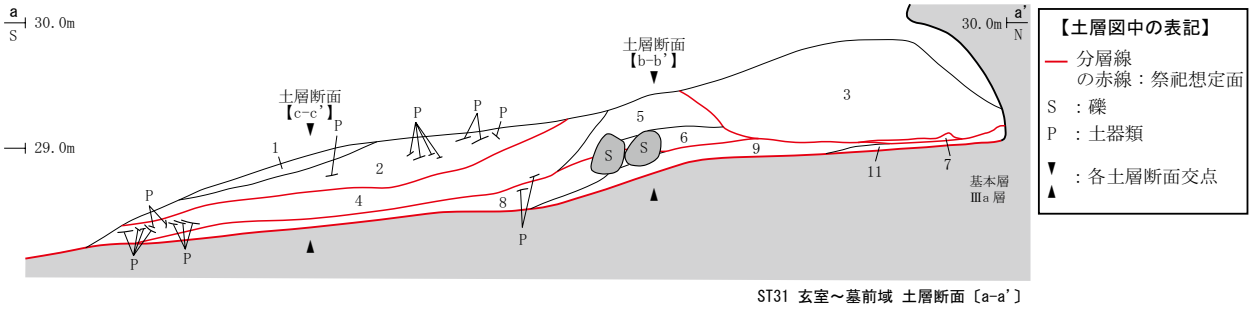
3．金属製品

出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	種別 器種 / 掲載・非掲載	金属製品 鉄刀	鏃	不明鉄製品	小計
玄室	3	9層	掲	2	1		3
			非掲				
		11層	掲				
			非掲			破片多数	破片多数
墓前域	2	4層	掲				
			非掲			6	6
	3	8層	掲		1	1	2
			非掲	2			2
器種別総合計		掲載遺物点数		2	2	1	5
		非掲載遺物点数		2		6＋破片多数	8　＋破片多数
		総点数		4	2	7＋破片多数	13　＋破片多数

※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST31出土の不明小片の重量は7.1g)

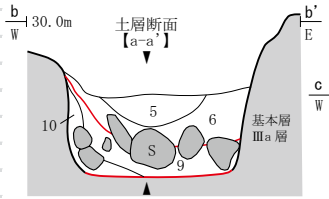
4．閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
花崗閃緑岩	角礫	20	12	7	2.5	花崗閃緑岩	角礫	23	15	13	17.7
花崗閃緑岩	角礫	18	13	7	2.8	花崗閃緑岩	角礫	35	26	18	23.1
花崗閃緑岩	角礫	14	13	8	3.6	花崗閃緑岩	角礫	35	25	15	34.1
花崗閃緑岩	角礫	17	14	8	5.0	花崗閃緑岩	角礫	32	22	20	41.2
花崗閃緑岩	角礫	25	12	8	5.7	花崗閃緑岩	角礫	45	30	16	51.7
花崗閃緑岩	角礫	31	26	10	10.5	頁岩	角礫	27	20	12	22.6
						合計:12点／重量(kg)＝					220.5

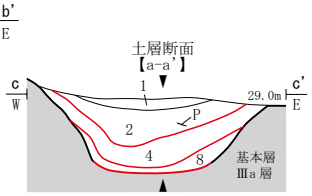


ST31 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック（小）含む。	1	自然堆積層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック（小・大）含む。		
3	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック（大）多量含む。		
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（小）含む。	2	自然堆積層
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	均質層		
6	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
7	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック多く含む。		
8	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	炭化物片微量含む。	3	自然堆積層
9	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	均質層。		
10	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	均質層。		
11	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山ブロック（小）多く含む。		

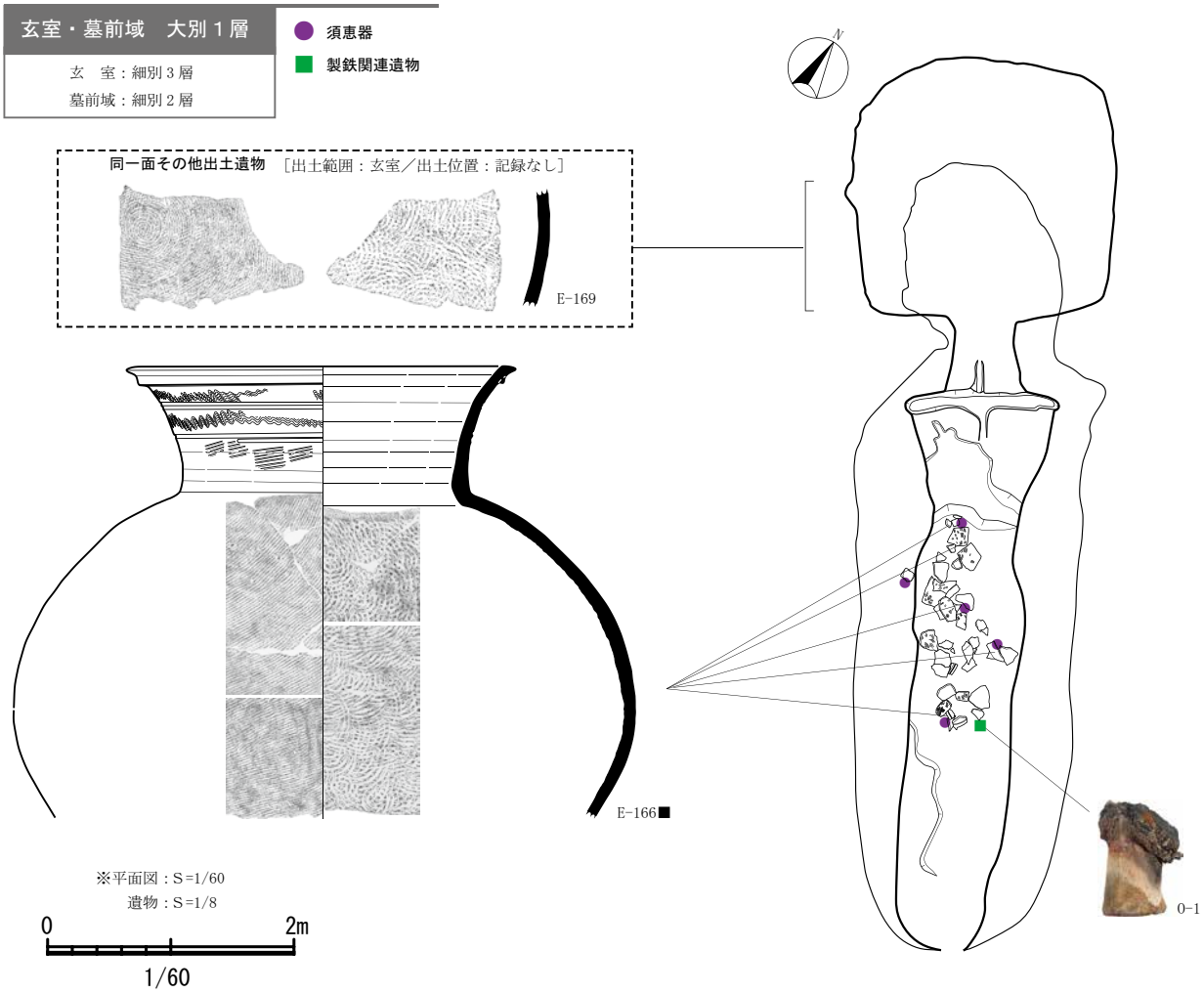


ST31 墓前域 土層断面〔b-b'〕

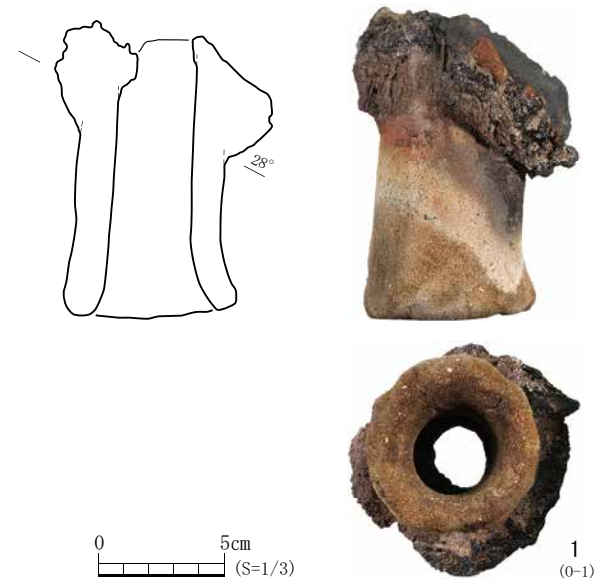


ST13 墓前域 土層断面〔b-b'〕

第216図　ST31 横穴墓 土層断面図

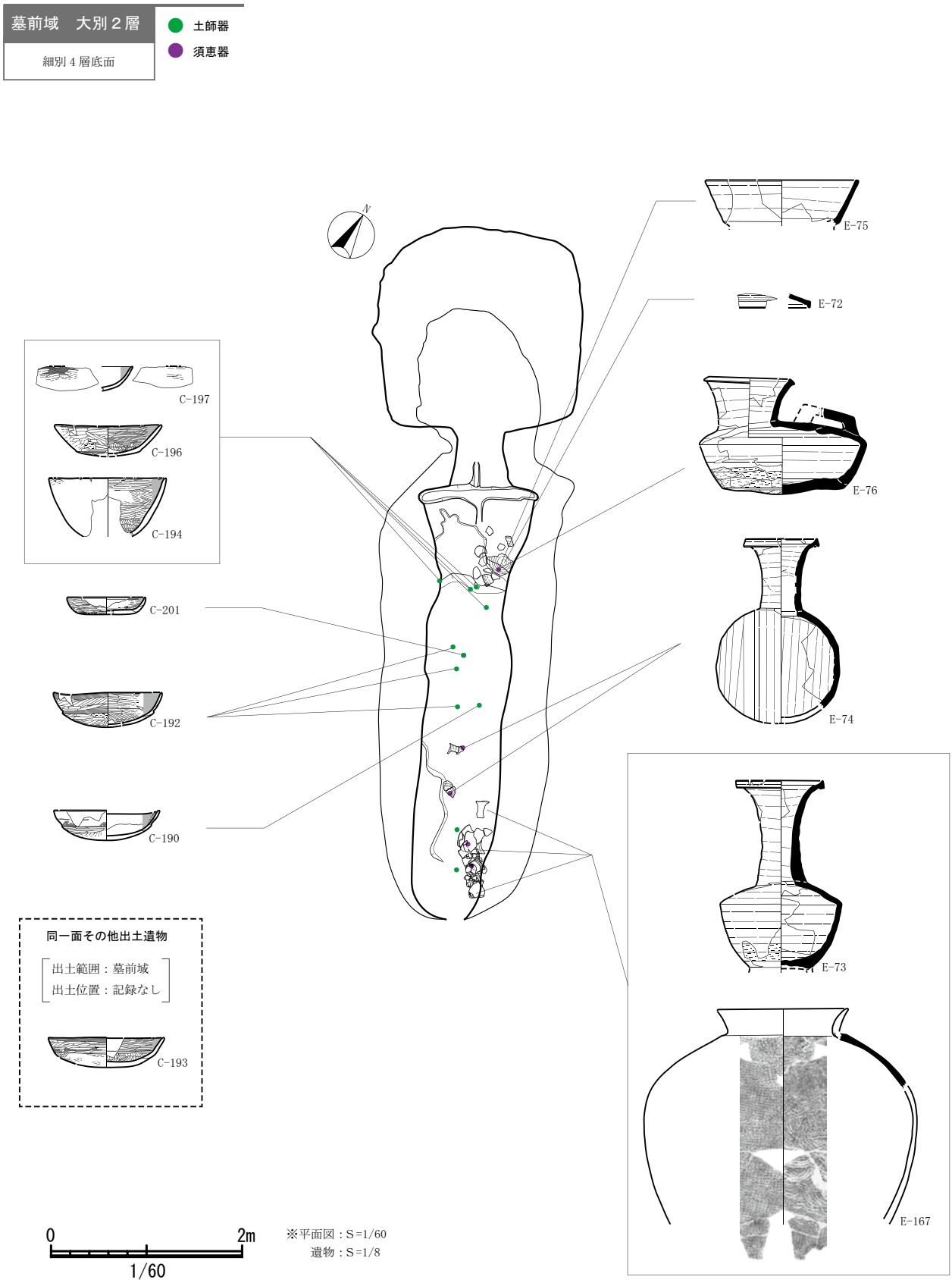


第217図　ST31 横穴墓 遺物出土状況図（1）　－ 大別１層 －

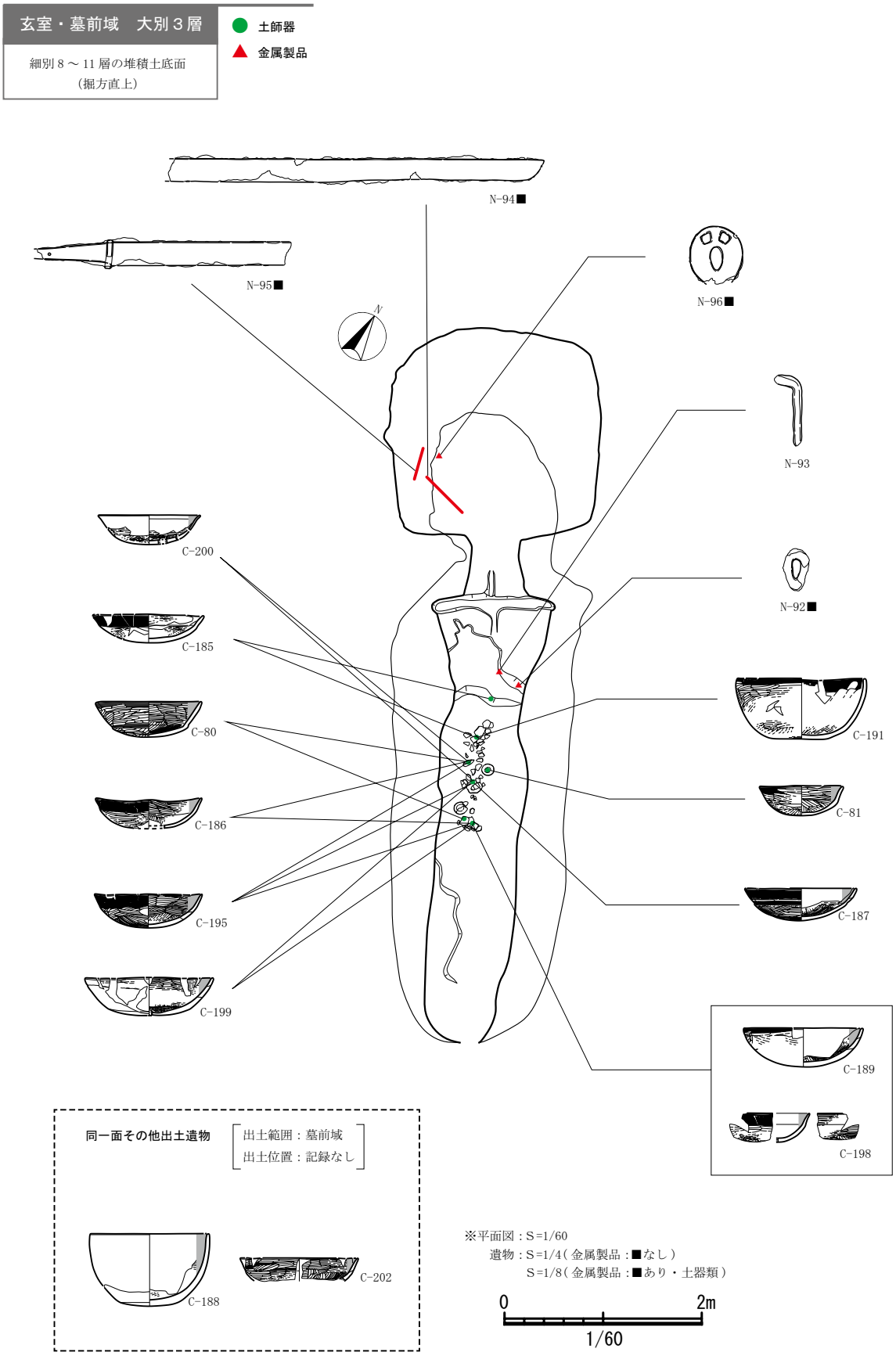


No.	登録	0-1
1	写真図版	297-4
	出土位置	墓前域
	細別層	2層
	種別・器種	製鉄関連遺物　羽口
	法量・調整(外面・内面)・残存・特記事項	
	【法量】［先端部］内径2.2cm ［吸気部］内径6.6cm・外径6.9cm ［最大長］11.8cm ［装着角度］28度 ［質量］510g 【調整】内外面：ナデ→オサエ(吸気部) 【残存】完形 【特記事項】外面：工具痕有り	

第218図　ST31 横穴墓 出土遺物（1）　－ 製鉄関連遺物 －



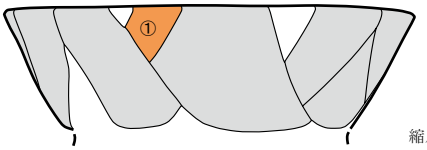
第219図　ST31 横穴墓 遺物出土状況図 (2)　－ 大別２層 －



第220図　ST31 横穴墓 遺物出土状況図（3）　－ 大別３層 －

E-75　須恵器 高台椀（第 224 図 8）

正面



縮尺任意

塗り注釈　出土層位

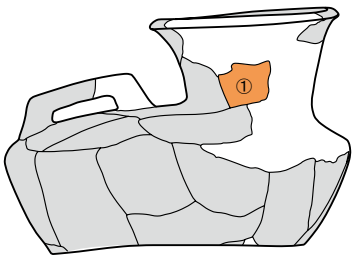
ST31　［墓前域］4層

① ST30　［墓前域］14層上半部

白抜　欠損箇所

E-76　須恵器 平瓶（第 225 図 2）

正面



縮尺任意

塗り注釈

ST31

① ST30

白抜　欠損箇所

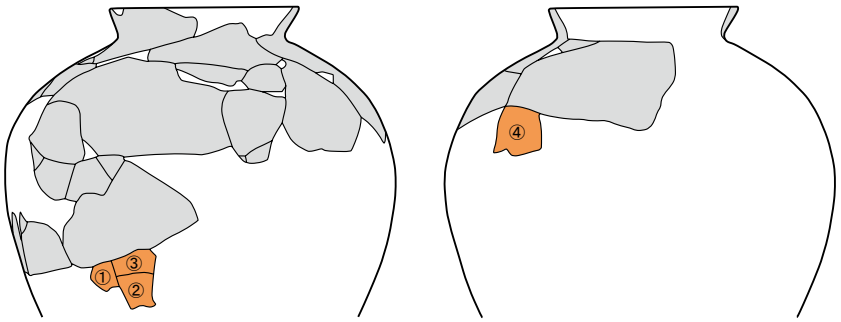
出土層位

ST31　［墓前域］4層

ST30　［墓前域］13層

E-167　須恵器 甕（第 225 図 1）

正面　背面



縮尺任意

塗り注釈

ST31

①～④ ST30

白抜　欠損箇所

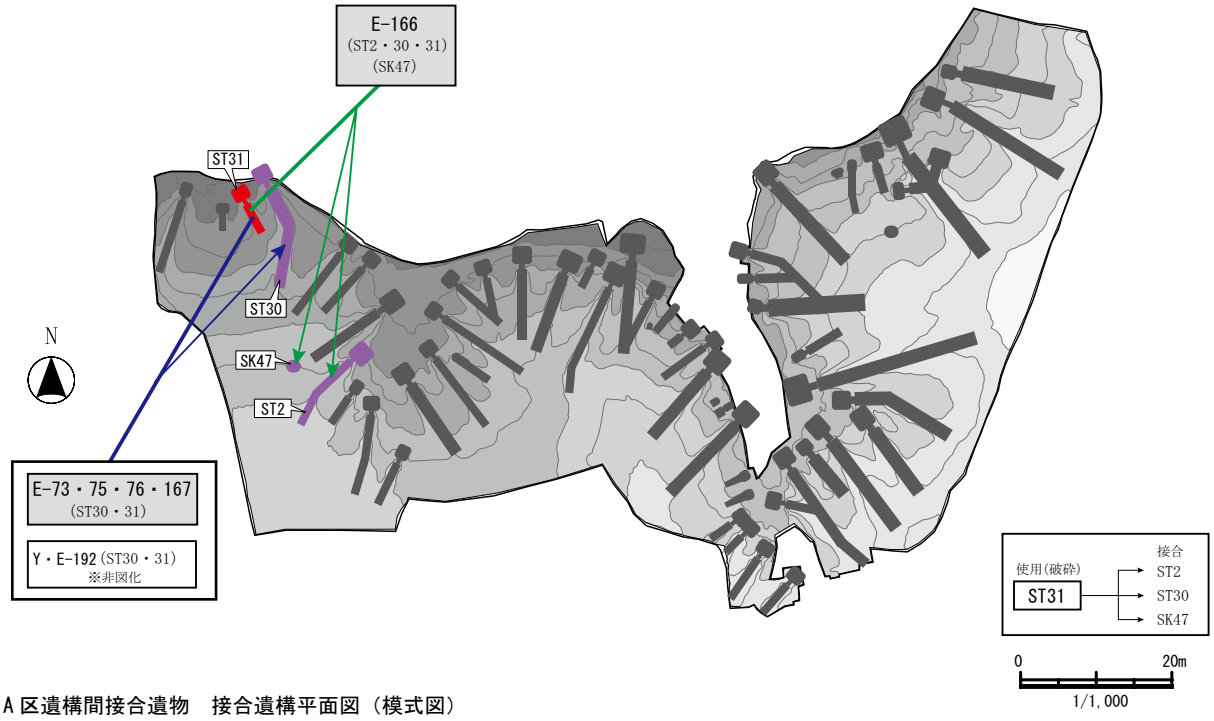
出土層位

ST31　［墓前域］4層

ST30　［墓前域］13層、14層上半部

須恵器使用（破砕）遺構

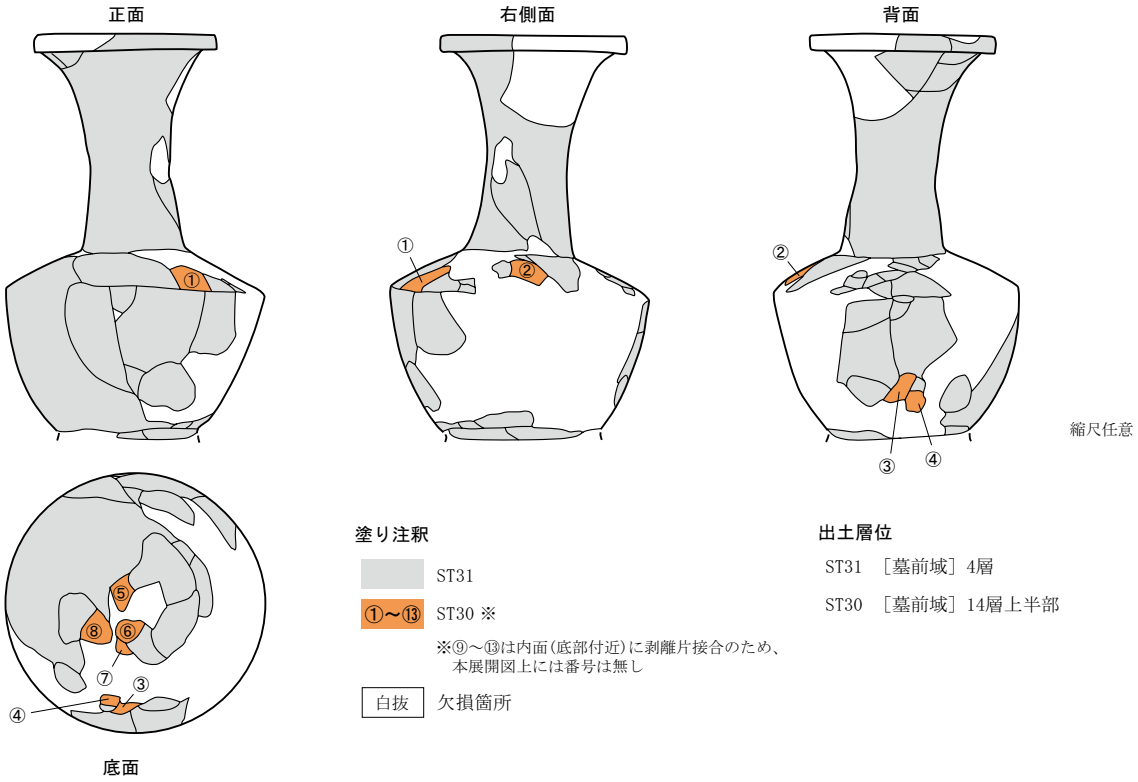
接合・同一個体破片出土遺構



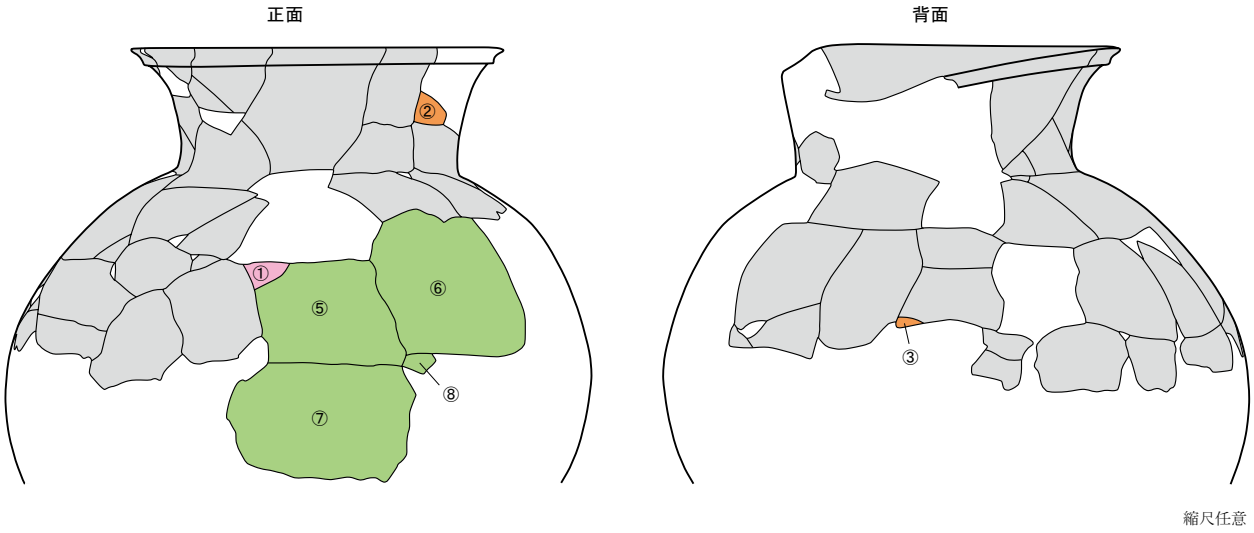
A 区遺構間接合遺物　接合遺構平面図（模式図）

第221図　ST31 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図（1）

E-73　須恵器 長頸壺
（第 226 図 1）

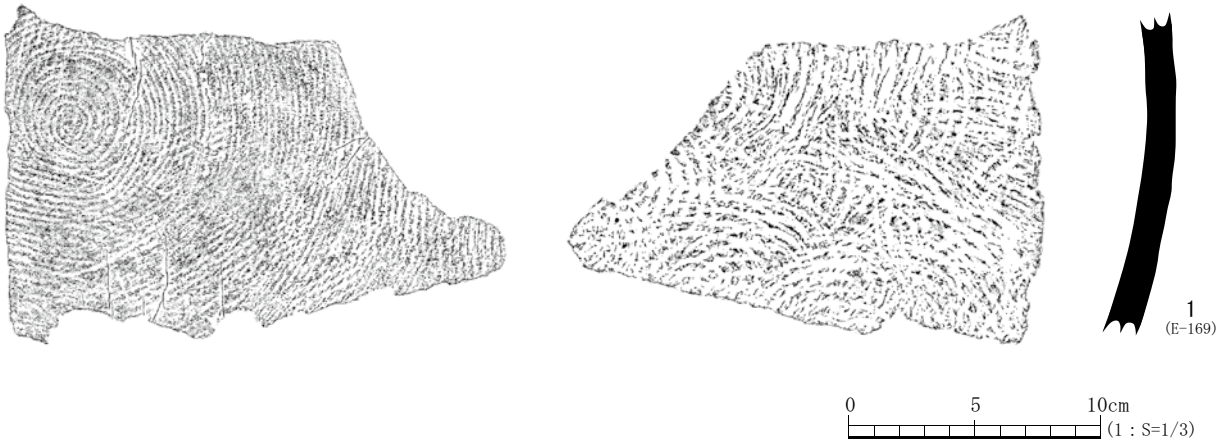


E-166　須恵器 甕
（第 223 図 2）



第222図　ST31 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図（2）

玄室　大別１層

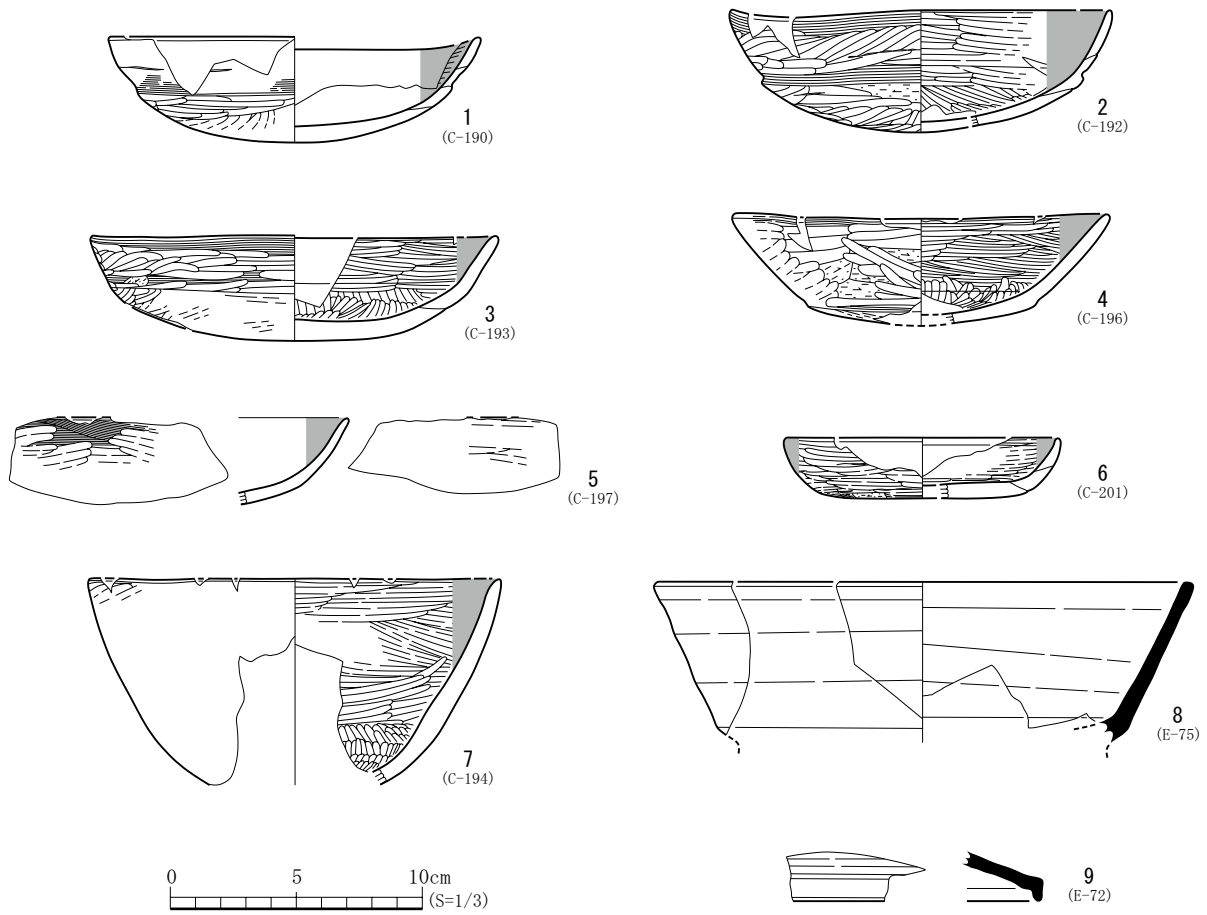


墓前域　大別１層

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	玄室	3層	須恵器 甕	【技法】外面：平行タタキ→カキメ(円形)、内面：当て具痕(同心円) 【法量】器厚1.1～1.3cm	E-169	251-2
2	[ST2]検出面 ＋ [ST30]墓前域 ＋ [ST31]墓前域 ＋ [SK47]	◆ST31　2層 ◆ST2　検出面 ◆ST30　8層上半部 ◆SK47　1層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST31(主体)**＋ST2＋ST30＋SK47 【技法】外面：口縁部上位突帯貼付・口縁部中位ロクロナデ→波状文／沈線 口縁部下位平行タタキ→ロクロナデ・体部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径39.2cm・残存高49.2cm・器厚0.9～1.7cm	E-166	250-2 270-15 271-1 271-2

第223図　ST31 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層

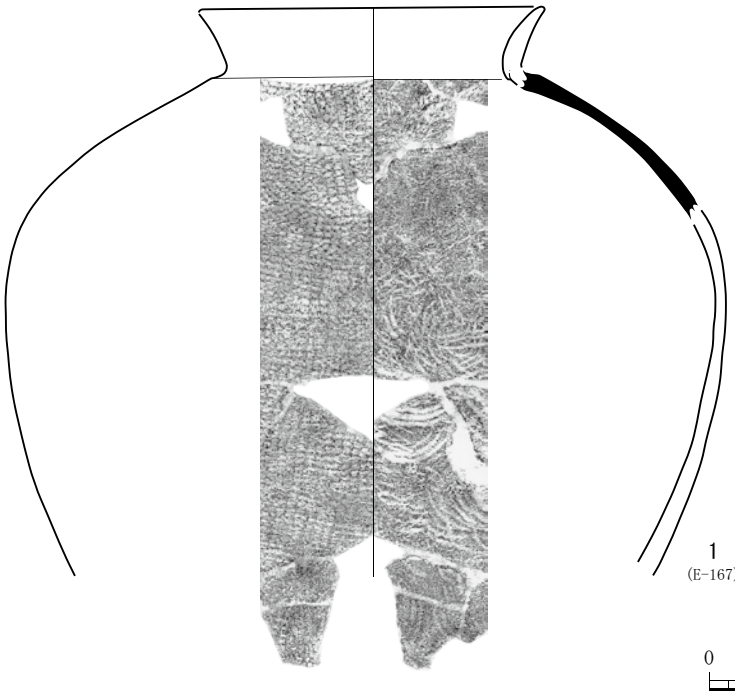


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径14.6cm・器高4.2cm・器厚0.3～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-190	201-5
2	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径15.0cm・器高4.9cm・器厚0.3～0.5cm	C-192	201-6
3	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径16.0cm・器高4.2cm・器厚0.4～0.7cm	C-193	201-7
4	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.8)cm・器高(4.3)cm・器厚0.4～0.7cm	C-196	202-8
5	墓前域	4層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.3～0.5cm	C-197	202-11
6	墓前域	4層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(10.8)cm・器高2.4cm・器厚0.3～0.6cm	C-201	202-1
7	墓前域	4層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部磨滅のため調整不明 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.2)cm・残存高8.2cm・器厚0.5～0.8cm	C-194	202-12
8	墓前域	◆ST31　4層 ◆ST30 14層上半部	須恵器 高台埦	◎遺構間接合　**ST31(主体)**＋ST30 【技法】内外面：ロクロナデ 【法量】口径21.0cm・残存高6.4cm・器厚0.4～0.7cm 【特記事項】体部下端に高台の痕跡有り	E-75	221-4
9	墓前域	4層	須恵器 蓋	【技法】内外面：ロクロナデ 【法量】残存高2.0cm・器厚0.4～0.6cm	E-72	221-5

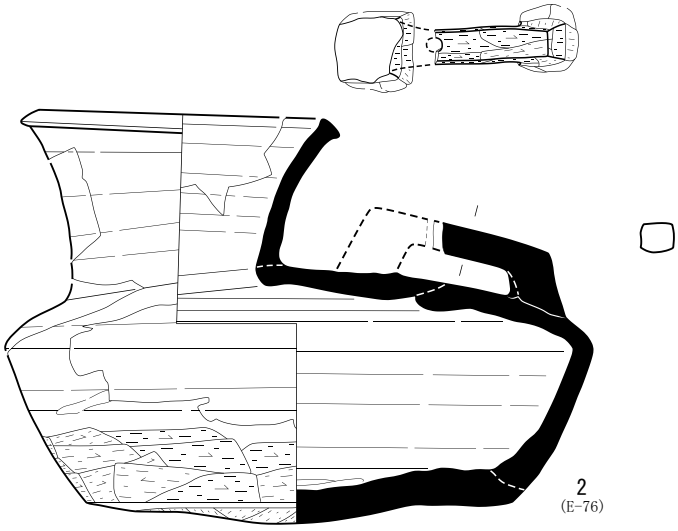
第224図　ST31 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別２層



1
(E-167)

0　5　10cm
(1 : S=1/4)



2
(E-76)

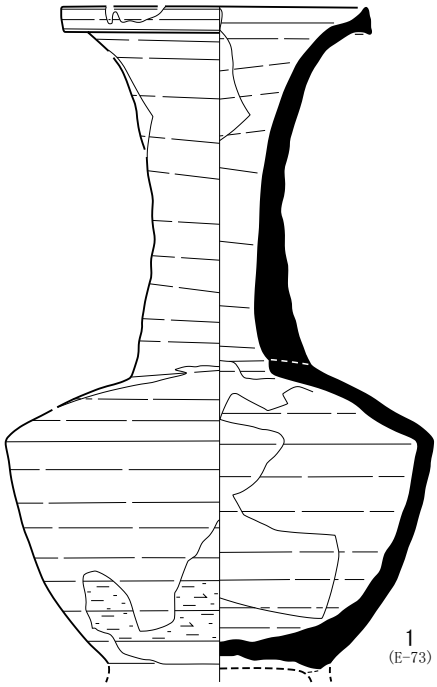
0　5　10cm
(2 : S=1/3)

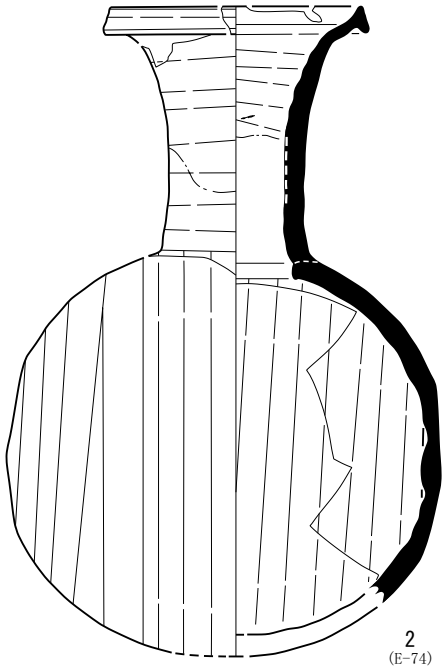
※(　) 内 : 推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST31　4層 ◆ST30　13層 14層上半部	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST31(主体)**＋ST30 【技法】外面 : 口頸部ロクロナデ(火ハネ痕のため不明瞭)・体部格子状タタキ 内面 : 口頸部ロクロナデ(磨滅のため不明瞭)・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径(18.0)cm・残存高30.1cm・器厚0.5～1.1cm 【特記事項】遺構間接合の同一個体破片有り[非図化／ST31(主体)＋ST30]	E-167	250-1 271-3 271-4
2	墓前域	◆ST31　4層 ◆ST30　13層	須恵器 平瓶	◎遺構間接合　**ST31(主体)**＋ST30 【技法】 外面 : 口頸部ロクロナデ・口縁端部上下に拡張・体部ロクロナデ→体部下端手持ちヘラ削り 円盤閉塞・把手貼付・把手部手持ちヘラ削り(一部ナデ)／中央部穿孔 底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整・周縁部ナデ 内面 : ロクロナデ・ナデ・オサエ 【法量】口径11.3cm・器高16.5cm・底径16.9cm・器厚0.6～1.4cm・口縁部最大径12.6cm 体部最大径(23.3)cm 【特記事項】焼台接地痕有り	E-76	230-5 230-6

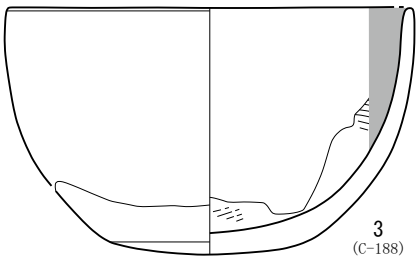
第225図　ST31 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

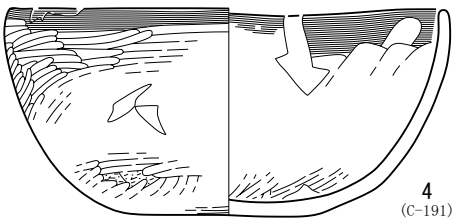
墓前域　大別２層

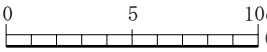




墓前域　大別３層





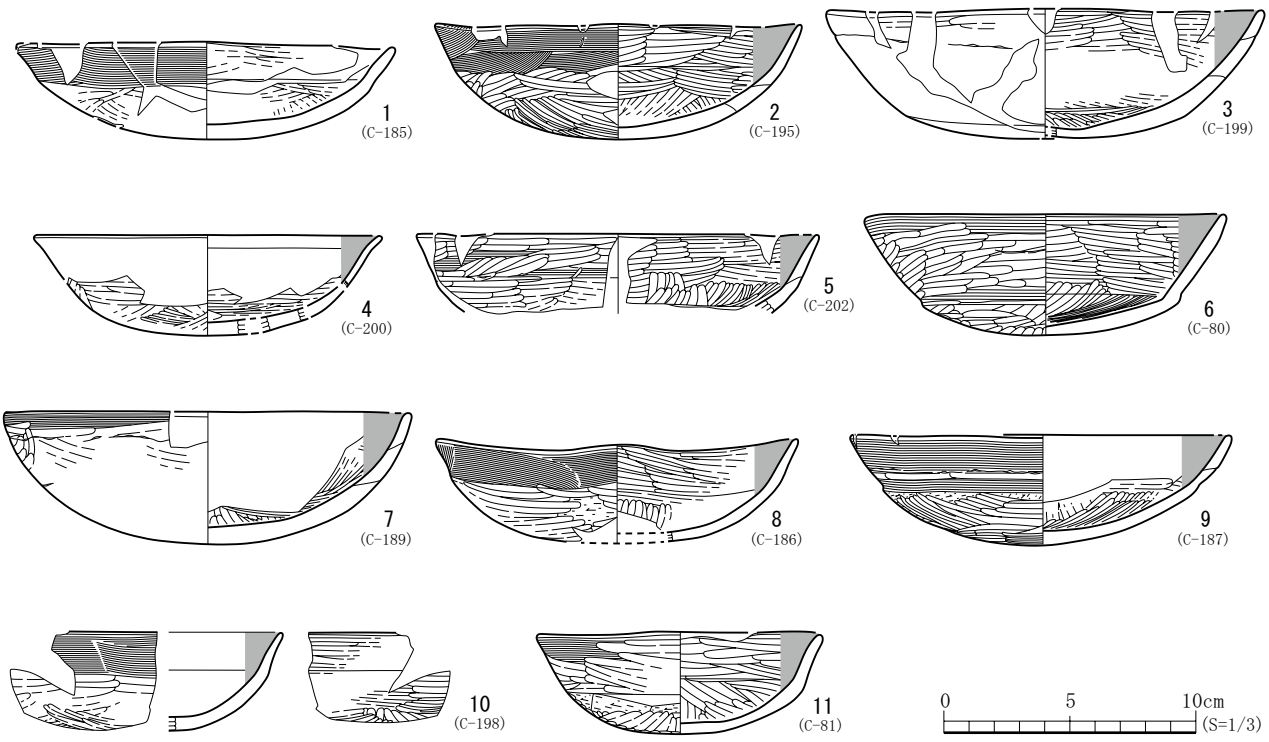


※(　) 内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST31　4層 ◆ST30 14層上半部	須恵器 長頸壺	◎遺構間接合　**ST31(主体)**＋ST30 【技法】外面：口頸部ロクロナデ・口縁端部上下につまみ出し 体部ロクロナデ→回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整 高台貼付(高台欠損)・底面剥離 内面：口頸部ロクロナデ・棒状工具によるナデ・体部ロクロナデ・絞り目 【法量】口径12.1cm・残存高26.5cm・器厚0.4～1.6cm・体部最大径17.0cm・頸部高14.4cm	E-73	230-3
2	墓前域	4層	須恵器 フラスコ形瓶	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・口縁端部粘土帯貼付／上下につまみ出し 体部ロクロナデ→回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ 【法量】口径10.0cm・器高(25.5)cm・器厚0.3～0.8cm・口縁部最大径(10.6)cm・頸部高9.7cm 【特記事項】体部中軸に直行ではなく、やや斜めの位置に口頸部接合 遺構間接合の同一個体破片有り[非図化／ST31(主体)＋ST30]	E-74	230-4
3	墓前域	4層 8層	土師器 鉢	【技法】外面：磨滅のため調整不明・口縁端部面取り 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(16.0)cm・器高9.8cm・底径8.0cm・器厚0.5～1.1cm	C-188	202-2
4	墓前域	4層 8層	土師器 鉢	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ナデまたはヘラミガキ・磨滅 【法量】口径17.1cm・器高8.3cm・底径7.7cm・器厚0.4～0.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-191	202-3

第226図　ST31 横穴墓 出土遺物 (5)　－ 土器類 －

墓前域　大別３層

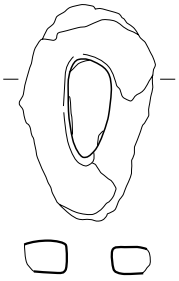


※(　) 内：推定値

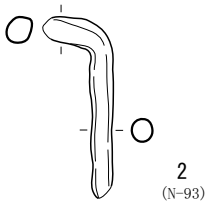
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	4層 8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・磨滅 【法量】口径(14.8)cm・器高3.9cm・器厚0.4～0.7cm　【特記事項】内面：黒色処理？	C-185	201-8
2	墓前域	4層 8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.4)cm・器高4.6cm・器厚0.3～0.7cm	C-195	201-11
3	墓前域	4層 8層	土師器 坏	【技法】外面：ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】口径(17.6)cm・器高5.2cm・底径(11.0)cm・器厚0.3～0.7cm	C-199	202-9
4	墓前域	4層 8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・黒色処理 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(13.6)cm・器高4.0cm・器厚0.2～0.5cm	C-200	201-12
5	墓前域	4層 8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(15.8)cm・残存高3.2cm・器厚0.3～0.5cm	C-202	202-10
6	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.2cm・器高4.8cm・器厚0.4～0.6cm　【特記事項】部分的に赤彩残存	C-80	201-2
7	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径16.0cm・器高5.3cm・器厚0.4～0.7cm	C-189	201-10
8	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(14.2)cm・器高(4.1)cm・器厚0.3～0.4cm	C-186	201-9
9	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径14.9cm・器高4.4cm・器厚0.3～0.5cm　【特記事項】部分的に赤彩残存？	C-187	201-4
10	墓前域	8層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅 【法量】器厚0.3～0.5cm	C-198	202-7
11	墓前域	8層	土師器 小型坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(11.0)cm・器高4.1cm・器厚0.4～0.5cm	C-81	201-3

第227図　ST31 横穴墓 出土遺物 (6)　－ 土器類 －

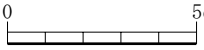
墓前域　大別３層



1
(N-92)

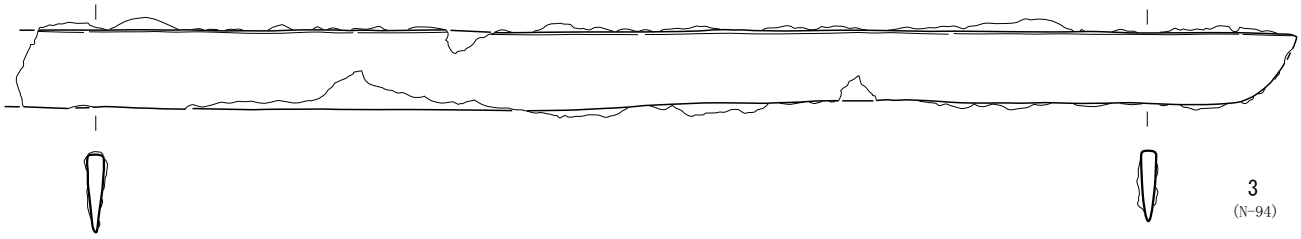


2
(N-93)

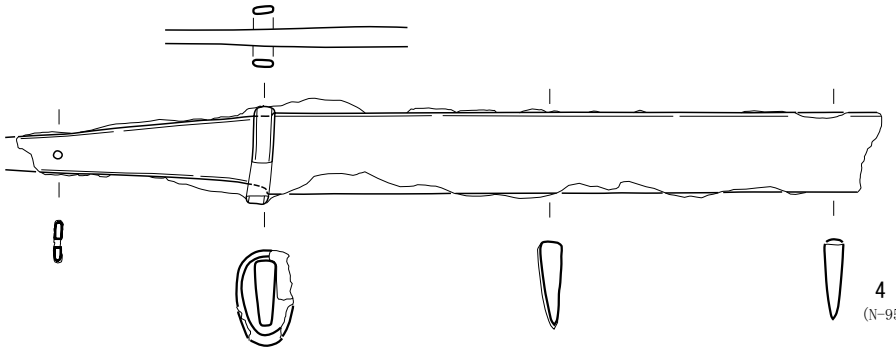


(1・2：S=1/2)

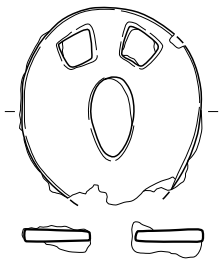
玄室　大別３層



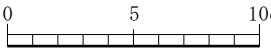
3
(N-94)



4
(N-95)



5 (N-96)



(3～5：S=1/3)

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
1	墓前域	8層	金属製品	鐔	【法量】残存長径5.7cm・残存短径3.4cm・厚さ0.9cm　【特記事項】鉄製	N-92	306-10
2	墓前域	8層	金属製品	不明鉄製品	【法量】残存長5.2cm・幅0.8cm・厚さ0.6cm 【特記事項】鋲具の輪金？	N-93	337-14
3	玄室	9層	金属製品	鉄刀	【法量】残存長50.6cm・幅3.1cm 【特記事項】フクラ切先 接合はしないが、N-95・96と同一個体の可能性有り	N-94	307-1
4	玄室	9層	金属製品	鉄刀	【法量】[刀身]残存長34.4cm　[刃部]残存長24.1cm・幅3.2cm　[茎部]残存長10.3cm [鎺]長径3.8cm・残存短径2.4cm・幅0.8cm 【特記事項】均等両関(斜角)？・目釘孔1か所 接合はしないが、N-94・96と同一個体の可能性有り 【残存部位】刀身・鎺	N-95	307-2
5	玄室	9層	金属製品	鐔	【法量】残存長径7.7cm・短径7.2cm・厚さ0.3～0.5cm 【特記事項】板鐔(二窓鐔)・鉄製 接合はしないが、N-94・95と同一個体の可能性有り	N-96	307-3

第228図　ST31 横穴墓 出土遺物 (7)　－ 金属製品－

32号横穴墓（ST32）（第229～233図、第41表、第4分冊 写真図版93・94）

【検出位置】　A-2区西側の標高27～30mの丘陵南斜面に位置する。同斜面の東にはST33が隣接している。A-2区とA-1区の間には現代の通路があり、丘陵が分断されているため、その範囲に横穴墓が分布していたかは不明であるが、現状でST32が横穴墓分布域の最西端に位置する横穴墓である。

【重複関係】　なし。

【検出状況】　墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】　玄室から墓前域まで残存している。玄室の一部の天井が残存し、玄門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室の底面付近から上部の範囲はシルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa層）、それより下部の範囲は砂岩質の地山層（基本層Ⅲb層）である。

【個別部位の特徴】（第229図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は12.49mを測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行1.60m、玄室の中央幅1.44m、奥壁幅1.58m、前壁幅1.36m、左側壁幅1.47m、右側壁幅1.72m、玄室底面から天井の高さ1.11mを測る。床面積は約2.2㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。各壁のコーナーに丸みがあり、やや歪んだ方形を呈する。

天　　井：ドーム形。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は0.1m程度である。

玄　　門：前壁中央に位置する。玄門付近の天井は崩落しており残存していない。立面形は逆U字形を呈していたと考えられる。幅0.63mを測る。

工 具 痕：奥壁・両側壁の壁に幅0.04～0.07m前後の縦方向の工具痕跡が残存している。

付属施設：奥壁の両コーナー底面付近の壁面で小穴1・2、底面の中央で小穴3、玄門付近で溝跡1を確認した。小穴1は0.20×0.15m、小穴2は0.35×0.30m、小穴3は0.30×0.24m・深さ0.15mを測る。溝跡1は玄門付近から羨道を通り、墓前域側の溝跡2と接続する溝状の窪みである。幅0.20～0.46mを測る。小穴1・2は壁面付近で確認したため、横穴墓に伴うものかは不明である。小穴3と溝跡1は玄室底面の堆積土除去後に確認している遺構であることから、横穴墓に伴う遺構とみられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行0.60m、玄室側の幅0.63m、墓前域側の幅0.54mを測る。

立 面 形：天井は残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：羨道で玄室から延びる溝跡1を確認した（詳細は前掲のとおり）。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面には0.16mの段差があり、羨門の墓前域側底面で長さ1.25m、幅0.30～0.38m、深さ0.09～0.11mの溝跡2を確認した。溝跡2は玄門付近から延びる溝跡1と接続する。その溝上に、0.18

×0.16×0.12m（9.6kg）～0.30×0.24×0.16m（26.2kg）の円礫９個（総重量 138.5 kg）が残存しており、溝上面から高さ 0.3m まで積み上げられた状態で確認した。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩５個、砂岩２個、花崗斑岩２個である（第 41 表 4）。溝跡２と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 10.29m、上幅 1.5～2.7m、下幅 0.60～1.30m を測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で 1.5m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 1.6m 程度である。

【堆積層】　ST32 横穴墓を覆う堆積層は細別 23 層・大別４層に分けた（第 230 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別１層〕

大別１層（細別 1～9 層）は ST32 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別２層の層理面付近で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。大別１層堆積後、ST31 は完全に埋没したと考えられる。

〔大別２層〕

大別２層（細別 10～18 層）は ST32 の玄室～墓前域に堆積する自然堆積層である。本大別層と下層にあたる大別３層の層理面で遺物が出土した。遺物の状況からこの面で何らかの祭祀行為が行われたとみられる。

〔大別３・４層〕

大別３層（細別 19～22 層）は ST32 の羨道と墓前域の掘方底面直上に堆積する自然堆積層、大別４層（細別 23 層）は墓前域末端に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別４層は、横穴墓の掘方底面に敷き詰められた整地層とみられる。横穴墓の掘削廃土を利用したものと考えられる。

【出土遺物】土師器３点（2 個体、破片１点）、須恵器 29 点（1 個体、破片 28 点※うち１個体、破片２点は遺構間接合遺物）、金属製品２点（その他不明小破片多数）、弥生土器 10 点が出土した（第 41 表 1～3）。人骨等は残存していない。このうち、弥生土器は周辺から流入したものと考えられる。土師器鉢２個体、須恵器甕１個体の合計３点を図示した（第 233 図）。

出土遺物は、出土層位から**A：大別１層（細別９層底面）出土遺物**、**B：大別２層（細別 15 層底面）出土遺物**、**C：玄室底面出土遺物**の３群に分かれる。加えて、ST32 では、別の横穴墓（ST9・30）で破砕された須恵器破片の一部が ST32 に混入したと考えられる遺物２点（第 41 表 2）も出土している。これらは遺構間で接合する遺物であり、**D:大別２層の堆積途中（細別 14・15 層）**に混入したものがある。以上をまとめると、ST32 関連遺物は、古い順から C→B→D→A の４段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔玄室底面出土遺物〕

玄室底面で出土した遺物である（前項 C に相当）。玄室で鉄刀の茎部とみられる破片１点と不明鉄製品破片多数が出土した（第 41 表 3）。いずれも残りが悪く図示できなかった。これらは墓前域末端の整地（大別４層）後に玄室内で使用された遺物と考えられる。玄室底面で出土していることから、初葬に関連する遺物の可能性が高い。

なお、ST32 の墓前域では、整地（大別４層）後、大別３層（細別 19～22 層）が堆積するまで遺物が

出土していない。こうした墓前域での遺物の出土状況を考慮した場合、ST32の初葬の時期としては、「整地（大別4層）後間もなく初葬が実施されたが、墓前域での土器等を使用する墓前祭祀は実施されなかった:墓前域大別4層～大別3層堆積の間に初葬実施」「整地（大別4層）後、一定期間経過した後（大別3層堆積後）に初葬が実施され、それに関する墓前祭祀は大別2層（細別10～15層底面）で実施された:墓前域大別 3 層堆積後に初葬実施」の二者の可能性を想定することができる。しかし、これらを判別する根拠が不足していることから、ここでは両者の可能性をみておきたい。

〔大別2層（細別15層底面）出土遺物〕（第233図）

大別2層（細別10～15層）のうち、墓前域に分布する細別15層の底面付近で出土した遺物である（前頁Bに相当）。土師器鉢2個体（第233図2・3）と図示できなかった土師器鉢破片1点が出土した（第41表1）。玄室から遺物は出土していない。

図示した鉢2点は、墓前域の羨門付近で正位の状態で出土（写真図版94-7）し、このうち1点で底部穿孔とみられる痕跡を確認した（第233図2）。遺物は少量ではあるが、これらの鉢は墓前祭祀で使用されたものと考えられる。祭祀のための整地は確認されていないことから、大別3層堆積後の窪地を利用した墓前祭祀であったと推定される。

この段階のST32は、堆積土の状況からみて、玄室への入室が可能な状態だったと考えられる。前述の玄室出土遺物の状況を踏まえ、この段階の墓前祭祀は、ST32の初葬またはその後の追葬等に関連するものとみておきたい。

〔大別2層（細別14・15層）出土遺物〕

大別2層（細別10～15層）のうち、細別14・15層の堆積土中から出土した遺物である（前頁Dに相当）。須恵器破片が2点が出土した（第41表2）。

これらの須恵器破片は別の横穴墓で破砕された後、ST32の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST9・30由来の2者に分けられる(遺物の詳細等は主体遺構の頁に掲載)。ST32では、**ST9由来の須恵器瑞（E-46a／第75図6)**と接合する破片が1点（頸部破片）、**ST30由来の須恵器甕(Y・E-191)**と接合する破片が1点（体部破片）出土した。ST9はST32から直線距離で約40m東の尾根を隔てた別斜面、ST30はST32と同斜面に存在するが直線距離で約15m東に位置する。距離的にみて、両者ともに単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。もことから、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別2層（細別14・15層）堆積途中の段階に「ST9とST30からST32墓前域への須恵器破片の意図的な散布行為」が行われたと想定される。

〔大別1層（細別9層底面）出土遺物〕（第233図）

大別1層（細別1～9層）のうち、墓前域に分布する細別9層の底面付近で出土した遺物である（前頁Aに相当）。甕1個体（第233図1）と図示できなかった須恵器甕破片26点が出土した（第41表1・2)。玄室から遺物は出土していない。

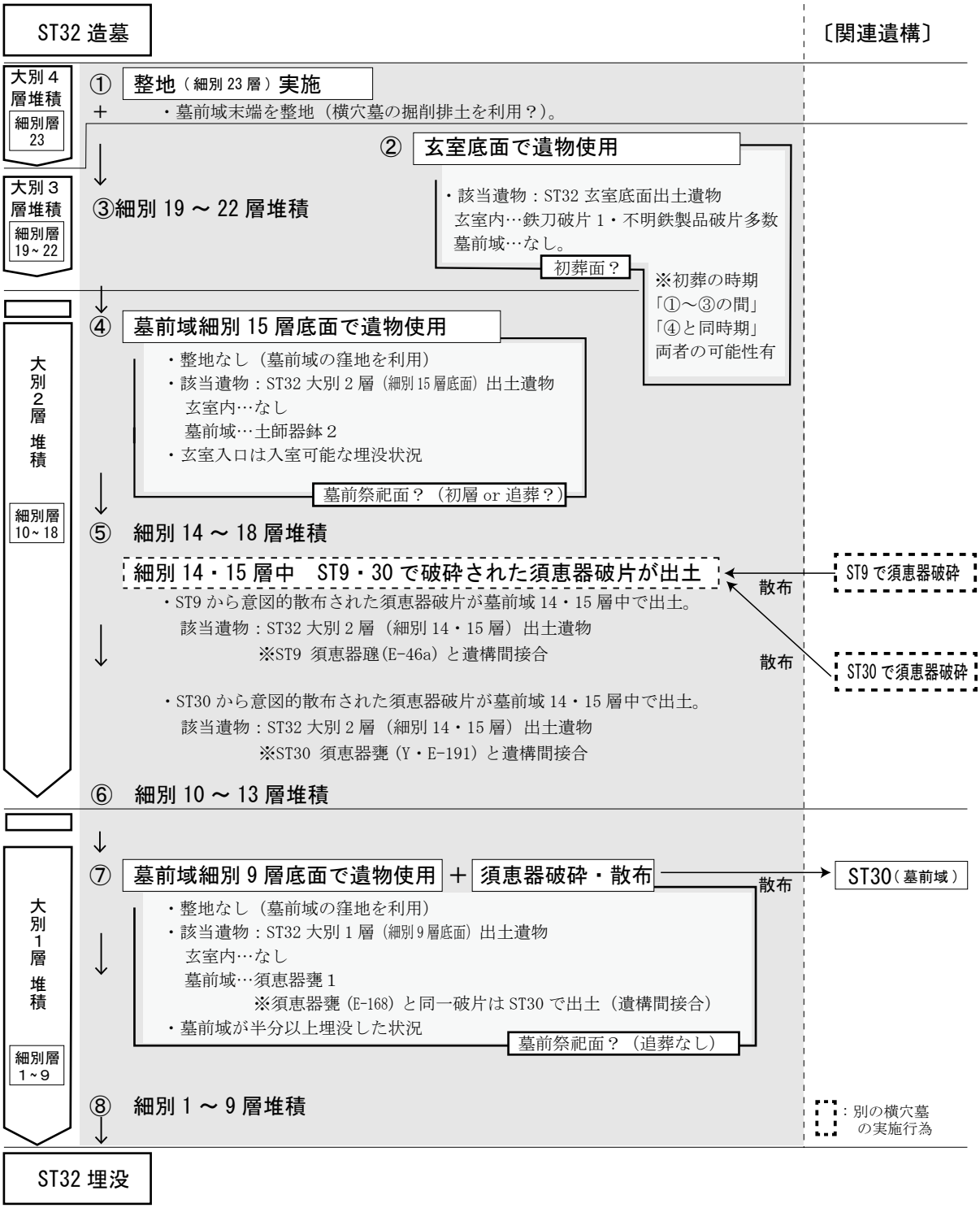
図示した須恵器甕（E-168）については、墓前域で破片の状態で面的に出土しており（第231図/写真図版94-6)、これと接合する同一個体の破片がST30で出土している（第232図)。この面で須恵器甕の破砕･散布を伴う墓前祭祀が実施されたと考えられる。祭祀のための整地は確認されていないことから、大別2層堆積後の窪地を利用した墓前祭祀であったと推定される。

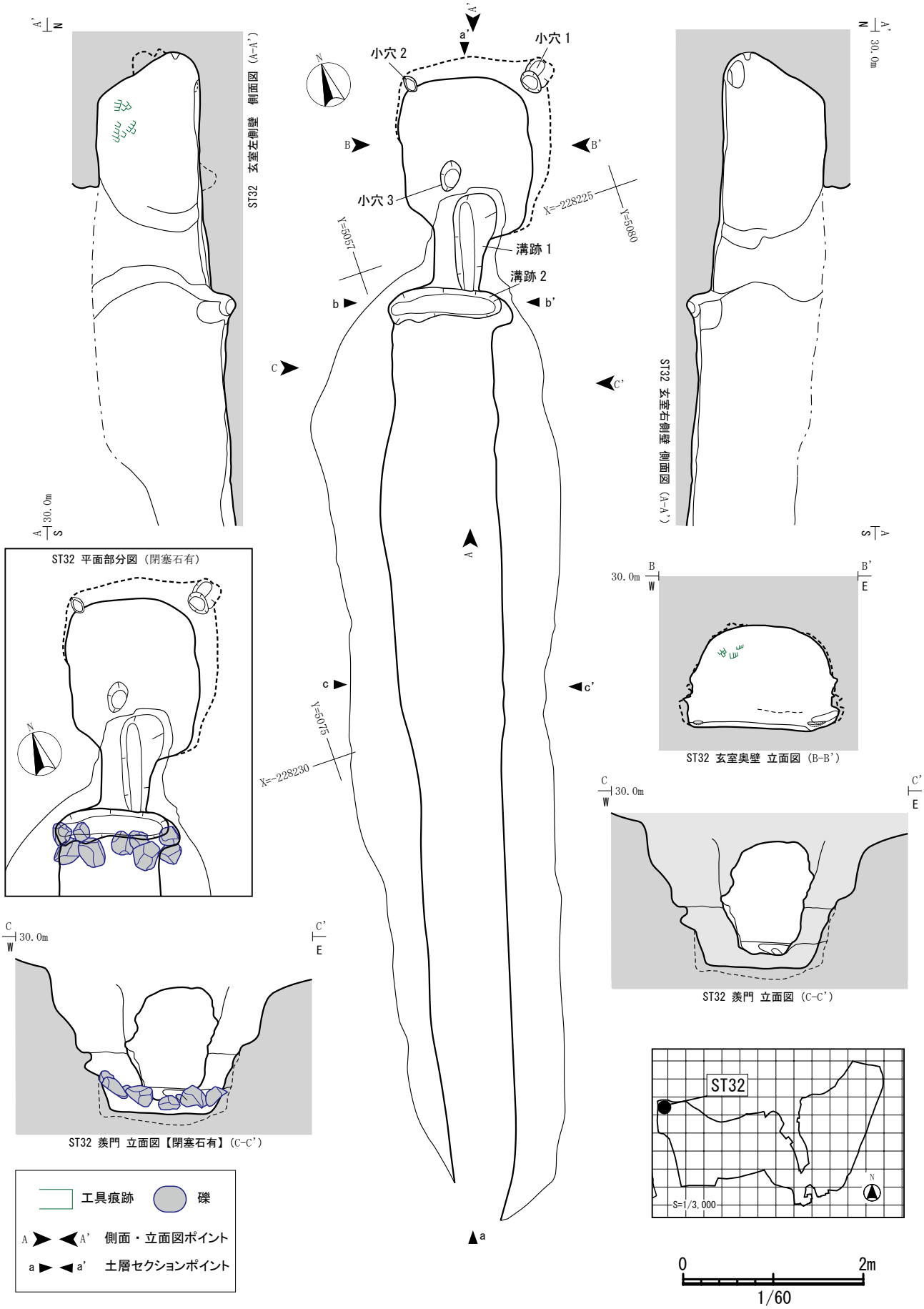
この段階のST32は、堆積土の状況からみて、玄室への入室はある程度可能であったと推定されるが、墓前域が半分以上埋没しているため、埋葬行為自体は困難な状況だったと推定される。玄室内で遺物が出土していないことも踏まえ、本段階の墓前祭祀は追葬に関連しないものだったと考えられる。

【まとめ】

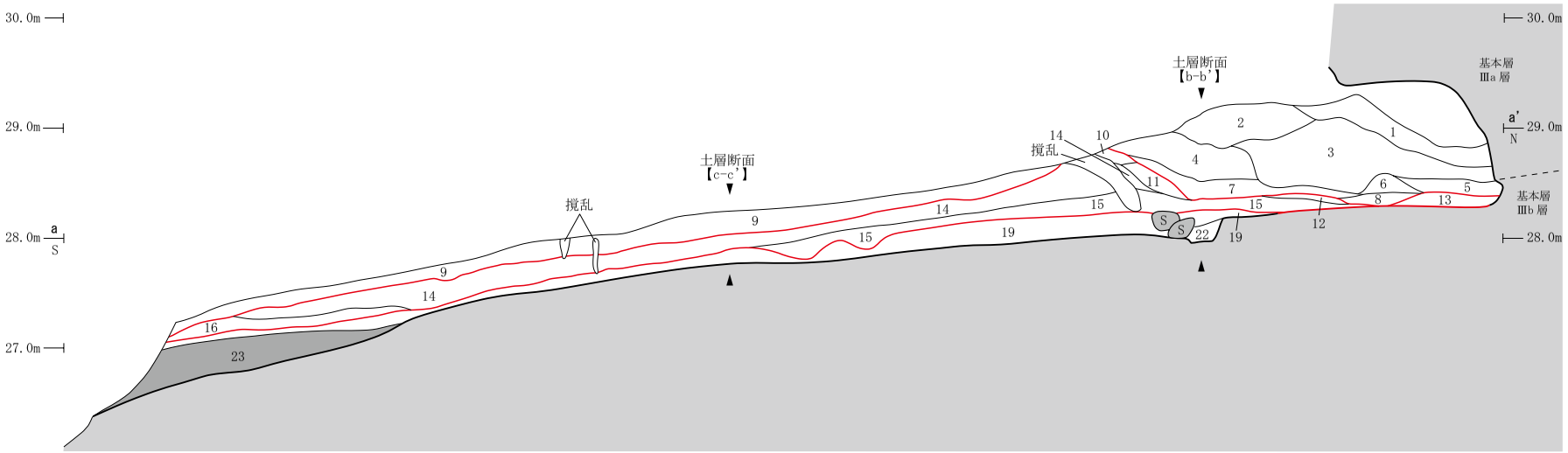
ST32 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

〔ST32 造墓・使用・埋没の経過〕

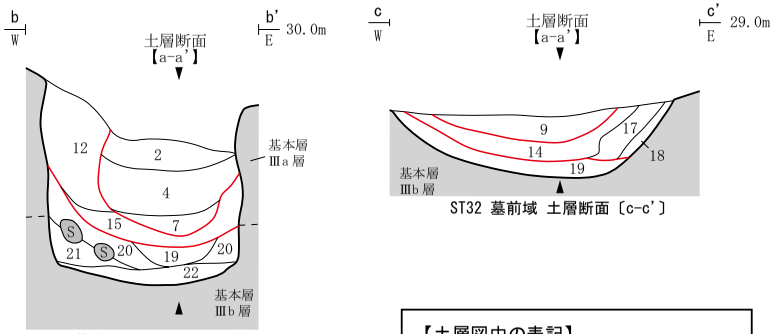




第229図　ST32 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図

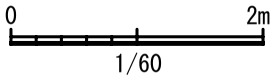


ST32 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕



ST32 墓前域 土層断面〔b-b'〕

ST32 墓前域 土層断面〔c-c'〕



【土層図中の表記】

- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S ：礫
- ▼▲：各土層断面の交点

細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック（小・大）多く含む。天井崩落土。	1	自然堆積層
2	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック（大）多く含む。天井崩落土。		
3	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック多量含む。天井崩落土。		
4	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック多く含む。天井崩落土。		
5	黄褐色(10YR5/6)	シルト			
6	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック含む。天井崩落土。		
7	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック多く含む。		
8	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト			
9	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片・地山ブロック（小）含む。		
10	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト		2	自然堆積層
11	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック多く含む。		
12	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	地山ブロック多く含む。		
12	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト			
13	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト			
14	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
15	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック少量含む。		
16	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片含む		
17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片含む		
18	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	砂質シルト土含む。		
19	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		3	自然堆積層
20	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	地山ブロック少量含む。		
21	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。		
22	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	炭化物片少量含む。		
23	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック（小・中・大）多量含む。	4	人為堆積層（整地層）

第 230 図　ST32 横穴墓 土層断面図

第41表　ST32横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器		須恵器		弥生土器	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	鉢	小計	甕	小計	壺・甕	小計
玄室	－	堆積土	個						
			破			10 (5)	10 (5)	2 (5)	2 (5)
	1	6･7層	個						
			破					3 (10)	3 (10)
墓前域	－	堆積土	個						
			破			2 (70)	2 (70)		
	1	9層	個						
			破			1 (50)	1 (50)		
		9層、14層上面	個						
			破			13 (2,840)	13 (2,840)		
	2	15層	個	2 (635)	2 (635)				
			破	1 (5)	1 (5)				
		14･15層	個						
			破					5 (30)	5 (30)
総合計	個体数(重量)			2 (635)	2 (635)				
	破片数(重量)			1 (5)	1 (5)	26 (2,965)	26 (2,965)	10 (45)	10 (45)
	総重量			(640)	3 (640)	(2,965)	26 (2,965)	(45)	10 (45)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構･層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (11,980)	◆ST30　14層(墓前域) ◆ST32　9層、14層上面(墓前域)	ST32	◆ST30:1点 ★ST32:49点	E 168	第233図1
須恵器	壺	1 (235)	◆ST9　5層(墓前域･羨門付近) ◆ST32　14･15層(墓前域)	ST9	★ST9:7点 ◆ST32:1点	E 46a･b	第75図6
須恵器	甕	1 (90)	◆ST30　13層(墓前域) ◆ST32　14･15層(墓前域)	ST30	★ST30:1点 ◆ST32:1点 ※E-164甕(ST30出土)と類似	Y･E 191	－

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST32出土須恵器の総数
(表41-1)遺構単独出土　破片26点
＋
(表41-2)遺構間接合遺物　1個体＋破片2点　＝ 29 点

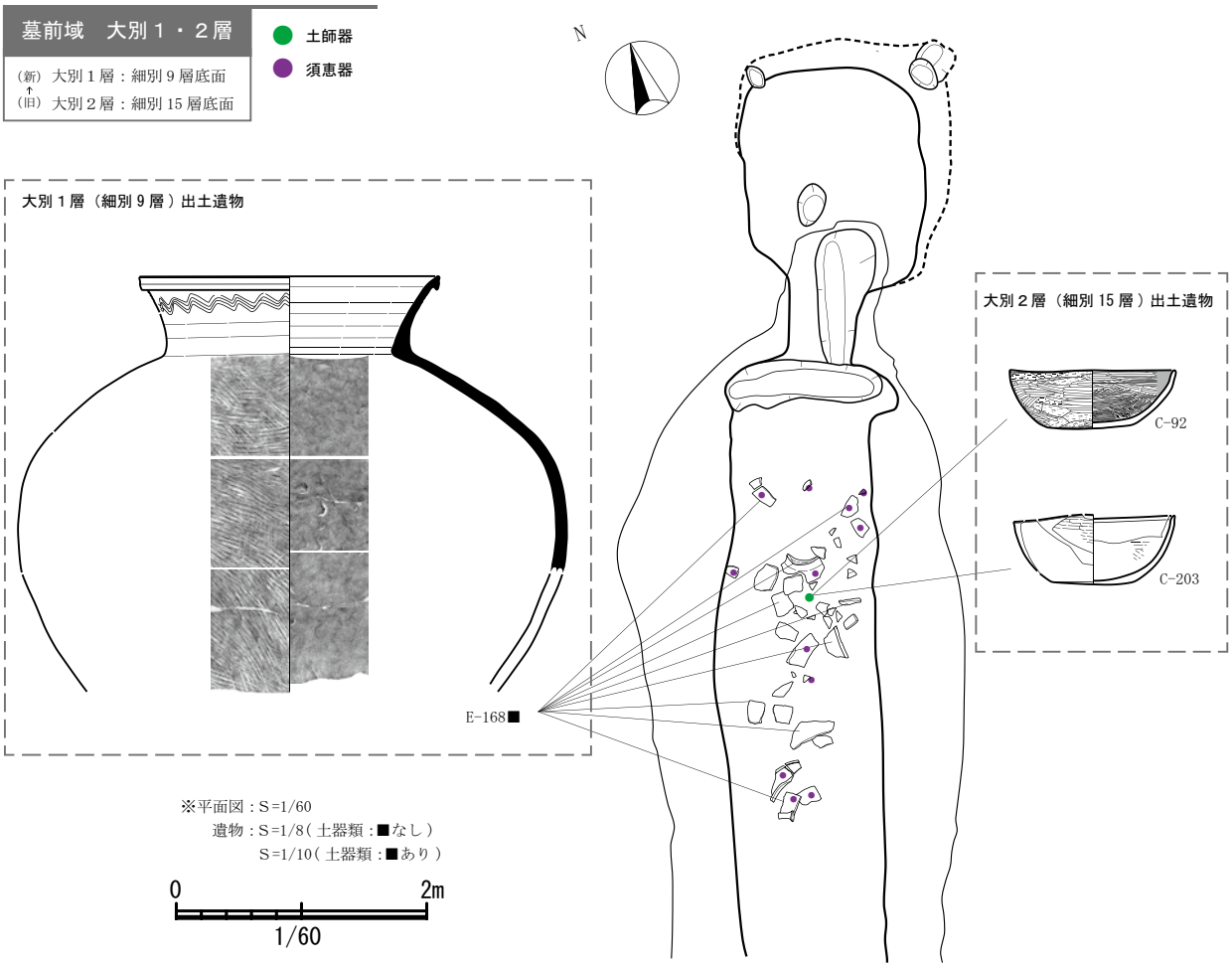
3. 金属製品

種別			金属製品			
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	鉄刀	不明鉄製品	小計
玄室	－	底面	掲			
			非掲	1	1＋破片多数	1 ＋破片多数
器種別総合計	掲載遺物点数					
	非掲載遺物点数			1	1＋破片多数	2 ＋破片多数
	総点数			1	1＋破片多数	2 ＋破片多数

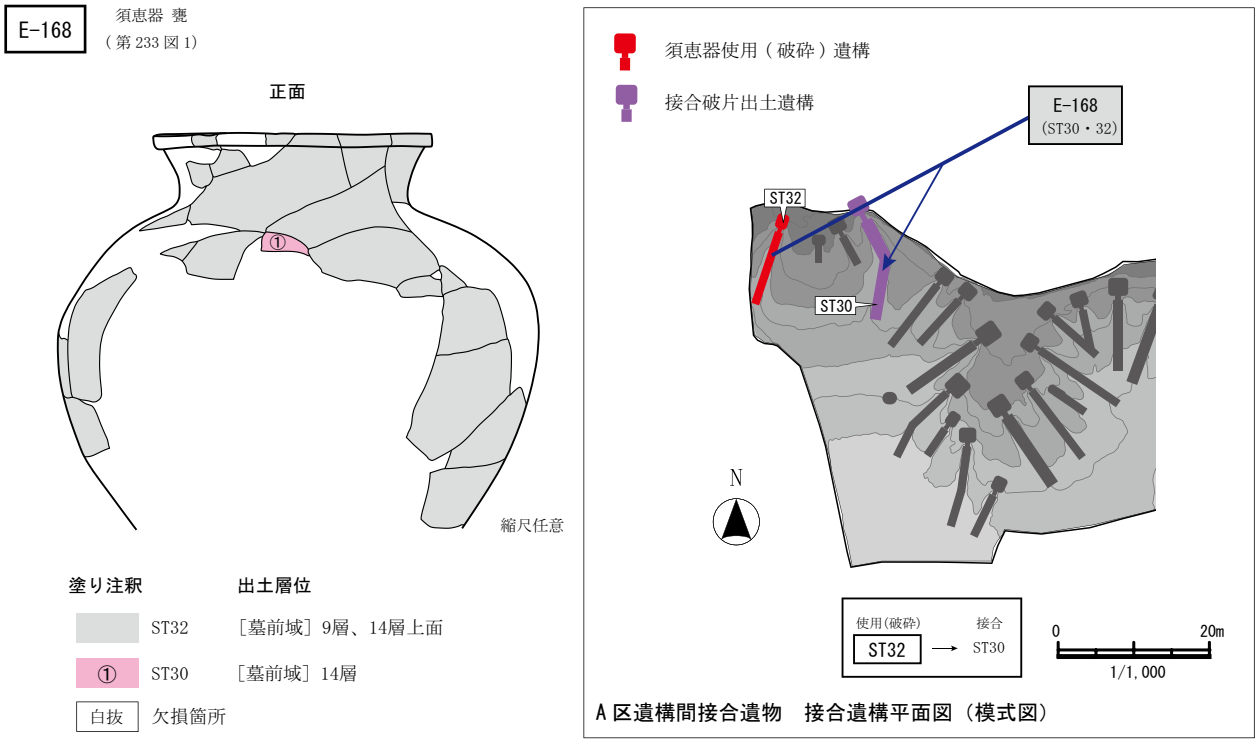
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST32出土の不明小片の重量は10.7g)

4. 閉塞石観察表

石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量	備考
頁岩	円礫	18	16	12	9.6	
頁岩	円礫	30	15	13	10.7	
頁岩	円礫	23	17	10	11.1	
頁岩	円礫	23	20	17	12.2	
頁岩	円礫	25	18	12	14.7	
砂岩	円礫	28	16	10	11.6	被熱
砂岩	円礫	26	22	15	25.3	
花崗斑岩	円礫	36	20	14	17.1	
花崗斑岩	円礫	30	24	16	26.2	
合計:9点／重量(kg)＝					138.5	

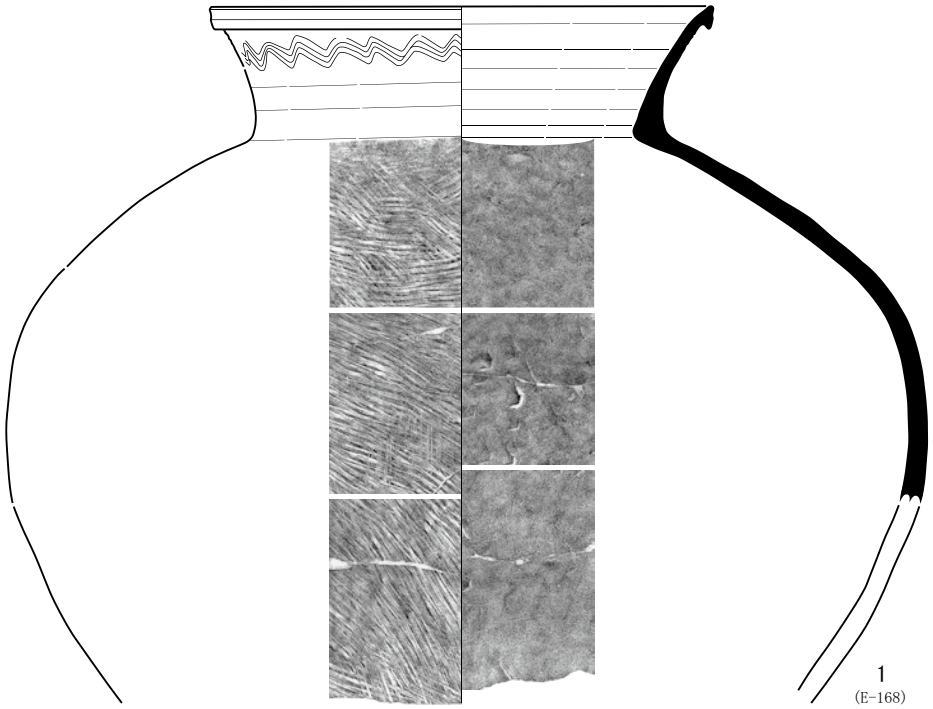


第231図　ST32 横穴墓 遺物出土状況図



第232図　ST32 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

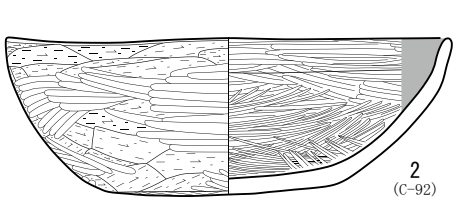
墓前域　大別１層

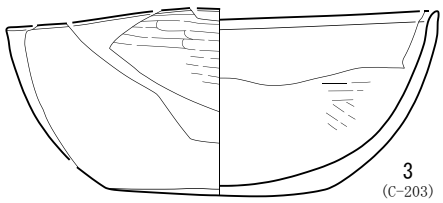


0　10cm
(S=1/6)

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	◆ST32　9層 14層上面 ◆ST30　14層	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST32(主体)**＋ST30 【技法】外面：口頸部ロクロナデ→櫛描波状文・体部平行タタキ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕→ナデ 【法量】口径39.6cm・残存高55.4cm・器厚0.7～2.7cm	E-168	251-1 271-5 271-6

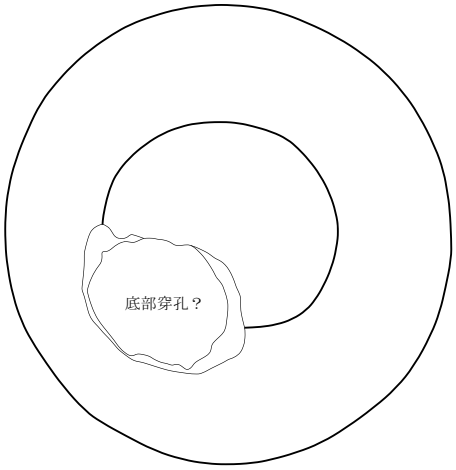
墓前域　大別２層





0　5　10cm
(S=1/3)

※(　) 内：推定値



No.	細別層	15層	登録	写真図版
2	出土位置	墓前域	C-92	202-4 265-6
	種別・器種	土師器　鉢		
	技法(外面・内面)・法量・特記事項			
	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラ削り 体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径17.6cm・器高6.2cm・底径9.3cm・器厚0.5～0.7cm 【特記事項】底部穿孔？・部分的に赤彩残存			

No.	細別層	15層	登録	写真図版
3	出土位置	墓前域	C-203	202-5
	種別・器種	土師器　鉢		
	技法(外面・内面)・法量・特記事項			
	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部～底部ヘラ削り→ヘラミガキ・磨滅 内面：ヘラミガキ・磨滅 【法量】口径(17.0)cm・器高7.5cm・底径9.0cm・器厚0.4～0.9cm 【特記事項】内面：黒色処理？			

第233図　ST32 横穴墓 出土遺物

33 号横穴墓（ST33）（第 234 図、第 4 分冊 写真図版 95）

【検出位置】 A-2 区西側の標高 30m の丘陵南斜面に位置する。同斜面の西には ST32、東には ST31 が隣接している。

【重複関係】 なし。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室の一部の天井が残存し、玄門は南側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、シルト･泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）である。

【個別部位の特徴】（第 234 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの全長は 3.46m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.02m、玄室幅 1.22～1.85m を測る。床面積は約 1.5 ㎡である。天井は残存していない。

平 面 形：不整形である

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.1m 程度である。

玄　　門：前壁中央に位置する。玄門付近の天井は崩落しており残存していない。幅 1.01m を測る。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：玄室中央の底面で長さ 0.40m・幅 0.08～0.15m・深さ 0.08m の溝跡 1 確認した。玄室底面の堆積土除去後に確認している遺構であることから、横穴墓に伴う遺構とみられる。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 0.61m、玄室側の幅 1.01m、墓前域側の幅 1.00m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

付属施設：溝跡 2 を確認した。幅 0.12m・深さ 0.02m を測る。溝跡 2 は玄門付近から羨道の中心を通り、墓前域側の溝跡 3 と接続する。排水溝と考えられる。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.63m、幅 0.15～0.23m、深さ 0.05m の溝跡 3 を確認した。位置的にみて、横穴墓の閉塞に関連する遺構と考えられる。他の横穴墓でみられた閉塞石は 1 点も残存していなかった。閂穴等も検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の末端までの長さ 1.83m、上幅 0.8～1.8m、下幅 0.38～1.63m を測る。底面から上端までの高さは、羨門付近で 0.3m 前後残存している。

形　　状：溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と末端の比高差は 0.1m 程度である。

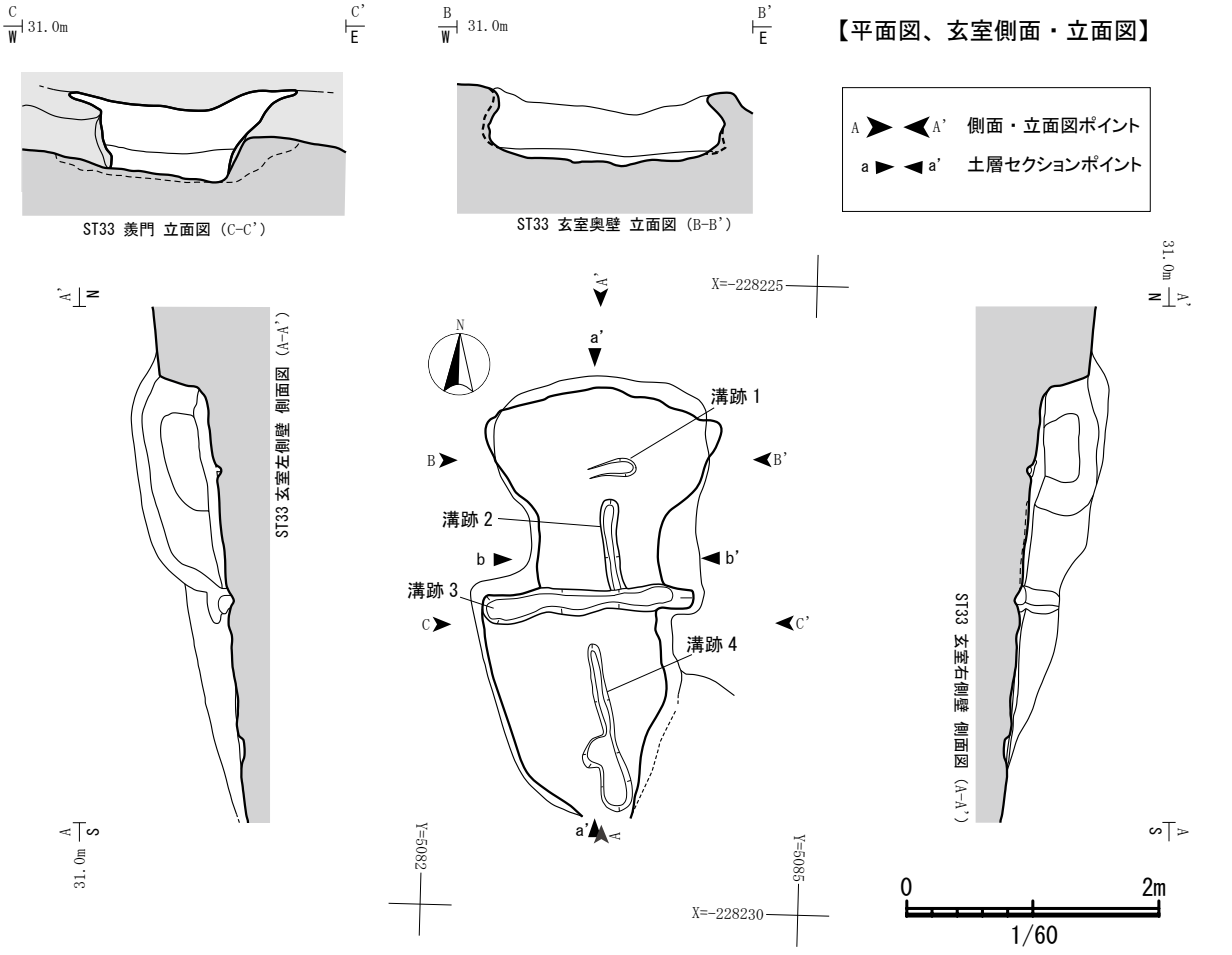
付属施設：溝跡 4 を確認した。長さ 1.35m・幅 0.13～0.30m・深さ 0.02m を測る。羨門付近から墓前域の

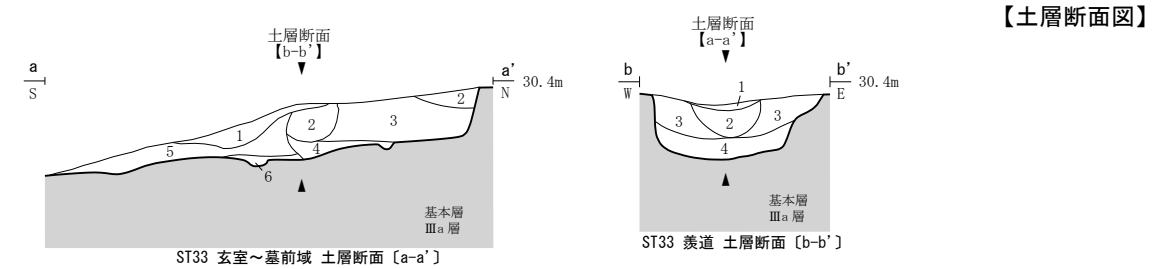
中央部を通り末端に至る。排水溝と考えられる。

【堆積層】　ST33 横穴墓を覆う堆積層は細別 6 層に分けた（第 234 図)。いずれも自然堆積層である。人為的な整地層は確認されていない。

【出土遺物】出土していない。

【まとめ】　ST33 横穴墓は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、造墓後、1 回程度の埋葬が実施されたとみておきたい。





層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片、地山ブロック含む。自然堆積層。
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック多く含む。天井崩落土。自然堆積層。
3	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック多く含む。天井崩落土。自然堆積層。
4	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック少量含む。自然堆積層。
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。自然堆積層。
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒子少量含む。自然堆積層。

0　2m
1/60

第234図　ST33 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図、土層断面図

34 号横穴墓（ST34）（第 235～243 図、第 42 表、第 4 分冊 写真図版 95・96）

【検出位置】 A-2 区東側の標高 21～23m の丘陵南西斜面に位置する。同斜面の北西側には ST27 が隣接している。ST34 は横穴墓分布域の最南端に位置する横穴墓である。

【重複関係】 墓前域の一部が現代の撹乱を受けている。

【検出状況】 墓前域を含むすべての範囲が埋没した状況で検出した。

【残存状況】 玄室から墓前域まで残存している。玄室～羨道の天井は残存していない。墓前域の末端は発掘区外に延びる。玄門は南西側に向かって開口する。横穴墓が掘り込まれた基盤層は、玄室上部がシルト・泥質～砂岩の地山（基本層Ⅲa 層）、それより下部の範囲が砂岩質の地山層（基本層Ⅲb 層）である。

【個別部位の特徴】（第 235 図）

〔規　模〕玄室・羨道・墓前域で構成され、玄室奥壁から墓前域末端までの残存長は 7.60m を測る。

〔玄　室〕

規　　模：玄室の規模は、玄室奥壁から羨道境までの奥行 1.86m、玄室の中央幅 2.10m、奥壁幅 1.92m、前壁幅 1.75m、左側壁幅 1.69m、右側壁幅 1.74m を測る。床面積は約 3.6 ㎡である。

平 面 形：隅丸方形を基調とする。

天　　井：天井が残存していないため不明である。

底　　面：平坦である。奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁側がやや高い。奥壁部分と玄門部分の比高差は 0.2m 程度である。

玄　　門：前壁の中央付近に位置し、幅 0.98m を測る。立面形は不明である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

そ の 他：奥壁右側で小穴 1 を確認した。直径 0.25m・奥行 0.20m の円形を呈し、底面から高さ 0.45m に位置する。遺物は出土していない。横穴墓に伴うものか不明である。

〔羨　道〕

規　　模：玄室の境から墓前域の境までの奥行 1.04m、玄室側の幅 0.98m、墓前域側の幅 0.76m を測る。

立 面 形：天井が残存していないため不明である。

天　　井：残存していない。

底　　面：玄室と羨道の境には段差はなく、玄室と同様平坦である。玄門から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、玄門側がやや高い。玄門部分と羨門部分の比高差は 0.1m 程度である。

工 具 痕：壁面が風化しており、明確な工具痕跡は確認できなかった。

〔閉塞施設〕

羨道と墓前域の境の底面に段差はなく、羨門の墓前域側底面で長さ 1.60m、幅 0.40m、深さ 0.10m の溝跡 1 を確認した。その溝跡 1 の上部と玄室内に 0.14×0.14×0.04m（1.7 kg）～0.45×0.30×0.10m（50.5 kg）の円礫・角礫 15 個（総重量 192.8 kg）が残存していた。出土位置からみて、これらの礫は閉塞石として使用されたものと考えられる。石材は頁岩 9 個・アプライト花崗岩 3 個・花崗閃緑岩 2 個・圧砕花崗岩 1 個である（第 42 表 5）。溝跡 2 と礫は位置的にみて横穴墓の閉塞に関連する遺構とみられる。閂穴等は検出されていない。

〔墓前域〕

規　　模：羨門から墓前域の発掘区際までの長さが 4.70m、上幅 1.4～2.2m、下幅 0.62～0.95m を測り、末端は発掘区外に延びる。底面から上端までの高さは、羨門付近で 0.9m 前後残存している。

形　　状：細長い溝状の形状を呈する。

底　　面：羨門から墓前域末端に向かって緩やかに傾斜しており、羨門側が高い。羨門付近と発掘区際の比高差は 0.4m 程度である。

【堆積層】　ST34 横穴墓を覆う堆積層は細別 22 層・大別 5 層に分けた（第 236 図）。以下、堆積層の詳細を大別層ごとに示す。

〔大別 1・2 層〕

大別 1 層（細別 1〜6 層）は ST34 玄室〜墓前域に堆積する自然堆積層、大別 2 層（細別 7・8 層）は墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 1 層のうち、玄室〜羨道に堆積する細別 2〜4 層には天井の崩落土とみられる地山ブロックが多く含まれる。大別 2 層は整地層とみられ、大別 1 層と 2 層の層理面で遺物が面的に出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。大別 1 層堆積後、ST34 は完全に埋没したと考えられる。

〔大別 3・4 層〕

大別 3 層（細別 9〜18 層）は ST34 の玄室〜墓前域に堆積する自然堆積層、大別 4 層（細別 19 層）は玄室〜墓前域に分布する地山ブロックを多く含む人為堆積層である。大別 3 層のうち、細別 11〜13 層には地山ブロックが多く含まれる。羨道天井の崩落土と考えられる。大別 4 層は整地層とみられ、大別 3 層と大別 4 層の層理面で遺物が出土した。この面で何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

〔大別 5 層〕

大別 5 層（細別 20〜22 層）は ST34 の玄室〜墓前域に堆積する自然堆積層である。基本層Ⅲb 層を起源とする砂質シルト土が主体の層で、混入物の少ない均一層であることから、造墓直後の堆積層とみられる。遺物は土師器小破片が 2 点出土したのみであり、横穴墓の掘方底面での祭祀行為等はなかったと考えられる。

【出土遺物】土師器 17 点（5 個体、破片 12 点）、須恵器 39 点（7 個体、破片 32 点※うち 1 個体・破片 1 点は遺構間接合遺物）、玉製品 1 点、金属製品 7 点（その他不明小破片多数）が出土した（第 42 表 1〜4）。遺物の出土位置は玄室内と墓前域に分かれるが、大半は墓前域で出土している（第 237 図）。土師器坏 1 個体・高坏 2 個体・埦 2 個体、須恵器高台坏 1 個体・蓋 1 個体・甕 5 個体、切子玉 1 点、蕨手刀 1 点・刀子 1 点の合計 15 点を図示した（第 239〜243 図）。このうち、図示した蕨手刀 1 点（第 243 図 4）と刀子 1 点（第 243 図 5）については、ST34 の墓前域外での出土したものであるが、墓前域隣接地点での出土（第 237 図/写真図版 96-6）であることから、ST34 に帰属するものとして取り扱った。また、切子玉 1 点（第 243 図 3）については、調査過程での記録不備により出土層位の特定ができなかった遺物で、以下で示す A〜C のいずれかの段階に帰属するものであることは間違いないが、ここでは堆積層出土として取り扱うこととした。

出土遺物は、出土層位から**A：大別 1 層（細別 1・2 層）出土遺物**、**B：大別 1 層（細別 5・6 層底面）出土遺物**、**C：大別 3 層（細別 16・17 層底面）出土遺物**の 3 群に分かれる。加えて、ST34 では、別の横穴墓（ST12）で破砕された須恵器破片の一部が ST34 に混入したと考えられる遺物 1 点（第 42 表 2）も出土している。この須恵器破片は遺構間で接合する遺物であり、**D:墓前域大別 1 層の堆積途中（細別 5 層上半部）**に混入したものと考えられる。以上をまとめると、ST34 関連遺物は、古い順から C→B→D→A の 4 段階に分けることができる。以下、出土層位毎に古い順から記載する。

〔大別 3 層（細別 16・17 層底面）出土遺物〕（第 242・243 図）

大別 3 層（細別 9〜18 層）のうち、墓前域に堆積する細別 16・17 層の底面と玄室内の大別 5 層上面（細別 21 層上面）で出土した遺物である（前項 C に相当）。土師器坏 1 個体（第 242 図 2）・高坏坏部 1 個体

（第 243 図 1）・高坏脚部 1 個体（第 243 図 2）・埦 1 個体（第 242 図 3）と図示できなかった不明鉄製品破片が出土した（第 42 表 1・4)。細別 13 層出土の埦 1 個体（第 242 図 4）についても本段階に帰属する遺物と考えられる。図示した高坏 2 個体については、接合面はないが同一個体の可能性が高い。

遺物の出土位置は、墓前域で土師器類、玄室で不明鉄製品破片が出土した（第 237 図)。少量であるが整地層（大別 4 層）上面で遺物が出土していることから、これらは墓前祭祀と埋葬に関わる遺物と考えられる。この整地層の下層にあたる掘方底面で遺物がほとんど出土していないことを踏まえ、本面出土の遺物は ST34 の初葬に関連するものとみておきたい。

〔大別 1 層（細別 5・6 層底面）出土遺物〕（第 240～242 図）

大別 1 層（細別 1～6 層）のうち、墓前域に分布する細別 5・6 層の底面〔＝大別 2 層（細別 7 層）上面〕で出土した遺物である（前頁 B に相当)。須恵器甕 5 個体（第 240 図 1～3・第 241 図 1・第 242 図 1）と図示できなかった土師器坏破片・高台坏破片、須恵器甕破片、不明鉄製品破片が出土した（第 42 表 1・2・4)。遺物の出土位置は、墓前域の羨道付近である（第 237 図)。玄室で遺物は出土していない。図示した須恵器甕のうち第 240 図 3 (E-171) と第 241 図 1 (E-172)、第 240 図 1 (E-173) と第 240 図 2 (E-174) は、接合面はないが同一個体の可能性が高い。また、須恵器甕 1 個体（第 241 図 1/E-172）については、接合する同一個体の破片が別の横穴墓（ST27）と ST3 付近の検出面でも出土している。ST34 の墓前域で須恵器甕の破砕散布が行われた痕跡と考えられる。

遺物の出土状況としては、第 242 図 1 の甕（E-170）はほぼ完形、その他の第 240 図 1～3・第 241 図 1 の甕（E-171～174）は破片の状態で出土した（写真図版 96-4)。完形の甕（E-170）については、底部穿孔後（写真図版 267-1)、整地層（細別 7 層）内に底部を埋めて正位に据えた状態で出土している（第 236 図/写真図版 96-4・5)。これらは、墓前祭祀に使用された遺物と考えられる。出土状況からみて、遺物は原位置を保ったまま埋没したものとみられる。

堆積土の状況から、この段階の ST34 は、墓前域が半分程度、羨門付近が大部分埋没し、玄室入口がわずかに開口している状態であったと考えられる。このような状況下で本段階に追葬はあったとは想定し難い。以上のことから、本面での墓前祭祀は追葬とは関連のないものであったと推定される。

〔大別 1 層（細別 5 層上半部）出土遺物〕

大別 1 層（細別 1～6 層）のうち、墓前域の細別 5 層の堆積土中から出土した遺物である（前頁 D に相当)。須恵器破片 1 点が出土した（第 42 表 2)。

この須恵器破片は、別の横穴墓で破砕された後、ST34 の墓前域堆積土内に混入した遺構間接合遺物であり、ST12 由来の須恵器広口長頸壺 **(E-51／第 99 図 8)** と接合する（遺物の詳細・実測図等は主体遺構の頁に掲載)。ST12 は、ST34 から直線距離で約 40m 北西に位置することから、単なる遺物の流れ込みとは想定し難い。大別 1 層（細別 5 層）堆積途中の段階に「ST12 から ST34 墓前域への須恵器甕の意図的な散布行為」が行われたと想定される。

〔大別 1 層（細別 1・2 層）出土遺物〕

大別 1 層（細別 1～6 層）のうち、墓前域に分布する細別 1・2 層の堆積土中で出土した遺物である（前頁 A に相当)。土師器坏破片 3 点、須恵器高台坏 1 個体（第 239 図 2）・蓋 1 個体（第 239 図 1）・甕破片 13 点が出土した。

これらは堆積土の状況からみて、玄室天井崩落後に流入した遺物と判断される。すべて破片資料であり、出土位置についてもまとまりがないことから、横穴墓の祭祀に関連するものかは判断ができない。

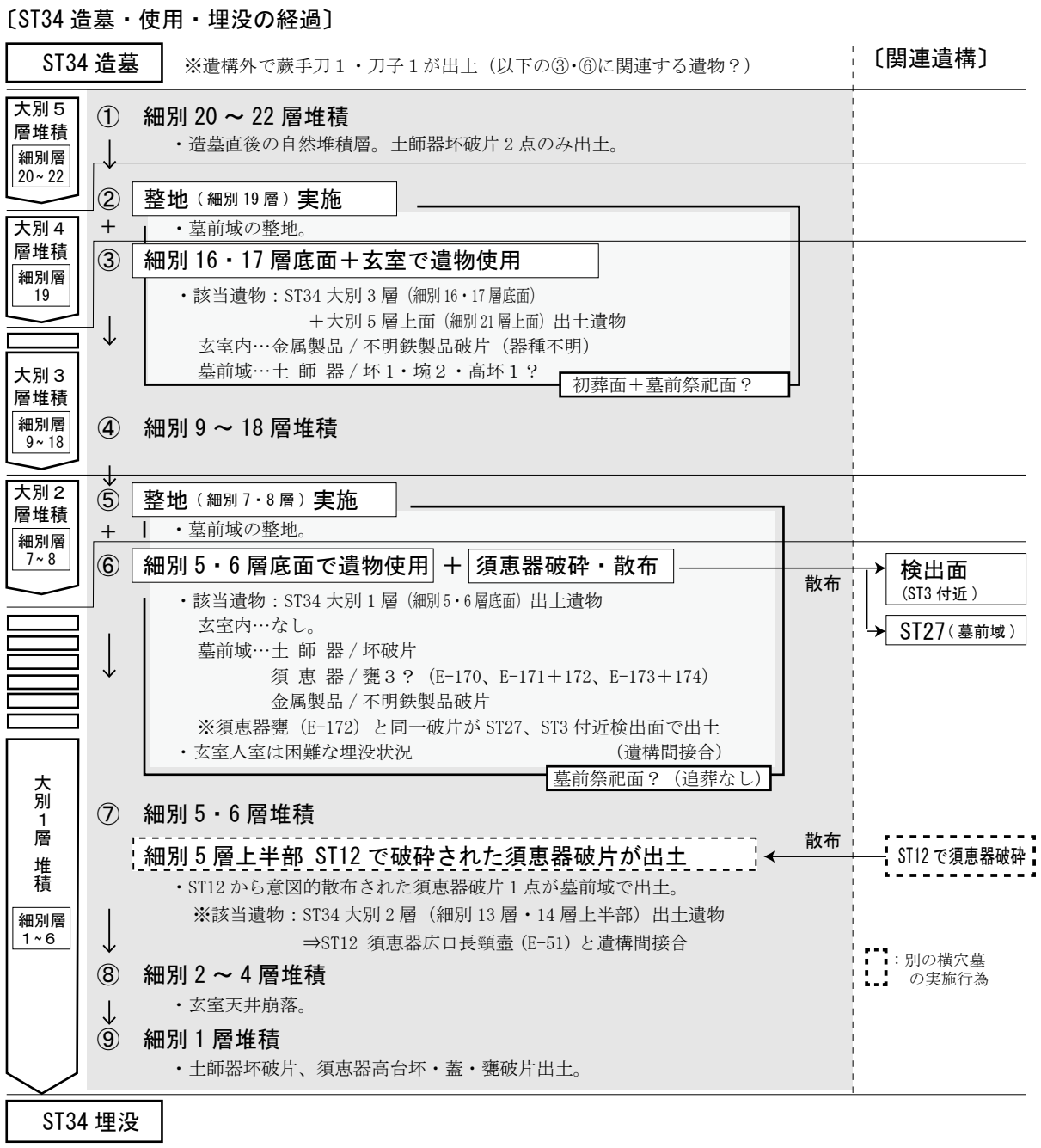
〔遺構外出土遺物〕

ST34 墓前域外の南東脇で出土した遺物である。蕨手刀（第 243 図 4）と刀子（第 243 図 5）が出土し

た。これらは、ST34 墓前域南東の上端から約 0.6m の地点で出土しており、ST34 に関連する遺物と判断した。前述のいずれかの段階の祭祀で使用されたものと想定しておきたい。

【まとめ】

ST34 横穴墓の概要を整理すると、以下のとおりとなる。



第42表　ST34横穴墓　出土遺物一覧

1. 土器類－遺構単独出土－

種別				土師器					須恵器			
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	坏	高坏	埦	高台坏	小計	高台坏	蓋	甕	小計
墓前域	－	堆積土	個									
			破	1 (5)				1 (5)			3 (465)	3 (465)
	1	1層	個						1 (10)	1 (75)		2 (85)
			破	3 (15)				3 (15)			9 (560)	9 (560)
		1･2層	個									
			破								4 (285)	4 (285)
		5層	個								2 (190)	2 (190)
			破	1 (5)			1 (5)	2 (10)			13 (555)	13 (555)
		5･6層	個								1 (3,680)	1 (3,680)
			破									
		6層	個									
			破	3 (20)				3 (20)			2 (90)	2 (90)
		5･7層	個								1 (8,700)	1 (8,700)
			破									
	2	7層	個									
			破	1 (15)				1 (15)				
	3	13層	個			1 (30)		1 (30)				
			破									
		16層	個	1 (35)	2 (295)	1 (60)		4 (390)				
			破									
	5	21層	個									
			破	2 (45)				2 (45)				
総合計	個体数(重量)			1 (35)	2 (295)	2 (90)		5 (420)	1 (10)	1 (75)	4 (12,570)	6 (12,655)
	破片数(重量)			11 (105)			1 (5)	12 (110)			31 (1,955)	31 (1,955)
	総重量			(140)	(295)	(90)	(5)	17 (530)	(10)	(75)	(14,525)	37 (14,610)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。重量は乾燥重量。
※個体／破片の列について、「個」は遺物の個体数(図化遺物)、「破」は遺物の破片(非図化遺物)総数を示す。

2. 土器類－遺構間接合遺物－

種別	器種	点数(重量)	出土遺構･層位	主体遺構	接合関係 (★印が主体遺構)	登録No	図版番号
須恵器	甕	1 (7,560)	◆ST27　15層(墓前域) ◆ST34　5･6層(墓前域) ◆A区検出面(ST3付近)	ST34	◆ST27:1点 ★ST34:77点 ◆A区検出面:1点	E 172	第241図1
須恵器	広口長頸壺	1 (185)	◆ST12　8層(墓前域) ◆ST34　5層上半部(墓前域)	ST12	★ST12:3点 ◆ST34:1点	E 51	第99図8

※アンダーラインがあるもの【　例:ST1　検出面　】は、本遺構に関する情報を示す。
※遺物の重量は、遺構間接合後の個体総重量(g／乾燥重量)であり、本遺構から出土した破片のみの重量ではない。
※最も多くの破片が出土した遺構を「主体遺構」とした。
※本遺構が主体遺構と判断されるものについては■塗りとした。
※登録Noの「Y･E」とは非抽出遺物の登録記号であり、非図化の遺物である。

※ST34出土須恵器の総数
(表42-1)遺構単独出土　6個体＋破片31点
＋
(表42-2)遺構間接合遺物　1個体＋破片1点　＝ 39 点

3. 玉製品

種別				玉製品	
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 個体/破片	切子玉 石製	小計
墓前域	－	堆積土	個	1 (5.2)	1 (5.2)
			破		
総合計	個体数(重量)			1 (5.2)	1 (5.2)
	破片数(重量)				
	総重量			(5.2)	(5.2)

※各表中の左の数値が「出土点数」、右の()内の数値が「出土遺物の総重量(g)」を示す。

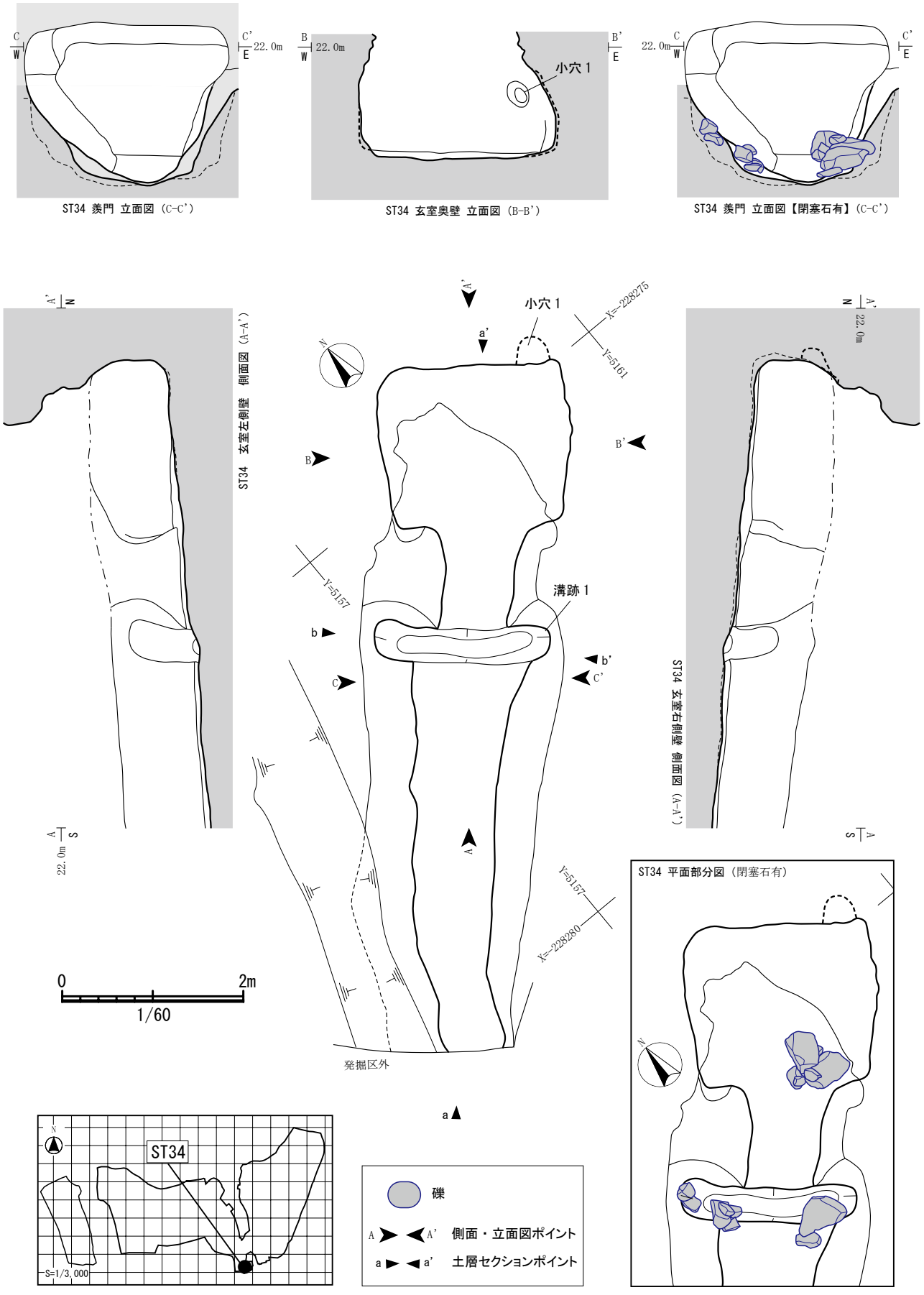
4. 金属製品

種別				金属製品			
出土位置	出土層位 大別層	出土層位 細別層	器種 / 掲載/非掲載	蕨手刀	刀子	不明鉄製品	小計
玄室	3	21層上面	掲				
			非掲			4+破片多数	4 +破片多数
墓前域	1	5層	掲				
			非掲			1	1
遺構外	－	墓前域東脇	掲	1	1		2
			非掲				
器種別総合計	掲載遺物点数			1	1		2
	非掲載遺物点数					5+破片多数	5 +破片多数
	総点数			1	1	5+破片多数	7 +破片多数

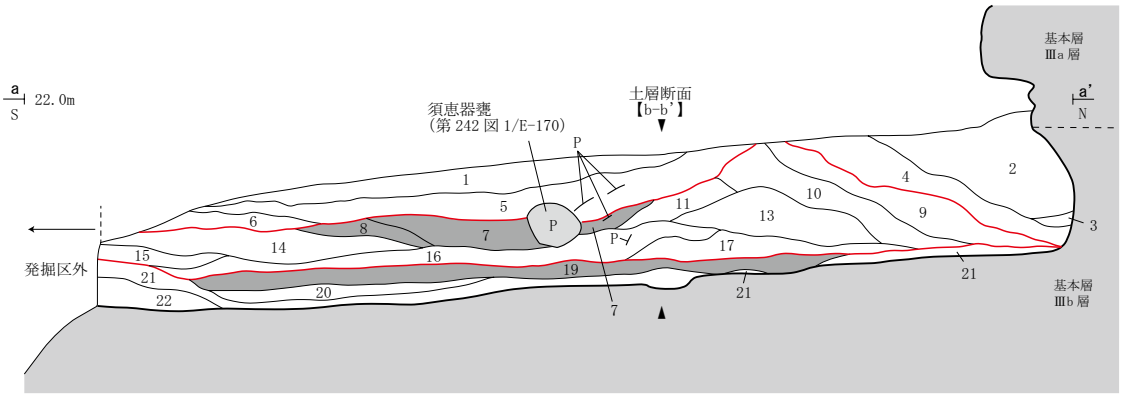
※金属製品の重量は保存処理過程で増減するため、本表には掲載しないこととした。
※点数は破片数であり、個体数を示したものではない。
※掲載／非掲載の列について、「掲」は本報告で図示した遺物点数、「非掲」は非図化の遺物点数を示す。
※器種不明の鉄製品のうち、小片の数量は「破片多数」とした。(ST34出土の不明小片の重量は2.0g)

5. 閉塞石観察表

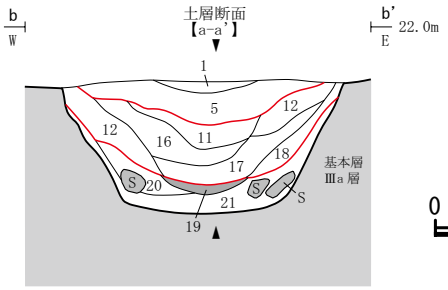
石材	形状	法量(単位:cm/kg) 長さ	幅	厚さ	重量
頁岩	角礫	14	14	4	1.7
頁岩	円礫	16	12	8	2.2
頁岩	角礫	20	10	7	2.4
頁岩	円礫	20	10	7	3.0
頁岩	円礫	19	10	7	3.2
頁岩	角礫	28	14	8	4.6
頁岩	角礫	18	15	10	4.7
頁岩	角礫	25	10	10	5.9
頁岩	角礫	19	16	15	9.0
アプライト花崗岩	角礫	20	13	12	5.9
アプライト花崗岩	円礫	20	12	12	6.0
アプライト花崗岩	円礫	27	17	14	12.2
花崗閃緑岩	角礫	37	30	25	35.7
花崗閃緑岩	角礫	43	40	10	45.8
圧砕花崗岩	円礫	45	30	10	50.5
合計:15点／重量(kg)＝					192.8



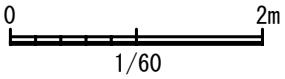
第235図　ST34 横穴墓 平面図、玄室側面・立面図



ST34 玄室～墓前域 土層断面〔a-a'〕



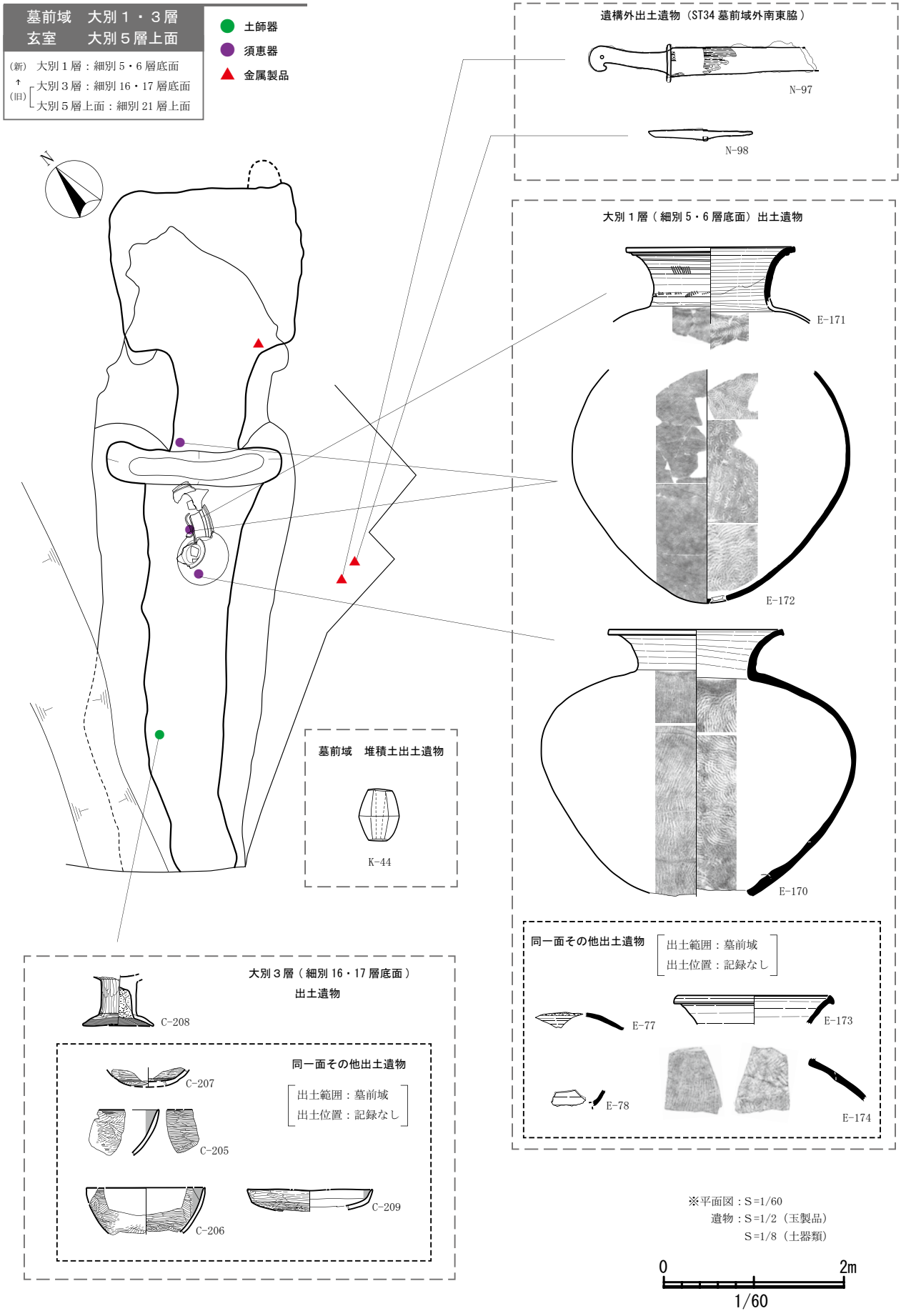
ST34 墓前域 土層断面〔b-b'〕



【土層図中の表記】
- 土層中の塗り：人為堆積層
- 分層線の赤線：祭祀想定面
- S：礫
- P：土器類
- ▼▲：各土層断面の交点

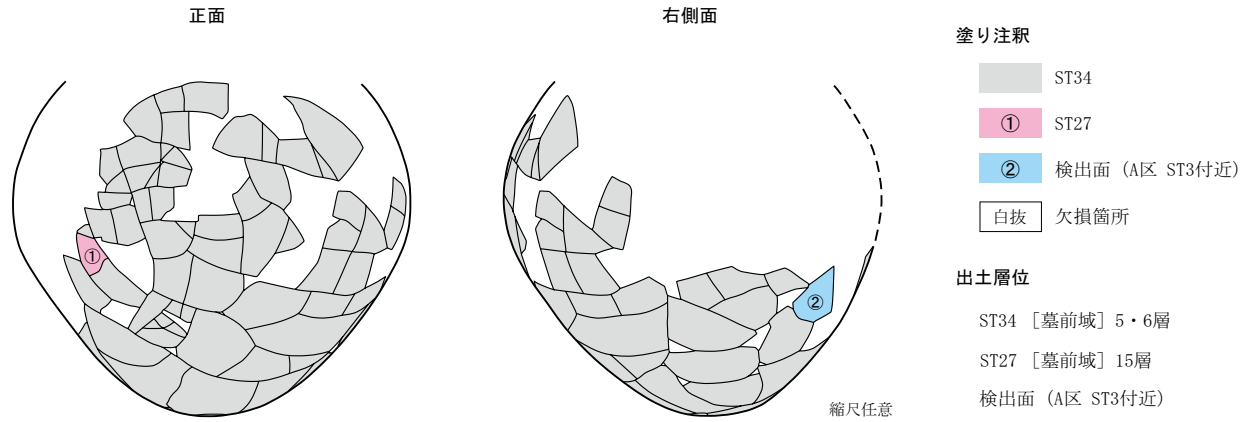
細別層	土色	土性	備考	大別層	
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子、炭化物片微量含む。	1	自然堆積層
2	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック(小)・(大)多く含む。天井崩落土。		
3	明黄褐色(2.5Y6/6)	砂質シルト	地山粒子多く含む。玄室奥壁(砂岩)崩落土。		
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック(大)部分的に含む。		
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片少量含む。		
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒子少量含む。		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック(小)多く、炭化物片含む。	2	人為堆積層(整地層)
8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック(小)、炭化物片含む。		
9	明黄褐色(2.5Y6/6)	砂質シルト	地山ブロック(大)部分的に含む。	3	自然堆積層
10	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック(大)・(小)多く含む。		
11	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック(小)・(大)少量含む。		
12	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック(小)・(大)多く含む。		
13	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒子・地山ブロック(大)・(小)含む。		
14	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山ブロック(小)含む。		
15	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子少量。		
16	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック含む。		
17	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山粒子少量。		
18	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	地山ブロック含む。		
19	にぶい黄色(2.5Y6/4) 暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	地山ブロック多量含む。	4	人為堆積層(整地層)
20	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック(小)、地山粒子含む。	5	自然堆積層
21	にぶい黄色(2.5Y6/4)	砂質シルト	地山粒子含む。		
22	明褐色(7.5YR5/6)	砂質シルト	地山ブロック、暗褐色粒子含む。		

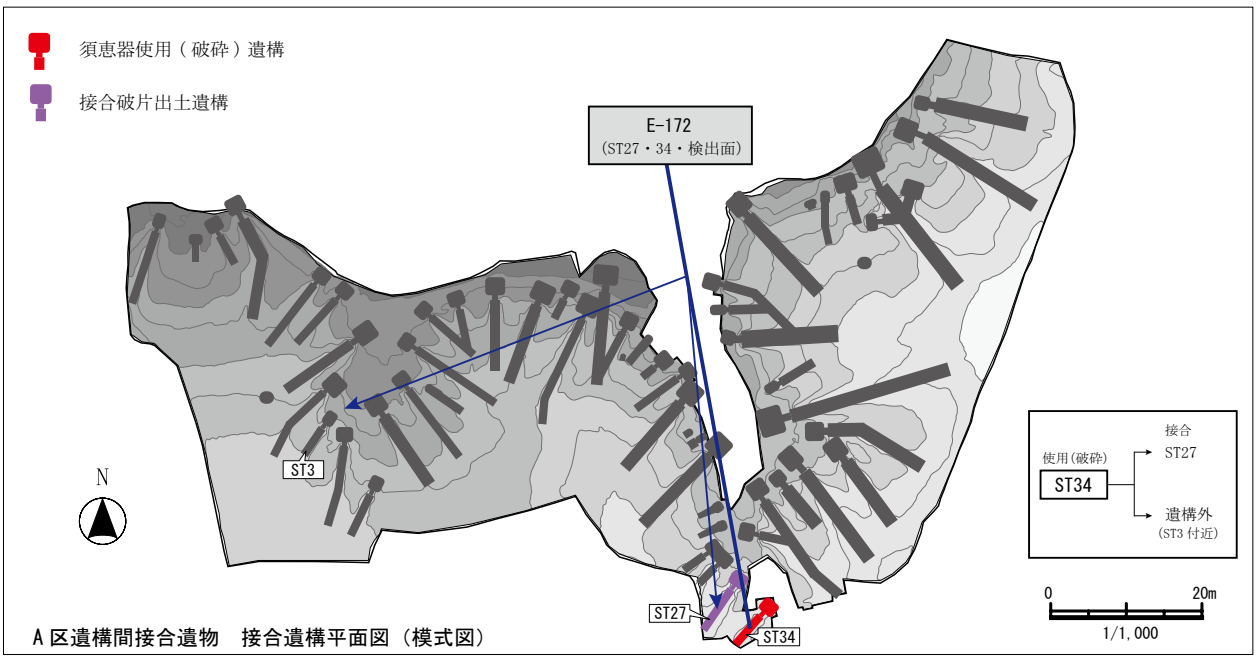
第 236 図　ST34 横穴墓　土層断面図



第237図　ST34 横穴墓 遺物出土状況図

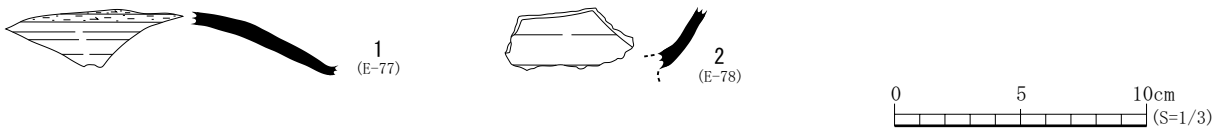
E-172　須恵器 甕（第 241 図 1）





第238図　ST34 横穴墓 遺構間接合遺物展開模式図

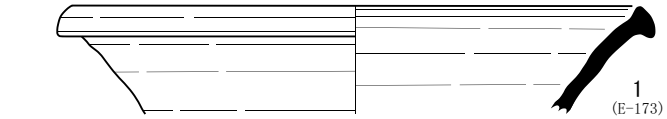
墓前域　大別１層

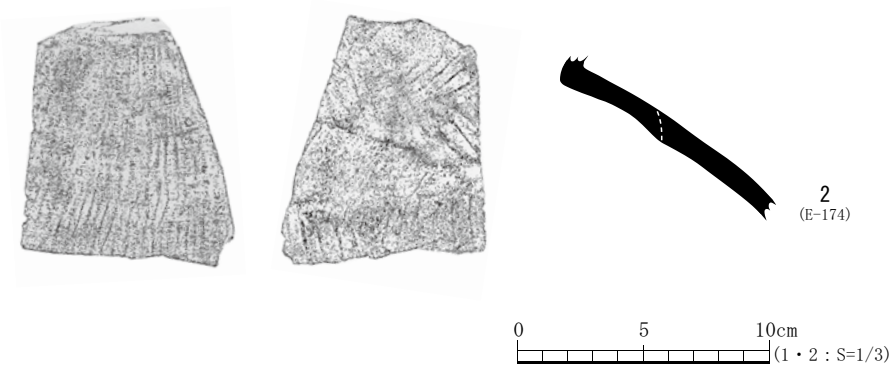


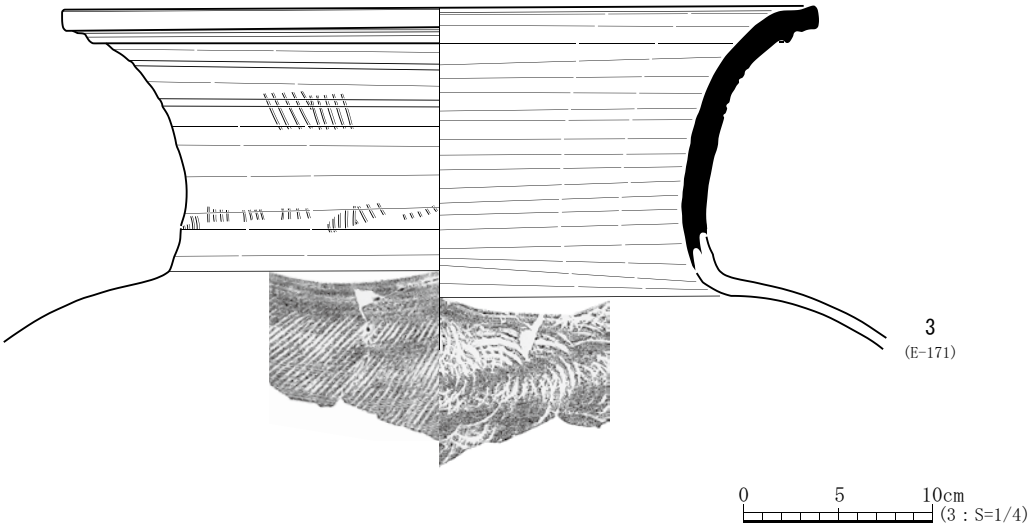
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	1層	須恵器 蓋	【技法】外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り、内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.3～0.6cm	E-77	221-6
2	墓前域	1層	須恵器 高台坏	【技法】外面：ロクロナデ・高台貼付(高台欠損)、内面：ロクロナデ 【法量】器厚0.4～0.6cm	E-78	221-7

第239図　ST34 横穴墓 出土遺物（1）　－ 土器類 －

墓前域　大別１層



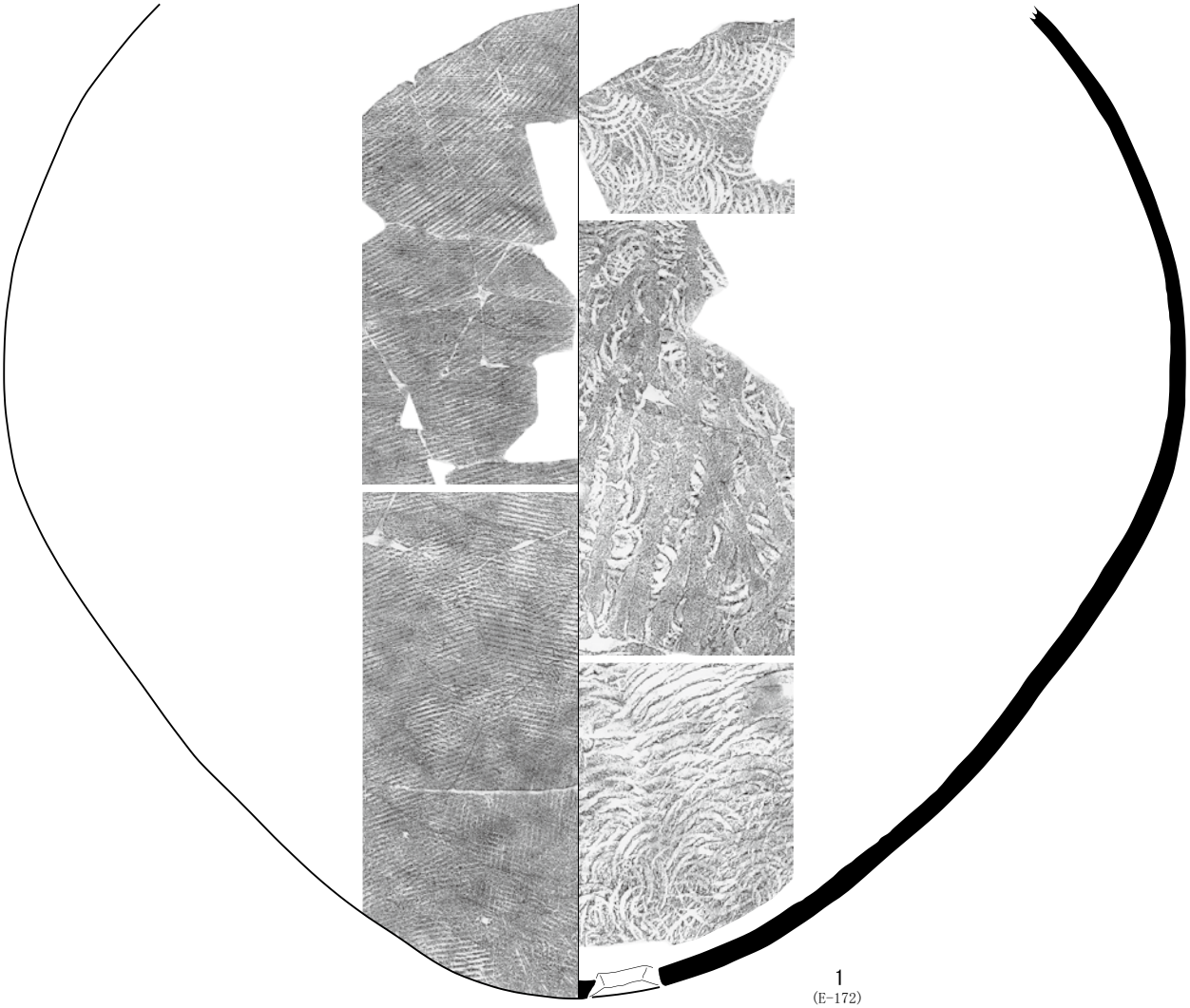




No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	5層	須恵器 甕	【技法】内外面：ロクロナデ 【法量】口径22.4cm・残存高4.3cm・器厚0.5～1.2cm 【特記事項】接合はしないが、E-174と同一個体の可能性有り	E-173	251-3
2	墓前域	5層	須恵器 甕	【技法】外面：頸部平行タタキ→ナデ・体部平行タタキ 内面：当て具痕・ナデ 【法量】器厚0.8～1.0cm 【特記事項】接合はしないが、E-173と同一個体の可能性有り	E-174	251-4
3	墓前域	5層 6層	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部平行タタキ→ロクロナデ→突帯貼付→沈線・体部平行タタキ→カキメ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円)→一部ナデ 【法量】口径39.8cm・残存高18.2cm・器厚0.5～1.6cm 【特記事項】接合はしないが、E-172(ST34出土：第241図1)と同一個体の可能性有り	E-171	253-1 271-9 271-10

第240図　ST34 横穴墓 出土遺物 (2)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層

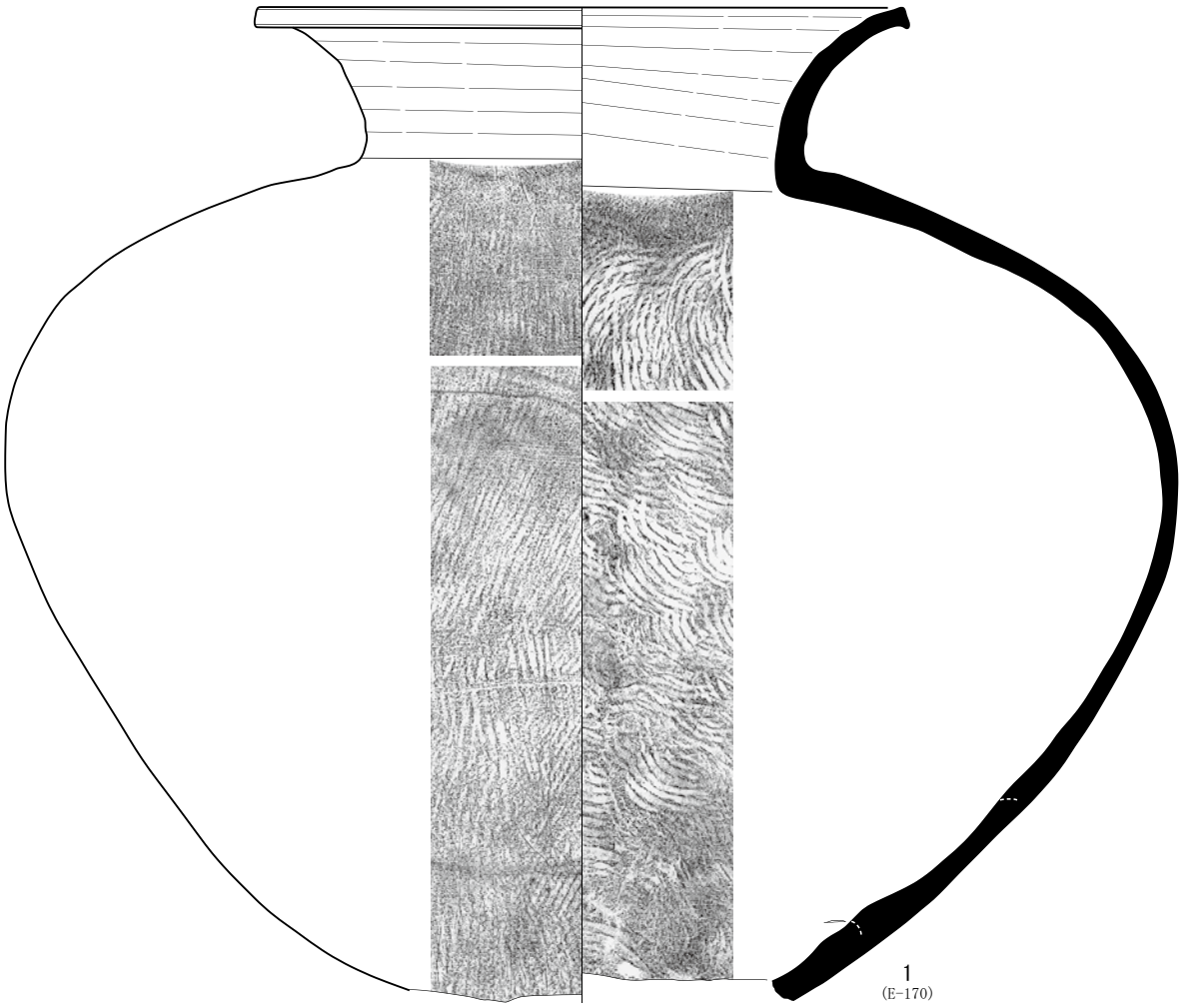


0　5　10cm
(S=1/4)

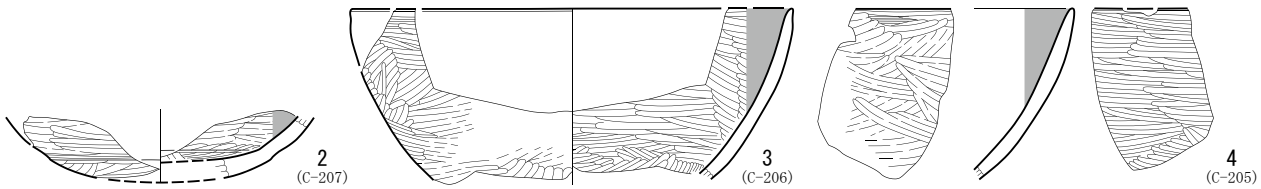
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	[ST27]墓前域 ＋ [ST34]墓前域 ＋ [ST3付近] 検出面	◆ST27　15層 ◆ST34　5・6層 ◆検出面(ST3付近)	須恵器 甕	◎遺構間接合　**ST34(主体)**＋ST27＋検出面(ST3付近) 【技法】外面：体部上半平行タタキ→カキメ・体部下半平行タタキ 内面：体部上半当て具痕(同心円)→ナデ・体部下半当て具痕(同心円) 【法量】残存高55.5cm・器厚0.7～1.1cm 【特記事項】接合はしないがE-171(ST34出土：第240図3)と同一個体の可能性有り 焼台付着痕有り	E-172	252-2

第241図　ST34 横穴墓 出土遺物 (3)　－ 土器類 －

墓前域　大別１層



墓前域　大別３層

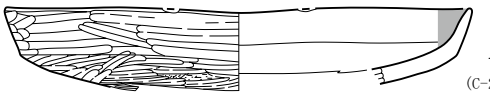


※( ) 内：推定値

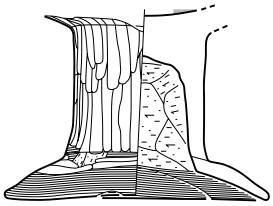
No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	5層 7層	須恵器 甕	【技法】外面：口頸部ロクロナデ・体部平行タタキ→カキメ 内面：口頸部ロクロナデ・体部当て具痕(同心円) 【法量】口径25.5cm・器高37.0cm・器厚0.5～1.4cm 【特記事項】底部穿孔	E-170	252-1 267-1 271-7 271-8
2	墓前域	16層	土師器 坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】残存高2.7cm・器厚0.6～0.8cm	C-207	202-13
3	墓前域	16層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】口径(17.4)cm・残存高7.0cm・器厚0.4～0.6cm	C-206	202-14
4	墓前域	13層	土師器 埦	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 【法量】器厚0.4～0.6cm	C-205	202-15

第242図　ST34 横穴墓 出土遺物 (4)　－ 土器類 －

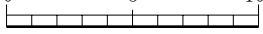
墓前域　大別３層



1
(C-209)

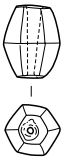


2
(C-208)

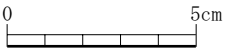


(1・2：S=1/3)

墓前域　堆積土

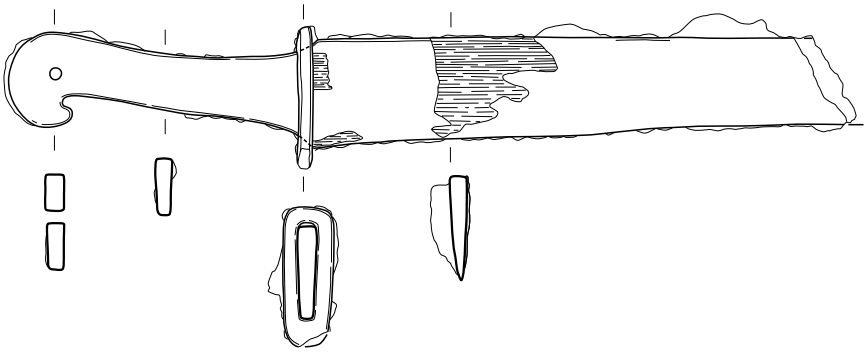


3
(K-44)

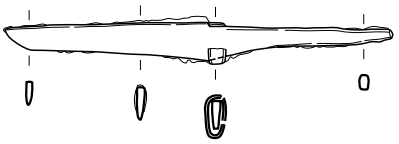


(3：S=1/2)

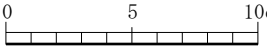
墓前域隣接地点



4
(N-97)



5
(N-98)



(4・5：S=1/3)

※(　)内：推定値

No.	出土位置	細別層	種別・器種	技法(外面・内面)・法量・特記事項	登録	写真図版
1	墓前域	16層	土師器 高坏	【技法】外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・体部ヘラ削り→ヘラミガキ 内面：磨滅のため調整不明(ヘラミガキ？)・黒色処理 【法量】坏部口径(18.4)cm・残存高3.3cm・器厚0.3～0.6cm	C-209	213-15
2	墓前域	16層	土師器 高坏	【技法】外面：[脚部]柱部ヘラ削り→ヘラミガキ・裾部ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：[坏部]ヘラミガキ・黒色処理　[脚部]柱部ヘラ削り・裾部ヨコナデ 【法量】脚裾部径10.5cm・残存高7.5cm・器厚0.4～1.6cm 【特記事項】部分的に赤彩残存	C-208	214-6

No.	出土位置	細別層	種別・器種	材質	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最少幅 (cm)	最大厚 (cm)	最小厚 (cm)	孔径 (cm)	質量 (g)	登録	写真図版
3	墓前域	堆積土	石製品 切子玉	水晶	1.90	1.50	0.70	1.35	－	0.15～0.35	5.2	K-44	277-5

No.	出土位置	細別層	種別	器種	特徴	登録	写真図版
4	墓前域外 南東脇	検出面	金属製品	蕨手刀	【法量】残存長33.5cm [刃部]残存長21.3cm・幅4.4cm [柄部]長さ12.2cm・幅2.4cm　[柄頭]柄反り1.0cm・絞り1.6cm [鐔]残存長径5.5cm・短径2.0cm・厚さ0.6cm　[懸緒通孔]直径0.5cm 【特記事項】均等両関(斜角)・喰出鐔・木質残存(鞘)・鉄製 【残存部位】刃部・柄部・鐔・鞘木	N-97	304-3 304-4
5	墓前域外 南東脇	検出面	金属製品	刀子	【法量】[刀身]長さ15.5cm　[刃部]長さ8.1cm・幅1.5cm　[茎部]長さ7.4cm [鏁]長径1.7cm・残存短径0.8cm・幅0.7cm 【特記事項】不均等両関(斜角)・鉄製　【残存部位】刀身・鏁	N-98	313-6

第243図　ST34 横穴墓 出土遺物 (5)　－ 土器類・玉製品・金属製品 －

山元町文化財調査報告書第22集

合 戦 原 遺 跡

横穴墓 編

第1分冊【本文】

―東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅴ―

令和4年3月31日発行

発 行 山 元 町 教 育 委 員 会

宮城県亘理郡山元町浅生原字作田山32

印 刷 今 野 印 刷 株 式 会 社

宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10